

京都府遺跡調査報告書

第 22 冊

雲 宮 遺 跡

1 9 9 7

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター



(1) S X76遺物出土状況



(2) S X76・60出土土器



(1)赤彩紋(1)



(2)赤彩紋(2)

序

財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターでは、昭和56年4月の設立以来、京都府内の公共事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査を行ってまいりました。

今回報告いたします雲宮遺跡も、名神高速道路の拡幅工事に伴って発掘調査を実施したものです。名神高速道路は、わが国の主要幹線道路であり、数多くの遺跡が分布しています。雲宮遺跡は、乙訓地域でも有数の弥生時代遺跡で、4か年にわたる発掘調査の結果、本書に収録しましたように縄文時代から中世にかけてのさまざまな遺構や遺物が見つかっております。とりわけ、この遺跡からは、良好な弥生時代の土器群が出土しており、この地域の弥生時代の展開を知るうえに貴重な発見となりました。本書を関係各位の参考に供され、地域の文化の発展に少しでも寄与することができましたら幸いです。

現地での発掘調査にあたりましては、調査を依頼された日本道路公団大阪建設局をはじめ、京都府教育委員会・向日市教育委員会・長岡京市教育委員会・大山崎町教育委員会・(財)向日市埋蔵文化財センター・(財)長岡京市埋蔵文化財センター・(財)京都市埋蔵文化財研究所などの関係諸機関のご協力を受けました。また、現地及び内部での各作業についても、多くの方々の献身的なご協力を受けました。最後になりましたが、ここに記し感謝いたします。

平成9年3月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター
理事長 樋口 隆 康

例 言

1. 本書は、京都府長岡京市神足寺田・雲宮に所在する雲宮遺跡の報告書である。本調査は、中央自動車道西宮線(通称名神高速道路)拡幅工事に先立ち、日本道路公団大阪建設局の依頼を受け実施した。調査は、(財)京都府埋蔵文化財調査研究センターが行った。調査期間は、平成元年4月4日～同2年6月22日。
2. 発掘調査区は、道路公団側の工事区に合わせ大山崎工区・長岡京工区・向日工区の3つに分け、それぞれの工区をブロックに細分した。また、調査トレンチは、上層の長岡京跡の条坊確認を主たる目的として設定した。今回の報告は長岡京工区第7ブロック第9トレンチ・同第22トレンチの下層の弥生時代前期の遺構と遺物についてである。
3. 執筆分担
 - ・考古学
 - 戸原和人・・・第4章—3
 - 中川和哉・・・例言、第1～3章、第4章—1・2、第6章—1・2、第6章—3—(1)・(2)・(4)～(6)・(8)、第6章—4、第7章
 - 辻村純代・・・第4章—4
 - 田畑直彦・・・第6章—3—(3)・(7)
 - 小島孝修・・・第6章—1
 - ・自然科学関係
 - 鈴木 茂・・・第5章—1
 - 井上 巖・・・第5章—2
5. 写真の撮影は、遺構・遺物出土状態などの現地写真撮影を調査第2課戸原和人・三好博喜・中川和哉が行い、室内での遺物撮影を調査第1課田中 彰が行った。
6. この報告書の編集は、勝山紀子・田中美恵子の協力を得て、中川和哉・調査第1課資料係土橋 誠が行った。
7. 調査協力者：都出比呂志・高橋美久二・山中 章・深澤芳樹・寺沢 薫・松藤和人・森 浩一・堅田 直・豊岡卓士・國下多美樹・藤田三郎・中山修一・岩崎 誠・小田桐 淳・菅栄太郎・若林邦彦・赤澤徳明・中井 均・近藤喬一・中村友博・豆谷和之・村田裕一・家根祥多・松村信博・山中一郎・片岡宏二(順不同・敬称略)
以下、本文中の人名についても敬称は略した。
8. 図面の方位は、国土座標軸第6座標系を用いた。

本文目次

第1章 調査に至る経緯	1
1. 調査の経緯	1
2. 調査体制	1
第2章 遺跡の環境	4
第3章 層位と遺構	7
1. 第9トレンチ	7
2. 第22トレンチ	9
第4章 遺物	12
1. 弥生土器	12
2. 石器	44
3. 木製品	49
4. 動物骨	49
第5章 自然科学的方法による分析	52
1. 雲宮遺跡の花粉及び植物珪酸体分析	52
2. 雲宮遺跡出土土器の胎土分析—X線解析試験及び化学分析試験—	57
第6章 考察	77
1. 縄文時代の雲宮遺跡	77
2. 環濠とその立地	86
3. 土器	92
(1) 雲宮遺跡の学史上の問題点	92
(2) 雲宮遺跡出土土器組成	94
(3) 壺形土器	97
(4) 甕形土器	124
(5) 鉢形土器	130
(6) 蓋形土器	134
(7) 他地域の影響を示す土器	135
(8) 雲宮遺跡群における前期・中期初頭の動態	138
4. 石器	145
(1) 石器製作工程	145
(2) 石器組成研究の問題点	150
第7章 まとめ	154

挿 図 目 次

第 1 図	乙訓地域主要遺跡分布図-----	5
第 2 図	トレンチ配置図-----	7
第 3 図	第 9 トレンチ遺構実測図-----	8
第 4 図	第 9 トレンチ模式土層柱状図-----	9
第 5 図	第 22 トレンチ遺構実測図-----	10
第 6 図	第 22 トレンチ模式土層柱状図-----	11
第 7 図	第 22 トレンチ地区割り図-----	50
第 8 図	雲宮遺跡の花粉化石分布図-----	55
第 9 図	雲宮遺跡のプラントオパール分布図-----	56
第 10 図	組成分類ダイヤグラム-----	59
第 11 図	Qt-Pl 図-----	65
第 12 図	胎土分析資料実測図(1)-----	67
第 13 図	胎土分析資料実測図(2)-----	68
第 14 図	胎土分析資料実測図(3)-----	69
第 15 図	X 線解析データ(1)-----	70
第 16 図	X 線解析データ(2)-----	71
第 17 図	X 線解析データ(3)-----	72
第 18 図	X 線解析データ(4)-----	73
第 19 図	X 線解析データ(5)-----	74
第 20 図	X 線解析データ(6)-----	75
第 21 図	X 線解析データ(7)-----	76
第 22 図	雲宮縄紋遺跡群位置図-----	78
第 23 図	乙訓地域縄紋遺跡分布図-----	81
第 24 図	雲宮遺跡発掘調査地点分布図-----	87
第 25 図	雲宮遺跡遺構分布図-----	89
第 26 図	調査地別模式土層柱状図-----	90
第 27 図	畿内第 I 様式壺の変遷-----	93
第 28 図	土器組成グラフ-----	95
第 29 図	壺形土器の口頸部界・頸胴部界破片の紋様例-----	97
第 30 図	壺形土器の口頸部界の紋様構成-----	99
第 31 図	壺形土器の頸胴部界の紋様構成-----	99

第32図	壺形土器の紋様構成-----	100
第33図	壺形土器の変遷(1)-----	106
第34図	壺形土器の変遷(2)-----	107
第35図	壺形土器の変遷(3)-----	108
第36図	綾羅木Ⅲ式の壺形土器と鉢形土器-----	113
第37図	貝殻施紋の壺形土器-----	119
第38図	甕形土器口縁端部の施紋-----	124
第39図	甕形土器体部の施紋-----	125
第40図	甕形土器ヘラ描き沈線の条数-----	125
第41図	甕形土器外面の調整-----	128
第42図	甕形土器内面の調整-----	129
第43図	鉢形土器分類図-----	130
第44図	鉢形土器口縁部の施紋-----	131
第45図	鉢形土器体部の施紋-----	131
第46図	鉢形土器外面の調整-----	132
第47図	鉢形土器内面の調整-----	132
第48図	蓋形土器の分類図-----	134
第49図	雲宮遺跡Ⅰ期(白川1990、岩崎1994)-----	138
第50図	雲宮遺跡Ⅳ期(岩崎1980)-----	139
第51図	南栗ヶ塚遺跡出土遺物(白川・原・岩崎1983)-----	141
第52図	雲宮遺跡Ⅶ期(岩崎1989)-----	142
第53図	下植野南遺跡出土遺物(中川1994)-----	143
第54図	製作工程を示す石器(打製石器)-----	146
第55図	S X 76セクション出土剥片の打面形状-----	147
第56図	製作工程を示す石器(磨製石器)-----	149
第57図	管玉・石鋸実測図-----	150
第58図	S X 76・60出土石器長幅関係グラフ-----	151
第59図	石器組成-----	152

付 表 目 次

付表 1	出土土器観察表-----	14
付表 2	石器観察表-----	46

付表3	動物骨同定表-----	51
付表4	雲宮遺跡の産出花粉化石一覧表-----	54
付表5	試料1gあたりのプラントオパール個数-----	56
付表6	胎土性状表(1)-----	61
付表7	胎土性状表(2)-----	62
付表8	タイプ分類一覧表-----	63
付表9	Qt-Pl一覧表-----	64
付表10	雲宮縄紋遺跡群調査一覧-----	79
付表11	乙訓地域の縄文時代遺跡-----	81
付表12	雲宮遺跡調査回数一覧-----	88
付表13	弥生土器編年比較表-----	92
付表14	壺形土器の口頸部界の紋様構成-----	103
付表15	壺形土器の頸胴部界の紋様構成-----	103
付表16	壺形土器の紋様構成-----	104
付表17	壺形土器の口唇部の紋様構成-----	109
付表18	壺形土器の口頸部界・頸胴部界の紋様組み合わせ-----	109
付表19	壺形土器の口頸部界の紋様組み合わせ-----	110
付表20	S X60土器の頸胴部界の紋様組み合わせ-----	111
付表21	S X76土器の頸胴部界の紋様組み合わせ-----	111
付表22	紐穴・内面装飾-----	112
付表23	赤彩紋-----	114
付表24	段と他紋様の組み合わせ-----	115
付表25	削り出し突帯と他紋様の組み合わせ-----	116
付表26	貼り付け突帯と他紋様の組み合わせ-----	117
付表27	木葉紋-----	118
付表28	羽状紋・鋸齒紋・貝殻施紋-----	119
付表29	刺突紋-----	120
付表30	壺形土器の口頸部界の紋様構成集計表-----	122
付表31	壺形土器の頸胴部界の紋様構成集計表-----	122
付表32	壺形土器の紋様構成集計表-----	122
付表33	生駒産土器-----	136

図版目次

- 図版第1 調査地位置図
- 図版第2 S X76第1層出土壺形土器(1)
- 図版第3 S X76第1層出土壺形土器(2)
- 図版第4 S X76第1層出土壺形土器(3)
- 図版第5 S X76第1層出土甕形土器
- 図版第6 S X76第1層出土甕形土器・鉢形土器
- 図版第7 S X76第1層出土土器底部
- 図版第8 S X76第2層出土壺形土器(1)
- 図版第9 S X76第2層出土壺形土器(2)
- 図版第10 S X76第2層出土壺形土器(3)
- 図版第11 S X76第2層出土壺形土器(4)
- 図版第12 S X76第2層出土壺形土器(5)
- 図版第13 S X76第2層出土甕形土器(1)
- 図版第14 S X76第2層出土甕形土器(2)
- 図版第15 S X76第2層出土甕形土器(3)
- 図版第16 S X76第2層出土甕形土器(4)
- 図版第17 S X76第2層出土鉢形土器(1)
- 図版第18 S X76第2層出土鉢形土器(2)
- 図版第19 S X76第2層出土壺形土器・鉢形土器底部
- 図版第20 S X76第2層出土甕形土器底部
- 図版第21 S X76第3層出土壺形土器
- 図版第22 S X76第3層出土甕形土器(1)
- 図版第23 S X76第3層出土甕形土器(2)
- 図版第24 S X76第3層出土鉢形土器
- 図版第25 S X76第3層出土土器底部
- 図版第26 S X60第1層出土壺形土器(1)
- 図版第27 S X60第1層出土壺形土器(2)
- 図版第28 S X60第1層出土甕形土器(1)
- 図版第29 S X60第1層出土甕形土器(2)
- 図版第30 S X60第1層出土鉢形土器
- 図版第31 S X60第1層出土土器底部

- 図版第32 S X60第2層出土壺形土器
- 図版第33 S X60第2層出土甕形土器
- 図版第34 S X60第2層出土鉢形土器・底部
- 図版第35 S X60第3層出土壺形土器
- 図版第36 S X60第3層出土甕形土器・鉢形土器・底部
- 図版第37 S X60第4層出土壺形土器・甕形土器
- 図版第38 S X60第4層出土甕形土器・鉢形土器・底部
- 図版第39 S X60第5層出土土器
- 図版第40 S X76・60以外の遺構出土土器
- 図版第41 特殊な紋様のある土器(1)
- 図版第42 特殊な紋様のある土器(2)
- 図版第43 特殊な紋様のある土器(3)
- 図版第44 彩紋土器
- 図版第45 蓋形土器及び紡錘車
- 図版第46 石器実測図(1)
- 図版第47 石器実測図(2)
- 図版第48 石器実測図(3)
- 図版第49 石器実測図(4)
- 図版第50 石器実測図(5)
- 図版第51 石器実測図(6)
- 図版第52 石器実測図(7)
- 図版第53 石器実測図(8)
- 図版第54 石器実測図(9)
- 図版第55 木製品実測図
- 図版第56 (1)第9トレンチ (2)第22トレンチ S X60第1層遺物出土状況
- 図版第57 (1)S K47(南から) (2)S K47断面(西から)
- 図版第58 (1)S K47遺物出土状況 (2)S D48断面(南西から)
- 図版第59 (1)第22トレンチ及び周辺風景(南から) (2)S X60全景(東から)
- 図版第60 (1)S X60・76完掘状況(南から) (2)S X60・76掘削作業風景(南から)
- 図版第61 (1)S X60完掘状況(南から) (2)S X76完掘状況(北から)
- 図版第62 (1)S X60南端(東から) (2)S X60・76交差部(北から)
- 図版第63 (1)S X76断面(東から) (2)S X60断面(北から)
- 図版第64 (1)S X60断面(北から) (2)S X60断面(北から)
- 図版第65 (1)S K75及び周辺土坑(西から) (2)S K78(南から)
- 図版第66 (1)S K78遺物出土状況(北から) (2)S K78(西から)

- 図版第67 (1) S X60遺物出土状況(東から) (2) S X76遺物出土状況
- 図版第68 (1) S K84遺物出土状況(南から) (2) 小型壺形土器出土状況
- 図版第69 (1) S K75遺物出土状況(東から) (2) S X76第2層遺物出土状況
- 図版第70 (1) 木製品出土状況 (2) 木製品出土状況
- 図版第71 (1) 紡錘車出土状況 (2) S X60動物骨出土状況
- 図版第72 (1) 発掘調査風景 (2) 説明会風景(北東から)
- 図版第73 S X76第1層出土土器(1)
- 図版第74 S X76第1層出土土器(2)
- 図版第75 S X76第2層出土土器(1)
- 図版第76 S X76第2層出土土器(2)
- 図版第77 S X76第2層出土土器(3)
- 図版第78 S X76第2層出土土器(4)
- 図版第79 S X76第2層出土土器(5)
- 図版第80 S X76第2・3層出土土器
- 図版第81 S X76第3層・S X60第1層出土土器
- 図版第82 S X60第1層出土土器
- 図版第83 S X60第1・2層出土土器
- 図版第84 S X60第2～4層出土土器
- 図版第85 S X60第4・5層、S K47出土土器及び蓋形土器
- 図版第86 (1) 蓋形土器 (2) S X76第1層出土壺形土器
- 図版第87 (1) S X76第1層出土壺形土器 (2) S X76第1層出土甕形土器
- 図版第88 (1) S X76第2層出土壺形土器 (2) S X76第2層出土甕形土器
- 図版第89 (1) S X76第2層出土鉢形土器 (2) S X76第3層出土甕形土器
- 図版第90 (1) S X76第3層出土甕形土器 (2) S X76第1層出土壺形土器
- 図版第91 (1) S X60第1層出土甕形土器(1) (2) S X76第1層出土甕形土器(2)
- 図版第92 (1) S X60第1層出土甕形土器・鉢形土器 (2) S X60第2層出土壺形土器
- 図版第93 (1) S X60第2層出土甕形土器・鉢形土器 (2) S X60第3層出土土器
- 図版第94 (1) S X60第4層出土土器 (2) S X60第5層出土土器
- 図版第95 (1) 遺構出土土器 (2) 拓本実測土器(1)
- 図版第96 (1) 拓本実測土器(2) (2) 拓本実測土器(3)
- 図版第97 (1) 拓本実測土器(4) (2) 赤彩紋土器(1)
- 図版第98 (1) 赤彩紋土器(2) (2) 出土石器(1)
- 図版第99 (1) 出土石器(2) (2) 出土石器(3)
- 図版第100 (1) 出土石器(4) (2) 出土石器(5)
- 図版第101 (1) 出土石器(6) (2) 出土石器(7)

- 図版第102 木製品(1)
図版第103 木製品(2)
図版第104 雲宮遺跡出土動物骨
図版第105 胎土分析サンプル顕微鏡写真(1)
図版第106 胎土分析サンプル顕微鏡写真(2)
図版第107 胎土分析サンプル顕微鏡写真(3)
図版第108 胎土分析サンプル顕微鏡写真(4)
図版第109 胎土分析サンプル顕微鏡写真(5)

第1章 調査に至る経緯

1. 調査の経緯

今回報告する雲宮遺跡の発掘調査は、高速道路の拡幅工事に先立って実施した。中央自動車道西宮線、通称名神高速道路は計画当初の予測を上回る交通量の増加による慢性的な交通渋滞の緩和と、重大事故の多発する京都府と大阪府の府境にある天王山トンネルの改善のため、茨木インターチェンジと京都南インターチェンジ間の走行車線の拡張工事が計画された。京都府側については、日本道路公団大阪建設局の依頼を受けて、当調査研究センターが発掘調査を実施した。

乙訓郡内で拡張の予定されている名神高速道路の路線は、そのほぼ全域で長岡京跡を斜めに横切っており、埋蔵文化財の発掘調査が必要とされた。発掘調査にあたっては道路公団側の設定した呼称名に合わせ、大山崎工区、下植野工区、長岡工区、向日工区、京都工区に分け、各工区内を名神の下を通るトンネルを境にブロックに分け、さらに数字でトレンチ名を付けた。長岡工区、向日工区などの片側1車線幅の調査トレンチは、長岡京跡の条坊の確認作業に主眼を置き、調査対象区と条坊が交差する部分に設けることが、京都府教育委員会と当調査研究センター及び、日本道路公団の間で協議の上、決定された。今回報告する長岡工区7ブロック第9トレンチ・第22トレンチは、長岡京跡六条第一小路(新呼称六条条間南小路)、東二坊第一小路(新呼称東二坊条間西小路)両側溝を検出する目的で設定された。同時に今回拡幅される本線部分の過去の発掘調査で、弥生時代前期の土器群が多く出土したことが知られており、長岡京期の遺構面の下層で雲宮遺跡の良好な遺構遺物の存在が期待された。

調査に係わる費用は、全額、日本道路公団が負担した。

今回報告する長岡工区7ブロック第9トレンチ・第22トレンチは、長岡京跡左京第216次(7ANMKY・MTD-2)の調査次数を持つ。第9トレンチは平成元年度に調査を終了し、第22トレンチは平成元年・2年度の2か年にわたって調査を実施した。

2. 調査体制

調査主体者 福山敏男(理事長 平成元年～7年度)

樋口隆康(理事長 平成7・8年度)

調査責任者 荒木昭太郎(事務局長 平成元年度)

堤 圭三郎(事務局長 平成2年度)

松坂 寛支(事務局長 平成2年度・3年度)

城戸 秀夫(事務局長 平成4～6年度)

木村 英男(事務局長 平成7年度・8年度)

調査担当責任者 中谷 雅治(次長兼調査第1課長 平成元年～5年度)

杉原 和雄(調査第2課長 平成元年度)

安藤 信策(調査第2課長 平成2～5年度)

次長兼調査第2課長 平成6～8年度)

事務局 山本 勇(次長兼総務課長 平成元年度)

小林 将夫(次長兼総務課長 平成2・3年度)

佐伯 拓郎(次長兼総務課長 平成4～6年度)

園山 哲(次長兼総務課長 平成7・8年度)

安田 正人(総務係長 平成元～3年度)

総務課長補佐兼総務係長 平成4～8年度)

杉江 昌乃(主事 平成元～8年度)

今村 正寿(主事 平成元～8年度)

鍋田 幸世(主事 平成元～8年度)

松尾 幸枝(主事 平成元～8年度)

林 淳次(主事 平成元年度)

上田 幸正(主事 平成2～4年度)

藤原 寛志(主事 平成5～6年度)

西村 晃(主事 平成7～8年度)

西林 紀子(主事 平成8年度)

調査担当者 平良 泰久(課長補佐兼調査第4係長 平成4～8年度)

小山 雅人(調査第3係長 平成元～3年度)

戸原 和人(調査第3係主任調査員 平成元～3年度)

調査第4係主任調査員 平成4～8年度)

三好 博喜(調査第3係調査員 平成元年度)

中川 和哉(調査第3係調査員 平成元～3年度)

調査第4係調査員 平成4～8年度)

発掘調査参加者(敬称略)

平成元年度：青木和人・青木 潤・青木葉子・赤池学博・赤沼謙吾・東 裕子・石津敦子・岡田典久・片山和子・北村 清・久保博昭・坂本英美・滝脇善充・武田宏司・武村英治・田中あゆみ・田中 牧・塚本映子・辻川哲朗・常脇由香子・十時奈津子・飛田浩一・中崎憲和・中原昌弘・長田康平・野田典枝・秦光次郎・服部典子・早川文乃・原田光明・広瀬時修・船越裕介・別所寛康・松尾均子・水野 泰・宮本純二・山口昌彦・山根嘉久男・若松幹郎。

平成2年度：青木葉子・赤池学博・赤木 香・東 裕子・石井晶子・岩佐聖子・上村恵代・柴本祐子・江口正孝・江藤結城・大倉英士・太田菜諸子・小田裕子・大森智子・岡田良紀・小島孝

修・加藤真弓・川崎法子・北岡理絵・久保博昭・小藤俊太郎・小牧 勲・坂本英美・坂本祐三・澤野智佳代・渋谷庸子・清水琢哉・進木和美・首藤有里・鈴木陽一郎・高峰靖子・高尾恵子・竹内美砂・武田宏司・辻本幸子・椿井良昌・飛田浩一・中崎憲和・中西正和・成田理絵・浜中邦弘・針尾有章子・春木増美・広瀬時修・別所寛康・松本とも子・丸尾 晋(故人)・溝口博士・三柳洋一・宮本純二・三次美紀・吉田絵里・若松幹郎。

整理作業参加者(平成元～8年度)

青山恵子・小田栄子・竹内千賀子・竹谷和子・田村重野・下園京美・鈴木まり子・竹内千賀子・内藤チエ・西村敏子・若林照子・吉谷美佐子・高山(坂本)英美・小野山信子・久平喜美子・長谷川マチ子・明日礼子・荒川仁佳子・小澤和子・長尾美恵子・河野晶子・辻倉万里子・村上優美子・奥村美紗代・佐藤卓子・竹内友美・米沢裕子・串田香奈子。

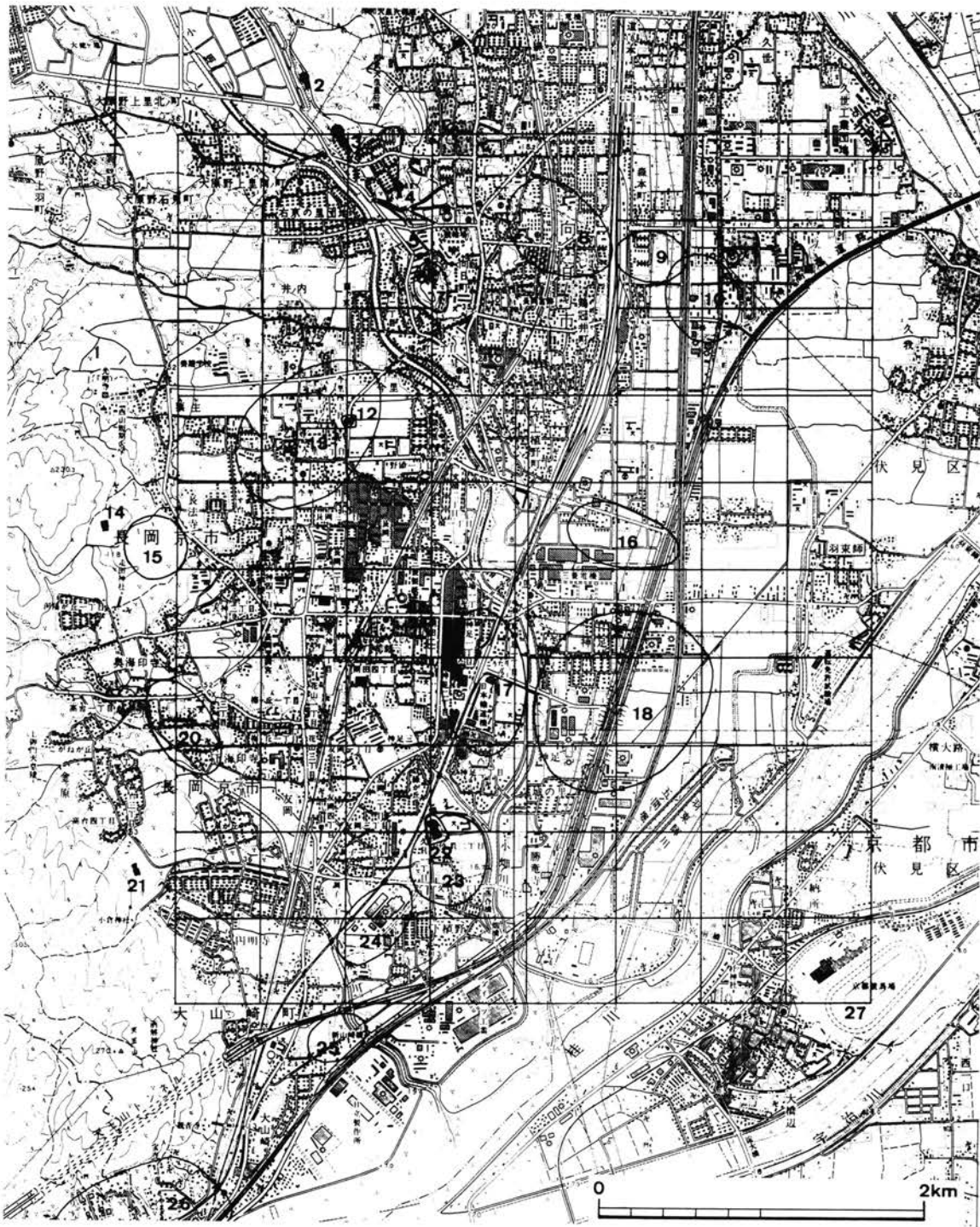
第2章 遺跡の環境

雲宮遺跡の所在する乙訓地域は、桂川、宇治川、木津川の3つの河川が合流する、水運に恵まれた地域である。また、桂川やその支流の河川によって形成された段丘、大阪層群からなる丘陵、丹波層群を基盤とする西山へと、地勢が東から西に高くなっていく地形である。この地域で初めて人の住み着いた遺跡としては、後期旧石器時代にまでさかのぼることができる。旧石器時代の遺跡は、京都盆地で最も濃密な分布が認められ、遺跡数は約15か所を数える(中川1991)。多くの遺跡からは、二上山周辺からもたらされたサヌカイトを利用して作られた、国府型ナイフ形石器やその他の横長剥片を用いたナイフ形石器が出土している。

縄紋時代に入ると、有舌尖頭器が長岡京市舞塚遺跡、同下海印寺遺跡、同伊賀寺遺跡、向日市殿長遺跡で発見されており、この地域で草創期にも人が活動したことがわかっているが、土器はこれまでのところ発見されていない。乙訓地方で発見された最古の土器は、桂川の支流である小泉川の上流部に位置する下海印寺遺跡で発見された押型紋土器である。この押型紋土器は、縄紋時代早期後半の高山寺式土器である。また、早期に特徴的な石器であるトロトロ石器(異形局部磨製石鏃)は、大山崎町と長岡京市の境にある碓遺跡と長岡京市上里遺跡から発見されている。縄紋時代の中期に入ると、瀬戸内系の土器といわれている、船元式土器が長岡京市友岡遺跡、同碓遺跡、同十三遺跡、同雲宮遺跡で認められる。桂川の支流である小畑川右岸に位置する長岡京市井ノ内遺跡からは、後期前半の竪穴式住居跡が検出されている。また、下海印寺遺跡からは、同じく後期前半に属する土坑と集石遺構が検出されている。後・晩期に入ると乙訓地域の至るところで土器片が検出されるが、特に低地部での検出例が増加する傾向が見て取れる。晩期の土器の多くは、包含層中の出土か、土器棺として利用された状態での出土である。土器棺が検出された遺跡としては、長岡京市今里遺跡、同開田城ノ内遺跡、同馬場遺跡、向日市鶏冠井遺跡、大山崎町下植野南遺跡がある。

弥生時代に入ると、まず本報告書の雲宮遺跡に弥生時代人たちが住みつく。中期には神足遺跡や鶏冠井遺跡といった大規模な遺跡が出現する。神足遺跡は、雲宮遺跡の西側の段丘上に広がる遺跡であるが、これまで竪穴式住居跡60棟、方形周溝墓40基以上が検出されている。周辺部の調査結果から、雲宮遺跡の中心部が時代が新しくなるにつれて西に移動して神足遺跡となったと考える人もいる(岩崎1994)。また、1遺跡で必要以上と想定できるほど、多くの粘板岩製の石庖丁、銅剣形石剣、鉄剣形石剣などの製品並びに未製品が検出されており、周辺の集落に完成品を供給していた可能性が指摘できる。同じく拠点的な集落である鶏冠井遺跡からは、銅鐸の鋳型の一部が出土しており、乙訓地域での青銅器の生産と、その所有の実態を示す貴重な資料となっている。

古墳時代に入ると、丘陵上に大規模な前方後円墳、前方後方墳の築造がはじまる。向日町丘陵



第1図 乙訓地域主要遺跡分布図

- | | | | | |
|------------|------------|------------|------------|------------|
| 1. 物集女車塚古墳 | 2. 寺戸大塚古墳 | 3. 妙見山古墳 | 4. 五塚原古墳 | 5. 北山古墳 |
| 6. 元稻荷古墳 | 7. 北山遺跡 | 8. 森本遺跡 | 9. 石田遺跡 | 10. 鶏冠井遺跡 |
| 11. 今里遺跡 | 12. 今里車塚古墳 | 13. 乙訓寺 | 14. 南原古墳 | 15. 谷山遺跡 |
| 16. 鴨田遺跡 | 17. 神足遺跡 | 18. 雲宮遺跡 | 19. 今里大塚古墳 | 20. 下海印寺遺跡 |
| 21. 鳥居前古墳 | 22. 恵解山古墳 | 23. 南栗ヶ塚遺跡 | 24. 砦遺跡 | 25. 算用田遺跡 |
| 26. 山城国府跡 | 27. 長岡京跡 | | | |

では、元稲荷古墳、寺戸大塚古墳、妙見山古墳、五塚原古墳、長岡京市では南原古墳、大山崎町では鳥居前古墳が築造される。これらの古墳の多くは京都大学、大阪大学によって発掘調査された。その結果、三角縁神獸鏡をはじめとする多くの副葬品が出土している古墳もある。5世紀に入ると、平野部に前方後円墳が築かれる。中でも恵解山古墳は伝仁徳陵古墳と墳形が類似する全長120mの大形墳である。前方部から700点以上の鉄製品が出土しており、乙訓地域の盟主的首長の墓と考えられている。6世紀には、『日本書紀』によると継体天皇が樟葉宮で即位した後に、筒城宮に移り、継体5(511)年に弟国宮をこの地域につくったという伝承が記述されている。

7世紀に入ると、古墳に代わって宝菩提院廃寺、乙訓寺、鞆岡廃寺、山崎廃寺といった寺院が造営されるようになる。これらの寺院の所在地は、古墳時代の首長墳の分布とほぼ一致し、4世紀と7世紀まで権力者の配置に変化がなかったことがうかがえる。また、乙訓寺は藤原種継暗殺の疑いをかけられた早良親王が幽閉され、811年から1年間空海が別当を勤めた寺院で、最澄が空海を訪ねたことでも知られる。

784年、長岡京に遷都され日本の首都となる。『続日本紀』にあるように、水陸の便があったことが都の選地理由の1つになった。かつては仮の都と呼ばれていた長岡京も、発掘調査の進展に伴って宮域の主要な建物は完成し、京域も7割以上が完成していたことがわかってきている。794年に平安京に都が移されるが、1991年の調査によって桓武天皇が遷都の指揮をとった東院跡が発掘された。平安京遷都の後、長岡京域は農地化されたことが『日本後紀』から知ることができる。

797年、平安京移転のため葛野郡の範囲が狭くなり、山城国府が長岡京の南に移転されるが、廃都以後は急速に農地化していたと想定できる。また、861年に山崎にあった河陽離宮に山城国府が移転される。

平安京の羅城門から、淀川の湊で山陽道の駅家であった山崎を結ぶ幹線道、久我縄手が乙訓郡内を北東から南西にほぼ直線で貫く。久我縄手の名は、『徒然草』や『太平記』にも登場しているが、発掘調査によって造られた年代が平安時代前期までさかのぼることが確認されている。

天下分け目の天王山として山崎の合戦は、長岡京市・大山崎町を舞台とした。周知のように織田信長を本能寺で攻め滅ぼした明智光秀と、信長の死を知り中国大返しを行い京都に戻ってきた豊臣秀吉の間で戦われた。秀吉は勝利を納め、信長の後継者としての地位を固めた。

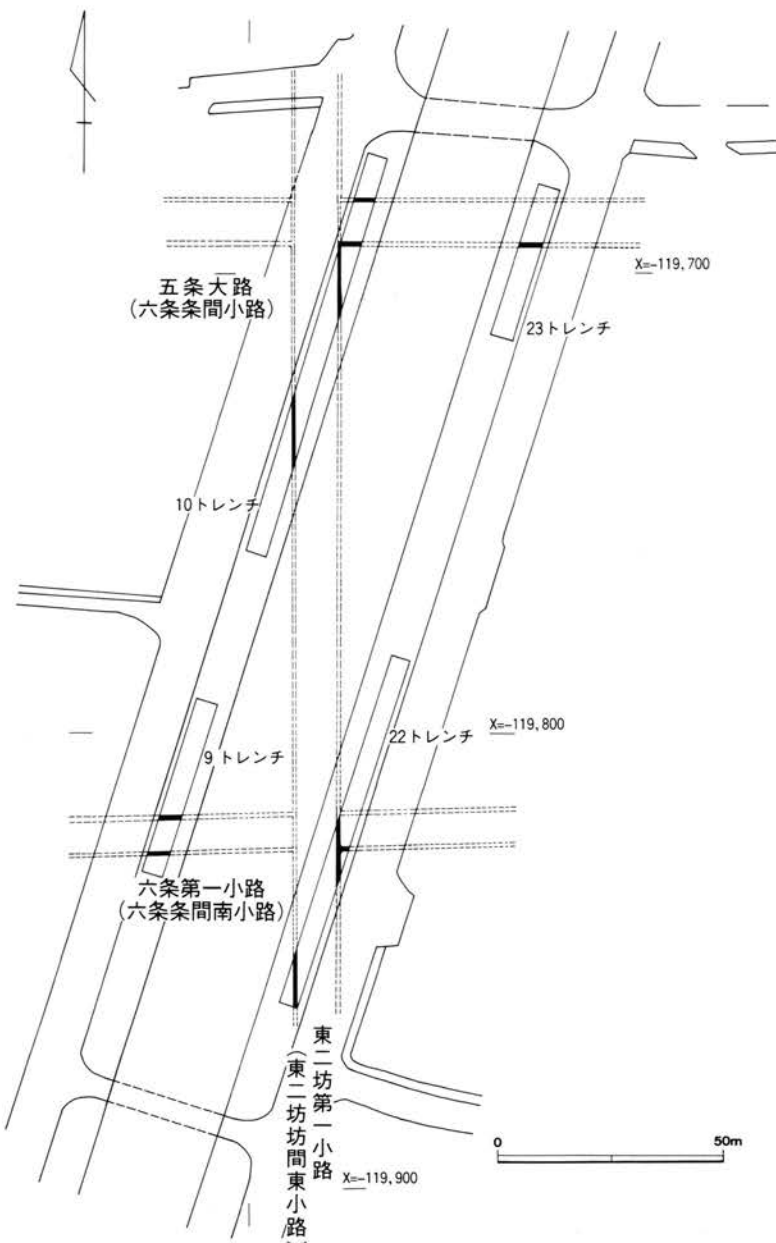
第3章 層位と遺構

1. 第9トレンチ

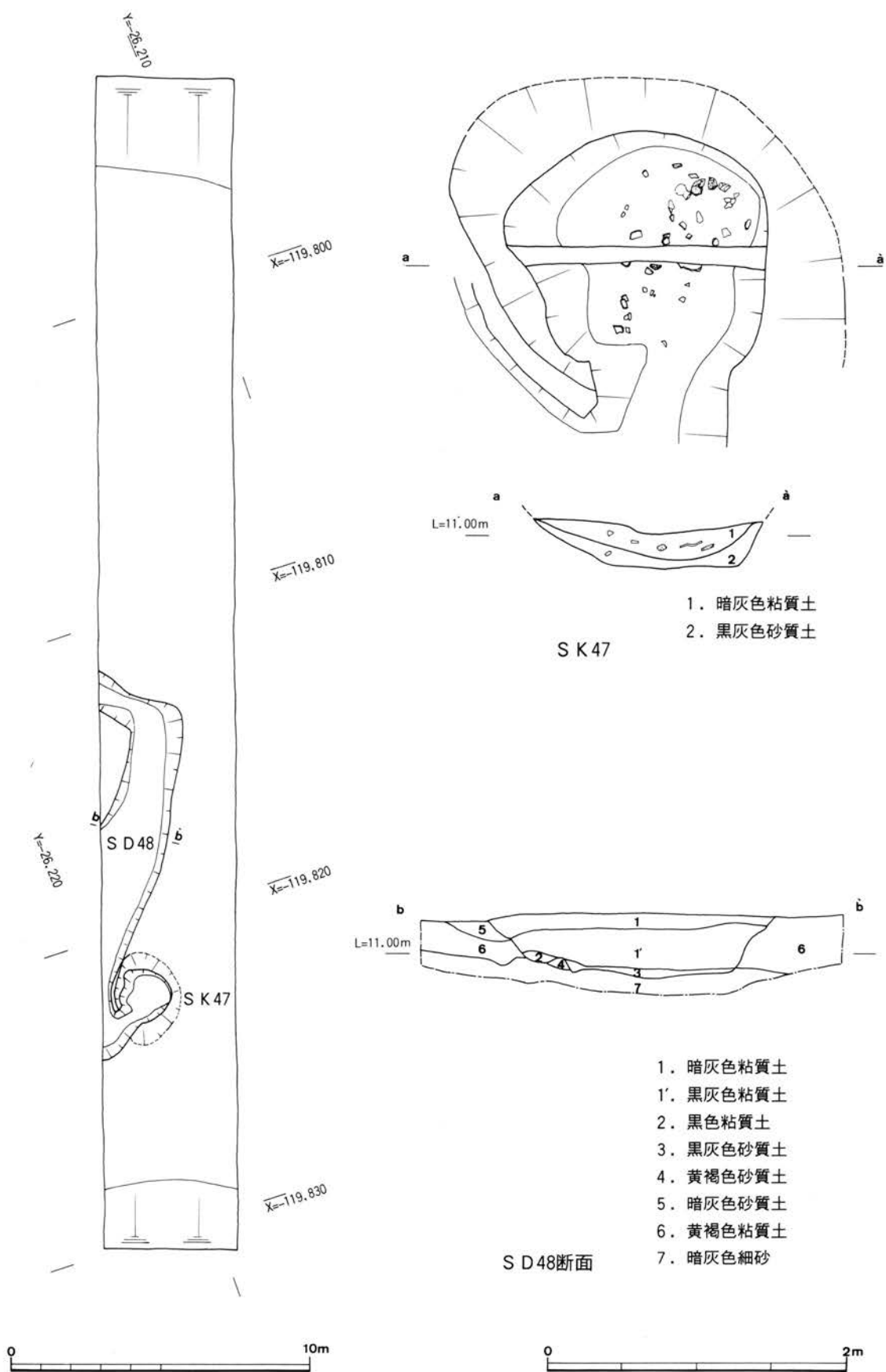
本トレンチは、長岡京跡六条第一小路(新呼称六条条間南小路)の両側溝を検出することを目的に設定された調査区である。遺構検出面は、上面から中世、長岡京期、古墳時代以前の3面が認められた。中世面では、瓦器を伴出する南北方向の素掘り溝群、長岡京期の遺構面では、六条第一小路(新呼称六条条間南小路)南北両側溝、長岡京跡左京二坊六条一町(新呼称左京二坊六条三町)内の南北方向の溝3条、南北方向の柵列1条を検出した。条坊側溝の座標値及び個々の遺構の性格についての詳細は、概報で記載済みである。

弥生時代の遺構は、すべて最下位の古墳時代以前の遺構検出面から発見された。古墳時代の遺構としては、トレンチを横断する自然流路跡SR216043がある。出土遺物には中期の弥生土器が含まれるが、遺構の上限を示す遺物から、古墳時代中期に埋没していたと想定できる。包含層から出土した遺物には、縄紋時代中期の船元式土器の破片が見られたが、調査区内で縄紋時代の遺構は検出できなかった。以下、遺構や遺物に関しては、弥生時代前期にのみ記述したい。

トレンチは、矢板によって土止めされ、幅は約4.5m、



第2図 トレンチ配置図

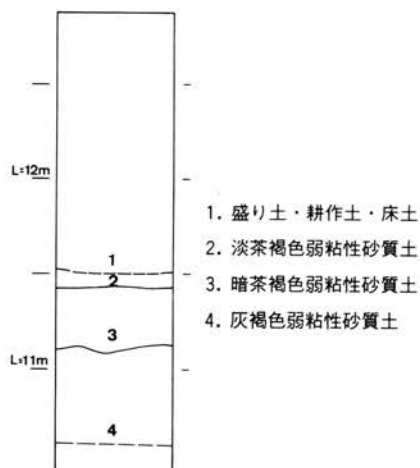


第3図 第9トレンチ遺構実測図

長さは約40mを測る。トレンチ東側に、1.5m幅で土層確認用の溝を掘り、土層の確認とともに排水溝、ベルトコンベアの設置場所とした。遺構写真に見られる多くの円形の穴は、サンドパイプと呼ばれる、名神高速道路に関連する土地改良工事の跡である。地表面の高さは、海拔約13.1mである。

(1)層位

中世遺構検出面より上位の土層は大半が盛り土であったが、耕作土などの詳細は不明である。中世遺構検出面は、淡茶褐色粘砂質土で海拔約11.6mを測る。長岡京期遺構検出面は、暗茶褐色粘砂質土で海拔約11.4mを測る。古墳時代以前の遺構検出面は、淡茶褐色の斑の入る灰褐色粘砂質土で海拔約11.2mを測る。



第4図 第9トレンチ模式土層柱状図

(2)遺構

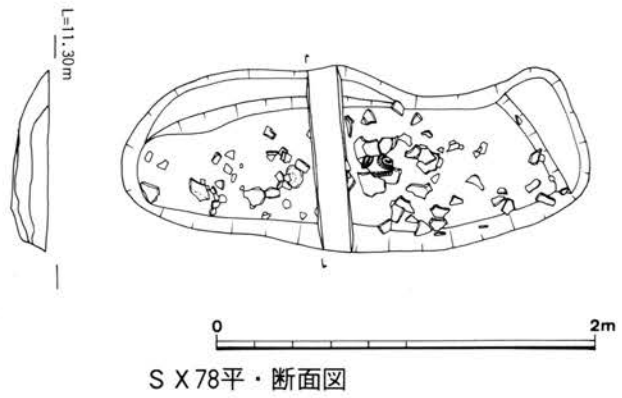
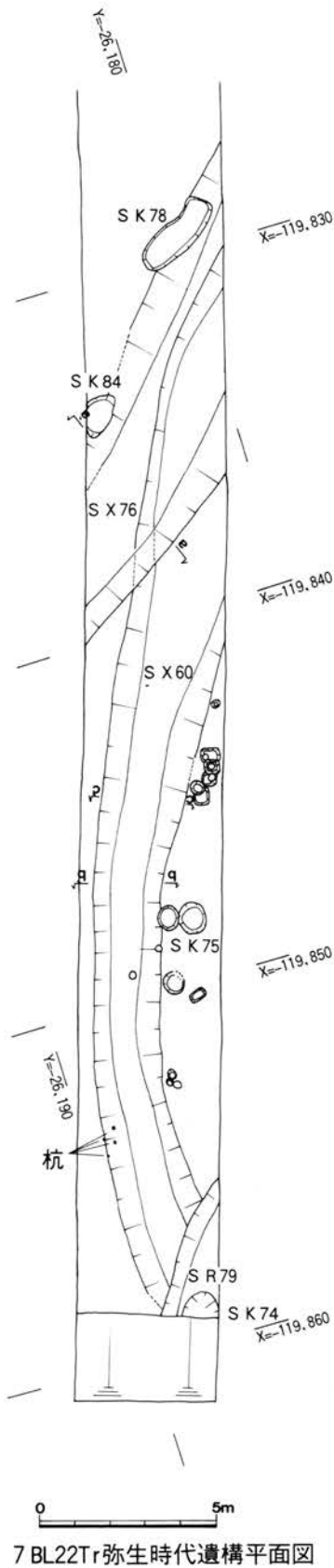
S K 47 S D 48に取り付く不定形の土坑である。検出面からの最大径は約2.5mを測り、深さは約40cmである。上層は不明であるが、土層断面を取った部分では、2層に分かれる。上層は暗灰色粘質土で、遺物は面をなしてこの層から出土した。最下層は黒灰色砂質土であった。出土遺物には、完形の小形の壺、石槍などが伴い、遺物から見ると、特異な遺構と位置付けられる。

S D 48 トレンチ中央部の断ち割りによって検出した直角に曲がる溝である。溝の北東にいくにしたがって幅が狭くなっていく。検出面のレベルが北東方向に下がっていくことから、本来はほぼ同じ幅で続いていたと想定できる。埋土は暗灰色粘質土、黒灰色粘質土と溝方の崩落土によって構成されていた。溝幅は広いところで2.3m、狭いところで約1m、検出面からの深さは深いところで約30cm、浅い部分で約20cmを測る。出土土器から、弥生時代前期の遺構と考えられる。直角に溝が曲がることから、方形周溝墓の周溝の可能性が指摘できる。

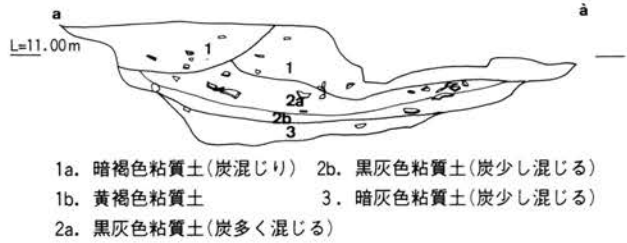
2. 第22トレンチ

本トレンチは、長岡京跡東二坊第一小路(新呼称東二坊坊間西小路)両側溝と六条第一小路(新呼称六条条間南小路)の両側溝を検出することを目的に設定された調査区である。遺構検出面は、上面から中世、長岡京期、古墳時代以前の3面が認められた。中世面では、瓦器を伴出する南北方向の素掘り溝群、長岡京期の遺構面では、東二坊第一小路(新呼称東二坊坊間西小路)東西両側溝、六条第一小路(新呼称六条条間南小路)南側溝を検出した。条坊側溝の座標値及び個々の遺構の性格についての詳細は、概報で記載済みである。

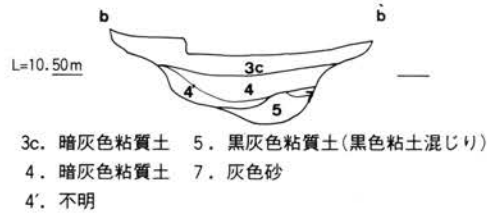
弥生時代の遺構は、すべて最下位の古墳時代以前の遺構検出面から発見された。古墳時代の遺構としては、トレンチを横断する自然流路跡S R 216043がある。出土遺物には中期の弥生土器が含まれるが、遺構の上限を示す遺物から、古墳時代中期に埋没していたと想定できる。包含層から出土した遺物には、縄紋時代中期の船元式土器の破片が見られたが、調査区内で縄紋時代の遺



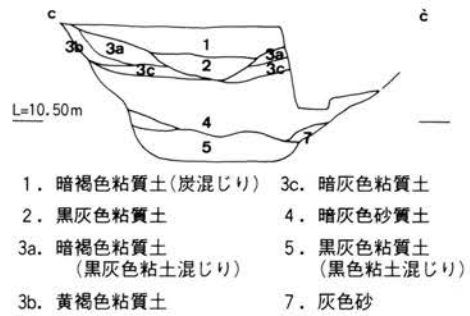
S X 76 断面 7



S X 60 断面 3



S X 60 断面 4



第5図 第22トレンチ遺構実測図

構は検出できなかった。以下、遺構や遺物に関しては、弥生時代前期に関してのみ記述したい。

トレンチは、矢板によって土止めされ、幅は約4.5m 長さは約80mを測る。トレンチ東側に、1.5m幅で土層確認用の溝を掘り、ベルトコンベア設置場所としてやや広く土層確認用の溝を掘削した。地表面の高さは、海拔約13.1mである。

(1) 層位

中世遺構検出面より上位の土層は、大半が盛り土であったが、耕作土などの詳細は不明である。中世遺構検出面は、灰褐色粘砂質土で海拔約11.7mを測る。長岡京期遺構検出面は、淡茶灰色粘砂質土で海拔約11.5mを測る。古墳時代以前の遺構検出面は、暗茶褐色粘砂質土(青灰色が酸化?)で海拔約11.3mを測る。

(2) 遺構

弥生時代前期の遺構としては、環濠S X60・溝S X76・SK78・SK75・SK84がある。

環濠S X60 調査トレンチの東側に向かって開く円弧状を呈する溝である。西側の方が上層遺構面掘削時の排水溝兼土層観察溝によって一部削平されているが、検出面の幅は約3m・深さ約1mを測り、トレンチ内で約30m分を検出することができた。断面の観察によると、断面形が台形状に掘り込まれた溝が再度底部が「U」字状を呈するように掘り直されている。出土遺物は、第1層に多く認められた。木製品は、ほとんどが5層の出土である。4本の杭が検出できた。

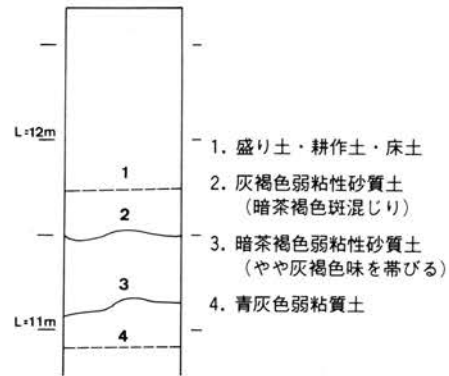
溝S X76 調査区内を東から西に横切る溝である。環濠S X60の一部を破壊して掘削されていることから、環濠S X60より新しいことがわかる。また、出土遺物からも新旧関係を追認する結果となった。トレンチ内で約12m検出できた溝は、幅約5m・深さ約1mを測る。土層は、3層に大きく分かれ、第2層で最も遺物が出土した。第1層は、掘り直しが行われていることが断面観察によってわかったが、分離して遺物を取り上げることはほとんどできなかった。

土坑SK78 S X76の埋没後に掘削された土坑である。平面形は、角丸の長方形を呈し、長辺は約2.5m・短辺約1m・深さ約0.2mを測る。弥生時代前期の遺構の中で切り合いで新旧がわかるものとしては、最も新しい遺構に位置付けられる。出土遺物には、弥生時代前期のものが認められるが、S X76第1層の遺物には同一個体と考えられるものが認められ、土器が遺構の時期を示しているかは不明である。

土坑SK75 S X60の東肩部で検出した円形の土坑である。直径は約0.9m、検出面からの深さは約0.2mを測る。出土遺物から弥生時代前期新段階に位置付けられる。

土坑SK84 S X76に切られる。弥生土器が出土しているが、詳細な時期は不明である。

S X60東肩部の柱穴群からは、弥生時代前期新段階の土器が出土しており、S X60に付属する施設とは考えられない。



第6図 第22トレンチ模式土層柱状図

第4章 遺物

1. 弥生土器

土器は、S X76とS X60からその大半が出土している。以下に図化した土器を、層位ごとに説明し、拓本及び赤色顔料の塗布された土器は別に説明を加える。考察で触れられている部分の説明は割愛した。

S X76第1層 壺形土器では、4・8に見られる口縁内面に沈線がめぐるもの、12・13のように内面に突帯が認められるものがある。頸部が長くなるものや、胴部が大きく張るものなどが目立つ。また、15・21・27・29など貼り付け突帯に4条以上のものがある。特に、15は貼り付け突帯の上の刻み部に布圧痕が認められる。3・14に古い要素である段が口頸部界に認められるが、3には段の下の沈線が多条あり、完形で出土した14は、器形から新しいことがわかる。口頸部界、頸胴部界の施紋は、ヘラ描き沈線を多条にめぐらすことが多い。28は、1対の貼り付け突帯が垂下し渦を巻く紋様が向かい合ったものである。同一紋様の土器がS K78から出土している。

甕形土器は、刻みを持つ弥生土器系の貼り付け突帯がめぐるものが37の1個体のみ存在している。32は、甕形土器には珍しく、外面が粗いハケの後ミガキ調整されており、全体像のわかる資料である。第1層では、沈線が6条を越える個体が現われる。47は、分類上異論の多い土器と考えられる。口唇部からやや下がったところに、刻みのない貼り付け突帯がめぐらされている。この突帯の下には剝離痕と考えられる部分が肉眼的に認められ、さらに突帯がめぐっていたと想定できる。

鉢形土器の52・55は、類似しているが、55は口縁端面に沈線が認められ、別個体である。56は、内面に段を持つ個体で、破片の外面下端にも段があると考えられる。57は、表面の剝離が著しく、形状を正確に伝えているかは不明である。

S X76第2層 92は、口頸部界に段を持ち、その下には貝殻の縁辺部を用いて山形紋が施されている。貝殻施紋の土器はこれ1点のみである。101は、西洋の水差しのように、片口になった口縁をもつ土器である。118～120は、無頸壺で第2層でのみ出土するが、この3点のみである。134は、口縁部から底部まで接合する個体ではないが、多くの破片が存在しており、ほぼ同一個体と想定でき、図上で復原した。137は、細い横方向の貼り付け突帯の上方から上方向に棒状の突帯がのびる個体である。144の頸部の貼り付け突帯には布圧痕が認められる。2層より古い層では、布圧痕を持つ貼り付け突帯は存在しない。145・150・152・161は、施紋される部位が複数化したり、他の施紋技術と組み合わせたものなどが比較的に見られる。

165・168は、「L」字状口縁を持つ甕形土器の破片で、口縁部上面には2本の沈線がめぐる。166も「L」字状口縁を持つ甕形土器の破片である。170は、削り出し突帯をもつ甕形土器である。

突帯は、沈線をめぐらし、上の沈線はその上部を、下の沈線はその下部をそれぞれヘラ状の工具で掻き取ることによって形成されている。178は、土器の口縁を外反させるときにあたった指の爪形が連続的に外面に認められる。181は、口縁端面に沈線のめぐる個体で、このような破片は極めて少ない。213～215に見られる山形紋は、第2層に目立って多い。

218は、ミニチュアと考えられる土器である。221のように脚状の底部を持ち、まっすぐに上方に開く鉢形土器は、この層から出現する。236～241は、口径が器高の1.5倍を越す鉢形土器で、このプロポーションを持つ鉢形土器には把手が付く。

S X 76第3層 297は、頸部外面にヘラ描きによって矢羽状に施紋された壺形土器である。301・302に認められる段は、沈線の肩部をヘラミガキで平滑にすることによって作り出されている。この手法によって、壺形土器のほとんどすべての段と削り出し突帯は作り出されている。318は、いわゆる朝鮮系無紋土器であるが、在地の弥生土器と同じ胎土、焼成の土器である。319は、扁平に潰れた肥厚する口縁をもつ土器であるが、胎土は在地の土器とは異なり、縄紋土器の焼成に近い。338は、底部外面に棒状のもので繰り返し、横方向に連続的に粘土を掻き取った痕跡の認められる土器である。

S X 60第1層 380は、口縁内面に円形の突起が認められる壺形土器の口縁である。突起の数は検出した土器が小片で、1つしか存在していない。381は、口頸部界に段をもつ壺形土器片で、段の下には3条の沈線が認められる。391は、胴部に無軸木葉紋の施された個体である。甕形土器は、口径24cm前後のものが主体であるが、404・405に見られる大形のものもある。428は、口縁端部が肥厚する土器で、上方にはやや面が作られる。

S X 60第2層 484は、大形の壺形土器の口縁部で、内面には貼り付け突帯がめぐる。490は、壺形土器胴部外面に施された突起で、接合部はヘラミガキによって消されている。また突起は上面が平坦でヘラによって施紋された沈線が1条認められる。503・504・508・512のように、沈線が4条のものを特に載せているが、出土数に占める割合は低い。516は、直口する口縁をもつ鉢形土器で、口縁端は面を持ち刻みが施されている。

S X 60第3層 545は、大形の壺形土器である。頸部には削り出し突帯が認められるが、この突帯はヘラ状の工具で上下を掻き取って作り出されている。559は、刺突による施紋が認められる甕形土器である。この遺跡では最も古い層位からの出土例である。

S X 60第4層 595は、弧状の二重沈線が頸部と胴部に認められる個体である。599は、段の部分をヘラ状の工具で掻き取って作り出している。この工具は、甕形土器の調整に用いられる細ハケと同じである。601は、沈線が口縁部から離れて施紋されている個体で、S X 60第3層以下で認められる。

S X 60第5層 出土量が極めて少ないが、比較的古い様相を示している。630・632は、段を持つ甕である。634は、貼り付け突帯を口縁端部外面に持ち、刻みが施されている。外面は縦ハケが施され、内面はナデであるが、成形時の粘土接合痕が認められる。外面にはススが付着し、焼成は縄紋土器に似る。

その他の遺構 644は、口縁内面に貼り付け突帯がめぐり、外面は口縁部に近い部分に削り出し突帯がめぐる。652は、長岡京期の条坊側溝から出土しているが、下層にはS X60がある。

断面・拓本 666は、壺形土器の胴部外面に下向きに開いた「C」字の貼り付け突帯である。667は、外面に沈線を施した後に、その上に粘土紐を付けて施紋されている。668は、壺形土器の口縁内面に貼り付け突帯が施された土器である。675は、沈線の間を刻んでいる流水紋である。679は、極小の竹管を刺突した個体である。680は、沈線で格子状に施紋されている。682は、深く刻まれた貼り付け突帯の1か所が残された個体である。736は、上向きに開く巴状の貼り付け突帯の剥がれた痕跡が残された壺形土器の体部である。758は、壺形土器の口縁部で、口縁部端は垂下する。この個体は、包含層出土品である。

彩紋土器 761は、外面に刺突が施され後に、赤色に着彩されている。762は、小型の甕形土器と考えられる土器の内面に赤色顔料の付着した土器である。779は、778と同様の貼り付け突帯が剥がれた痕跡が器表面に残る。

土製紡錘車 822は、S X76第2層出土で、重量38.4g。823はS X60第3層第3層、824はS X60第4層出土で、重量43.8g。3点の胎土は、石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含んでいる。

付表1 出土土器観察表

底部については、底部径と底部残存率を口径・口縁残存率のかわりに記述した。

NO.	遺構層位	器種	口径	口縁残存率	器高	外面調整	内面調整	胎土	色調	焼成	備考
1	SX76-1	壺	19.2	1/10	6.7	細ハケ+ミガキ	細ハケ+ミガキ	φ6mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡黄褐色	良	
2	SX76-1	壺	18.5	2/3	8.4	細ハケ+ミガキ	細ハケ+ミガキ	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡黄褐色	良	
3	SX76-1	壺	18.6	1/24	4.9	細ハケ+ミガキ	不明	φ4mm以下の石英・長石・雲母・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡黄灰色	良	
4	SX76-1	壺	23.4	1/10	4	細ハケ+ミガキ	細ハケ+ミガキ	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	灰褐色	良	
5	SX76-1	壺	22	1/5	7.8	細ハケ+ミガキ	細ハケ+ミガキ	φ7mm以下の石英・長石・雲母・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡灰褐色	良	
6	SX76-1	壺	17.6	5/12	7.7	細ハケ+ミガキ	細ハケ+ミガキ	φ5mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	橙褐色	良	
7	SX76-1	壺	16	1/6	3.4	ミガキ	不明	φ5mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡茶褐色	良	
8	SX76-1	壺	18	1/24	6.3	不明	不明	φ5mm以下の石英・長石・雲母・頁岩を含む	暗灰褐色	やや不良	
9	SX76-1	壺	17	1/16	5.5	細ハケ+ミガキ	細ハケ+ミガキ	φ2mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	褐色	良	
10	SX76-1	壺	13	1/12	6.6	細ハケ+ミガキ	細ハケ+ミガキ	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	黄褐色	良	
11	SX76-1	壺	28	4/5	8.4	細ハケ+ミガキ	細ハケ+ミガキ	φ5mm以下の石英・長石・チャート・頁岩を含む	淡褐色	良	
12	SX76-1	壺	31	1/5	8.3	細ハケ+ミガキ	細ハケ+ミガキ	φ2mm以下の石英・長石・雲母・チャートを含む	淡黄茶褐色	良	
13	SX76-1	壺	31.6	1/8	2	細ハケ+ミガキ	細ハケ+ミガキ	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩を含む	黒褐色	良	
14	SX76-1	壺	17.5	1	33.2	ハケ+ミガキ	ミガキ	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	赤褐色	良	

15	SX76-1	壺	29	1/12	12.6	細ハケ+ ミガキ	ミガキ	φ 4mm以下の石英・長石・チャート・頁岩を含む	淡茶褐色 淡桃褐色	良	
16	SX76-1	壺	15.6	1/3	12.6	ミガキ	細ハケ+ ミガキ	φ 3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩を含む	淡茶褐色 黒灰色	良	
17	SX76-1	壺	15.5	7/8	22.7	ミガキ	ミガキ	φ 5mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡黄褐色	やや 不良	
18	SX76-1	壺	44	1/16	6.9	不明	不明	φ 4mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡黄褐色	良	
19	SX76-1	壺	27	2/3	30.4	ミガキ	不明	φ 5mm以下の石英・長石・チャート・頁岩を含む	淡茶褐色	良	
20	SX76-1	壺	24	1/7	20.5	細ハケ+ ミガキ	ナデ	φ 4mm以下の石英・長石・チャート・頁岩を含む	淡黄褐色	良	
21	SX76-1	壺			22	細ハケ+ ミガキ	細ハケ+ ミガキ	φ 5mm以下の石英・長石・チャート・頁岩を含む	淡黄褐色	良	
22	SX76-1	壺			5.5	ミガキ	ミガキ	φ 4mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡褐色	良	
23	SX76-1	壺			5.5	細ハケ+ ミガキ	細ハケ+ ミガキ	φ 3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩を含む	淡黄褐色	良	
24	SX76-1	壺			2	ミガキ	不明	φ 3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩を含む	淡褐色	良	
25	SX76-1	壺			3.6	細ハケ+ ミガキ	細ハケ+ ミガキ	φ 2mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡褐色	良	
26	SX76-1	壺			6.8	不明	不明	φ 7mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡褐色	良	
27	SX76-1	壺			4.8	ナデ	不明	φ 4mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡褐色 淡灰褐色	良	
28	SX76-1	壺				細ハケ+ ミガキ	ナデ	φ 10mm以下の石英・長石・チャート・頁岩を含む	淡茶褐色 灰褐色	良	
29	SX76-1	壺			9.6	細ハケ+ ミガキ	ミガキ	φ 3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩を含む	黒灰色	良	腹径45
30	SX76-1	甕	22	1/8	8.5	ハケ	ナデ	φ 3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩を含む	淡黄褐色	良	
31	SX76-1	甕	24.2	1/12	9.2	ハケ	ナデ	φ 3.5mm以下の石英・長石・チャート・頁岩を含む	淡褐色	良	
32	SX76-1	甕	23	1/12	21	ミガキ	不明	φ 4mm以下の石英・長石・チャート・頁岩を含む	淡黄褐色	良	
33	SX76-1	甕	26	1/8	6.4	ハケ+ナ デ	細ハケ+ ナデ	φ 3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩を含む	淡黄褐色	良	
34	SX76-1	甕	22	1/8	13.2	ハケ+ナ デ	ナデ	φ 3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩を含む	橙褐色	良	
35	SX76-1	甕	22.6	1/8	10	ナデ	ナデ	φ 5mm以下の石英・長石・チャート・頁岩を含む	黄褐色	良	
36	SX76-1	甕	25	1/8	7	不明	不明	φ 4mm以下の石英・長石・チャート・頁岩を含む	淡黄褐色	不良	
37	SX76-1	甕			3.3	細ハケ+ ナデ	細ハケ+ ナデ	φ 3mm以下の石英・長石・雲母・チャート・頁岩を含む	淡黄褐色	良	
38	SX76-1	甕	17	1/2	8.1	細ハケ+ ナデ	細ハケ+ ナデ	φ 4mm以下の石英・長石・チャート・頁岩を含む	暗茶褐色	良	
39	SX76-1	甕	21	1/4	6.6	ナデ	不明	φ 4mm以下の石英・長石・チャートを含む	淡黄褐色	不良	
40	SX76-1	甕	21	1/10	9.3	細ハケ+ ナデ	細ハケ+ ナデ	φ 3mm以下の石英・長石・雲母・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡褐色 淡黄橙褐色	良	
41	SX76-1	甕	20	1/6	5	ハケ+ナ デ	ナデ	φ 3mm以下の石英・長石・雲母・チャート・頁岩を含む	黄褐色	良	
42	SX76-1	甕	20.2	1/8	6	ハケ+ナ デ	ナデ	φ 3mm以下の石英・長石・チャート・赤色斑粒を含む	淡黄褐色	良	

43	SX76-1	甕	24	1/8	9	不明	ナデ	φ5mm以下の石英・長石・チャートを含む	淡茶褐色	良	
44	SX76-1	甕	24.6	1/16	8.2	不明	不明	φ5mm以下の石英・長石・チャート・赤色斑粒を含む	淡黄褐色	やや不良	
45	SX76-1	甕	24.4	1/5	11.6	ハケ+ナデ	不明	φ5mm以下の石英・長石・チャート・頁岩を含む	淡褐色	良	
46	SX76-1	甕	27.5	1/8	8	ナデ	ナデ	φ3mm以下の石英・長石・チャートを含む	橙褐色 濃灰色	良	
47	SX76-1	甕	38	1/3	42.5	ミガキ	ミガキ	φ4mm以下の石英・長石・頁岩・赤色斑粒を含む	淡黄褐色	良	
48	SX76-1	鉢	22	1/8	5	ナデ	ミガキ	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩を含む	淡茶褐色	良	
49	SX76-1	甕	21.4	1	23.2	ハケ+ナデ	ナデ	φ5mm以下の長石・チャート・頁岩を含む	茶褐色	良	
50	SX76-1	甕	23	1/2	25.5	ハケ	ナデ	φ3mm以下の長石・チャート・頁岩を含む	濃茶褐色	良	
51	SX76-1	鉢	15.2	1/10	5	不明	不明	φ4mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡桃褐色 褐色	良	
52	SX76-1	鉢	21	1/8	6.8	ミガキ	不明	φ9mm以下の石英・長石・チャート・頁岩を含む	淡橙褐色 淡灰褐色	良	
53	SX76-1	鉢	23.4	1/10	5.35	不明	細ハケ+ナデ	φ6mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡褐色	良	
54	SX76-1	鉢	38.8	1/12	4.7	不明	不明	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	褐色 淡褐色	良	
55	SX76-1	鉢			3.6	不明	ミガキ	φ3mm以下の石英・長石・チャート・赤色斑粒を含む	淡肌褐色	良	
56	SX76-1	鉢			3	細ハケ+ミガキ	細ハケ+ミガキ	φ3mm以下の石英・長石・チャートを含む	淡褐色	良	
57	SX76-1	鉢			5.8	不明	不明	φ4mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡灰褐色 淡褐色	良	
58	SX76-1	鉢			5.1	ハケ+ナデ	ハケ+ナデ	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩を含む	暗褐色 黒褐色	良	
59	SX76-1	鉢	14.6	1/8	5.3	不明	不明	φ2mm以下の石英・長石・雲母を含む	淡橙褐色 淡灰褐色	良	
60	SX76-1	壺・鉢 底部	6.6	1/2	3.75	不明	不明	φ10mm以下の石英・長石・雲母・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	赤褐色 灰褐色	良	
61	SX76-1	壺・鉢 底部	7.8	1/2	2.8	不明	不明	φ5mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡赤褐色	良	
62	SX76-1	壺・鉢 底部	7.2	1/2	2.6	ミガキ	不明	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡桃褐色 灰褐色	良	
63	SX76-1	壺・鉢 底部	9.4	1/3	5	不明	不明	φ5mm以下の石英・長石・雲母・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	橙褐色 黄灰褐色	良	
64	SX76-1	壺・鉢 底部	6.8	1	6.9	ハケ+ナデ	不明	φ5mm以下の石英・長石・雲母・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡橙褐色 暗灰色	良	
65	SX76-1	壺・鉢 底部	10.8	1/6	6.9	ハケ+ナデ	不明	φ6mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡茶褐色	良	
66	SX76-1	壺・鉢 底部	8.8	1	4.3	ハケ+ナデ	ミガキ	φ4mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	黄茶褐色 灰褐色	良	
67	SX76-1	壺・鉢 底部	10.4	1	10.7	ハケ+ミガキ	ミガキ	φ5mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	褐色 淡褐色	良	
68	SX76-1	壺・鉢 底部	15	1/4	4.1	不明	不明	φ5mm以下の石英・長石・雲母・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡茶褐色	良	
69	SX76-1	壺・鉢 底部	10.8	1/4	3.5	細ハケ+ミガキ	細ハケ+ミガキ	φ5mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	橙褐色 淡黄灰褐色	良	
70	SX76-1	壺・鉢 底部	8	1/3	5.7	ミガキ	ミガキ	φ4mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	黒桃灰色	やや不良	

71	SX76-1	壺・鉢 底部	8	1	2.9	不明	不明	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	橙褐色 白灰褐色	良	
72	SX76-1	壺・鉢 底部	9	1/2	11.1	ハケ+ナ デ	不明	φ9mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡赤褐色	やや 不良	
73	SX76-1	壺・鉢 底部	11	1	9.2	ハケ+ナ デ	ナデ	φ4mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡茶褐色	良	
74	SX76-1	甕底部	6.8	9/10	4.4	ハケ+ナ デ	細ハケ+ ナデ	φ4mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡橙褐色	良	
75	SX76-1	甕底部	10.8	1	4	細ハケ+ ナデ	細ハケ+ ナデ	φ5mm以下の石英・長石・雲母・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	橙茶褐色	良	
76	SX76-1	甕底部	7	1/3	8.7	不明	不明	φ8mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	橙色 黄茶褐色	良	
77	SX76-1	甕底部	9.5	1	7.3	不明	不明	φ6mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	橙褐色 淡灰色	良	
78	SX76-1	甕底部	6.4	4/5	6	不明	不明	φ4mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡橙褐色 淡茶褐色	良	
79	SX76-1	甕底部	7	1/3	6.7	細ハケ+ ナデ	細ハケ+ ナデ	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡黄茶褐色、 淡桃褐色	良	
80	SX76-1	甕底部	7.4	1/2	3.6	ハケ+ナ デ	細ハケ+ ナデ	φ4mm以下の石英・長石・雲母・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡茶褐色	良	
81	SX76-1	甕底部	9.3	1/3	4	ハケ+ナ デ	細ハケ+ ナデ	φ4mm以下の石英・長石・雲母・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	明褐色	良	
82	SX76-1	甕底部	8.8	1/2	5	不明	細ハケ+ ナデ	φ6mm以下の石英・長石・雲母・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	明橙茶褐色	良	
83	SX76-1	甕底部	8.6	4/5	3	ハケ+ナ デ	ナデ	φ5mm以下の石英・長石・雲母・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡黄褐色	良	
84	SX76-1	甕底部	8.1	1/3	7.7	ハケ+ナ デ	細ハケ+ ナデ	φ4mm以下の石英・長石・雲母・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡赤褐色	良	
85	SX76-1	甕底部	8	1	3.3	細ハケ+ ナデ	不明	φ9mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	橙褐色 灰褐色	良	
86	SX76-1	甕底部	6.6	2/5	3.2	細ハケ+ ナデ	不明	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡橙灰白色	良	
87	SX76-1	甕底部	5.2	1	3.2	不明	不明	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	橙灰褐色 茶褐色	良	
88	SX76-1	甕底部	5.5	1/4	3.2	ハケ+ナ デ	不明	φ5mm以下の石英・長石・雲母・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	明茶褐色	良	
89	SX76-1	甕底部	7.2	4/5	5.3	細ハケ+ ナデ	不明	φ5mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡灰褐色	良	
90	SX76-1	甕底部	2.6	2/3	2.6	不明	不明	φ4mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	黄灰褐色	良	
91	SX76-2	壺	8.4	1/6	2.2	不明	不明	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡褐色	良	
92	SX76-2	壺	13	1/6	4.2	細ハケ+ ミガキ	不明	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡褐色	良	
93	SX76-2	壺	13	1/12	4.3	細ハケ+ ミガキ	細ハケ+ ミガキ	φ3mm以下の長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡茶褐色	良	
94	SX76-2	壺	14	1/12	5.9	細ハケ+ ミガキ	ナデ	φ4mm以下の石英・長石・チャート・頁岩を含む	淡黄褐色	良	
95	SX76-2	壺	14.2	1/10	3.1	細ハケ+ ミガキ	ミガキ	φ3mm以下の石英・長石・雲母・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡茶褐色	良	
96	SX76-2	壺	14.8	1/5	3.8	不明	不明	φ5mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡茶褐色	良	
97	SX76-2	壺	16	1/2	3.5	細ハケ+ ミガキ	細ハケ+ ミガキ	φ3mm以下の石英・長石・雲母・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡褐色	良	
98	SX76-2	壺	17.4	1/7	3.4	細ハケ+ ミガキ	細ハケ+ ミガキ	φ3mm以下の石英・長石・雲母・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡黄褐色	良	

99	SX76-2	壺	14.8	1/2	5.9	細ハケ+ ミガキ	細ハケ+ ミガキ	φ3mm以下の石英・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡黄褐色	良	
100	SX76-2	壺	16.4	1/3	8.4	不明	不明	φ3mm以下の石英・長石・雲母・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡褐色	良	
101	SX76-2	壺	不明	1/2	10	細ハケ+ ミガキ	細ハケ+ ミガキ	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡黄褐色	良	
102	SX76-2	壺	14.4	1/6	6	不明	ミガキ	φ2mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡桃褐色	良	
103	SX76-2	壺	18.6	1/3	5.8	不明	不明	φ4mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡褐色	良	
104	SX76-2	壺	19.6	1/6	3.6	細ハケ	細ハケ+ ミガキ	φ7mm以下の石英・長石・チャート・頁岩を含む	淡褐色	良	
105	SX76-2	壺	19.8	1/3	8.3	細ハケ+ ミガキ	ミガキ	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡黄褐色 淡褐色	良	
106	SX76-2	壺	18.4	1/6	5.5	ハケ+ミ ガキ	ミガキ	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	灰褐色	良	
107	SX76-2	壺	20	9/16	9.1	ミガキ	ミガキ	φ4mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡黄褐色	良	腹径32.4
108	SX76-2	壺	26	1/12	8.6	細ハケ+ ミガキ	細ハケ+ ミガキ	φ4mm以下の石英・長石・雲母・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	茶褐色	良	
109	SX76-2	壺	22	5/12	7.6	ミガキ	細ハケ+ ナデ	φ5mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	橙褐色	良	
110	SX76-2	壺	25.4	1/12	3.3	細ハケ+ ミガキ	細ハケ+ ミガキ	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	暗茶褐色	良	
111	SX76-2	壺	25.7	1/16	5.2	細ハケ+ ミガキ	ミガキ	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	赤茶褐色 淡茶褐色	良	
112	SX76-2	壺	20	1/12	2.6	不明	不明	φ4mm以下の石英・長石・雲母・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	橙褐色	良	
113	SX76-2	壺	21.6	1/5	5.2	ハケ+ミ ガキ	細ハケ+ ミガキ	φ8mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡黄褐色	良	
114	SX76-2	壺	20.4	1/4	5.1	細ハケ+ ミガキ	細ハケ+ ミガキ	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡黄褐色	良	
115	SX76-2	壺	20.8	1/2	6.75	細ハケ+ ミガキ	ミガキ	φ4mm以下の石英・長石・雲母・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡黄褐色	良	
116	SX76-2	壺	18	1/4	9.7	不明	不明	φ3mm以下の石英・長石・雲母・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡褐色	良	
117	SX76-2	壺	22.2	1/16	5.1	ミガキ	ミガキ	φ6mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	橙褐色	良	
118	SX76-2	無頸壺			5.7	不明	不明	φ4mm以下の石英・長石・雲母・チャート・頁岩を含む	淡褐色	良	
119	SX76-2	無頸壺	9.2	1/5	8.6	細ハケ+ ミガキ	細ハケ+ ミガキ	φ4mm以下の石英・長石・チャート・頁岩を含む	淡黄褐色	良	
120	SX76-2	無頸壺	11.4	2/3	13.2	ミガキ	不明	φ6mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡桃褐色	良	
121	SX76-2	壺	22.4		13	細ハケ+ ミガキ	ミガキ	φ5mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	黄褐色	良	
122	SX76-2	壺	23	1/3	15	不明	不明	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡橙褐色	良	
123	SX76-2	壺	19	2/3	22.5	細ハケ+ ミガキ	細ハケ+ ミガキ	φ5mm以下の石英・長石・雲母・チャート・頁岩を含む	淡褐色	良	
124	SX76-2	壺	15.8	1/2	24.8	細ハケ+ ミガキ	細ハケ+ ミガキ	φ4mm以下の石英・長石・チャート・赤色斑粒を含む	淡褐色	良	
125	SX76-2	壺	18.2	3/4	17.3	細ハケ+ ミガキ	細ハケ+ ミガキ	φ4mm以下の石英・長石・雲母・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	明茶褐色	良	
126	SX76-2	壺	20	1/3	21	細ハケ+ ミガキ	細ハケ+ ミガキ	φ5mm以下の石英・長石・チャート・頁岩を含む	淡茶褐色	良	

127	SX76-2	壺			44	ハケ+ミ ガキ	ミガキ	φ5mm以下の石英・長石・チャ ート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡桃褐色	良	頸径15.1 胴径41.1
128	SX76-2	壺	40	1/6	4.8	ハケ+ミ ガキ	細ハケ+ ミガキ	φ6mm以下の石英・長石・チャ ート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡桃褐色	良	
129	SX76-2	壺	41.5	1/9	4.6	不明	細ハケ+ ミガキ	φ3mm以下の石英・長石・雲母・ チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	黄褐色	良	
130	SX76-2	壺	43.4	1/9	2.4	ミガキ	ミガキ	φ3mm以下の石英・長石・チャ ート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡桃褐色	良	
131	SX76-2	壺	32.4	1/7	5.8	細ハケ+ ミガキ	細ハケ+ ミガキ	φ4mm以下の石英・長石・雲母・ チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	黄褐色	良	
132	SX76-2	壺	29	1/5	7.4	不明	不明	φ4mm以下の石英・長石・チャ ート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡褐色	良	
133	SX76-2	壺	47.5	1/4	25	細ハケ+ ナデ	細ハケ+ ナデ	φ5mm以下の石英・長石・チャ ート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡桃褐色	良	
134	SX76-2	壺	42.4	3/4	55	細ハケ+ ミガキ	細ハケ+ ミガキ	φ5mm以下の石英・長石・チャ ート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡橙褐色	良	
135	SX76-2	壺			10.5	ハケ+ミ ガキ	細ハケ+ ミガキ	φ4mm以下の石英・長石・雲母・ チャート・頁岩を含む	淡褐色	良	頸径23.4
136	SX76-2	壺			12	細ハケ+ ミガキ	細ハケ+ ミガキ	φ6mm以下の石英・長石・雲母・ チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡褐色	良	頸径38.2
137	SX76-2	壺			7.8	細ハケ+ ナデ	不明	φ6mm以下の石英・長石・チャ ート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡褐色	良	腹径29.9
138	SX76-2	壺			3.2	不明	不明	φ2mm以下の石英・長石・チャ ート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡桃褐色	良	
139	SX76-2	壺			3.5	細ハケ+ ミガキ	不明	φ3mm以下の石英・長石・チャ ート・頁岩を含む	茶褐色	良	
140	SX76-2	壺			12	細ハケ+ ミガキ	細ハケ+ ミガキ	φ4mm以下の石英・長石・チャ ート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡桃褐色	良	底径4
141	SX76-2	壺			9	細ハケ+ ミガキ	細ハケ+ ミガキ	φ3mm以下の石英・長石・雲母・ チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡桃褐色 橙褐色	良	頸径10.4
142	SX76-2	壺			6.7	細ハケ+ ミガキ	細ハケ+ ミガキ	φ6mm以下の石英・長石・チャ ート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡褐色	良	頸径15.5
143	SX76-2	壺			6.9	ミガキ	ミガキ	φ4mm以下の石英・長石・雲母・ チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡褐色 暗褐色	良	頸径14
144	SX76-2	壺			8.6	細ハケ+ ミガキ	細ハケ+ ミガキ	φ4mm以下の石英・長石・チャ ート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡橙灰色	良	頸径14.8
145	SX76-2	壺			13.5	細ハケ+ ミガキ	細ハケ+ ミガキ	φ4mm以下の石英・長石・チャ ート・赤色斑粒を含む	赤褐色	良	
146	SX76-2	壺			13.6	細ハケ+ ミガキ	細ハケ+ ミガキ	φ10mm以下の石英・長石・チャ ート・頁岩を含む	褐色 灰褐色	良	腹径25
147	SX76-2	壺			5.7	細ハケ+ ミガキ	ナデ	φ3mm以下の石英・長石・チャ ート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡黄茶褐 色	良	腹径16.4
148	SX76-2	壺			10.7	細ハケ+ ミガキ	細ハケ+ ナデ	φ5mm以下の石英・長石・チャ ート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡褐色	良	腹径26.4
149	SX76-2	壺		1/3	15.4	細ハケ+ ミガキ	細ハケ+ ミガキ	φ2.5mm以下の石英・長石・雲母・ チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	黄茶褐色	良	腹径27
150	SX76-2	壺			12.8	細ハケ+ ミガキ	細ハケ+ ミガキ	φ4mm以下の石英・長石・雲母・ チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡黄褐色	良	腹径25.6
151	SX76-2	壺			13	細ハケ+ ミガキ	細ハケ+ ナデ	φ4mm以下の石英・長石・雲母・ チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡褐色 淡灰褐色	良	腹径31.4
152	SX76-2	壺			12.4	ミガキ	ナデ	φ4mm以下の石英・長石・チャ ート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡黄褐色	良	
153	SX76-2	壺				ミガキ	ナデ	φ3mm以下の石英・長石・チャ ート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡黄褐色	良	
154	SX76-2	壺			7	細ハケ+ ナデ	細ハケ+ ナデ	φ3mm以下の石英・長石・チャ ート・頁岩・赤色斑粒を含む	橙褐色 灰褐色	良	

155	SX76-2	壺			8.7	ハケ+ミ ガキ	細ハケ+ ナデ	φ5mm以下の石英・長石・雲母・ チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡褐色	良	腹径26.2
156	SX76-2	壺			9.3	細ハケ+ ミガキ	細ハケ+ ミガキ	φ3mm以下の石英・長石・チャート・ 頁岩・赤色斑粒を含む	淡橙褐色	良	腹径30
157	SX76-2	壺			21.7	ハケ+ミ ガキ	ミガキ	φ8mm以下の石英・長石・チャート・ 頁岩・赤色斑粒を含む	黄褐色	良	
158	SX76-2	壺	9.2	1	18.4	ハケ+ミ ガキ	ハケ+ミ ガキ	φ5mm以下の石英・長石・チャート・ 頁岩・赤色斑粒を含む	淡褐色	良	
159	SX76-2	壺				ミガキ	ナデ	φ3mm以下の石英・長石・チャート・ 頁岩・赤色斑粒を含む	淡褐色	良	
160	SX76-2	壺			9.65	不明	不明	φ4mm以下の石英・長石・雲母・ チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡褐色	良	腹径30.8
161	SX76-2	壺			9.8	ミガキ	ミガキ	φ4mm以下の石英・長石・雲母・ チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡褐色	良	腹径36.4
162	SX76-2	壺	8	1/7	15.2	細ハケ+ ミガキ	細ハケ+ ミガキ	φ10mm以下の石英・長石・雲母・ チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	黄褐色	良	腹径 28.3、底 径8
163	SX76-2	壺	9.2	1	18.5	不明	不明	φ10mm以下の石英・長石・チャート・ 頁岩・赤色斑粒を含む	暗褐色 淡褐色	良	腹径30.5
164	SX76-2	壺	9.6	1	20.3	ミガキ	ミガキ	φ3mm以下の石英・長石・チャート・ 頁岩・赤色斑粒を含む	淡茶褐色 黒灰色	良	腹径31.5
165	SX76-2	甕			2.4	ナデ	ミガキ	φ5mm以下の石英・長石・チャート・ 赤色斑粒を含む	淡褐色	良	
166	SX76-2	甕			2.6	不明	不明	φ4mm以下の石英・長石・チャート・ 赤色斑粒を含む	淡褐色	良	
167	SX76-2	甕			3.5	不明	不明	φ5mm以下の石英・長石・雲母・ チャート・頁岩を含む	灰褐色	良	
168	SX76-2	甕	16	1/4	11.7	不明	ナデ	φ7mm以下の石英・長石・チャート・ 頁岩・赤色斑粒を含む	淡褐色	良	
169	SX76-2	甕	22	1/16	5.7	ナデ	ナデ	φ6mm以下の石英・長石・チャート・ 頁岩・赤色斑粒を含む	淡赤褐色	良	
170	SX76-2	甕	18.4	1/2	9.8	ナデ	ナデ	φ4mm以下の石英・長石・チャート・ 頁岩を含む	淡茶褐色 暗茶褐色	良	
171	SX76-2	甕	19.6	1/4	5.7	細ハケ+ ナデ	細ハケ+ ナデ	φ3mm以下の石英・長石・チャート・ 頁岩・赤色斑粒を含む	淡黄褐色	良	
172	SX76-2	甕	20.1	1/5	7.3	ハケ+ナ デ	ハケ+ナ デ	φ4mm以下の石英・長石・雲母・ チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	暗茶褐色	良	
173	SX76-2	甕	23	1/5	5.4	細ハケ+ ナデ	ナデ	φ4mm以下の石英・長石・角セン 石を含む	淡黄褐色	良	
174	SX76-2	甕	24.6	1/2	21.2	細ハケ+ ナデ	細ハケ+ ナデ	φ5mm以下の石英・長石・チャート・ 頁岩を含む	淡黄褐色	良	
175	SX76-2	甕	24	1/8	10.5	細ハケ	細ハケ+ ナデ	φ3mm以下の石英・長石・雲母を 含む	淡褐色	良	
176	SX76-2	甕	23.1	1/8	12.8	ナデ	細ハケ+ ナデ	φ6mm以下の石英・長石・チャート・ 頁岩・赤色斑粒を含む	淡茶褐色	良	
177	SX76-2	甕	23	1/5	8	細ハケ+ ナデ	細ハケ+ ナデ	φ3mm以下の石英・長石・チャート・ 頁岩・赤色斑粒を含む	淡桃褐色	良	
178	SX76-2	甕	23.4	1/7	7.9	細ハケ+ ナデ	細ハケ+ ナデ	φ6mm以下の石英・長石・雲母・ チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	茶褐色 淡茶褐色	良	
179	SX76-2	甕	25.2	1/2	19	ハケ+ナ デ	ハケ+ナ デ	φ3mm以下の石英・長石・チャート・ 頁岩を含む	淡黄褐色	良	
180	SX76-2	甕	27.7	1/10	23.5	細ハケ+ ナデ	ナデ	φ2mm以下の石英・長石・チャート・ 頁岩・赤色斑粒を含む	淡橙茶褐 色	良	
181	SX76-2	甕	20	1/10	4	細ハケ+ ナデ	ナデ	φ4mm以下の石英・長石・チャート・ 頁岩・赤色斑粒を含む	淡桃茶色	良	
182	SX76-2	甕	22.2	1/4	13.5	ナデ	ナデ	φ2mm以下の石英・長石・チャート・ 頁岩・赤色斑粒を含む	暗茶褐色 淡茶褐色	良	

183	SX76-2	甕	22	1/8	12.8	ナデ	ナデ	φ5mm以下の石英・長石・雲母・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡黄褐色 茶褐色	良	
184	SX76-2	甕	24.5	1/8	9	細ハケ+ ナデ	不明	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩を含む	淡黄褐色	良	
185	SX76-2	甕	22	1/5	8.4	ナデ	ナデ	φ4mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡褐色	良	
186	SX76-2	甕	14.1	1/12	4.8	不明	ナデ	φ3.5mm以下の石英・長石・角セ ン石・赤色斑粒を含む	暗茶褐色	良	
187	SX76-2	甕	27	1	26.5	細ハケ+ ナデ	細ハケ+ ナデ	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩を含む	淡褐色	良	
188	SX76-2	甕	18	1/8	12.2	ナデ	ハケ+ナ デ	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	茶褐色	良	
189	SX76-2	甕	18.6	1/16	11.3	細ハケ+ ナデ	ナデ	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	暗褐色	良	
190	SX76-2	甕	19.8	1/9	10	ナデ	ナデ	φ2.5mm以下の石英・長石・ チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	暗褐色 淡褐色	良	
191	SX76-2	甕	21.2	1/5	6.9	ハケ	ナデ	φ5mm以下の石英・長石・雲母・ チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	茶褐色 褐色	良	
192	SX76-2	甕	26.4	1/24	11.2	不明	ナデ	φ7mm以下の石英・長石・雲母・ チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡褐色	良	
193	SX76-2	甕	22.4	9/10	23.8	細ハケ+ ナデ	ナデ	φ2mm以下の石英・長石・チャート・赤色斑粒を含む	茶褐色	良	
194	SX76-2	甕	19.3	1/4	7	不明	ナデ	φ4mm以下の石英・長石・チャート・頁岩を含む	淡黄褐色	良	
195	SX76-2	甕	23.5	1/12	11.2	細ハケ+ ナデ	細ハケ+ ナデ	φ6mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡黄褐色	良	
196	SX76-2	甕	23.6	1/5	12	ナデ	ナデ	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	桃褐色	良	
197	SX76-2	甕	22.3	1/12	10.4	ナデ	ナデ	φ4mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	灰褐色 淡褐色	良	
198	SX76-2	甕	23.2	1/8	20.8	細ハケ+ ナデ	細ハケ+ ナデ	φ5mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	灰褐色 黄褐色	良	
199	SX76-2	甕	22.8	1/8	6.1	ハケ+ナ デ	細ハケ+ ナデ	φ3mm以下の石英・長石・雲母・ チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	黄褐色	良	
200	SX76-2	甕	22.6	1/7	6.2	不明	不明	φ4mm以下の石英・長石・雲母・ チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	橙褐色	良	
201	SX76-2	甕	20	1/8	15	ナデ	細ハケ+ ナデ	φ5mm以下の石英・長石・チャート・頁岩を含む	淡黄褐色	良	
202	SX76-2	甕	23.6	1/12	9.8	ナデ	ナデ	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	橙褐色 暗褐色	良	
203	SX76-2	甕	22	1/7	7.9	ナデ	不明	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩を含む	淡橙褐色	良	
204	SX76-2	甕	22.4	1/9	10.9	細ハケ+ ナデ	細ハケ+ ナデ	φ4mm以下の石英・長石・雲母・ チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡黄褐色	良	
205	SX76-2	甕	25	1/16	6.4	ナデ	ナデ	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡桃褐色	良	
206	SX76-2	甕	26.1	1/16	8.4	ナデ	ナデ	φ3mm以下の石英・長石・雲母・ チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡黄褐色	良	
207	SX76-2	甕	24	1/10	8	細ハケ+ ナデ	細ハケ+ ナデ	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡褐色	良	
208	SX76-2	甕	24.8	1/5	5.7	細ハケ+ ナデ	ナデ	φ6mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒・砂岩を含む	淡黄褐色	良	
209	SX76-2	甕	28	1/10	6.4	ナデ	ナデ	φ2mm以下の石英・長石・チャート・頁岩を含む	淡黄褐色	良	
210	SX76-2	甕	30	1/12	8	細ハケ	細ハケ+ ナデ	φ6mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡褐色	良	

211	SX76-2	甕	35	1/3	25.7	細ハケ+ ナデ	ナデ	φ4mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡赤褐色	良
212	SX76-2	甕	40	1/8	15.5	細ハケ+ ナデ	ナデ	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡桃褐色	良
213	SX76-2	甕	43.5	1/2	37	細ハケ+ ナデ	細ハケ+ ナデ	φ5mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡黄褐色	良
214	SX76-2	甕	22	1/7	11.2	ハケ+ナ デ	不明	φ4.5mm以下の石英・長石・チャート・頁岩を含む	淡褐色	良
215	SX76-2	甕			12	ハケ+ナ デ	細ハケ+ ナデ	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩を含む	淡褐色	良
216	SX76-2	甕	21	1/4	20.3	ハケ+ナ デ	ハケ+ナ デ	φ5mm以下の石英・長石・チャート・頁岩を含む	茶褐色	良
217	SX76-2	甕			22.9	細ハケ+ ナデ	細ハケ+ ナデ	φ2mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡黄褐色	良
218	SX76-2	鉢	5.2	1/8	2.8	ナデ	ナデ	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	茶褐色	良
219	SX76-2	鉢		1/16	5.8	ミガキ	ミガキ	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡桃褐色	良
220	SX76-2	鉢		1/8	4.2	細ハケ+ ミガキ	細ハケ+ ミガキ	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩を含む	茶褐色	良
221	SX76-2	鉢	8.9	1/12	7.6	細ハケ+ ナデ	細ハケ+ ナデ	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	黄褐色	良
222	SX76-2	鉢	13.4	1/16	6.5	細ハケ+ ミガキ	細ハケ+ ミガキ	φ1mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡褐色	良
223	SX76-2	鉢	14	1/6	5.7	不明	細ハケ+ ナデ	φ2mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡桃茶褐色	良
224	SX76-2	鉢	27	1/12	7.9	ミガキ	不明	φ8mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡橙褐色 淡黄褐色	良
225	SX76-2	鉢	31	1/6	9.9	細ハケ+ ミガキ	細ハケ+ ミガキ	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩を含む	暗灰褐色 灰褐色	良
226	SX76-2	鉢	33.2	1/7	11.8	ハケ	ナデ	φ7mm以下の石英・長石・チャート・頁岩を含む	淡黄褐色	良
227	SX76-2	鉢	37	1/16	6.8	不明	ミガキ	φ4mm以下の石英・長石・雲母・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡褐色	良
228	SX76-2	鉢	39	1/36	19.7	細ハケ+ ミガキ	ミガキ	φ3mm以下の長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡茶褐色 黒色	良
229	SX76-2	鉢	18	1	12	細ハケ	細ハケ+ ナデ	φ2mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	灰褐色 淡橙褐色	良
230	SX76-2	鉢	24.8	1/8	6.5	細ハケ	細ハケ+ ナデ	φ6mm以下の石英・長石・雲母・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡黄褐色	良
231	SX76-2	鉢	25.6	1/12	6.4	細ハケ+ ミガキ	細ハケ+ ミガキ	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡橙褐色 黒褐色	良
232	SX76-2	鉢	26	5/6	10.3	ミガキ	ミガキ	φ5mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡桃褐色	良
233	SX76-2	鉢	19.3	1/4	12.6	ハケ+ミ ガキ	ハケ+ミ ガキ	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	黄褐色	良
234	SX76-2	鉢	17.8	1/4	15.2	細ハケ+ ミガキ	ハケ+ミ ガキ	φ2mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	黄茶褐色	良
235	SX76-2	鉢	42	1/12	8.2	ミガキ	ミガキ	φ4mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	黄褐色	良
236	SX76-2	鉢	40.6	1/6	7	ハケ+ミ ガキ	ミガキ	φ2mm以下の石英・長石・チャート・頁岩を含む	淡褐色	良
237	SX76-2	鉢	43.6	1/6	6	ミガキ	ミガキ	φ2mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡桃褐色	良
238	SX76-2	鉢	45	1/4	8.6	不明	不明	φ2mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡黄茶褐色	良

239	SX76-2	鉢	43.6	1/12	15.3	ミガキ	不明	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	橙褐色 淡黄褐色	良	
240	SX76-2	鉢	44	1/19	12.2	ハケ	ミガキ	φ7mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡褐色	良	
241	SX76-2	鉢	54	5/12	26	ハケ+ミガキ	ハケ+ミガキ	φ6mm以下の石英・長石・チャート・頁岩を含む	淡黄褐色	良	
242	SX76-2	壺・鉢底部	6.8	1	2.55	不明	不明	φ5mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡茶灰色	良	
243	SX76-2	壺・鉢底部	6.4	1	4.3	不明	不明	φ4mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡桃灰色 灰色	良	
244	SX76-2	壺・鉢底部	7.4	1	5.1	不明	不明	φ4mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡灰色	良	
245	SX76-2	壺・鉢底部	8.2	1	4.4	不明	不明	φ4mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	茶褐色	良	
246	SX76-2	壺・鉢底部	10.1	1/3	2.3	ミガキ	不明	φ3mm以下の石英・長石・雲母・チャート・頁岩を含む	淡黄褐色	良	
247	SX76-2	壺・鉢底部	8.6	1	4.3	ハケ+ミガキ	ミガキ	φ7mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡赤褐色	良	
248	SX76-2	壺・鉢底部	8.4	9/10	7.1	ミガキ	不明	φ9mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡橙褐色 桃灰褐色	良	
249	SX76-2	壺・鉢底部	8	9/10	4.6	不明	不明	φ6mm以下の石英・長石・雲母・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡黄茶褐色	良	
250	SX76-2	壺・鉢底部	9.2	9/10	3.8	不明	不明	φ5mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡黄褐色 灰褐色	良	
251	SX76-2	壺・鉢底部	9.2	1/3	4.25	不明	不明	φ6mm以下の石英・長石・雲母・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	暗灰褐色	良	
252	SX76-2	壺・鉢底部	8	4/5	6.9	ミガキ	不明	φ6mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡茶褐色	良	
253	SX76-2	壺・鉢底部	8.6	1/4	9.1	不明	不明	φ5mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡赤褐色	良	
254	SX76-2	甕底部	7.6	1	12.5	細ハケ+ミガキ	不明	φ5mm以下の石英・長石・雲母・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡赤褐色	やや不良	
255	SX76-2	壺・鉢底部	9.6	1	9.4	細ハケ+ミガキ	細ハケ+ナデ	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩を含む	淡茶褐色 黒灰色	良	
256	SX76-2	壺・鉢底部	12	1/4	8.2	ミガキ	不明	φ4mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡茶橙色 淡茶褐色	良	
257	SX76-2	壺・鉢底部	9	1	10.6	細ハケ+ミガキ	細ハケ+ミガキ	φ5mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡黄褐色 淡黄茶褐色	良	
258	SX76-2	壺・鉢底部	10.7	1/4	2.7	ミガキ	ミガキ	φ7mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡茶褐色 黒灰色	良	
259	SX76-2	壺・鉢底部	16	1	26.8	ハケ+ナデ	不明	φ4mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡茶褐色	良	
260	SX76-2	甕底部	7.4	1/2	4.75	不明	不明	φ7.5mm以下の石英・長石・雲母・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡橙灰色	良	
261	SX76-2	甕底部	8.2	2/3	5.4	細ハケ+ナデ	ナデ	φ2mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡橙褐色 茶灰色	良	
262	SX76-2	甕底部	7.2	1/3	3.9	不明	不明	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡桃褐色 灰色	良	
263	SX76-2	甕底部	7	1/3	6.2	不明	不明	φ8mm以下の石英・長石・雲母・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡黄灰褐色	良	
264	SX76-2	甕底部	7.8	1/2	4.3	細ハケ+ナデ	細ハケ+ナデ	φ4mm以下の石英・長石・雲母・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡黄茶褐色	良	
265	SX76-2	甕底部	7.6	1	6.1	ハケ+ナデ	細ハケ+ナデ	φ4mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡黄茶褐色	良	
266	SX76-2	甕底部	7	9/10	5.7	ハケ	細ハケ+ナデ	φ4mm以下の石英・長石・雲母・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	橙茶褐色	良	

267	SX76-2	甕底部	8.2	1	7.8	細ハケ+ナデ	細ハケ+ナデ	φ2mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	黄褐色 淡茶灰褐色	良	
268	SX76-2	甕底部	7.8	1	7	細ハケ+ナデ	細ハケ+ナデ	φ2mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	橙灰褐色、淡黄茶褐色	良	
269	SX76-2	甕底部	6.8	1	7.85	ハケ+ナデ	細ハケ+ナデ	φ5mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	灰褐色 淡黄褐色	良	
270	SX76-2	甕底部	8	1/2	3.7	不明	不明	φ4mm以下の石英・長石・雲母・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	橙褐色 茶褐色	良	
271	SX76-2	甕底部	6.8	1	6.3	不明	細ハケ+ナデ	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	橙褐色 淡黄褐色	良	
272	SX76-2	甕底部	7.4	3/4	3.55	細ハケ+ナデ	ナデ	φ5mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡黄灰褐色	良	
273	SX76-2	甕底部	7	1	3.85	細ハケ+ナデ	細ハケ+ナデ	φ8mm以下の石英・長石・雲母・チャート・頁岩を含む	橙灰褐色 淡黄白色	良	
274	SX76-2	甕底部	7.4	1	6	細ハケ+ナデ	ナデ	φ8mm以下の石英・長石・雲母・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	橙褐色 暗茶褐色	良	
275	SX76-2	甕底部	7	1	6.2	ハケ+ナデ	細ハケ+ナデ	φ6mm以下の石英・長石・雲母・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡黄茶褐色	良	
276	SX76-2	甕底部	7.5	1	5.7	細ハケ+ナデ	不明	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	暗褐色 褐色	良	
277	SX76-2	甕底部	7.2	2/3	8.3	ハケ+ナデ	細ハケ+ナデ	φ4.5mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	明橙灰褐色 茶褐色	良	
278	SX76-2	甕底部	7.4	1	7	ハケ+ナデ	不明	φ3mm以下の石英・長石・雲母・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	明橙灰色	良	
279	SX76-2	甕底部	8.2	1	7.7	細ハケ+ナデ	細ハケ+ナデ	φ3mm以下の石英・長石・雲母・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡橙褐色 淡茶褐色	良	
280	SX76-2	甕底部	8.6	9/10	12	細ハケ+ナデ	ナデ	φ9mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡橙茶褐色	良	
281	SX76-2	甕底部	7.8	1/2	9.3	ハケ+ナデ	細ハケ+ナデ	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡茶褐色	良	
282	SX76-2	甕底部	8	1	10	ハケ+ナデ	ハケ+ナデ	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡茶褐色	良	
283	SX76-2	甕底部	6.6	1	21	細ハケ+ナデ	細ハケ+ナデ	φ4mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	橙褐色 淡灰褐色	良	
284	SX76-2	甕底部	7.6	1	9.15	ハケ+ナデ	細ハケ+ナデ	φ6mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡茶褐色	良	
285	SX76-2	甕底部	12	1/3	7.9	ハケ+ナデ	細ハケ+ナデ	φ4mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	橙灰褐色 黄褐色	良	
286	SX76-3	壺			7	ミガキ	不明	φ5mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡茶褐色	良	頸径4.1 胴径5.9
287	SX76-3	壺			7	ミガキ	不明	φ3mm以下の石英・長石・チャートを含む	暗褐色	良	頸径4
288	SX76-3	壺	14.1	1/4	4	細ハケ+ミガキ	ミガキ	φ3mm以下の石英・長石・雲母・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡褐色	良	
289	SX76-3	壺	16	1/3	3.8	不明	不明	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡黄褐色	良	穿孔2
290	SX76-3	壺	16	1/4	4.3	ミガキ	ミガキ	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡褐色	良	黒斑
291	SX76-3	壺	18.4	1/3	6.6	ミガキ	ミガキ	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡灰褐色	良	断面7出土
292	SX76-3	壺	19.8	1/6	6.9	不明	不明	φ2.5mm以下の石英・長石・雲母・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡茶褐色	良	
293	SX76-3	壺	23	1/6	14	ハケ+ミガキ	細ハケ+ミガキ	φ7mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	明茶褐色	良	
294	SX76-3	壺	18	1/8	5	不明	不明	φ5mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡肌褐色	良	

295	SX76-3	壺	20.2	1/4	7.9	細ハケ+ミガキ	細ハケ+ミガキ	φ 4 mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡褐色	良	
296	SX76-3	壺			6.8	不明	ミガキ	φ 5mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡褐色	良	
297	SX76-3	壺			6.5	ミガキ	細ハケ+ミガキ	φ 2mm以下の石英・長石・雲母・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡黄褐色	良	頸径11.2
298	SX76-3	壺			5.4	細ハケ+ミガキ	細ハケ+ナデ	φ 3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩を含む	黄褐色	良	
299	SX76-3	壺			7	ミガキ	ミガキ	φ 3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡褐色	良	腹径23
300	SX76-3	壺			3	ナデ	ナデ	φ 2.5mm以下の石英・長石・チャート・頁岩を含む	黒褐色 淡褐色	良	腹径6.8
301	SX76-3	壺			5.7	細ハケ+ミガキ	不明	φ 3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩を含む	灰褐色 明褐色	良	
302	SX76-3	壺			7.3	細ハケ+ミガキ	ミガキ	φ 3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡褐色	良	腹径27.1
303	SX76-3	壺			16.3	細ハケ+ミガキ	細ハケ+ミガキ	φ 2mm以下の長石・雲母・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	肌褐色 黒色	良	腹径26.2
304	SX76-3	壺			12	不明	不明	φ 4mm以下の石英・長石・チャート・頁岩を含む	淡黄褐色	良	底径7.8
305	SX76-3	壺	25.6	1/7	6	不明	細ハケ+ミガキ	φ 5mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡褐色	良	
306	SX76-3	壺	29.4	1/7	5	不明	ミガキ	φ 5mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡桃褐色	良	
307	SX76-3	壺	43.6	1/14	8.3	細ハケ+ミガキ	細ハケ+ミガキ	φ 3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	肌褐色	良	
308	SX76-3	壺			39.5	ハケ+ナデ	細ハケ+ナデ	φ 4mm以下の長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡茶褐色	良	底径14
309	SX76-3	甕	21	1/12	3.3	細ハケ+ナデ	細ハケ+ナデ	φ 4mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡肌褐色	良	
310	SX76-3	甕	20	1/4	9.7	細ハケ+ナデ	不明	φ 5mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	暗褐色 暗茶褐色	良	
311	SX76-3	甕	19.2	1/3	10.9	ハケ+ナデ	ハケ+ナデ	φ 3mm以下の石英・長石・雲母・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡赤茶色	良	
312	SX76-3	甕	19.8	1/12	7.95	ハケ+ナデ	細ハケ+ナデ	φ 3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡黄褐色	良	
313	SX76-3	甕	21	1/6	6.5	細ハケ+ナデ	細ハケ+ナデ	φ 3.5mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	暗褐色	良	
314	SX76-3	甕	24.6	1/12	8.2	細ハケ+ナデ	細ハケ+ナデ	φ 2.5mm以下の石英・長石・雲母・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	黒褐色 淡褐色	良	
315	SX76-3	甕	24.6	1/10	11.4	細ハケ+ナデ	細ハケ+ナデ	φ 3mm以下の石英・長石・雲母・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	茶褐色	良	
316	SX76-3	甕	28.2	1/4	8.5	細ハケ+ナデ	不明	φ 3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩を含む	淡肌褐色	良	
317	SX76-3	甕	28.2	1/5	7.1	細ハケ+ナデ	細ハケ+ナデ	φ 3.5mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡茶褐色	良	
318	SX76-3	甕			2.9	ナデ	ナデ	φ 4 mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡肌褐色	良	
319	SX76-3	甕			3.2	細ハケ+ナデ	ナデ	φ 2mm以下の石英・長石を含む	暗褐色	良	
320	SX76-3	甕	23.2	1/12	4.8	ハケ	不明	φ 3mm以下の長石・チャート・頁岩を含む	肌褐色	良	
321	SX76-3	甕	22	1/3	8	細ハケ+ナデ	ナデ	φ 4mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡黄褐色	良	
322	SX76-3	甕	24.3	1/32	10	細ハケ+ナデ	細ハケ+ナデ	φ 4mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡褐色	良	

323	SX76-3	甕	24	1/7	9.9	ハケ+ナ デ	ハケ+ナ デ	φ4mm以下の石英・長石・チャ ート・頁岩を含む	淡黄褐色	良	
324	SX76-3	甕	23.6	1/4	20	細ハケ+ ナデ	細ハケ+ ナデ	φ5mm以下の石英・長石・チャ ート・頁岩・赤色斑粒を含む	茶褐色	良	
325	SX76-3	甕	24.8	1/4	19.6	ハケ+ナ デ	細ハケ+ ナデ	φ3mm以下の石英・長石・チャ ート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡黄褐色	良	
326	SX76-3	甕	21.2	1/7	5.3	細ハケ+ ナデ	細ハケ+ ナデ	φ4mm以下の石英・長石・チャ ート・頁岩・赤色斑粒を含む	暗褐色	良	
327	SX76-3	甕	19.4	1/12	8.5	細ハケ+ ナデ	細ハケ+ ナデ	φ3mm以下の石英・長石・チャ ート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡黄褐色	良	
328	SX76-3	甕	20.9	1/6	12	細ハケ+ ナデ	細ハケ+ ナデ	φ4mm以下の石英・長石・雲母・ チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	黄褐色	良	
329	SX76-3	甕	21	1/16	11.5	細ハケ+ ナデ	細ハケ+ ナデ	φ6mm以下の石英・長石・チャ ート・頁岩・赤色斑粒を含む	肌褐色	良	
330	SX76-3	甕	23	4/5	11.9	ナデ	ナデ	φ4mm以下の石英・長石・チャ ート・頁岩・赤色斑粒を含む	橙茶褐色	良	
331	SX76-3	甕	22	1/4	9	細ハケ+ ナデ	細ハケ+ ナデ	φ6.5mm以下の石英・長石・ チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡黄茶褐 色	良	
332	SX76-3	甕	22	1/4	6	細ハケ+ ナデ	細ハケ+ ナデ	φ3mm以下の石英・長石・チャ ート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡黄褐色	良	
333	SX76-3	甕	23.2	1/4	9.5	細ハケ+ ナデ	細ハケ+ ナデ	φ3mm以下の石英・長石・チャ ート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡肌褐色	良	
334	SX76-3	甕	26.4	1/16	6.2	細ハケ+ ナデ	細ハケ+ ナデ	φ4mm以下の石英・長石・チャ ート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡茶褐色	良	
335	SX76-3	甕	22.8	1/12	10.5	細ハケ+ ナデ	細ハケ+ ナデ	φ9mm以下の石英・長石・チャ ート・頁岩・赤色斑粒を含むが、	淡肌褐色	良	
336	SX76-3	甕	26	1/7	11.7	細ハケ+ ナデ	細ハケ+ ナデ	φ5mm以下の石英・長石・チャ ート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡肌褐色	良	
337	SX76-3	甕	23.8	9/10	23.4	細ハケ+ ナデ	細ハケ+ ナデ	φ4mm以下の石英・長石・チャ ート・頁岩・赤色斑粒を含む	茶褐色	良	2.3層接 合
338	SX76-3	甕	25.7	3/5	23	細ハケ+ ナデ	細ハケ+ ナデ	φ4mm以下の石英・長石・チャ ート・頁岩・赤色斑粒を含む	茶褐色	良	
339	SX76-3	鉢			3.6	ミガキ	ミガキ	φ3mm以下の石英・長石・チャ ート・頁岩・赤色斑粒を含む	茶褐色	良	
340	SX76-3	鉢	13.8	1/8	4	細ハケ+ ミガキ	細ハケ+ ナデ	φ2mm以下の長石・チャート・頁 岩を含む	淡肌褐色	良	
341	SX76-3	鉢	19.6	1/16	5.1	細ハケ+ ミガキ	細ハケ+ ミガキ	φ3mm以下の石英・長石・チャ ート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡褐色	良	
342	SX76-3	鉢	22	1/24	5.6	細ハケ+ ミガキ	細ハケ+ ナデ	φ2.5mm以下の長石・チャート・ 赤色斑粒を含む	淡肌褐色	良	
343	SX76-3	鉢	26	1/12	5.7	細ハケ+ ナデ	不明	φ2.5mm以下の石英・長石・ チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	肌褐色	良	
344	SX76-3	鉢	40.6	1/12	26	ミガキ	ハケ+ミ ガキ	φ3mm以下の石英・長石・チャ ート・頁岩を含む	淡黄褐色	良	
345	SX76-3	壺・鉢 底部	10.4	9/10	4.9	不明	不明	φ7mm以下の石英・長石・チャ ート・頁岩・赤色斑粒を含む	明茶褐色	良	
346	SX76-3	壺・鉢 底部	8.6	2/3	6.4	ミガキ	細ハケ+ ナデ	φ10mm以下の石英・長石・雲母・ チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡茶褐色	良	
347	SX76-3	壺・鉢 底部	10.8	1/2	4.5	ミガキ	ミガキ	φ4mm以下の石英・長石・雲母・ チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	灰褐色 濃褐色	良	
348	SX76-3	壺・鉢 底部	7.6	1/4	9.2	ミガキ	不明	φ6mm以下の石英・長石・チャ ート・頁岩・赤色斑粒を含む	黒灰色 赤褐色	良	
349	SX76-3	壺・鉢 底部	8.4	4/5	8.5	ハケ+ミ ガキ	ハケ+ミ ガキ	φ5mm以下の石英・長石・雲母・ チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	橙灰褐色	良	
350	SX76-3	壺・鉢 底部	9.2	1/2	6.9	細ハケ+ ミガキ	ミガキ	φ10mm以下の石英・長石・チャ ート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡赤褐色	良	

351	SX76-3	壺・鉢 底部	8	3/4	6.1	細ハケ+ ミガキ	ミガキ	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡茶褐色	良
352	SX76-3	壺・鉢 底部	8.8	1/5	7	不明	不明	φ4mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡褐色	良
353	SX76-3	壺・鉢 底部	10.7	1/3	5	不明	不明	φ8mm以下の石英・長石・雲母・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡灰褐色	やや 不良
354	SX76-3	壺・鉢 底部	7.2	1	4.9	不明	不明	φ6mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡褐色	良
355	SX76-3	壺・鉢 底部	6.8	2/3	6.7	ミガキ	細ハケ+ ナデ	φ4mm以下の石英・長石・雲母・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	黄茶褐色 淡橙褐色	やや 不良
356	SX76-3	壺・鉢 底部	8.4	1/2	5.5	不明	不明	φ7mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡灰褐色	やや 不良
357	SX76-3	壺・鉢 底部	12.2	4/5	6.7	細ハケ+ ミガキ	細ハケ+ ミガキ	φ9mm以下の石英・長石・雲母・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡茶褐色	良
358	SX76-3	壺・鉢 底部	13.6	1/6	12.5	不明	不明	φ5mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡茶褐色 黒灰色	良
359	SX76-3	甕底部	8.2	1	4.3	ハケ+ナ デ	細ハケ+ ナデ	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	橙褐色 灰褐色	良
360	SX76-3	甕底部	6.5	7/10	6.2	ナデ	細ハケ+ ナデ	φ9mm以下の石英・長石・雲母・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡赤褐色 淡茶褐色	良
361	SX76-3	甕底部	8	1/2	4	細ハケ+ ナデ	細ハケ+ ナデ	φ2mm以下の石英・長石・チャート・頁岩を含む	淡茶褐色	良
362	SX76-3	甕底部	8.2	1	5.4	細ハケ+ ナデ	細ハケ+ ナデ	φ4mm以下の石英・長石・雲母・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡黄灰褐色	良
363	SX76-3	甕底部	8.8	4/5	5.1	細ハケ+ ナデ	不明	φ8mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	橙褐色	良
364	SX76-3	甕底部	10.2	1	9.5	細ハケ+ ナデ	細ハケ+ ナデ	φ7mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡茶褐色	良
365	SX60-1	壺	15.8	1/5	3.2	細ハケ+ ミガキ	細ハケ+ ミガキ	φ4mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡褐色	良
366	SX60-1	壺	14.8	4/5	6.6	ミガキ	ミガキ	φ4mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡茶褐色	良
367	SX60-1	壺	13.1	1/9	6.3	不明	不明	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡橙褐色	やや 不良
368	SX60-1	壺	15.6	1/7	4	細ハケ+ ミガキ	ミガキ	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡褐色	良
369	SX60-1	壺	16	1/8	4.5	細ハケ+ ミガキ	ミガキ	φ2mm以下の石英・長石・チャート・頁岩を含む	淡褐色	良
370	SX60-1	壺	14	1/6	4.7	ミガキ	不明	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	黄褐色	良
371	SX60-1	壺	15.4	1/6	7.8	細ハケ+ ミガキ	ミガキ	φ5mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	茶褐色 淡褐色	良
372	SX60-1	壺	18.4	1/5	10.7	不明	不明	φ2mm以下の石英・長石・雲母・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡桃褐色	良
373	SX60-1	壺	16	3/8	10	細ハケ+ ミガキ	ミガキ	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩を含む	暗茶褐色	良
374	SX60-1	壺	15.2	1/3	9.1	細ハケ+ ミガキ	細ハケ+ ミガキ	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡褐色	良
375	SX60-1	壺	17.4	1/2	4.5	ミガキ	ミガキ	φ4mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡桃褐色	良
376	SX60-1	壺	17.4	1	7.7	細ハケ+ ミガキ	細ハケ+ ミガキ	φ4mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡褐色	良
377	SX60-1	壺	16	1/2	6	ミガキ	ミガキ	φ4mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡褐色 茶褐色	良
378	SX60-1	壺	18.7	1/4	2.5	不明	不明	φ4mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	茶褐色 淡桃褐色	良

379	SX60-1	壺	20.4	1/16	4.4	ミガキ	ミガキ	φ6mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡茶褐色	良	
380	SX60-1	壺	19.8	1/5	1.7	不明	不明	φ4mm以下の石英・長石・雲母・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡茶褐色	良	
381	SX60-1	壺			4	ミガキ	細ハケ+ミガキ	φ3mm以下の石英・長石・赤色斑粒を含む	淡赤褐色	良	頸径13.5
382	SX60-1	壺			3.95	細ハケ+ミガキ	ミガキ	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡茶褐色	良	頸径12.2
383	SX60-1	壺			6.4	細ハケ+ミガキ	ミガキ	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	灰褐色 暗灰色	良	頸径6.4
384	SX60-1	壺			2.6	細ハケ+ミガキ	ナデ	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡茶褐色	良	
385	SX60-1	壺	9.6	1/4	15.7	不明	不明	φ8mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡赤褐色	やや不良	
386	SX60-1	壺	19	1/8	5.4	ミガキ	ミガキ	φ4mm以下の石英・長石・チャート・頁岩を含む	淡褐色	良	
387	SX60-1	壺	17.6	9/10	9.9	ミガキ	ミガキ	φ4mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡褐色	良	
388	SX60-1	壺	18.4	1/6	5.2	ミガキ	不明	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	橙褐色 淡褐色	良	
389	SX60-1	壺	16	1/4	13.3	細ハケ+ミガキ	細ハケ+ミガキ	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩を含む	茶褐色	良	
390	SX60-1	壺	14	3/4	12.4	ハケ+ミガキ	細ハケ+ミガキ	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩を含む	淡茶褐色 黒灰色	良	
391	SX60-1	壺			5.7	ミガキ	ミガキ	φ4mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	茶褐色 淡桃褐色	良	
392	SX60-1	壺			9.15	ミガキ	不明	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡茶褐色	良	腹径28.3
393	SX60-1	壺			11.7	ミガキ	ミガキ	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩を含む	淡黄褐色	良	
394	SX60-1	壺	33.2	2/3	16.8	細ハケ+ミガキ	細ハケ+ミガキ	φ6mm以下の石英・長石・雲母・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡褐色	良	
395	SX60-1	壺	39.4	1/16	13	ミガキ	不明	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	灰褐色	良	
396	SX60-1	壺	35.6	1/16	5	ミガキ	ミガキ	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩を含む	淡褐色	良	
397	SX60-1	壺	39.6	1/16	7.8	不明	ミガキ	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	茶褐色	やや不良	
398	SX60-1	壺	55.5	1/4	53.1	細ハケ+ミガキ	細ハケ+ミガキ	φ5mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡茶褐色	良	
399	SX60-1	甕	20.7	1/16	16	細ハケ+ナデ	ナデ	φ4mm以下の石英・長石・雲母・チャートを含む	暗茶褐色 淡茶褐色	良	
400	SX60-1	甕	22.2	1/8	8	細ハケ+ナデ	ナデ	φ5mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	赤褐色	良	
401	SX60-1	甕	20.5	1/12	17.9	細ハケ+ナデ	細ハケ+ナデ	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡黄灰褐色	良	
402	SX60-1	甕	28.2	1/6	16.7	細ハケ+ナデ	ナデ	φ4mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡橙色 灰褐色	良	
403	SX60-1	甕	28.6	1/10	7.6	不明	細ハケ+ナデ	φ3mm以下の石英・長石・雲母・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡褐色 橙褐色	良	
404	SX60-1	甕	41.6	1/12	11.6	不明	不明	φ5mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	黄褐色 淡褐色	良	
405	SX60-1	甕	36.9	1/6	36.9	細ハケ+ミガキ	細ハケ+ミガキ	φ10mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡茶褐色	良	
406	SX60-1	甕	18.8	1/8	4.7	不明	不明	φ4mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡茶灰色	良	

407	SX60-1	甕	19.2	1/16	9.2	ハケ+ナ デ	不明	φ4mm以下の石英・長石・チャー ト・頁岩・赤色斑粒を含む	黒褐色 灰褐色	良	
408	SX60-1	甕	23	1/12	5.4	細ハケ+ ナデ	細ハケ+ ナデ	φ5mm以下の石英・長石・チャー ト・頁岩・赤色斑粒を含む	淡茶褐色	良	
409	SX60-1	甕	21.6	1/6	10	細ハケ+ ナデ	ナデ	φ3mm以下の石英・長石・チャー ト・頁岩・赤色斑粒を含む	黄茶褐色 暗茶褐色	良	
410	SX60-1	甕	21.6	1/6	10.7	細ハケ+ ナデ	ナデ	φ7mm以下の石英・長石・チャー ト・頁岩・赤色斑粒を含む	灰褐色 黄褐色	良	
411	SX60-1	甕	21	1/12	5.9	細ハケ+ ナデ	不明	φ3mm以下の石英・長石・チャー ト・頁岩・赤色斑粒を含む	茶褐色 淡褐色	良	
412	SX60-1	甕	23	5/6	13.2	ハケ+ナ デ	ナデ	φ4mm以下の石英・長石・チャー ト・頁岩を含む	淡赤褐色	やや 不良	
413	SX60-1	甕	23.4	1/10	4.4	細ハケ+ ナデ	ナデ	φ4mm以下の石英・長石・チャー ト・頁岩・赤色斑粒を含む	茶褐色 桃褐色	良	
414	SX60-1	甕	24.6	1/5	7	細ハケ+ ナデ	ナデ	φ4mm以下の石英・長石・チャー ト・頁岩・赤色斑粒を含む	淡褐色	良	
415	SX60-1	壺	13.6	1/2	11.4	細ハケ+ ナデ	ナデ	φ4mm以下の石英・長石・チャー ト・頁岩・赤色斑粒を含む	淡茶褐色	良	
416	SX60-1	甕	16	1/5	12.5	細ハケ+ ナデ	ナデ	φ4mm以下の石英・長石・チャー ト・頁岩・赤色斑粒を含む	淡茶褐色 淡桃褐色	良	
417	SX60-1	甕	23.4	1/10	5.7	細ハケ+ ナデ	細ハケ+ ナデ	φ4mm以下の石英・長石・チャー ト・頁岩を含む	黒褐色 淡褐色	良	
418	SX60-1	甕	23.4	2/3	25.3	細ハケ+ ナデ	細ハケ+ ナデ	φ5mm以下の石英・長石・チャー ト・頁岩を含む	淡茶褐色	良	
419	SX60-1	甕	21.5	3/4	9	ナデ	ナデ	φ3mm以下の長石・雲母・カクセ ン石を含む	暗茶褐色	良	生駒西麓 産
420	SX60-1	甕	21	1/8	7	細ハケ+ ナデ	不明	φ3mm以下の石英・長石・チャー ト・頁岩を含む	暗褐色 茶褐色	良	
421	SX60-1	甕	20.6	1/8	13	不明	不明	φ4mm以下の石英・長石・チャー ト・頁岩・赤色斑粒を含む	淡褐色	良	
422	SX60-1	甕	25.1	1/10	6.7	細ハケ+ ナデ	ナデ	φ3.5mm以下の石英・長石・ チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡褐色 淡桃褐色	良	
423	SX60-1	甕	25	1/6	14	細ハケ+ ナデ	不明	φ4mm以下の石英・長石・チャー ト・頁岩・赤色斑粒を含む	暗茶褐色	良	
424	SX60-1	甕	25.1	1/6	8.2	細ハケ+ ナデ	ナデ	φ4mm以下の石英・長石・雲母・ チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡茶褐色 淡褐色	良	
425	SX60-1	甕	30	1/9	10.7	細ハケ+ ナデ	細ハケ+ ナデ	φ4.5mm以下の石英・長石・ チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡茶褐色	良	
426	SX60-1	甕	27	1/3	8.2	ハケ+ナ デ	細ハケ+ ナデ	φ3mm以下の石英・長石・チャー ト・頁岩・赤色斑粒を含む	茶褐色	良	
427	SX60-1	鉢			8	不明	不明	φ2mm以下の石英・長石・チャー ト・頁岩・赤色斑粒を含む	暗茶褐色	良	
428	SX60-1	鉢	15.4	1/8	5	不明	不明	φ3mm以下の石英・長石・チャー ト・頁岩・赤色斑粒を含む	淡茶褐色	良	
429	SX60-1	鉢	27.2	1/5	8	細ハケ+ ミガキ	細ハケ+ ミガキ	φ5mm以下の石英・長石・チャー ト・頁岩・赤色斑粒を含む	淡橙褐色 明灰色	良	
430	SX60-1	鉢	18.6	1/16	7	ナデ	ミガキ	φ3mm以下の石英・長石・チャー ト・頁岩を含む	黒色 淡褐色	良	
431	SX60-1	鉢	19.4	1/10	5.3	細ハケ+ ナデ	不明	φ4mm以下の石英・長石・チャー ト・頁岩・赤色斑粒を含む	黒褐色 茶褐色	良	
432	SX60-1	鉢	22	1/2	9.1	不明	不明	φ4mm以下の石英・長石・チャー ト・頁岩・赤色斑粒を含む	淡赤褐色	良	
433	SX60-1	鉢	25.6	1/12	9.4	ミガキ	細ハケ+ ナデ	φ5mm以下の石英・長石・チャー ト・頁岩・赤色斑粒を含む	淡褐色 茶褐色	良	
434	SX60-1	鉢	34.2	1/16	8.3	細ハケ+ ミガキ	ミガキ	φ3mm以下の石英・長石・雲母・ チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡黒褐色 淡褐色	良	

435	SX60-1	鉢	36.6	1/12	9.4	細ハケ+ ミガキ	細ハケ+ ミガキ	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡褐色	良
436	SX60-1	鉢	36.8	1/12	6.35	不明	不明	φ6mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡褐色	良
437	SX60-1	鉢	36.7	1/8	12	不明	不明	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡褐色	良
438	SX60-1	鉢	44	1/3	14.8	細ハケ+ ミガキ	細ハケ+ ミガキ	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡褐色	良
439	SX60-1	鉢	46.4	1/16	6	ミガキ	不明	φ7mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	黒褐色 淡褐色	良
440	SX60-1	壺・鉢 底部	3.4	1	1.6	ミガキ	不明	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	黄褐色 淡褐色	良
441	SX60-1	壺・鉢 底部	7.4	1/2	2.25	不明	ナデ	φ4mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	暗茶褐色 淡茶褐色	良
442	SX60-1	甕底部	6.4	3/4	29.5	ナデ	ナデ	φ4mm以下の石英・長石・雲母・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	橙褐色 淡褐色	良
443	SX60-1	壺・鉢 底部	7.2	1/2	3	不明	不明	φ4mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	明褐色 橙色	良
444	SX60-1	壺・鉢 底部	7.6	1/2	2.9	不明	不明	φ5mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	黄褐色 灰色	良
445	SX60-1	壺・鉢 底部	6.7	1/2	3.45	ミガキ	ナデ	φ4mm以下の石英・長石・雲母・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	暗茶褐色	良
446	SX60-1	壺・鉢 底部	9.2	1	5.5	不明	不明	φ6mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡褐色	良
447	SX60-1	壺・鉢 底部	13.6	1/3	3.8	不明	不明	φ5mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	灰色 濃褐色	良
448	SX60-1	壺・鉢 底部	8.8	4/5	6.6	ハケ+ミ ガキ	不明	φ4mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	褐色 淡褐色	良
449	SX60-1	壺・鉢 底部	8.6	1/2	3.3	不明	不明	φ5mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡茶褐色 淡褐色	良
450	SX60-1	壺・鉢 底部	12.2	1	5.3	不明	不明	φ6mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡褐色	良
451	SX60-1	壺・鉢 底部	9.6	9/10	4.1	細ハケ+ ナデ	不明	φ5mm以下の石英・長石・雲母・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	暗褐色 橙褐色	良
452	SX60-1	壺・鉢 底部	8.3	1/3	7.5	ハケ+ミ ガキ	不明	φ6mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	黒褐色	良
453	SX60-1	壺・鉢 底部	7.7	2/3	5.3	不明	ナデ	φ10mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	橙褐色	良
454	SX60-1	壺・鉢 底部	9.2	7/10	5.4	不明	不明	φ5mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡橙灰色 灰色	良
455	SX60-1	壺・鉢 底部	7.6	1/3	4.1	不明	ミガキ	φ4mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	茶褐色 灰褐色	良
456	SX60-1	壺・鉢 底部	6.6	1/2	7.1	不明	ミガキ	φ5mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡桃灰色 黒灰色	良
457	SX60-1	壺・鉢 底部	8	4/5	16.7	細ハケ+ ミガキ	ミガキ	φ2mm以下の石英・長石・チャート・頁岩を含む	淡黄褐色 黒色	良
458	SX60-1	壺・鉢 底部	7.2	1/4	7.3	不明	不明	φ6mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	明橙褐色 褐色	良
459	SX60-1	壺・鉢 底部	7	1	10.7	ミガキ	細ハケ+ ミガキ	φ5mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡黄褐色	良
460	SX60-1	甕底部	6.6	1/4	2.9	ナデ	ナデ	φ4mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	暗褐色 暗灰褐色	良
461	SX60-1	甕底部	5	1/4	3	不明	不明	φ4mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡褐色 淡桃褐色	良
462	SX60-1	甕底部	9.7	1/5	4.6	不明	不明	φ4mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	橙灰色 淡黄褐色	良

463	SX60-1	甕底部	8.3	3/5	5.3	細ハケ+ ナデ	細ハケ+ ナデ	φ5mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	暗褐色	良	
464	SX60-1	甕底部	6.8	1/4	4.2	不明	不明	φ3mm以下の石英・長石・雲母・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡橙褐色	良	
465	SX60-1	甕底部	7.6	1/2	4.5	細ハケ+ ナデ	細ハケ+ ナデ	φ4mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡褐色	良	
466	SX60-1	甕底部	7.9	2/3	4	細ハケ+ ナデ	ナデ	φ9mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡褐色	良	
467	SX60-1	甕底部	6.2	4/5	5.6	不明	不明	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	橙褐色 桃灰色	良	
468	SX60-1	甕底部	6.4	3/4	2.8	細ハケ+ ナデ	不明	φ4mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	橙褐色	良	
469	SX60-1	甕底部	10	1/5	3.6	細ハケ+ ナデ	ナデ	φ5mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	明橙褐色	良	
470	SX60-1	甕底部	7.7	1/5	4.3	不明	不明	φ5mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	暗橙褐色 淡黄褐色	良	
471	SX60-1	甕底部	6.2	1/2	2.4	不明	不明	φ4mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	橙褐色 茶褐色	良	
472	SX60-1	甕底部	7.8	1	3.6	ハケ+ナ デ	ハケ+ナ デ	φ5mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	黒色 淡橙灰色	良	
473	SX60-1	甕底部	8.6	1/4	4.6	ハケ+ナ デ	ナデ	φ4mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	褐色 暗褐色	良	
474	SX60-1	甕底部	7.1	1/7	6.5	ナデ	細ハケ+ ナデ	φ4mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	橙褐色 淡黄褐色	良	
475	SX60-1	甕底部	11	1/6	6.7	不明	不明	φ5mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	橙褐色	良	
476	SX60-1	甕底部	8.4	1/3	6.3	ナデ	不明	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	明橙褐色 淡桃色	良	
477	SX60-1	甕底部	7.8	1	6.35	不明	不明	φ5mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	橙褐色 茶褐色	良	
478	SX60-2	壺	15.1	1/8	3.5	ミガキ	ミガキ	φ8mm以下の石英・長石・チャートを含む	淡黄灰色	良	
479	SX60-2	壺	14	1/12	4.7	不明	不明	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡黄灰褐色	良	
480	SX60-2	壺	13.2	1/2	7	ミガキ	ミガキ	φ2mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	暗橙褐色	良	
481	SX60-2	壺	12.4	1/4	5.6	細ハケ+ ミガキ	細ハケ+ ミガキ	φ2mm以下の石英・長石・雲母・チャート・頁岩を含む	黄茶褐色	良	
482	SX60-2	壺			4.8	細ハケ+ ミガキ	ミガキ	φ3mm以下の石英・長石・頁岩・赤色斑粒を含む	茶褐色	良	頸径14
483	SX60-2	壺	34.6	1/10	5.3	ミガキ	ミガキ	φ5mm以下の石英・長石・雲母・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	茶褐色	良	
484	SX60-2	壺	40.8	1/16	6.2	細ハケ+ ミガキ	細ハケ+ ミガキ	φ5mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	明桃灰色	良	
485	SX60-2	壺	14.2	1/8	5.5	不明	不明	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡黄灰色	良	
486	SX60-2	壺	15.6	1/8	5.2	細ハケ+ ミガキ	ミガキ	φ5mm以下の石英・長石・頁岩・赤色斑粒を含む	橙茶褐色	良	
487	SX60-2	壺			5.9	細ハケ+ ミガキ	ミガキ	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩を含む	淡褐色	良	
488	SX60-2	壺	15.8	1/5	4.7	ミガキ	ミガキ	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	橙茶褐色	良	
489	SX60-2	壺	14.8	1/32	7.7	細ハケ+ ミガキ	細ハケ+ ミガキ	φ2mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡黄茶褐色 黒灰色	良	
490	SX60-2	壺				ミガキ	ナデ	φ2mm以下の石英・長石・チャートを含む	橙褐色	良	

491	SX60-2	壺			5.9	細ハケ+ ミガキ	ナデ	φ4mm以下の石英・長石・チャートを含む	暗灰色 淡灰褐色	良	頸径12.6
492	SX60-2	壺			10.8	細ハケ+ ミガキ	ナデ	φ5mm以下の石英・長石・チャート・赤色斑粒を含む	暗灰褐色 淡灰褐色	良	腹径24.6
493	SX60-2	壺			6.7	ミガキ	ミガキ	φ4mm以下の石英・長石・チャート・赤色斑粒を含む	淡灰褐色	良	腹径30.8
494	SX60-2	壺	15.4	1	14.4	細ハケ+ ミガキ	細ハケ+ ミガキ	φ5mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	暗橙褐色	良	
495	SX60-2	壺	15.4	1/3	28.5	細ハケ+ ミガキ	細ハケ+ ミガキ	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡褐色	良	
496	SX60-2	甕	17.8	1/6	6.5	ナデ	細ハケ+ ナデ	φ3mm以下の石英・長石・チャート・赤色斑粒を含む	淡灰褐色	良	
497	SX60-2	甕	17.2	1/9	7.6	細ハケ+ ナデ	ナデ	φ3mm以下の石英・長石・雲母・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡褐色	良	
498	SX60-2	甕	20.2	1/4	6.5	細ハケ+ ナデ	ナデ	φ4mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	黄茶褐色 淡黄色	良	
499	SX60-2	甕	18	1/12	6.7	ナデ	細ハケ+ ナデ	φ3.5mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡茶灰色 暗茶灰色	良	
500	SX60-2	甕	20.6	1/8	4.4	ハケ+ナ デ	不明	φ4mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡橙褐色	良	
501	SX60-2	甕	18.8	1/10	6.9	細ハケ+ ナデ	ナデ	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡褐色	良	
502	SX60-2	甕	20	1/3	11.9	細ハケ+ ナデ	細ハケ+ ナデ	φ3mm以下の石英・長石・雲母・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡茶褐色 淡黄灰色	良	
503	SX60-2	甕	21	1/16	7.9	細ハケ+ ナデ	細ハケ+ ナデ	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡茶褐色	良	
504	SX60-2	甕	5.1	1/6	5.1	ナデ	ナデ	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩を含む	淡褐色	良	
505	SX60-2	甕	23	1/10	11	細ハケ+ ナデ	ナデ	φ3mm以下の石英・長石・雲母・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	茶褐色 桃褐色	良	
506	SX60-2	甕	21	9/10	26.1	細ハケ+ ナデ	細ハケ+ ナデ	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡茶褐色	良	
507	SX60-2	甕	22	1/12	12.9	細ハケ+ ナデ	細ハケ+ ナデ	φ2mm以下の石英・長石・雲母・チャート・頁岩を含む	淡灰褐色 淡黄褐色	良	
508	SX60-2	甕	21.6	1/9	5.55	細ハケ+ ナデ	ナデ	φ4mm以下の石英・長石・雲母・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	暗灰褐色 淡灰褐色	良	
509	SX60-2	甕	23.2	1/16	8	細ハケ+ ナデ	細ハケ+ ナデ	φ6.5mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡茶灰色	良	
510	SX60-2	甕	23.6	1/7	6.7	細ハケ+ ナデ	不明	φ3mm以下の石英・長石・雲母・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡茶灰色	良	
511	SX60-2	甕	23.4	1/10	5	細ハケ+ ナデ	ナデ	φ3mm以下の石英・長石・チャート・赤色斑粒を含む	淡褐色	良	
512	SX60-2	甕	23.4	1/16	6.2	細ハケ+ ナデ	ナデ	φ4mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡褐色	良	
513	SX60-2	鉢	26.8	1/16	4.9	不明	不明	φ3mm以下の石英・長石・雲母・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	灰褐色 淡褐色	良	
514	SX60-2	甕	32.4	1/12	9.4	細ハケ+ ナデ	細ハケ+ ナデ	φ5mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡桃褐色 淡灰褐色	良	
515	SX60-2	鉢	12	1/8	3	ミガキ	不明	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩を含む	橙褐色	良	
516	SX60-2	鉢	11.7	1/7	3.7	細ハケ+ ナデ	ナデ	φ7mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡黄褐色	良	
517	SX60-2	鉢	19.2	1/12	5.6	不明	細ハケ+ ナデ	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	茶灰色 淡茶褐色	良	
518	SX60-2	鉢	35	1/12	10.5	細ハケ+ ミガキ	細ハケ+ ミガキ	φ4mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡褐色 黒灰色	良	

519	SX60-2	鉢	36.1	1/16	6.2	ミガキ	ミガキ	φ3.5mm以下の石英・長石・チャート・頁岩を含む	淡褐色	良
520	SX60-2	壺・鉢底部	7	1	2.4	ミガキ	ナデ	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩を含む	淡黄褐色	良
521	SX60-2	壺・鉢底部	8.4	1/3	2.9	ミガキ	ナデ	φ2mm以下の石英・長石・チャート・頁岩を含む	黄褐色	良
522	SX60-2	壺・鉢底部	8.8	1/2	3.2	不明	不明	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡黄褐色 灰色	良
523	SX60-2	壺・鉢底部	7.8	1	6.4	不明	不明	φ4mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	橙褐色 淡灰色	良
524	SX60-2	甕底部	7	1	4	不明	不明	φ4mm以下の石英・長石・チャート・頁岩を含む	茶褐色 淡茶褐色	良
525	SX60-2	甕底部	10.3	1/5	3.7	ナデ	ナデ	φ2mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡黄褐色 淡茶褐色	良
526	SX60-2	甕底部	7	1	4	ミガキ	ナデ	φ2mm以下の石英・長石・チャート・頁岩を含む	橙褐色 茶褐色	良
527	SX60-2	甕底部	7.4	1	7.4	ハケ+ナデ	ナデ	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩を含む	淡橙褐色 淡黄褐色	良
528	SX60-2	甕底部	7.6	1	9.8	ハケ+ナデ	ナデ	φ4mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡橙褐色	良
529	SX60-3	壺	6	3/4	6	細ハケ+ミガキ	細ハケ+ミガキ	φ2mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡黄褐色	良
530	SX60-3	壺	13	1/5	2.9	細ハケ+ミガキ	ミガキ	φ4mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡黄色	良
531	SX60-3	壺	13	1/12	2.5	ミガキ	ミガキ	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩を含む	淡褐色 暗灰褐色	良
532	SX60-3	壺	14	1/5	3.3	ミガキ	ミガキ	φ2mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡褐色	良
533	SX60-3	壺	16	1/6	5.7	不明	不明	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩を含む	淡灰白色	良
534	SX60-3	壺	17.4	1/7	4	細ハケ+ミガキ	細ハケ+ミガキ	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩を含む	暗褐色 淡褐色	良
535	SX60-3	壺	13.2	1/6	4.1	ミガキ	ミガキ	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡茶褐色 暗灰褐色	良
536	SX60-3	壺	13	1/12	4.3	細ハケ+ミガキ	ミガキ	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡褐色	良
537	SX60-3	壺	14.3	1/3	4	細ハケ+ミガキ	細ハケ+ミガキ	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	茶褐色 淡黄褐色	良
538	SX60-3	壺	16.6	1/24	4	ミガキ	ミガキ	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡黄褐色	良
539	SX60-3	壺	17	1/24	4.2	細ハケ+ミガキ	ミガキ	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩を含む	淡茶灰色 暗灰色	良
540	SX60-3	壺	14.7	1/8	5.1	細ハケ+ミガキ	ミガキ	φ2.5mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡橙褐色	良
541	SX60-3	壺	15	1/8	4.1	ミガキ	ミガキ	φ4.5mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡桃褐色	良
542	SX60-3	壺	16.6	1/9	4	細ハケ+ミガキ	細ハケ+ミガキ	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩を含む	淡黄褐色	良
543	SX60-3	壺	31	1/24	8.2	ミガキ	ミガキ	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	暗褐色 淡褐色	良
544	SX60-3	壺	40.7	1/10	5.65	ミガキ	ミガキ	φ4mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡橙褐色	良
545	SX60-3	壺	44	1/8	7	細ハケ+ミガキ	ミガキ	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡茶褐色	良
546	SX60-3	壺	46	1/8	7.2	ミガキ	ミガキ	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	青灰褐色 暗灰褐色	良

547	SX60-3	壺	16	1/5	4.8	細ハケ+ ミガキ	細ハケ+ ミガキ	φ4mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	橙褐色 黄褐色	良
548	SX60-3	壺	15.4	1/8	5	不明	ミガキ	φ3mm以下の石英・長石・雲母・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡橙灰色	良
549	SX60-3	壺	15.2	1/4	8.1	細ハケ+ ナデ	細ハケ+ ナデ	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	褐色	良
550	SX60-3	壺			6.1	ミガキ	細ハケ+ ミガキ	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡褐色 灰褐色	良
551	SX60-3	壺			8	ミガキ	細ハケ+ ミガキ	φ2mm以下の石英・長石・チャート・頁岩を含む	黒色 淡褐色	良
552	SX60-3	壺	14	1/3	8.6	ミガキ	ミガキ	φ5mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡黄褐色	良
553	SX60-3	壺	13.2	1/4	11.6	細ハケ+ ミガキ	細ハケ+ ミガキ	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡黄褐色	良
554	SX60-3	壺			4	細ハケ+ ミガキ	ナデ	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡灰褐色	良
555	SX60-3	壺			6.8	細ハケ+ ミガキ	細ハケ+ ミガキ	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩を含む	黒色 淡褐色	良
556	SX60-3	甕	19.6	1/8	6.8	細ハケ+ ナデ	細ハケ+ ナデ	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	灰褐色 淡茶褐色	良
557	SX60-3	甕	22.8	1/7	5.3	不明	ナデ	φ4mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡黄灰色	良
558	SX60-3	甕	24	1/10	3.5	細ハケ+ ナデ	細ハケ+ ナデ	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩を含む	淡褐色	良
559	SX60-3	甕	26.2	1/9	11.3	ハケ+ナ デ	ナデ	φ4mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	橙褐色 茶褐色	良
560	SX60-3	甕	30.2	1/16	5.4	ナデ	ナデ	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡灰褐色	良
561	SX60-3	鉢	27.8	1/32	4.3	ミガキ	不明	φ3.5mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	橙褐色	良
562	SX60-3	鉢	27.5	1/24	5.3	不明	ミガキ	φ5mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡褐色 淡橙褐色	良
563	SX60-3	鉢	33.4	1/9	5.3	ミガキ	ミガキ	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩を含む	淡褐色	良
564	SX60-3	鉢	35.5	1/32	5.3	ミガキ	ナデ	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡褐色	良
565	SX60-3	壺・鉢 底部	8.1	1	2.2	不明	不明	φ5mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	褐色 橙色	良
566	SX60-3	壺・鉢 底部	8.6	2/3	4.6	細ハケ+ ミガキ	不明	φ5mm以下の石英・長石・チャート・頁岩を含む	淡黄褐色 暗灰色	良
567	SX60-3	壺・鉢 底部	5.6	3/4	1.9	ミガキ	細ハケ+ ナデ	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡黄褐色	良
568	SX60-3	壺・鉢 底部	8.2	1	7.8	不明	不明	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩を含む	淡桃灰色 淡黄灰色	良
569	SX60-3	壺・鉢 底部	8.2	1	2.2	ナデ	不明	φ4mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	橙灰色 淡黄灰色	良
570	SX60-3	壺・鉢 底部	7	1/4	5.2	ナデ	不明	φ5mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	橙褐色 淡茶褐色	良
571	SX60-3	甕底部	8.4	1	7	ハケ+ナ デ	ナデ	φ5mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡橙褐色 茶褐色	良
572	SX60-3	甕底部	8	1/2	15.2	ハケ+ナ デ	不明	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡黄褐色	良
573	SX60-3	甕底部	8.6	1	7	ハケ+ナ デ	ナデ	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡橙褐色 茶褐色	良
574	SX60-3	甕底部	7	1	14	細ハケ+ ナデ	ナデ	φ6mm以下の石英・長石・チャート・頁岩を含む	淡褐色	良

575	SX60-3	甕底部	5.2	1	3	ハケ+ナ デ	ナデ	φ5mm以下の石英・長石・チャ ート・頁岩を含む	淡褐色	良	
576	SX60-3	壺・鉢 底部	8.6	2/3	4.6	不明	不明	φ5mm以下の石英・長石・チャ ート・頁岩を含む	茶褐色 淡褐色	良	
577	SX60-3	甕底部	6	1/3	3.1	不明	不明	φ5mm以下の石英・長石・チャ ート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡桃褐色	良	
578	SX60-4	壺	5	1	3.6	ミガキ	ミガキ	φ3mm以下の石英・長石・チャ ート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡褐色	良	
579	SX60-4	壺	8	1	11.5	細ハケ+ ミガキ	細ハケ+ ミガキ	φ2mm以下の石英・長石・チャ ート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡黄褐色	良	
580	SX60-4	壺	12.5	1/12	3.3	ミガキ	ミガキ	φ2mm以下の石英・長石・チャ ート・頁岩・赤色斑粒を含む	明桃灰色	良	
581	SX60-4	壺	14.2	1/36	5	細ハケ+ ミガキ	細ハケ+ ミガキ	φ5mm以下の石英・長石・チャ ート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡褐色	良	
582	SX60-4	壺	13	1/6	3.2	細ハケ+ ミガキ	細ハケ+ ミガキ	φ3mm以下の石英・長石・チャ ート・頁岩・赤色斑粒を含む	暗茶灰色	良	
583	SX60-4	壺	13	1	4.8	細ハケ+ ミガキ	細ハケ+ ミガキ	φ3mm以下の石英・長石・チャ ート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡褐色	良	
584	SX60-4	壺	14.4	1/5	3.95	細ハケ+ ミガキ	細ハケ+ ミガキ	φ3mm以下の石英・長石・チャ ート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡褐色	良	
585	SX60-4	壺	16	1/6	4.6	ミガキ	ミガキ	φ3.5mm以下の石英・長石・ チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡茶褐色	良	
586	SX60-4	壺	13.6	3/4	5.9	不明	不明	φ3mm以下の石英・長石・雲母・ チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	橙茶褐色	良	
587	SX60-4	壺	16	1/4	7	細ハケ+ ミガキ	ミガキ	φ3mm以下の石英・長石・チャ ート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡褐色	良	
588	SX60-4	壺	18	1/2	8	細ハケ+ ミガキ	細ハケ+ ミガキ	φ3mm以下の石英・長石・チャ ート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡灰褐色	良	
589	SX60-4	壺	16.2	1/2	6.8	ミガキ	ミガキ	φ4mm以下の石英・長石・チャ ート・頁岩・赤色斑粒を含む	黄褐色	良	
590	SX60-4	壺	16.8	1/4	8.8	細ハケ+ ミガキ	ミガキ	φ4mm以下の石英・長石・チャ ート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡茶褐色 淡茶灰色	良	
591	SX60-4	壺			6	細ハケ+ ミガキ	細ハケ+ ミガキ	φ3mm以下の石英・長石・チャ ート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡桃褐色 淡褐色	良	
592	SX60-4	壺			7.9	細ハケ+ ミガキ	細ハケ+ ミガキ	φ5mm以下の石英・長石・チャ ート・頁岩・赤色斑粒を含む	黒褐色 淡褐色	良	
593	SX60-4	壺			6.2	細ハケ+ ミガキ	細ハケ+ ミガキ	φ4mm以下の石英・長石・チャ ート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡灰白色	良	
594	SX60-4	壺			6.8	細ハケ+ ミガキ	細ハケ+ ミガキ	φ4mm以下の石英・長石・チャ ート・頁岩を含む	褐色	良	
595	SX60-4	壺			9.7	細ハケ+ ナデ	細ハケ+ ナデ	φ4.5mm以下の石英・長石・ チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡黄褐色	良	頸径13.1
596	SX60-4	壺			5.3	ハケ+ミ ガキ	細ハケ+ ミガキ	φ4mm以下の石英・長石・チャ ート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡灰褐色	良	
597	SX60-4	壺			14.6	ミガキ	不明	φ7mm以下の石英・長石・雲母・ チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡茶褐色	良	
598	SX60-4	甕	24	5/6	19.2	ハケ+ナ デ	ナデ	φ3mm以下の石英・長石・チャ ート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡茶褐色	良	
599	SX60-4	甕	22	1/6	13.4	細ハケ+ ナデ	ナデ	φ5mm以下の石英・長石・頁岩を 含む	淡茶褐色	良	
600	SX60-4	甕	19	1/8	3.8	細ハケ+ ナデ	ナデ	φ2mm以下の石英・長石・チャ ート・頁岩を含む	黒色 淡 褐色	良	
601	SX60-4	甕	18.4	1/7	5.3	ナデ	不明	φ4mm以下の石英・長石・チャ ート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡褐色	良	
602	SX60-4	甕	7.1	1/16	7.1	細ハケ+ ナデ	ナデ	φ3mm以下の石英・長石・チャ ート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡褐色淡 桃褐色	良	

603	SX60-4	甕	26	1/16	9.8	細ハケ+ナデ	細ハケ+ナデ	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡褐色	良	
604	SX60-4	甕	21	1/2	19.5	ハケ+ナデ	細ハケ+ナデ	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡褐色	良	
605	SX60-4	鉢	23.8	1/24	4	ミガキ	ミガキ	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡褐色	良	
606	SX60-4	鉢	25	1/16	5.7	ハケ+ミガキ	ミガキ	φ4mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡褐色	良	
607	SX60-4	鉢			12.1	不明	不明	φ5mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡橙灰色 黒色	やや 不良	
608	SX60-4	甕	21.7	2/5	13.4	ミガキ	ミガキ	φ4mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	黒褐色	良	
609	SX60-4	鉢	9.6	1/8	3.7	ミガキ	ミガキ	φ4mm以下の石英・長石・雲母・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡桃褐色	良	
610	SX60-4	鉢	11.4	1/8	4	不明	不明	φ3mm以下の石英・長石・雲母・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡桃褐色	良	
611	SX60-4	鉢	12.4	1/9	4.45	ハケ+ナデ	ナデ	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	黒褐色	良	
612	SX60-4	甕	10.8	1/3	12.7	細ハケ+ナデ	ナデ	φ2mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡黄褐色	良	
613	SX60-4	鉢	30.6	1/24	13.5	ハケ+ナデ	ミガキ	φ6mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡褐色	良	
614	SX60-4	壺・鉢 底部	10.4	1	12.3	ハケ+ナデ	ハケ+ナデ	φ4mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	黄褐色	良	
615	SX60-4	壺・鉢 底部	9.5	1	4	細ハケ+ミガキ	ナデ	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩を含む	黒褐色 淡黄褐色	良	
616	SX60-4	壺・鉢 底部	9.9	1	5.6	不明	細ハケ+ナデ	φ2mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	黒灰色 淡黄褐色	良	
617	SX60-4	壺・鉢 底部	7.8	1	6.7	不明	不明	φ4mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡黄茶褐色	良	
618	SX60-4	甕底部	8.6	1	2.3	細ハケ+ナデ	不明	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡褐色 黄褐色	良	
619	SX60-4	甕底部	7	1	2.7	細ハケ+ミガキ	ナデ	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩を含む	橙褐色 黄褐色	良	
620	SX60-4	甕底部	7.7	1	4	ハケ+ナデ	不明	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡橙灰色 橙褐色	良	
621	SX60-4	壺・鉢 底部	8.5	1	3.3	不明	不明	φ5mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡黄褐色	良	
622	SX60-4	壺・鉢 底部	7	1	4.7	不明	不明	φ3.5mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡褐色 灰褐色	良	
623	SX60-4	甕底部	8.8	1	5.1	細ハケ+ナデ	細ハケ+ナデ	φ5mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡黄茶褐色	良	
624	SX60-4	甕底部	7.8	1	7.3	ハケ+ナデ	不明	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡桃褐色 黄褐色	良	
625	SX60-5	壺	13	1/6	4.2	ミガキ	ミガキ	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	桃褐色	良	
626	SX60-5	壺	18	1/2	6.15	細ハケ+ミガキ	ミガキ	φ5mm以下の石英・長石・雲母・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡黄灰色	良	
627	SX60-5	壺	13.2	1/3	2.7	細ハケ+ミガキ	細ハケ+ミガキ	φ4mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	桃褐色	良	
628	SX60-5	甕		不明	4.2	細ハケ+ミガキ	細ハケ+ミガキ	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡褐色	良	
629	SX60-5	鉢	14.4	1/5	3.7	ナデ	ナデ	φ4mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	茶褐色 淡褐色	良	
630	SX60-5	甕			3.6	ナデ	ナデ	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	黒色 淡褐色	良	

631	SX60-5	甕	13.8	1/6	4.5	細ハケ+ ナデ	細ハケ+ ナデ	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	黒褐色 淡褐色	良	
632	SX60-5	甕	26.6	1/12	4.4	ナデ	ナデ	φ4mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡褐色	良	
633	SX60-5	甕	23.2	1/6	20.4	ハケ+ナ デ	ナデ	φ4mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡茶色	良	
634	SX60-5	甕	17.4	1/8	4.2	ハケ	ナデ	φ4mm以下の石英・長石・チャートを含む	黒褐色 明茶灰色	良	
635	SX60-5	甕	21	1/10	6.7	不明	不明	φ4mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	暗茶褐色	良	
636	SX60-5	甕	19.6	1/36	6.3	ハケ+ナ デ	ナデ	φ4mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	黒色 茶褐色	良	
637	SX60-5	甕			9.95	細ハケ+ ナデ	細ハケ+ ナデ	φ3mm以下の石英・長石・雲母・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	黄褐色	良	
638	SX60-5	鉢	20	1/16	4.7	ミガキ	ミガキ	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩を含む	淡褐色	良	
639	SX60-5	鉢	16.4	1/12	3.2	細ハケ+ ミガキ	細ハケ+ ミガキ	φ4mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡褐色	良	
640	SX60-5	壺・鉢 底部	8.3	1	6.8	ハケ+ナ デ	ナデ	φ5mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	暗茶褐色 黒色	良	
641	SX60-5	甕底部	9	1/4	4.1	ミガキ	ミガキ	φ4mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡桃色 黒色	良	
642	SX54	壺			5.7	ミガキ	細ハケ+ ミガキ	φ4mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡褐色 黒褐色	良	
643	SK74	鉢	5.3	4/5	3.7	ナデ	ナデ	φ4mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡褐色	良	
644	SK66	壺	22.8	1/3	8.2	ミガキ	不明	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡茶灰褐色	良	
645	SK74	蓋			7.1	細ハケ+ ミガキ	細ハケ+ ミガキ	φ4mm以下の石英・長石・雲母・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	褐色 淡褐色	良	摘み径 7.5
646	SK74	甕底部	6.1	2/3	6.1	ハケ+ナ デ	不明	φ5mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡橙褐色 暗灰褐色	良	
647	SK74	壺・鉢 底部	8.2	1	2.5	ミガキ	不明	φ9mm以下の石英・長石・雲母・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡褐色 灰褐色	良	
648	SK74	甕	22	1/12	5.3	細ハケ+ ナデ	細ハケ+ ナデ	φ5.5mm以下の石英・長石・雲母・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡桃褐色	良	
649	SK74	甕	21	1/12	9.15	ハケ+ナ デ	ハケ+ナ デ	φ4mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	茶褐色	良	
650	SK75	蓋	10.2	1/6	18	ナデ	不明	φ7mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡褐色	良	
651	SK75	蓋			8.4	ミガキ	不明	φ5mm以下の石英・長石・雲母・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	茶褐色	良	摘み径 7.5
652	22ト	蓋	11.5	4/5	3.8	ミガキ	ナデ	φ4mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡黄褐色 淡褐色	良	
653	SK75	壺	9.8	1/8	4.3	ミガキ	ミガキ	φ4.5mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡褐色	良	
654	SK78	壺				不明	ナデ	φ7mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡褐色	良	
655	SK84	壺	11.8	1/4	7.3	不明	不明	φ1.5mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡褐色	良	
656	SK47	壺	5.3	1	9.8	ミガキ	不明	φ4mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡褐色	良	
657	SK47	鉢	6.1	1/3	7.3	不明	不明	φ10mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	橙褐色 淡橙褐色	良	
658	SD48	壺			10	ミガキ	不明	φ4mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡褐色	良	腹径17.4

659	9㊦	甕底部	7.6	1	6.8	不明	不明	φ4mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	明茶褐色 淡褐色	良	
660	SX76-1	壺				ミガキ	不明	φ9mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡黄褐色 暗灰色	良	
661	SX76-1	壺				ミガキ	不明	φ2mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	端橙褐色 淡桃褐色	良	
662	SX76-1	壺				ミガキ	ミガキ	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡橙褐色	良	
663	SX76-1	壺				不明	不明	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡茶灰色 淡茶褐色	良	
664	SX76-1	壺				不明	不明	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩を含む	淡茶灰色	良	
665	SX76-1	壺				ミガキ	不明	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	黒褐色 淡茶褐色	良	
666	SX76-1	壺				ミガキ	不明	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩を含む	淡桃褐色	良	
667	SX76-1	壺				ミガキ	不明	φ5mm以下の石英・長石・チャート・頁岩を含む	淡灰褐色 淡茶褐色	良	
668	SX76-1	壺				不明	不明	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩を含む	橙褐色	良	
669	SX76-2	壺				ミガキ	ミガキ	φ2mm以下の石英・長石・チャートを含む	淡褐色	良	
670	SX76-2	壺				ミガキ	ミガキ	φ2mm以下の石英・長石・チャート・頁岩を含む	淡桃褐色	良	
671	SX76-2	壺				ミガキ	不明	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩を含む	淡桃褐色	良	
672	SX76-2	壺				不明	不明	φ1mm以下の石英・長石・チャート・頁岩を含む	灰褐色	良	
673	SX76-2	壺				ミガキ	不明	φ2mm以下の石英・長石を含む	淡桃褐色 暗灰色	良	
674	SX76-2	壺				ミガキ	ミガキ	φ2mm以下の石英・長石・チャート・頁岩を含む	淡茶褐色	良	
675	SX76-2	壺				不明	不明	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩を含む	淡茶褐色	良	
676	SX76-2	壺				ミガキ	ミガキ	φ7mm以下の石英・長石・雲母・チャートを含む	暗褐色	良	
677	SX76-2	壺				ナデ	ミガキ	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩を含む	暗灰褐色 暗灰色	良	
678	SX76-2	壺				ミガキ	不明	φ4mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡茶灰色 淡桃褐色	良	
679	SX76-2	壺				不明	不明	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	橙褐色 淡茶灰色	良	
680	SX76-2	壺				ミガキ	不明	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩を含む	淡茶褐色	良	
681	SX76-2	壺				不明	不明	φ4mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡茶色 黒灰色	良	
682	SX76-2	壺				ミガキ	細ハケ+ ミガキ	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡茶褐色	良	
683	SX76-2	壺				細ハケ+ ミガキ	細ハケ+ ミガキ	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡茶褐色	良	
684	SX76-3	壺				ミガキ	ミガキ	1mm以上の砂粒見られず	暗褐色 黒灰色	良	
685	SX76-3	壺				ミガキ	ミガキ	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩を含む	淡茶褐色	良	
686	SX76-3	壺				ミガキ	ミガキ	φ2mm以下の石英・長石・チャート・頁岩を含む	淡茶褐色	良	

687	SX76-3	壺			ミガキ	不明	φ2mm以下の石英・長石・チャート・頁岩を含む	淡茶褐色	良	
688	SX76-3	壺			ミガキ	ミガキ	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩を含む	淡茶褐色	良	
689	SX76-3	壺			ミガキ	ミガキ	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩を含む	淡茶色	良	
690	SX76-3	壺			不明	不明	φ3mm以下の石英・長石・雲母を含む	淡褐色	良	生駒山西麓産
691	SX76-3	壺			ミガキ	ミガキ	φ2mm以下の石英・長石・チャート・頁岩を含む	淡黄褐色 淡黄灰色	良	
692	SX76-3	壺			細ハケ+ ミガキ	ミガキ	φ2mm以下の石英・長石・チャート・頁岩を含む	淡褐色	良	
693	SX76-3	壺			不明	不明	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩を含む	淡褐色	良	
694	SX76-3	壺			不明	不明	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩を含む	淡茶褐色	良	
695	SX76-1	甕			細ハケ+ ナデ	不明	φ4mm以下の石英・長石・チャート・頁岩を含む	明茶褐色	良	
696	SX76-2	甕			細ハケ+ ナデ	細ハケ+ ナデ	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩を含む	褐色	良	
697	SX76-2	甕			細ハケ+ ナデ	細ハケ+ ナデ	φ5mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡灰褐色 橙褐色	良	
698	SX76-2	甕			細ハケ+ ナデ	ナデ	φ4mm以下の石英・長石・チャート・頁岩を含む	灰褐色 黒色	良	
699	SX76-2	甕			不明	不明	φ4mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡茶褐色	良	
700	SX76-2	甕			細ハケ+ ナデ	ナデ	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡茶褐色	良	
701	SX76-2	甕			細ハケ+ ナデ	細ハケ+ ナデ	φ5mm以下の石英・長石・チャート・頁岩を含む	淡褐色	良	
702	SX76-2	甕			ナデ	不明	φ10mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡茶褐色	良	
703	SX76-3	甕			ナデ	ナデ	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩を含む	淡茶褐色	良	
704	SX76-3	甕			細ハケ+ ナデ	ハケ+ナ デ	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩を含む	淡灰褐色 淡茶褐色	良	
705	SX76-3	甕			細ハケ+ ナデ	細ハケ+ ナデ	φ2mm以下の石英・長石・チャート・頁岩を含む	淡茶褐色	良	
706	SX60-1	壺			ミガキ	ミガキ	φ4mm以下の石英・長石・チャート・頁岩を含む	橙褐色	良	
707	SX60-1	壺			ミガキ	細ハケ+ ミガキ	φ5mm以下の石英・長石・チャート・頁岩を含む	暗橙褐色	良	
708	SX60-1	壺			ミガキ	ミガキ	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	橙褐色 淡黄灰色	良	
709	SX60-1	壺			ミガキ	不明	φ1mm以下の石英・長石・チャート・頁岩を含む	黒灰色 淡茶色	良	
710	SX60-1	壺			ミガキ	ミガキ	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	橙褐色 淡茶褐色	良	
711	SX60-1	壺			ミガキ	ミガキ	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	橙褐色	良	
712	SX60-1	壺			ミガキ	不明	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	橙褐色	良	
713	SX60-1	壺			不明	不明	φ4mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	橙褐色	良	
714	SX60-1	壺			ミガキ	ミガキ	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩を含む	淡茶灰色	良	

715	SX60-1	壺			ミガキ	不明	φ4mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	黒灰色 淡黄褐色	良
716	SX60-1	壺			ミガキ	ミガキ	φ3mm以下の石英・長石を含む	暗灰褐色	良
717	SX60-1	壺			ミガキ	ミガキ	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡茶灰色	良
718	SX60-1	壺			ミガキ	ミガキ	φ7mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡褐色	良
719	SX60-1	壺			ミガキ	不明	φ4mm以下の石英・長石・チャート・頁岩を含む	橙褐色	良
720	SX60-2	壺			ミガキ	ミガキ	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡黄褐色	良
721	SX60-2	壺			不明	ミガキ	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡黄茶色	良
722	SX60-2	壺			不明	不明	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	橙褐色 淡桃褐色	良
723	SX60-2	壺			ミガキ	不明	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡茶褐色	良
724	SX60-2	壺			ミガキ	ミガキ	φ4mm以下の石英・長石・チャート・頁岩を含む	暗黒灰色 淡茶褐色	良
725	SX60-2	壺			ミガキ	ミガキ	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡茶褐色	良
726	SX60-2	壺			ミガキ	ミガキ	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡茶色	良
727	SX60-2	壺			ミガキ	ミガキ	φ2mm以下の石英・長石・チャート・頁岩を含む	淡茶色 淡茶灰色	良
728	SX60-2	壺			ミガキ	ミガキ	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡茶灰色 茶灰色	良
729	SX60-2	壺			ミガキ	不明	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡茶褐色 暗灰色	良
730	SX60-3	壺			ミガキ	ミガキ	φ2mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡茶褐色	良
731	SX60-3	壺			ミガキ	ミガキ	φ2mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡桃褐色	良
732	SX60-3	壺			不明	不明	φ2mm以下の石英・長石・チャート・頁岩を含む	淡灰褐色 淡茶褐色	良
733	SX60-3	壺			不明	不明	φ1mm以下の石英・長石・チャート・頁岩を含む	淡茶褐色 褐色	良
734	SX60-3	壺			細ハケ+ ミガキ	細ハケ+ ミガキ	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩を含む	淡桃茶色	良
735	SX60-3	壺			ミガキ	ミガキ	φ3mm以下の石英・長石・チャートを含む	淡桃茶色 暗灰色	良
736	SX60-3	壺			ミガキ	ミガキ	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩を含む	淡褐色 暗灰褐色	良
737	SX60-4	壺			ミガキ	ミガキ	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡茶褐色	良
738	SX60-4	壺			ミガキ	ミガキ	φ4mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡桃褐色 淡灰褐色	良
739	SX60-4	壺			不明	ミガキ	φ2mm以下の石英・長石・チャート・頁岩を含む	黒灰色 淡茶褐色	良
740	SX60-4	壺			ミガキ	ミガキ	φ2mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	黒灰色 淡茶褐色	良
741	SX60-4	壺			細ハケ+ ミガキ	ナデ	φ2mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡茶褐色	良
742	SX60-4	壺			細ハケ+ ミガキ	細ハケ+ ミガキ	φ2mm以下の石英・長石・チャート・頁岩を含む	灰褐色 淡茶褐色	良

743	SX60-4	壺			ミガキ	不明	φ2mm以下の石英・長石・チャート・頁岩を含む	淡灰褐色 淡茶褐色	良
744	SX60-4	壺			不明	不明	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩を含む	淡橙茶色 淡茶褐色	良
745	SX60-4	壺			ミガキ	ミガキ	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩を含む	淡桃茶色 黒色	良
746	SX60-4	壺			ミガキ	不明	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩を含む	淡灰褐色 淡茶褐色	良
747	SX60-4	壺			ミガキ	ミガキ	φ6mm以下の石英・長石・チャート・頁岩を含む	淡灰褐色 淡茶褐色	良
748	SX60-4	壺			ミガキ	ミガキ	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	茶灰色 淡茶褐色	良
749	SX60-4	壺			細ハケ+ ミガキ	細ハケ+ ミガキ	φ5mm以下の石英・長石・チャート・頁岩を含む	淡橙褐色 淡茶褐色	良
750	SX60-5	壺			ミガキ	ミガキ	φ2mm以下の石英・長石・チャート・頁岩を含む	淡橙褐色	良
751	SX60-5	壺			ミガキ	ナデ	φ3mm以下の石英・長石を含む	淡茶褐色	良
752	不明	不明			細ハケ+ ナデ	細ハケ+ ナデ	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩を含む	淡褐色	良
753	SX60-2	甕?			細ハケ+ ナデ	不明	φ3mm以下の石英・長石・チャートを含む	淡茶褐色	良
754	SH60-3	甕?			ミガキ	ミガキ	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡茶色	良
755	SX60-2	甕?			不明	細ハケ+ ミガキ	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡橙褐色	良
756	SX60-4	甕?			ミガキ	ミガキ	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩を含む	暗灰色 淡茶褐色	良
757	SX60-4	甕?			細ハケ+ ナデ	ナデ	φ2mm以下の石英・長石・カクセン石を含む	暗褐色	良
758	包含層	壺			不明	不明	φ4mm以下の石英・長石・チャート・頁岩を含む	淡茶褐色	良
759	SX76-1	壺			細ハケ+ ミガキ	細ハケ+ ミガキ	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩を含む	淡茶褐色	良
760	SX76-3	壺			細ハケ+ ミガキ	細ハケ+ ナデ	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩を含む	淡茶褐色 暗灰色	良
761	SX76-2	蓋			不明	ナデ	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩を含む	淡茶褐色	良
762	SX76-2	甕底部			不明	ナデ	φ10mm以下の石英・長石・チャート・頁岩を含む	暗褐色	良
763	SX76-3	壺・鉢 底部			ミガキ	細ハケ+ ナデ	φ3mm以下の石英・長石を含む	暗褐色	良
764	SX76-3	壺			ミガキ	ミガキ	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	暗茶褐色	良
765	SX76-2	壺			細ハケ+ ミガキ	ミガキ	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩を含む	暗茶褐色	良
766	SX76-3	壺			ミガキ	不明	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩を含む	暗茶褐色	良
767	SX76-3	壺			不明	不明	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	暗茶褐色	良
768	SX76-3	壺			ミガキ	ミガキ	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	暗茶褐色	良
769	SX60-4	壺			ミガキ	ミガキ	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	暗茶褐色 暗灰茶色	良
770	SX60-4	壺			ミガキ	細ハケ+ ミガキ	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡茶褐色 淡灰褐色	良

771	SX60-4	壺					ミガキ	ミガキ	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡茶褐色 灰色	良	
772	SX60-3	壺					ミガキ	不明	φ2mm以下の石英・長石を含む	暗褐色 暗灰色	良	
773	SX60-4	壺					細ハケ+ ミガキ	ミガキ	φ2mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡茶褐色 暗灰色	良	
774	SX60-5	壺					ミガキ	ミガキ	φ2mm以下の石英・長石・チャートを含む	黒色 淡茶色	良	
775	SX60-5	壺					ミガキ	ミガキ	φ2mm以下の石英・長石・チャートを含む	黒色 淡茶色	良	
776	SX60-5	壺					ミガキ	ミガキ	φ3mm以下の石英・長石・チャートを含む	黒色 淡茶褐色	良	
777	SX60-5	壺					ミガキ	細ハケ+ ミガキ	φ3mm以下の石英・長石を含む	淡褐色	良	
778	SX60-5	壺					ミガキ	ミガキ	φ6mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	黒色 淡茶色	良	
779	SX60-5	壺					ミガキ	ミガキ	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	黒色 淡茶色	良	
780	SX76-1	蓋			2.1		不明	不明	φ4mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	明橙褐色	良	摘み径 5.6、紐 穴
781	SX76-1	蓋	23.2	1/6	4.4		細ハケ+ ナデ	不明	φ6mm以下の石英・長石・雲母・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡褐色	良	
782	SX76-1	蓋	23.6	1/8	6.6		細ハケ+ ナデ	細ハケ+ ナデ	φ4mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡褐色	良	
783	SX76-2	蓋	11	1/8	2		ナデ	ナデ	φ3mm以下の石英・長石・雲母・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡茶褐色	良	紐穴
784	SX76-2	蓋	10.4	1/4	2		不明	ナデ	φ3mm以下の石英・長石・雲母・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡橙褐色	良	紐穴
785	SX76-2	蓋	11.8	1/10	2		不明	不明	φ2mm以下の石英・長石・雲母・チャート・頁岩を含む	灰白色	良	
786	SX76-2	蓋	9.8	3/4	2.85		不明	不明	φ3.5mm以下の石英・長石・雲母・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡橙褐色 黄褐色	良	紐穴
787	SX76-2	蓋	10.3	1/3	2		ナデ	ナデ	φ5mm以下の石英・長石・雲母・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡赤褐色	良	紐穴
788	SX76-2	蓋	9.4	1/3	2.3		ミガキ	ナデ	φ6mm以下の石英・長石・雲母・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡赤褐色	良	
789	SX76-2	蓋	8.2	1/2	3		ミガキ	ミガキ	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	濃灰色 茶褐色	良	
790	SX76-2	蓋	11.3	1/3	1.75		ナデ	ミガキ	φ4mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡橙灰色	良	
791	SX76-2	蓋			1.3		ミガキ	ナデ	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡黄褐色 灰黄褐色	良	摘み径 2、紐穴
792	SX76-2	蓋			3.4		ナデ	ナデ	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡桃褐色	良	摘み径 4.8
793	SX76-2	蓋			3.3		細ハケ+ ミガキ	細ハケ+ ナデ	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡黄褐色 灰色	良	摘み径 6.2
794	SX76-2	蓋			3		細ハケ+ ミガキ	ミガキ	φ4mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	濃灰色 茶褐色	良	摘み径 8.2
795	SX76-2	蓋			3		不明	不明	φ5mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡灰褐色	良	摘み径 6.6
796	SX76-2	蓋			8.5		不明	不明	φ4.5mm以下の石英・長石・雲母・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡黄褐色	良	摘み径 5.6
797	SX76-2	蓋	30.2	1/16	5.1		ミガキ	ミガキ	φ4.5mm以下の石英・長石・雲母・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡黄褐色 淡褐色	良	
798	SX76-3	蓋	11.4	1/2	1.3		ミガキ	ミガキ	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩を含む	暗灰褐色	良	紐穴

799	SX60-1	蓋	8.6	1	1.75	不明	不明	φ9mm以下の石英・長石・雲母・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	灰褐色 淡褐色	良	紐穴
800	SX60-1	蓋	9.2	1/5	1.5	ミガキ	不明	φ5mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	黒色 灰褐色	良	
801	SX60-1	蓋	10.8	1/4	2.3	ナデ	ナデ	φ4mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	暗褐色	良	紐穴
802	SX60-1	蓋	12	1/7	2.1	不明	不明	φ3.5mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	橙褐色	良	
803	SX60-1	蓋	11.4	1/4	2.6	不明	不明	φ4mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	茶褐色 灰色	良	紐穴
804	SX60-1	蓋			2.6	不明	不明	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩を含む	濃灰色 茶褐色	良	摘み径 1.7、紐 穴
805	SX60-1	蓋			2.7	ミガキ	ミガキ	φ4mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	灰褐色 黒色	良	摘み径6
806	SX60-1	蓋			5.2	細ハケ+ ナデ	不明	φ7mm以下の石英・長石・チャート・頁岩を含む	橙灰色 淡茶褐色	良	摘み径 4.6
807	SX60-1	蓋			6.2	ハケ+ナ デ	ミガキ	φ4mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	黄褐色	良	摘み径 6.4
808	SX60-1	蓋			5.1	ナデ	ナデ	φ5mm以下の石英・長石・雲母・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	明褐色	良	摘み径5
809	SX60-2	蓋	10.2	1/4	1.8	不明	不明	φ4mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡橙灰色	良	
810	SX60-2	蓋	10	1/4	2.8	ナデ	ナデ	φ2.5mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡黄褐色	良	
811	SX60-2	蓋	10.8	1/4	3.6	ミガキ	ナデ	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡黄褐色 灰褐色	良	
812	SX60-2	蓋	10	1/4	2.6	不明	不明	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡橙灰色	良	
813	SX60-2	蓋	11.5	1/2	2.65	ミガキ	不明	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	黒褐色 淡茶褐色	良	
814	SX60-2	蓋	7.3	9/10	2.65	細ハケ+ ナデ	細ハケ+ ナデ	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	暗黄褐色 灰褐色	良	
815	SX60-3	蓋	13.2	1/5	2.7	ミガキ	不明	φ4mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡橙灰色	良	
816	SX60-4	蓋	15	1/12	2	ナデ	不明	φ3mm以下の石英・長石・雲母・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	橙褐色 淡茶褐色	良	
817	SX60-4	蓋			4.1	ミガキ	不明	φ4mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	橙褐色	良	摘み径 6.2
818	SX60-5	蓋			2.2	不明	不明	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	灰褐色	良	摘み径 2.8
819	SX60-4	蓋			7.2	不明	不明	φ5mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	淡桃茶色	良	摘み径 5.8
820	SX60-4	蓋			2.2	ミガキ	ミガキ	φ3mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	茶褐色 淡黄茶色	良	
821	SX60-4	蓋			2	ミガキ	ミガキ	φ2mm以下の石英・長石・チャート・頁岩・赤色斑粒を含む	黒褐色	良	

2. 石器

石器は整理用コンテナにして約1杯分出土している。出土石器の大半は剥片や碎片類で、セクション観察用の畦を層位ごとに持ち帰り、洗浄した結果検出した。石器の用いられている石材は、安山岩・粘板岩・流紋岩・チャート・緑色岩(仮称)・紅レイ片岩・砂岩である。打製石器には安山岩が用いられ、磨製石器には粘板岩・流紋岩・緑色岩が用いられている。チャートは敲石に利用されている。検出できた成品には、石鏃・石錐・石槍・削器・楔形石器・石庖丁・紡錘車・石鋸・使用痕を有する礫・敲石・石斧がある。なお、石器のレイアウトは判別が付く限り、原則として向かって左側に素材となった剥片の背面側、右側に主要剥離面側がくるようにした。

石鏃(図版第46・47-1~34) 石鏃は、総数35点が出土している。S X76からは18点で、そのうち断面実測用の畦から出土したものが16点である。S X60からは6点で、そのうち断面実測用の畦から出土したものが3点である。石器に用いられている石材は、23が粘板岩を使っているほかは、すべて安山岩製であるが、肉眼的に確実な四国の金山産の安山岩を用いていると考えられるもの1点が認められるが、判別できないものも多い。出土した石鏃は完形品が少なく、破損品や未成品を含んでいる。有茎のものは28の1点のみで、他の石鏃は凹基無茎、平基無茎の石鏃である。凹基無茎のものでも10や20の比較的大きく窪むものは少数で、24・27のように浅いものが多い。27は、両面の中央部に樹脂状の黒色の付着物が認められる。矢柄との接着剤が残存していると想定できる。23は両面に研磨痕が認められる。

図面からもわかるように、石鏃は2次加工によって素材剥片の形状がわからなくなっているものは少数である。残された素材剥片の剥離面の観察から、素材剥片の性状を予測したい。11・34は、素材剥片の折れ面から2次加工がなされており、素材剥片自体に折れ面が存在していたことがわかる。3・9・11・12・15・21・24・26・28・32・34は、表裏が大きな剥離面で構成されており、その剥離方向の多くが同一方向である。素材剥片自体が約2~4mm程の薄いものであった。16・24・29は、基部側に打点及び打面のあった石鏃で、リングの形状や打点側の厚みから打点に近いことがわかる。打点側は、薄く線状打面を呈していたと想定できる。また、打瘤は発達せず、打面部側も比較的平坦である。

石錐(図版第47-35~44) 石錐は、すべてが安山岩製であるが、半数以上が先端部が欠損している。石錐は大きく分けると、つまみのあるものと、棒状のものがあるが、つまみのあるものには機能部が短い39と、長い40の2つのタイプが認められる。36は、先端部が欠損しているが、両側辺に石器の長軸に直交するように線状痕が認められ、回転運動によって生じたと想定される。石器の磨擦による変形から考えると、石庖丁や紡錘車の穿孔に使われたのであろう。石錐に用いられる剥片には、35・40・44では風化した原礫面が認められる。35は、機能部の加工が折れ面からもなされており、素材剥片が折れ面を持っていたことがわかる。42は、加撃の時に弾け飛んだ不定形な剥片を素材としている。そのため打点や打面がはっきりしない。

石槍(図版第48-45) この石器は、中央部で折れた状態で出土した。先端部側がS K47から出土し、下半部が包含層から出土している。折れ面は、他の剥離面と同程度に風化していることか

ら、製作された時代と同時代に破損したと考えられる。

削器(図版第48・49-46~52) この種の石器は多くの場合スクレーパーとして分類されるが、急斜な刃部を持つ搔器と区別するため削器とした。46・48は、刃部側の加工が、比較的粗であり、刃部の形成としては他のものに比べ貧弱である。48は、向かって左側が素材剥片の主要剥離面側で、平坦な打面が主要剥離面左に認められる。背面側は、平坦で大きな剥離面で、石核の分割面の一部と考えられる。刃部に対する辺は、背面からの加工によって整形されている。49は、石器の下半部で2つに破損しているが、これは発掘調査時に生じたものである。

楔形石器(図版第49~51-53~77) 楔形石器は、P.S.S.Q.と呼ばれることもあるが、両端に打撃による潰れた部分を持ち、両極打法(バイポーラテクニック)によって生じると考えられている。楔形石器の器種認定には個人差が大きく、両極打法によって生じた潰れた部分を持つ剥片と、残されたものの両方を呼ぶ場合と、中心に残ったもののみを呼ぶ場合がある。今回の報告では、両端に潰れた部分が対になるもの、中心に残されたものを楔形石器とし、薄くて一端にのみ潰れのあるものは楔形石器の削片とした。

楔形石器は、折れ面と自然面をもつものが多く、石器の重量が重い。石器の器表面に残された剥離痕の打撃瘤が発達しないものが多い。74・76・77は、楔形石器の削片である。

石核(図版第51-78~80) 今回検出された石核は、図示した3点のみである。78は、直方体の石核で、剥離面にはポットリッドと呼ばれる剥離面の中にリングの起点が認められる。このような現象は、熱破碎の時に生じる。79にも熱破碎の痕跡が認められる。80は、原礫面を大きく残した石核で、剥片の剥離は図面の上下から行われている。顕著な潰れは認められないが、両極打法によって剥片剥離されたと想定することもできる。

接合資料(図版第52-81~84) 剥片どうしの接合資料である。打面部は81は破碎しており、82は線状打面である。打瘤は両者とも発達していない。

83・84は、扁平な水磨を受けた、円礫素材の母岩を分割している。84は、調査時の損傷によって2つに分かれている。

石庖丁(図版第53-85~93) 石庖丁に用いられる石材には、粘板岩・流紋岩がある。89・92の流紋岩は風化面は白色を呈しており、奈良県の耳成山で産出するものと考えられる。粘板岩に、黒色のものと灰色のものが認められる。石庖丁に施された穿孔は、すべて両面からの穿孔である。図示した以外に石庖丁の碎片1点がある。形態は、86・89が外湾刃、90・91・92が直刃、86は刃部が損傷しているため形状は不明である。93は、片面に平坦な自然面を持つ素材を利用した石庖丁である。

石製紡錘車(図版第54-95・96) 95は、黒色の粘板岩を用いた紡錘車である。中央部に穿孔が認められるが、両面穿孔である。研磨痕の著しく残る面と、剥離面のまま処理されている面が存在する。側面は、平面形が円形を呈するように、何回も研磨され、多くの平坦面によって構成されている。96は、穿孔がないが、研磨によって円形を呈する石片である。紡錘車にしては薄く、重量がないことから、成形加工される過程で何らかの原因で剥離したと想定したい。

刃部のある剥片(図版第54-99) 刃部のある黒色の粘板岩の剥片の一端を両面から磨き、刃部を作り出している。石斧状の刃部であるが、着柄のための整形加工が全く認められないことから、刃部のある剥片とした。

擦痕のある石器(図版第54-100~102) 礫面又は剥片の側辺を中心に石器の長軸に直交する方向に擦痕が入っている。101は、原礫が割れた面にまで擦痕が認められる。

石剣(図版第54-103) 粘板岩を用い、周辺に整形加工が施されている。第9トレンチの包含層中から出土しているが、前期に属するかどうかは不明である。左京第18次調査では、細身の磨製石剣が出土している。

粘板岩剥片(図版第54-104) 石庖丁などの磨製石器は、粘板岩から作られている。図示したのは、石器の素材剥片と考えられるものの内、一番大形のものである。剥片の一側辺には自然面が残されているが、肉眼観察から円礫であったことがわかる。出土剥片には自然面の付いたものが多い。また、整形加工時の碎片も発見されている。

敲石(図版第54-105・106) 105は、棒状円礫を利用した敲石で機能部と考えられる両端に、使用時に生じた剥離が認められる。石器の二次加工の時の細かい調整に用いられたものと想定できる。106は、チャート製の円礫を用いた敲石で、本来は角の取れたサイコロ状を呈していたと復原できるが、角の部分を中心に打撃時の衝撃による潰れによって円くなっている。

石斧(図版第54-107・108) 107は、石器表面に敲打による成形加工の痕跡が認められる。108は、太型蛤刃石斧の刃部である。刃部は使用によると考えられる剥離痕が表裏に認められる。石斧は、緑色をした砂岩質の石が用いられており、白色の斑点が認められることが多い。石斧と器種を特定できないが、緑色岩製の剥片が他に数点出土している。

(中川和哉)

付表2 石器観察表

図面NO.	器種	トレンチ	遺構	断面	層位	長さ	幅	厚さ	重量	石材	備考
1	石鏃	22	S X 76	7	1	2.4	1.5	0.24	0.6	安山岩	
2	石鏃	22	S X 76	7	2	2.2	1.05	0.25	0.42	安山岩	
3	石鏃	22	S X 76	7	2	2.5	1.1	0.28	0.76	安山岩	
4	石鏃	22	S X 76	7	1	1.9	1.6	0.37	1.9	安山岩	
5	石鏃	22	S X 76		1	2.5	1.2	5	2.28	安山岩	
6	石鏃	22	S X 76	7	1	1.4	1.4	0.17	1.36	安山岩	金山産?
7	石鏃	22	S X 76	8	1	1.45	1.5	0.34	0.65	安山岩	
8	石鏃	22	S X 76	7	1	1.35	1.2	0.26	1.31	安山岩	
9	石鏃	22	S X 76	7	2	1.3	1.3	0.17	1.21	安山岩	
10	石鏃	22	S X 76	7	3	2	1.85	0.28	0.83	安山岩	
11	石鏃	22	S X 76	8	2	1.6	1.45	0.29	0.72	安山岩	
12	石鏃	22	S X 76	7	1	1.5	1.4	0.27	0.6	安山岩	
13	石鏃	22	S X 76	7	2	2.1	1.4	0.21	1.61	安山岩	
14	石鏃	22	S X 76	8	3	2	1.3	0.4	1.12	安山岩	
15	石鏃	22	S X 76	7	2	1.75	1.2	0.24	1.33	安山岩	
16	石鏃	22	S X 76	7	2	3	2.25	0.42	3.11	安山岩	
17	石鏃	22	S X 60	5	2	2.5	1.6	0.4	1.78	安山岩	

18	石鏃	22	S X60		1	2.1	1.45	0.3	1.52	安山岩	
19	石鏃	22	S X60	2	4	1.7	1.2	0.4	1.74	安山岩	
20	石鏃	22	S X60		1	1.9	1.65	0.4	1.71	安山岩	
21	石鏃	22	S X60		1	1.8	1.35	0.3	1.49	安山岩	
22	石鏃	22	S X60	5	1	1.85	1.2	0.39	1.51	安山岩	
23	石鏃	22	S X76		2	3.8	2.1	0.42	4.38	粘板岩	擦痕有り
24	石鏃	22	不明			2.3	1.8	0.2	0.75	安山岩	
25	石鏃	22	不明			2	1.5	0.32	0.9	安山岩	
26	石鏃	22	S X60	5	1	2.39	1.21	0.29	1.2	安山岩	
27	石鏃	22	S X60		4	3.85	1.6	0.35	2.56	安山岩	付着物有り
28	石鏃	22	包含層			3.6	1.85	0.34	2.86	安山岩	
29	石鏃	22	包含層			2.35	1.5	0.28	0.92	安山岩	
30	石鏃	22	包含層			3.15	1.9	0.4	2.47	安山岩	
31	石鏃	22	包含層			2	1.4	0.3	0.7	安山岩	
32	石鏃	22	包含層							安山岩	
33	石鏃	22	不明			1.45	1.35	0.19	0.48	安山岩	
34	石鏃	22	包含層			2.4	1.5	0.25	1.08	安山岩	
35	石錐	22	S X60		1	4.1	2.8	0.78	8.39	安山岩	
36	石錐	22	S X76		1	3.3	1.1	0.51	3.24	安山岩	擦痕有り
37	石錐	22	S X76	7	2	1.9	1.3	0.45	1.13	安山岩	
38	石錐	22	包含層			4.1	1.3	0.9	2.36	安山岩	
39	石錐	22	S X60	6	4	2.4	1.4	0.7	2.31	安山岩	
40	石錐	22	S X60		4	4	2.7	0.5	2.65	安山岩	
41	石錐	22	包含層			2.8	1.85	0.62	1.91	安山岩	
42	石錐	22	S X60	6	5	2.9	0.9	0.9	1.91	安山岩	
43	石錐	22	S X75			2.45	0.8	0.46	3.86	安山岩	
44	石錐	22	S X75			3.3	1.6	0.55	3.59	安山岩	
45	石槍	9	SD47			14	1.8	1	31.1	安山岩	
46	削器	22	S X76	8	2	5.7	3.5	0.8	10	安山岩	
47	削器	22	S X76		2	2.9	6.65	0.7	16	安山岩	
48	削器	22	S X60		2	8.2	3	0.9	18.8	安山岩	
49	削器	22	包含層			6.5	4.2	0.75	18.4	安山岩	
50	削器	22	包含層			4.68	4.53	0.58	10.5	安山岩	
51	削器	22	S X60	5	2	3.8	2.2	0.2	3.55	安山岩	
52	楔形石器	22	S X75		上層	5.65	1.3	0.6	4.8	安山岩	
53	楔形石器	22	S X76		2	6	9.6	1.2	72.8	安山岩	
54	楔形石器	9	包含層			5.3	5.1	1.3	27.6	安山岩	
55	楔形石器	22	S X76		1	4.22	4.58	1.21	21.4	安山岩	
56	楔形石器	22	包含層			4.21	1.37	0.93	6.92	安山岩	
57	楔形石器	9	包含層			4.45	3.7	1.3	20.9	安山岩	
58	楔形石器	22	包含層			3.7	3.7	1	11.7	安山岩	
59	楔形石器	22	S X76		1	3.75	4.25	1.31	24.6	安山岩	
60	楔形石器	22	S X76		2	7.55	5.6	1.3	34.1	安山岩	
61	楔形石器	22	S X76	8	3	2.3	1.75	0.66	3.14	安山岩	
62	楔形石器	22	S X60	5	3	3.6	1.6	0.7	3.64	安山岩	
63	楔形石器	22	S X60		2	2.8	4.15	0.9	10.7	安山岩	
64	楔形石器	22	S X60		2	2.4	3.8	0.65	6.52	安山岩	
65	楔形石器	22	S X76		2	3.45	3.15	0.52	6.07	安山岩	
66	楔形石器	22	S X76		2	2.4	2.8	0.52	3.46	安山岩	

67	楔形石器	22	S X76	8	3	2.99	2.62	0.96	10.8	安山岩
68	楔形石器	22	S X76	7	1	2.18	2.2	0.64	3.38	安山岩
69	楔形石器	22	S X60		2	3.6	2.45	0.6	6.51	安山岩
70	楔形石器	22	S X75		上層	3.3	4.35	0.62	9.02	安山岩
71	楔形石器	22	S X60		3	5.8	4.4	1.01	30.6	安山岩
72	楔形石器	22	S X75		上層	3.8	2.9	0.98	12.3	安山岩
73	楔形石器	22	包含層			2.7	2.2	0.75	4.3	安山岩
74	楔形石器	22	包含層			3.1	1.8	0.45	2.36	安山岩
75	楔形石器	22	包含層			2.1	2.05	0.58	2.07	安山岩
76	楔形石器	22	包含層			2.5	1.4	0.46	1.25	安山岩
77	楔形石器	22	S X76		2	7.01	1.76	0.89	12.9	安山岩
78	石核	22	S X60	5	1	3.25	2.6	2.05	22.4	安山岩
79	石核	22	S X76		2	3.4	4.35	2.19	42.4	安山岩
80	石核	22	包含層			3.16	6.8	1.83	43	安山岩
81	剥片	22	S X60		3	3.72	2.86	0.5	6.35	安山岩
82	剥片	22	S X60		3	4.17	2.86	0.64	9.33	安山岩
83	荒割礫	22	包含層			9.01	5.58	1.68	87.8	安山岩
84	荒割礫	22	包含層			4.66	4.13	1.97	46.2	安山岩
85	石庖丁	22	S X76		3	14.5	3.5	0.7	56.8	粘板岩
86	石庖丁	22	S X76		1	7.4	4.6	0.7	32.3	粘板岩
87	石庖丁	22	S X76	7	2	5.25	5.4	0.6	29.5	粘板岩
88	石庖丁	22	S X76	7	2	5	4.9	0.7	18.7	粘板岩
89	石庖丁	22	S X60		1	3.8	5	0.6	15.8	流紋岩
90	石庖丁	22	S X60		1	3.9	4	0.47	8.79	粘板岩
91	石庖丁	22	包含層			1.5	2.7	0.35	1.29	粘板岩
92	石庖丁	22	S X60		1	3.3	5.64	0.69	17.4	流紋岩
93	石庖丁	22	包含層			3.95	7.05	0.8	35	粘板岩
94	加工剥片	22	S X76		2	4.27	5.18	0.64	24.2	粘板岩
95	紡錘車	22	包含層			5.4	5.8	0.85	47.1	粘板岩
96	紡錘車?	22	S X76		2	5	5.1	0.2	9.89	粘板岩
97	加工剥片	22	S X76		2	4.35	5.55	0.7	24.2	粘板岩
98	石鋸	22	包含層			4.14	6.04	0.38	13.8	紅連片岩
99	刃部ある剥片	22	S X75		上層	4.75	2.6	0.82	10.8	粘板岩
100	使用痕ある礫	22	S X76		3	13.8	2.55	1.65	71.6	粘板岩
101	使用痕ある礫	22	SD57			6.33	3.4	1.23	38.7	粘板岩
102	使用痕ある礫	22	S X60		1	7.2	4.6	0.75	30.8	粘板岩
103	石剣?	9	包含層			9.56	4.11	0.7	37.8	粘板岩
104	剥片	22	S X76		1	24.9	5.2	0.87	164	粘板岩
105	敲石	22	S X76		1	9.1	1.75	0.92	24.3	粘板岩
106	敲石	22	S X76		2	7.08	6.84	6.02	440	チャート
107	石斧	22	S X76			5.9	4.6	1.15	44.9	緑色岩
108	石斧	22	S X76		1	5.3	4	2.65	32.5	緑色岩

3. 木製品

製品のすべては、環濠S X60の第5層から出土し、農具、工具、容器などがある。農具には広鋤2点以上、又鋤1点、鋤1点がある。工具としては、太型蛤刃石斧の柄が1点、容器では、高杯の杯部が1点ある。このほかに機能不明な木製品が数点出土している。

広鋤 未製品が2点と破片が数点出土している。1点はほぼ完成品の段階までの加工が施されており、刃部の縁の仕上げと柄壺への柄孔を穿てば使用に耐えられる段階のものである。この製品の平面形は、頭部の両側がやや突出し、刃部が裾広がりの変形を呈する。身部の前面には抉り込みが施され、加工痕をとどめている。後面の柄壺は、舟形状を呈する。木取りには、縦木取りの板目材を用いている。

もう1点は、舟底状突起を中央に持ち、平面長方形の上下を切り取った段階の未完成品である。身部は、厚さも5cmと厚く、加工の仕方によって、諸手鋤に仕上げることも可能である。木取りは、縦木取りの板目材を用いている。

又鋤 製品の約1/2が出土している。残存している柄孔から復原すると、5本刃に復原することができる。頭部は、半円形で薄手の身の後面には舟底状突起を削り出している。刃は、断面を丸く加工し、刃の長さ約22cmに復原できる。木取りは、広鋤と同様に縦木取りの板目材を用いる。

鋤 一木作りの鋤である。身部と柄の一部が遺存している。身は、長い楕円形を呈し、杓子状に削り込みが施されている。

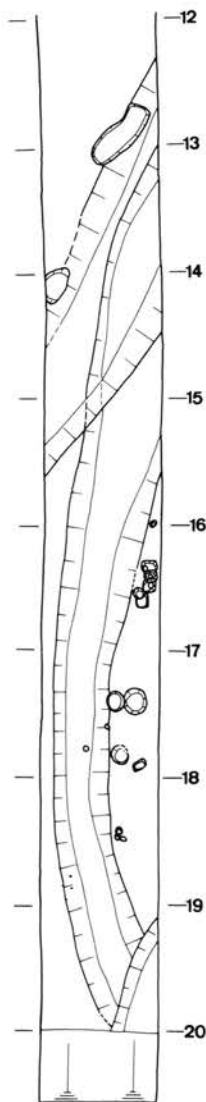
太型蛤刃石斧の柄 台部と握部の一部が遺存している。台部の先端を丸く削り出し、装着部は、台部の先端から基部にかけて両面を撥形に削り込み、基部で段を持って握部を太く残している。芯去り材を使用している。

高杯 内湾する杯部と円柱状の脚柱部の基部が遺存している。

(戸原和人)

4. 動物骨

動物骨は、いずれも弥生時代の溝(S X60・S X76)から出土した。前期中段階に比定されるS X60からはイノシシの下顎1点だけしか出土せず、その他の破片はすべて前期新段階の溝と推定されるS X76からの出土である。骨質は比較的良好に保存されており、ピビアナイトの付着による青色化もそれほど進行していないが、破損は著しく、断片化している。獣種はシカとイノシシに限られる。いずれも成獣と推定されるが、なかでもS X60から出土したイノシシの下顎骨は全長25cmと大きく、雄の成獣と推定される。S X76からの出土したシカの骨5点のうち、3点(No. 8を含む)が第2層から、2点が第3層からとほぼ均等に出土しているのに対して、イノシシの骨15点のうち2点(No. 8を含む)を除く残り13点は第3層から出土し、偏りが認められる。一方、地区別にみると、13地区ではイノシシの骨9点(No. 8を含む)、シカの骨は4点(No. 8を含む)を数える。これに対し、14地区ではイノシシの骨6点に、シカの骨は1点であった。つまり、イノシシの骨は広範囲に分散しているが、ほとんどが同じ層から出土しているのに対して、シカの骨



第7図 第22トレンチ
地区割り図

は比較的狭い範囲に集中しているが、上下の層にわたっていることがわかる。

部位はシカ、イノシシともに全体に及んでいるが、細片が多くて個体数を確定することはできなかった。しかし、同部位の重複を積極的に示す資料のないことに加え、量的にみても複数個体である可能性は低く、特にシカの場合は分布の点でも1個体の骨とみてよいだろう。また、破損が著しいために殺傷・解体の痕跡を認めることはできなかった。イノシシの下顎骨は、これら一群の動物骨とは距離を置いた地点から単独で出土した。頬側を上面にして、水平な状態で発見された。成獣雄の右側下顎骨で、下顎体前方上部と下顎枝の後方縁辺部が欠損している。P₃・P₄・M₁・M₂・M₃の歯は釘植状態で残存しているが、他の歯牙は遊離歯としても検出されなかった。この骨で特に注目されるのは、下顎枝の中央部に右外方から穿たれたとみられる2.8cm×3.2cmの孔である、穿孔されたイノシシ下顎骨の例は、これまでも西日本の各遺跡から報告されている。春成秀爾が1993年までに14遺跡からの類例を集成されている(春成1993)が、その後、岡山県岡山市南方遺跡から12体分の穿孔下顎を横1列に並べた例が発見された(文化庁編1996)。新たに加わる本例は、京都府内では初めての出土例となる。孔に木製の棒を通した状態で発見された佐賀県唐津市菜畑遺跡の例から、それらは懸架されたものと推定された(唐津市1982)。しかし、他方、奈良県磯城郡田原本町唐古・鍵遺跡では無穿孔の下顎でも下顎連結部を棒にかける例のあることが明らかになった(寺沢1979)。そうだとすると、ほかの部位に比べて下顎の数が異常に多い大阪府八尾市亀井遺跡や、下

顎14個が同じ溝から出土した和泉市池上遺跡の例も懸架された可能性が高い(松井1986、金子・牛沢1980)。こうした例も含めると、今後はさらに類例が増えると予想されるが、愛知県西春日井郡清洲町朝日遺跡出土例を東限として、北陸地方や東日本には知られていないという、これまでの知見が大きく崩れることはないと思われる。

穿孔、無穿孔にかかわらず、懸架されたと考えられるこれらの下顎は成獣のものだけでなく、未成獣のものも含まれており、まだ、雄・雌も選択の基準とはされなかったようである。共通しているのは、いずれも水稻耕作開始以降の遺跡から検出されていることであり、しかもそのほとんどは前期・中期に属し、後期には廃れてしまう。このことは、穿孔下顎を農耕祭祀と結び付ける有力な根拠となっている(渡辺1982)。しかし、下顎は懸架されただけでなく、類例は少ないけれども副葬品としても出土している。これについて、甲元真之は生前、ブタを飼育していた死者への副葬品と推定している(甲元1982)。さらに、大陸での下顎出土例を渉猟した春成は、漠然と

付表3 動物骨同定表

資料No.	遺構	地区	層位	種類	部位1	部位2	備考
1	S X 76	14	第3層	Sus	Humerus	L	遠位, 上腕骨滑車は欠損
2	S X 76		第2層	Sus	Skull occipital	L	
3-1	S X 76	14	第3層	Sus	Ulna	L	
3-2	S X 76	14	第3層	Sus	Lumbar		
3-3	S X 76	14	第3層	Sus	Maxille	M2, 3	
3-4	S X 76	14	第3層	Sus	Mandibula	P2, 3, 4	
4	S X 76	14	第2層	Cervus	Horn		
5	S X 76	13	第3層	Sus	Mandibula	M1, 2, 3	
6	S X 76	13	第3層	Cervus	Humerus	R	
7	S X 76	13	第2層	Cervus	Tibia	L	
8-1	S X 76	13	第2層断8	Cervus	Tibia	R	
8-2	S X 76	13	第2層断8	Sus	Ulna	L	
9	S X 76	13	第3層断8	不明			
10-1	S X 76	13	第3層	Sus	Mandibula	L : P2, 3, 4. M(1)2, 3	オス
10-2	S X 76	13	第3層	Cervus	Astragalus	L	
10-3	S X 76	13	第3層	Sus	Skull		
10-4	S X 76	13	第3層	Sus	Vertebra		
10-5	S X 76	13	第3層	Sus	Skull occipital	L	
10-6	S X 76	13	第3層	Sus	Scapula		
10-7	S X 76	13	第3層	Sus	Skull		
10-8	S X 76	13	第3層	Sus	Scapula	R	
10-9	S X 76	13	第3層	不明			
11	S X 60	17	第5層	Sus	Mandibula	R : P3, 4. M1, 2, 3	オス, 下顎枝に穿孔有り

Sus : イノシシ

Cervus : シカ

した農耕祭祀説を批判するとともに、それが懸架されたものであれ、副葬されたものであれ、等しく避邪の呪具とみる(春成1993)。その場合、重要なのは牙の存在であることを強調されているのだが、しかし、それならなぜ最も発達した牙をもつ雄の成獣が選択されなかったのだろうか。全体的にみれば、確かに成獣の雄が優勢であるものの、唐古・鍵遺跡第13次調査で出土した7個の下顎はいずれも若獣の雌であるし(藤田編1983)、亀井遺跡では雌が圧倒的に多いという。幼獣や亜成獣の下顎も例外的とはいえない。シカや鳥と違って、文献史料としても、まだ絵画資料としても余り取り上げられることのなかった動物であるだけに、その解釈をめぐってはまだ疑問が残る。

なお、同定にあたって奈良国立文化財研究所の松井 章、京都大学大学院生の宮地淳子にお世話になり、また、類例については滋賀県立大学の高橋美久二、大阪府立弥生文化博物館の宮崎泰史のご教示を得た。記して心から謝意を表する次第である。

(辻村純代)

第5章 自然科学的方法による分析

1. 雲宮遺跡の花粉及び植物珪酸体分析

京都府内の雲宮遺跡で採取された土壌試料について、花粉及び植物珪酸体(プラント・オパール)分析を行い、遺跡周辺の当時の古植生や、稲作について検討した。

(1) 試料と分析方法

試料は、弥生時代前期の溝(7ANMTD S X 76)を埋積した堆積物で、花粉分析を行ったのは第1層のa・b、2層、3層の4試料、プラント・オパール分析はこれに5層を加えた5試料である。各試料とも礫混じりの砂質シルトで、1・2層には炭片が入り、3層には植物遺体(単子葉類?)が認められる。以下に各分析方法を示す。

花粉分析 試料(5~10g)を遠沈管にとり、10%水酸化カリウム溶液を加えて20分間湯煎する。水洗後、0.5mm目の篩で植物遺体などを取り除き、傾斜法を用いて粗粒砂などを除去する。次に46%フッ化水素酸溶液を加え30分間放置する。水洗後、重液分離(比重2.1に調整した臭化亜鉛溶液を加え遠心分離)を行い、浮遊物を回収し水洗する。次に、酢酸処理、続けてアセトリシス処理(無水酢酸9:1濃硫酸の混酸を加え3分間湯煎)を行う。水洗後、残渣にグリセリンを滴下し保存用とする。検鏡はこの残渣よりプレパラートを作成して行い、その際サフラニンにて染色を施した。また、花粉化石の単体標本を作成し、各々にPLC.SS番号を付し、形態観察用及び保存用とした。

プラント・オパール分析 重量を測定した試料を乾燥後再び秤量する(絶対乾燥重量測定)。別に試料約1g(秤量)をトールピーカーにとり、約0.02gのガラスビーズ(直径約40 μ m)を加える。これに30%の過酸化水素水を20~30cc加え、脱有機物処理を行う。処理後水を加え、超音波ホモジナイザーによる試料の分散後、沈降法により20 μ m以下の粒子を除去する。この残渣よりグリセリンを用いて適宜プレパラートを作成し、検鏡した。同定及び計数は機動細胞珪酸体に由来するプラント・オパールについて、ガラスビーズが300個に達するまで行った。

(2) 分析結果

花粉分析結果 検出された花粉・胞子の分類群数は樹木花粉25、草本花粉19、形態分類で示したシダ植物胞子2の計46である。これら花粉・胞子の一覧を付表4に、また主要な花粉・胞子の分布を第8図に示した。なお、1層の2試料については樹木花粉の検出数が少なく、分解・消失してしまったものも多いと予想され、示されている産出傾向については参考程度にみていただきたい。この分布図における樹木花粉は樹木花粉総数を基数に、草本花粉・シダ植物胞子は全花粉胞子総数を基数として百分率で示してある。また、図及び表の中でハイフンで結んだ分類群は、それら分類群間の区別が困難なものを示し、クワ科・バラ科・マメ科の花粉は樹本起源と草本起

源のものがあるが、各々に分けることが困難なため便宜的に草本花粉に一括していれてある。

検鏡の結果、特に1層の2試料であるが、炭片などの植物遺体が非常に多く、花粉化石の検出数は少なく傷んでいるものが多く観察された。得られた花粉化石のうち、針葉樹類ではスギ属が多く、コウヤマキ属やイチイ科—イヌガヤ科—ヒノキ科(以後ヒノキ類と略す)も比較的観察される。その他、モミ属やマツ属複雑管束亜属(アカマツやクロマツなどのいわゆるニョウマツ類)が4試料より得られている。広葉樹類ではコナラ属の両亜属(コナラ亜属、アカガシ亜属)が高い出現率を示し、シイノキ属—マテバシイ属がこれらに次いで産出している。その他、クマシデ属—アサダ属、ハンノキ属、ブナ属、ニレ属—ケヤキ属、モチノキ属、アオキ属などが僅かではあるが検出されている。

草本類では、イネ科が全試料から多く得られ、高い出現率を示している。また、2層ではアカザ科—ヒユ科が非常に多く検出されている。その他では、ヨモギ属が4%前後と安定した出現率を示しており、カヤツリグサ科、アブラナ科、ヨモギ属以外のキク亜科(他のキク亜科)、タンポポ科が全試料から検出されている。水生植物のオモダカ属も若干産出している。また、シダ植物の単条型胞子も比較的多く得られている。

プラント・オパール分析結果 同定・計数された各植物のプラント・オパール個数とガラスビーズ個数の比率から試料1g当りの各プラント・オパール個数を求め(付表5)、それらの分布を第9図に示した。しかし、全試料とも乾燥状態が進んでおり、実際的には付表5に示された数字よりも高くなると思われる。なお、以下に示す各分類群のプラント・オパール個数は試料1g当りの個数である。検鏡の結果、3及び5層を除く、上部3試料よりイネのプラント・オパールが検出された。最も多く認められたのは1層bの15,600個で、2層もほぼ同数の値を示し、最上部の1層aでも9,200個である。

その他のプラント・オパールでは、ネザサ節型が約20,000~50,000個と最も多く検出されており、クマザサ属型は6,000個前後、ヨシ属は1,000個前後得られている。その他、マダケ属型やシバ属、ウシクサ族(ススキ、チガヤなど)が若干検出されている。

(3) 稲作について

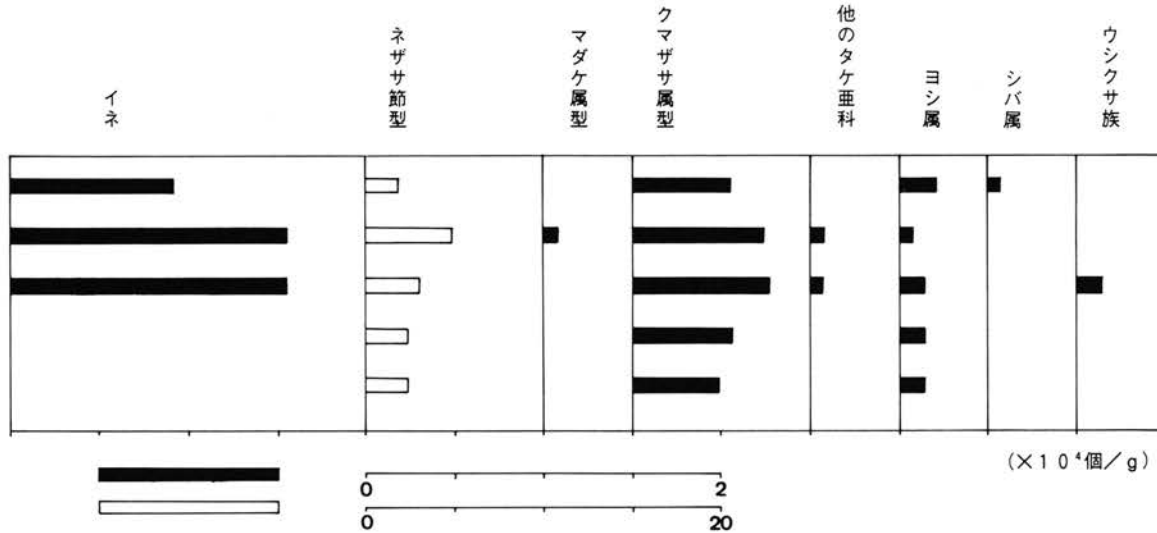
上記したように、3及び5層を除く上部3試料よりイネのプラント・オパールが検出されている。稲作の検証として、イネのプラント・オパールが試料1g当り5,000個以上検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性は高いと判断されている(古環境研究所1989)。稲作に限ってみると今回の分析結果は、数的には9,000個以上と高いが、試料は溝部分より採取されたものであることから、稲作地というよりも、稲わらが環濠内に捨てられるなど、他の要因によりイネのプラント・オパールが多量に供給されたのであろう。時代は弥生時代前期で、雲宮遺跡ではこの頃すでに稲が存在していたとプラント・オパール分析からは判断される。また、花粉分析結果をみると、水生植物(抽水植物)のオモダカ属が検出されている。このオモダカ属は現在の水田で普通にみられる分類群であることから、雲宮遺跡周辺低地部で水田稲作が営まれていたことが推測されよう。

付表4 雲宮遺跡の産出花粉化石一覧表

和名	学名	1 a	1 b	2	3
樹木					
マキ属	<i>Podocarpus</i>	-	1	-	1
モミ属	<i>Abies</i>	1	2	2	6
ツガ属	<i>Tsuga</i>	-	1	1	4
マツ属複維管束亜属	<i>Pinus subgen. Diploxylon</i>	2	3	3	2
マツ属 (不明)	<i>Pinus (Unknown)</i>	-	-	1	1
コウヤマキ属	<i>Sciadopitys</i>	11	6	11	23
スギ属	<i>Cryptomeria</i>	1	3	23	63
イチイ科—イヌガヤ科—ヒノキ科	T.-C.	-	3	7	25
クルミ属	<i>Juglans</i>	-	-	-	1
クマシデ属—アサダ属	<i>Carpinus-Ostrya</i>	3	2	-	2
カバノキ属	<i>Betula</i>	-	-	-	3
ハンノキ属	<i>Alnus</i>	1	3	6	2
ブナ属	<i>Fagus</i>	1	1	3	2
コナラ属コナラ亜属	<i>Quercus subgen. Lepidobalanus</i>	5	17	17	33
コナラ属アカガシ亜属	<i>Quercus subgen. Cyclobalanopsis</i>	16	11	35	62
クリ属	<i>Castanea</i>	-	-	-	1
シイノキ属—マテバシイ属	<i>Castanopsis-Pasania</i>	2	1	7	17
ニレ属—ケヤキ属	<i>Ulmus-Zelkova</i>	-	-	2	6
エノキ属—ムクノキ属	<i>Celtis-Aphananthe</i>	-	-	1	-
フウ属	<i>Liquidamber</i>	2	1	-	-
モチノキ属	<i>Ilex</i>	-	-	1	1
カエデ属	<i>Acer</i>	1	-	-	-
トチノキ属	<i>Aesculus</i>	-	-	1	1
ムクロジ属	<i>Sapindus</i>	-	-	-	1
アオキ属	<i>Aucuba</i>	-	1	-	-
イボタノキ属	<i>Ligustrum</i>	2	1	-	-
草本					
オモダカ属	<i>Sagittaria</i>	-	1	2	-
イネ科	Gramineae	186	126	275	164
カヤツリグサ科	Cyperaceae	2	4	7	5
クワ科	Moraceae	-	1	2	1
ギシギシ属	<i>Rumex</i>	-	-	-	1
サナエタデ節—ウナギツカミ節	<i>Polygonum sect. Persicaria-Echinocaulon</i>	-	1	2	4
アカザ科—ヒユ科	Chenopodiaceae-Amaranthaceae	10	5	304	6
ナデシコ科	Caryophyllaceae	-	-	1	1
カラマツソウ属	<i>Thalictrum</i>	-	-	-	1
他のキンポウゲ科	other Ranunculaceae	1	-	1	-
アブラナ科	Cruciferae	1	2	5	8
バラ科	Rosaceae	-	-	1	-
マメ科	Leguminosae	-	-	1	1
カタバミ属	<i>Oxalis</i>	1	-	-	-
セリ科	Umbelliferae	-	-	4	2
オオバコ属	<i>Plantago</i>	-	-	-	1
ヨモギ属	<i>Artemisia</i>	15	12	22	24
他のキク亜科	other Tubuliflorae	4	5	3	4
タンポポ科	Liguliflorae	3	3	2	2
シダ植物					
単条型孢子	Monolete spore	66	38	25	75
三条型孢子	Trilete spore	10	16	6	5
樹木花粉	Arboreal pollen	48	57	121	257
草本花粉	Nonarboreal pollen	223	160	632	225
シダ植物孢子	Spores	76	54	31	80
花粉・孢子総数	Total Pollen&Spores	347	271	784	562
不明花粉	Unknown pollen	67	41	74	68

付表5 試料1gあたりのプラントオパール個数

試料	イネ (個/g)	ネザサ節型 (個/g)	マダケ属型 (個/g)	クマザサ属型 (個/g)	他のタケ亜科 (個/g)	ヨシ属 (個/g)	シバ属 (個/g)	キビ属 (個/g)	ウシクサ属 (個/g)	不明 (個/g)
1層 a	9,200	19,000	0	5,600	0	2,100	700	0	0	13,400
1層 b	15,600	49,300	800	7,400	800	800	0	0	0	9,000
2層	15,500	30,300	0	7,700	700	1,400	0	0	1,400	5,600
3層	0	24,200	0	5,700	0	1,400	0	0	0	2,100
5層	0	23,700	0	4,900	0	1,400	0	0	0	7,700



第9図 雲宮遺跡のプラントオパール分布図

(4)遺跡周辺の古植生

時代については全試料とも弥生時代前期である。この頃の遺跡周辺の山地・丘陵部はアカガシ亜属を主体にシノキ属—マテバシイ属などが生育する照葉樹林が優勢であった。また、スギ属を中心にコウヤマキ属やヒノキ類あるいはモミ属、ツガ属などの針葉樹林も分布を広げていた。この針葉樹林について、河内平野周辺の山地では縄紋時代晩期にスギやヒノキ、コウヤマキなどが増加し、中間温帯針葉樹林が成立したと考えられている(那須1989)。雲宮遺跡周辺の山地・丘陵部も、縄紋時代晩期に成立したであろうスギを中心とした針葉樹林が弥生時代前期にも存続していたようであり、照葉樹林とともに優勢であった。その他、コナラ亜属やニレ属—ケヤキ属などの落葉樹類も生育していた。また、これらの森林の下草としてクマザサ属型に属するササ類が多くみられたであろう。

一方、溝の近辺ではネザサ節型に属するササ類などのイネ科、ヨモギ属やタンポポ亜科などのキク科、アカザ科—ヒユ科、といった雑草類が多かったとみられる。2層試料においてアカザ科—ヒユ科花粉が他の試料に比べ突出して多く検出されている。顕微鏡観察においては花粉塊で認められるものもあり、試料中にたまたま葯などが混入してしまった結果、多量に検出されたものと思われる。しかし、その原因の一つには、アカザ科あるいはヒユ科の植物がこの付近に生育していたことによると考えられ、自然にあるいは人為的(雑草の排除など)に環濠内に供給されたこ

とが推測される。また、イネ科についても同様である。このように、溝の近辺ではイネ科、アカザ科—ヒユ科、キク科などの雑草類が生育していた。

(5)まとめ

雲宮遺跡では、弥生時代前期にはすでにイネが存在していた。弥生時代前期の遺跡周辺の古植生は、山地・丘陵部は針葉樹林や照葉樹林が優勢であり、落葉広葉樹類も一部にみられ、これら森林の下草としてクマザサ属型のササ類が生育していた。

一方、低地部では水田稲作が営まれていたとみられ、溝周辺(集落周辺)はネザサ節型のササ類や他のイネ科、アカザ科—ヒユ科、キク科などの雑草類が生育していた。

(鈴木 茂、平成2年2月脱稿)

2. 雲宮遺跡出土土器の胎土分析—X線解析試験及び化学分析試験—

(1)実験条件

1—1 試料 分析に供した試料は付表6・7の胎土性状表に示す通りである。X線回折試験に供する遺物試料は洗浄し、乾燥したのちに、メノウ乳鉢にて粉碎し、粉末試料として実験に供した。化学分析は土器をダイヤモンドカッターで小片に切断し、表面を洗浄し、乾燥後、試料表面をコーティングしないで、直接電子顕微鏡の鏡筒内に挿入し、分析した。

1—2 X線回折試験 土器胎土に含まれる粘土鉱物及び造岩鉱物の同定はX線回折試験によった。測定には日本電子製JDX—8020線回折装置を用い、次の実験条件で実験した。

Target: Cu, Filter: Ni, Voltage: 40Kv, Current: 30mA, ステップ角度: 0.02°、計数時間: 0.5SEC。

1—3 化学分析 元素分析は日本電子製5300LV型電子顕微鏡に2001型エネルギー分散型蛍光X線分析装置をセットし、実験条件は加速電圧: 15KV、分析法: スプリント法、分析倍率: 200倍、分析有効時間: 100秒、分析指定元素10元素で行った。

(2)X線回折試験結果の取扱い

実験結果は付表6・7の胎土性状表に示す通りである。付表6・7の右側にはX線回折試験に基づく粘土鉱物及び造岩鉱物の組織が示してあり、左側には、各胎土に対する分類を行った結果を示している。X線回折試験結果に基づく粘土鉱物及び造岩鉱物の各々に記載される数字はチャートの中に現われる各鉱物に特有のピークの強度を記載したものである。電子顕微鏡によって得られたガラス量とX線回折試験で得られたムライト(Mullite)、クリストバーライト(Cristobalite)などの組成上の組合せとによって焼成ランクを決定した。

2—1 組成分類 1)Mo-Mi-Hb三角ダイアグラム 図10のIに示すように三角ダイアグラムを1~13に分割し、位置分類を各胎土について行い、各胎土の位置を数字で表した。Mo・Mi・Hbの三成分の含まない胎土は記載不能として14にいれ、別に検討した。三角ダイアグラムはモンモリロナイト(Mont)、雲母類(Mica)、角閃石(Hb)のX線回折試験におけるチャートのピーク強度をパーセント(%)で表示する。モンモリロナイトは $Mo/(Mo+Mi+Hb)*100$ でパーセントとして求め、同

様にMi・Hbも計算し、三角ダイヤグラムに記載する。三角ダイヤグラム内の1～4はMo・Mi・Hbの3成分を含み、各辺は2成分、各頂点は1成分よりなっていることを表している。

位置分類についての基本原則は第10図のIに示す通りである。

2)Mo-Ch, Mi-Hb菱形ダイヤグラム 第10図のⅢに示すように菱形ダイヤグラムを1～19に区分し、位置分類を数字で記載した。記載不能は20として別に検討した。

モンモリロナイト(Mont)、雲母類(Mica)、角閃石(Hb)、緑泥石(Ch)の内、a)3成分以上含まれない、b)Mont・Chの2成分が含まれない、c)Mi・Hbの2成分が含まれない、の3例がある。

菱形ダイヤグラムはMont-Ch, Mica-Hbの組合せを表示するものである。Mont-Ch, Mica-HbのそれぞれのX線回折試験のチャートの強度を各々の組合せ毎にパーセントで表すもので、例えば、 $Mo/Mo+Ch*100$ と計算し、Mi・Hb・Chも各々同様に計算し、記載する。菱形ダイヤグラム内にある1～7はMo・Mi・Hb・Chの4成分を含み、各辺はMo・Mi・Hb・Chのうち3成分、各頂点は2成分を含んでいることを示す。位置分類についての基本原則は第10図Ⅲに示す通りである。

2-2 焼成ランク 焼成ランクの区分はX線回折試験による鉱物組成と、電子顕微鏡観察によるガラス量によって行った。ムライト(Mullite)は、磁器、陶器など高温で焼かれた状態で初めて生成する鉱物であり、クリストバーライト(Cristobalite)はムライトより低い温度、ガラスはクリストバーライトより更に低い温度で生成する。

これらの事実に基づき、X線回折試験結果と電子顕微鏡観察結果から、土器胎土の焼成ランクをI～Vの5段階に区分した。

a)焼成ランクI：ムライトが多く生成し、ガラスの単位面積が広く、ガラスは発泡している。

b)焼成ランクII：ムライトとクリストバーライトが共存し、ガラスは短冊状になり、面積は狭くなる。

c)焼成ランクIII：ガラスのなかにクリストバーライトが生成し、ガラスの単位面積が狭く、葉状断面をし、ガラスのつながりに欠ける。

d)焼成ランクIV：ガラスのみが生成し、原土(素地土)の組織をかなり残している。ガラスは微小な葉状を呈する。

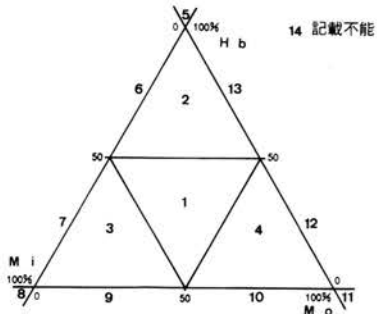
e)焼成ランクV：原土に近い組織を有し、ガラスは殆どできていない。

以上のI～Vの分類は原則であるが、胎土の材質、すなわち、粘土の良悪によってガラスの生成量は異なるので、電子顕微鏡によるガラス量も分類に大きな比重を占める。このため、ムライト、クリストバーライトなどの組合せといくぶん異なる焼成ランクが出現することになるが、この点については付表6・7の右端の備考に理由を記した。

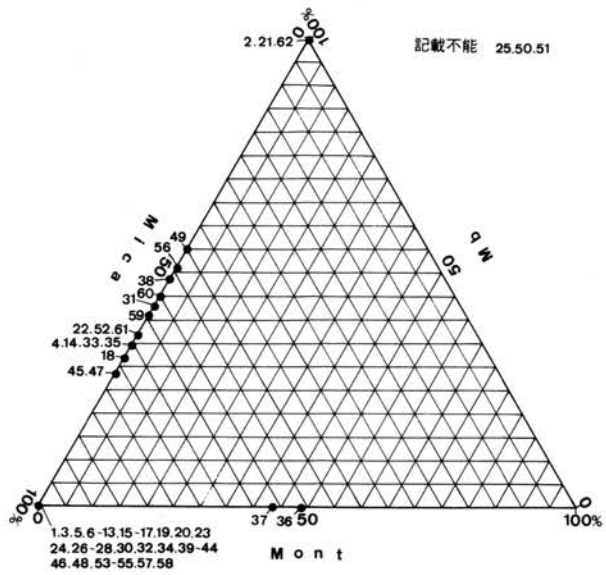
3)化学分析結果の取り扱い 化学分析結果は酸化物として、ノーマル法(10元素全体で100%になる)で計算し、化学分析表を作成した。化学分析表に基づいてSiO₂-Al₂O₃・Fe₂O₃-MgO・K₂O-CaOの各図を作成した。これらの図をもとに、土器類を元素の面から分類した。

(3)分析結果

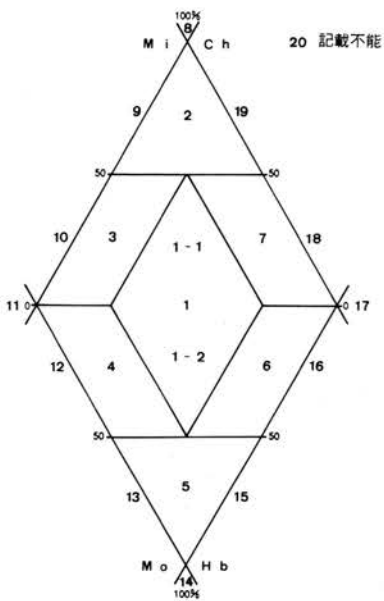
3-1 タイプ分類 土器胎土は付表8胎土性状表に示すように、第10図Ⅱの三角ダイヤグラ



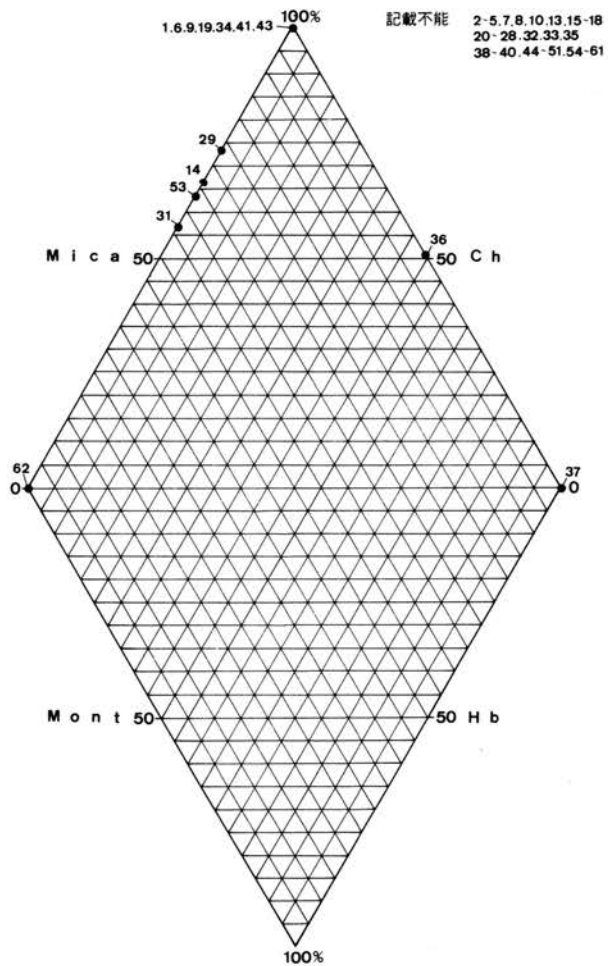
I 三角ダイヤグラム位置分類図



II Mo-Mi-Hb三角ダイヤグラム



III 菱形ダイヤグラム位置分類図



IV Mo-Ch, Mi-Hb菱形ダイヤグラム

第10図 組成分類ダイヤグラム

ム、第10図Ⅳの菱形ダイヤグラムの位置分類に基づいてA～Jの10タイプに分類された。

付表8タイプ分類一覧表に示すように、胎土で最も多いタイプはGタイプで、全62個のうち30個が該当し、48%に達する。次いで、Eタイプの10個、Fタイプの7個、Dタイプの4個、CとJタイプの各3個、Bタイプの2個、A、H、Iの各1個となる。胎土に共通する鉱物は雲母類で、90%以上の胎土が雲母類を含んでいることになる。土器の断面写真でも明らかなように、土器胎土は細粒の素地土のなかに多くの粗粒な砂粒を混入しているのが特徴である。

電子顕微鏡の分析では土器は細粒～中粒のガラスが生成し、焼成ランクはⅢと余り高くない。遺跡から出土した焼土のうち、雲宮-51は粗粒のガラスが生成し、高い温度で焼かれていることが判明した。

Aタイプ：Hb, Chの2成分を含み、Mont・Micaの2成分に欠ける。個体数は1個。

Bタイプ：Hb 1成分を含み、Mont・Mica・Chの3成分に欠ける。個体数は2個で、雲宮-2はHbの強度が1310と異常に高く、生駒西麓産の土器と判断された。

Cタイプ：Mica・Hbの2成分を含み、Mont・Chの2成分に欠ける。個体数は3個。

Dタイプ：Mica・Hb・Chの3成分を含み、Mont 1成分に欠ける。個体数は4個。

Eタイプ：Mica・Hbの2成分を含み、Mont・Chの2成分に欠ける。個体数は10個と2番目に多い。組成的にはCタイプと類似するが強度が異なるために位置分類が異なる。

Fタイプ：Mica・Chの2成分を含み、Mont・Hbの2成分に欠ける。個体数は7個と3番目に多い。

Gタイプ：Mica 1成分を含み、Mont・Hb・Chの3成分に欠ける。個体数は30個と多く、全体の約50%を占め、個体数の多いことから推察して、在地あるいは在地近傍の可能性が高い。

Hタイプ：Mont・Micaの2成分を含み、Hb・Chの2成分に欠ける。個体数は1個。

Iタイプ：Mont・Mica・Chの3成分を含み、Hb 1成分に欠ける。個体数は1個。

Jタイプ：Mont・Mica・Hb・Chの4成分に欠ける。主にアルミナゲル(nAl₂O₃・mSiO₂・lH₂O)で構成される。

以上の結果から明らかなように、雲母類(Mica)を1成分しか含まないGタイプ、CとEタイプは雲母類と角閃石の2種類を含む類似するタイプで、両者をあわせたものは個体数も多く、また、Fタイプは雲母類と緑泥石の2成分を含むもので個体数は7個と多く、これら4タイプで80%を占め、個体数の多さから在地あるいは在地近傍の可能性が高いと判断された。角閃石の強度が異常に高い雲宮-2は生駒西麓タイプと判断された。他のタイプは個体数も少なく、異質な胎土と判断された。焼土はMont・Mica・Hb・Chの4成分を含まないタイプで、異質である。

3-2 石英(Q t) Q t—P l 斜長石(P l)の相関について 土器胎土中に含まれる砂の粘土に対する混合比は粘土の材質、土器の焼成温度と大きな関わりがある。土器を製作する過程で、ある粘土にある量の砂を混合して素地土を作るということは個々の集団が持つ土器製作上の固有の技術であると考えられる。自然の状態における各地の砂は固有の石英と斜長石比を有している。この比は後背地の地質条件によって各々異なってくるものであり、言い換えれば、各地の砂はお

付表 6 胎土性状表(1)

試料 No	タイプ分類	焼成ランク	組成分類			粘土鉱物および造岩鉱物												備考	
			Mo-Mi-Hb	Mo-Ch.Mi-Hb	Mont	Mica	Hb	Ch(Fe)	Ch(Mg)	Qt	Pl	Crist	Mullite	K-fels	Halloy	Kaol	Pyrite		Au
雲宮-1	F		8	8		141		204	4482	314	135								壺-大型
雲宮-2	B		5	20			1310		855	281									甕-中型-生駒西麓?
雲宮-3	G		8	20		217			2860	176									甕
雲宮-4	E		7	20		249	130		2326	335									壺-中型-沈線2・2
雲宮-5	G		8	20		241			2264	279									甕-中型-口縁内沈線
雲宮-6	F		8	8		174		193	3581	333									水差し
雲宮-7	G		8	20		125			2812	136									壺-中型-木ノ葉文
雲宮-8	G		8	20		220			2648	231									壺-中型-貼布凸帯
雲宮-9	F		8	8		127		212	68	4155	519								壺-大型-渦巻文
雲宮-10	G		8	20		282			2345	295									壺-中型-沈線2・4
雲宮-11	G		8	20		129			5778	133									壺-中型-貼付凸帯
雲宮-12	G		8	20		88			2434	117									壺-中型-三角錐型浮文
雲宮-13	G		8	20		163			2452	223									壺-中型-段
雲宮-14	D		7	9		169	88	234	5161	383									鉢-中型-ヘラミガキ
雲宮-15	G		8	20		142			4722	220									壺-大型-貼付凸帯
雲宮-16	G		8	20		122			4525	181									甕-中型-刷毛目
雲宮-17	G		8	20		139			4196	216									甕-中型-沈線7
雲宮-18	E		7	20		125	58		2484	169									甕-大型-山形文
雲宮-19	F		8	8		272		281	106	2134	225								鉢-大型-貼付つまみ
雲宮-20	G		8	20		147			3665	197									壺-大型-沈線3・3
雲宮-21	B		5	20			89		4128	216									壺-中型
雲宮-22	E		7	20		138	80		3005	463									壺-大型(甕?)
雲宮-23	G		8	20		191			3305	255									壺-中型-円弧文
雲宮-24	G		8	20		183			3015	206									壺-大型(甕?)
雲宮-25	J		14	20					4210	175									壺-大型(甕?)
雲宮-26	G		8	20		74			3820	127									壺-中型-段
雲宮-27	G		8	20		168			3532	285									壺-中型-貼布凸帯
雲宮-28	G		8	20		109			3857	132									壺-大型-貼布凸帯
雲宮-29	D		7	9		207	78	231	66	2559	356								鉢-大型-ヘラミガキ
雲宮-30	G		8	20		269			2402	237									壺-中型-刻目貼付凸帯
雲宮-31	D		7	9		141	104	152	3213	174									甕-中型-沈線5

付表7 胎土性状表(2)

試料 No	タイプ 分類	焼成 ランク	組成分類			粘土鉱物および造岩鉱物											備考						
			Mo-Mi-Hb	Mo-Ch, Mi-Hb	Mont	Mica	Hb	Ch(Fe)	Ch(Mg)	Qt	Pl	Crist	Mullite	K-fels	Halloy	Kaol		Pyrite	Au	ガラス			
雲宮-32	G		8	20		93						3313	508										壺-中型-沈線5・7
雲宮-33	E		7	20		125	79					3624	288			280							甕-中型-刺突文
雲宮-34	F		8	8		181		208				3763	176			200							壺-中型-無文(ヘラミガキ)
雲宮-35	E		7	20		107	76					4568	170										甕-中型-沈線2
雲宮-36	I		9	19	216	226		222				1840	199										甕-中型-沈線2
雲宮-37	H		9	17	196	255						2304	375										鉢-小型-四方つまみ
雲宮-38	E		7	20		95	88					2710	420				82						壺-中型-沈線2・3
雲宮-39	G		8	20		235						2802	320			165							鉢-中型-ヘラミガキ
雲宮-40	G		8	20		138						3082	179			180							鉢-中型-無文
雲宮-41	F		8	8		156	199					3530	205										甕-中型-刷毛目
雲宮-42	G		8	20		240						2052	377										壺-中型-刺突文
雲宮-43	F		8	8		167	188	61	3245	309						65							鉢-大型-沈線3
雲宮-44	G		8	20		162						4413	350	91		377							鉢-中型-無文
雲宮-45	E		7	20		233	95					2532	228	86									甕-中型-逆し字
雲宮-46	G		8	20		134						2463	172	83								97	甕-無文
雲宮-47	E		7	20		177	71					3292	324	69									壺-大型-貼布凸帯
雲宮-48	G		8	20		136						2577	157			215							鉢-小型-無文
雲宮-49	C		6	20		76	94					2963	319			103							壺-中型-段
雲宮-50	J		14	20								2925	220			219							焼土
雲宮-51	J		14	20								2979	97			112							焼土
雲宮-52	D		7	9		118	69	149				64	2524	435									焼土
雲宮-53	G		8	20		204						4139	244			286							壺-中型-円弧文
雲宮-54	G		8	20		119						5101	413										壺-中型-木ノ葉文
雲宮-55	G		8	20		171						3590	146										甕-中型-山形文
雲宮-56	C		6	20		78	81					5761	162										壺-中型-円弧文(?)
雲宮-57	G		8	20		189						3763	192	139		181							壺-中型-竹管文
雲宮-58	G		8	20		144						4789	308										その他
雲宮-59	C		6	20		119	80					4730	597			544							壺-中型-竹管文
雲宮-60	E		7	20		127	102					3891	438										壺-中型-木ノ葉文
雲宮-61	E		7	20		136	74					3782	434	84									壺-中型-矢印の絵
雲宮-62	A		5	11			186	192				2279	168										壺-中型-竹管文(?)

付表8 タイプ分類一覧表

試料 No	タイプ 分類	備考	試料 No	タイプ 分類	備考
雲宮-62	A	壺-中型-竹管紋(?)	雲宮-10	G	壺-中型-沈線2・4
雲宮-2	B	甕-中型-生駒西麓?	雲宮-11	G	壺-中型-貼り付け凸帯
雲宮-21	B	壺-中型	雲宮-12	G	壺-中型-三角錐型浮紋
雲宮-49	C	壺-中型-段	雲宮-13	G	壺-中型-段
雲宮-56	C	壺-中型-円弧紋(?)	雲宮-15	G	壺-大型-貼り付け凸帯
雲宮-59	C	壺-中型-竹管紋	雲宮-16	G	甕-中型-刷毛目
雲宮-14	D	鉢-中型-ヘラミガキ	雲宮-17	G	甕-中型-沈線7
雲宮-29	D	鉢-大型-ヘラミガキ	雲宮-20	G	壺-大型-沈線3・3
雲宮-31	D	甕-中型-沈線5	雲宮-23	G	壺-中型-円弧紋
雲宮-52	D	焼土	雲宮-24	G	壺-大型(甕?)
雲宮-4	E	壺-中型-沈線2・2	雲宮-26	G	壺-中型-段
雲宮-18	E	甕-大型-山形紋	雲宮-27	G	壺-中型-貼り付け凸帯
雲宮-22	E	壺-大型(甕?)	雲宮-28	G	壺-大型-貼り付け凸帯
雲宮-33	E	甕-中型-刺突紋	雲宮-30	G	壺-中型-刻目貼り付け凸帯
雲宮-35	E	甕-中型-沈線2	雲宮-32	G	壺-中型-沈線5・7
雲宮-38	E	壺-中型-沈線2・3	雲宮-39	G	鉢-中型-ヘラミガキ
雲宮-45	E	甕-中型-逆L字	雲宮-40	G	鉢-中型-無紋
雲宮-47	E	壺-大型-貼り付け凸帯	雲宮-42	G	壺-中型-刺突紋
雲宮-60	E	壺-中型-木葉紋	雲宮-44	G	鉢-中型-無紋
雲宮-61	E	壺-中型-矢印の絵	雲宮-46	G	甕-無紋
雲宮-1	F	壺-大型	雲宮-48	G	鉢-小型-無紋
雲宮-6	F	水差し	雲宮-53	G	壺-中型-円弧紋
雲宮-9	F	壺-大型-渦巻紋	雲宮-54	G	壺-中型-木葉紋
雲宮-19	F	鉢-大型-貼り付けつまみ	雲宮-55	G	甕-中型-山形紋
雲宮-34	F	壺-中型-無紋(ヘラミガキ)	雲宮-57	G	壺-中型-竹管紋
雲宮-41	F	甕-中型-刷毛目	雲宮-58	G	その他
雲宮-43	F	鉢-大型-沈線3	雲宮-37	H	鉢-小型-四方つまみ
雲宮-3	G	甕	雲宮-36	I	甕-中型-沈線2
雲宮-5	G	甕-中型-口縁内沈線	雲宮-25	J	壺-大型(甕?)
雲宮-7	G	壺-中型-木葉紋	雲宮-50	J	焼土
雲宮-8	G	壺-中型-貼り付け凸帯	雲宮-51	J	焼土

のおの固有の石英と斜長石比を有しているといえる。この固有の比率を有する砂をどの程度粘土中に混入するかは各々の集団の有する固有の技術の一端と考えられる。第11図Q t—P 1 図(器種別)、第11図Q t—P 1 図(層位別)に示すように土器はI～Xの10グループと“その他”に分類された。全体として分散傾向にあり、多種の土器が含まれているように見受けられる。各グループについての検討は第11図によるものである。

Iグループ：EとGタイプの胎土で、沈線を施した土器が主体となる。器種的には中型の壺が集り、大、中の鉢、甕が混在する。SX60第1層出土の中型の壺が主体で、SX76第2層、SX60第5層と“その他”の土器が混在する。

IIグループ：Gタイプの胎土の土器が集中する。貼り付け凸帯と無紋の土器が主体で、山形紋、木葉紋などが混在する。器種的には中型の壺と甕が主体で、大・中型の鉢、大型の壺が混在する。

付表9 Qt-Pl一覧表

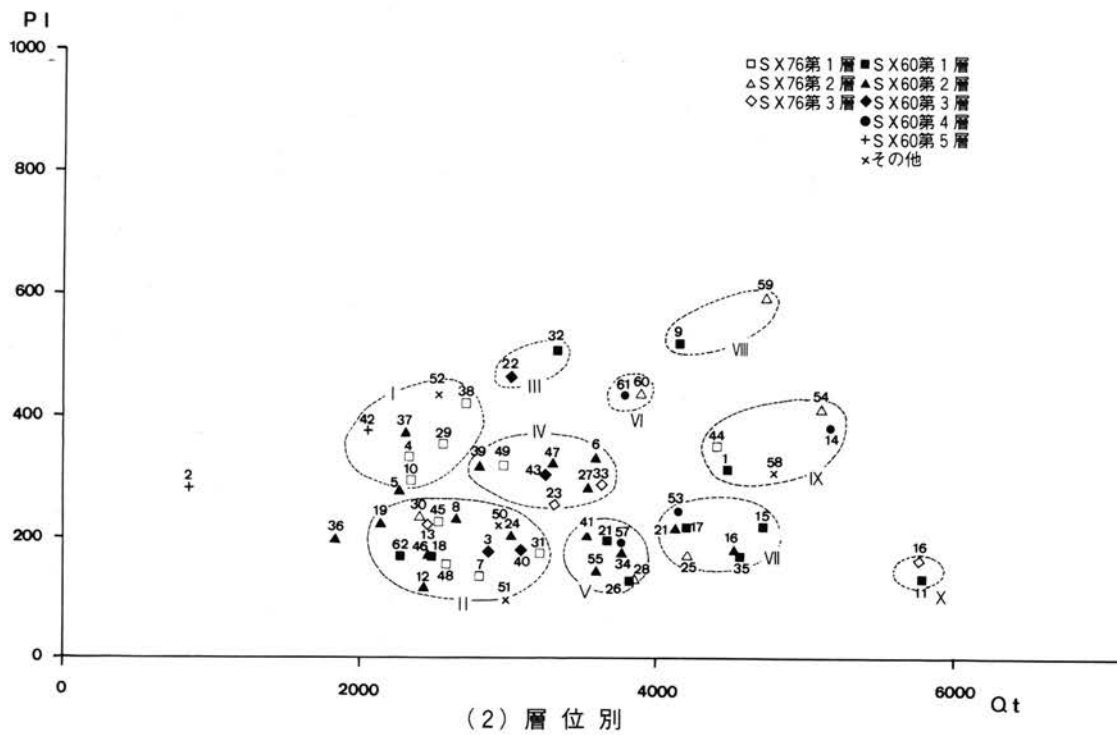
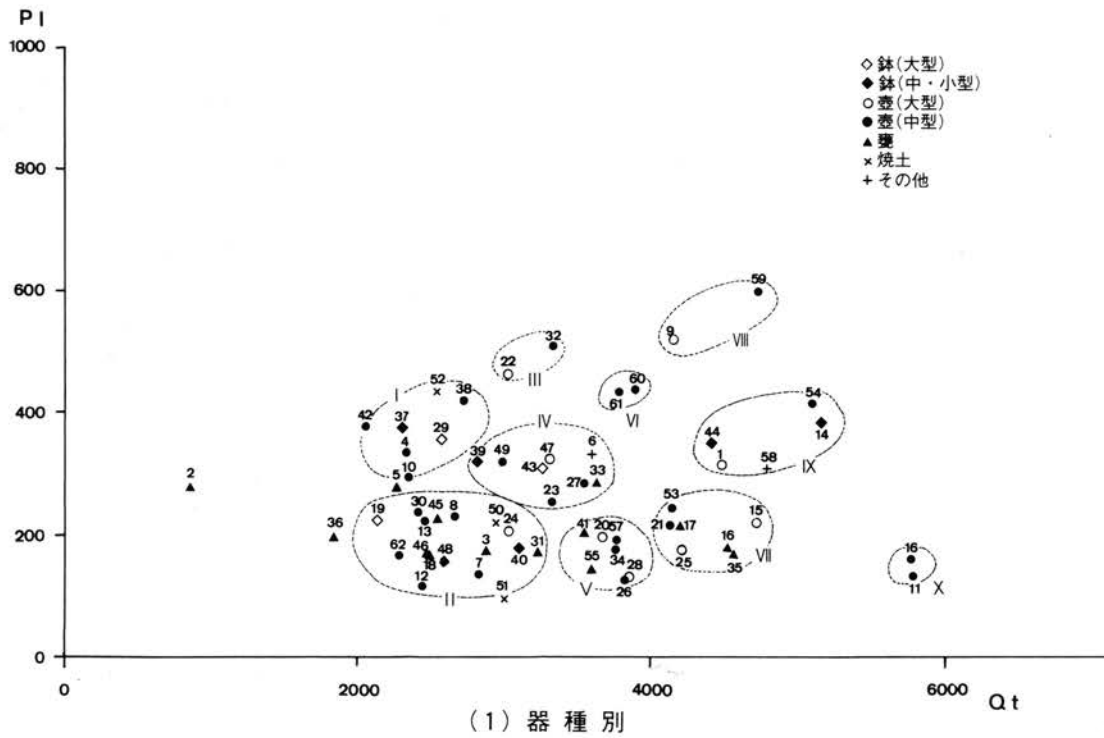
試料 No	Qt	Pl	備考	試料 No	Qt	Pl	備考
			その他	雲宮-13	2452	223	壺-中型-段
雲宮-58	4789	308	その他	雲宮-26	3820	127	壺-中型-段
雲宮-6	3581	333		雲宮-49	2963	319	壺-中型-段
			焼土	雲宮-57	3763	192	壺-中型-竹管紋
雲宮-50	2925	220	焼土	雲宮-59	4730	597	壺-中型-竹管紋
雲宮-51	2979	97	焼土	雲宮-62	2279	168	壺-中型-竹管紋(?)
雲宮-52	2524	435	焼土	雲宮-4	2326	335	壺-中型-沈線2・2
			鉢	雲宮-38	2710	420	壺-中型-沈線2・3
雲宮-37	2304	375	鉢-小型-四方つまみ	雲宮-10	2345	295	壺-中型-沈線2・4
雲宮-48	2577	157	鉢-小型-無紋	雲宮-32	3313	508	壺-中型-沈線5・7
雲宮-29	2559	356	鉢-大型-ヘラミガキ	雲宮-11	5778	133	壺-中型-貼り付け凸帯
雲宮-43	3245	309	鉢-大型-沈線3	雲宮-8	2648	231	壺-中型-貼り付け凸帯
雲宮-19	2134	225	鉢-大型-貼り付けつまみ	雲宮-27	3532	285	壺-中型-貼り付け凸帯
雲宮-14	5161	383	鉢-中型-ヘラミガキ	雲宮-34	3763	176	壺-中型-無紋(ヘラミガキ)
雲宮-39	2802	320	鉢-中型-ヘラミガキ	雲宮-7	2812	136	壺-中型-木葉紋
雲宮-40	3082	179	鉢-中型-無紋	雲宮-54	5101	413	壺-中型-木葉紋
雲宮-44	4413	350	鉢-中型-無紋	雲宮-60	3891	438	壺-中型-木葉紋
			壺	雲宮-61	3782	434	壺-中型-矢印の絵
雲宮-1	4482	314	壺-大型				甕
雲宮-22	3005	463	壺-大型(甕?)	雲宮-3	2860	176	甕
雲宮-24	3015	206	壺-大型(甕?)	雲宮-18	2484	169	甕-大型-山形紋
雲宮-25	4210	175	壺-大型(甕?)	雲宮-45	2532	228	甕-中型-逆L字
雲宮-9	4155	519	壺-大型-渦巻紋	雲宮-5	2264	279	甕-中型-口縁内沈線
雲宮-20	3665	197	壺-大型-沈線3・3	雲宮-16	4525	181	甕-中型-刷毛目
雲宮-15	4722	220	壺-大型-貼り付け凸帯	雲宮-41	3530	205	甕-中型-刷毛目
雲宮-28	3857	132	壺-大型-貼り付け凸帯	雲宮-55	3590	146	甕-中型-山形紋
雲宮-47	3292	324	壺-大型-貼り付け凸帯	雲宮-33	3624	288	甕-中型-刺突紋
雲宮-21	4128	216	壺-中型	雲宮-2	855	281	甕-中型-生駒西麓?
雲宮-23	3305	255	壺-中型-円弧紋	雲宮-35	4568	170	甕-中型-沈線2
雲宮-53	4139	244	壺-中型-円弧紋	雲宮-36	1840	199	甕-中型-沈線2
雲宮-56	5761	162	壺-中型-円弧紋(?)	雲宮-31	3213	174	甕-中型-沈線5
雲宮-30	2402	237	壺-中型-刻目貼り付け凸帯	雲宮-17	4196	216	甕-中型-沈線7
雲宮-12	2434	117	壺-中型-三角錐型浮紋	雲宮-46	2463	172	甕-無紋
雲宮-42	2052	377	壺-中型-刺突紋				

S X76第1層、第2層、第3層とS X60第1層、第2層、第3層の土器が平均して混在する。

Ⅲグループ：斜長石の強度が高く異質である。胎土はEとGタイプが各1個。大型と小型の壺で構成される。S X76第1層と第3層の土器が各1個である。

Ⅳグループ：EとGタイプの胎土が主体の土器で、中型の壺が3個、他は大・中型鉢、大型壺、甕の各1個が混在する。S X76第2層の土器が4個、S X60第3層が2個で、S X60第1層は1個の構成である。

Ⅴグループ：Gタイプの胎土が主体で、段付、沈線、貼り付け凸帯、竹管紋、山形紋などの土器が混在し、統一性がない。器種的には大型の壺と中型の壺が主体で、甕が混在する。S X60第



第11図 Qt-Pt図

2層、S X76第2層とS X60第1層と第4層の土器が混在する。

Ⅵグループ：Eタイプの胎土で、中型の甕2個で構成される。S X60第2層と第4層の土器が混在する。

Ⅶグループ：EとGタイプの土器が集中し、沈線の土器が主体となる。器種的には甕が主体となり、大型と中型の壺が共存する。S X76第1層と第2層の土器とS X60第1層と第4層の土器が混在する。

Ⅷグループ：斜長石の強度が高く異質。大型と中型の壺で構成される。

Ⅸグループ：鉢と壺で構成される。胎土はGタイプが主体となる。S X76第1層とS X60第1層、第2層、第4層が混在する。

Xグループ：石英の強度が高く異質である。胎土はGタイプで、器種は中型の壺だけで構成される。S X76第1層とS X60第3層が共存する。

“その他”：雲宮-2は角閃石の強度が高い生駒西麓産で、異質である。

雲宮-36はIタイプの胎土で、異質である。この2個の土器は各グループから離れており、他地域からの搬入品の可能性が高い。

以上の結果から明らかなように、土器は全体に分散傾向にあり、多種にわたるものと推察される。器種も各グループで統一性がなく、混在する。出土層準も同様で各層から出土した土器が各グループで混在する。

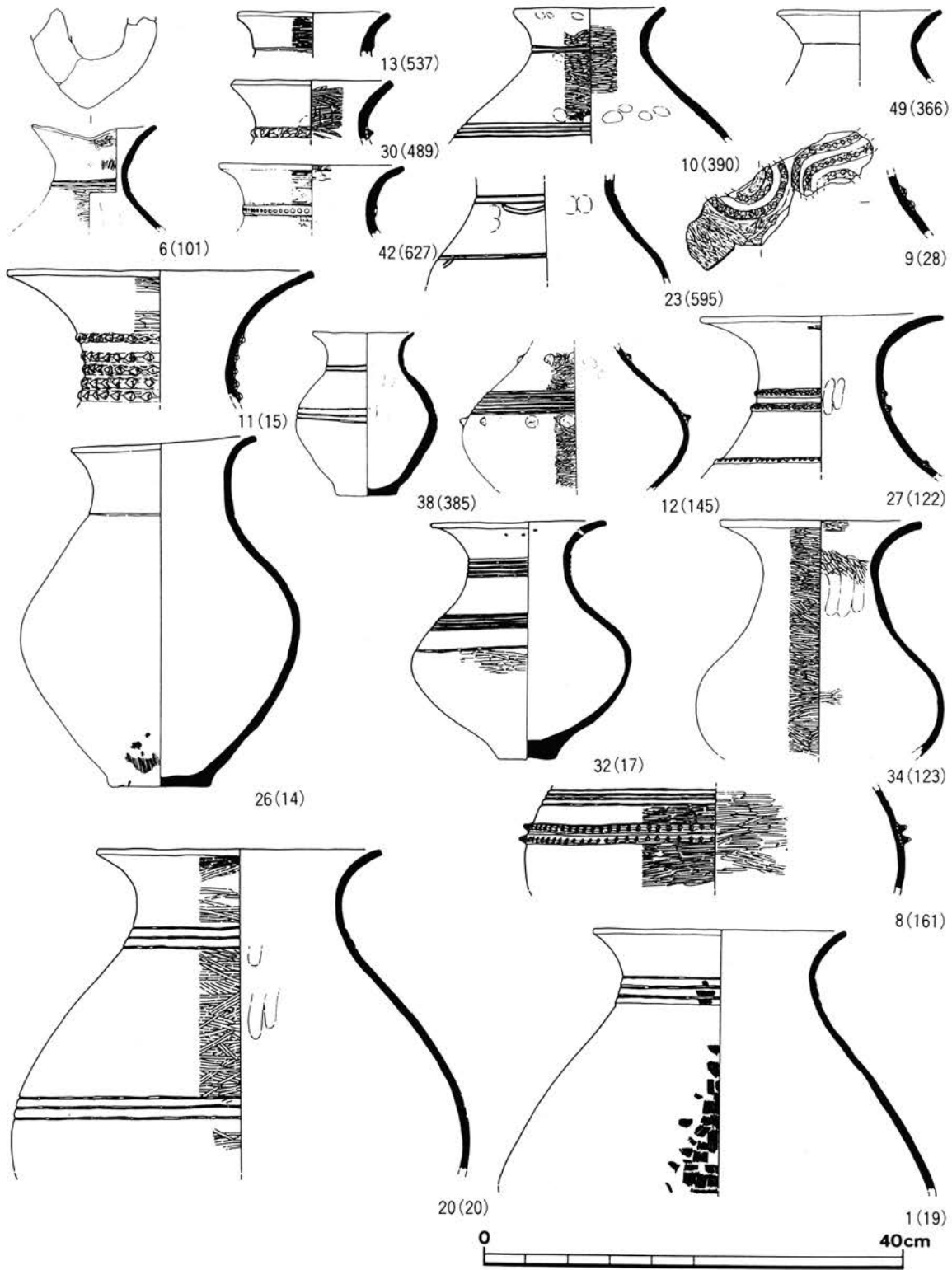
(4)まとめ

1)土器胎土はGタイプが全体の約50%を占め、E・Fタイプなどを加えると全体の80%近くがこの3タイプに含まれることになり、固体数の多いことから判断して、これらは在地あるいは在地近傍の可能性が高い胎土と判断された。

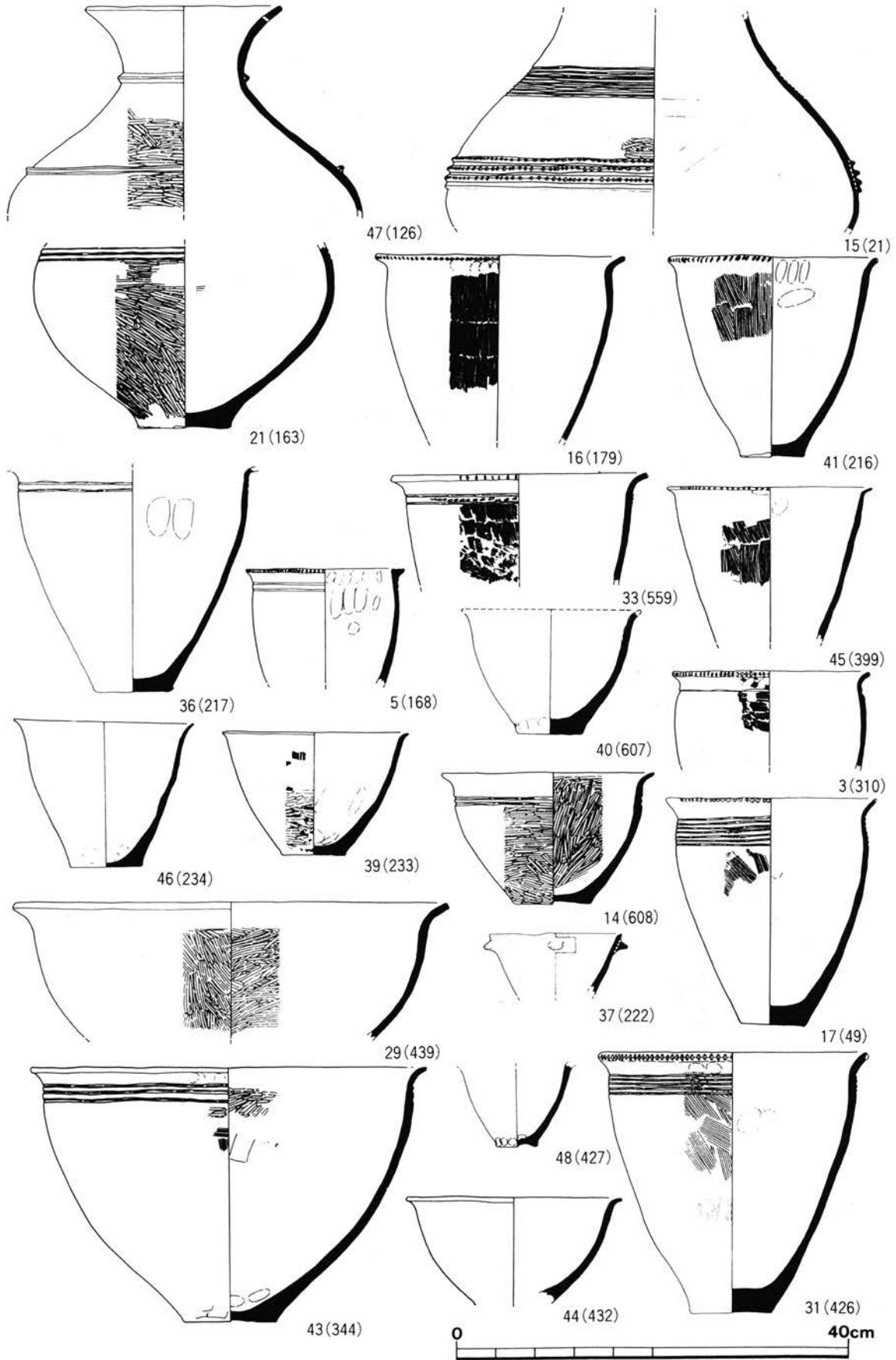
2)石英(Q t)と斜長石(P l)の相関では土器は全体に分散傾向にある。土器はI～Xの10グループと“その他”に分類された。各グループについて土器の器種と出土層準及び胎土のタイプを対比して分析した。各グループは器種による統一性がなく、出土層準による統一性も認められず、器種と出土層準が混在するのが特徴である。“その他”の土器のうち、雲宮-2は石英の強度が低く、角閃石の強度が高い生駒西麓タイプで、異質である。雲宮-36はIタイプの胎土で、異質である。この2個は搬入品の可能性が高いと推察される。

3)遺跡から出土した焼土は雲宮-50～52の3個である。これらは鉱物組成が異質で、電子顕微鏡によるガラスの分析では比較的大きなガラスが生成し、高い温度で焼かれていることが判明した。

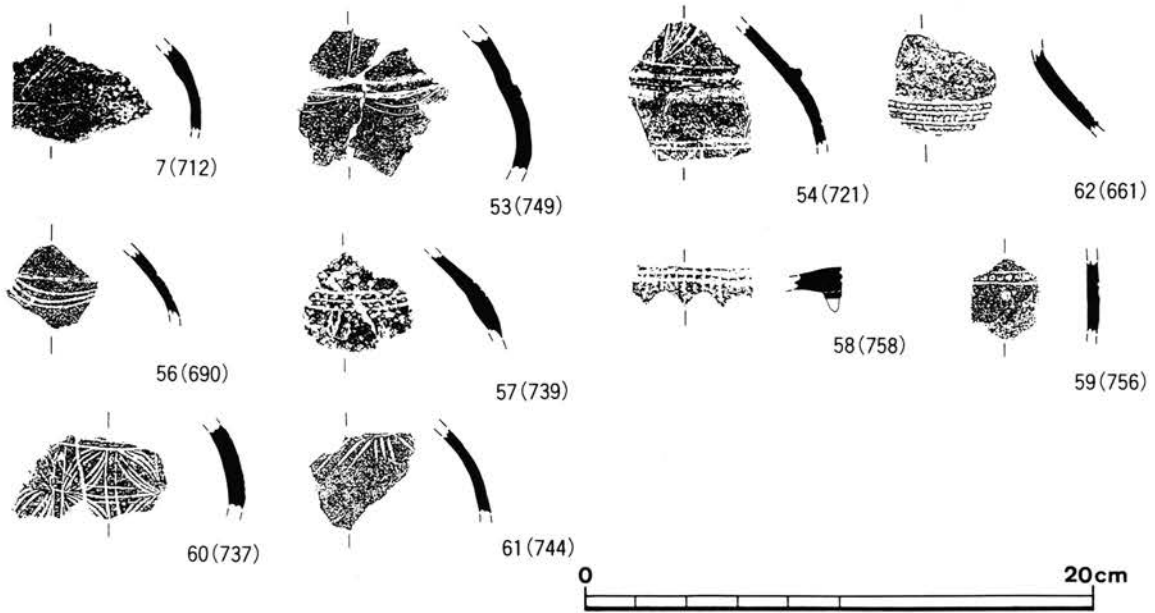
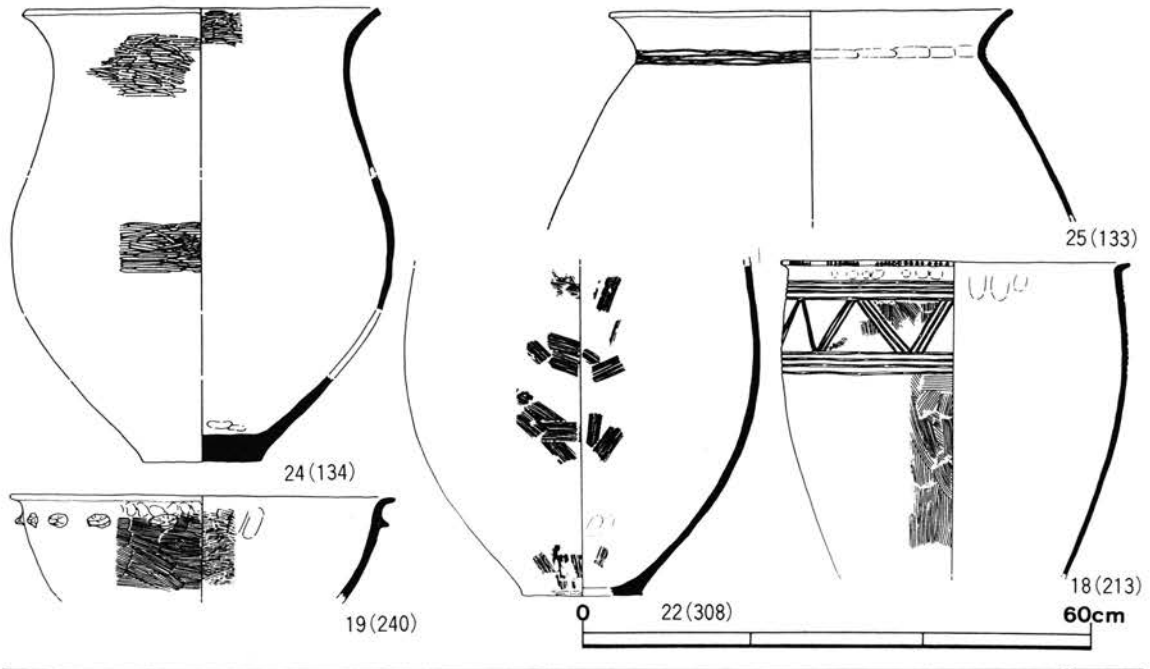
(井上 巖)



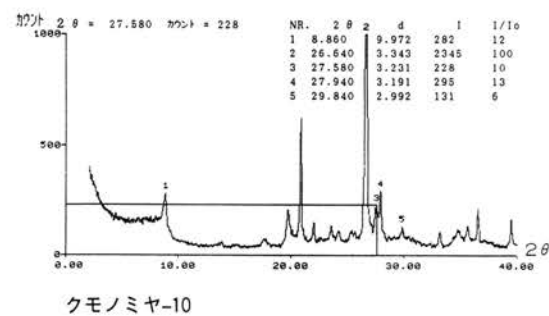
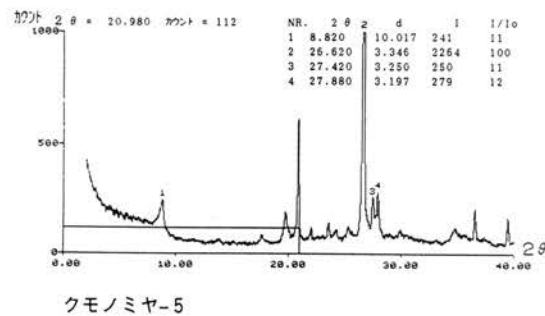
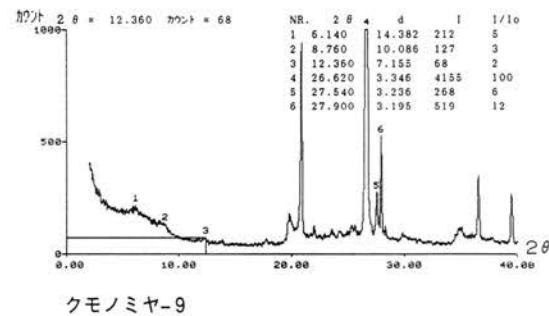
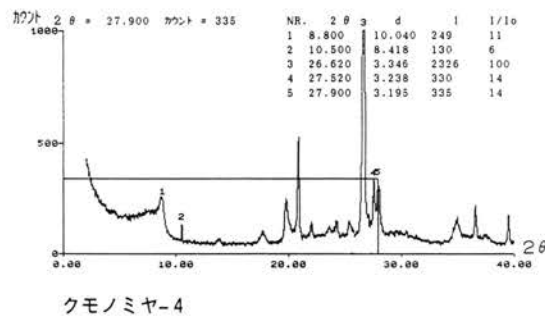
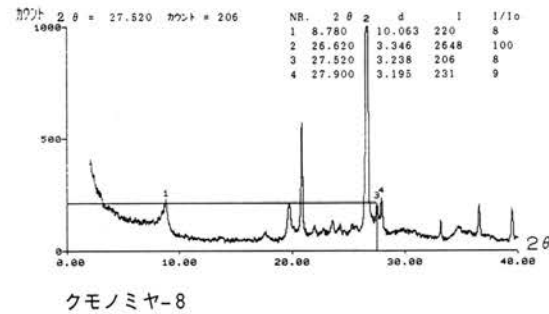
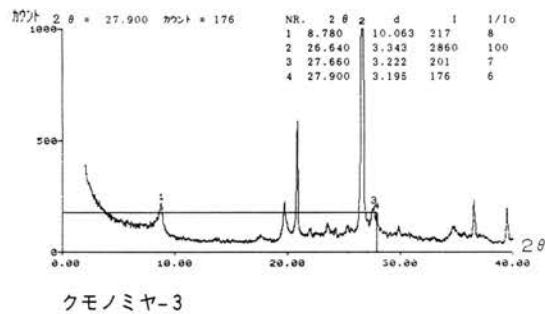
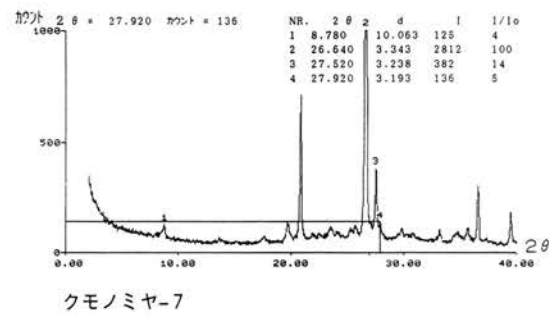
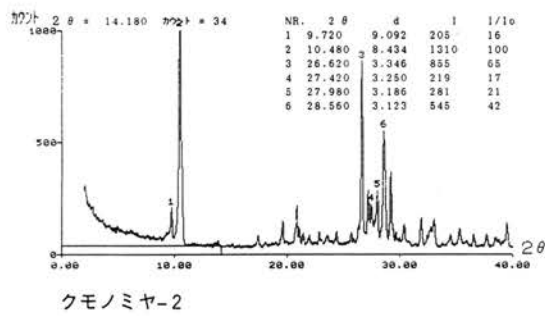
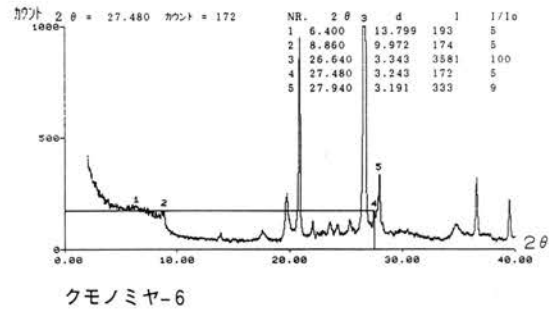
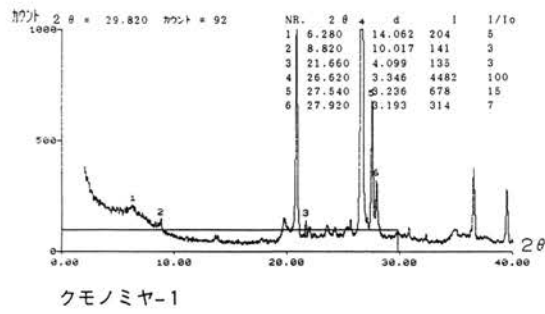
第12図 胎土分析資料実測図(1)



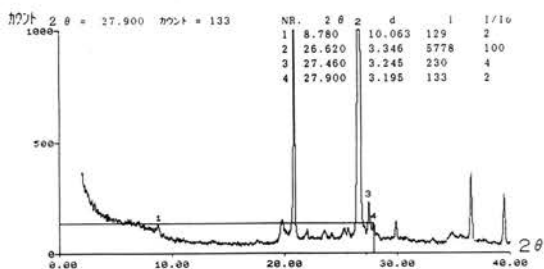
第13図 胎土分析資料実測図(2)



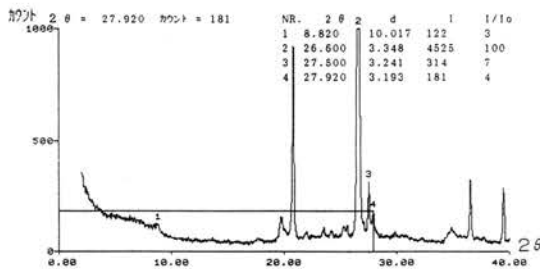
第14図 胎土分析資料実測図(3)



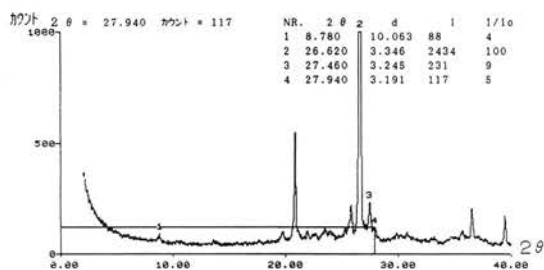
第15図 X線解析データ(1)



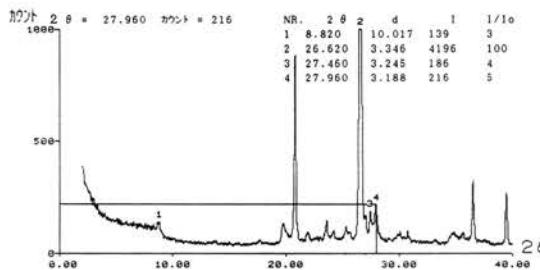
クモノミヤ-11



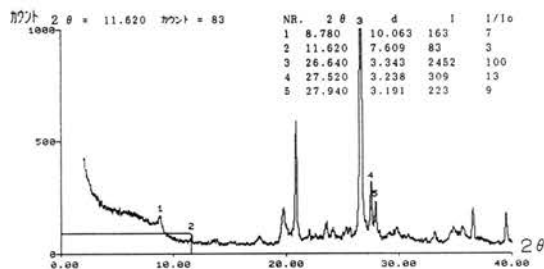
クモノミヤ-16



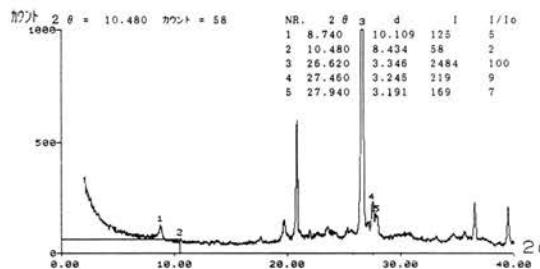
クモノミヤ-12



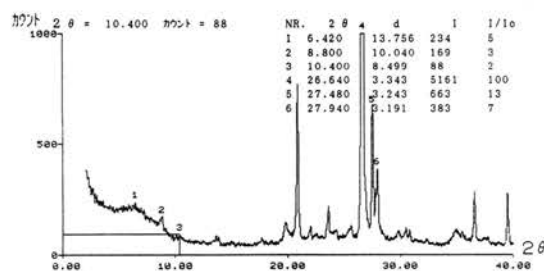
クモノミヤ-17



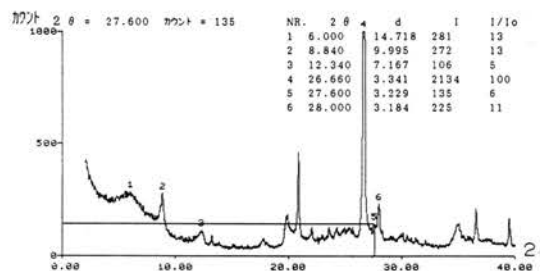
クモノミヤ-13



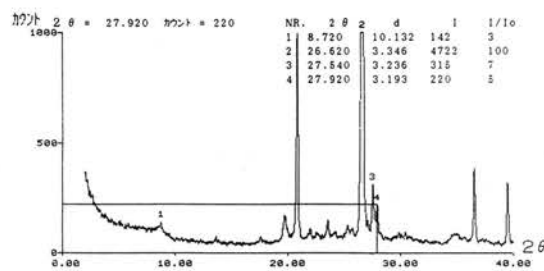
クモノミヤ-18



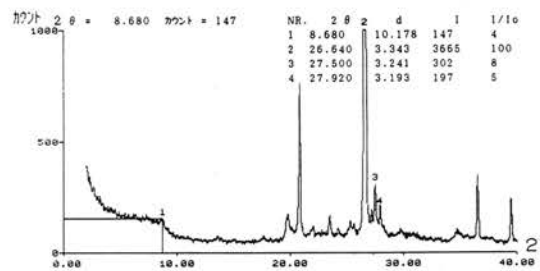
クモノミヤ-14



クモノミヤ-19

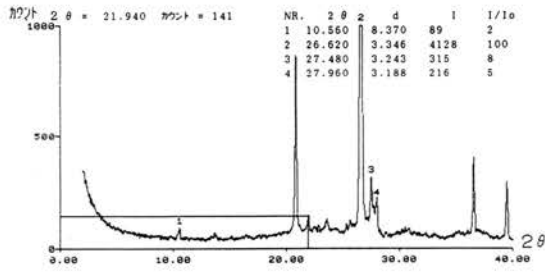


クモノミヤ-15

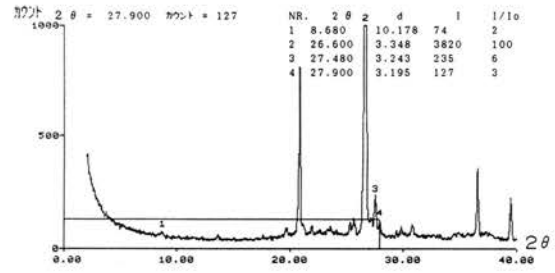


クモノミヤ-20

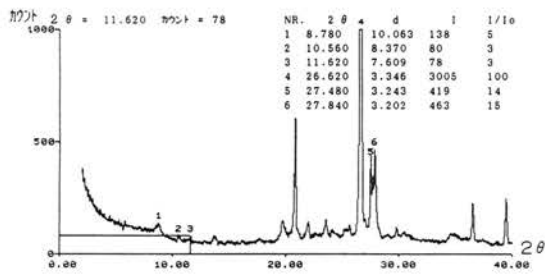
第16図 X線解析データ(2)



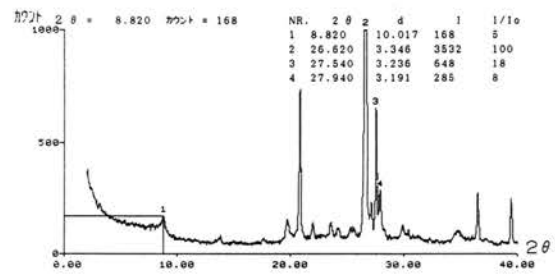
クモノミヤ-21



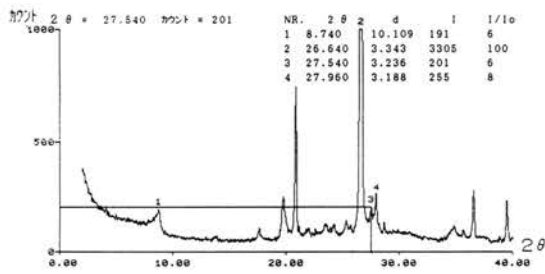
クモノミヤ-26



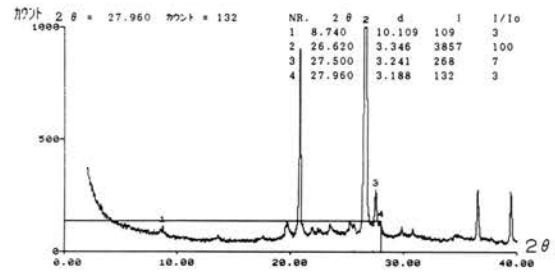
クモノミヤ-22



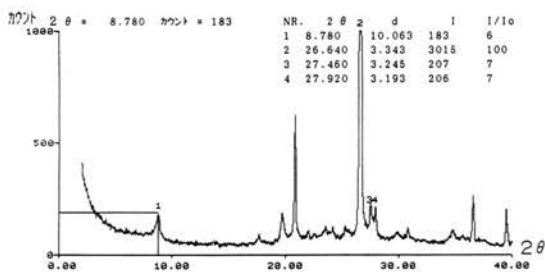
クモノミヤ-27



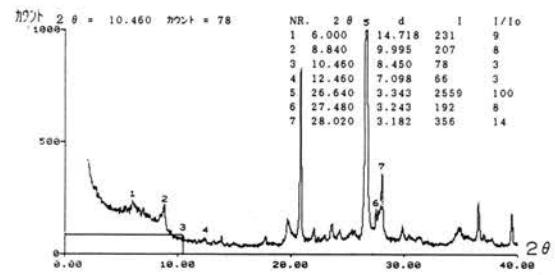
クモノミヤ-23



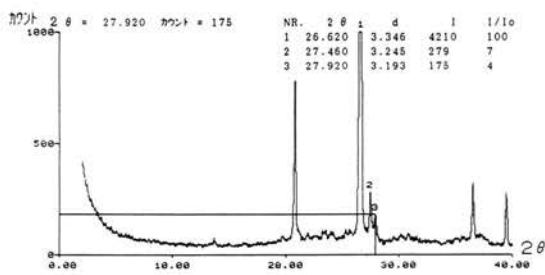
クモノミヤ-28



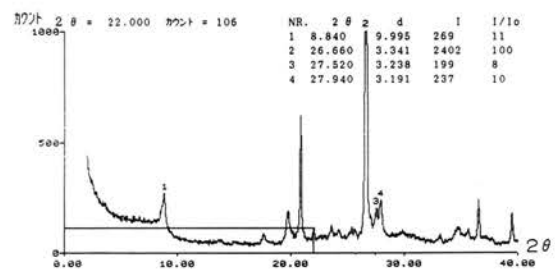
クモノミヤ-24



クモノミヤ-29

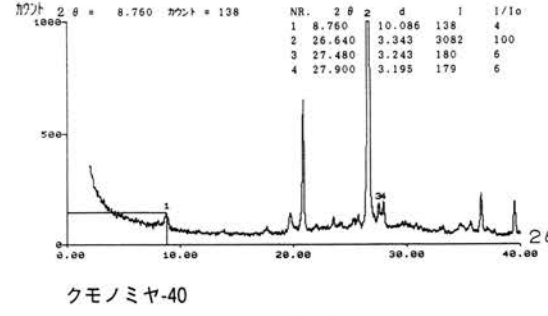
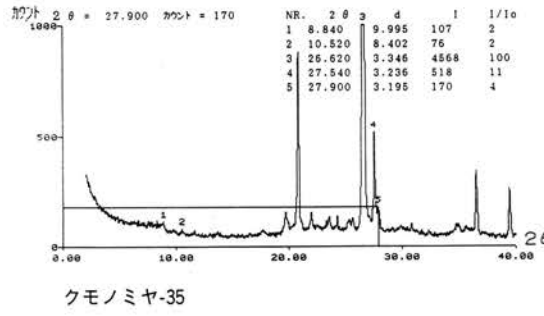
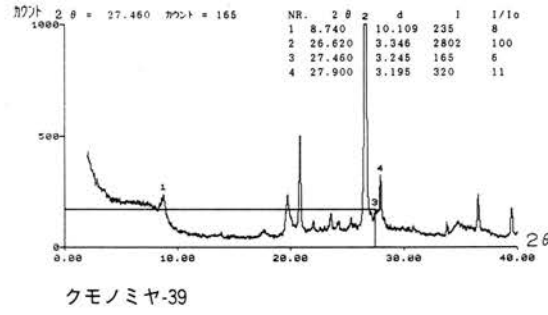
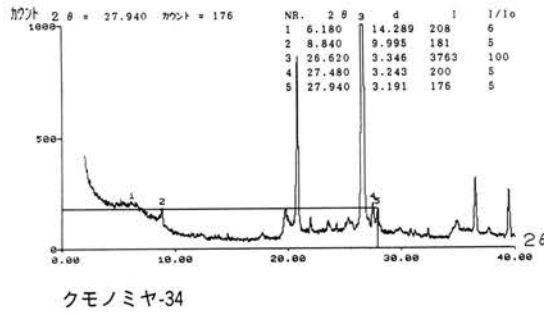
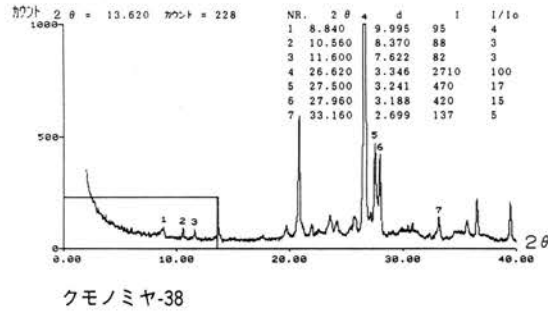
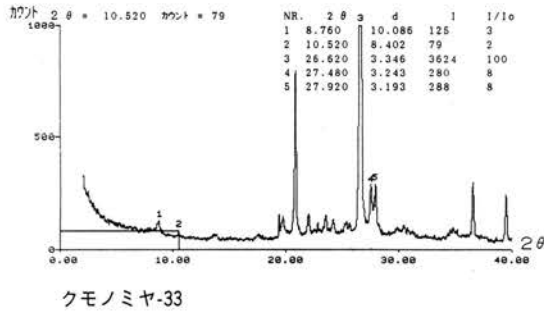
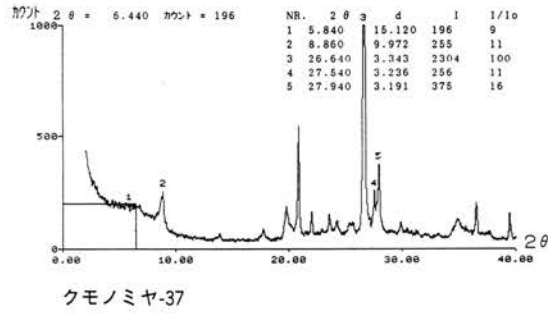
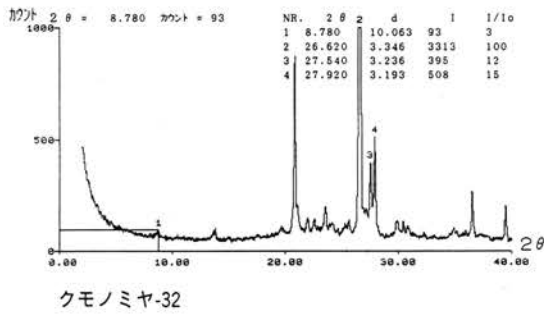
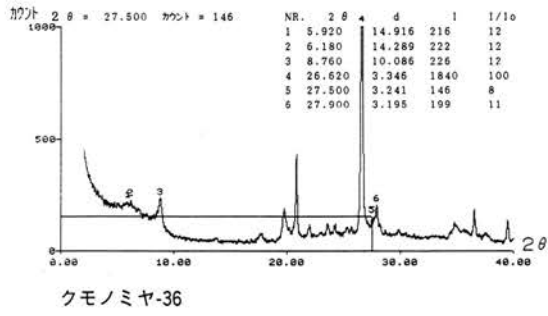
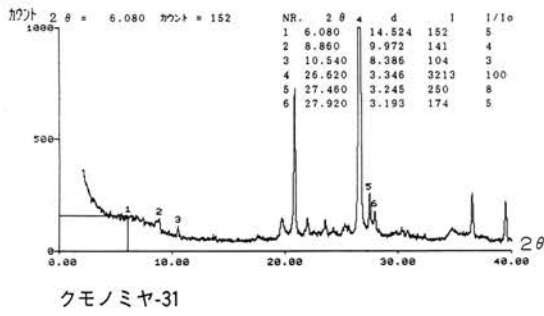


クモノミヤ-25

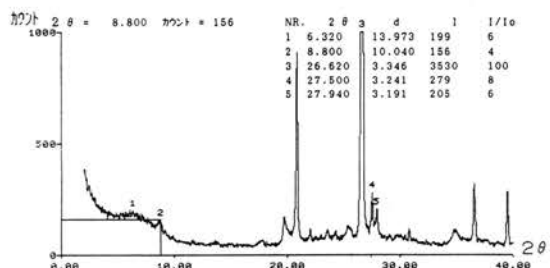


クモノミヤ-30

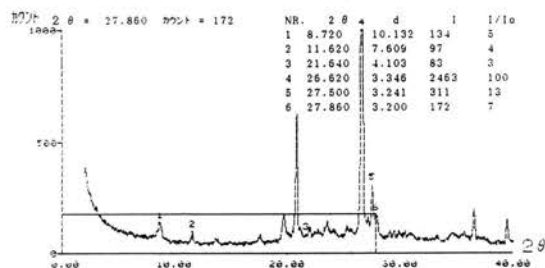
第17図 X線解析データ(3)



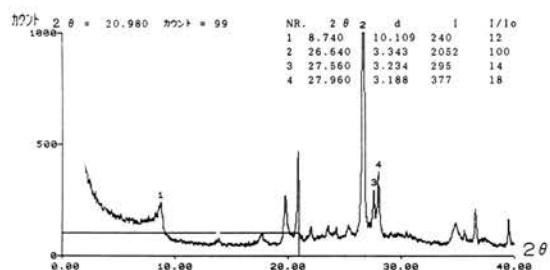
第18図 X線解析データ(4)



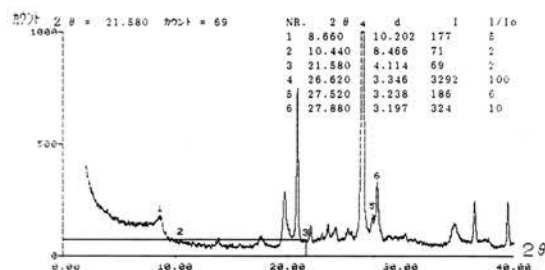
クモノミヤ-41



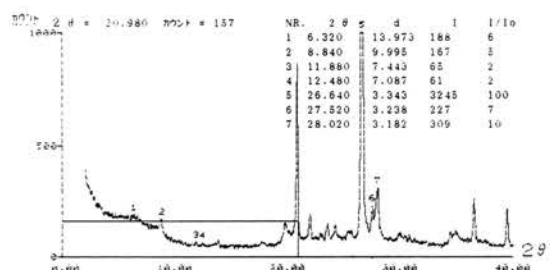
クモノミヤ-46



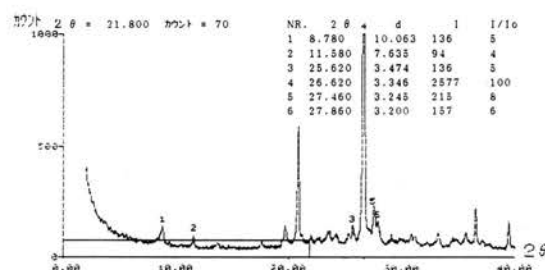
クモノミヤ-42



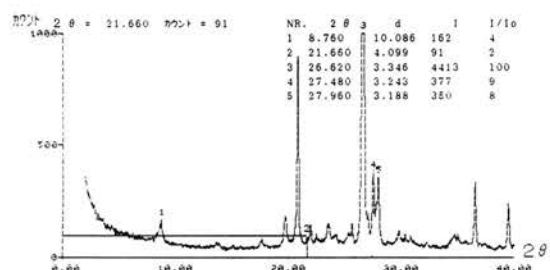
クモノミヤ-47



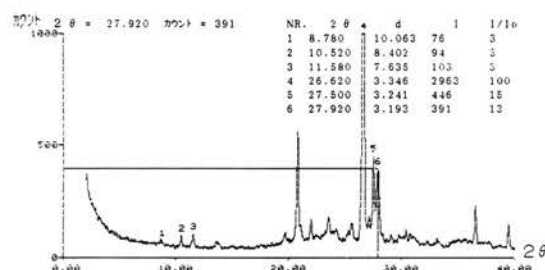
クモノミヤ-43



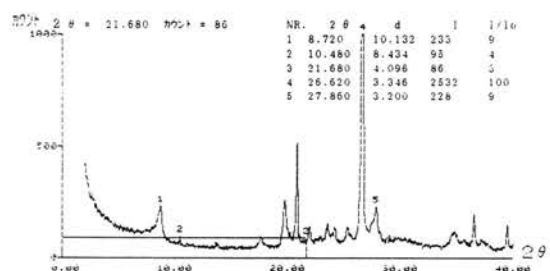
クモノミヤ-48



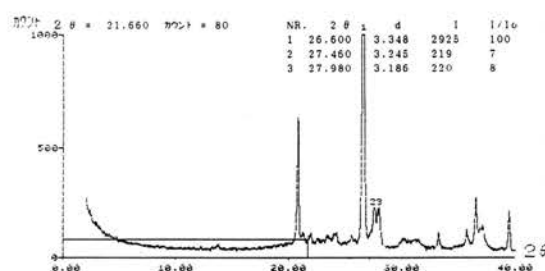
クモノミヤ-44



クモノミヤ-49

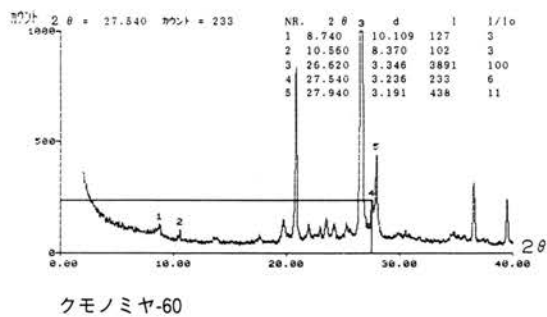
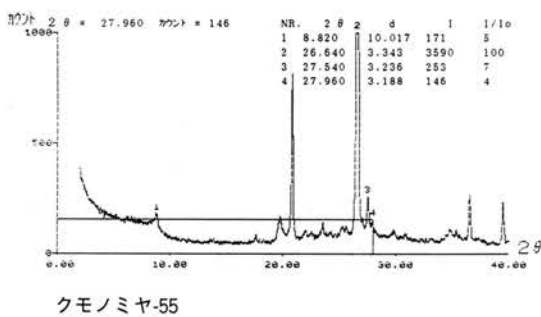
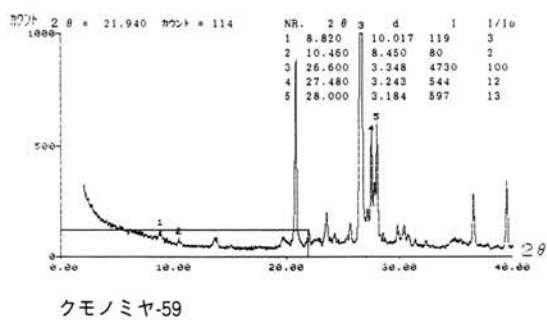
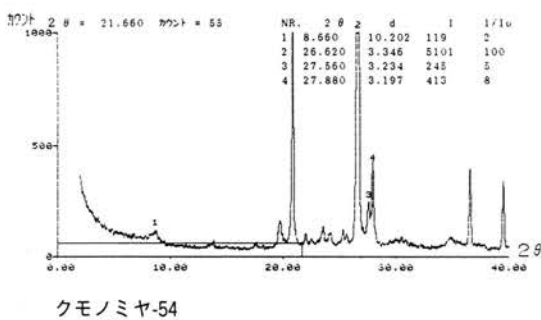
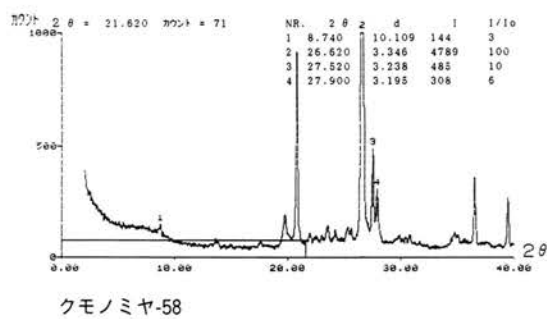
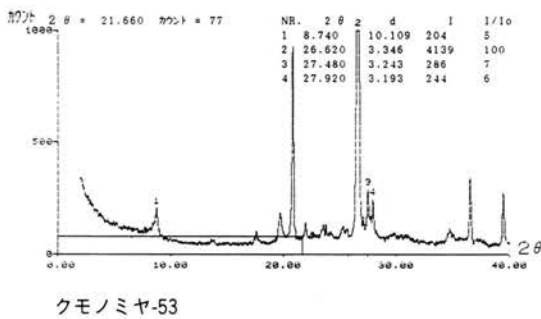
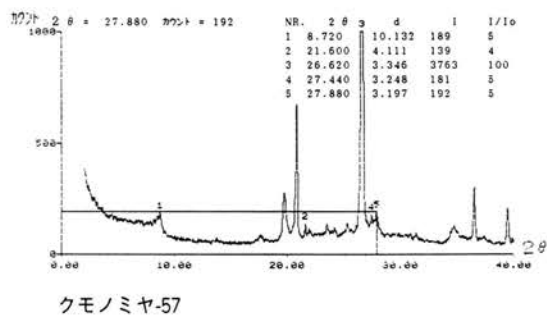
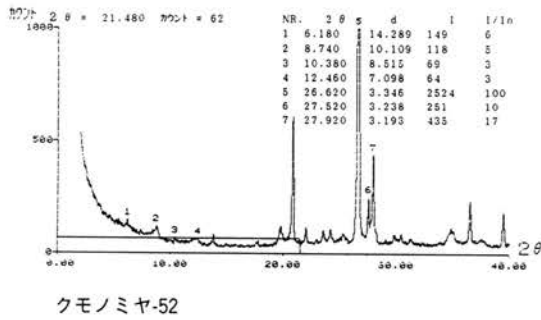
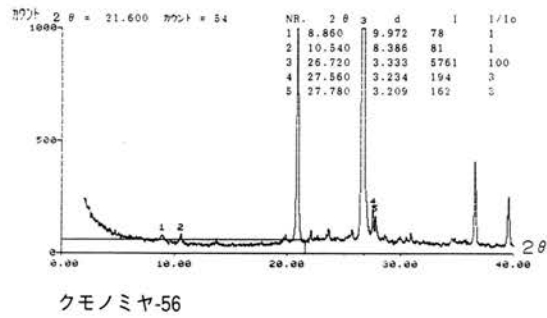
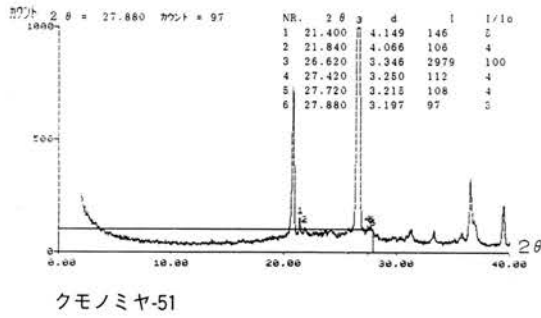


クモノミヤ-45

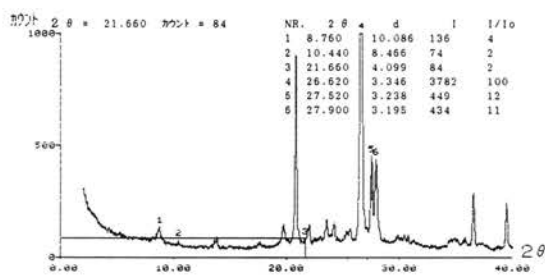


クモノミヤ-50

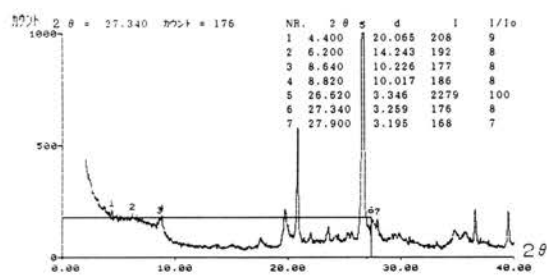
第19図 X線解析データ (5)



第20図 X線解析データ(6)



クモノミヤ-61



クモノミヤ-62

第21図 X線解析データ(7)

第6章 考 察

1. 縄紋時代の雲宮遺跡について

西日本では東日本に比べて縄紋時代遺跡の数が少ないことは、以前からいわれてきたことである。しかし、雲宮遺跡が所在する京都盆地西南部・桂川右岸に広がる乙訓地域は、各機関による多数の発掘調査の成果もあって、京都府内でも屈指の縄紋時代遺跡の密集地域となっている。本報告では、弥生時代以前の雲宮遺跡の姿をこれまでの調査事例から検討し、その後桂川右岸に広がる低湿地の縄紋時代遺跡を中心に、乙訓地域の縄紋時代を概観し、雲宮遺跡の位置付けを行いたい。

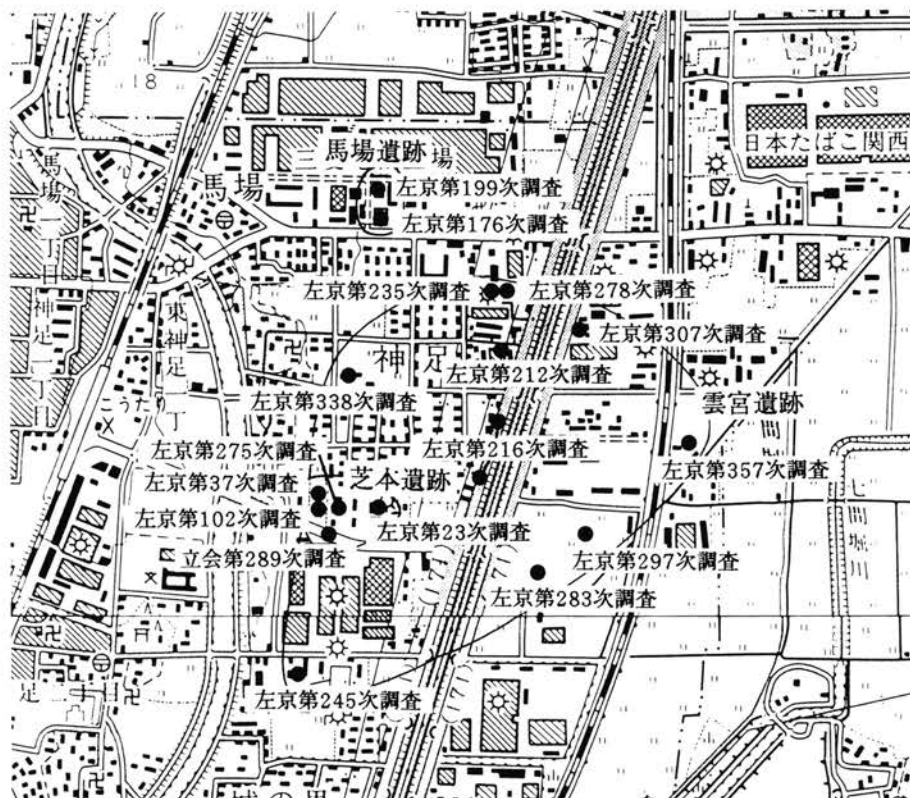
(1) 周辺の縄紋時代

雲宮遺跡からは、今回の調査(左京第216次調査)でも、縄紋時代の遺物が出土していることが報告されている。7ブロック第9トレンチの古墳時代の自然流路S R216043の埋土からは、中期船元式の土器片が1点出土している。また、同第10トレンチの弥生時代包含層からは、晩期長原式土器が出土している(戸原他1991)。

その他もあわせると、雲宮遺跡では計10回の調査で縄紋時代の遺構及び遺物が出土している。そして、雲宮遺跡を取り囲むようにしてその東部に芝本遺跡が、また北東に隣接して馬場遺跡が同様に緩扇状地に立地しているが、この両遺跡からも縄紋時代の遺物が数次の調査で出土している。遺跡名こそ異なって報告されているものの、「遺跡群」としてとらえる場合、その時代的消長や他の遺跡群との関係から考えれば、両遺跡が雲宮遺跡と当時一つのまとまりを形成していたと考えてよいと思われ、本報告でもその内容を検討することにした。この「雲宮縄紋遺跡群」を形成する3遺跡の調査について、その位置を第22図、その内容を付表10にまとめた。

まず雲宮遺跡では、前述の左京第216次調査で出土している船元I式土器が最も古く位置付けられる。しかし、古墳時代の流路から出土したこの土器片はかなり磨耗しており、上流にある中期の集落から流れ込んできた可能性も考えられる。続く段階では、詳細な時期は不明であるが、後期土器の出土も左京第245次調査で確認されている。しかし、ともに遺構は確認されておらず、船元式土器が後世の自然流路埋土から出土していることや、左京第245次調査地は他の調査地が立地する小畑川右岸の緩扇状地とは離れた南部の後背湿地に位置している(長岡京市史編さん委員会1991)ことから、これらの時期の雲宮遺跡の集落は、それほど発達していなかったと考えられる。

晩期に入っても前半期の明確な遺物はないため、後半になって雲宮遺跡の地域は本格的に発展すると思われ、それは遺構・遺物の検出・出土例が格段に増加することから裏付けられる。出土している晩期土器で時期の決定できる資料は少ないが、確認できる範囲では船橋～長原式土器が



第22図 雲宮縄紋遺跡群位置図

あり、突帯紋土器期以降に集落が発達したと考えられる。しかし、これらの晩期遺物のほとんどは、前述の中～後期の遺物と同様に、後世の遺構埋土や包含層などからの出土にとどまっており、具体的に当時の生活を復原するにはまだまだ情報が少なすぎる。また、晩期の遺物が弥生前期の土器に伴って出土する例も多く、このことは縄紋時代晩期から弥生時代にかけて継続して集落が営まれていたことを示していると考えられる。このほか、小畑川の旧河道と考えられる自然流路から遺物が出土する例が極めて多いことも指摘できる。ほとんどの調査地の遺構検出面が標高10m前後であることも含めて、当時の地形の一端を知る上で重要な情報が、これらの調査により提供されている。

以上の晩期遺物が出土した調査のうち、左京第235次調査及び同第278次の両調査は、比較的成果が多くあがったものとして注目される。両調査地は、雲宮縄紋遺跡の北端となる長岡京市馬場六ノ坪に隣接して位置している。1989年に実施された左京第235次調査では、第V遺構面で検出された自然流路から豊富な遺物が出土している。北西から南東方向に流れる自然流路S D64は最大幅約10m・深さ約1.8mを測り、そこに堆積した腐植土層から土器・木製農耕具・土偶頭部片・堅果類(イチイガシ・オニグルミ・トチ)・流木などが出土している。時期決定が可能な土器が晩期末の所産と考えられる点で、木製農耕具の存在は注目される。また、土器・土偶ともほとんど磨耗していないことから、土偶は土器と同時期のものと考えられる。もともと縄紋時代全期を通じて、土偶は京都府南部では出土例がほとんどない。わずかに、京都市伏見区の日野谷寺町遺跡で出土した、後期初頭の分銅形土偶の完形品と、同市中京区の高倉下層遺跡で出土した、晩

付表10 雲宮縄紋遺跡群調査一覧

雲宮遺跡

番号	調査名	所在地	内容	文献
1	L 212	神足神田15	弥生時代前期の土器とともに包含層から、晩期土器が出土。	白川1990
2	L 216	神足雲宮	古墳時代流路から船元式土器、包含層から長原式土器が出土。	戸原他1991
3	L 235	馬場六ノ坪1-4	自然流路から、晩期の土器・木製農耕具・土偶・堅果類・流木が出土。	中島1991
4	L 245	神足木寺町2-1他	基盤層となる21層の部分的な深掘りで後期土器片が出土。	中島1992
5	L 278	馬場六ノ坪1-4	10基の土坑が検出され、船橋～長原式期の土器片が少量出土。	中島1993
6	L 283	神足七ノ坪16-2	自然流路SD07から、晩期土器の深鉢口縁部1点が出土。	小田桐1993
7	L 297	神足拾貳11-1	晩期の土器片が数点出土。	小田桐1994
8	L 307	神足上八ノ坪12	土坑状の落ち込みSK10から、晩期と思われる土器小片が出土。	木村1995
9	L 338	神足典葉15-5	長岡京期の包含層である9層から、底部片が出土。	岩崎1996
10	L 357	神足ミドロ14-1・7	晩期～弥生時代前期の自然流路最下層から、突帯文土器が出土。	岩崎1996

芝本遺跡

番号	調査名	所在地	内容	文献
1	L 23	神足芝本1-3	包含層から、晩期滋賀里Ⅱ式土器が出土。	岩崎1985
2	L 37	神足森本18-2他	包含層から、晩期滋賀里Ⅱ式土器の細片が出土。	岩崎1985
3	L 102	神足芝本8・9	中世井戸から、土器細片が出土。	山本1984・85
4	L 275	神足芝本6	長岡京期の溝から、晩期滋賀里Ⅱ式土器が出土。	原1992
5	立会284	神足芝本	晩期土器を包含する粘質土を確認。	岩崎1993

馬場遺跡

番号	調査名	所在地	内容	文献
1	L 176	馬場図所地内	断ち割り部で晩期の深鉢が出土。	木村1989
2	L 199	馬場図所1番地	4遺構面で後・晩期の土器片が出土。その下1mで包含層を確認。	木村1990

期後葉の脚部片が挙げられる程度(菅田・辻・平方1983)である。そういった希少な出土例という意味で、まずこの土偶は重要である。さらに、その大型でかつ精巧であるという造形的特徴は、同時期の周辺地域では類例がなく、中部高地や東海地域の影響を受けたと考えられており、他地域との交流という点でも重要である。

1991年に実施された左京第278次調査は、左京第235次調査地の東隣接地が調査されている。この発掘調査の成果は、雲宮遺跡では唯一の縄紋時代遺構が検出されたことにある。左京第235次調査と同じ第V遺構面から、大小10基の土坑が検出されており、このうちSK32は長軸約5mを測って平坦な底面形状を持ち、住居跡の可能性が持たれている。各土坑からは、左京第235次調査と同じ船橋～長原式土器が少量出土している。このような調査結果から、両調査地一帯は当時の雲宮遺跡の中心地とも考えられよう。

続いて、その他の2遺跡についてみたい。芝本遺跡ではこれまでに、左京第23次・同第37次・同第102次・同第275次・立会第284次の5回の調査で、縄紋時代の遺物が出土している。しかし、いずれの調査でも、包含層から土器が出土しているにすぎない。ほとんどは晩期の土器であるが、左京第23次・同第275次調査で出土したものに滋賀里Ⅱ式土器があり、前述のように雲宮遺跡から出土している晩期土器が船橋～長原式期のものであったことを考えると、それよりは若干先行するようである。

一方、馬場遺跡では、左京第176次・同第199次の両調査がある。前者では滋賀里Ⅲb式土器の包含層が確認され、後者では自然流路から後・晩期土器片が出土し、さらに下層では縄紋時代の薄い包含層が確認されている。どちらも、出土状況や出土土器の時期などは、雲宮・芝本両遺跡でのあり方と大きく異ならない。

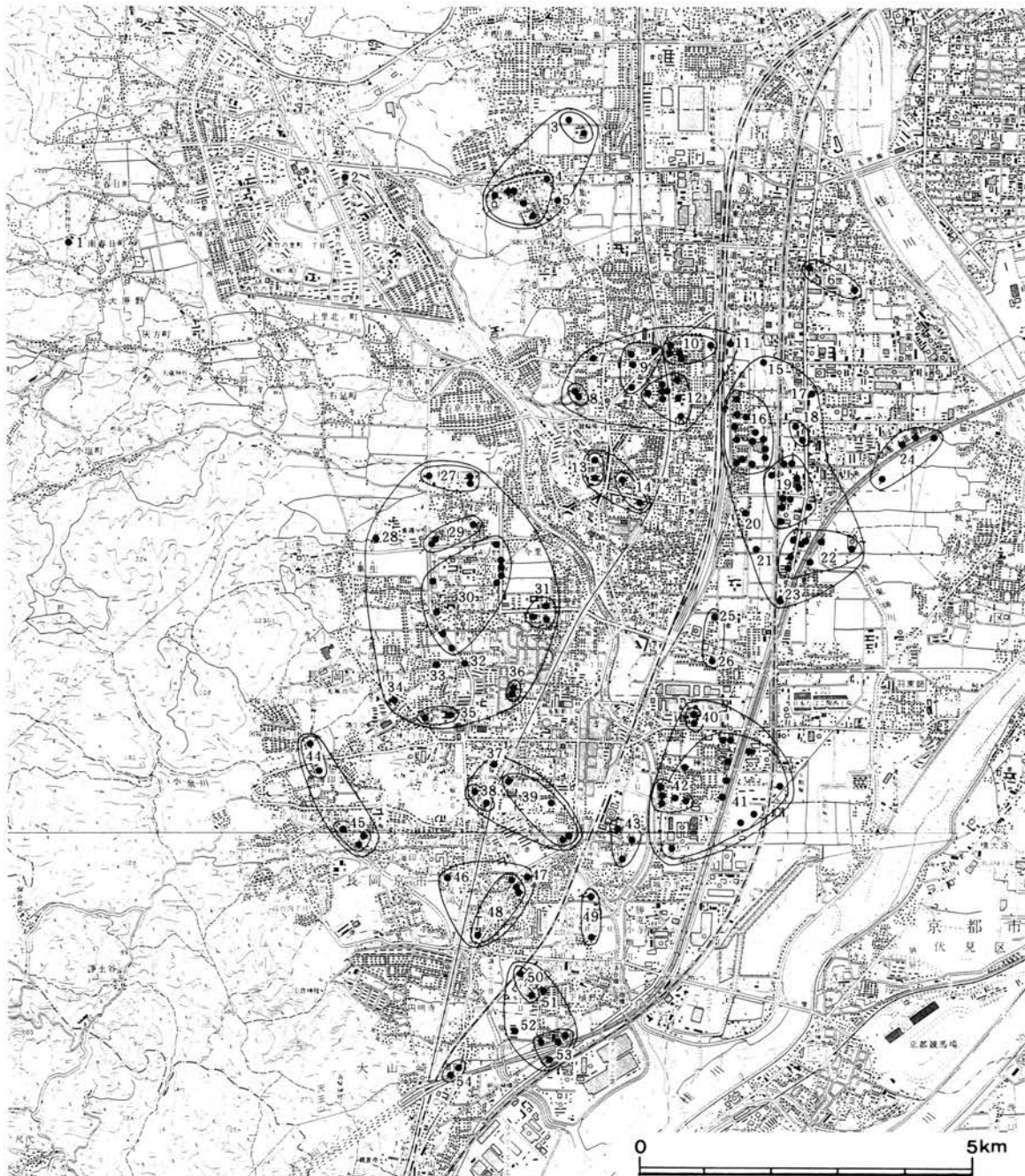
いずれの調査報告も概要のみのため、詳細は知り得ないが、これまで述べてきたように、「雲宮縄紋遺跡群」では遺構の検出例は極めて少なく、かつ少ない遺物が包含層または後世の遺構や自然流路から出土するという、限られた情報量が少ないのが現状である。しかし、そのような中でも多くの調査で晩期の遺物が出土しており、この時期に「雲宮縄紋遺跡群」が集落として成立していたのではないかと予想される。こういった雲宮遺跡の縄紋時代の様相は、乙訓地域での縄紋時代遺跡の一般的なあり方である。以下では乙訓地域全体に視野を広げ、考える。

(2) 乙訓地域の縄紋時代遺跡

乙訓地域では、少量の土器片のみが確認された遺跡も合わせると、現在51遺跡及び3調査地点で縄紋時代遺跡が確認された。これを第23図及び付表11にまとめたが、両者の番号は対応する。第23図のドットは調査地点を示し、同じ遺跡は実線で囲んでいる。遺跡名は基本的に調査報告の記載によっているが、こういった遺跡名は行政的な地域区分によるものも多く、実際に遺跡を集落として復原する場合には事実とそぐわない場合もあると思われる。したがって、第23図では隣接する各遺跡を地形なども考慮して「遺跡群」としてまとめて実線で囲んでみた。このグルーピングに関しては、今後も検討が必要である。所属時期の項目の○は遺物のみが出土したことを、●は遺物が伴う遺構が検出されていることを示す。詳細な時期は示していないが、大まかな傾向はわかるであろう。

本節では、乙訓地域の縄紋時代遺跡について、その様相を時期を追ってみていく。その際、京都盆地のほかの地域、特に縄紋時代遺跡が密集している比叡山西麓の北白川遺跡群と比較しながら、時期別に変遷を概観していきたい(京都大学文学部考古学教室・京都大学埋蔵文化財研究センター1991・千葉1993)。なお、以下の調査報告の出典については、膨大になるため、主要なもの以外は割愛することとする。

草創期 有舌尖頭器の出土によってのみその存在が推測されており、土器は発見されていない。乙訓地域では、大原野神社(「遺跡」の表記を省略、以下同じ)・殿長(2点)・今里・舞塚・大塚・下海印寺・伊賀寺の7遺跡から計8点出土している。大原野神社・下海印寺・伊賀寺のものは表面採集によるが、その他は後世の遺構の堆積土もしくは包含層などから発掘調査によって



第23図 乙訓地域縄文遺跡分布図

付表11 乙訓地域の縄文時代遺跡

	遺跡名	所在地	所属時期						備考
			草創期	早期	前期	中期	後期	晩期	
1	大原野神社	京都市西京区大枝南春日町	○						
2	大枝	京都市西京区大枝福西町		○					
3	西ノ岡	向日市物集女町吉田ほか					●	●	
4	中海道	向日市物集女町中海道ほか					○	●	
5	物集女車塚周辺	向日市物集女町南条				○			
6	中久世	京都市南区久世中久世町ほか					○	○	
7	西垣内	向日市寺戸町西垣内					○	○	
8	中野	向日市寺戸町中野ほか						●	住居跡

9	殿長	向日市寺戸町殿長ほか	○					○	
10	洪川	向日市寺戸町洪川ほか						○	
12	野田	向日市森本上町田						●	
11	森本	向日市寺戸町東野辺ほか					●	○	
13	南山	向日市向日町南山			○				
14	乙訓郡衙下層	向日市鶏冠井町大極殿							
15	左京第189次調査	向日市森本町竹囃子						●	
16	石田	向日市森本町石田ほか					○	●	土器棺 2
17	東土川西	向日市森本町戌亥ほか						○	
18	高田	向日市森本町高田						●	
19	鶏冠井	向日市鶏冠井町十相ほか			○	○		●	土器棺
20	左京第276次調査	向日市鶏冠井町四ノ坪						●	
21	左京第213次調査	向日市鶏冠井町小深田						●	
22	鶏冠井清水	向日市鶏冠井町清水ほか					○	●	
23	芝ヶ本	向日市菱川町山暎手						○	
24	東土川	京都市南区久世東土川町ほか						●	○
25	中福知	向日市上植野町車返							
26	鴨田	向日市上植野町落堀						○	
27	上里	長岡京市井ノ内玉ノ上ほか	○				○	●	
28	朝日寺	長岡京市井ノ内小西						○	
29	井ノ内	長岡京市井ノ内広海道ほか						●	住居跡
30	今里	長岡京市今里西ノ口ほか	○			○	○	○	土器棺
31	今里北ノ町	長岡京市今里北ノ町ほか						○	
32	舞塚	長岡京市今里舞塚	○						
33	大塚	長岡京市天神5丁目	○						
34	長法寺	長岡京市長法寺南野							
35	東代	長岡京市天神3・4丁目							
36	弓場街道	長岡京市長岡2丁目							
37	開田城ノ内	長岡京市天神1丁目				○		●	土器棺 2
38	十三	長岡京市天神2丁目				○	○	○	
39	開田	長岡京市開田3丁目ほか				○	○	○	
40	馬場	長岡京市馬場囃所						○	
41	雲宮	長岡京市神足雲宮ほか				○	○	○	
42	芝本	長岡京市神足芝本ほか						○	
43	神足	長岡京市神足1丁目ほか						●	
44	奥海印寺	長岡京市奥海印寺東条ほか						○	●
45	下海印寺	長岡京市下海印寺・奥海印寺	○	○				●	
46	伊賀寺	長岡京市下海印寺伊賀寺	○						
47	野手	長岡京市友岡2丁目				○	○		
48	友岡	長岡京市友岡1丁目ほか				○	○	○	
49	南栗ヶ塚	長岡京市久具2丁目						○	
50	碓	長岡京市調子3丁目				○	○		
51	宮脇	大山崎町大山崎宮脇	○					●	
52	松田	大山崎町大山崎松田ほか							
53	下植野南	大山崎町下植野五条本ほか						○	●
54	百々	大山崎町円明寺百々ほか						○	土器棺 2

出土している。材質は、チャートを用いている3点(大原野神社・舞塚・伊賀寺)を除くと、すべてサヌカイトが用いられている。

これらの遺跡の多くは、丘陵上や低位段丘、緩扇状地上に立地している。特に、今里・舞塚・大塚の3遺跡と下海印寺・伊賀寺の2遺跡は近接して立地しており、当時の人々がこれらの地域を中心に活動していた可能性が考えられる。また、こういった有舌尖頭器が出土した遺跡からは、旧石器が同時に出土していることも多く、当時から連続して生活が営まれていたと考えられる。京都盆地で同様に有舌尖頭器が出土している遺跡は、合計14か所にのぼるが、そのうちの実に半数が乙訓地域に立地することは、特筆すべき点であろう。

早期 少量の遺物が発見されているにすぎず、大枝・上里・下海印寺・宮脇の4遺跡でその存在が推測されている。このうち、上里・宮脇の2遺跡は異形局部磨製石鏃が1点ずつ出土・表面採集されていること、大枝・下海印寺の2遺跡は押型紋土器が出土していることから確認されている。下海印寺では楕円紋土器片2点が出土しており、大枝では褐色壤土層から同時期の土器が出土しており、報告書には山形紋土器1点、楕円紋土器10点、無紋土器2点が図示されている。これらの土器は、押型紋土器後半期の黄島式併行期と考えられるが、遺跡の性格付けにはいたっていない。こういった早期遺跡も草創期と同じく、丘陵上や低位段丘上などに立地している。なお、同時期の遺跡である北白川廃寺下層からは、住居跡1棟と集石土坑8基という京都盆地で唯一の早期集落が検出されている。

前期 この時期の資料は乙訓地域では全く出土例がなく、1片の土器の出土も報告されていない。その前後の時期の資料が出土していることもあり、全くの文化的断絶があったとは思わず、今後の発掘調査の進展で遺構・遺物が発見されるであろう。このほか、渡辺 誠は、上里や今里で出土している二等辺三角形の横型石匙は、北白川下層式土器に伴う典型的なタイプであることを指摘している(渡辺1982)。

京都盆地でもこの時期の資料はほとんど出土しておらず、北白川遺跡群でまとまった資料が出土している程度である。北白川小倉町で本格的な集落が営まれており、ここで出土した土器群は北白川下層式として型式設定されている。

中期 前葉の船元式土器と、末葉の北白川C式土器が散発的に出土している。船元式土器が出土している遺跡は雲宮のほかに、東土川(船元Ⅲ式)・開田城ノ内(船元ⅠまたはⅡ式)・十三(船元Ⅰ式)・開田(船元Ⅲ式)・野手(船元ⅠまたはⅡ式、船元Ⅳ～里木Ⅱ式)・友岡(鷹島～船元Ⅳ式)・裕(船元Ⅳ式)・下植野南(船元Ⅰ式)の8遺跡があり、以前に比べると資料が増加している。ほとんどの遺跡で少数の土器片のみが出土している中で、友岡の右京第325次調査では落ち込みSX02から鷹島～船元Ⅳ式期の遺物が良好な状態で大量に出土している。その他、搬入品である中期前葉・北陸系の新保・新崎式土器も若干出土している。石器は石鏃・切り目石錘・石匙・磨石・叩石・磨製石斧など、多様な種類がみられる。略報のみのため詳細は不明であるが、中期前葉では乙訓地域で現在唯一、集落の存在が予想される量の遺物が出土した遺跡である(原1990)。

北白川C式期の遺物は、物集女車塚周辺・鶏冠井・今里の3遺跡で出土しており、船元式期よ

り遺跡数は減少している。このうち、鶏冠井では左京第172次調査において、底部を欠くだけでほぼ完形の深鉢1個体が土器溜まりから出土しており、当該期の資料が希薄な乙訓地域唯一の完形資料として注目される(秋山1991)。このほか、南山では二次堆積ながら、形態から中期末の所産と考えられる石棒が出土しており、その周辺に中期末の遺跡の存在が予想される。

これら中期の遺跡は、草創期・早期と同様の立地のものが多い。しかし、船元式期の雲宮・東土川、北白川C式期の鶏冠井の3遺跡は低湿地に立地しており、変化が現れている。雲宮の船元式土器が流れ込みの可能性があることは前述したが、鶏冠井からは銅鐸鑄型が出土した1982年の鶏冠井町石橋の調査でも、磨滅の少ない北白川C式土器が地表下2mから出土している。これらの調査から、鶏冠井ではこの時期の集落の存在が予想され、それが低湿地に立地していることは注目される。北白川遺跡群では中期末の時期にも集落が形成され、北白川追分町では遺物の出土量が増大する。この資料を元に、北白川C式土器が型式設定されている。

後期 乙訓地域では後期から急激に遺跡数が増える。遺構が検出された遺跡は6か所(西ノ岡・森本・東土川・井ノ内・神足・下海印寺)あり、遺物のみが出土した遺跡は18か所にのぼる。

初頭の遺物が出土した遺跡は少ないが、代表的な遺跡としては下海印寺と東土川が挙げられる。下海印寺では土坑3基と集石遺構1基が検出され、中津式から「芥川式」にいたる土器・石器などが出土している。中津式土器の資料は、乙訓地域では最もまとまっているであろう(渡辺編1982)。東土川では、やはり乙訓地域では出土例の少ない福田KⅡ式古段階から縁帯紋土器成立期の資料がこの時期としては比較的まとまって出土しており、遺構では土坑3基と焼土痕やピット列も見つかっている。石錘7点が出土していることもあって、キャンプサイト的な性格を持った遺跡ではないかと考えられている(小島1995)。

北白川上層式期になると、後期初頭までの中期以来の停滞期から一挙に遺跡が増加する傾向がみられる。少数の破片が出土する遺跡がほとんどであるが、代表的な遺跡として森本・石田・鶏冠井などが挙げられる。これらの遺跡の多くは、初頭の東土川と同様に桂川沿いの低湿地に立地している。同時期の遺跡は、丘陵や河岸段丘上にも依然としてみられるため、中期にみられた低湿地へという生活領域の拡大が、一層広がったと思われる。

森本では、土坑が宮内第153次調査で2基、宮内第263次調査で3基、それぞれ北白川上層式土器を伴って見つかっている。同遺跡では、そのほかにも遺構には伴わないが、宮内第141次調査や同第143次調査で多数の遺物が出土している。特に、後者では沼状遺構の肩部など、3か所に集中して土器が出土しており、プライマリーな状態を保っていると考えられる。この他、右京第235次調査で竪穴式住居跡1棟が検出されている井ノ内が注目される。東西3.8m・南北3mの楕円形プランを呈する小型の住居跡で中央部に炉跡が残っていたが、壁溝や支柱穴は検出されていない。井ノ内では右京第214次調査でも、同時期の土坑1基が検出されている(岩崎・山本1988)。

続く凹線紋系土器期では、乙訓地域では資料が希薄となる。北白川遺跡群でも前葉の資料はあまり多くはないが、北白川上層式期には資料が急増する。凹線紋系土器期になると、北白川から一乗寺へとその中心が移る。これは、乙訓地域の様相とよく似ていることが指摘できる。

晩期 この時期は乙訓地域で最も縄紋文化が繁栄した時期であり、遺構が検出された遺跡は16か所に、遺物のみが出土した遺跡は17か所にのぼる。時期的には初頭の滋賀里Ⅰ式期からみられるが、後述するような住居跡・土器棺が検出されている遺跡は、滋賀里Ⅲb式期及びⅣ式期以降の突帯紋土器期に多い。

この中で大きな集落としては、鶏冠井や石田など、後期前半にみられた低湿地のものが挙げられる。鶏冠井は、左京第112次調査・同第156次調査・同第169次調査で土坑が検出されており、滋賀里Ⅲb～長原式土器が出土している。また、左京第209次調査では、深鉢2個体(滋賀里Ⅲb式)を用いた合口土器棺墓も出土している。乙訓地域では、このような晩期に属する土器棺墓の出土例は少なくないが、いずれも1遺跡につき1基または2基が確認されているだけである。鶏冠井以外の出土遺跡では、石田(1基、滋賀里Ⅲb式)・今里(1基、長原式)・開田城ノ内(2基、ともに船橋式)・下植野南(2基、滋賀里Ⅳ式・船橋式)などがある(山本1995)。

中野では住居跡が検出されている。後世の攪乱で東側半分と炉跡を失っているが、支柱穴と部分的に三重の周壁溝が検出された。遺物には滋賀里Ⅲb式土器などがあるが、出土量はそれほど多くはない(渡辺・亀割1986)。中野では、宮内第152次調査・同第260次調査で土坑7基とピット1基も検出されている。このほか東土川西では、出土例の少ない丸木舟も出土しており注目される。

晩期遺跡の立地は、後期の傾向が一層進み、丘陵・段丘上から主体は桂川沿いの低湿地に移る。こういった晩期遺跡は、雲宮のようにそのまま弥生時代前期へとつながることも多く、来るべき農耕に対する基盤を整えるとみることもできよう。北白川遺跡群では滋賀里Ⅲa式以前の土器は出土しておらず、資料が希薄という点で乙訓地域のあり方とやはり共通している。

(3)乙訓地域の中の雲宮縄紋遺跡群

これまでみてきたように、乙訓地域では遺跡として認知されているものの、その性格が不明瞭な縄紋時代の遺跡がほとんどである。おおよその傾向としては、丘陵地に展開していた草創期・早期の少数の遺跡が、前期に断絶を迎える。中期前半から再び遺跡数が増え、低湿地へも遺跡が展開するようになり、後期前半から遺跡数も一挙に増大して晩期へと継続していく、といった様相がみられる。また、中・後・晩期にわたって部分的な断絶はあるものの、継続する遺跡が多く、付表11をみると鶏冠井・今里・十三・雲宮・友岡がこういった性格を持っており、これらの遺跡は周辺地域における中核的な位置を占めていたのではないかと考えられよう。

「雲宮縄紋遺跡群」は、乙訓地域の数多くの縄紋時代の遺跡群の中でも、その調査成果から中心的な集落の一つではないかと考えられる。繰り返しになるが、時期的にその変遷を追ってみると、中期初頭にその初現がみられ、後期の遺物も若干出土している。最も多くの遺物が出土しているのは晩期の中葉～後葉であって、集落が発達したと考えられ、その後弥生時代前期へと続いている。今後の調査成果から、より詳しく縄紋時代の雲宮遺跡の状況が復原されるであろう。

(小島孝修)

2. 環濠とその立地

雲宮遺跡は、1960年の初調査(佐原1967)以後、約50回に渡って調査が実施されている。調査が進むにつれて、当初考えられていた雲宮遺跡の範囲が拡大し、かつて古市森本遺跡と呼ばれていた遺跡は、現在雲宮遺跡の一部となっている。この雲宮遺跡で最も弥生時代前期の遺構や遺物が多く出土する地域は、1960年度調査、長岡京跡左京第17次調査(戸原1985)の周辺、今回の第216次調査(戸原他1991・1992)である。出土遺物量が多いのみならず、遺構の密度が高い地域である。これまでの発掘調査をもとに、今回検出した遺構の性格や、集落の立地条件を明らかにしていきたい。

(1)環濠の構造

今回の第216次調査地の第22トレンチで、弧状を呈する溝S X 60とそれを切る溝S X 76が検出されている。S X 60は、調査地の東側に開く溝で、環濠であるならば集落は東側に広がることとなる。

S X 76は、検出できた範囲が限られていることから、今回の調査地だけではその性格まで断定できない。S X 76とS X 60の上層部分が共存し、二重環濠になっていたとする見解(戸原1991)もあるが、後に述べる出土土器の分析から、S X 76とS X 60の上層部分が明らかに時期差を持ち、双方の溝が共存しないことがわかった。また、S X 60の柵列とされていた東肩にある土坑や柱穴は、出土遺物の検討からS X 76の時期のものもあることがわかり、S X 60に伴う柵列とは断定できない。

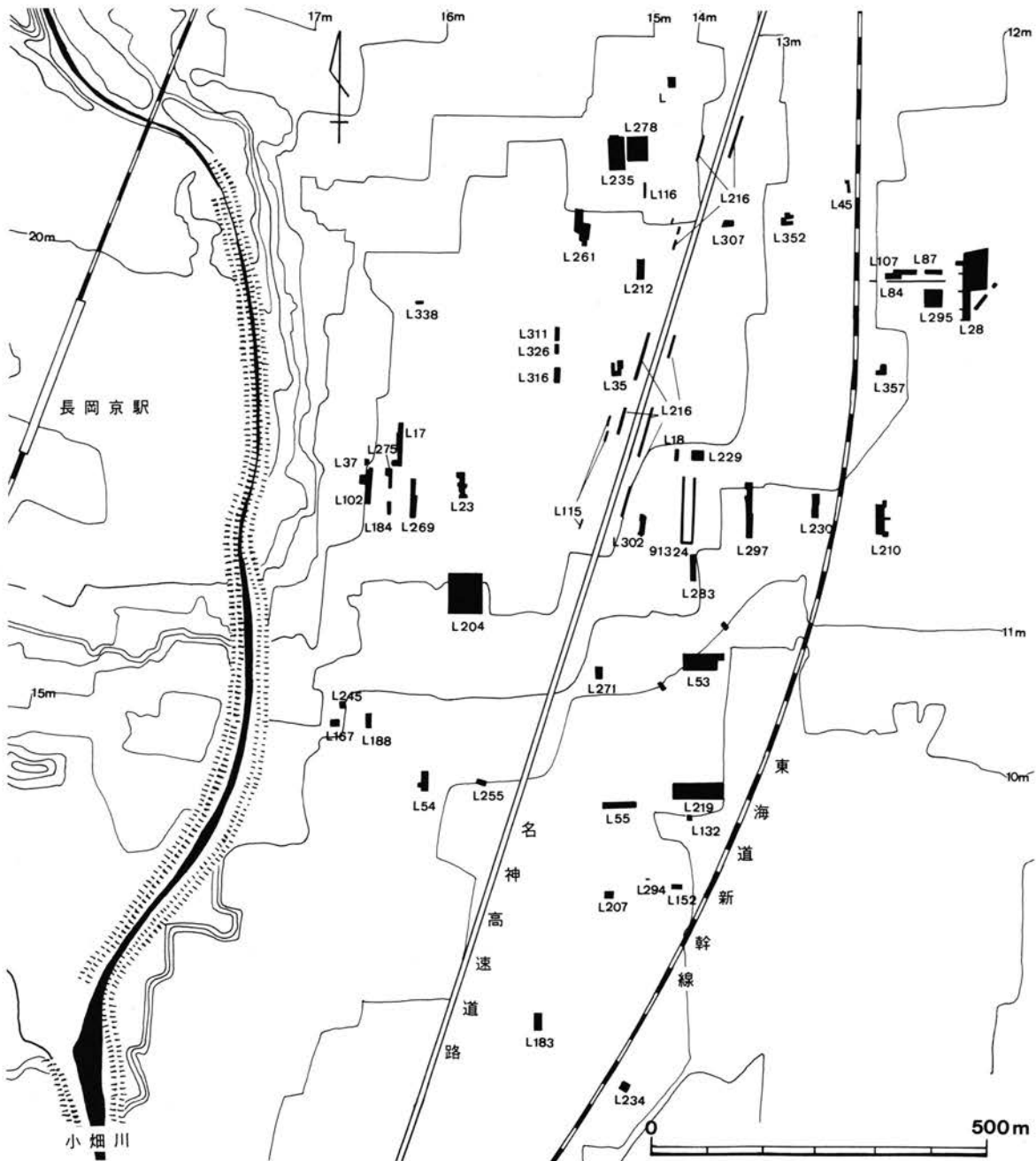
同時に、現在残る流路の形状を手がかりに、東西に長い楕円形の環濠の復原がなされている(戸原1991)。1991年の第91324-1次立ち会い調査(小田桐1993 a)によって環濠の一部と考えられる東西方向の溝、S D 3・4・5の3条が検出されている。戸原の想定より環濠が南方向に広がることわかる。この結果を受けて、新たな環濠の復原が岩崎 誠(岩崎1996)によって行われている。

同時に調査された西側の第91324-2次立ち会い調査では、この3条の環濠は、S D 1とS D 2の2本になることが判明している。断面の観察から、もともとあった溝を後にもう一度掘削していることがわかることから、北側のS D 3とS D 4が1つになりS D 1になることが想定されている。両遺構の切り合い関係は、交わると考えられる地域が調査区外のため不明である。出土遺物は、おおむね佐原のいう畿内第I様式中段階、本報告書で後にいう雲宮Ⅱ・Ⅲ期に属するが、S D 4の遺物量が少ないため、遺物からの時期判断も困難である。また、この立ち会い調査は、現存する南北方向の条里地割りに沿って南北約100mにわたり細長いトレンチを設けているが、トレンチ内では左京第216次調査のS X 76に対応する。佐原のいう畿内第I様式新段階、本報告書で後に言う雲宮Ⅳ・Ⅴ期の土器を伴う溝を検出することはできなかった。また、第91324次立ち会い調査地の南側に近接する左京第283次調査(小田桐1993 b)でも同様の結果であった。S X 76はこれまでの調査からも環濠になるかは不明であるが、S X 60と同様な地域に中心を持つような集落の環濠になる可能性は少ない。

左京第297次調査(小田桐1994)が第91324次立ち会い調査の南に設定された。環濠の南側の延長部が検出できると想定されていたが、調査区内では溝が検出できなかった。左京第297次調査で弥生時代前期の遺構が検出できたことと、遺構検出面の海拔から、削平などによって遺構面が喪失されているとは考えられない。このことから環濠は、第91324次立ち会い調査区と左京第297次の調査区間で北に曲がると想定できる。

また、第91324次立ち会い調査で見られた複数の環濠が左京第216次調査では、1条しか検出できなかった。しかし、戸原の断面観察によると、二時期の掘削が報告されている。遺物からも雲宮Ⅱ・Ⅲ期の2時期が想定できる。

1960年の横山・田辺の発掘調査した所見についての佐原の記述(佐原1967)を見ると、「方形の



第24図 雲宮遺跡発掘調査地点分布図

付表12 雲宮遺跡調査次数一覧

次数	年度	遺構	遺物	文献	次数	年度	遺構	遺物	文献
	1960	不明	○	佐原1976	L 216	1989	溝・土坑	○	戸原他1990
L 17	1978	×	×	岩崎1985	L 219	1989	×	×	小田桐1991
L 18	1978	土坑・柱穴	○	戸原1985	L 229	1989	溝	○	中島1991
L 23	1978	×	×	岩崎1985	L 230	1989	×	×	小田桐1991
L 35	1979	×	○	久保1985	L 235	1990	×	×	中島1991
L 37	1979	×	×	岩崎1985	L 245	1990	×	×	中島1992
L 45	1980	×	×	山本1985	L 255	1990	×	×	千喜良1992
L 53	1980	×	×	奥村他1985	L 261	1991	×	×	原1992
L 54	1980	×	×	岩崎1985	L 269	1991	土坑	○	岩崎1993
L 55	1980	×	×	未報告	L 271	1991	×	×	中島1993
L 74	1981	不明	不明	未報告	L 275	1991	×	×	原1992
L 84	1982	○	○	小田桐1983	L 278	1991	×	×	中島1993
L 87	1982	流路・土坑	○	小田桐1983	L 283	1992	×	×	小田桐1993
L 102	1983	×	×	山本1984	L 294	1992	×	×	中島1994
L 107	1984	×	×	小田桐・原1984	L 295	1992	×	×	中島1994
L 115	1984	×	×	三好1995	L 297	1992	壺棺	○	小田桐1994
L 116	1984	×	×	山本1985	L 302	1993	×	×	山本1995
L 132	1985	土坑	○	中尾1987	L 307	1993	×	×	木村1995
L 167	1987	×	×	小田桐1988	L 311	1993	不明	不明	山本1995
L 184	1987	×	×	中尾1988	L 316	1993	×	×	山本1995
L 188	1988	×	×	原1989	L 326	1994	×	×	山本1995
L 207	1988	×	×	原1990	L 338	1994	×	×	岩崎1996
L 210	1989	×	○?	小田桐1990	L 352	1994	流路	○	中島1996
L 212	1989	沼地	○	白川1990	L 357	1995	流路?	○?	木村1996

調査区(二×二メートル)を三か所に設け、第Ⅰ様式土器の包含層の存在を確認した。包含層は有機質の色によって暗褐色を呈しており、耕土(〇～一五センチメートル)と床土(青色粘土に酸化鉄の沈殿したもの。一五～三八センチメートル)の下にあり、これを粘質をおびた上部(三八～五〇センチメートル)と、砂質をおびた下部(五〇～七〇センチメートル)とにわけて遺物を採取した。」とある。

調査位置を地図上に落とすと、現在の名神高速道路の直下、左京第216次調査第22トレンチ、9トレンチに挟まれた場所にあたり、10mと離れていないと考えられる。第22トレンチ・第9トレンチともに、弥生時代前期の遺構を検出した面は黄褐色を呈する土である。層の厚さが1mを越すような暗褐色を呈する包含層は、周辺の調査では検出できない。

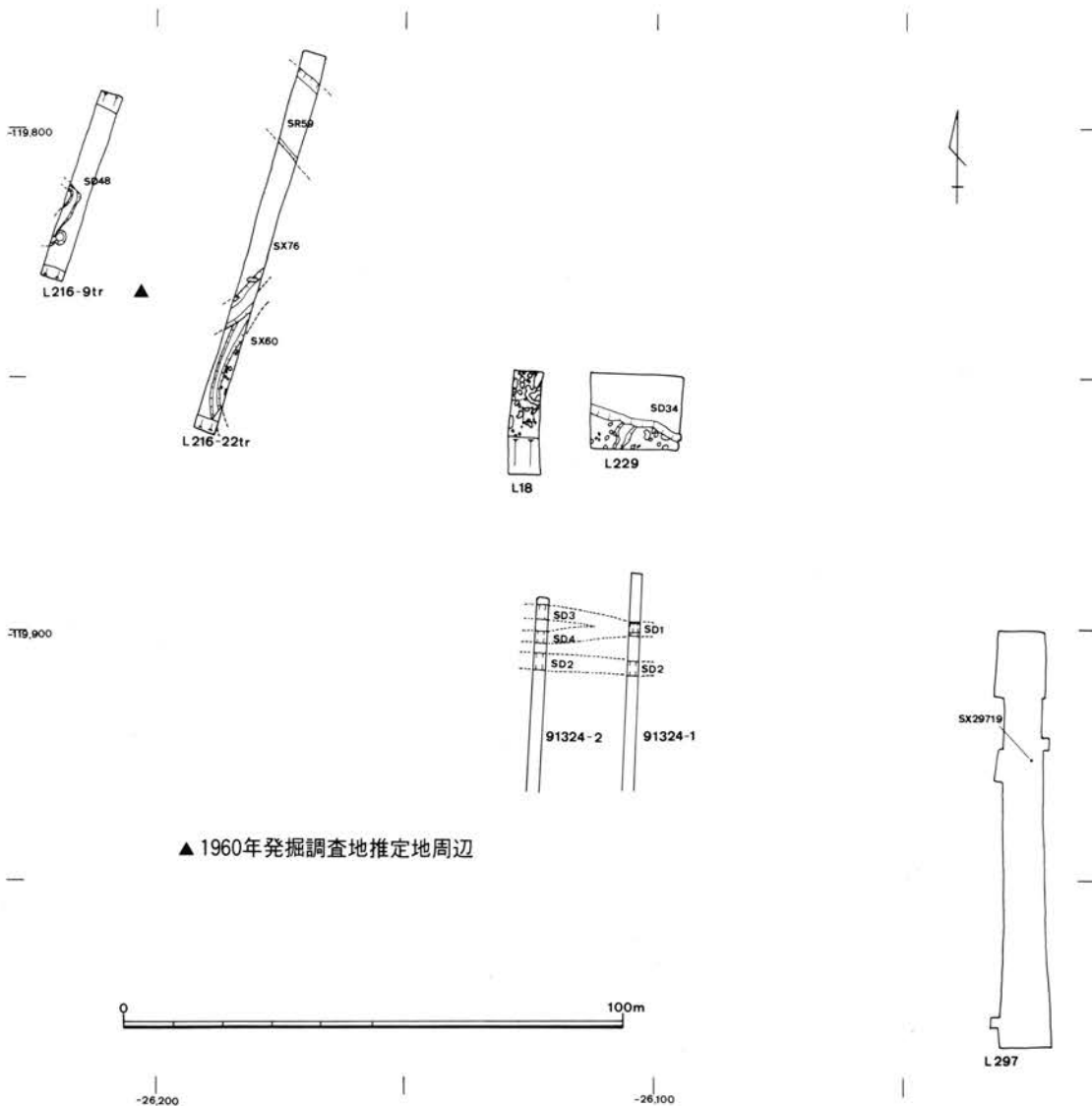
むしろ、左京第216次調査では遺構の埋土が暗褐色を呈し、有機物を含んでいる。横山・田辺のトレンチが2m×2mと小さいことから、遺構の中を掘削していた可能性が指摘できる。2m四方のトレンチをすっぽりと含むものとしては、溝や大形の土坑の可能性が指摘できるが、左京第17次調査や左京第216次調査で発見できた土坑には、直径が2mを越すものや、深さが1mを越すものは見あたらない。

溝の一部である可能性が指摘できる。名神高速道路の下に延びるS X76の可能性も考えられた

が、1960年の調査地の遺物が概ね雲宮Ⅱ・Ⅲ期に含まれることから時期の違いが明らかである。第91324次立ち会い調査における一番南側の環濠が現在の名神高速道路の下、つまり1960年の調査地の部分を通っていると想定できる。SX60が第91324次立ち会い調査のSD3・4が重なり合った部分にあたるかは不明であるが、2つの溝の内の1つであると考えられる。

(2) 環濠の内側

この雲宮Ⅱ・Ⅲ期の環濠SX60などの内部構造については、左京第18次調査(戸原1985)、左京第229次調査(中島1991a)によって一部が明らかになっている。左京第18次調査では、土坑と柱穴が検出されている。柱穴の中には柱痕の残されているものもあった。遺構の時期は雲宮Ⅱ～Ⅴ期に属すると考えられる。土坑の内、4か所から炭化米が出土しており、柱穴は高床式倉庫として復原されている。この建物跡は、柱穴内から出土した土器から、雲宮Ⅱ・Ⅲ期に属すると考えられている。左京第18次調査区の東に近接する左京第229次調査区では、北半部が古墳時代後期の自然流路によって削平されているが、南半部から土坑18基と柱穴4基が検出されている。出



第25図 雲宮遺跡遺構分布図

土遺物から雲宮Ⅱ～Ⅴ期の遺構と考えられる。

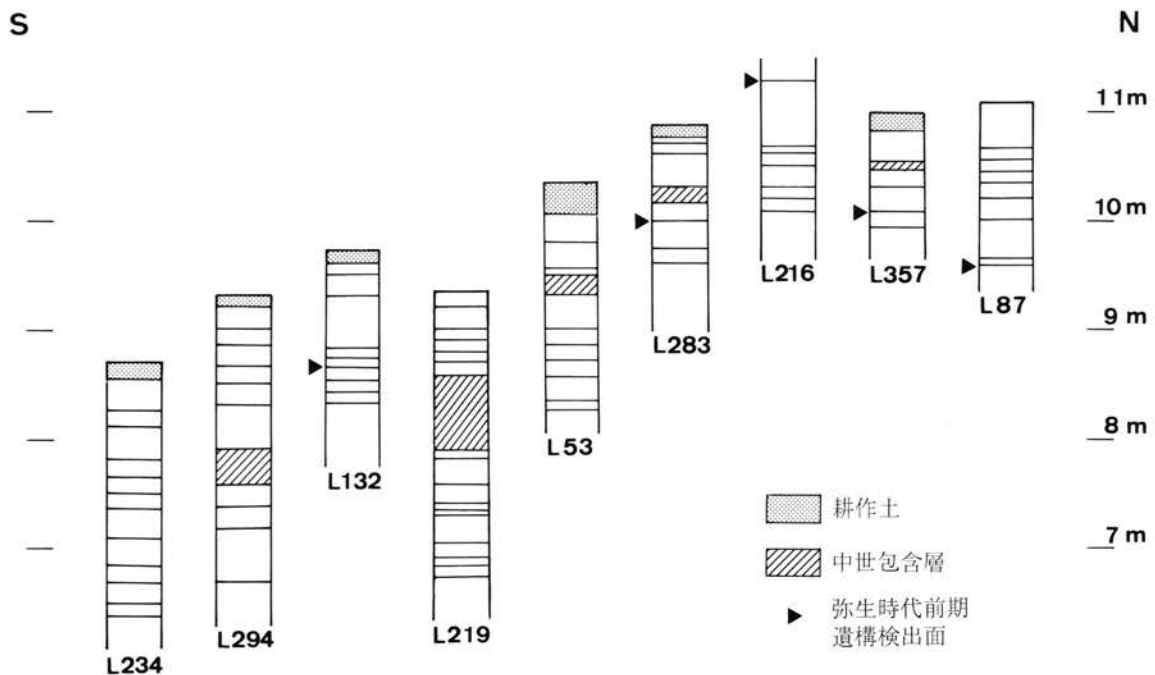
土坑S K65からは、雲宮Ⅳ・Ⅴ期の土器とともに炭化米が多量に出土している。遺構の時期や、性格は両方の調査区とも同様であることがわかる。雲宮遺跡の弥生人たちが竪穴式住居に住んでいたならば、環濠の内部の東側は弥生人の住居跡などのある居住空間ではなく、作物の貯蔵などに使われた可能性が指摘でき、おそらく環濠内の西側に住居域があったと想定される。また、雲宮Ⅳ期にはS X60を越えて土坑群が広がるが、左京第216次調査の9トレンチのあたりにまでは及んでいないことがわかる。

(3)環濠周辺の環境

環濠の周囲の状況をこれまでの調査結果から考えてみたい。集落の南側で弥生時代前期の遺構の確認ができた調査地は、左京第297次・左京第132次調査区である。

左京第297次調査地は、環濠に近接しているが、弥生時代前期の壺棺が検出されている。左京第132次調査区では、雲宮Ⅱ・Ⅲ期の土坑2基と柱穴が海拔約8.5mの遺構面から検出されている。この左京第132次調査地と環濠の間に位置する左京第283次調査区の南端では、縄紋時代晩期の自然流路が検出されている。

また、左京第132次調査区北側の、左京第53次調査では地表面から5m、海拔6mまで深掘りされているが、長岡京の遺構面下4mまでの堆積層は粘土層で、草本類を含み湿地であったことを示している。左京第219次調査では、海拔6.5mまで掘削されているが、湿地状を呈していた可能性を示す結果が明らかになっている。左京第132次調査区の南側の左京第152次調査では海拔5.6mまで掘削されたが、粘土層や礫層が検出されたのみであった。遺構は検出されているが、左京第132次調査周辺の調査結果から、大規模な集落とは考えられない。生産域に隣接し、微高



第26図 調査地別模式土層柱状図

地上に作られた作業空間と考えられないだろうか。

環濠の北側にあたる左京第87次調査では、雲宮Ⅱ・Ⅲ期と考えられる自然流路S D8718と湿地状の落ち込みS X8720を海拔9.6mで検出している。左京第357次調査でも、縄紋時代晩期～弥生時代前期と想定できる自然流路が海拔9.9mで検出されている。左京第352次調査でも、海拔約10.8mで北西から南東に流れる自然流路が検出されている。左京第212次調査では、雲宮Ⅰ期の土器と縄紋土器が出土した自然流路が見つかっており、ほぼ西から東に向かう流路が弥生時代前期にはあったと考えられる。これらのことから、環濠集落は1.5m程高い位置に立地しており、その南北にほぼ北東から南西に向かう流路と、その氾濫原があったと思われ、この湿地状の部分を水田域に利用していたと想定される。

環濠の西側にあたる9トレンチでは、弥生時代前期の方形周溝墓と想定されている「L」字状の溝が検出されている。詳細な時期は遺物が少ないため不明確ではあるが、雲宮Ⅱ～Ⅵ期にあたると考えられる。左京第297次調査地の前期の壺棺と考え合わせると、環濠の外側に墓域があったと想定できる。

(4)小結

以上見てきたことを簡単にまとめると、雲宮Ⅱ～Ⅲ期の環濠集落は、微高地上に立地し、2本の環濠によって囲まれていた。集落の周辺は低湿地を利用した水田が広がる景観を呈していたと想定される。そして、生産域に隣接する微高地上は活動場所として利用されていた。

左京第17次調査では、雲宮Ⅳ期の土器群と遺構が検出されており、岩崎の指摘するように雲宮遺跡の集落が西に移動するすることがわかる。集落の大型化に伴う居住域、生産域の広がりを原動力として、より標高の高い地域に集落が移動していったと想定できる。これが西側の低位段丘面に立地する弥生時代中期の拠点集落である神足遺跡になると考えられる。

(中川和哉)

3. 土器

(1)雲宮遺跡の学史上の問題点

雲宮遺跡は、佐原 眞(1967)が近畿地方の第Ⅰ様式の土器を前・中・後の3期に分けるのに用いた土器群が出土した遺跡である。今回報告する雲宮遺跡の土器に考察を加える前に、近畿地方を対象とした弥生時代前期の編年研究についての学史を振り返り、今回出土した遺物の持つ意義や問題点について述べたい。

弥生時代前期の土器群の分類については、1932年の小林行雄の手になる「吉田土器及び遠賀川土器とその伝播」において初めて言及されている。この論文中でそれまで近畿地方で発見されていた遠賀川土器(安満B類)の土器に比べ、吉田遺跡の土器がより古相を示していることを指摘した。これをもとに、小林は『弥生式土器聚成図録』(1938)・『大和唐古弥生式遺跡の研究』(1943)の編年表で、畿内第Ⅰ様式の弥生土器を明確に古相と新相に分け配列した。

今里幾次(1942)は、吉田式と西瓜破式の対比から、西瓜破第一類式の土器が弥生時代第Ⅱ様式に近似していることを指摘し、吉田式→西瓜破式への変遷を指摘している。

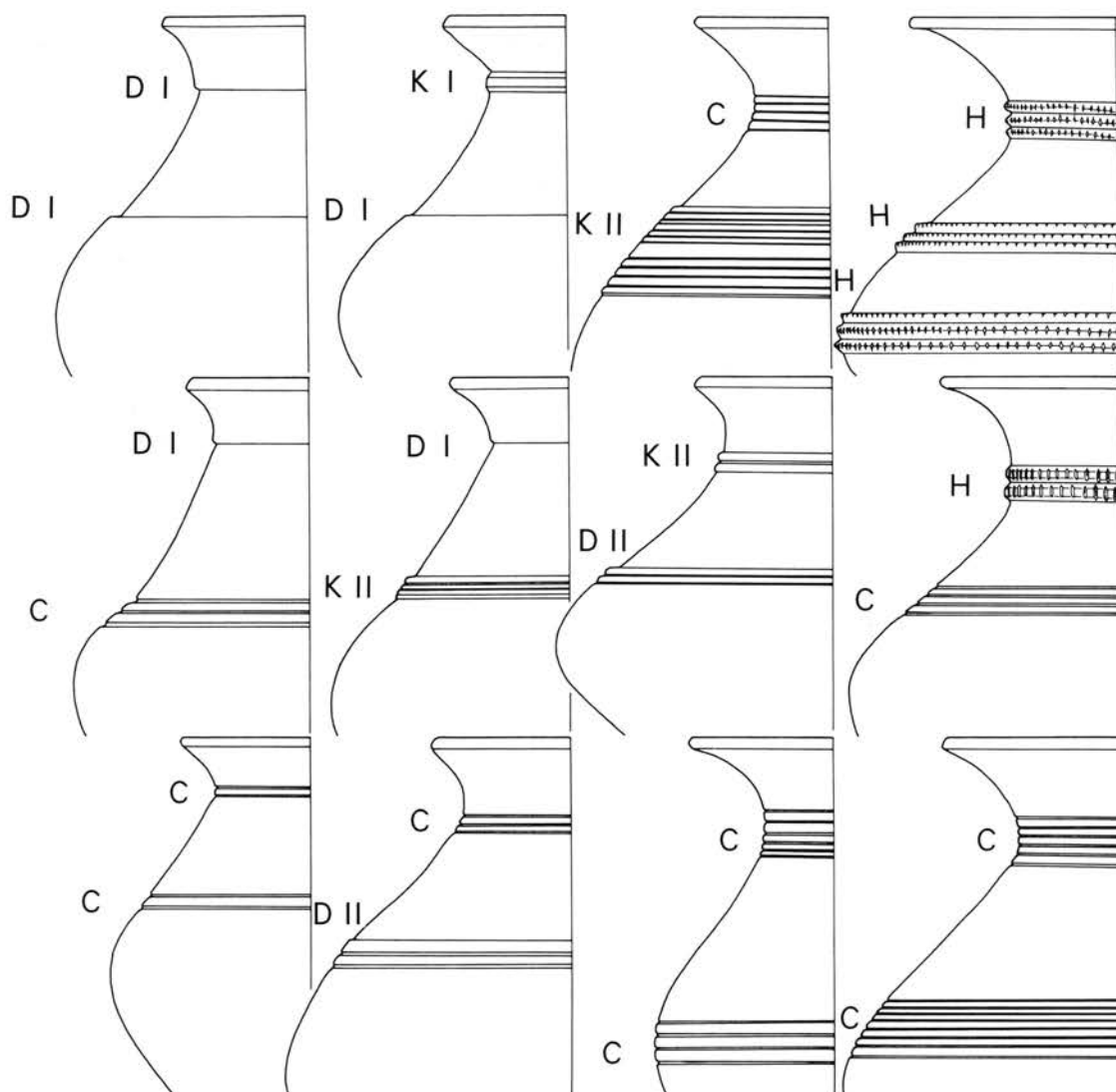
杉原荘介は、1950年に近畿地方の前期の弥生土器を唐古式と瓜破式の二次期に分けた。その後、1955年、1956年に具体的な土器の特徴を述べているが、日本考古学協会によって発掘された瓜破遺跡の報文中(杉原・神沢1961)には、前者を唐古Ⅰa式、後者を唐古Ⅰb式に分類している。

佐原 眞は、畿内第Ⅰ様式を1つの様式とし、古・中・新の三段階に分類するのが適当であると述べている(佐原1967)。古段階は、吉田遺跡の例から壺の区分紋様として段を多用し、削り出し突帯出現が見られず、ヘラ描き沈線紋は1～3条のものが大半を占めている。甕には段、無紋、沈線1条のものがある。中段階は、雲宮遺跡出土の遺物を指標とした。区分紋様に段とともに、削り出し突帯が出現した時代である。甕には直線紋を用いたものが多いが、壺・甕ともに沈線が3条を越えるものが少ない。新段階は、貼り付け突帯が現われ、ヘラ描き直線紋が多条化し、区分紋様が帯状紋様に変質した段階。以上のような施紋の変遷とともに、土器のプロポジションについても言及している。土器群を分類する一方、今里の西瓜破式、杉原の唐古Ⅰb式の大部分が新段階に属することを述べ、これらの資料には中段階の資料も混在している可能性を指摘している。

井藤暁子は、佐原の三時期区分に対して、近畿に純粋な古段階の土器が存在するののかという石野博信の疑問(石野1979)や、削り出し突帯の上に多条の沈線がある壺の編年的位置付けなどの問題点から、二時期に分けた方がより現実的であると主張し、前期Ⅰ、前期Ⅱと名付けた。前期Ⅰは三段階、前期Ⅱは二段階に細分されている。この研究に対しては、三時期区分に対して、二時

付表13 弥生土器編年比較表

井藤(1983)	佐原(1968)		今里(1969)	杉原(1955)	今里(1942)
Ⅰ	a	古段階		唐古式 (唐古Ⅰa式)	吉田式
	b				
	c	中段階		前期Ⅱ	
Ⅱ	a	新段階	前半	瓜破式 (唐古Ⅰb式)	西瓜破式
	b		後半		



第27図 畿内第I様式壺の変遷(左から右へ) 佐原1967再トレース

D.段 C.罎描き沈線 K.削り出し突帯 H.貼り付け突帯

期に大別したことに、より意義があるといった評価もある(森田1989)。

寺沢 薫(1981)は、佐原のいう第I様式の細別は分類としての条件と検証を満たしていないと述べ、[段] → [削り出し突帯] → [貼り付け突帯]は傾向としては認められるが、紋様自体としては一括資料の中で共伴すること指摘している。また、II様式を分類する基準となる櫛描き紋が、貼り付け突帯や沈線紋などと伴う事例があるといった矛盾点について言及している。

現在もなお佐原のいう古・中・新の三時期区分は根強く流布しているが、研究者の多くは2時期区分を支持していることがわかる。

豆谷和之は、佐原分類に対する疑義はその資料操作にあるのではなく、弥生文化研究全体に巣喰う「文化伝播論」にあると主張し、「文化変容論」の立場から弥生時代前期土器について言及した(豆谷1995)。東京考古学会の影響による単系的な弥生文化という視点に対する疑いと、第I様式の細別に関する意見の相違が認められる。このことは、豆谷の主張する文化伝播論の弊害によるのみでなく、良好な資料の欠如と実態のわかる資料報告の少なさに起因するところが大きい。

土器編年では様相が比較的一様な土器群を抽出し、それぞれに前後関係を付けていく手法によ

って編年作業が行われていくことが多く、対比する土器群の出土地が大きく地域が異なることも少なくない。中期になって顕著になる地域性を考慮すると、前期の土器群でも地域性を無造作に無視することはできないであろう。こうした中、同一地域あるいは、同一遺跡内での土器群の対比が必要なだけでなく、同一遺跡での遺構の切り合い関係などによって前後関係が明らかな資料群を用い、はっきりとした時間的な土器群の変遷を押さえ、作業していくことが切望されている。また、佐原の用いた雲宮遺跡の土器の個体数が少なく、同時期の土器群の様相をすべて反映しているか不明である。分析する資料群には土器群の持つバリエーションが組成中に反映するように、一定量の個体数が必要とされる。過去の報告書や論文に、特定の器種や調整技法の割合の記述に関して、根拠になる数字を挙げることなく多い少ないといった抽象的な記述がなされている。報告に際しては、分類基準を明らかにし、その割合や、資料操作の限界点も併せて表記し、真を問う必要がある。特に、Ⅱ様式以後に明らかになる甕形土器型式の違いを理解するためにも、Ⅰ様式における調整の割合を小地域ごとに見ていく必要がある。

今回報告する雲宮遺跡の溝S X76、S X60は切り合い関係から前後関係が明らかで、量的にも分析可能な個体数が出土した。佐原が示した中段階の資料と同じ遺跡中の資料で今一度考えてみたい。また、弥生時代中期の始まりをヘラ描き沈線紋が多条化する段階と評価する人(藤田1989)もいるが、本報告書では、櫛描き紋成立以後を第Ⅱ様式として考察を進めたい。

(中川和哉)

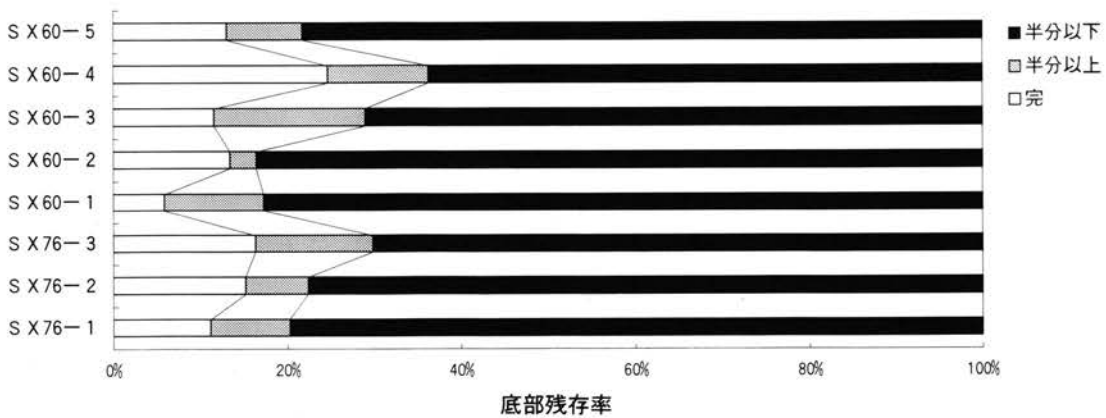
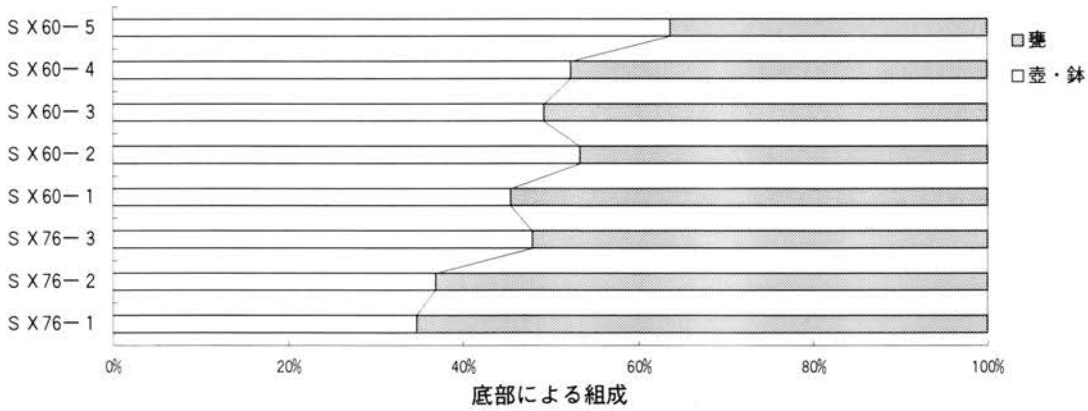
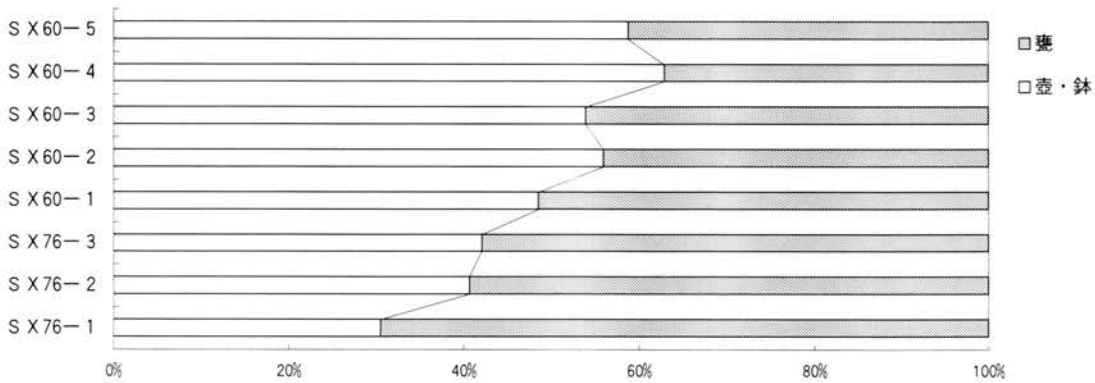
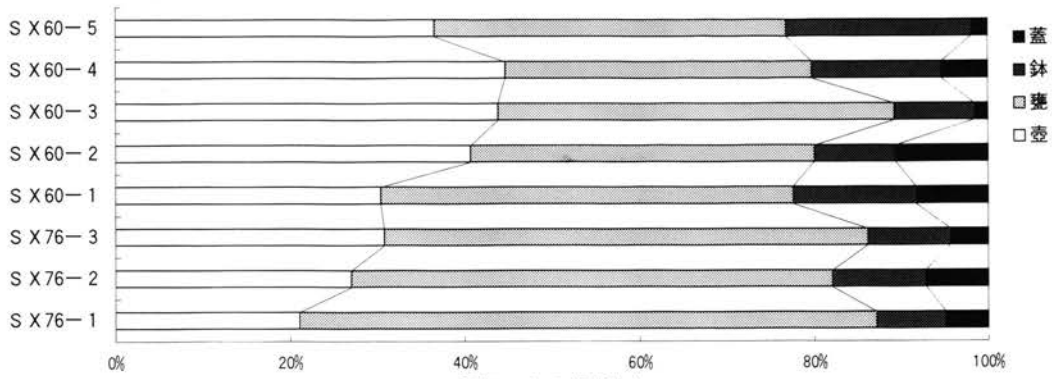
(2)雲宮遺跡出土土器組成

土器の組成について述べるに際して、土器量の豊富なS X76、S X60の資料について考察を加える。個体数の集計には、口縁部をカウントすることによって数値を出した。残存率が高いものに関しては、器種を誤認する可能性は低いが、口縁部の一部しか出土していない個体については、一定量の器種誤認があるものと考えられる。特に、甕形土器と鉢形土器の器種認定については、器面の調整や口縁端部の刻みの有無を考慮に入れ決定した。小片の場合、壺形土器の口縁と甕形土器の蓋の端部の判定は困難であるが、蓋の内面の焦げや口縁部を下にして立てた角度から判別した。しかし、判別困難なものについては、不明口縁としてカウントしなかった。

A. 口縁部による組成

弥生時代前期に属する土器は、コンテナで約200個あるが、ほとんどがS X76・S X60から出土している。S X76からは、器種認定可能と考えられる口縁が1256点、S X60からは936点が検出できた。遺物量は、S X76の第2層が最も多く770点、次いでS X60の第1層が398点の出土である。S X60第5層は、出土口縁の総数が52点であるため、統計上、分母不足と考えられる。

口縁部による組成は、百分率で各層位における組成比を出したものである。時代が古くなるに従って、全体に対する壺形土器の占める比率が増加していることがわかる。S X76の各層では、壺形土器が全体の約20～30%を占めているが、S X60では約30～45%と時期が古くなるに従って増加傾向を見せている。壺形土器とは相対的に時期が新しくなるに従って、甕形土器の比率が増してくる傾向が認められる。大阪府山賀遺跡(西口・上西他1984)の数量的な組成傾向とは、相反



第28図 土器組成グラフ

する結果となった。鉢形土器に関しては個体数の少ないS X60の5層を除くと、層位ごとの個体数の増減に傾向を見て取ることはできない。

チョコレートブラウン色調を呈し、角閃石が多く含まれる生駒山西麓産と考えられる胎土を持つ口縁は、24点と極めて少なく、包含層出土分や体部片を合わせてもコンテナ1杯に満たない。このことは、前回の雲宮遺跡(戸原他1985)調査時に弥生時代前期の土器がコンテナ約50杯出土したが、そのうち図化できる生駒山西麓産土器が1個体しかなく、その比率が僅少であるという指摘(秋山1986)と一致する。また、器種組成について、秋山が指摘するように、甕形土器にも生駒山西麓産土器が認められる。

最も多い胎土は、石英・長石・チャート・頁岩岩片・赤色斑粒の砂粒を含むものである。どの砂粒も、水磨され角が取れているものが多い。雲宮遺跡の所在する乙訓地域の河川は、大阪層群や丹波古生層を貫いており、チャートや頁岩は砂礫層中に普遍的に含まれる石材である。また、赤色斑粒は都出(都出1974)によってクサレレキとして報告されているが、煉瓦色を呈し、もろい粒子である。鉄分を多く含んでいる頁岩が焼成時の熱で赤化されたものである可能性を指摘する人もいる。古墳時代の土師器(中川他1993)にも多く認められる。時間の関係上生駒山西麓産以外の胎土についての数量化や分類は徹底できなかった。

B. 底部による組成

口縁部によって分類した組成比の結果をクロスチェックするために、底部を用いて分類を試みた。壺形土器の場合、胴部最大径より上部が残存していないと作り方が同じ鉢形土器の底部と区別がつかないことから(深澤1990)、まとめて鉢・壺形土器の底部の個体数を提示し、甕形土器の底部と比率を比べたい。また、甕形土器の高さが寸詰まった形態を示す鉢の場合、底部の作り方のみでは器種の判別ができないが、器壁の調整を加味して判別した。また、判別不可能な個体については、無理にカウントしなかった。

分析に用いた底部はS X76で578個体、器種の判別がつかなかった個体が120個体である。S X60では474個体で、器種が判別しなかったものは51個体であった。底部の残存率はグラフ「底部残存率」で見られるように、S X76では約70～80%が半分以下の個体である。S X60では数値にばらつきがあるが、約65～80%が残存率が半分以下の個体である。

グラフ「底部による組成」は、不明個体分を除いた壺・鉢形土器と甕形土器の割合を表わしたものである。S X76では壺・鉢形土器の割合が、約35～48%であるのに対して、S X60では約45～64%となり壺・鉢形土器の割合が増加している。このことは、甕形土器が時代が新しくなるに従って増加していることを示しており、口縁で見られる器種構成の変化と一致する。口縁を鉢形土器の個体数を加味して壺・鉢形土器と甕形土器に分け、百分率に表わしたのがグラフ「口縁部による組成(2)」である。S X76では壺・鉢形土器の組成が約30～40%であるのに対して、S X60では壺・鉢形土器の組成が約48～63%となり、甕形土器が相対的に新しくなるに従って増加していることがわかる。結果として底部から見た組成と、口縁部から見たものには大まかな傾向として一致することがわかった。

(中川和哉)

(3) 壺形土器

A. 分析の方法

畿内の弥生時代前期の壺形土器は、佐原 眞による古・中・新段階の細分以来、編年上の指標とされてきた。今回出土した土器は大半が破片で、混在は見られるものの、S X60、S X76で切り合いがあり、出土土器は櫛描き紋を含まない前期に限定できる比較的良好な資料である。

今回の報告では、掲載できなかったものもあるが、情報を最大限に引き出すため、S X60・76出土土器は口唇部・口頸部界・頸胴部界・紋様を含むものは小片に至るまでカウントを行い、傾向の把握に努めた。

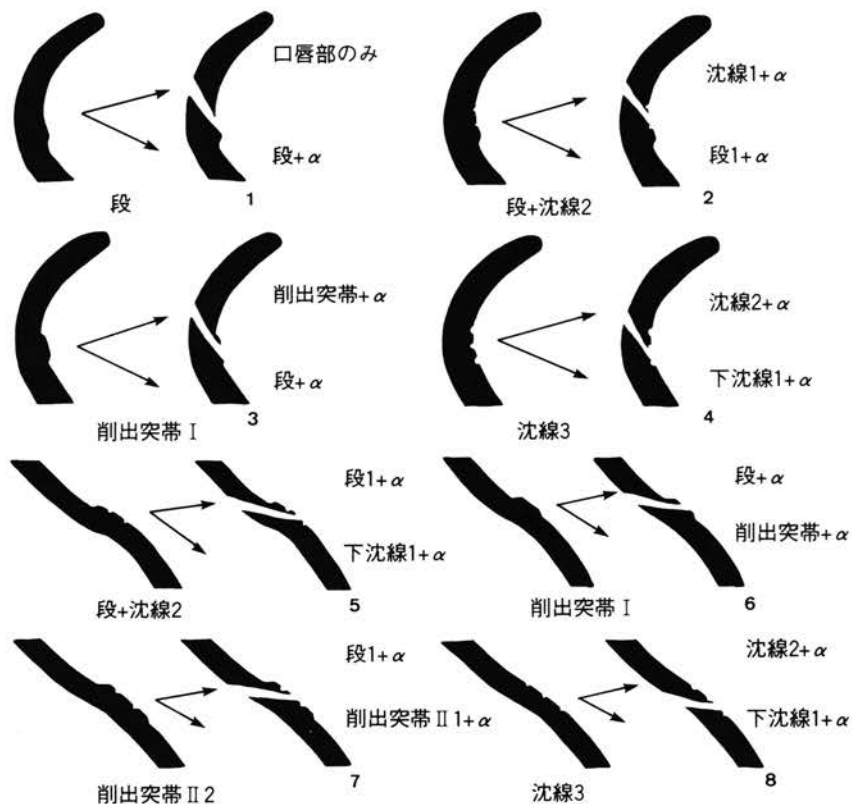
紋様の集計にあたっては、分類上、紋様帯の上端もしくは下端部分を含むものに限定した。口頸部界、頸胴部界では紋様帯がすべて残るものは少なく、欠失しているものは、 $+ \alpha$ として区別している。第29図3・6・7に示したように、段の小片は削り出し突帯の可能性がある。また、紋様帯の下端部分のヘラ描き沈線は、第29図5に示したように、段の下半部分の可能性があり、「下沈線」として区別した。

集計は、S X60・S X76の各層ごとに、口頸部界、頸胴部界、それらを集計した全体の別に集計を行った。完形品をはじめ、口頸部界、頸胴部界の紋様を合わせ持つものもいったん別々に集計しており、紋様の組み合わせは別に検討を行う。

紋様の集計項目(付表30~32)は抽象化しており、以下の条件によっている。①ヘラ描き沈線とヘラ描き紋様や彩紋と組みあうものは紋様などに分類した。②削り出し突帯は他の紋様と組みあうものもすべて削り出

し突帯に分類し、他の紋様との組み合わせは省略した。③貼り付け突帯も同様にすべて貼り付け突帯に分類し、他の紋様との組み合わせは省略した。これらの組み合わせは、別に検討を行う。また、第30~32図、付表14~16では下沈線は沈線に分類している。

紋様は出土層位と切り合いにより、S X60は第2層が第3層の資料を含み、S X76は第



第29図 壺形土器の口頸部界・頸胴部界破片の紋様例

1層が第2層の資料を含んでおり、接合する資料もあることから、S X60は(第5層→第4層→第3層)→(第2層→第1層)、S X76は(第3層→第2層)→第1層の順の変遷がと推測され、この順序に従って記述する。また、S X76は一部S X60を切っているため、S X60の資料を含んでいる。

B. 紋様構成

(a) 口頸部界の紋様(第30図、付表14・30)

S X60第5層・第4層は資料数が各々10点、28点と僅少なため不自然なデータとなった。第5層の削り出し突帯+ α の30%は多すぎるし、沈線1～3の20%は逆に少なすぎると考えられる。

以下、時期的な傾向の見られるものについて述べる。

①段はS X60第3層までは20%前後あるが、S X60第2層・第1層では5%前後になり、S X76第3層で6.5%と多い以外、S X76第2層・第1層では1%前後に減少する。

②削り出し突帯Ⅰ種はS X60第5層で10%あるが、S X60第4層から上層では5%前後に減少し、S X76第2層・第1層では3%前後に減少する。

③削り出し突帯+ α はS X60第5・第4層では20%前後あるが、S X76第3層で12.9%とやや多い以外、S X60第3層以降は5%前後に減少する。

④削り出し突帯Ⅱ種1～3はS X60第4層で3.6%とやや少ないが、S X76第3層までは10%前後あり、S X76第2層・第1層では15%前後に増加する。

⑤削り出し突帯Ⅱ種3+ α ～6はS X60では第3層で2.3%あるのみであるが、S X76では3%以上存在する。

⑥沈線1～3はS X60第5層で20%と少ないが、S X60第1層までは50%前後ある。しかし、S X76では30%前後に減少し、S X76第1層では27.6%と最も少ない。

⑦沈線3+ α ～6はS X60第1層までは5%前後だが、S X76では20%前後に増加する。

⑧沈線6+ α ～10はS X76第2層・第1層のみに存在し、S X76第1層では7.9%と最も多い。

⑨貼り付け突帯1～3はS X60では第2層で11.8%、第1層で3.2%あり、S X76第2層・第1層では10%前後安定して存在する。

⑩貼り付け突帯3+ α ～6はS X76のみに3%前後存在する。

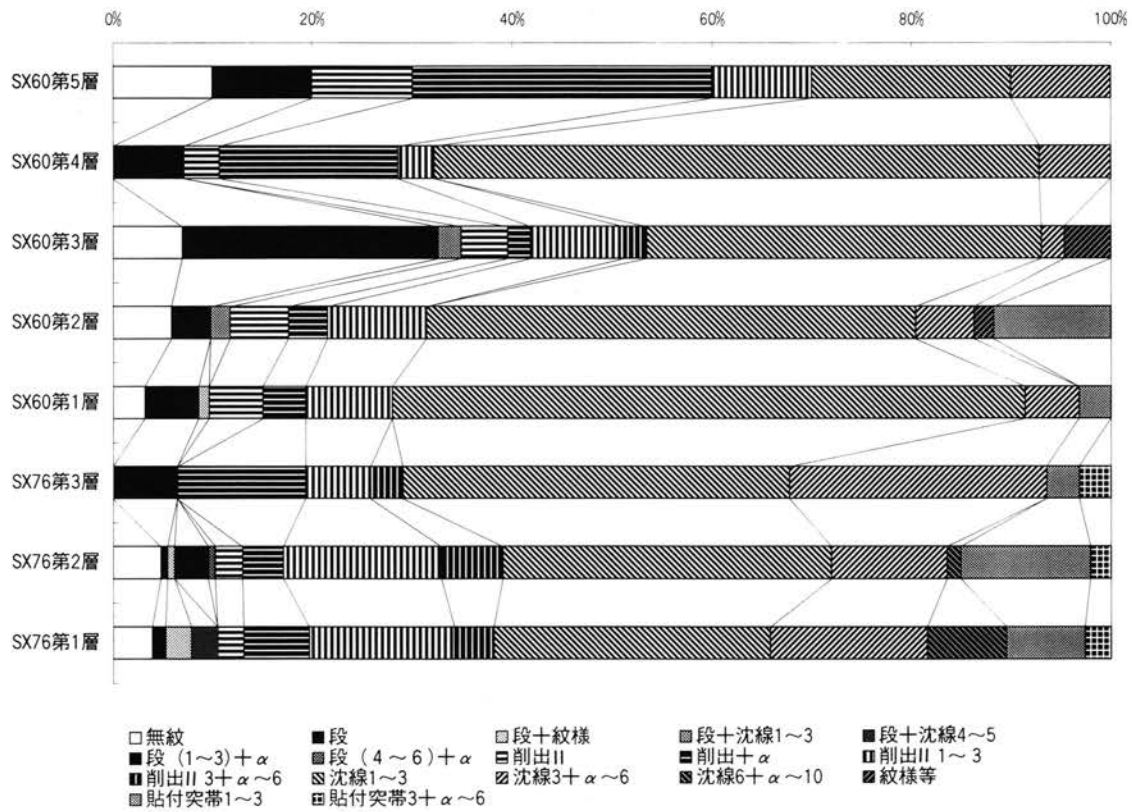
(b) 頸胸部界の紋様(第31図、付表15・31)

①段は、S X60第5層、第4層でやや僅少なものの、S X60第3層までは20%前後あるが、S X60第2層・第1層では6%程度に減少し、S X76では第3層で1%あるのみで、第2層・第1層では存在しない。

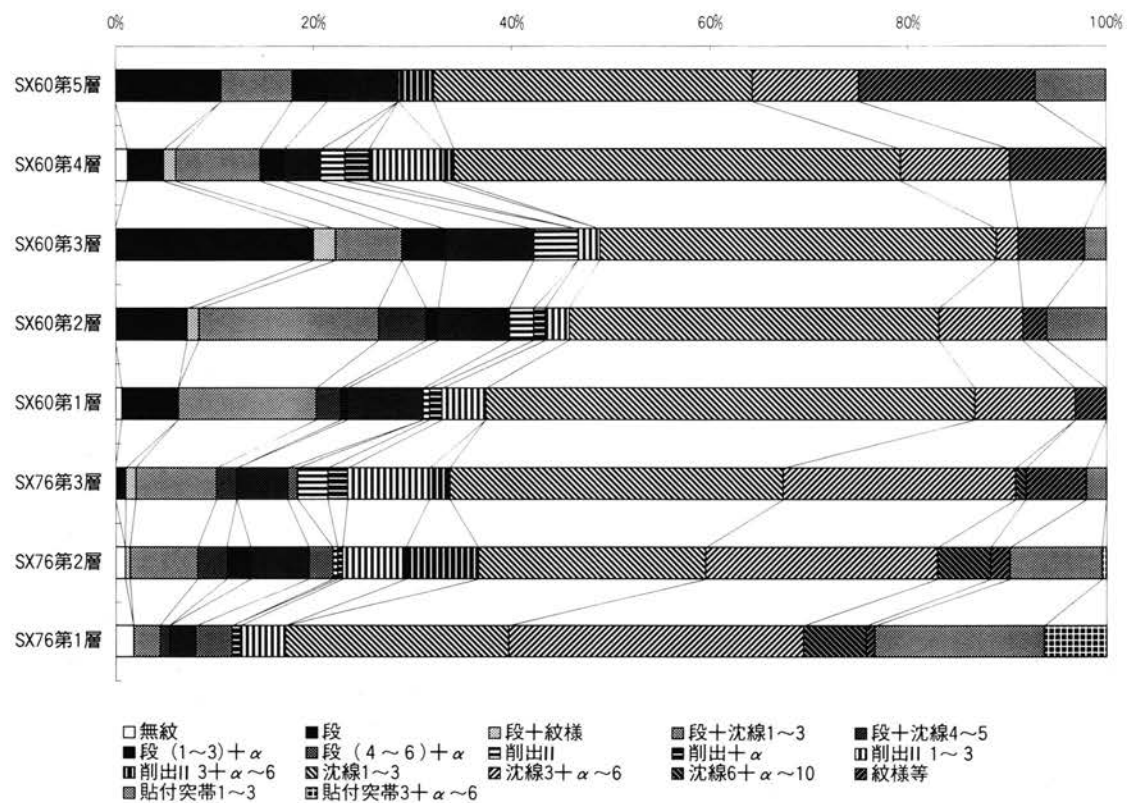
②段+沈線1～3はS X76第3層までは10%前後あるが、S X76第2層で6.8%、第1層では2.7%と最も少ない。

③段+ α はS X60第3層までは3%前後あるが、S X76では第2層で2.5%ある以外、ほとんど存在しない。大半が段になると考えられる。

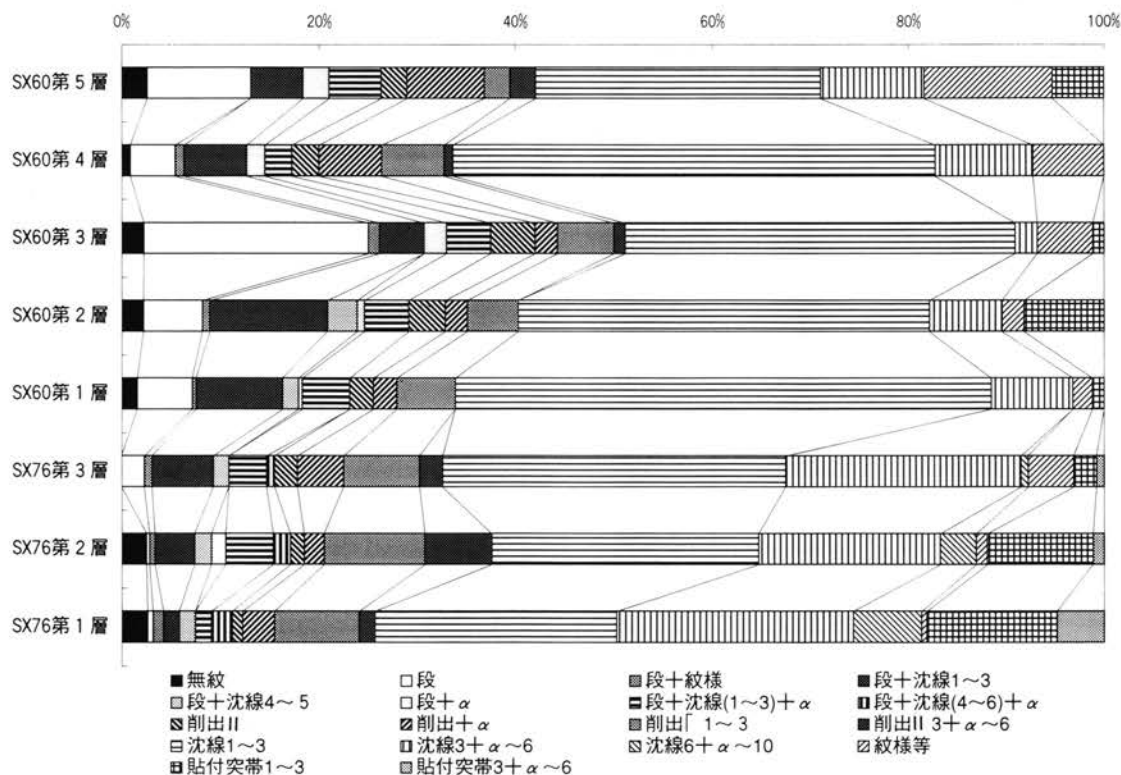
④段+沈線(1～3)+ α はS X76第2層までは5%前後あるが、S X76第1層では2.7%に減少



第30図 壺形土器の口頸部界の紋様構成



第31図 壺形土器の頸胴部界の紋様構成



第32図 壺形土器の紋様構成(全体)

- する。この減少分は段関係の紋様で、残りの大半は削出突帯Ⅱ種になると考えられる。
- ⑤段+沈線(4~6)+ α はSX76にのみ存在し、SX76第1層では3.6%と最も多い。本来、大半が削り出し突帯Ⅱ種と考えられる。
- ⑥削り出し突帯Ⅰ種はSX76第3層までは3%前後あるが、SX76第2層・第1層では1%以下に減少する。
- ⑦削り出し突帯Ⅱ種1~3は、SX60では第5層でなく、第4層で7.3%とやや多いが、第3~1層では5%以内であるのに対し、SX76では7%前後に増加する。
- ⑧削り出し突帯Ⅱ種3+ α ~6はSX60第5層・第4層にも若干あるが、SX76第3層で2%、SX76第2層で7.3%存在する。
- ⑨沈線1~3はSX60では第5層が32.1%とやや少ない以外、50%前後存在するが、SX76では30%前後に減少し、SX76第1層では22.5%と最も少ない。下沈線1~3は、段+沈線1~3の割合から、SX60では段+沈線1~3もふくまれていようが、SX76では大半が沈線になると考えられる。
- ⑩沈線3+ α ~6はSX60では10%前後であるが、SX76では20%前後に増加し、SX76第1層では29.7%と最も多い。下沈線4~9はSX76のみにあり、段+沈線4~6はSX60第2層以降に少量あるのみなので、大半は多条沈線になると考えられる。
- ⑪沈線6+ α ~10はSX76のみにあり、SX76第1層では6.3%と最も多い。

⑫紋様などはS X60では第5層で17.9%と最も多く、第3層までは7%前後あるが、第2層、第1層では減少し、S X76では第3層で6.1%とやや多い以外、2%以下に減少する。

⑬貼り付け突帯1～3はS X76第3層までは8%以内だが、S X76第2層では9.2%に増加し、S X76第1層では17.1%と最も多い。

⑭貼り付け突帯3 + α ～6はS X76第2層、第1層にのみあり、S X76第1層では6.3%と最も多い。

(c)全体(第32図、付表32)

口頸部界、頸胴部界の紋様全体で検討を行った。

①段はS X60第5層で10.5%、S X60第4層で4.5%とやや少ないが、S X60第3層では22.7%あり、本来第5層、第4層でも20%前後存在したと考えられる。S X60第2層・第1層では6%程度に、S X76第3層以降ではさらに半減する。

②段 + α はS X60第3層までは2%前後あるが、S X60第2層以降では半減し、大半は段関係の紋様になると考えられる。

③段 + 沈線(1～3) + α はS X76第2層までは5%前後あるが、S X76第1層では2.7%に減少する。減少分は、段関係の紋様になると考えられる。

④段 + 沈線(4～6) + α はS X76のみにあり、第1層で2.1%と最も多い。本来、大半が削り出し突帯Ⅱ種多条と考えられる。

⑤削り出し突帯Ⅰ種はS X76第3層までは3%前後あるが、S X76第2層・第1層では半減する。

⑥削り出し突帯 + α はS X60第4層までは7%前後あるが、S X60第3層からは半減する。これらは本来削り出し突帯Ⅰ種と考えられる。

⑦削り出し突帯Ⅱ種1～3はS X60第5層で2.6%あり、S X60第4層から第1層では5%前後、S X76では8%前後に増加する。

⑧削り出し突帯Ⅱ種3 + α ～6はS X60第5層から第3層にも若干あるが、S X76第2層で6.8%と最も多い。

⑨沈線1～3はS X60では第5層で28.9%と少ない以外、50%前後あるが、S X76では30%前後に減少し、第1層では24.6%と最も少ない。

⑩沈線3 + α ～6はS X60では10%前後だが、S X76では20%前後に増加し、第1層では24.1%と最も多い。

⑪沈線6 + α ～10はS X76のみにあり、第1層では7%と最も多い。

⑫紋様などはS X60第5層で13.2%と最も多く、S X60第3層までは6%前後あるが、S X60第2層、第1層では半減し、さらにS X76第3層では4.7%とやや多い以外、S X76第2層・第1層では1%前後に減少する。

⑬貼り付け突帯1～3はS X76第3層までにも若干あるが、S X76第2層・第1層では10%以上あり、第1層では13.4%と最も多い。

⑭貼り付け突帯 $3 + \alpha \sim 6$ はS X76のみにあり、第1層では4.6%と最も多い。

以上の結果から、層位的な新古と若干の混入があるが①S X60第5層～S X60第3層、②S X60第2層～S X60第1層、③S X76第3層～第1層に大別でき、出土層位と切り合い関係にほぼ一致する。

S X60第5層～S X60第3層では、段の20%前後の存在と、段 $+ \alpha$ の3%前後の存在を特徴とする。また、S X60第5層、第4層では、削り出し突帯 $+ \alpha$ が7%前後存在し、S X60第5層では紋様などが15.8%と多いのも特徴である。中段階、I-b段階(井藤1982～1983)に相当する。

S X60第2層～S X60第1層では、段の6%前後の減少と、段 $+ \alpha$ の1%前後の減少を特徴とする。S X60第3層に続いて、削り出し突帯 $+ \alpha$ が2%前後と少ない。

なお、①・②に共通する特徴として、S X60第5層で2.6%とやや少ない以外、削り出し突帯Ⅱ種1～3が5%前後、沈線1～3が50%前後存在し、貼り付け突帯、多条沈線が僅少であることが挙げられるが、②は他遺跡の状況から削り出し突帯Ⅱ種の増加が考えられる。中段階の後半、I-c段階(井藤1982～1983)に相当する。

S X76第3層～第1層では、段の数%以下の減少や、本来は削り出し突帯Ⅱ種多条と考えられる段 $+$ 沈線(4～6) $+ \alpha$ の存在、沈線 $3 + \alpha \sim 6$ の20%前後の増加、沈線 $6 + \alpha \sim 10$ の出現、S X76第2層の貼り付け突帯1～3の10%前後の増加、貼り付け突帯 $3 + \alpha$ 以上の出現を特徴とする。S X76第3層では段 $+$ 沈線1～3が6.2%あり、削り出し突帯Ⅰ種が2.3%あるなどS X60と共通する要素もあるが、多くは混在と考えられる。S X76第1層は段 $+$ 沈線(4～6) $+ \alpha$ が2.1%、沈線 $6 + \alpha \sim 10$ が7%、貼り付け突帯1～3が13.4%、貼り付け突帯 $3 + \alpha \sim 6$ が4.8%と最多であり、最も新しい様相を示す。新段階の前半、Ⅱ-a段階(井藤1982～1983)に相当する。さて、畿内では新段階後半、前期末とされる一括資料中にはしばしば少量の櫛描き紋を含み(渡辺・井藤他1985、石神・神内他1991)、西日本各地で前期末の地域色を持つ多条沈線や半截竹管を施す土器と、少量の櫛描き施紋土器が共伴する状況が明らかになってきた(若林1992)。今回最も新しいS X76第1層には、紋様構成や櫛描き紋を含まない点で新段階の前半に位置付けられるが、筆者は櫛描き紋の出現をもって前期と中期の区分を行うのが妥当と考えており、S X76第1層出土土器を前期末に位置付けたい。

C. 器形について

前述のように、S X60・76出土の壺形土器は、紋様構成によってS X60第5層～S X60第3層、S X60第2層～S X60第1層、S X76第3層～第1層に細分したが、全体的に掘り直しと切り合い関係による若干の混在が見られるため、各段階の新しい要素を抽出する。なお、全形の分かるものがほとんどないので、口縁部を中心に分類を行った。

口頸部界の紋様によって、1.無紋、2.段、3.削り出し突帯Ⅰ種、4.削り出し突帯Ⅱ種、5.沈線、6.貼り付け突帯に細分し、さらに4～6は1～3条のものをa、4～6条のものをbとする。口縁部形態は、比較的短く外反するものをA、大きく発達するものをBとした。一般的にAには胴部最大径が器高よりもやや小さいものと大きいものがあり、Bには佐原がa形態とす

付表14 壺形土器の口頸部界の紋様構成

	SX60第5層		SX60第4層		SX60第3層		SX60第2層		SX60第1層		SX76第3層		SX76第2層		SX76第1層	
無紋	1	10.0%			3	7.0%	3	5.9%	3	3.2%			7	4.8%	3	3.9%
段	1	10.0%	2	7.1%	11	25.6%	2	3.9%	5	5.4%	2	6.5%	1	0.7%	1	1.3%
段+紋様									1	1.1%			1	0.7%	2	2.6%
段+沈線1~3					1	2.3%	1	2.0%								
段+沈線4~5															2	2.6%
段+沈線(1~3)+ α													5	3.4%		
段+沈線(4~6)+ α													1	0.7%		
削出 I	1	10.0%	1	3.6%	2	4.7%	3	5.9%	5	5.4%			4	2.8%	2	2.6%
削出+ α	3	30.0%	5	17.9%	1	2.3%	2	3.9%	4	4.3%	4	12.9%	6	4.1%	5	6.6%
削出 II 1~3	1	10.0%	1	3.6%	4	9.3%	5	9.8%	8	8.6%	2	6.5%	23	15.9%	11	14.5%
削出 II 3+ α ~10					1	2.3%					1	3.2%	9	6.2%	3	3.9%
沈線1~3	2	20.0%	17	60.7%	17	39.5%	25	49.0%	59	63.4%	12	38.7%	47	32.4%	21	27.6%
沈線3+ α ~6	1	10.0%	2	7.1%	1	2.3%	3	5.9%	5	5.4%	8	25.8%	17	11.7%	12	15.8%
沈線6+ α ~10													2	1.4%	6	7.9%
紋様等					2	4.7%	1	2.0%								
貼付突帯1~3							6	11.8%	3	3.2%	1	3.2%	19	13.1%	6	7.9%
貼付突帯3+ α ~6											1	3.2%	3	2.1%	2	2.6%
合計	10	100.0%	28	100.0%	43	100.0%	51	100.0%	93	100.0%	31	100.0%	145	100.0%	76	100.0%

付表15 壺形土器の頸胴部界の紋様構成

	SX60第5層		SX60第4層		SX60第3層		SX60第2層		SX60第1層		SX76第3層		SX76第2層		SX76第1層	
無紋			1	1.2%					1	0.6%			2	1.0%	2	1.8%
段	3	10.7%	3	3.7%	9	20.0%	6	7.2%	9	5.7%	1	1.0%				
段+紋様			1	1.2%	1	2.2%	1	1.2%			1	1.0%	1	0.5%		
段+沈線1~3	2	7.1%	7	8.5%	3	6.7%	15	18.1%	22	13.9%	8	8.2%	14	6.8%	3	2.7%
段+沈線4~5							4	4.8%	4	2.5%	2	2.0%	6	2.9%	1	0.9%
段+ α	1	3.6%	2	2.4%	2	4.4%	1	1.2%	1	0.6%			5	2.4%		
段+沈線(1~3)+ α	2	7.1%	3	3.7%	4	8.9%	6	7.2%	12	7.6%	5	5.1%	12	5.8%	3	2.7%
段+沈線(4~6)+ α											1	1.0%	5	2.4%	4	3.6%
削出 I			2	2.4%	2	4.4%	2	2.4%	1	0.6%	3	3.1%	1	0.5%		
削出+ α			2	2.4%			1	1.2%	2	1.3%	2	2.0%	1	0.5%	1	0.9%
削出 II 1~3			6	7.3%	1	2.2%	2	2.4%	7	4.4%	8	8.2%	13	6.3%	5	4.5%
削出 II 3+ α ~6	1	3.6%	1	1.2%							2	2.0%	15	7.3%		
沈線1~3	9	32.1%	37	45.1%	18	40.0%	31	37.3%	78	49.4%	33	33.7%	48	23.3%	25	22.5%
沈線3+ α ~6	3	10.7%	9	11.0%	1	2.2%	7	8.4%	16	10.1%	23	23.5%	48	23.3%	33	29.7%
沈線6+ α ~10											1	1.0%	11	5.3%	7	6.3%
紋様等	5	17.9%	8	9.8%	3	6.7%	2	2.4%	5	3.2%	6	6.1%	4	1.9%	1	0.9%
貼付突帯1~3	2	7.1%			1	2.2%	5	6.0%			2	2.0%	19	9.2%	19	17.1%
貼付突帯3+ α ~6													1	0.5%	7	6.3%
合計	28	100.0%	82	100.0%	45	100.0%	83	100.0%	158	100.0%	98	100.0%	206	100.0%	111	100.0%

付表16 壺形土器の紋様構成

	SX60第5層		SX60第4層		SX60第3層		SX60第2層		SX60第1層		SX76第3層		SX76第2層		SX76第1層	
無紋	1	2.6%	1	0.9%	2	2.3%	3	2.2%	4	1.6%			9	2.6%	5	2.7%
段	4	10.5%	5	4.5%	20	22.7%	8	6.0%	14	5.6%	3	2.3%	1	0.3%	1	0.5%
段+紋様			1	0.9%	1	1.1%	1	0.7%	1	0.4%	1	0.8%	2	0.6%	2	1.1%
段+沈線1~3	2	5.3%	7	6.4%	4	4.5%	16	11.9%	22	8.8%	8	6.2%	14	4.0%	3	1.6%
段+沈線4~5							4	3.0%	4	1.6%	2	1.6%	6	1.7%	3	1.6%
段+ α	1	2.6%	2	1.8%	2	2.3%	1	0.7%	1	0.4%			5	1.4%		
段+沈線(1~3)+ α	2	5.3%	3	2.7%	4	4.5%	6	4.5%	12	4.8%	5	3.9%	17	4.8%	3	1.6%
段+沈線(4~6)+ α											1	0.8%	6	1.7%	4	2.1%
削出I	1	2.6%	3	2.7%	4	4.5%	5	3.7%	6	2.4%	3	2.3%	5	1.4%	2	1.1%
削出+ α	3	7.9%	7	6.4%	2	2.3%	3	2.2%	6	2.4%	6	4.7%	7	2.0%	6	3.2%
削出II 1~3	1	2.6%	7	6.4%	5	5.7%	7	5.2%	15	6.0%	10	7.8%	36	10.3%	16	8.6%
削出II 3+ α ~6	1	2.6%	1	0.9%	1	1.1%					3	2.3%	24	6.8%	3	1.6%
沈線1~3	11	28.9%	54	49.1%	35	39.8%	56	41.8%	137	54.6%	45	34.9%	95	27.1%	46	24.6%
沈線3+ α ~6	4	10.5%	11	10.0%	2	2.3%	10	7.5%	21	8.4%	31	24.0%	65	18.5%	45	24.1%
沈線6+ α ~10											1	0.8%	13	3.7%	13	7.0%
紋様等	5	13.2%	8	7.3%	5	5.7%	3	2.2%	5	2.0%	6	4.7%	4	1.1%	1	0.5%
貼付突帯1~3	2	5.3%			1	1.1%	11	8.2%	3	1.2%	3	2.3%	38	10.8%	25	13.4%
貼付突帯3+ α ~6											1	0.8%	4	1.1%	9	4.8%
合計	38	100.0%	110	100.0%	88	100.0%	134	100.0%	251	100.0%	129	100.0%	351	100.0%	187	100.0%

る胴部最大径が器高を大きく上回るもの、b形態とする胴部最大径が器高よりも小さい丈高のものがある。各層には以下の各類が存在する。

SX60第5層~第3層 1-A、2-A、3-A、4a-A、3-B、5a-B。

SX60第2層~第1層 1-A、2-A、3-A、4a-A、4a-B、5a-B、6a-A。

SX76第3層~第1層 1-A、2-A、3-A、4a-A、1-B、2-B、4a-B、4b-B、5b-B、6a-B、6b-B。

切り合いや掘り直しによる混入を考慮し、各段階の形態を述べる。

SX60第5層~第3層では、大半がAで占められ、Bは僅少である。

SX60第2層~第1層では、4a-B、5a-Bが存在する。また、紋様構成の検討から同時期と考えられる唐古・鍵遺跡20次SK-215出土土器(藤田1986)は、Aの他に2-B、5a-B、6a-Bが存在することから、この段階にはAとBが共存している可能性が高く、本格的な多条化、帯状紋様化に先立ち、1-B、2-B、3-B、4b-B、5b-Bの存在が予想される。

SX76第3層~第1層では、すべての形態が見られるが、他の前期後半の資料にはAはほとんど存在しないことから、SX60の混入と考えられる。ただし、大型壺形土器は器形の変化に乏しくAが残存する。また、他のBと変わらない1Bや2Bの存在から、僅少ではあるが無紋、段の存在が認められる。以上のように紋様構成の変化とともに器形も変化している。その他、特殊なものに、SX76第2層の片口を持つ壺形土器がある(101)。片口は、液体を注ぐためのもので、この分布はほぼ畿内に限定される(秋山1992)。管見によれば、北山城地域ではこれが初例であり、高槻市安満遺跡出土の瓢形土器(森田1990)との関連が注目される。

D. 各部位の紋様と組み合わせ

(a) 口唇部(付表17)

口唇部の紋様は無紋が大半を占め、各層ではほぼ70%から80%前後存在する。次いでみられるのが沈線で、各層で10%から20%前後と大きな差はなく、刻みと沈線を併用するものも少ない。沈線は、粘土帯の接合面に施紋するものが多い。刻みを持つものは極めて少なく、綾杉状の刻みを持つものはなかった。他に、彩紋を施すものが1点ある(759)。なお、758は包含層出土ではあるが、口唇部下端を粘土紐を貼り付けて拡張し、指頭による刻みを施し、端面に沈線2条と縦線を加えたもので、前期末から中期初頭のものと考えられる。播磨の影響が考えられ(秋山1992)、後述する双頭渦紋を持つ壺形土器との関連が注目できる。

(b) 口頸部界、頸胴部界の紋様の組み合わせ(付表18)

S X 60第5層、S X 76第3層を除く各層で、口頸部界と頸胴部界の紋様の組み合わせのわかるものが35点出土している。S X 60第3・4層では半数が段と組み合わせ、残りの多くが3条までの沈線と組み合わせ。S X 60第2層・第1層では7点中、段+沈線と組み合わせるものが3点、沈線3条までと組み合わせるものが3点、沈線4+ α 以上と組み合わせるものが1点ある。

S X 76では20点中、段と組み合わせるものが5点あるが、17のように口縁部が逆段で沈線7+1と組み合わせるもの、14のように口縁部が発達した丈高のものがあり、この段階までわずかに段は残存したと考えられる。貼り付け突帯と組み合わせるものは4点あるが、145を除き、口縁部もしくは胴部が発達したものである。この壺は、貼り付け突起を持ち、頸胴部界は段+沈線7であるものの、段は明瞭であるうえ、形態はS X 60の壺形土器とも近似しており、混在の可能性が高い。124は沈線1条と段+沈線2、16は削り出し突帯Ⅱ1が組み合わせるものであるが、口縁部が未発達であり、混在の可能性が高い。

以上のように、S X 60では段や少条の沈線と組み合わせるものが多いが、S X 76では多条沈線や貼り付け突帯と組み合わせるものが増加する。無紋や段などには混在もあるが、口縁部が発達して他と同様の形態変化を遂げたものもあり、その存在は肯定されよう。

(c) 口頸部界の紋様の組み合わせ(付表19)

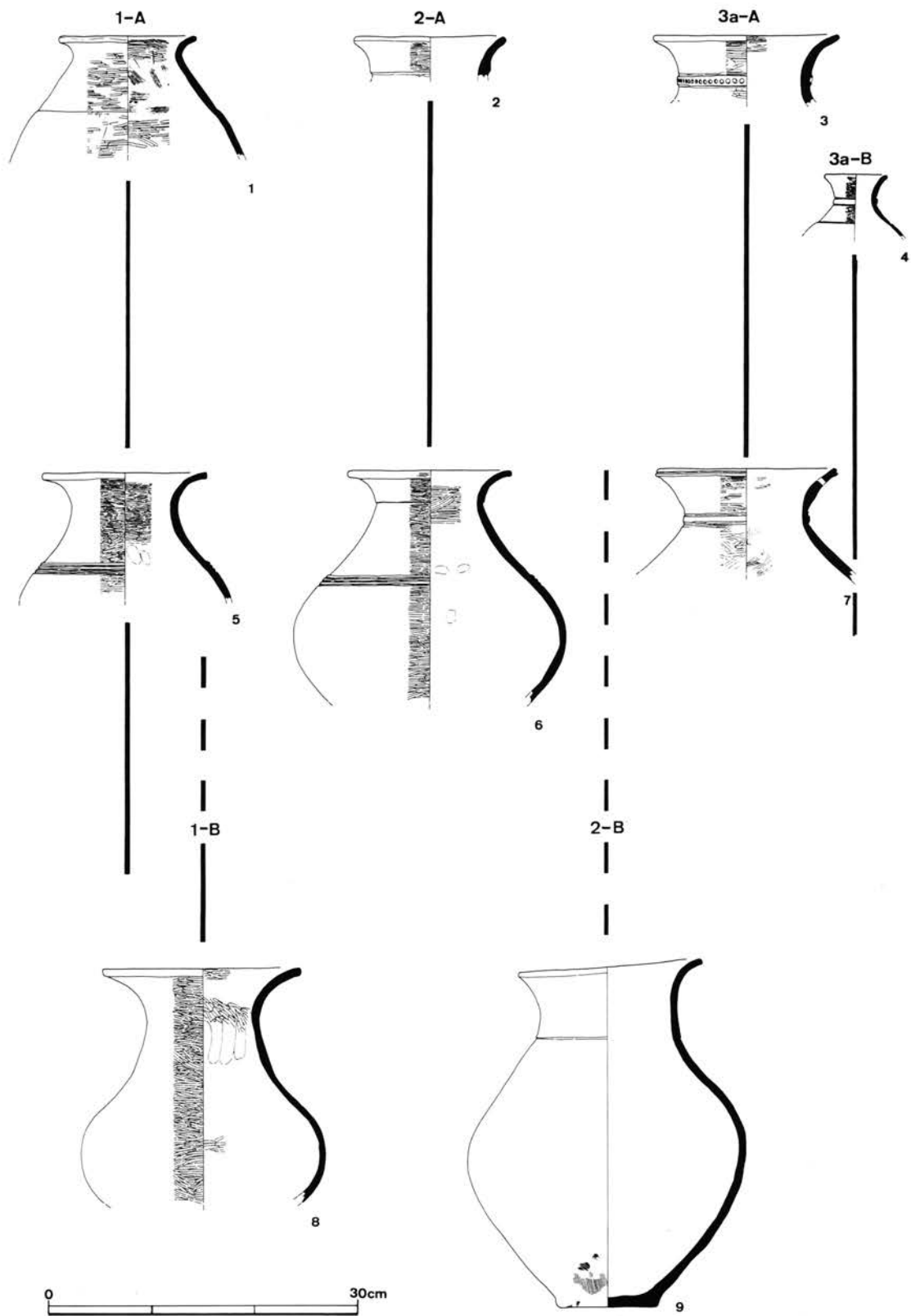
口頸部界で紋様が組み合わせるものは24点出土している。

S X 60では少なく、381・595・720のように、段や沈線などの区画紋様の直下に紋様を施すもの、削り出し突帯、貼り付け突帯に刺突や沈線を施すものが主体である。帯状紋様は第1層で1点見られる。S X 76では沈線と貼り付け突帯が組み合わせる帯状紋様と、沈線と刺突が組み合わせるものが多い。

(d) 頸胴部界の紋様の組み合わせ(付表20・21)

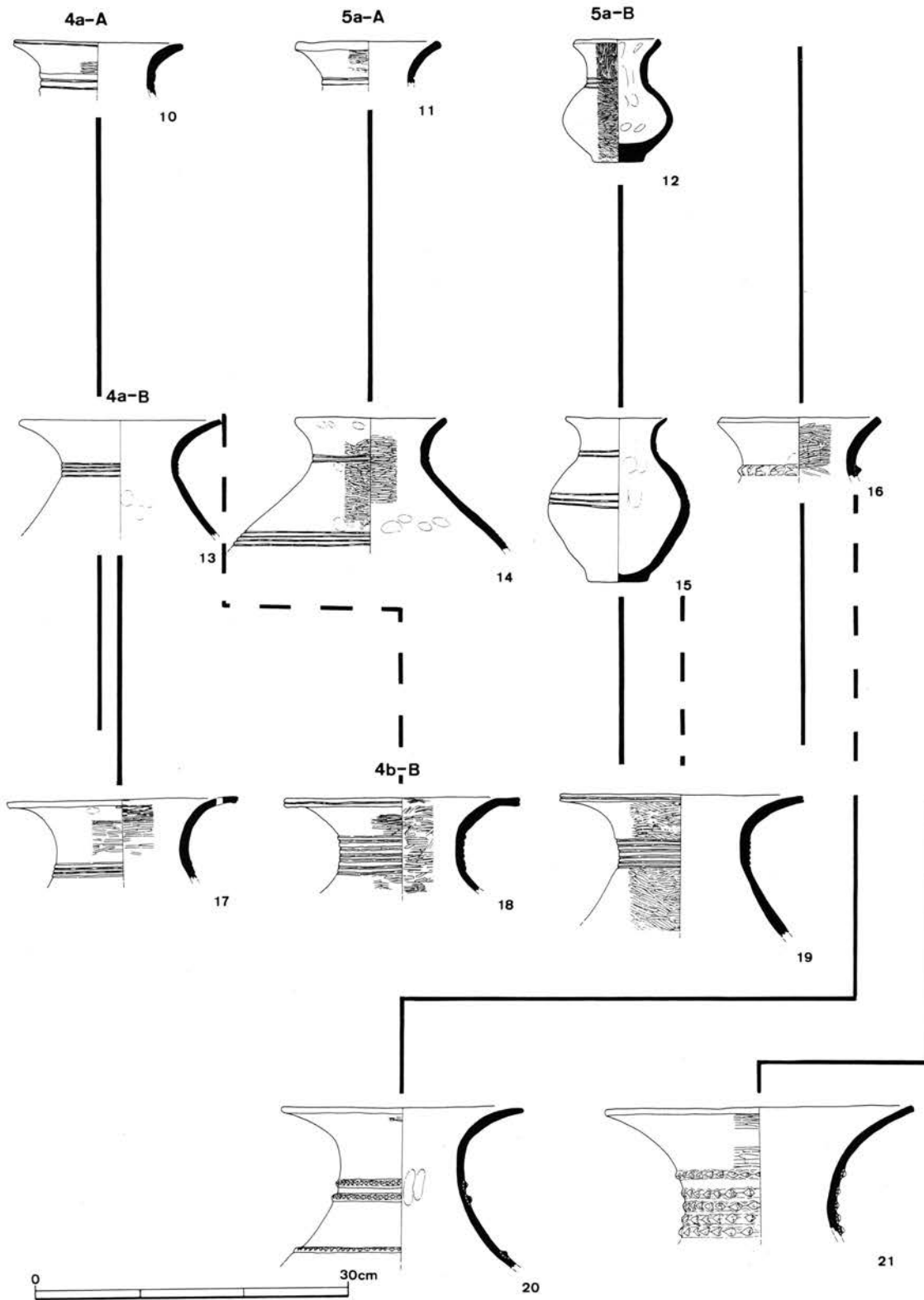
頸胴部界で紋様が組み合わせるものは101点出土している。口頸部界と同じく、S X 60では区画紋様の直下に木葉紋などの紋様を施すものが多い。帯状沈線は、S X 60第2層で3点見られる。

S X 76では有段のものや、赤彩紋などにS X 60の混入と考えられるものもあるが、特に第2層、第1層では沈線、削り出し突帯、貼り付け突帯が組み合わせる、間隔をおいた帯状紋様が多い。17は



第33図 壺形土器の変遷(1)

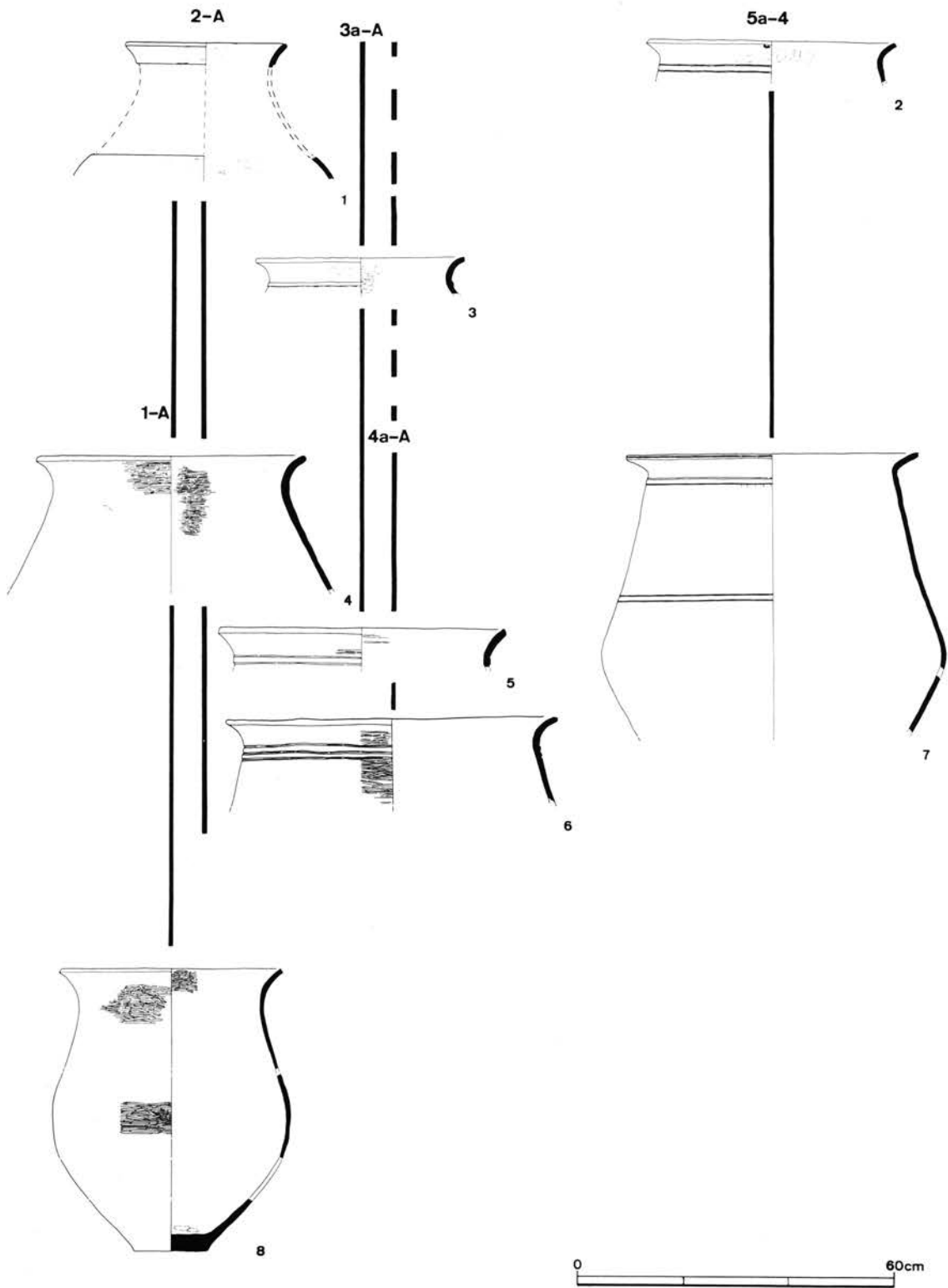
沈線7条の下に間隔をおいて沈線1条を施紋し、21は沈線9条の下に大きく間隔をあけて貼り付け突帯4条を施紋するなど、幅広い紋様帯を持つ。



第34図 壺形土器の変遷(2)

E. 口縁部内面の装飾(付表22)

紐穴をはじめとする口縁部内面装飾を持つ壺形土器はS X60第5層、第3層を除く各層で出土している。紐穴は壺用蓋形土器の紐穴と組み合うもので、中段階に多い属性であり(佐原1967)、



第35図 壺形土器の変遷(3) ※1は、下鳥羽遺跡土坑163出土

付表17 壺形土器の口唇部の紋様構成

	SX60第5層		SX60第4層		SX60第3層		SX60第2層		SX60第1層		SX76第3層		SX76第2層		SX76第1層	
無紋	13	68.4%	35	83.3%	50	87.7%	65	72.2%	109	81.3%	40	81.6%	156	75.0%	58	84.1%
沈線	4	21.1%	6	14.3%	5	8.8%	20	22.2%	20	14.9%	7	14.3%	44	21.2%	8	11.6%
沈線+刻み					1	1.8%	1	1.1%	3	2.2%	1	2.0%	4	1.9%	1	1.4%
刻み			1	2.4%			1	1.1%					4	1.9%	2	2.9%
不明	2	10.5%			1	1.8%	3	3.3%	2	1.5%	1	2.0%				
合計	19	100.0%	42	100.0%	57	100.0%	90	100.0%	134	100.0%	49	100.0%	208	100.0%	69	100.0%

付表18 壺形土器の口頸部界・頸胴部界の紋様組み合わせ

遺構	図版番号	口唇部	紐穴	口頸部界	頸胴部界
S X60第4層	578	無紋		段	沈線2+ α
	592			下沈線2+ α	沈線2
	595			沈線2+重弧紋	沈線2+重弧紋
	579	無紋		沈線3	無紋
S X60第3層	553	無紋		無紋	段
	529	無紋		削出突帯I	段
	550			下沈線1+ α	段
S X60第2層	495	無紋		段	段+沈線3
	494	無紋	有	沈線2	段+沈線4
S X60第1層	389	無紋		無紋	段+沈線3
	未掲載			下沈線1+ α	沈線3
	未掲載			下沈線2+ α	沈線3
	390	無紋		沈線2	沈線4+ α
	398	沈線		沈線2	沈線2
	385	無紋		沈線3	沈線3
	393			下沈線3+ α	無紋
	S X76第2層	123	無紋		無紋
134	無紋		無紋	無紋	
未掲載			段+沈線1+ α	削出突帯II 2	
124	無紋		沈線1	段+沈線2	
138			沈線2	沈線3+ α	
未掲載			下沈線2+ α	沈線4+ α	
152			下沈線2+ α	段+沈線4	
140			沈線3	沈線3	
125	沈線		沈線3	沈線5	
126	無紋		貼付突帯1	貼付突帯1	
145			貼付突起1+ α	段+沈線7+貼付突起1	
127			貼付突帯2	沈線7	
122	無紋		貼付突帯2	貼付突帯1+ α	
S X76第1層	未掲載			無紋	無紋
	14	無紋		段	無紋
	17	無紋	有	(逆)段4	沈線7+1
	16	無紋		削出突帯II 1	削出突帯II 1
	19	無紋		削出突帯II 2	無紋
	20	無紋		沈線3	沈線3

付表19 壺形土器の口頸部界の紋様組み合わせ

遺構	図版番号	口頸部界
S X 60第5層	627	削り出し突帯 I 突帯上に竹管刺突
S X 60第4層	595	沈線 2 + 重弧紋
S X 60第2層	未掲載	削り出し突帯 I 突帯上に竹管刺突
	720	下沈線 1 + α + 斜軸木葉紋
	未掲載	貼り付け突帯 1 + α 突帯上に沈線 1
S X 60第1層	381	段 直下に縦沈線 3
	未掲載	沈線 2 + 貼り付け突帯 1 + 沈線 2 + α
S X 76第3層	未掲載	段 直下に沈線 2
	未掲載	段 直下に沈線 1
	297	沈線 1 + 紋様
	691	沈線 2 間を刺突
	767	貼り付け突帯 1 + 沈線 赤彩紋
	685	沈線 4 + α 2 と 3 の間を竹管刺突
S X 76第2層	92	段 直下に山形紋(貝殻施紋)
	678	沈線 1 + α 直下に刺突 2
	未掲載	沈線 1 + α 直下に刺突
	未掲載	沈線 2 間を竹管刺突
	671	沈線 3 + α 間を竹管刺突
	682	下沈線 2 + α + 貼り付け突帯 1 + 沈線 1 + α
S X 76第1層	3	貼り付け突帯 1 + 沈線 3 + α
	660	沈線 2 間を竹管刺突
	667	貼り付け突帯 2 + 沈線 3 + α
	662	沈線 2 + α + 貼り付け突帯 2 (綾杉状刻み)

今回の出土を見ても、その比率は S X 60 が多く、S X 76 になると少なくなる。畿内最古の大開遺跡の土器には、口縁部内面に紐穴と蓋受けと考えられる貼り付け突帯を持つものが数点ある。口縁部内面の貼り付け突帯は、この時期に併行する山口県の綾羅木Ⅲ式 A の壺形土器(伊東1981)に見られる。しかし、綾羅木Ⅲ式には壺用蓋形土器はなく、紐穴を持つ壺形土器とは別系譜で、壺用蓋形土器とともに出現したと考えられる。今回、口縁部内面に貼り付け突帯を持つ壺形土器は S X 60 第2層以降で出土している。380 は、内面に豆状の貼り付け突起を持つ稀な例である。

紐穴や壺用蓋形土器が減少する前期末では、内面の貼り付け突帯は愛媛県や山口県を中心に分布する属性である。前者は突帯の一部が注口状に立ち上がり、後者は突帯が全周水平にめぐるのが特徴とする。S X 76 からは両者が出土している。前者には 13、668 があり、13 は紐穴を持つ。後者には 12・111 がある。111 は、口縁部内面上部を肥厚させ、その下に 1 条の貼り付け突帯を持つ。外面には浅いヘラ描き沈線が 1 条残存する。口縁部は完存しないが、山口県の綾羅木Ⅲ式 B の壺形土器に近似し(伊東他1981・第36図1)、突帯は水平にめぐることが高い。他に口唇部を肥厚させたり、面を持つものは 112、114 の S X 76 第2層の壺をはじめ、S X 76 から 5 点出土している。これらは他と胎土、焼成が同じであり、搬入品ではない。

また、綾羅木Ⅲ式の影響が考えられるものに 52・238 の鉢形土器がある。55 もその可能性を持つ。外面を肥厚させ、そこに沈線を施す鉢形土器は綾羅木Ⅲ式に散見され(第36図2・3・4)、

付表20 S X60土器の頸胴部界の紋様組み合わせ

遺構	図版 番号	頸胴部界
SX60 第5層	777	段+沈線4 赤彩紋(重弧紋)
	776	赤彩紋(縦軸木葉紋)+段沈線1+ α
	未掲載	沈線1+篋描き紋様
	750	刺突+沈線1+山形紋
	未掲載	沈線1+ α +紋様
	未掲載	下沈線2+ α +紋様
	751	斜軸木葉紋+下沈線3+ α
SX60 第4層	778	双頭渦紋 赤彩紋
	779	双頭渦紋 赤彩紋
	740	段+沈線2 間を竹管刺突
	738	段+沈線3+斜軸木葉紋?
	771	段+沈線1+ α 赤彩紋
	749	縦沈線2+削り出し突帯I 直下に重弧紋
	未掲載	削り出し突帯II+ α 間を竹管刺突
	742	無軸羽状紋+沈線2
	595	沈線2+重弧紋
	741	沈線2 間を刺突
	未掲載	沈線2 間を刺突
739	沈線3 間を竹管刺突	
未掲載	沈線3 間を竹管刺突	
748	下沈線1+ α +縦沈線	
769	下沈線1+ α 赤彩紋	
747	下沈線1+ α +鋸歯紋+沈線2	
746	無軸木葉紋+下沈線1+ α	
737	下沈線2+ α +無軸木葉紋	
未掲載	下沈線2+ α 間を刺突+紋様	
SX60 第3層	730	段+重弧紋
	734	沈線3+重弧紋
	未掲載	下沈線1+ α +山形紋+沈線1
	735	下沈線1+ α +斜軸木葉紋+沈線2+ α
	736	双頭渦紋(剥離)
SX60 第2層	724	縦線2+段+斜格子紋+沈線2
	721	斜軸木葉紋+沈線1+貼り付け突帯1+沈線2
	未掲載	沈線2+沈線2
	未掲載	沈線2+沈線2
	未掲載	沈線2+沈線2
	726	沈線2+無軸羽状紋+沈線2
	728	段+沈線2+ α 間を刺突
	729	削り出し突帯I+ α +有軸羽状紋
	722	下沈線1+ α ?+斜軸木葉紋
	未掲載	下沈線3+ α 間を刺突
	490	円形浮紋
727	下沈線4+ α +有軸羽状紋	
SX60 第1層	未掲載	段+沈線2+2
	710	段+沈線3+斜軸木葉紋
	717	沈線3 間と沈線下に刺突
	未掲載	沈線3 間と沈線下に刺突
	714	縦線3+沈線2+ α
	715	沈線3+ α 間を刺突
	712	斜軸木葉紋+沈線1+重弧紋
	707	下沈線1+ α +無軸木葉紋
	706	下沈線2+ α +無軸木葉紋
	716	下沈線2+ α 間を刺突
	未掲載	下沈線2+ α 間と沈線下に刺突
	718	下沈線3+ α 間を竹管刺突
	未掲載	下沈線3+ α 間と沈線下に刺突
	708	下沈線4+ α +斜軸木葉紋
	719	無軸羽状紋

付表21 S X76土器の頸胴部界の紋様組み合わせ

遺構	図版 番号	頸胴部界
SX76 第3層	690	段+重弧紋
	768	削り出し突帯I 赤彩紋
	760	沈線2+ α 赤彩紋
	692	山形紋+沈線2+ α
	684	無軸木葉紋+沈線2+ α
	688	下沈線3+ α +無軸羽状紋
	693	下沈線3+ α +紋様
SX76 第2層	683	段+沈線1+沈線2+ α
	679	段+沈線3 間を竹管刺突
	145	段+沈線7+貼り付け突起
	675	段+沈線4+ α +流水紋
	未掲載	削り出し突帯+ α +沈線1
	未掲載	削り出し突帯II+ α +沈線1
	未掲載	削り出し突帯II+ α +沈線2+ α
	未掲載	削り出し突帯II+ α +沈線2+ α
	161	削り出し突帯II+ α +貼り付け突帯2
	682	沈線2+貼り付け突帯1+沈線1+ α
	666	沈線2+双頭渦紋
	150	沈線4+沈線2
	未掲載	下沈線1+ α +2+ α
	未掲載	下沈線1+ α +3+ α
	未掲載	下沈線2+ α 間を竹管刺突
	674	下沈線1+ α +重弧紋
	未掲載	下沈線3+ α +2+ α
未掲載	下沈線4+ α +2+ α	
670	篋描き紋様+沈線2+ α	
765	下沈線4+ α 赤彩文	
681	縦線+沈線1+ α	
672	斜軸木葉紋+沈線3	
686	沈線2+ α +紋様	
139	貼り付け突帯1+ α +双頭渦紋	
137	棒状浮紋+貼り付け突帯1+ α	
SX76 第1層	未掲載	削り出し突帯+ α +沈線1
	661	削り出し突帯II 沈線間を竹管刺突
	未掲載	沈線2+沈線1
	未掲載	沈線2+貼り付け巴紋
	664	沈線2+紋様
	未掲載	沈線6+沈線1+ α
	17	沈線7+沈線1
	21	沈線9+貼り付け突帯4
	未掲載	下沈線1+ α +段3+ α
	665	下沈線1+ α +山形紋
	663	下沈線1+ α +竹管刺突
未掲載	下沈線7+ α +2+ α	

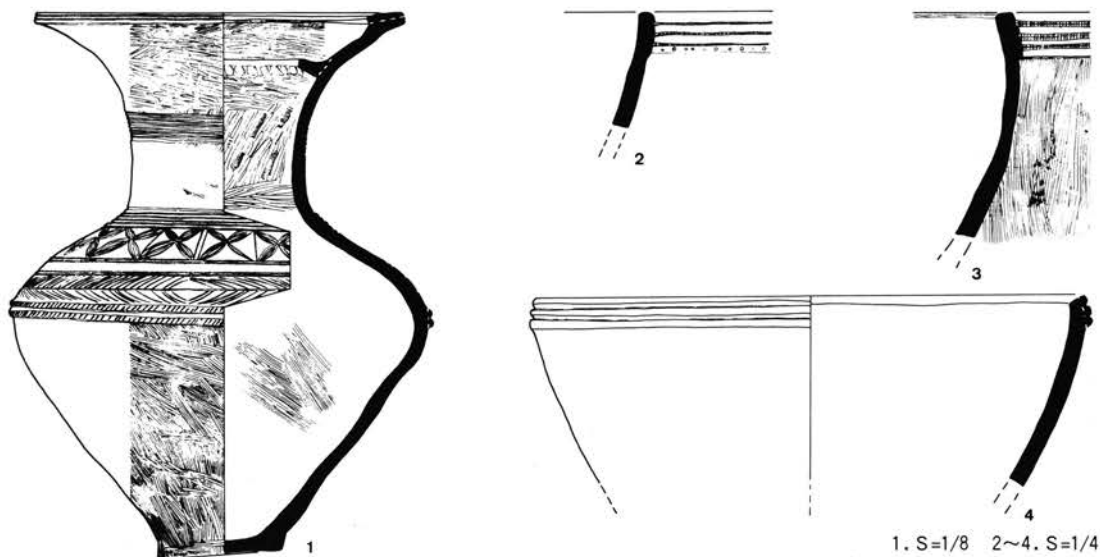
付表22 紐穴・内面装飾

遺構	図版番号	口唇部	紐穴	内面装飾	口頸部界
S X 60第4層	590	無紋	有		沈線2
S X 60第2層	484	無紋		貼り付け突帯	
	未掲載	無紋	有		
	未掲載	無紋	有		
	未掲載	無紋	有		
	未掲載	無紋	有		
	未掲載	沈線	有		段+沈線2 削り出し突帯I
	480	沈線	有		沈線2
S X 60第1層	未掲載	無紋	有		
	未掲載	無紋	有		
	375	無紋	有		
	380	無紋	有	貼り付け突起	
	369	無紋	有		沈線2
	371	無紋	有		沈線2
	377	無紋	有		沈線1+ α
	368	無紋	有		沈線1+ α
	376	沈線	有		削り出し突帯I
	387	沈線	有		削り出し突帯I
S X 76第3層	764	不明		彩紋	
	未掲載	無紋		面有	
	289	無紋	有		
	未掲載	無紋	有		削り出し突帯+ α
	292	沈線	有		沈線4
S X 76第2層	未掲載	無紋		面有	
	112	無紋		面有	
	114	無紋		内面肥厚	沈線2+ α
	101	無紋		片口	削り出し突帯II 2
	668	無紋		貼り付け突帯(注口状)	
	110	無紋	有	沈線1	
	未掲載	無紋	有		
	未掲載	無紋	有		
	未掲載	無紋	有		
	117	無紋	有		
	未掲載	無紋	有		沈線3
	未掲載	沈線		面有	
	未掲載	沈線		沈線1	
	115	沈線		沈線1	沈線1+ α
	130	沈線		沈線3	
	109	無紋	有		削り出し突帯II 2
	111	沈線		内面肥厚+貼り付け突帯	沈線1+ α
	未掲載	沈線	有		
	未掲載	沈線	有		
	未掲載	沈線	有		
S X 76第1層	未掲載	無紋	有		
	4	沈線		沈線5	
	未掲載	沈線	有	沈線1	沈線1+ α
	8	沈線	有	沈線3	削り出し突帯II 2+ α
	5	無紋	有		沈線6
	未掲載	沈線	有		
	12	刻み	有	貼り付け突帯	
13	刻み	有	貼り付け突帯(注口状)		

他地域に例は少ない(秋山1992)。しかし、238のように把手が付くのは畿内に特徴的なものであるうえ、胎土は明らかに在地のものである。また、5のように口唇部に沈線を持つものは、岡山県門田遺跡に類例があり(秋山1992)、備前地域の影響を受けたものと考えられる。これらは綾羅木Ⅲ式の間接的な影響を受けたものといえよう。

綾羅木Ⅲ式は、①Ⅲ式Aと呼ばれる段を残し、体部も未発達な壺形土器が盛行する段階、②Ⅲ式Bと呼ばれる口縁部が発達し、丈高になる壺形土器が盛行する段階、③Ⅲ式Bと口縁端部が立ち上がる内接口縁の壺形土器が盛行する段階の、少なくとも3つに細分することが可能である(伊東他1981、乗安1995・1996)。このうち、③では初現的な櫛描き紋との共伴例があることから、中期初頭と考えられる。111は、②段階に相当する壺形土器であるが、前述のように、S X76からは櫛描き紋は1点も出土していない。S X76第2層出土の綾羅木Ⅲ式に近似する壺形土器、鉢形土器は山口県と畿内の前期末が併行することを示す貴重な資料といえよう。これらは山陰、丹後地域から丹波を介して綾羅木Ⅲ式の間接的な影響を受けたと考えられ、前期末の雲宮遺跡と丹波の大堰川水系の亀岡市太田遺跡(村尾、田代1986)などの諸遺跡を介した、山陰から丹後地域との相互交流が想定できよう。

口縁内面に沈線を持つものは、S X76第2層、第1層で7点出土している。このうち、沈線が1条のものは山口県の綾羅木Ⅱ式(伊東他1981)に特徴的である。しかし、時期的にずれがある上、内面沈線は綾羅木Ⅱ式が口頸部界が段のものに見られるのに対し、今回の出土土器には口頸部界が沈線のものに見られること、内面沈線に3条、5条のものが見られることから、綾羅木Ⅱ式と直接的な関係はない。内面に2条以上の沈線を施す壺形土器は、前期中葉から後半に瀬戸内から畿内にかけて散見されるほか、東海地方に多い属性である。しかし、今回、東海系の土器は出土しておらず、むしろ瀬戸内の影響と考えられる。他に、畿内では、東奈良遺跡溝25(奥井他1981)、亀井遺跡S D 1503(広瀬、石神他1986)などに類例がある。



第36図 綾羅木Ⅲ式の壺形土器と鉢形土器(1/4)

1. AⅢ地区L.N.60 2・4. RⅣ地区L.N.5411 3. K地区L.N.101

F. 主な紋様とその組み合わせについて

(a) 赤彩紋(付表23)

木葉紋に代表される平塗りの赤彩紋は、壺用蓋形土器、木製品とセットになって祭祀などの非日常的な用途に使用された(豆谷1995)。平塗りの赤彩紋は、畿内で最古段階の土器が出土している神戸市大開遺跡にはなく、壺用蓋形土器とともに1段階遅れて畿内を中心に出現し、逆に瀬戸内にも伝わる。東海地方西部の最古の遠賀川式土器はこの段階に相当する。赤彩紋は、前期中葉に盛行し、前期末には少なくなる。

これまで北山城地域では、赤彩紋は鶏冠井遺跡(山中・長谷川・國下他1983)で壺形土器の胴部に木葉紋を施すもの、貼り付け突帯に施すもの、下鳥羽遺跡(前田・磯部1988、田畑1997)で壺用蓋形土器、小型の鉢形土器の内面に施すものが出土している程度で、貴重な例を追加することとなった。今回、赤彩紋はS X60・76の各層で出土している。そのうち、半数以上はS X76第3層までから出土している。カウントを行った部位のうち、S X60では1,981点中10点、0.5%で、S X76では2,508点中9点、0.35%で、S X60からの出土が多く、S X76出土の大半はS X60の混入と考えられる。各層に黒色物を塗布するものがあり、全体的に器壁の荒れたものが多いことを考慮すると、本来は多数存在したのであろう。沈線、段や削り出し突帯の縁取沈線内に施すものが4点あるが、これらは剥落しにくい沈線内に残存した結果と見るべきかもしれない。確実にヘラ描き沈線と組み合わせるものは、S X60第5層から1点出土している。777は、段+沈線4に赤彩紋で、段の直上に沈線を2条、段の沈線間に3条の沈線を施し、その下に3条単位の重弧紋を施す。

付表23 赤彩紋(付表23~29の*は、重複しているものを示す)

紋様	遺構	図版番号	器種	部位	紋様
赤彩紋	S X60第5層	777	壺形土器	頸胴部界	*段+沈線4 (重弧紋)
	S X60第5層	776	壺形土器	頸胴部界	(縦軸木葉紋)+*段+沈線1+ α
	S X60第5層	774・775	壺形土器	胴部	(縦軸木葉紋)
	S X60第5層	778	壺形土器	頸胴部界	*双頭渦紋
	S X60第5層	779	壺形土器	頸胴部界	*双頭渦紋
	S X60第4層	771	壺形土器	頸胴部界	*段+沈線1+ α
	S X60第4層	769	壺形土器	頸胴部界	下沈線1+ α
	S X60第4層	770	壺形土器	胴部	
	S X60第4層	773	壺形土器	胴部	*(縦型木葉紋)
	S X60第3層	772	壺形土器	口頸部界	*木葉紋?
	S X76第3層	764	壺形土器	口縁部内面	
	S X76第3層	767	壺形土器	口頸部界	*貼り付け突帯1+沈線2
	S X76第3層	768	壺形土器	頸胴部界	*削り出し突帯I
	S X76第3層	760	壺形土器	頸胴部界	沈線2+ α
	S X76第3層	766	壺形土器	頸部	
	S X76第3層	763	壺形土器	底部	
	S X76第2層	765	壺形土器	頸胴部界	下沈線4+ α
	S X76第2層	761	壺用蓋形土器	内外面	
	S X76第2層	762	甕形土器	底部	
	S X76第1層	759	壺形土器	口唇部	

付表24 段と他紋様の組み合わせ

紋様	遺構	図版番号	部位	紋様
段	S X60第5層	777	頸胴部界	段+沈線4 *赤彩紋(重弧紋)
	S X60第5層	776	頸胴部界	*赤彩紋(縦軸木葉紋)+段1+ α
	S X60第4層	771	頸胴部界	段+沈線1+ α *赤彩紋
	S X60第4層	740	頸胴部界	段+沈線2 *間を竹管刺突
	S X60第4層	738	頸胴部界	段+沈線3 *斜軸木葉紋?
	S X60第3層	730	頸胴部界	段 重弧紋
	S X60第2層	724	頸胴部界	縦線2+段+斜格子紋+沈線2
	S X60第1層	381	口頸部界	段 直下に縦沈線3
	S X60第1層	未掲載	頸胴部界	段+沈線2+2
	S X60第1層	710	頸胴部界	段+沈線3+斜軸木葉紋
	S X60第1層	711	段+沈線3+*	斜軸木葉紋
	S X76第3層	未掲載	口頸部界	段、直下に沈線1
	S X76第3層	未掲載	口頸部界	段、直下に沈線2
	S X76第3層	690	頸胴部界	段+重弧紋
	S X76第2層	92	口頸部界	段、直下に*貝殻施紋
	S X76第2層	683	頸胴部界	段+沈線1+沈線2+ α
	S X76第2層	145	頸胴部界	段+沈線7+*貼り付け突起
	S X76第2層	675	頸胴部界	段+沈線4+ α +流水紋

平塗りの縦軸木葉紋^(注1)を施すものはS X60第5層で3点(774~776)、S X60第4層から1点出土した。773は、壺用蓋形土器の可能性もある。双頭渦紋を彩紋で縁採るものが2点出土した。778は、双頭渦紋の下に彩紋でも双頭渦紋らしき紋様を施す。また、762のように甕形土器の底部に赤彩が残るものは、顔料を入れた容器に使用された可能性がある(国分1991)。

なお、774~776・778・779は、色調・胎土が近似しており、同一個体の可能性が高い。類似のものに、東奈良遺跡G区方形周溝墓群古相出土の双頭渦紋、彩紋、貼り付け突帯で加飾した壺形土器がある(森田1990)。今回、最も古いS X60第5層から、祭祀などの特殊な用途に使用されたと推測される赤彩紋を施す壺形土器の出土は、集落形成の時期を知る上でも重要である。

(b)段(付表24)

段は、粘土板の接合を利用したものは少なく、頸胴部界はもとより、口頸部界もヘラミガキにより窪められたものが多い。S X60では紋様と組み合わせるものが大半である。S X76出土の大半は、S X60の混入と考えられ、本来僅少なものと考えられる。また、17の口頸部界は、通常の段とは反対に頸部側を高めた「逆段」で、段上に沈線を4条施紋する。逆段はS X60第1層、S X76のみにあり、すべて沈線をとまなうことから削り出し突帯Ⅱ種の変容型といえよう。前述のように、14は、口縁部が長く発達し、段を持つものの器高が胴部最大径を大きく上回るなど、器形は他のS X76の壺形土器に近似しており、前期後半にも段がわずかに残存したことをうかがわせる。

675は、段に4+ α の沈線を施紋し、沈線間に縦の短線を施す流水紋である。同様のもので紋様帯がわかるものに、唐古・鍵遺跡1次調査第58号竪穴出土土器がある(末永・小林・藤岡1943、豆谷1995)。これは、削り出し突帯Ⅱ種の沈線間に施されるもので、今回出土土器も削り出し突帯Ⅱ種になる可能性が高い。

(c) 削り出し突帯(付表25)

削り出し突帯は、第Ⅰ種、Ⅱ種が各層から出土している。削り出し突帯Ⅰ種には断面形態が逆三角形のもの、カマボコ形のもの、台形のものがあるが、後二者が多く、突出する佐原分類のa種は少ない。

削り出し突帯Ⅱ種は両側をヘラミガキにより窪めたものである。このうち、窪めかたがあいまい、または部分的で沈線との区別が困難なものもあるが、残存部分のうち、過半以上を占めるものに分類している。削り出し突帯と組み合わせるものとして、S X60では、突帯上に刺突紋を施すものや、直下または直上に紋様を持つものがある。S X76では削り出し突帯Ⅱ種の直下に沈線や貼り付け突帯を施し、帯状紋様を形成するものが多い。

(d) 貼り付け突帯(付表26)

前述したように、貼り付け突帯はS X60第5層から存在し、最も新しいS X76第1層で最多である。大半はヘラ刻みを持つもので、刻みを持たないものは少ない。ヘラ刻みには綾杉状のものがS X76第1層に1点ある(662)。布目圧痕はS X60にはなく、S X76に3点見られる。指頭圧痕とヘラ刻みによる連鎖状刻み目紋(秋山1992)は、S X76第2層から1点出土している(676)。貼り付けには、1条単位で貼り付けるもののほかに、667のように2条1帯で貼り付けるものがある。刻みは、1条ごとに行っている。また、27や667のように、貼り付けに先だてて沈線を施紋するものがある。

このほか、貼り付け突帯、貼り付けによる特殊紋様として双頭渦紋、円形浮紋、棒状浮紋がある。双頭渦紋は5点出土している。S X60出土のものは一重で、第5層の778・779は前述のように彩紋を伴う。S K78の胴部(654)は突帯に刻みを持ち、二重で渦を巻く。S X76第1層の28は三重で渦を巻き、S X76第2層の139も同様な双頭渦紋の一部と考えられる。この3点は、色調・胎土が類似していること、S K78はS X76を掘り込んだ土坑で、出土土器は元々S X76第1層に含まれていた可能性があることから、同一個体の可能性がある。また、S X76第2層の677は、円形浮紋によって渦状の紋様を表現したものと考えられる。高く突出する秋山分類のB型に相当する(秋山1992)。

付表25 削り出し突帯と他紋様の組み合わせ

紋様	遺構	図版番号	部位	紋様
削り出し突帯	S X60第5層	627	口頸部界	削り出し突帯Ⅰ 突帯上に竹管刺突
	S X60第4層	749	頸胴部界	縦沈線2 + 削り出し突帯Ⅰ 直下に重弧紋
	S X60第4層	未掲載	頸胴部界	削り出し突帯Ⅱ 1 + α 間を竹管刺突
	S X60第2層	未掲載	口頸部界	削り出し突帯Ⅰ 突帯上に竹管刺突
	S X60第2層	729	頸胴部界	削り出し突帯Ⅰ + α + 有軸羽状紋
	S X76第3層	768	頸胴部界	削り出し突帯Ⅰ * 赤彩紋
	S X76第2層	161	頸胴部界	削り出し突帯Ⅱ 3 + α + * 貼り付け突帯2
	S X76第2層	未掲載	頸胴部界	削り出し突帯 + α + 沈線1
	S X76第2層	未掲載	頸胴部界	削り出し突帯Ⅱ 1 + α + 沈線2 + α
	S X76第2層	未掲載	頸胴部界	削り出し突帯Ⅱ 3 + α + 沈線2 + α
	S X76第1層	661	頸胴部界	削り出し突帯Ⅱ 2 沈線間刺突

付表26 貼り付け突帯と他紋様の組み合わせ

紋様	遺構	図版番号	部位	紋様
貼り付け突帯	S X60第5層	778	頸胴部界	双頭渦紋*赤彩紋
	S X60第5層	779	頸胴部界	双頭渦紋*赤彩紋
	S X60第3層	736	頸胴部界	双頭渦紋
	S X60第2層	未掲載	口頸部界	貼り付け突帯1+ α 突帯上に沈線1
	S X60第2層	490	頸胴部界	円形浮紋?
	S X60第2層	721	頸胴部界	*斜軸木葉紋 沈線1+貼り付け突帯1+沈線2
	S X60第1層	未掲載	口頸部界	沈線2+貼り付け突帯1+沈線2+ α
	S X76第3層	767	口頸部界	貼り付け突帯1+沈線2 *赤彩紋
	S X76第3層	未掲載	口頸部界	貼り付け突帯3+ α (布目圧痕)
	S X76第2層	682	口頸部界	下沈線2+ α +貼り付け突帯1+沈線1+ α
	S X76第2層	677	頸部	貼り付け突起
	S X76第2層	145	頸胴部界	*段+沈線7+貼り付け突起
	S X76第2層	161	頸胴部界	*削り出し突帯II 3+ α +貼り付け突帯2
	S X76第2層	682	頸胴部界	沈線2+貼り付け突帯1+沈線1+ α
	S X76第2層	666	頸胴部界	沈線2+双頭渦紋
	S X76第2層	137	頸胴部界	棒状浮紋+貼り付け突帯1+ α
	S X76第2層	139	頸胴部界	貼り付け突帯1+ α +双頭渦紋
	S X76第2層	676	頸胴部界	貼り付け突帯1+ α (連鎖状刻み)
	S X76第1層	3	口頸部界	貼り付け突帯1+沈線3+ α
	S X76第1層	667	口頸部界	貼り付け突帯2+沈線3+ α
S X76第1層	662	口頸部界	沈線2+ α +貼り付け突帯2(綾杉状刻み)	

双頭渦紋は、中村五郎が東日本に起源があることを指摘しており(中村1988)、豆谷はその出現は古く、彩紋表現のものをポジティブに表現したものと指摘している(豆谷1995)。

前期中葉では、東大阪市山賀遺跡土器群(西口・上西他1984)、唐古・鍵遺跡20次S K-215(藤田1986)などで見られ、彩紋と組み合わせるものが多い。S X60第5層の双頭渦紋は、周囲を彩紋で縁取っていることから古いタイプと考えられ、前期中葉の確実な突帯要素の存在を示す一例といえよう。

棒状浮紋は、S X76第2層から1点出土している。137は上部が欠失して不明であるが、棒状浮紋の下に貼り付け突帯1条を施す。突帯紋間をつなぐ秋山分類のC型(秋山1992)と考えられる。

S X76・S K78双頭渦紋・棒状浮紋・円形浮紋は、前期後半の丁・柳ヶ瀬遺跡(岡崎他1985)など、播磨に多い属性である。数は少ないながらも、西方からの影響として瀬戸内型甕とともに注目すべきであろう。

(e)木葉紋(付表27)

木葉紋は、可能性があるものを含めて18点出土している。雲宮遺跡では、昭和35年の調査(佐原1967)で頸部に斜軸木葉紋と考えられる紋様の一部、左京第212次調査で縦型の木葉紋が出土しており(白川1990)、未報告であるが左京第18次調査でも木葉紋が出土している(戸原1985)。

前述のように、北山城地域では鶏冠井遺跡で彩紋で斜軸木葉紋を施す壺形土器の胴部片が出土しており、下鳥羽遺跡でも土坑163・161から斜軸木葉紋、包含層から無軸・縦軸・斜軸木葉紋を施す壺形土器の胴部片が出土している(前田・磯部1988、田畑1997)。今回出土の木葉紋は、大半

付表27 木葉紋

紋様	遺構	図版番号	部位	紋様
木葉紋	S X 60第 5 層	776	頸胴部界	* 赤彩紋 縦軸木葉紋 + * 段 + 沈線 1 + α
	S X 60第 5 層	751	頸胴部界	斜軸木葉紋 + 沈線 3 + α
	S X 60第 4 層	738	頸胴部界	* 段 + 沈線 3 + 斜軸 ?
	S X 60第 4 層	737	頸胴部界	下沈線 2 + α + 無軸
	S X 60第 3 層	735	頸胴部界	下沈線 1 + α + 斜軸 + 沈線 2 + α
	S X 60第 3 層	733	不明	斜軸 ?
	S X 60第 2 層	721	頸胴部界	斜軸 + 沈線 1 + * 貼り付け突帯 1 + 沈線 2
	S X 60第 2 層	722	頸胴部界	下沈線 1 + α ? + 斜軸
	S X 60第 2 層	720	口頸部界	下沈線 1 + α + 斜軸
	S X 60第 1 層	707	頸胴部界	下沈線 1 + α + 無軸
	S X 60第 1 層	706	頸胴部界	下沈線 2 + α + 無軸
	S X 60第 1 層	711		段 + 沈線 3 + 斜軸
	S X 60第 1 層	710	頸胴部界	* 段 + 沈線 3 + 斜軸
	S X 60第 1 層	708	頸胴部界	下沈線 4 + α + 斜軸
	S X 60第 1 層	712	頸胴部界	斜軸 + 沈線 1 + 重弧紋
	S X 60第 1 層	709	不明	縦軸 ?
	S X 76第 3 層	684	頸胴部界	無軸 + 下沈線 2 + α
	S X 76第 3 層	694	不明	斜軸 ?
	S X 76第 2 層	672	頸胴部界	斜軸 + 沈線 3

が S X 60 から出土しており、古・中段階に存在が限定されるという無軸木葉紋(深澤1989)は S X 76 第 2 層、第 1 層からは出土していない。

前述のように、平塗りの彩紋による縦型の木葉紋が S X 60 第 5 層から 2 点出土している。ヘラ描きでは、S X 60 第 3 層の無軸木葉紋(737)はミガキの後に下沈線 2 + α 、その下に沈線 3 条を施紋するが、一番下の沈線は途中で消される。次に 2 条の縦線を施紋し、最後に各区画内を充填している。

S X 60 第 1 層の無軸木葉紋(706・707)、S X 76 第 3 層の無軸木葉紋(684)も同様である。S X 60 第 2 層の斜軸木葉紋(720)は、縦・横の区画の前後関係は不明であるが、ミガキの後に軸線、次に弧紋を施紋し、中心にヘラによる刺突を加えている。S X 60 第 1 層の斜軸木葉紋(708)は、ミガキの後に軸線、弧紋の順で施紋する。下半は欠失しているが、残存部は無紋で本来空白と推定される。S X 60 第 1 層の斜軸木葉紋(710・711)は、段 + 沈線 3 の下にを施紋し、縦の区画はない。両者は同一個体の可能性が高い。同層の 712 は、斜軸木葉紋の下端を沈線 1 条で区画し、直下に重弧紋を施すもので、710・711 と同一個体の可能性がある。

S X 60 第 2 層の斜軸木葉紋(721)は、木葉紋の下に上から沈線 2 条、無刻みの貼り付け突帯 1 条、間隔をおいて沈線 2 条の順で施し、鋸歯紋らしき紋様を施紋する。これらは、器面が荒れ、調整及び施紋順序は不明である。

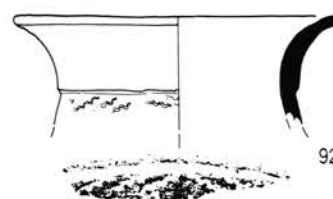
(f) 鋸歯紋・羽状紋・綾杉紋・貝殻施紋(付表28、第37図)

これらは、前期前葉を除けば、山口県から日本海沿いに丹後地域まで主体的に分布する属性である。畿内では山陰から丹後地域の影響を受けた土器は、田能遺跡(福井他1982)、東奈良遺跡

付表28 羽状紋・鋸歯紋・貝殻施紋

紋様	遺構	図版番号	部位	紋様
羽状紋	S X60第4層	747	頸胴部界	下沈線1 + α + 鋸歯紋 + 沈線2
鋸歯紋	S X60第2層	729	頸胴部界	* 削出突帯 + α + 有軸羽状紋
貝殻施紋	S X60第2層	726	頸胴部界	沈線2 + 無軸羽状紋 + 沈線2
	S X60第2層	727	頸胴部界	下沈線4 + α + 有軸羽状紋
	S X60第2層	725	胴部	無軸羽状紋
	S X60第1層	719	頸胴部界	無軸羽状紋
	S X76第3層	688	頸胴部界	下沈線3 + α + 無軸羽状紋
S X76第2層	92	口頸部界	* 段、直下に貝殻施紋	

(奥井他1982、信里1996)、唐古遺跡(末永・小林・藤岡1943、藤田1986)などから出土している。北山城地域では、鶏冠井遺跡で口唇部に綾杉状の刻みを施す壺形土器、下鳥羽遺跡で有軸羽状紋を施す壺形土器や、貝殻で綾杉紋を施す甕形土器が出土している(前田・磯部1990、田畑1997)。今回出土の壺形土器の大半はS X60から出土しており、S X76第3層の688、S X76第2層の92も本来はS X60に伴うと考えられ、前期中葉にほぼ限定できる点は重要である。



第37図 貝殻施紋の壺形土器
S X76第2層出土(1/3)

鋸歯紋を施紋する土器は、S X60第4層から1点出土している。747は、上端が下沈線1 + α 、下端が沈線2条で区画されている。その間を「X」字状に区画し、左右に3本の縦線を充填し、鋸歯が横方向で向かい合っている。残存部分から、胴部下半と推定でき、本来は他の紋様と組み合っていたと考えられる。付表に掲載されていないが、721も同様な鋸歯紋の可能性が有る。神戸市大開遺跡S B404では、同様な鋸歯紋が木葉紋とともに施紋されている(前田1993)。山口県から山陰・丹後地域に見られる鋸歯紋も同様に横方向に展開するが、本例とは異なり、先端は縦方向のものが大半を占める。

羽状紋は8点出土している。他紋様との組み合わせがわかるのは3例あり、688が上端で下沈線3 + α 、729が上端で削り出し突帯1 + α 、726が上端・下端で沈線2条と組み合う。

貝殻施紋は、S X76第2層から1点出土している(92、第37図)。貝は、サルボウガイの可能性が高い。段の直下に、向かって左側に4本の左下がりの斜線を施し、右側に3本右下がりの斜線を施している。欠失のためどのような紋様かは不明であるが、山形紋または有軸羽状紋か、無軸羽状紋になる可能性が高い。しかし、山口県、山陰・丹後地域では口縁部直下の頸部に紋様を施す例はほとんどない。

これらの紋様のうち、鋸歯紋や有軸羽状紋は畿内の前期中葉の土器に若干存在する要素である。しかし、688・719・726のように多段化し、紋様の単位が小さい無軸羽状紋は山陰から丹後地域の壺形土器の紋様に一般的なものである。この地域では、前期中葉の良好な一括資料がなく、厳密な検証は難しいが、前期中葉でも雲宮遺跡と丹波の大堰川水系の諸遺跡を介した山陰から丹後地域との交流がうかがえる。

付表29 刺突紋

紋様	遺構	図版番号	部位	紋様
刺突	S X60第5層	627	口頸部界	*削り出し突帯Ⅰ 突帯上に竹管刺突
	S X60第5層	750	頸胴部界	刺突+沈線1+山形紋
	S X60第4層	740	頸胴部界	*段+沈線2 間を竹管刺突
	S X60第4層	未掲載	頸胴部界	*削り出し突帯Ⅱ1+ α 間を竹管刺突
	S X60第4層	741	頸胴部界	沈線2 間を刺突
	S X60第4層	未掲載	頸胴部界	沈線2 間を刺突
	S X60第4層	739	頸胴部界	沈線3 間を竹管刺突
	S X60第4層	未掲載	頸胴部界	沈線3 間を竹管刺突
	S X60第4層	未掲載	頸胴部界	下沈線2+ α 間を刺突+紋様
	S X60第2層	未掲載	口頸部界	*削り出し突帯Ⅰ突帯上に竹管刺突
	S X60第2層	728	頸胴部界	段+沈線2+ α 間を刺突
	S X60第2層	未掲載	頸胴部界	下沈線3+ α 間を刺突
	S X60第1層	717	頸胴部界	沈線3 間と沈線下に刺突
	S X60第1層	未掲載	頸胴部界	沈線3 間と沈線下に刺突
	S X60第1層	715	頸胴部界	沈線3+ α 間を刺突
	S X60第1層	716	頸胴部界	下沈線2+ α 間を刺突
	S X60第1層	未掲載	頸胴部界	下沈線2+ α 間と沈線下を刺突
	S X60第1層	718	頸胴部界	下沈線3+ α 間を竹管刺突
	S X60第1層	未掲載	頸胴部界	下沈線3+ α 間と沈線下を竹管刺突
	S X76第3層	691	口頸部界	沈線2 間を刺突
	S X76第3層	685	口頸部界	沈線4+ α 2と3の間を竹管刺突
	S X76第2層	678	口頸部界	沈線1+ α 直下に刺突2
	S X76第2層	未掲載	口頸部界	沈線1+ α 直下に刺突
	S X76第2層	671	口頸部界	沈線3+ α 間を竹管刺突
	S X76第2層	679	頸胴部界	段+沈線3 間を竹管刺突
	S X76第2層	未掲載	頸胴部界	下沈線2+ α 間を竹管刺突
	S X76第1層	660	口頸部界	沈線2 間を竹管刺突
	S X76第1層	663	頸胴部界	下沈線1+ α +竹管刺突
	S X76第1層	661	頸胴部界	*削り出し突帯Ⅱ2 沈線間を竹管刺突

(g) 刺突紋(付表29)

刺突紋は、各層でさまざまな紋様と組み合っているが、S X76でやや少ない。施紋具にはヘラ状工具、棒状工具、竹管状工具があり、竹管状工具のうち、大半は直径5mm内外の工具を使用しているが、663は直径が約9mmの工具を使用している。紋様帯の上端・下端が欠失しているものが多いが、残存しているものでは沈線間に刺突を施すものが多い。

G. 畿内第Ⅰ様式の細別について

以上の検討の結果、佐原の古・中・新段階の細分案に示された区分紋様から帯状紋様への変化、少条沈線から多条沈線への変化は妥当と考えられる。しかし、現状に合わない以下の問題点がある。

①段単純の古段階は畿内のみならず、西日本の弥生時代前期には存在しない。北部九州や瀬戸内でも、刻み目突帯紋土器とのかかわりで僅少ではあるが、削り出し突帯が見られる。畿内最古の神戸市大開遺跡、東大阪市若江北遺跡(三好1996)では削り出し突帯Ⅰ種が少量存在するが、これも刻み目突帯紋土器との接触により、必然的に出現したと考えられる(田畑1997)。

②貼り付け突帯も必ずしも新しい要素ではない。古段階、もしくは中段階に区分紋様に用いられる例がある。もしくは、S X60第5層出土の双頭渦紋のような特殊紋様もあり、新段階以前に使用されていることは確実である。貼り付け突帯は当初から存在したのであって、削り出し突帯から貼り付け突帯を導き出すことはできない。

③中段階後半、井藤のI-c段階(井藤1982)には少条沈線、削り出し突帯Ⅱ種少条を主体としながらも、削り出し突帯Ⅱ種多条が出現し、貼り付け突帯などと組み合わせ、帯状紋様を呈するものがある。また、形態的にも口縁部の発達したもの、佐原がa形態と呼ぶものが出現している。

④井藤も指摘しているように(井藤1982~1983)、a形態とb形態の組み合わせは一致せず、貼り付け突帯は、今回の分析に見るように必ずしも多用されない。むしろ畿内周辺部からの影響を想定すべきだろう。

筆者自身は、①区分紋様から帯状紋様への変化、②少条沈線から多条沈線への変化、③口縁部の発達こそが最大の指標であると考えている。段、削り出し突帯Ⅰ種、Ⅱ種、貼り付け突帯のうち、削り出し突帯Ⅱ種が1段階遅れて出現することを除けば、必ずしも絶対的な指標とはならない。

現状では、S X76が帯状紋様化、多条化の点でS X60との間に画期が見られたように、畿内の弥生時代前期から中期初頭は壺形土器では2つに大別でき、前者はI-1~I-3段階に、後者はI-4~II-1段階に細分できる。前者には、段の漸次的な減少と削り出し突帯の増加が見られるが、これらの段階を通じて共伴するため、1個体では帰属段階を決定するのが難しい。

また、黒色物質塗布や平塗りの彩紋の有無は器面の残存状況に左右されることが多いので、注意を要する。後者では、櫛描き紋の出現を除くと、やはり1個体で区別するのは難しい。

以下に、細分案を示して、壺形土器のまとめにかえたい。この細分案ではS X60第5層~第3層がI-2段階、S X60第2層から第1層がI-3段階、S X76がI-4段階に相当する。

I-1段階 削り出し突帯Ⅰ種が出現する段階。黒色物を塗布するものや平塗りの彩紋を施すもの、壺用蓋形土器と組み合う紐穴を持つ土器は存在しない。口縁部形態は、未発達のもので主体である。

I-2段階 削り出し突帯Ⅱ種が出現する段階。黒色物を塗布するものや平塗りの彩紋を施すもの、紐穴を持つものが出現する。I-1段階同様、口縁部形態は未発達のもので主体である。

I-3段階 段が激減し、削り出し突帯Ⅱ種多条、帯状紋様を施すもの、口縁部形態の発達したものが出現する。

I-4段階 帯状紋様、沈線の多条化が顕著になり、段や削り出し突帯Ⅰ種は、例外的なものを除いてなくなる。口縁部形態は、発達したものが主体となる。

II-1段階 I-4段階の傾向がさらに進み、櫛描き紋が少量出現する。

(田畑直彦)

(4) 甕形土器

雲宮遺跡出土の器種認定可能な口縁片の中で施紋のわかるものは、S X60では458個体、S X76では729個体である。また、甕形土器の底部と考えられるものはS X60で215個体、S X76では358個体であった。口縁と底部の個体数比は各層で約1.7～3になることがわかった。組成のところで述べたように、甕形土器は口縁部で分類すると一定量鉢の口縁を誤認して、カウントする可能性が高いと想定できる。口縁からわかる傾きや、器壁面に残された調整と口唇部の刻みの有無をもとに判断をしたが、判断のつかないものは不明口縁として、器種分類には用いなかった。同一個体と考えられる甕形土器の破片に関しても、接合関係のないものは、別個体としてわけてカウントした。

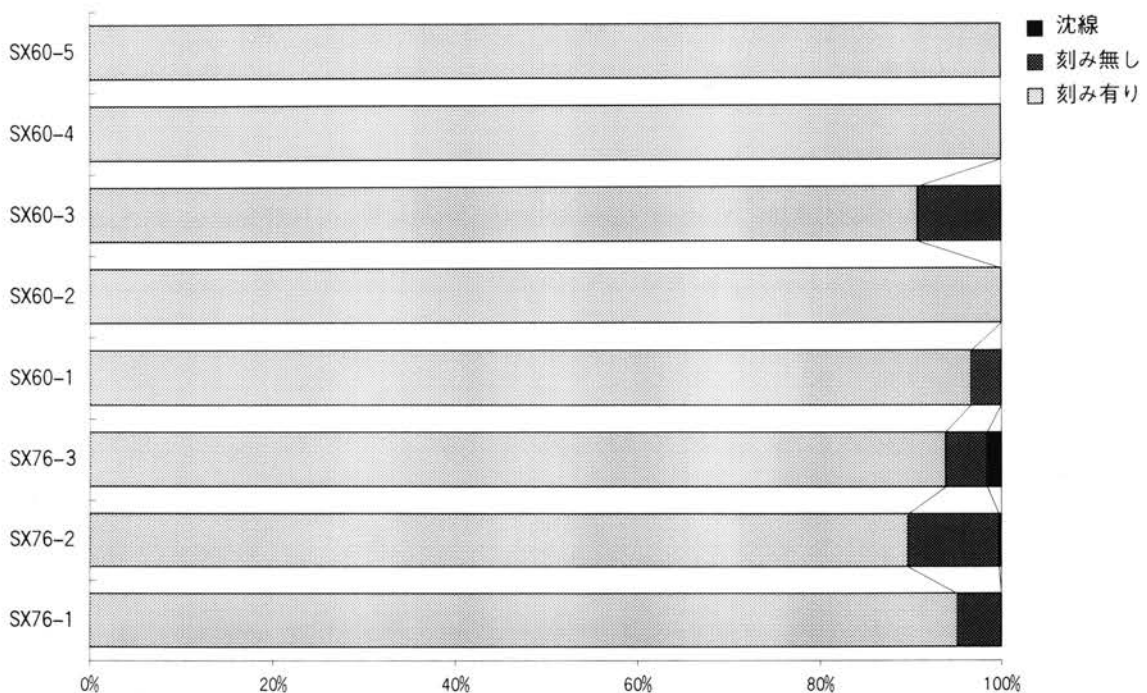
口縁部の出土量は、S X76第1層で217(64)、第2層で424(132)、第3層で88(35)、S X60第1層で234(84)、第2層95(42)、第3層73(29)、第4層35(13)、第5層21(10)。()内は、施紋が不明の個体数である。

A. 口縁の形状

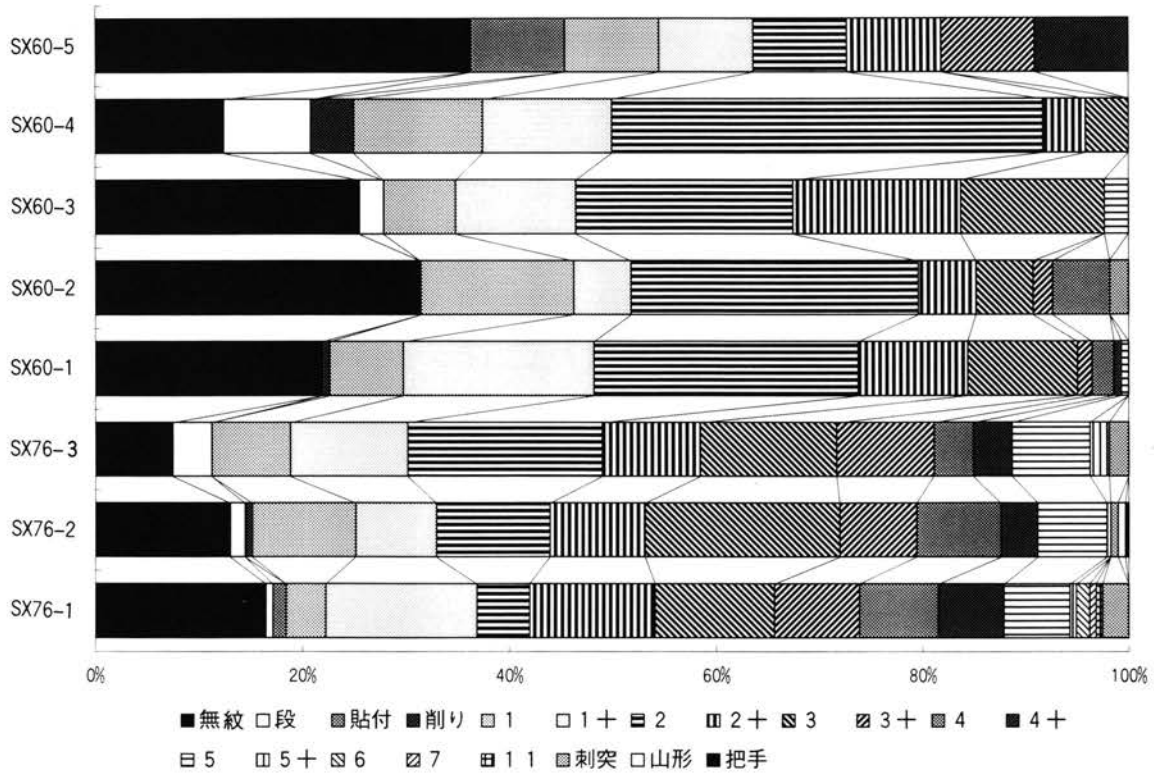
S X76・S X60出土の甕形土器のほとんどすべてが、口縁部が外反するいわゆる如意形を呈しているが、S X76では「L」字状口縁を持つもの、直口の口縁を持つものがある。直口のもの、貼り付け突帯の付くものや把手の付くものである。「L」字状口縁を持つ甕形土器、貼り付け突帯を持つ甕形土器については別項で記載する。把手の付くものは、S X76の層から1個体のみ出土している。

B. 口縁端部の施紋

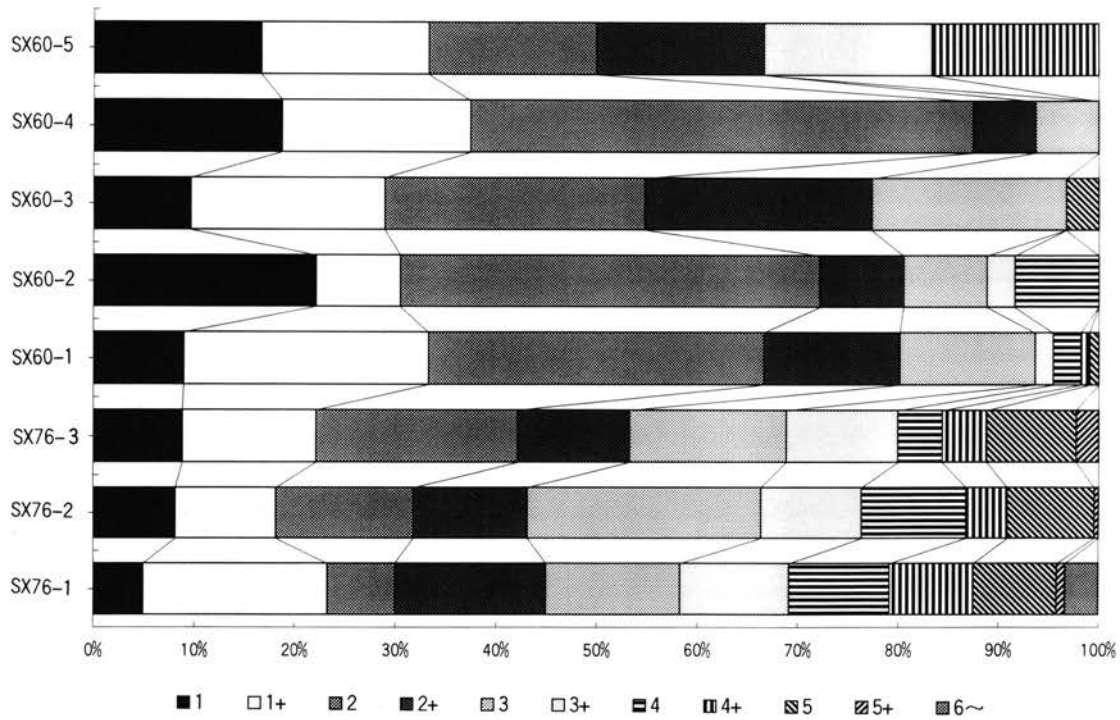
口縁端部には、刻み目のあるものとないもの、沈線が施されたものの3種類がある。端部が磨



第38図 甕形土器口縁端部の施紋



第39図 甕形土器体部の施紋



第40図 甕形土器ヘラ描き沈線の条数

滅のため施紋が確認できないものについては、口縁端部施紋不明として処理した。刻みは、等間隔で密に施されるものがほとんどであるが、疎らなものや部分的に施されたものが少数認められる。これらの紋様の施し方については、口縁の残存率によって認定数が大きく左右されることから、今回は、統計処理を見送った。

古い方から、S X60の第5層からは、資料数が21個体と出土数が少ないが、有刻のものが20個体、不明なものが1個体。紋様識別が可能な口縁のうち、すべての口縁に刻みが認められる。S X60の第4層では、資料数が35個体で、有刻のものが33個体、無刻のものが0個体、不明が2個体で、すべて刻みが認められる。S X60の第3層では、資料数が73個体で有刻のものが59個体、無刻のものが6個体、不明が8個体。紋様識別が可能な口縁のうち、約91%の口縁に刻みが認められる。S X60の第2層では、資料数が95個体で有刻のものが89個体、無刻のものが0個体、不明が6個体である。S X60の第1層では、資料数が234個体で有刻のものが205個体、無刻のものが7個体、不明が22個体。紋様識別が可能な口縁のうち、約97%の口縁に刻みが認められる。不明な個体を除くと、S X60では約91～100%の口縁には刻みが認められることとなる。

S X76の第3層では、資料数が88個体で有刻のものが81個体、無刻のものが3個体、沈線をもつものが1個体、不明が3個体。紋様識別が可能な口縁のうち、約95%の口縁に刻みが認められる。S X76の第2層では、資料数が424個体で有刻のものが357個体、無刻のものが40個体、沈線をもつものが1個体、不明が26個体。紋様識別が可能な口縁のうち、約90%の口縁に刻みが認められる。S X76の第1層では、資料数が217個体で有刻のものが196個体、無刻のものが10個体、不明が11個体。紋様識別が可能な口縁のうち、約95%の口縁に刻みが認められる。S X76では、有刻のものが約90～96%を占めている。

これらの結果から、層位ごとの無刻のもの比率は10%未満で、時期の新旧にかかわらず口縁端部の刻みの有無の比率には層位の新旧による変化が認められない。沈線を持つ個体は、S X76の第2・3層で2個体あるのみである。

C. 体部紋様

体部紋様の分類時には、口唇部のみ存在し紋様の不明なもの、体部表面の剝離のため紋様がわからなくなったものについては、紋様不明個体として処理した。紋様不明個体の内、ほとんどが口唇部のみ残存している個体である。体部紋様の不明な個体の割合は、S X76の第3層で40%、S X76の第2層で31%、S X76の第1層で約30%、S X60の第5層で約48%、S X60の第4層で約37%、S X60の第3層で約40%、S X60の第2層で約44%、S X60の第1層で約36%である。若干S X60出土の個体の方が、口縁部から下の残りが悪いが、個体数の少ないS X60の第5層を除くとほぼ約30～40%に入る。分析を行う資料としては、S X60とS X76の出土資料は同様に扱うことが可能と考えられる。

まず最初に、無紋のものと施紋された甕形土器の比率を遺構と層位間で対比(グラフ)したい。S X76の第1層では約17%、第2層で最も無紋のものが多く約21%であるが、第3層では約7.5%となる。S X60の第4層中で無紋のものが約14%であるのを除くと、すべて20%を越して

いる。とりわけ、S X 60の第2層では約30%と、S X 76・S X 60を通して最高の比率となる。多くの概説書などに中期に向かうにしたがって、甕形土器の無紋化が進むと書かれている。しかし、今回の資料では、時代が新しくなっても無紋化は認められない。むしろ、年代の古いS X 60の甕形土器の方が相対的に体部紋様が無紋の個体が多いことがわかった。

甕形土器の体部に施紋されているのものには、段を持つもの、削り出し突帯、貼り付け突帯、刺突を持つものなどがあるが、ヘラ描き沈線が平行にめぐるのが最も多く出土している。段を持つ甕形土器は、S X 76の第1・2・3層、S X 60の第3・4・5層から出土している。有段のものには、沈線を伴うものがあり、S X 76の第3層では沈線4本のもものが1個体、S X 60の第4層では沈線が2本のもものが2個体存在する。S X 76出土の段を持つ甕形土器は、第1～3層から出土するがいずれも小片である。古い要素とされる段が出土個体数の多いS X 60の第1・2層から発見されないことは、S X 60を一部破壊して掘削されたS X 76にS X 60の第3～5層の遺物の混入した可能性が想定できる。

削り出し突帯を施したものでは、突帯状に沈線の施されない個体は存在しない。沈線の数、すべて2本以下である。突帯は、沈線を施した後に一番上と一番下の沈線から板状の原体を上沈線の場合は上に、下の沈線は下方向に器表面の粘土を掻き取って作り出していることが肉眼観察でわかる。

貼り付け突帯のうち、弥生系の甕形土器と考えられるものは、S X 76の第1層のもののみで、粘土紐を貼り付けた突帯上に刻みが施されている。

刺突紋は、単独で施されるのではなく、水平にめぐる沈線と沈線の間に施紋される。刺突の原体としては、棒状のものや竹管状のものが認められる。棒状のものはただ刺突したものと、若干押し引いたものと2種類が存在する。刺突紋は、S X 76に多く出土している。

山形紋も、やはり水平にめぐる沈線と沈線の間にヘラ描き沈線で施紋される。山形紋は、S X 76の第2層にのみ検出される。

最も個体数の多い沈線の施されたものについて、層位ごとの条数に関して考察を加えたい。第5層は無紋のものを除くと、条数別に分類すると各1点ずつとなるため分析から省きたい。第40図では、沈線の条数がはっきりと確定できるものはもちろん、下部が欠損して条数のわからないものについても、現存している条数と $+ \alpha$ と言う表示で表わしカウントした。

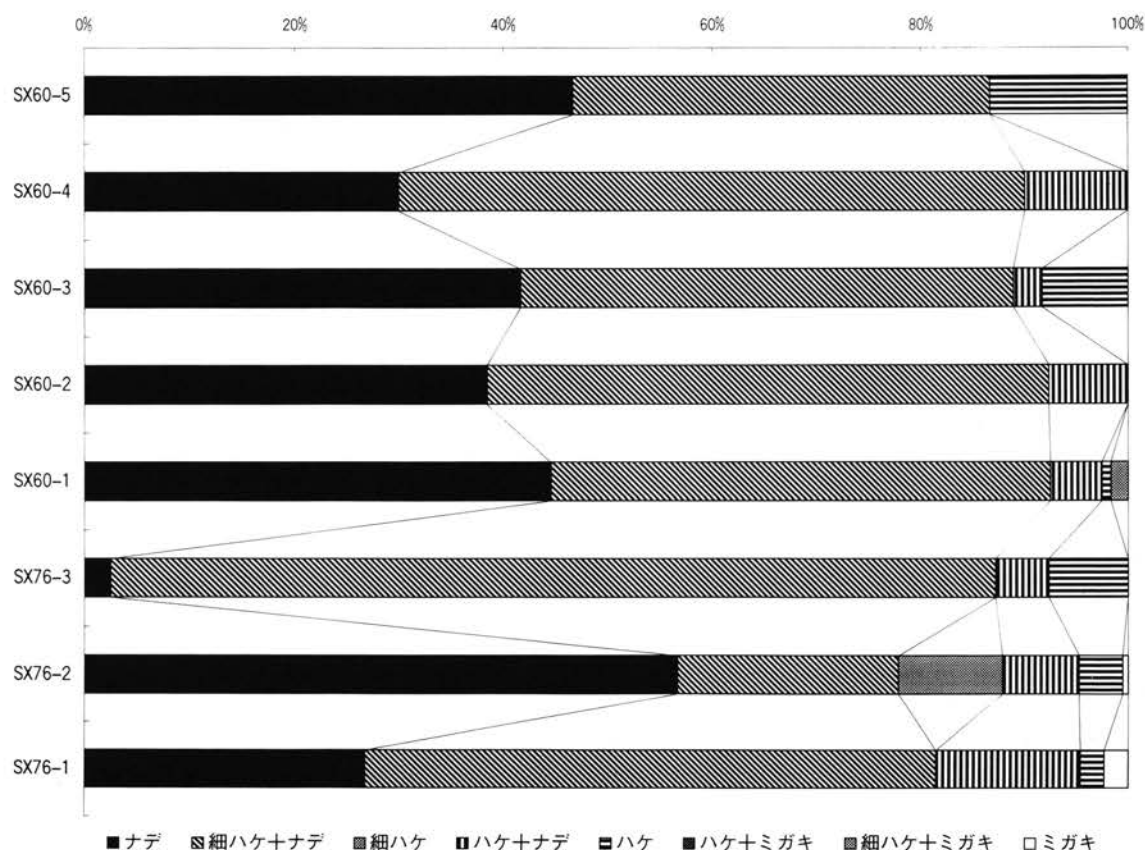
条数構成比の最も顕著な違いが認められるのは、S X 60の第1層とS X 76の第3層間の違いである。図示したように、各条数の比率を結ぶ線が大きく傾いていることがわかる。S X 76では、確実に沈線が3本以上のものが各層でほぼ5割を越しているのに比べ、S X 60では2割程度しか認められない。佐原が指摘するように、中段階は1～2条の沈線が施され、新しくなると多条化するという考え方は、傾向としてはよいが、S X 60の各層でも一定量の3～5条の沈線を持つ甕形土器が認められる。ただ、S X 60の第3層出土の沈線が5条あるものは1個体である。安定的に4条以上の沈線が出現するのは、S X 60の第1・2層以降と考えられる。

S X 76の各層では、3～4条の甕形土器の比率がS X 60に比べ2倍以上増えている。S X 76の

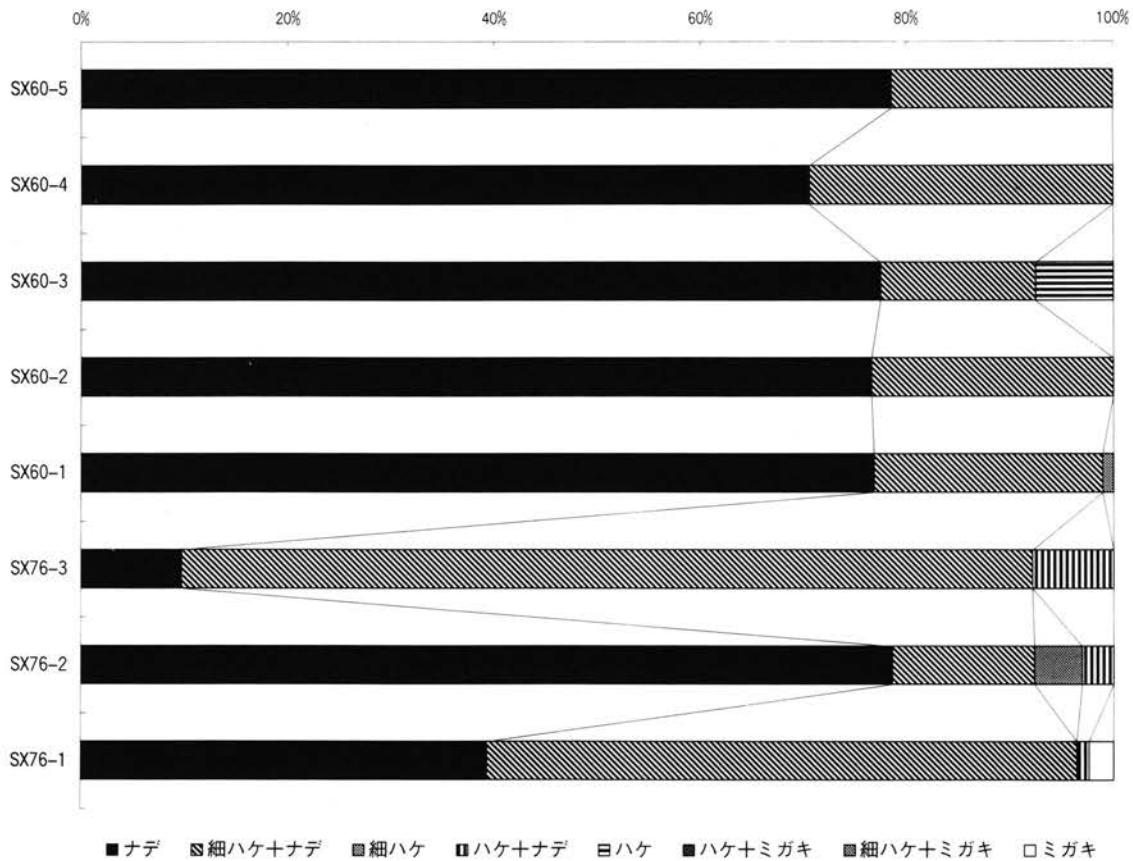
第1層では、新たに6条以上の沈線を持つ甕形土器が出現する。最も条数の多い個体としては、11条のものが存在するが、櫛描き紋は口縁の欠損した個体を含めても1点も認められない。多条化した甕形土器と、沈線が1～3条の甕形土器が共存しており、 $2 + \alpha \sim 4 + \alpha$ の土器が主体を占めている。これらのことから、単体の土器を条数のみから時期判断することが全くできないことがわかる。土器群を総体的に評価していくことが重要である。

D. 調整

口縁の残っている破片の、器外面と内面に施された調整について、肉眼による観察を行った。口縁端部付近のみの資料は、口縁を外反させるためナデが施されていることが多いことから、体部の調整のわからないものについては調整不明個体とした。調整の内、ハケの条数が1cmあたり15本以上で、計測できないほど多いものについては、「細ハケ」という名称を用いる。細ハケは、板状の原体の木口部で調整したと考えられるが、削りほど力強く施されたものではない。器壁の調整には、ナデ・ハケ・細ハケ・ミガキが用いられている。器面調整の不明な個体の割合が、施紋不明の割合より多いことから、器表面が剥落あるいは磨滅している度合いが多い。また、ナデによって、ハケまたは細ハケが完全に消されているものもあると思われる。そのため、細ハケは肉眼で認められないものも多く、ナデ調整のみの中にあると想定できる。調整はハケのちナデの場合は「ハケ+ナデ」と表示し、前者の後に後者が施されたとする。以下、層位ごとの調整手法のあり方を内外面に分けて見ていきたい。



第41図 甕形土器外面の調整



第42図 甕形土器内面の調整

外面の調整は、ナデ・細ハケ+ナデ・細ハケによるものは、S X 76の第1層を除くと、すべての層で80%を越す。その他の調整は、ハケ・ハケ+ナデが大半で、S X 60の第1層とS X 76の第1・2層では、3%以下ではあるが、ミガキ調整が認められる。S X 60の第3層以下ではミガキ調整が認められないので、甕形土器の器面調整としては新しい要素と考えられる。ハケ調整は、10~15%安定して認められる。「大和甕」に見られるハケ調整の発達は雲宮遺跡の中では認められない。「河内甕」に見られるミガキ調整もまた積極的にこの地方で発達するとはいえない。

内面の調整は、90%以上がナデ・細ハケ+ナデ・細ハケによる。ミガキが認められるものは、S X 60の第1層とS X 76の第1層に限られる。

E. 小結

層位と遺構の新旧関係で、S X 60の第3~5層、S X 60の第1・2層、S X 76の第2・3層とS X 76の第1層でそれぞれ分けられると想定できた。壺形土器の検討でもこの時期区分は肯定できる。このことは甕形土器についても同じである。以下、各時期ごとに特徴を再度まとめたい。

- ①無紋の甕形土器は各層で安定的な比率を占めている。
- ②S X 60では1~2+ α 条のものが80%前後を占めるが、S X 76では50%前後の出現率となる。
- ③段はS X 60の第3~5層にのみ認められると想定できる。
- ④S X 60の第3~5層には沈線が1~2+ α 条のものが主体であるが、3~5本のものも一定量認められる。

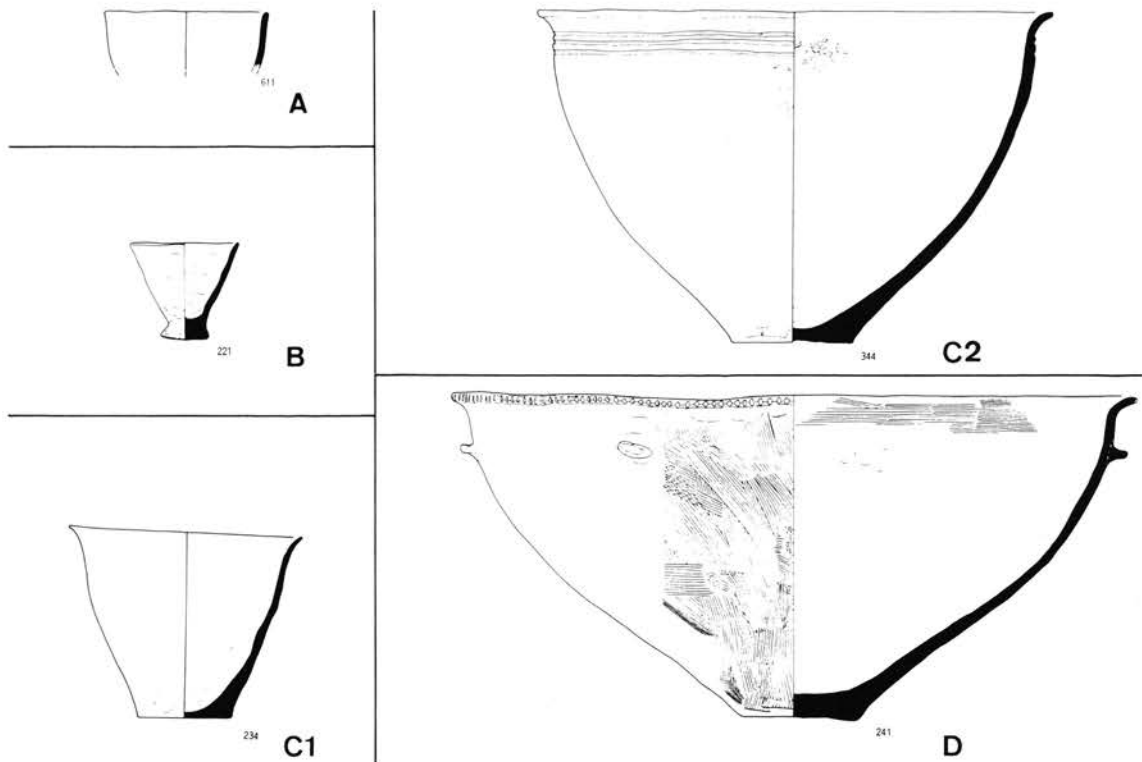
⑤ S X60の第1・2層は沈線が4～5本のもので安定的に出現するが、S X76の各層では4本以上の沈線が20%を越して認められるようになる。

⑥ 沈線が6本以上のものはS X76の第3層だけで出土する。

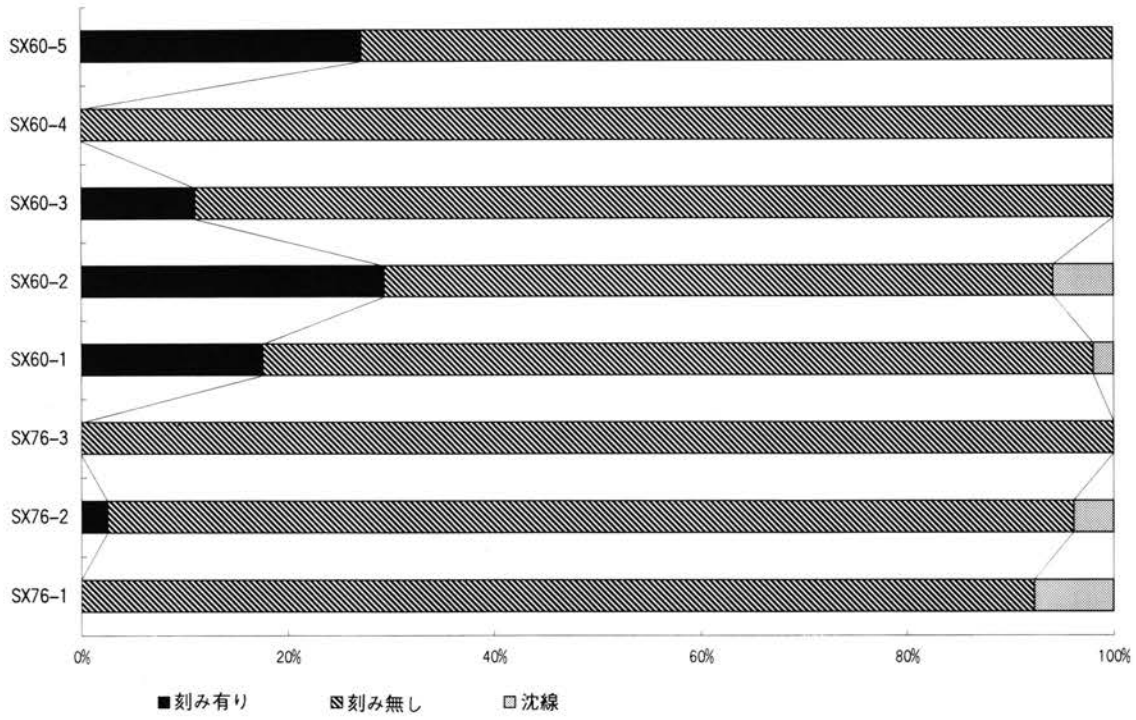
⑦ 器表面調整はナデ・細ハケ+ナデ・細ハケが80%を越している。雲宮遺跡内では大和甕・河内甕の出現していく土壌は認められない。

(5) 鉢形土器

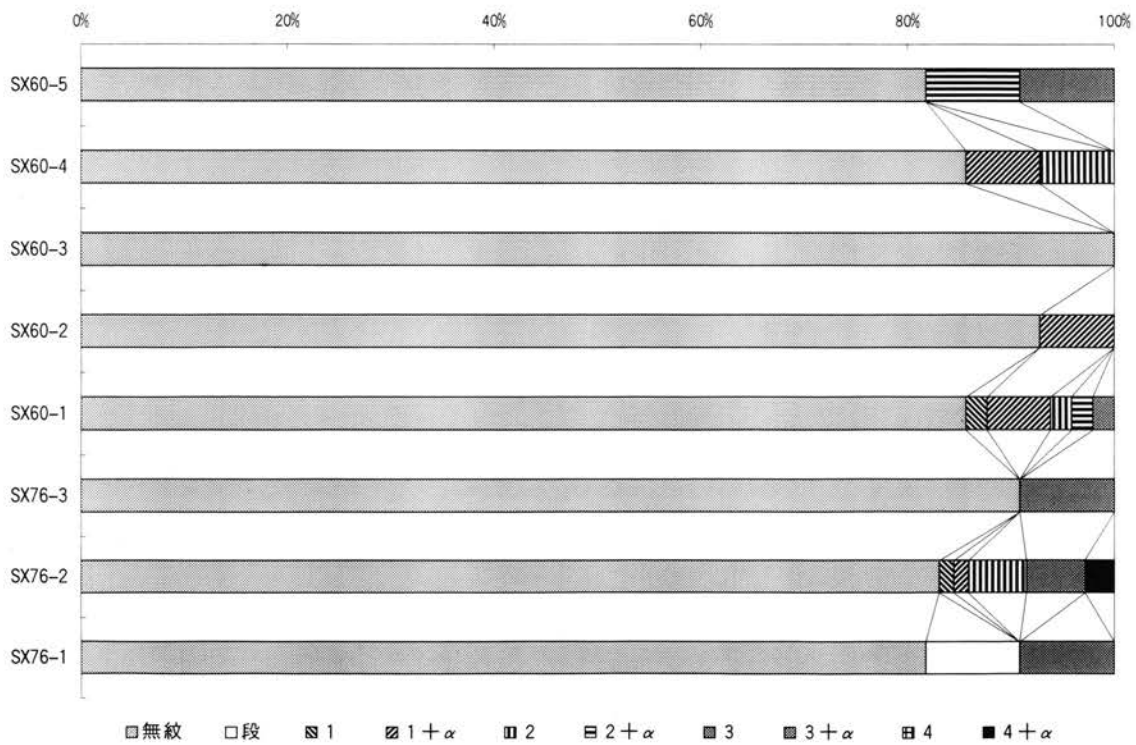
鉢形土器と分類している器形には、本来は多くのものを含んでいる可能性が高い。甕・壺・高杯形土器以外の器種で、上方に向かって開き、主にミガキ調整のあるものを鉢形土器とした。^(注1) 鉢形土器の中には、Aの底部は不明であるが、直口する口縁を持つ小形の鉢形土器、Bの直口する口縁を持ち脚状底部を持つ小形の鉢形土器、Cの体部がやや内湾しながら立ち上がり、口縁部が外反する器高と口径の比がほぼ1～1.5の鉢形土器、Dの器高に対して口縁が2倍を越す大形の鉢形土器の4種類に分けることができる。Cの鉢形土器の場合、底部の作り方が甕形土器と同じで胴部の張らないものC1と、底部の作り方が壺と同じで胴部がやや張るものC2に細分できる。前者は、甕形土器の器高を低くしたような形状を示すが、器面調整はミガキである。後者は、甕形土器の口径を大きくしたような形状を示し、把手などは付かない。Dの大形の鉢形土器は、S X76のみで出土している。多くの場合、把手が付く。口縁端部が「L」字状を呈しているものや、直口の口縁の外を肥厚させ、数条の沈線を施したものなどが含まれている。出土量は、中型のものが圧倒している。S X76第1層が26点、第2層が83点、第3層が15点。S X60第1層が62点、第2層が21点、第3層が12点、第4層が14点、第5層が11点の口縁部が出土している。出土量が



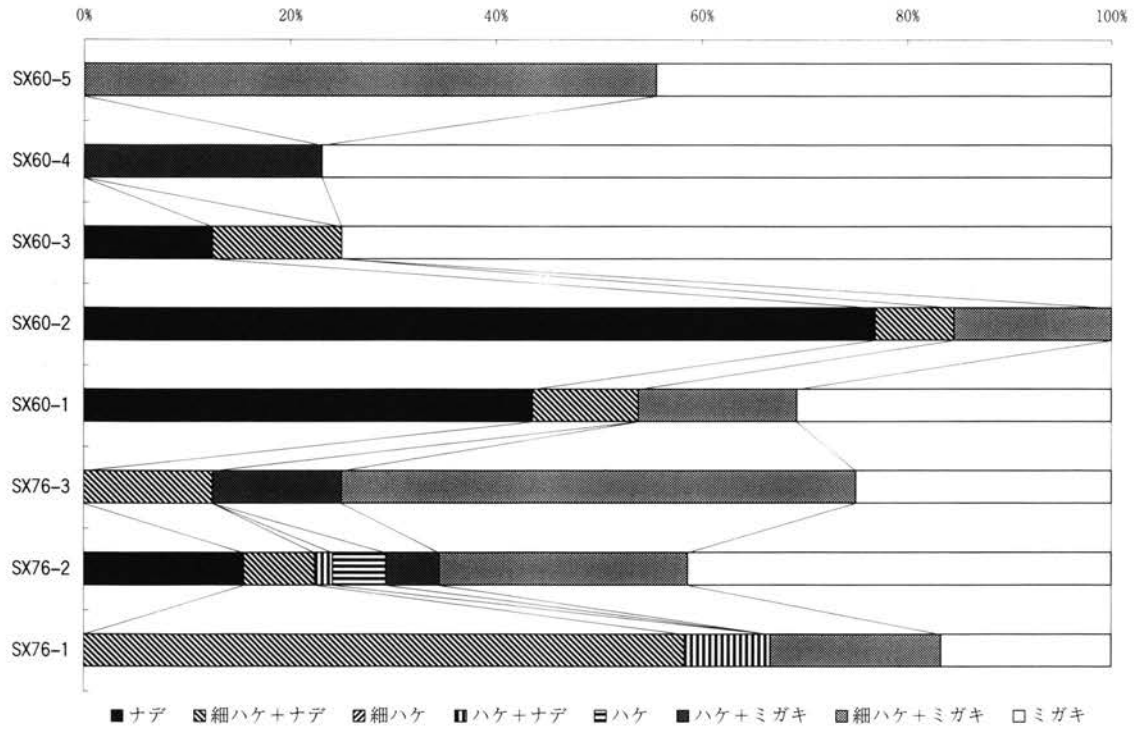
第43図 鉢形土器分類図



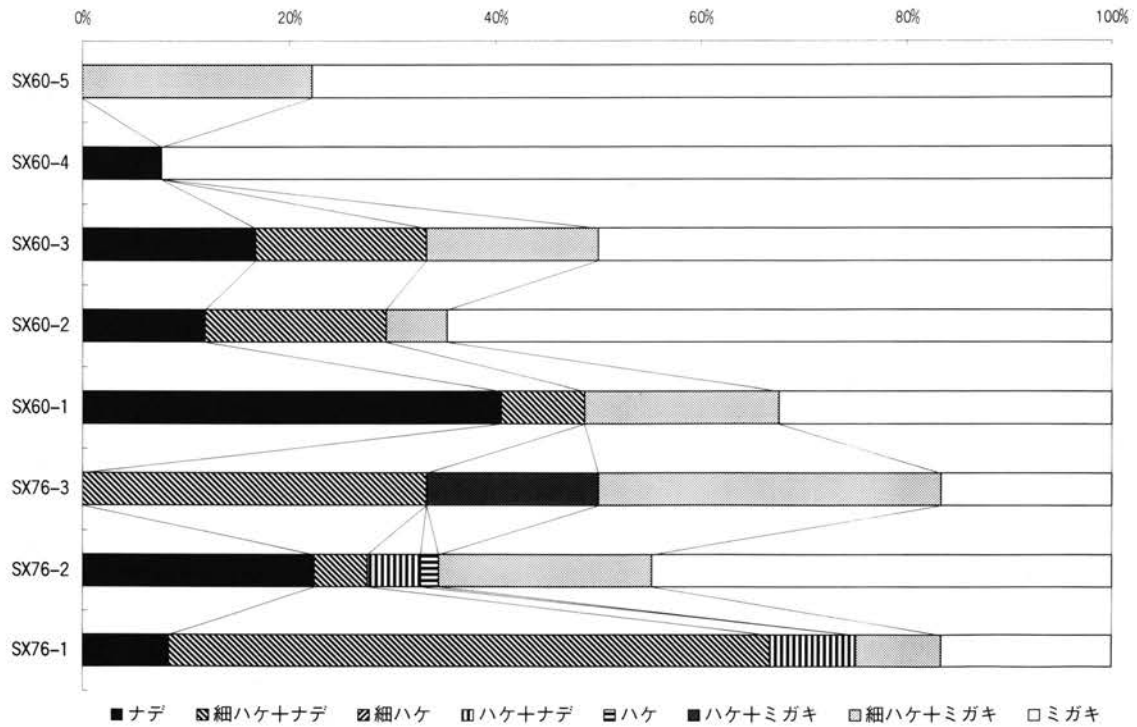
第44図 鉢形土器口縁端部の施紋



第45図 鉢形土器体部の施紋



第46図 鉢形土器外面の調整



第47図 鉢形土器内面の調整

壺形土器や甕形土器に比べると少ないことから、S X76の第2層とS X60の第1層を除くと統計的な信憑性は薄いと想定できる。

A. 口縁部形状

口縁部が直口するもの、「L」字状を呈するもの、外反するものに分けると、S X76では外反するものが73～88%であるが、S X60では約80～98%を占めている。S X76では、S X60に比べ外反する口縁をもつものが少ないが、S X76に大形の鉢形土器が含まれることが大きな原因と考えられる。「L」字状を呈するものはS X76に限られ、S X60には見られない。

B. 口縁端部の施紋

口縁端部の施紋には、口縁部に直交するように刻みが連続的に施されたもの、沈線の施されたもの、施紋のないものがある。磨滅のため口縁端部の施紋がはっきりしないものは不明とした。S X76では約92～100%が口縁端部が無紋であるが、S X60では65～100%が無紋である。個体数がS X60では少ないが、4層を除くとS X76よりも無紋のものが少なく、刻みのある個体が多いことがわかる。

C. 体部施紋

体部に施紋のないものとあるものとの比率は、S X76では無紋のが約82～91%であるが、S X60では約82～100%である。S X60の3層が100%であることを除くと、S X76とほぼ同じ傾向である。甕形土器の施紋とは異なり、鉢形土器はその80～90%が無紋であることがわかる。

体部施紋は、ヘラ書き沈線をめぐらすことによって行われているが、S X76では沈線が4 + α 以下のもので占められるが、S X60は沈線が4条を越すものは認められない。S X76には、Dの鉢形土器の口縁部外面を肥厚させ段を付け、その上に沈線を施したものに3～5条の沈線が見られる。

把手のある鉢形土器はS X76の第2層でのみ出現する。

D. 器面調整

外面にミガキ・細ハケ+ミガキ・ハケ+ミガキといった最終的にミガキ調整を行うものの比率が、S X60の3～5層の場合は75%を越しているが、S X60の第1・2層では約15～45%となる。S X76の第2・3層ではミガキ調整を行うものが、約71～75%を占めるようになり、第1層では約33%となり減少する。

最終的に内面にはミガキ調整を行うものの比率が、S X60の3～5層の場合は約66～100%、S X60の第1・2層では約51～71%となる。S X76の第2・3層ではミガキ調整を行うものが、約67%を占めるようになり、第1層では約25%となり減少する。内面の調整におけるミガキの傾向は、外面がS X60の第2層で異なるが、その他の部分では内外面で整合する。

E. 小結

施紋の分析では、S X60とS X76との間に違いが認められたが、層位ごとの違いは明らかにできなかった。調整に着目すると、壺形土器・甕形土器に認められたS X60の3～5層、S X60の第1・2層、S X76の第2・3層、S X76第1層の土器群の違いを追認することができた。

(6) 蓋形土器

蓋形土器(以下蓋)についても、端部のみでは壺形土器の口縁と誤認することが想定できる。器種認定する上で曖昧なものは器種不明として除外した。蓋は、壺形土器用と甕形土器用と考えられるものに分かれる。壺形土器の蓋には円盤状のもの、笠形のものがある。笠形のものにはつまみのないもの、環状のつまみや2つの突起状のつまみのあるものなどが認められる。

甕形土器の蓋の場合、端部が外反するが破片が細かい場合、壺の口縁部と区別できない。また、壺形土器の蓋のうち、つまみ部分だけでは、つまみのない蓋が、器種として見過ごされることもある。縁辺部の残存する個体を中心に、つまみ部のみの個体を併せて考察したい。S X76の第3層、S X60の第2～5層は出土点数が少ないことから参考資料として提示する。

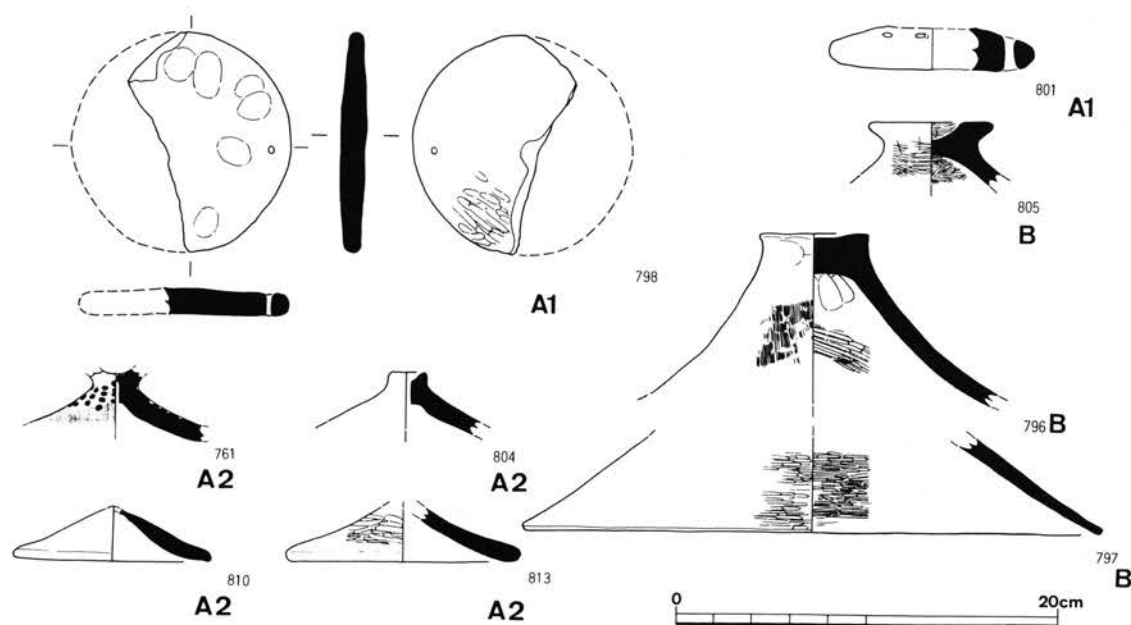
施紋は、壺形土器用の笠形のものの上に施されるものが大半である。1例のみ内側にヘラ描き沈線が認められるものがS X76の第2層に存在する。上面に沈線のある個体は6個体である。S X60の第4層からは、外縁部に貼り付け突帯の施されたものが1例のみ存在する。刺突による施紋は1個体で、端部は欠損している。施紋の認められる個体はすべて壺形土器の蓋である。

紐穴は甕形土器の蓋には、頭部に横方向に穿たれたものが1個体のみS X76の第1層から出土している。壺形土器の蓋は、縁辺部に紐穴のあるもの、つまみ及び中央部に穿孔されたものがある。両者の比はほぼかわらないが中央に穿孔された総数は少ない。

縁辺部を持つ個体数を集計すると、S X76の第1層の甕形土器の蓋が7個体、壺形土器の蓋が9個体認められる。つまみ部分では甕形土器の蓋が5個体で、壺形土器の蓋のつまみは出土していない。

S X76の第2層の縁辺部を持つ個体は、甕形土器の蓋16個体、壺形土器の蓋が35個体認められる。つまみ部分では甕形土器の蓋が5個体で、壺形土器の蓋のつまみは3個体出土している。

S X76の第3層の縁辺部を持つ個体数は甕形土器の蓋はなく、壺形土器の蓋が7個体認められ



第48図 蓋形土器分類図

る。つまみ部分では甕形土器の蓋が2個体で、壺形土器の蓋のつまみは出土していない。

S X60の第1層の縁辺部を持つ個体数は甕形土器の蓋は6個体、壺形土器の蓋が31個体認められる。つまみ部分では甕形土器の蓋が4個体で、壺形土器の蓋のつまみは1個体出土している。

S X60の第2層の縁辺部を持つ個体数は甕形土器の蓋は6個体、壺形土器の蓋が18個体認められる。つまみ部分では甕形土器の蓋がなく、壺形土器の蓋のつまみは1個体出土している。

S X60の第3層の縁辺部を持つ個体数は甕形土器の蓋は0個体、壺形土器の蓋が2個体認められる。つまみ部分では甕形土器の蓋が1個体で、壺形土器の蓋のつまみは0個体出土している。

S X60の第4層の縁辺部を持つ個体数は甕形土器の蓋は3個体、壺形土器の蓋が2個体認められる。つまみ部分では甕形土器の蓋が3個体で、壺形土器の蓋の頂部及びつまみは2個体出土している。

S X60の第5層のつまみ部分では壺形土器の蓋のつまみは1個体出土している。

S X60の第4層を除くと、すべての層で壺形土器の蓋が多く出土している。個体数の多く出土しているS X76の第2層やS X60の第1層を比べると、S X76の第2層になると甕形土器の蓋の比率が増えている。このことは、口縁と底部にみられる、新しくなるにつれて甕が増加する結果と符合する。

(中川和哉)

(7)他地域の影響を示す土器

A. 生駒西麓産の土器について

部位が確認できる破片のうち、生駒西麓産土器はS X60・S X76から23点出土した。内訳は、S X60が16点、S X76が7点で、S X60の方が多い。貯蔵形態と煮沸形態に分けると、S X60では貯蔵形態が11点で68.8%、煮沸形態が5点で31.3%となり、貯蔵形態が多い。なお、S X60と同一の環濠と考えられる、(財)長岡京市埋蔵文化財センター調査のS D01では完形に復原できる生駒西麓産の壺形土器が出土している(小田桐1993)。

S X76では、貯蔵形態が4点で57.1%、煮沸形態が3点で42.9%となり、やはり貯蔵形態が多い。全体では、貯蔵形態が15点で65.2%、煮沸形態が8点で34.8%である。このうち、S X76第3層の無軸木葉紋を持つ壺形土器(684)や、S X76第3層の段+重弧紋を持つ壺形土器(690)、S X76第2層の段+沈線1を持つ壺形土器、段+沈線3を持つ甕形土器(186)は本来、S X60に伴うものと考えられ、生駒西麓産土器の搬入はS X60の時期が中心と考えられる。

北山城地域では雲宮遺跡のほか、古市森本遺跡(岩崎1980)、内膳町遺跡(高橋1974、伊野・石井他1988)、下鳥羽遺跡(前田・磯部1990、田畑1997)で生駒西麓産土器が出土している。弥生時代前期の北山城地域の生駒西麓産土器については、秋山浩三による概括的なまとめがある(秋山1989)。

それによれば、貯蔵形態が62%、煮沸形態が38%で、時期的には前期前半のものが多く、今回の分析結果に近似している。基本的な器種がそろい、そのうち貯蔵形態が多い器種組成は、徳島

付表33 生駒産土器

遺構	図版番号	器種	部位・紋様
S X 60第5層	未掲載	鉢形土器	口唇部・無紋、体部・無紋
S X 60第5層	未掲載	鉢形土器	口唇部・無紋、体部・無紋
S X 60第5層	未掲載	鉢形土器	口唇部・有刻、体部・無紋
S X 60第5層	未掲載	壺or鉢形土器	底部
S X 60第5層	未掲載	甕形土器	底部
S X 60第4層	未掲載	壺形土器	頸胴部界・下沈線2+ α
S X 60第4層	未掲載	甕形土器	口唇部・有刻、体部・不明
S X 60第4層	未掲載	甕形土器	底部
S X 60第3層	未掲載	鉢形土器	口唇部・不明、体部・不明
S X 60第2層	未掲載	壺形土器	頸胴部界・段+沈線1
S X 60第2層	未掲載	壺形土器	頸胴部界・段+沈線4
S X 60第2層	未掲載	壺形土器	口唇部・無紋
S X 60第1層	未掲載	壺形土器	口唇部・無紋
S X 60第1層	未掲載	壺形土器	頸胴部界・段+沈線4
S X 60第1層	419	甕形土器	口唇部・有刻、体部・沈線3
S X 60第1層	未掲載	甕形土器	底部
S X 76第3層	未掲載	壺形土器	口唇部・無紋
S X 76第3層	684	壺形土器	頸胴部界・無軸木葉紋+沈線2+ α
S X 76第3層	690	壺形土器	頸胴部界・段+重弧紋
S X 76第3層	未掲載	甕形土器	底部
S X 76第2層	未掲載	壺形土器	頸胴部界・段+沈線1
S X 76第2層	186	甕形土器	口唇部・有刻、段+沈線3
S X 76第1層	未掲載	甕形土器	底部

市三谷遺跡、東大阪市鬼虎川遺跡27次貝塚出土の突帯紋土器と、少量伴う弥生時代前期の土器の組成とも近似している(田畑1997)。加えて、搬入土器に基本的な器種がそろったことを「人間の移動」(都出1989)として捉えると、今回出土した生駒西麓産の土器は人の移住に伴った結果と考えられ、前期前半のものが多い事実は、北山城地域の農耕社会の成立に河内潟周辺の集団が関与していたことを示すといえる。しかし、生駒西麓産の土器は、S X 60・76のカウント総数4,489点のうち、23点、0.51%と極めて少ない。体部片などを含めてもパンケースで200箱以上ある出土土器のうち、1箱に満たない量である。出土土器の大半は在地の胎土で占められており、主体は在地の人々であったといえる。

B. 突帯紋土器・貼り付け突帯を持つ甕形土器について

突帯紋土器の口縁部は、S X 60第5層から1点、S X 76第3層から1点、計2点出土した。S X 60第5層634は、口唇部が軽く面をとり、断面三角形の突帯を上下から押さえて貼り付け、O字刻みを施す。突帯の形状は、家根分類のa2型に相当する。外面には下から上へ細かなハケを施し、全面にススが付着する。内面はナデ調整で下部に粘土紐接合痕を残す。S X 76第3層の319は、口縁端部に接して低く幅広の突帯を貼り付ける。突帯の形状は、家根分類のg3類に相当する(家根1982)。外面は細かいハケを施した後、ヨコナデを施し、内面もヨコナデを施す。これらの突帯紋土器はハケメ、板ナデ調整を特徴とする中村健二分類のⅡ類(中村1990)に相当し、

長原式段階の近江、山城の一部を含む突帯紋土器の特徴である。

貼り付け突帯を持つ甕形土器は、S X 60第1層、S X 76第3層、第1層から出土した。これらは色調、胎土、焼成が他の弥生土器と変わらない。北山城地域では京都市下鳥羽遺跡で前期中葉の土坑163・161で突帯紋土器と貼り付け突帯を持つ甕形土器が共伴するが、土坑161ではその割合は著しく低下し、長原式及び貼り付け突帯を持つ甕形土器は前期後半まで存続しないと考えられる(田畑1997)。このことから、S X 76出土のものはS X 60の混入の可能性が高い。

S X 76第1層の甕形土器(47)は、口唇部を丸く納め、やや下がった位置に突帯を貼り付けている。体部には粘土帯の剝離痕があり、ここにも突帯が貼り付けられていた可能性がある。外面はナデ調整で、内面はミガキを施す。なお、S X 60第1層の428は、口縁部を折り返して突帯状にしたと考えられるが、器面の風化のため判断できず、寸づまりと思われる器形から鉢形土器に分類した。

S X 76第3層の甕形土器(318)は口縁部を折り曲げて玉縁状を呈し、内外面ヨコナデ調整を行うが、口縁部の形状からいわゆる『後期前半』朝鮮系無紋土器、もしくは弥生土器の影響を受けた擬朝鮮系無紋土器の可能性^(注1)がある(片岡1990、1993)。京都府内では亀岡市太田遺跡で、『後期前半』無紋土器に近似する口縁部を持つ甕形土器が出土しており(田代1985、片岡1991)、そのうちの1点は片岡によって「近畿地方で朝鮮系無紋土器の可能性が最も高い例」との評価が与えられている(片岡1993)。

しかし、この甕形土器が出土したS X 76第3層からは突帯紋土器も出土しており、下鳥羽遺跡のように、前期中葉に突帯紋土器の影響を受けてこのような甕形土器が出現し、S X 76に混在した可能性も否定できない。また、口縁部に粘土紐を貼り付けるという点では瀬戸内型甕の影響も考えられなくもない。現段階では3者の可能性があることを指摘するにとどめておきたい。弥生時代前期の朝鮮系無紋土器、擬朝鮮系無紋土器とされる近畿地方の諸例には、突帯紋土器や瀬戸内型甕の影響を受けたものも含まれている可能性を少なからず考慮すべきであろう。

C. 瀬戸内型甕について

逆「L」字状の口縁を持つ前期後半のいわゆる瀬戸内型甕は、S X 76第2層から3点出土している。甕形土器のうち瀬戸内型甕が占める割合は、S X 76第2層で424点中3点、0.7%であり、極めて少ない。168は、突帯を刻み、口縁部上面に沈線を2条、体部に沈線を2条施紋する。165も同様の突帯を持ち、体部に沈線を1条+ α を施紋する。166は、貼り付け突帯に刻み目はなく、体部も無紋である。219は鉢形土器であるが、突帯直上に沈線を2条、端部に沈線を1条、体部に沈線を3条施紋する。165・166は、小片のため鉢形土器の可能性もある。これらには多条沈線のものはないが、口縁部内上面に沈線をめぐらすのは、岡山県の備前地域を中心に分布する属性である(秋山1992)。また、瀬戸内型甕に関連するものとして、S X 76第1層の37は、体部に貼り付け突帯を1条めぐらし、突帯は刻みを持つ。このタイプの甕形土器も畿内では稀なタイプである。これらの甕形土器は、いずれも在地の胎土で製作されており、搬入品ではない。

雲宮遺跡では、左京第18次調査のS K 1804で、体部沈線が9条の瀬戸内型甕が出土している

(戸原1985)。北山城地域では、雲宮遺跡のほか、鶏冠井遺跡(山中他1983)、烏丸綾小路遺跡(上村・久世1987)、中臣遺跡(京都市埋蔵文化財研究所編1986)で瀬戸内型甕が出土している。秋山によれば、雲宮遺跡の過去の調査例では瀬戸内型甕が33点中1点、3.0%、鶏冠井遺跡で26点中1点、3.8%出土しており、さらに少なくなるとの見解を示されている(秋山1992)。今回のデータはこれらより大幅に少なく、体部に多条沈線を持つ典型的な瀬戸内型甕は出土しなかった。北山城地域では、瀬戸内型甕は極めて僅少な存在といえる。(田畑直彦)

(8)雲宮遺跡群における前期・中期初頭の動態

土器編年を行うとき、最もよい状態は、できるだけ小さなエリア内で遺構の一括資料を基に、連続する土器編年を行うことと考えられる。

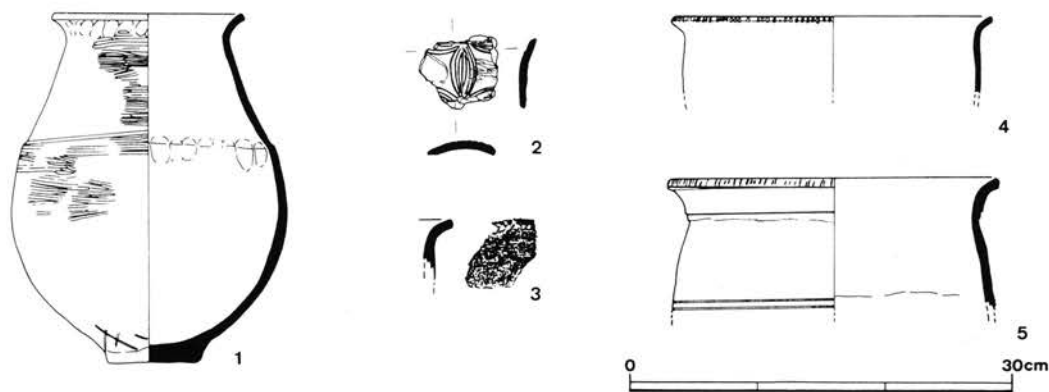
対比する資料群の分布するエリアが広がるほど、集落ごとのさまざまな要素が入り込む可能性が多くなると考えられる。前項で述べたように、神足遺跡は雲宮遺跡と連続する遺跡であり、この報告では雲宮遺跡群として扱うことにしたい。また、土器群の分析には型式学よりも遺構の一括性を重視した。しかし、器種組成が不備なものは、できるだけ近接した遺跡で出土した資料で最小限の補強をした。

以下に述べる土器編年をもとに、土器群の変化や遺構の変遷について論じてみたい。

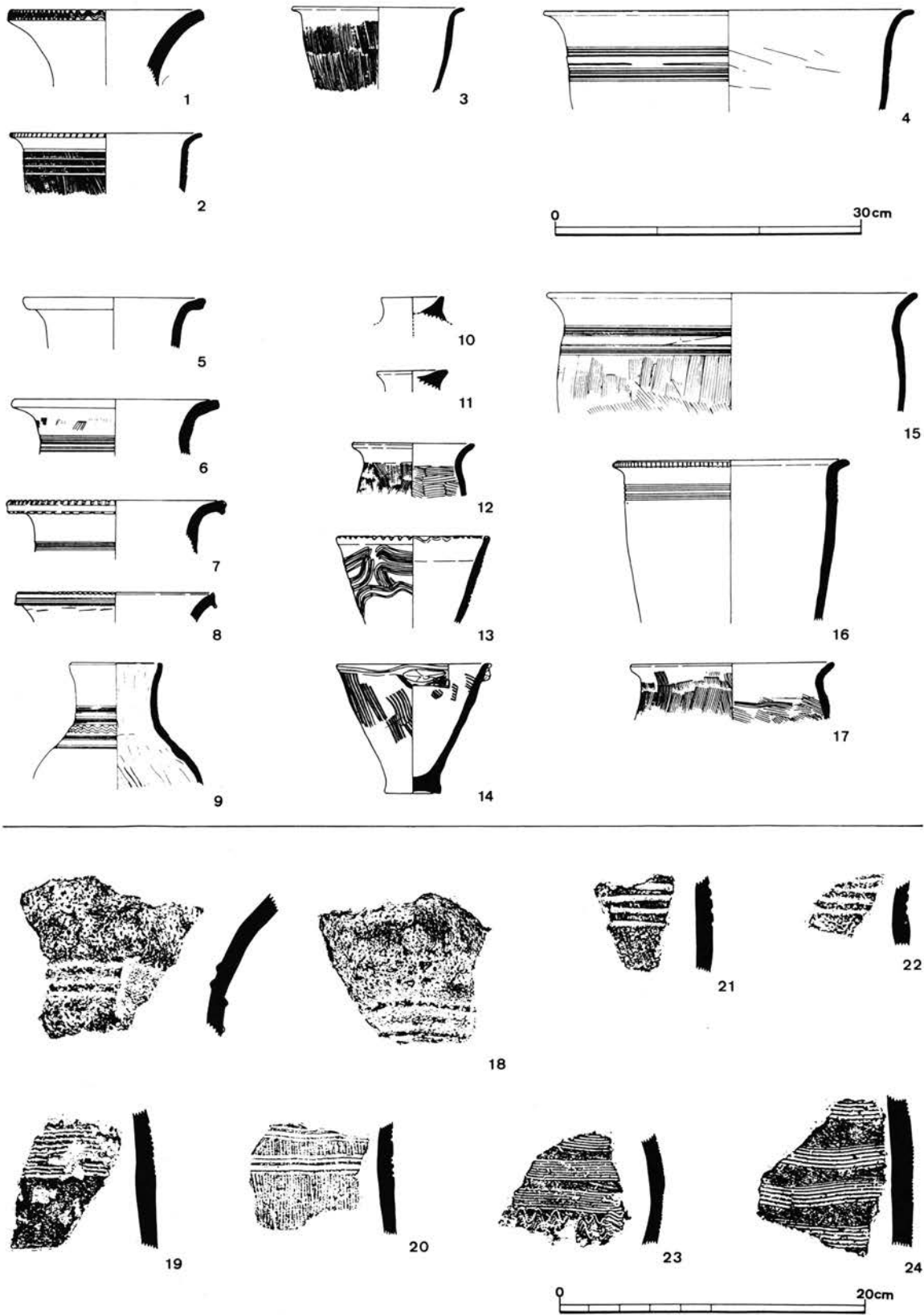
A. 土器編年

雲宮遺跡 I 期 長岡京跡左京第212次調査(白川1990、岩崎1994)で検出された沼状のくぼみから出土した土器群である。弥生土器は、縄紋時代晩期の長原式の深鉢と共伴して出土している。1は、頸胴部界に段が認められる壺形土器である。段はミガキなどによって作り出されたのではなく、土器の整形技法と関連すると考えられる。2は、無軸の木葉紋の施された壺形土器の頸部から胴部にかけての破片である。3・4は無紋の甕形土器、5は頸部に段を持ち、体部最大径の部分に2本の沈線が認められる個体である。

縄紋土器とともに発見されていることと、弥生土器の個体数が少なく、同時期の遺物が周辺調査で発見できないことから、I期が弥生土器を主体とする時期であったかは不明である。生駒山西麓の土器がすでに認められる。



第49図 雲宮遺跡 I 期(白川1990、岩崎1994)



第50図 雲宮遺跡VI期(岩崎1980)

雲宮遺跡Ⅱ期 今回報告の左京第216次調査第22トレンチ S X60第3～5層で出土した土器群である。壺形土器では、口頸部界の紋様が段のものが多く、20%を占めている。沈線は、1～3本のものが約半分を占めている。頸胴部界の紋様は、沈線1～3本のものが約半数で、段が20%を占めている。削り出し突帯上の沈線は1～3本のものが主体である。木葉紋などのヘラ描きの割合が高い。

甕形土器では、沈線を持つ土器のうち1～2+ α 条のものが約80%を占めており、通常沈線が施紋される頸部屈曲部の位置よりも下方に施された個体が認められる。段を持つものが認められるが、施紋中に占める割合は低い。詳細は、各考察を参照されたい。

雲宮遺跡Ⅲ期 今回報告の左京第216次調査第22トレンチ S X60第1・2層で出土した土器群である。壺形土器では、口頸部界の紋様のうち、段のものが約5%と減少する。沈線は、1～3本のものが約半分を占める。頸胴部界の紋様は、沈線1～3本のものが約半数で、段が6%に減少する。

甕形土器では、段を持つ個体が認められない。沈線が3本以上のものが一定量認められる。

雲宮遺跡Ⅳ期 今回報告の左京第216次調査第22トレンチ S X76第2・3層で出土した土器群である。壺形土器では、口頸部界の紋様のうち、段のものが3層では6.5%と多いが、個体数の多い2層では約1%と減少する。沈線は1～3本のものが30%前後に減少し、相対的に3+ α ～6本のものが増加する。貼り付け突帯3+ α ～6条が出現する。貼り付け突帯上の刻みに布圧痕のあるものが見られる。頸胴部界の紋様は、沈線1～3本のものが約30%に減少、3+ α ～6本の割合が増加する。沈線6+ α ～10条のものが出現する。このことは、削り出し突帯上の沈線にも認められる傾向である。段のある個体がほとんど見られなくなる。頸部胴界に貼り付け突帯多条のものが出現する。

甕形土器では、「L」字状の口縁を持ち、上面に沈線の施された瀬戸内系の甕形土器が出現する。山形紋を持つものが現われ、同時に口径40cm前後の大型の甕形土器が目立つようになる。

鉢形土器では把手付の器種が増える。脚状の底部を持ち、直口の小型の鉢形土器や、口径が器高の1.5倍を越し、口径が40cmを越す大型のものが出現する。大型の鉢形土器には把手が認められ、上面に沈線の施された「L」字状の口縁を持つものや口縁外面を肥厚させ、外面に沈線を施したものがあり、西からの影響が認められる。

雲宮遺跡Ⅴ期 今回報告の左京第216次調査第22トレンチ S X76第1層で出土した土器群である。壺形土器では口頸部界の紋様のうち段のものはほとんどないが、退化形態と考えられる図版第2の14が見られる。沈線は1～3本のものが減少する。沈線6+ α ～10条のものが増加する。頸胴部界の紋様は、沈線1～3本のものが22.5%となり減少する。沈線6+ α ～10条のものが増加する。貼り付け突帯1～3条のものがⅣ期以前より2倍に増える。貼り付け突帯6+ α ～10条のものが増加する。

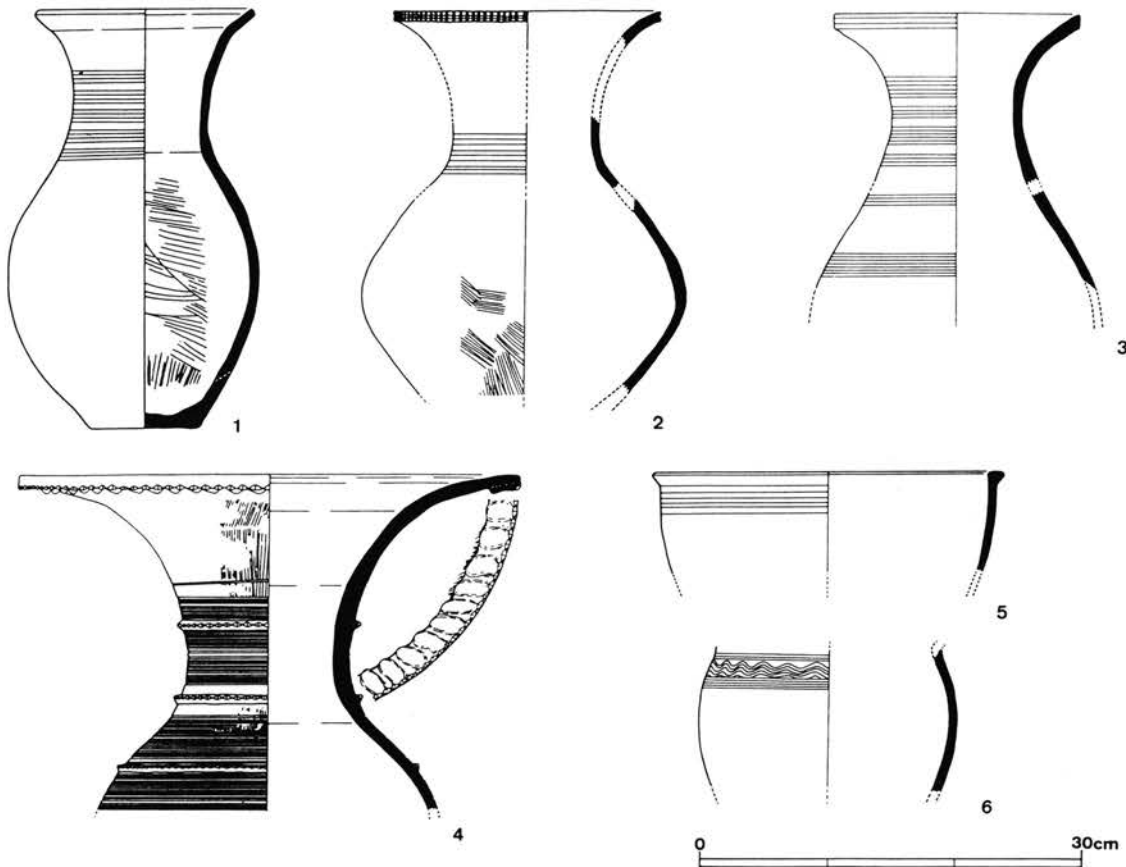
甕形土器では、沈線2+ α ～4+ α のものが主体を占めているが、沈線が1・2条のものも一定量認められる。Ⅴ期になって初めて沈線6条以上のものが出現する。

鉢形土器では、IV期に認められた口径が器高の1.5倍を越し、口径が40cmを越すような大型のものが全く認められなくなる。

雲宮遺跡VI期 長岡京跡左京第17次調査S D1710・S K1719出土の土器群である(岩崎1980)。壺形土器は、口縁の破片資料が多いため明らかではないが、頸部に櫛描き紋の認められる個体や頸部内外面に貼り付け突帯のあるものがある。櫛描きの原体の歯の間隔は不ぞろいで粗い。甕形土器は、無紋でハケが内外面に認められるもの、ヘラ描き沈線のもの、櫛描き紋のものが認められる。無紋のものは、口縁部内面に横方向のハケは見られず、ハケの特徴も大和甕に見られるハケとは異なり、V期以前の伝統を引くと想定される。ヘラ描き沈線の施されたものには、4条以上のものが多く9~12条のものも存在する。15は、4本単位の櫛描き紋が2条施された個体であるが、器面調整は細ハケ(板ナデ状の調整)であり、V期以前の器面調整と同じである。13・14はIV期に出現した鉢形土器の系譜と考えられるが、外面には紋様風の非常に粗いハケが施される。

2つの遺構で同様な様相が認められること、S K1719でヘラ描き沈線の個体が甕形土器に偏っていること、櫛描き紋の甕形土器の器面調整がV期以前と同様なことから、1時期のものと考えられる。これらのことから櫛描き紋が新出するが、V期の様相を大きく残してその変化の延長線上に位置すると想定できる。

壺形土器は、雲宮遺跡内の一括資料では明らかにすることができないが、雲宮遺跡から南に1.5kmの南栗ヶ塚遺跡の方形周溝墓から出土した土器がVI期の資料として挙げられる(白川・原・

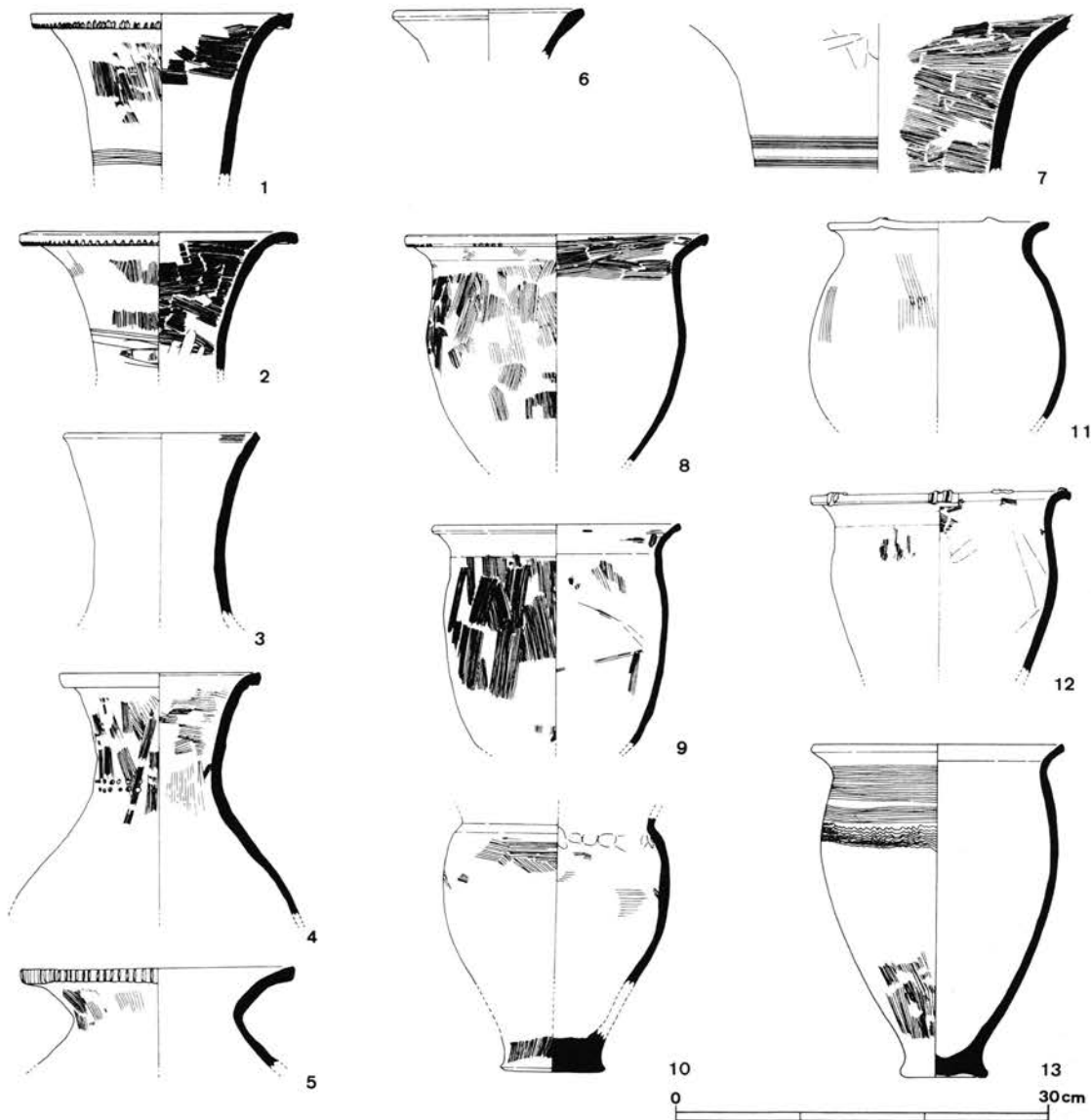


第51図 南栗ヶ塚遺跡出土遺物(白川・原・岩崎1983)

岩崎1983)。

1～4は、周溝墓3911から出土した。4は、口縁端下面に粘土を貼り付け、指頭圧痕を加え端部に刻みを施されており、頸胴部は貼り付け突帯と櫛描き紋、ヘラ描き沈線が施されている。1は、原体が4本単位の粗い櫛描き紋が4本施紋されている。2は、頸部に9本のヘラ描き沈線が施されている。3は、口縁端部が面をなし2本のヘラ描き沈線が認められる。頸胴部には上から6本、4本、6本、4本、6本、4本、8本のヘラ描き沈線が施されている。5・6は、周溝墓3914から出土している。5は、Ⅳ期に出現した瀬戸内系の「L」字状口縁の甕形土器の系譜上に乗るものと想定される。壺形土器1・2を見ると、ヘラ描き沈線も櫛描き紋も表現している紋様効果がほとんど変わらないことがわかる。3の多条沈線の存在は、Ⅴ期との連続性を示していると想定できる。

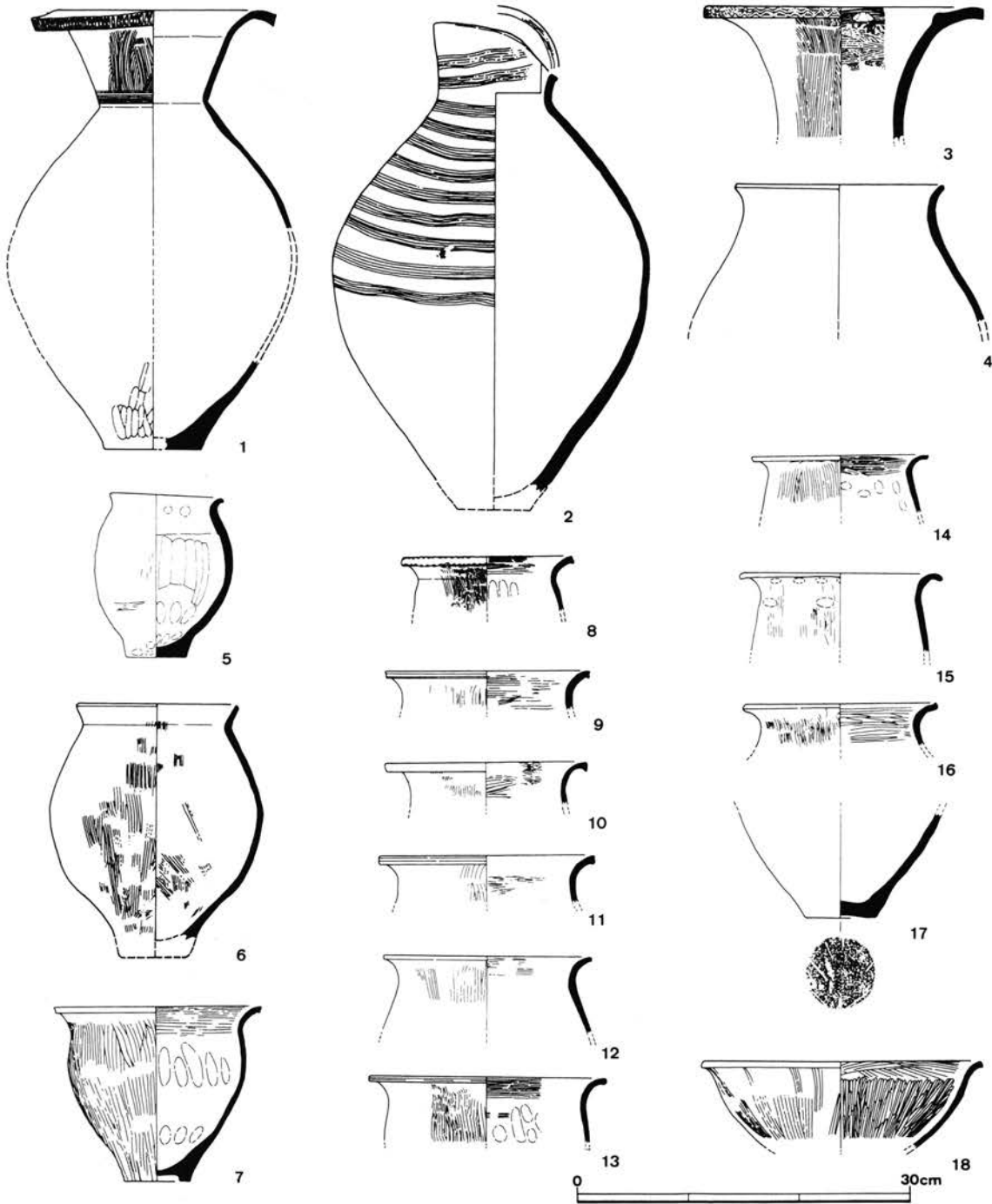
雲宮遺跡Ⅶ期 神足遺跡右京第279次調査(岩崎1989)のS K1689から出土した土器群である。神足遺跡は雲宮遺跡に連続する遺跡と考えられることから、雲宮遺跡群として扱った。広口長頸



第52図 雲宮遺跡Ⅶ期(岩崎1989)

壺形土器が多く出土している。甕形土器にはヘラ描き沈線が認められなくなり、11・12の近江地域の影響を受けたもの、13の播磨地域の影響を受けたものなどが存在する。

下植野南遺跡(中川1994) 雲宮遺跡Ⅶ期に後出する土器群で、S D 501で出土した資料を中心としている。壺形土器は少ないが、甕形土器は口縁端部に刻みがなく、外面に粗い縦方向の強いハケ、口縁部内面には粗い横方向の強いハケが施されたものがほとんどである。乙訓地域で典型的なⅡ様式の甕形土器のみで構成される。包含層からは口縁内面にハケで波状紋が施された甕形土器が認められる。この調査区では、Ⅱ様式以外の弥生土器は出土していない。



第53図 下植野南遺跡出土遺物(中川1994)

B. 小結

年代を追って土器群を見ると、ヘラ描き沈線は多条化の傾向が認められ、VI期まで存在する。VI期に出現する櫛描き紋は、ヘラ描き沈線が施紋帯として複数化していく紋様効果の延長線上にあるものと考えられる。VII期以降には加飾される甕がほとんど見られなくなり、播磨系の甕形土器のみに櫛描き紋が認められる。

下植野南遺跡では外面に粗い縦方向の強いハケ、口縁部内面には粗い横方向の強いハケが施されたものがほとんどになる。しかし、このような粗いハケを施した甕形土器は、前項で述べたように雲宮遺跡で系統的に発生したものではない。粗いハケのある甕形土器が主体をしめるようになる時期に、一つの土器変化上の画期があると想定できる。それと同時期に細ハケの器面調整もほとんど見られなくなる。

壺形土器を見ると、IV期以降に首が長くなる土器が発達し、広口長頸壺が確立する傾向が認められる。また、櫛描き紋とヘラ描き沈線に紋様効果としてのヒアタスがないことが明らかになった。

II・III期には西日本の日本海側の影響を受けているが、瀬戸内系の土器がIV・VI期に、V・VI期に播磨系の土器が認められる。口縁内面にハケによって波状に施紋された甕形土器の出現時期は不明である。

遺構を見ると、I期は縄紋時代の土器が多く出土する地域で検出されている。II・III期には環濠が営まれるようになるが、IV期には環濠がなくなる。この時期に乙訓地域では雲宮以外の遺跡から弥生土器が発見されるようになることから、弥生文化の遺跡が分散化すると考えられる。この時期に発生した遺跡は、鶏冠井遺跡のように中期まで存続する遺跡になる。

土器編年と時代区分を考えた場合、一致するとは限らない。時期区分を考えるとどのような要素を主にするかによって大きく異なるであろう。弥生時代遺跡の拡散と環濠の喪失と広口長頸壺への傾向が現われることを考えると、III期とIV期に画期が認められる。櫛描き紋の出現に画期を求めるのであれば、V期とVI期に画期が認められるが、施紋具が異なるだけで、紋様効果と変化の方向性はスムーズな移行であり、時代区分とは認めがたい。土器に大きな変化が起こるのは、甕形土器の無紋化である。内外面の粗いハケ施紋が施され、口縁端部に刻みのない甕形土器の出現と、組成における席卷は大きな変化であり、文化要素の激変が想定される。

(中川和哉)

4. 石器

(1) 石器製作工程

雲宮遺跡からは、多くの石器が出土している。大半は安山岩製の剥片や碎片であるが、そのうちの多くが土層観察用に設定したセクションの水洗によって検出されている。このことから、現地で検出した石器には、相当量の取りこぼしがあると考えられるが、現存する資料から石器製作過程を考察したい。石器は、大きく安山岩を利用した打製石器、粘板岩や流紋岩を用いた磨製石器に分かれることから、それぞれについて個別に考察したい。

なお、粘板岩としたものは、通常頁岩と分類されるものも含んでいる。

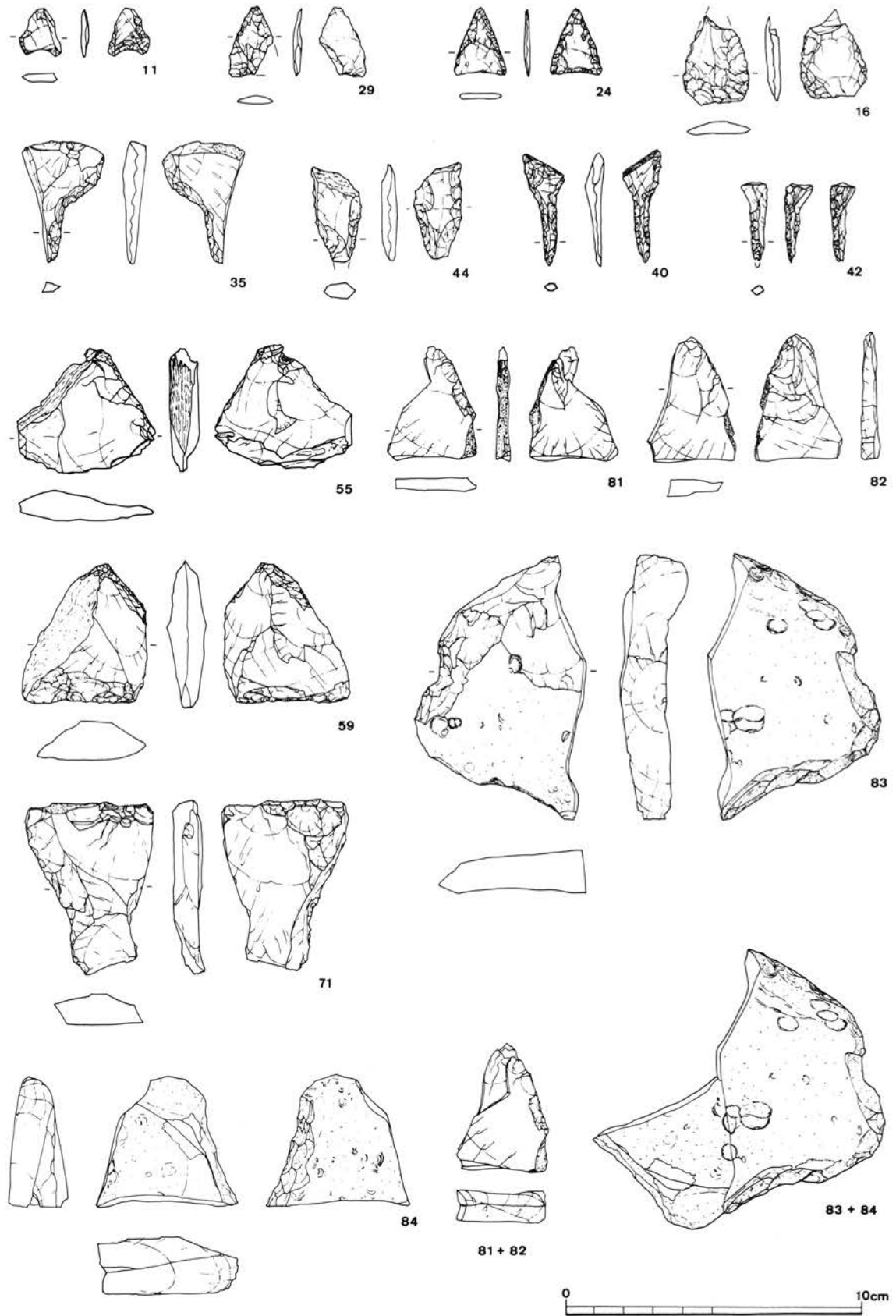
A. 打製石器

打製石器には、石鏃・石錐・削器・楔形石器などの器種がある。これらに用いられる石材は、安山岩に限られる。近辺の河川や礫層中に多く認められるチャートは、敲石に用いられた以外には剥片石器の原材料としては用いられていない。安山岩は、肉眼観察によると、奈良県と大阪府にまたがる二上山産と考えられるものと、香川県金山産と考えられるものがある。典型的な金山産の特徴をもつものは、石鏃に認められるが、多くが二上山の安山岩と想定できる。しかし、肉眼的に判断の付きにくいものについては、蛍光X線分析を待たねばならない。

石器に用いられる安山岩は、遺跡周辺で直接入手することは不可能である。何らかの手段によって原産地から、石材を獲得する必要がある。石材が雲宮遺跡内にもたらされた形状を示すものの1つに、第53図83+84の接合資料がある。この資料は接合の結果、平面形が四角く、扁平な形状を示す水磨を受けた円礫であることがわかった。しかし、直線距離にして2.5kmの向日市石田遺跡では、縄紋時代後期に板状の剥片(盤状剥片)に分割されて石材が持ち運ばれていたことがわかっている(高橋1983)。雲宮遺跡の剥片や石器に残された自然面を観察すると、水磨の認められないものがあることと、図版第49の53のように大形の石器であるにもかかわらず自然面を持たないものの存在から、盤状剥片の形態で遺跡に持ち込まれた可能性も否定できない。ただ、石器に用いる上で不都合となる自然面に覆われた円礫を持ち込んでいることは、石材の安定的な供給が確保できなかったことを示しているのかもしれない。このことは、金山産のサヌカイトが弥生時代前期に限定して、大阪湾沿岸地域にもたらされることに関連する重要な問題である。

第52図の83+84は、初めに扁平な礫の上面からの打撃によって2つに分割されている。そのうちの1つがさらに2つに分割されているが、初めに分割した打点と同じ部分から割れていることから、同時に3つに分かれたとも想定できる。原石で持ち込まれた石材を、石核用の剥片に分割する過程と考えられる。盤状剥片の場合も、大形のものについては分割が想定できようが、遺跡内では大形の石核や接合資料は得られなかった。石器に用いられる安山岩(サヌカイト)には、流状構造(石理)があることが知られているが(松沢1981)、55・56・59の楔形石器の自然面に残された石理は、石器表面に残された剥離面の打撃方向と一致する。このことは、剥片剥離の過程でサヌカイトの持つ石理の特性を生かすことで、薄く平滑な剥片を量産していると想定できる。

目的剥片を製作する手段の具体的な証拠としては、第52図の81+82がある。この資料は、打撃

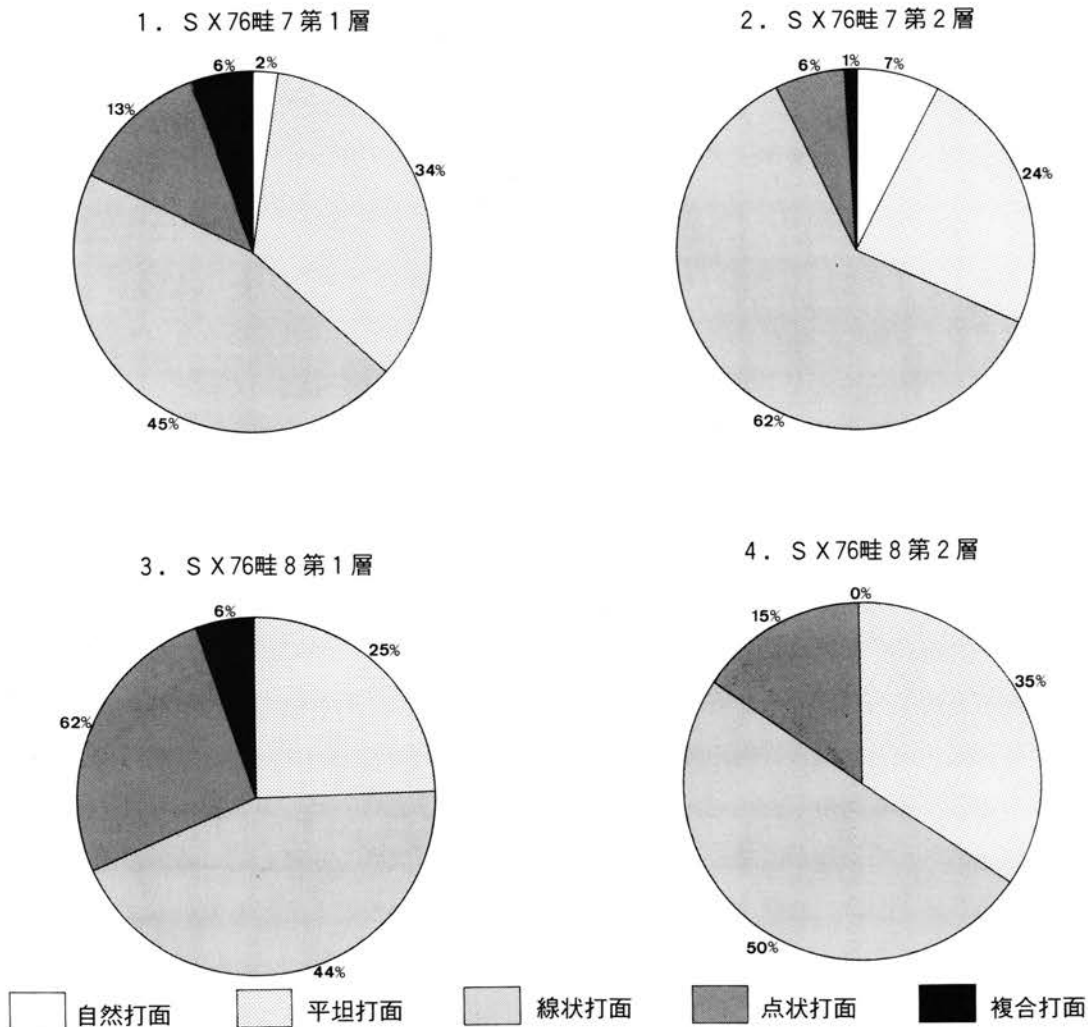


第54図 製作工程を示す石器(打製石器)

方向を同じくする2枚の剥片が接合するものである。打面は81の場合には折れて欠損しているが、82は線状打面である。両剥片とも打点から通常発生する打撃瘤の発達が全く認められない。このため、接合する面のどちらがネガ面かポジ面かの区別が困難である。両剥片の末端部は、折れ面で構成される。打撃角は約90°となる。これらの特徴から両極技法によって剥片が剥離されたと想定できる。山中(1978)が指摘するように、楔形石器の多くが剥片生産時の残核であるという考察が正しいことが、この資料中からも追認できる。

出土石器の中では比較的大型の楔形石器や、線状の潰れた打面を持つ剥片の量の多さが目につく。S X 76の断面観察用のセクションベルトを土層ごとにサンプリングし、水洗して石器の検出を行った。多くが碎片であるが、剥片の打面の形状や折れ面の有無、縁辺の潰れの有無を観察した。

畦7の第1層から180点の石器が検出できたが、そのうち15点が粘板岩で165点が安山岩製である。打面の残っているものは88点である。打面が自然面のもは約2%(2個)、一枚の剥離面で構成された打面(平坦打面)のものは約34%(30個)、線状打面は約45%(40個)、点状打面は約13%(11個)、2回以上の剥離面で構成された打面の頂部を打点とするもの(複合状打面)は約6%(5



第55図 S X 76セクション出土剥片の打面形状

点)である。主要剥離面を切る折れ面をもつ石器は約75%を占め、剥片の一部に潰れの認められるものは約30%である。

第2層から200点の石器が検出できたが、そのうち用いられた石材は、12点が粘板岩、石斧に用いる緑色砂岩が2点、186点が安山岩である。打面の残っているものは95点である。打面が自然面のものは約7%(7個)、平坦打面のものは約24%(23個)、線状打面は約61%(58個)、点状打面は約6%(6個)、複合打面は約1%(1点)である。剥片の一部に折れ面をもつものは約70%を占め、潰れの認められるものは約27%である。

畦8の第1層から104点の石器が検出できたが、そのうち4点が粘板岩で100点が安山岩製である。打面の残っているものは57点である。打面が自然面のものは0%(0個)、平坦打面のものは約25%(14個)、線状打面は約44%(25個)、点状打面は約26%(15個)、2回以上の剥離面で構成された打面の頂部を打点とするもの(複合打面)は約5%(3点)である。折れ面をもつものは約67%を占め、潰れの認められるものは約36%である。

セクションベルト2の第2層から56点の石器が検出できたが、そのうち5点が粘板岩で、51点が安山岩製である。打面の残っているものは26点である。打面が自然面のものは0%(0個)、平坦打面のものは約35%(9個)、線状打面は約50%(13個)、点状打面は約15%(4個)、2回以上の剥離面で構成された打面の頂部を打点とするもの(複合打面)は0%(0点)である。折れ面をもつものは約69%を占め、潰れの認められるものは約24%である。第3層出土の石器は、数が少ないので割愛する。

セクションを水洗して検出した石器には微細な剥片を多く含んでおり、石器の2次加工時に出た剥片、細片も含まれていると思われる。線状を呈する打面は、打面の残っている剥片のうち、44~61%を占め最も多い。折れ面をもつ剥片は、67~75%を占め、潰れのあるものも24~36%の値となっており、両極技法が主要な剥片剥離技術であった可能性を追認している。

石器に目を移し、石鏃の16・24・29など大きな素材剥片の残存している資料を観察する。16の向かって右側の図面に残された素材剥片の剥離面はネガティブで、打瘤の発達は見られず、線状打面と考えられる。24は、打瘤の発達しない剥片を素材としている。表裏の打点はほぼ同一部にあり、打面は線状打面と考えられる。29の向かって右側の図面に残された素材剥片面はネガティブな剥離面で、打瘤の発達は見られず、線状打面と考えられる。石錐の35・44、石鏃未成品34は、折れ面からの2次加工が認められることから、素材剥片にもまた折れ面が認められたと考えられる。また、石錐に残された素材剥片時の剥離痕は、打瘤が発達していないし、剥離時に弾け飛んだと想定できる石片を利用した42もある。素材剥離面が大きく残っている石器からは、両極技法によって作り出された剥片が素材として用いられた可能性を大きく示唆している。器面に自然面の残されている40・44は、石理に沿って素材剥片を剥離していることを示している。

以上のことから、石核の素材となる剥片を石理に沿って作り出すか、平坦な礫(石理に沿って扁平)を分割し、それによって作り出された剥片を利用して、石理に沿って両極技法によって打瘤の発達しない薄い剥片を作り出している。上下から力が加わることと打撃角が90°であること

から、打撃による力の抜けが悪く、折れ面が生じることが多い。この薄く打瘤の発達しない剥片を利用して剥片石器を製作していると復原できる。

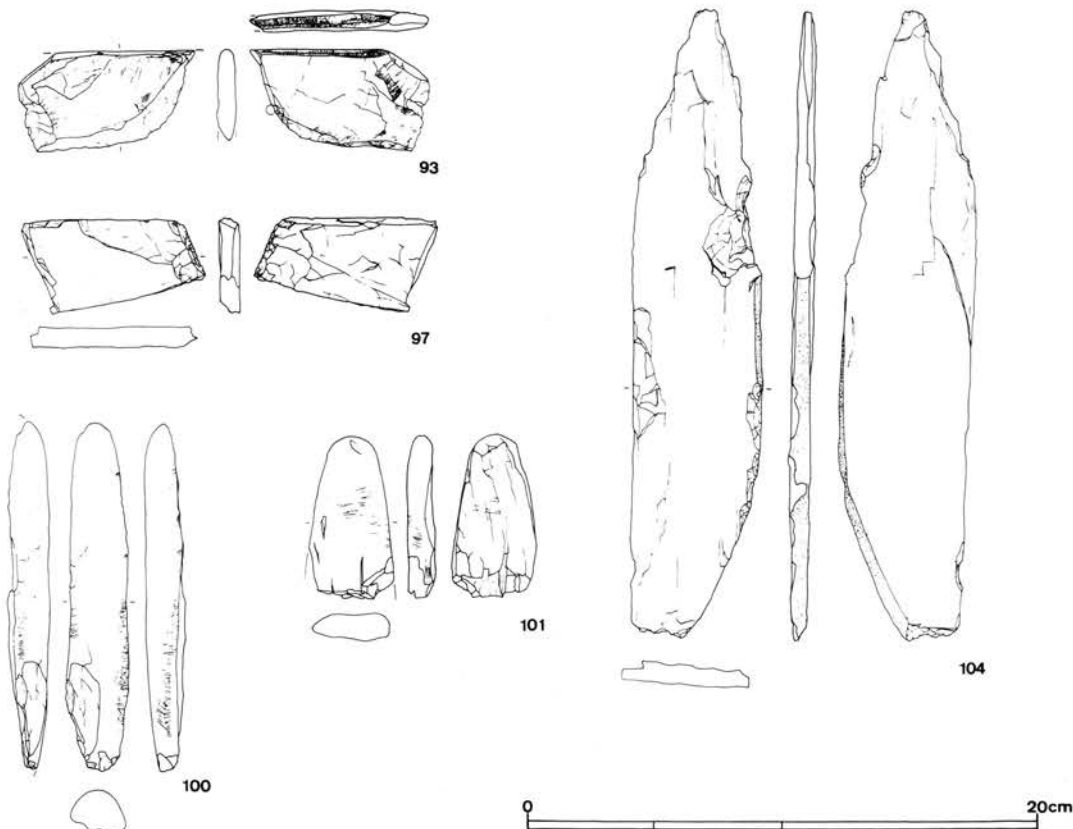
B. 磨製石器

磨製石器の多くは、灰色や黒色を呈する粘板岩で作られているが、耳成山産と考えられる流紋岩製の石庖丁と、緑色砂岩製の石斧が出土している。流紋岩は剥片などの製作に伴う遺物がまったく検出されておらず、遺跡内に成品として搬入されたと考えられる。緑色砂岩は、製作技法を考へるほどの数の資料は出土していない。しかし、雲宮遺跡から北に約2.5kmの東土川遺跡の礫層中からは、拳二つ分ほどの円礫を採取することが可能であった。粘板岩は、剥片が多く出土していることから、製作方法の復原を行いたい。

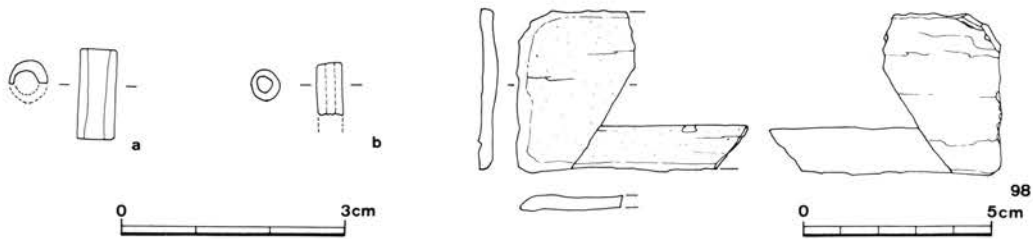
93は、穿孔が認められることから石庖丁と考えられるが、片面には水磨を受けた自然面が残存している。素材剥片と考えられる97・104にも、やはり水磨を受けた自然面が残存している。素材剥片を作り出した原石は、円礫であった可能性が高い。石材を遺跡内に持ち込んだ形態は、101や100に見られる線状痕のある礫が円礫に近いことや、図示していないものに円礫の一端を打ち欠いたものなどがあることから、円礫として持ち込んだものと考えたい。

円礫を97・104のように石理の方向で、板状に分割して素材剥片を作り出す。94・97に見られるように、打撃を加えることによって粗い整形を施している。

このような礫の遺跡内搬入の形態は、亀岡市太田遺跡の石器群の分析から田代(1986)によって明らかにされている。持ち込まれた原石は1kg前後とされている。雲宮遺跡の所在する地域も、



第56図 製作工程を示す石器(磨製石器)



第57図 管玉・石鋸実測図

太田遺跡同様、粘板岩の産出する丹波帯に位置している。しかし、雲宮遺跡の周辺は沖積地であり、礫層中には希に良質の粘板岩が認められる。

工程は、礫層あるいは河原からの礫の採集、石理方向に打撃によって薄く剥離する。できた剥片を粗く成形加工した後に研磨を加え製品に仕上げると復原できる。

C. 玉造りについて

今回の調査地に近接する左京第18次調査では、弥生時代中期初頭以前の包含層から碧玉製の管玉2点が出土している。今回の調査では、包含層中から紅簾片岩製の石鋸が出土している。製品ではないが、片岩製の破片がS X60から出土しており、雲宮遺跡内で管玉が製作されていたと想定できる。

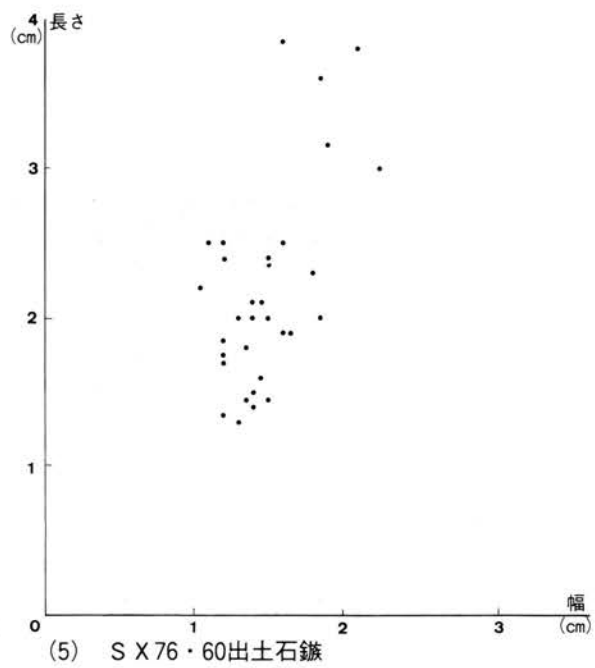
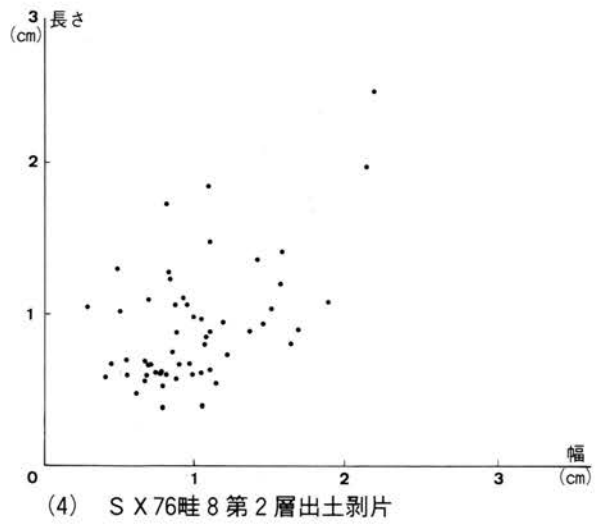
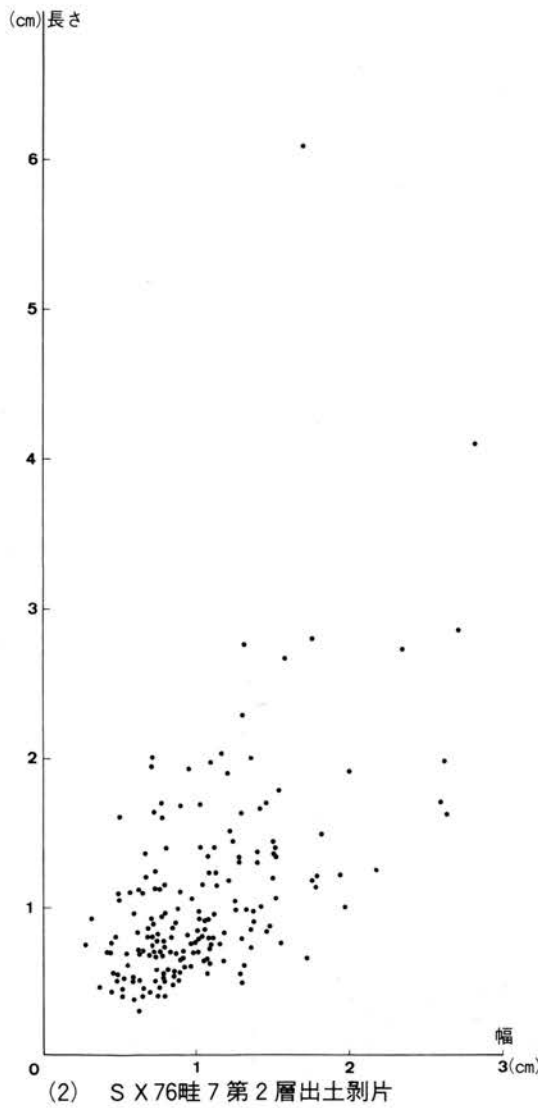
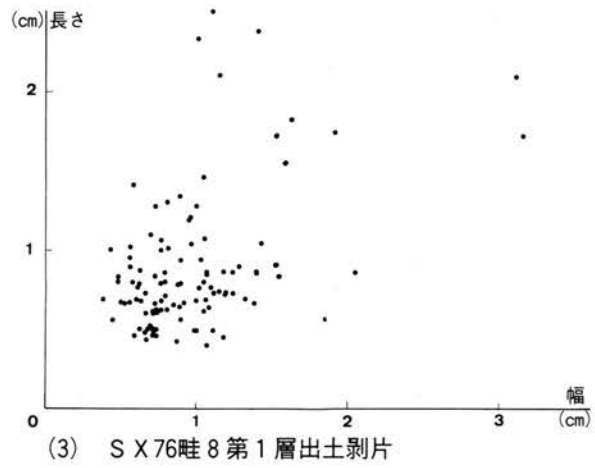
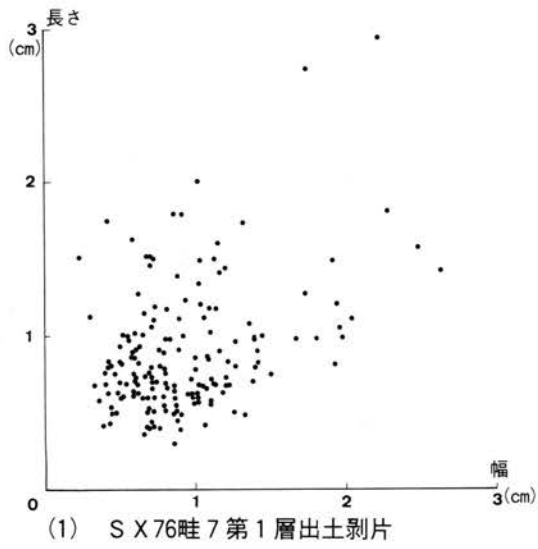
(2) 石器組成研究の問題点

近年の弥生時代石器研究を見ると、遺跡間の石器組成の対比や、時期差による石器組成の変化に関する研究が盛んに行われている。しかし、その統計に用いられている資料について、十分な資料批判がなされているものは皆無に等しい。どのような手法、精度で遺物を採取しているかによって、結果は異なってくると考えられる。

自然科学系の花粉分析や火山灰同定、鉱物組成分析などの場合、資料のサンプリングの方法やその処理の仕方を明記するか、定められた基準に合わせた分析の結果を用いて複数の資料の対比に検討を加える。しかるに、考古学の発掘調査では、発掘調査時のサンプリングの方法や、用いた道具、発掘調査した人の熟練度についての記載がなされたものがほとんど存在しない。スコップで調査したもの、手スコや手ガリ(手持ちの草刈り鎌)で調査したもの、土をすべて持ち帰り洗浄によって検出したものは、自ずと石器検出数に違いがあると想定される。特に、石器の分量が小さいものについては、掘削に用いる道具の大きさに反比例して、大きな道具を用いるほど石器の検出数が減ると考えられる。その際には小さな個体ほど多く検出できないであろう。また、直接に発掘調査に従事する人達に石器出土の可能性を熟知させているか、石鎌や石庖丁といった定型的な石器だけではなく剥片や碎片に気を付けることを喚起するかによって出土数は大きく変化する。この仮説について、S X76の資料を主に用いることによって調べてみたい。

A. 発掘方法

S X76の発掘調査は、すべて人力によって行った。現地で発掘調査作業を実際に行ったのは、外注の土木作業員で石器の検出には不慣れであった。掘削に用いた道具は、手スコ(移植ゴテ)、



第58図 S X 76・60出土石器長幅関係グラフ

手バチ(手鋏)、手ガリ(草刈り鎌)であった。S X76の埋土は層位ごとに分けて、掘削した。

また、2か所に設けた幅50cmの断面観察用の畦を層位ごとに土囊に採取し、水洗いして遺物の検出を行った。最終的に用いた篩は約3mmのメッシュであった。

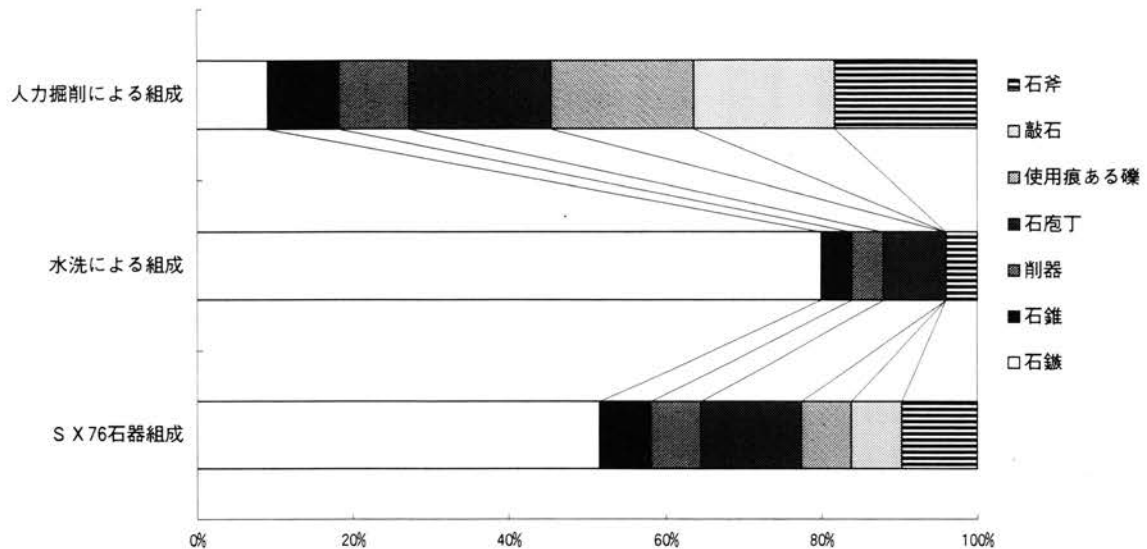
B. 出土石器

S X76は、第22トレンチ内で約8m検出できた。人力掘削によって検出できた石器は、石鋏1点・錐1点・削器1点・石庖丁2点・使用痕ある礫2点・敲石2点・石斧2点である。

S X76からは、石鋏は破損品を含めると20点が検出できたが、19点が水洗によって検出したものである。他に、水洗いで見つかった石器は、錐1点・削器1点・石庖丁2点・石斧片1点である。剥片及び細片は546点出土している。グラフは、畦7・畦8の1・2層ごとの長幅の法量について、X軸を幅に、Y軸を長さにとったものである。いずれも突出した法量を持つ数点の石器を除けば、長幅ともに0.5~1.5cmの部分(第1ゾーン)に集中し、1.5~2.5cm(第2ゾーン)にもある程度数が認められる。5は、石鋏の長幅の法量をグラフにしたものであるが、長さは1.5~2.5cm・幅1~2cmの間に集中し、第1・2ゾーンにかけて分布することがわかる。発掘調査時に検出できた剥片類には0.5~1.5cmの法量をもつものはほとんどなく、第2ゾーンより大きな剥片が検出されている。第2ゾーン以下の法量の小さなものは、人力による掘削中に見つげだすことができなかつたと想定される。

C. 石器組成

石器組成は、通常調査で出土した石器のすべてを数値化していくことでわかる。雲宮遺跡のS X76では、石鋏16点・錐2点・削器2点・石庖丁4点・使用痕ある礫2点・敲石2点・石斧3点である。組成の約52%が石鋏であるが、そのうち94%が水洗いによって検出されている。この見かけ上の組成は、2つの異なったサンプリング方法によって採集された石器の合計である。畦は無差別サンプリングであるから、畦の部分平均的な石器組成を示していると仮定してみる。トレンチ内で検出できたS X76を畦の幅で割った数値8を、畦から出た石器に掛けたものが本来の



第59図 石器組成

石器組成であると考えられる。その結果、石鏃は128点と膨大な出土数となり、組成に占める率は約80%となる。

また、人力掘削のみで石器を検出していたとすると、石鏃1.17点・錐1.17点・削器1.17点・石庖丁2.34点・使用痕ある礫2.34点・敲石2.34点・石斧2.34点となり、石鏃は9%にしかない。

発掘調査において、遺構の埋土のすべてを水洗い分別している例は少ないであろうが、組成を対比する場合は、人力掘削のみで石器を検出したものと、一部水洗い分別したものを加えたものなどが混じりあった状態でなされている。第59図で示したように、S X 76出土石器からは3通りの石器組成を想定することができ、どの数値を選ぶかによって組成が全く変わってしまう。発掘精度が著しく異なる可能性のある資料を対比し、論じることには何の意味を認めることができるであろうか。

また、特に石器組成を現実にもその場で出土している石器の量に近付けるため、大きな影響をもつものは、発掘担当者の石器への熱意であることは言を待たない。

(中川和哉)

第7章 ま と め

今回報告した発掘調査は、対象面積は少なかったが、良好な出土遺物に恵まれた。特に、溝S X76・S X60は層位ごとに土器の特徴が変化していく様相が明らかであった。また、今回の調査地は、佐原 眞(1967)が弥生時代前期の土器編年の基準資料として用いた土器群が出土したトレンチに近接しており、同じ遺跡で佐原の編年を検討できたことは幸運であった。

従来の編年がいうようには段階的に土器が変化していくのではないことが明らかとなった。特に、雲宮遺跡Ⅴ期に見られる沈線の多条化は、多条なもののみで構成されるのではなく、多条なものがあるということに他ならない。S X76・S X60の間に著しい時期差がない限り、雲宮遺跡ⅢとⅣ期の間に見られる紋様構成の違いは前期の他の時期に比べ大きい。瀬戸内や播磨といった西からの影響が環濠S X60埋没以後の沈線の多条化が一層進む時期に認められるようになることは大きな成果の1つであった。

また、一般的にいわれているⅡ様式に見られる甕形土器の無紋化は、雲宮遺跡内の系統的变化の中では捉えられない。櫛描き紋の登場は、施紋技法といった点では新出であるが、紋様効果や他の要素から考えあわせてみても、土器変化のメルクマールとは考えられない。口縁端部に刻みを入れず、外面に縦方向の粗く強いハケ調整を施し、口縁内面に横方向のハケ調整が施された甕形土器が甕形土器の組成のほとんどを占めるようになる時期に画期を設けたい。また、この土器は、Ⅶ期以前の甕形土器とは異なっている。この土器が出現し、盛行する時期に近江系の甕形土器が認められることは、多くのことを示唆しているように思われる。

遺構に目を移すと、雲宮遺跡の環濠が二重環濠であったことがわかり、縄紋土器を多くともなう雲宮遺跡Ⅰ期と中心地域がずれることがわかった。また、雲宮遺跡Ⅳ期には従来の環濠集落の環濠が役割を終える。この時期前後に、鶏冠井遺跡や南栗ヶ塚遺跡・井ノ内遺跡・開田遺跡などの前期の村が成立する。これらの村は、縄紋時代晩期の土器が発見される地域内であることが多いことも新たにわかった。

本報告書を作るにあたっては、遺物・遺構の項では層位的な関係に対して解釈を加えないで資料を提示することに努めた。周辺地域の調査によって新旧関係が間違っていると想定されるものについても、隠蔽することなく特に抽出して提示し、法量や残存率、観察結果の記述に努めた。考察では、解釈を交え土器群の分析を行った。

例えば、従来、石器研究の場合、特に旧石器時代では層位的に重複して検出されることが近畿地方では稀であった。そのため比較的まとまりのある石器群を抽出して、進化論的技術形態論によって編年していく研究方法が趨勢であった。しかし、この方法論では編年作業者、またはそのグループのアイデア的組成と異なるものについては、先験的に混在しているといった汚名を着せた

り、一部の例外を排除して検討されていく可能性がある。これらを防ぐためには、出土した石器の母岩別分類や接合関係の検討が不可欠であり、その結果を私見を交えず提示することが重要である。土器でも、その残存率や胎土などの検討はもちろん、まずは混在していると考えられる資料であっても、すべて資料提示する必要がある。資料の増加が間違っただデータを淘汰していく。しかるに、多くの報告書が基礎的データの提示ではなく、安易に解釈の方向に流れてしまっでは、編年作業、またはそのグループのアイデア的組成の検証をすることができない。今回は、整理作業のみについて従事したが、土器の場合徹底的な分類を行い、それをもとに時間が許す限り接合する大切さを痛感した。今回報告した資料は、遺構のほんの一部から出た資料にすぎない。どこまで雲宮遺跡の全体像を反映してるのかと言ったお叱りはあるであろう。しかし、この場所でどんな遺物が出たのかについては記述できたと考えている。多くの考察も現在手元にあるものから考えるという点では、報告時の所見であり、修正されていくと思われる。記述についてもできる限り多い少ないといった、人によって解釈の異なる言葉は避けた。

石器研究では、現行の弥生時代遺跡の発掘方法ではサンプリング漏れが多くて明らかにすることはほぼ不可能であることがわかった。サンプリング時における石器の大小の違いや、調査方法などによる誤差は致命的であり、研究戦略の出直しが切望される。

(中川和哉)

注・参考文献

第2章

中川和哉 1991 「淀川流域の旧石器文化の一様相」『京都府埋蔵文化財論集』第2集 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

向日市史編さん委員会編 1983 『向日市史』上巻 向日市

長岡京市史編さん委員会編 1996 『長岡京市史』本文編1 長岡京市

長岡京市史編さん委員会編 1991 『長岡京市史』資料編1 長岡京市

第4章

金子浩島・牛沢百合子 1980 「池上遺跡出土の動物遺存体」『池上・四ツ池遺跡』6 (財)大阪文化財センター

唐津市 1982 『菜畑分析・考察編』 唐津市教育委員会

甲元真之 1982 「弥生時代動物随葬の一様相」『歴史公論』1-9 中央公論社

神戸市教育委員会 1994 「新方遺跡大日地点第2次調査」『平成元年度神戸市埋蔵文化財年報1』 神戸市教育委員会

寺沢 薫編 1979 『昭和53年度唐古・鍵遺跡第4・5次発掘調査概報』 奈良県立橿原考古学研究所

春成秀爾 1993 「豚の下顎骨懸架」『国立歴史民俗博物館研究報告』第50集 国立歴史民俗博物館

藤田三郎編 1983 『昭和57年度唐古・鍵遺跡13・14・15次発掘調査概報』 田原本町教育委員会

文化庁編 1996 『発掘された日本列島96新発見考古速報』

松井 章 1986 「亀井遺跡(切り開げ部)出土の動物遺存体の分析」『亀井』(その2) (財)大阪文化財センター

渡辺 誠 1982 「動物遺体 I, 哺乳類」『菜畑分析・考察編』 唐津市教育委員会

*宮崎泰史から兵庫県神戸市新方遺跡、大阪府茨木市東奈良遺跡にも類例のあることをご教示いただいた。

第5章

古環境研究所 1989 「プラント・オパール」『練馬区弁天池低湿地遺跡の調査』 東京都住宅局・練馬区遺跡調査会

那須孝悌 1989 「活動の舞台：概論」『弥生文化の研究1 弥生人とその環境』 雄山閣出版株式会社

第6章

1. 縄紋時代の雲宮遺跡について

秋山浩三 1991 「長岡京跡左京第172次(7ANEKD-2地区)～左京二条三坊七町、鶏冠井遺跡～発掘調査概要」『向日市埋蔵文化財調査報告書』27 (財)向日市埋蔵文化財センター

泉 拓良・家根祥多 1985 「北白川追分町出土の縄紋土器」『京都大学埋蔵文化財調査報告書Ⅲ-北白川追分町縄紋遺跡の研究-』 京都大学埋蔵文化財研究センター

岩崎 誠・山本輝雄 1988 「右京第235次(7ANGYT-3地区)調査略報・右京第253次(7ANGYT-5地区)調査概報」『長岡京市埋蔵文化財センター年報』昭和61年度 (財)長岡京市埋蔵文化財センター

植山 茂・山田邦和・南 博史 1988 『平安京左京三条四坊四町』⑩ (財)京都文化財団

京都大学文学部考古学研究室・京都大学埋蔵文化財研究センター 1991 『先史時代の北白川』 京都大学文学部博物館

小島孝修 1995 「東土川遺跡出土の縄紋時代遺物について」『京都府埋蔵文化財情報』第56号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

菅田 薫・辻 純一・平方幸雄 1983 「日野谷寺町遺跡」『昭和59年度京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所

千葉 豊 1993 「京都盆地の縄文時代遺跡」『京都大学埋蔵文化財研究センター紀要X』 京都大学埋蔵文化財研究センター

戸原和人ほか 1991 「長岡京跡左京第216次・右京第343次発掘調査報告書」『京都府遺跡調査概報』第40冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

長岡京市史編さん委員会 1991 『長岡京市史』資料編1 長岡京市

原 秀樹 1990 「右京第325次(7ANNKG-3地区)調査略報」『長岡京市埋蔵文化財センター年報』昭和63年度 (財)長岡京市埋蔵文化財センター

渡辺 誠編 1982 『京都府長岡京市下海印寺遺跡範囲確認調査報告』 長岡京市教育委員会

*乙訓地域の土器棺墓については、以下の文献に集成されている。

山本輝雄 1995 「右京第460次(7ANKTN-4地区)調査概報」『長岡京市埋蔵文化財センター年報』平成5年度 (財)長岡京市埋蔵文化財センター

渡辺 博・亀割 均 1986 「長岡宮跡第152次(7AN16D地区)～北辺官衙(南部)・中野遺跡～発掘調査概要」『向日市埋蔵文化財調査報告書』18 (財)向日市埋蔵文化財センター

渡辺 誠 1982 「乙訓地方の縄文時代遺跡」『京都府長岡京市下海印寺遺跡範囲確認調査報告』 長岡京市教育委員会

2. 環濠とその立地

- 岩崎 誠 1980 「(仮)古市保育所建設にともなう発掘調査概要—長岡京左京第17次調査(7ANMMT地区)」『長岡京市文化財調査報告書』第5冊 長岡京市教育委員会
- 岩崎 誠 1985 a 「長岡京跡左京第23次(7ANMST-1地区)調査概要—左京六条一坊十町・古市森本遺跡・芝本遺跡—」『長岡京市文化財調査報告書』第14冊 長岡京市教育委員会・長岡京跡発掘調査研究所
- 岩崎 誠 1985 b 「長岡京跡左京第37次(7ANMMT-2地区)調査概要—左京六条一坊七町・芝本遺跡—」『長岡京市文化財調査報告書』第14冊 長岡京市教育委員会・長岡京跡発掘調査研究所
- 岩崎 誠 1985 c 「長岡京跡左京第54次(7ANMOT地区)調査概要—左京七条一坊十町・太田遺跡—」『長岡京市文化財調査報告書』第14冊 長岡京市教育委員会・長岡京跡発掘調査研究所
- 岩崎 誠 1993 「左京第269次(7ANMST-5地区)調査略報」『長岡京市埋蔵文化財センター年報』平成3年度 (財)長岡京市埋蔵文化財センター
- 岩崎 誠 1996a 「左京第338次(7ANMMR-1地区)調査概報」『長岡京市埋蔵文化財センター年報』平成6年度 (財)長岡京市埋蔵文化財センター
- 岩崎 誠 1996b 「1稲作の始まり」『長岡京市史』本文編1 長岡京市
- 奥村清一郎・戸原和人他 1985 「長岡京跡左京第53次(7ANMSB地区)調査概要—左京六条二坊五・十二町・下八ノ坪遺跡・久我暖—」『長岡京市文化財調査報告書』第14冊 長岡京市教育委員会・長岡京跡発掘調査研究所
- 小田桐 淳 1983 「左京第84次(7ANMTG-4地区)調査・左京第87次(7ANMTG-3地区)調査略報」『長岡京市埋蔵文化財センター年報』昭和57年度 (財)長岡京市埋蔵文化財センター
- 小田桐 淳・原 秀樹 1984 「左京第107次(7ANMTG-2地区)調査概報」『長岡京市埋蔵文化財センター年報』昭和58年度 (財)長岡京市埋蔵文化財センター
- 小田桐 淳 1988 「左京第167次(7ANMKC地区)調査概報」『長岡京市埋蔵文化財センター年報』昭和61年度 (財)長岡京市埋蔵文化財センター
- 小田桐 淳 1990 「左京第210次(7ANMOB地区)調査略報」『長岡京市埋蔵文化財センター年報』昭和63年度 (財)長岡京市埋蔵文化財センター
- 小田桐 淳 1991 a 「左京第219次(7ANMTB-2地区)調査概報」『長岡京市埋蔵文化財センター年報』平成元年度 (財)長岡京市埋蔵文化財センター
- 小田桐 淳 1991 b 「左京第230次(7ANMJN地区)調査略報」『長岡京市埋蔵文化財センター年報』平成元年度 (財)長岡京市埋蔵文化財センター
- 小田桐 淳 1993 a 「第91324次調査」『長岡京市埋蔵文化財センター年報』平成3年度 (財)長岡京市埋蔵文化財センター
- 小田桐 淳 1993 b 「左京第283次(7ANMNB地区)調査概報」『長岡京市埋蔵文化財センター年報』平成3年度 (財)長岡京市埋蔵文化財センター
- 小田桐 淳 1994 「左京第297次(7ANMJN-2地区)調査略報」『長岡京市埋蔵文化財センター年報』平成4年度 (財)長岡京市埋蔵文化財センター
- 木村泰彦 1995 「左京第307次(7ANMCK-3地区)調査概報」『長岡京市埋蔵文化財センター年報』平成5年度 (財)長岡京市埋蔵文化財センター
- 木村泰彦 1996 「左京第357次(7ANMTK地区)調査概報」『長岡京市埋蔵文化財センター年報』平成6年度 (財)長岡京市埋蔵文化財センター
- 久保哲正 1985 「長岡京跡左京第35次(7ANMMO地区)調査概要—左京六条二坊一町・雲宮遺跡—」『長岡京

市文化財調査報告書』第14冊 長岡京市教育委員会・長岡京跡発掘調査研究所

佐原 眞 1967 「山城における弥生文化の成立—畿内第Ⅰ様式の細分と雲ノ宮遺跡出土土器の占める位置」『史林』50-5 史学研究会

白川成明 1990 「左京第212次(7ANMYB地区)調査略報」『長岡京市埋蔵文化財センター年報』昭和63年度(財)長岡京市埋蔵文化財センター

千喜良 淳 1992 「左京第255次(7ANMOT-3地区)調査概報」『長岡京市埋蔵文化財センター年報』平成2年度(財)長岡京市埋蔵文化財センター

戸原和人 1985 「長岡京跡左京第18次(7ANMTD地区)調査概要—左京六条二坊七町・雲宮遺跡—」『長岡京市文化財調査報告書』第14冊 長岡京市教育委員会・長岡京跡発掘調査研究所

戸原和人 1991 『各地域における米づくりの開始』第Ⅲ分冊—発表要旨・追加資料— 埋蔵文化財研究会

戸原和人他 1991 「長岡京左京第216次 右京第343次発掘調査概要」『京都府埋蔵文化財調査概報』第40冊(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

戸原和人他 1992 「長岡京左京第216・241・242次 右京第349・357次発掘調査概要」『京都府埋蔵文化財調査概報』第43冊(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

中尾秀正 1987 「左京第132次(7ANMTB-2地区)調査概報」『長岡京市埋蔵文化財センター年報』昭和60年度(財)長岡京市埋蔵文化財センター

中尾秀正 1988 「第3章 長岡京跡左京第184次(7ANMST-4地区)調査概要」『長岡京市文化財調査報告書』第20冊 長岡京市教育委員会

中島皆夫 1991 a 「左京第229次(7ANMTD-3地区)調査略報」『長岡京市埋蔵文化財センター年報』平成元年度(財)長岡京市埋蔵文化財センター

中島皆夫 1991 b 「左京第235次(7ANLRB-2地区)調査略報」『長岡京市埋蔵文化財センター年報』平成元年度(財)長岡京市埋蔵文化財センター

中島皆夫 1992 「左京第245次(7ANMKC-3地区)調査概報」『長岡京市埋蔵文化財センター年報』平成2年度(財)長岡京市埋蔵文化財センター

中島皆夫 1993 「左京第271次(7ANMSB-3地区)調査概報」『長岡京市埋蔵文化財センター年報』平成3年度(財)長岡京市埋蔵文化財センター

中島皆夫 1994 a 「左京第294次(7ANMAR-3地区)調査概報」『長岡京市埋蔵文化財センター年報』平成4年度(財)長岡京市埋蔵文化財センター

中島皆夫 1994 b 「左京第295次(7ANMTG-5地区)調査概報」『長岡京市埋蔵文化財センター年報』平成4年度(財)長岡京市埋蔵文化財センター

中島皆夫 1996 「左京第352次(7ANMKK-4地区)調査概報」『長岡京市埋蔵文化財センター年報』平成6年度(財)長岡京市埋蔵文化財センター

原 秀樹 1989 「左京第188次(7ANMKC-2地区)調査概要」『長岡京市埋蔵文化財センター年報』昭和62年度(財)長岡京市埋蔵文化財センター

原 秀樹 1990 「左京第207次(7ANMAR-2地区)調査概報」『長岡京市埋蔵文化財センター年報』昭和63年度(財)長岡京市埋蔵文化財センター

原 秀樹 1992 a 「左京第261次(7ANMKD-2地区)調査概報」『長岡京市埋蔵文化財センター年報』平成2年度(財)長岡京市埋蔵文化財センター

原 秀樹 1992 b 「第二章 長岡京跡左京第275次(7ANMST-6地区)調査概要—長岡京左京六条一坊十町・東三坊々間小路、雲宮遺跡、芝本遺跡—」『長岡京市文化財調査報告書』第29冊 長岡京市教育委員会

- 三好博喜 1985 「長岡京跡左京第115次発掘調査概要(7ANMKK地区)」『京都府遺跡調査概報』第15冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 山本輝雄 1984 「左京第102次(7ANMST-3地区)調査略報」『長岡京市埋蔵文化財センター年報』昭和58年度 (財)長岡京市埋蔵文化財センター
- 山本輝雄 1985 「左京第116次(7ANMKD地区)調査略報」『長岡京市埋蔵文化財センター年報』昭和59年度 (財)長岡京市埋蔵文化財センター
- 山本輝雄 1995 a 「左京第302次(7ANMJN-3地区)調査略報」『長岡京市埋蔵文化財センター年報』平成5年度 (財)長岡京市埋蔵文化財センター
- 山本輝雄 1995 b 「左京第311次(7ANMMO-3地区)・左京第316次(7ANMMO-4地区)・左京第326次(7ANMMO-5地区)調査略報」『長岡京市埋蔵文化財センター年報』平成5年度 (財)長岡京市埋蔵文化財センター

3. 土器

(1)雲宮遺跡の学史上の問題点

- 石野博信 1979 「大和唐古・鍵遺跡とその周辺」『橿原考古学研究所論集』第四集 奈良県立橿原考古学研究所
- 井藤暁子 1983 「近畿」『弥生土器』I (株)ニューサイエンス社
- 今里幾次 1942 「畿内遠賀川式土器の細別に就いて」『古代文化』13—8 (財)古代学協会
- 小林行雄 1932 「吉田土器及び遠賀川土器とその伝播」『考古学』3—5 東京考古学会
- 小林行雄・森本六爾 1939 「弥生式土器聚成図録」正編『東京考古学会学報』1
- 佐原 眞 1967 「山城における弥生文化の成立—畿内第I様式の細別と雲ノ宮遺跡出土土器の占める位置—」『史林』50—5
- 末永雅雄・小林行雄・藤岡謙二郎 1943 「大和唐古弥生式遺跡の研究」京都帝国大学文学部考古学研究報告16
- 杉原莊介・神沢勇一 1961 「大阪府瓜破遺跡」『日本農耕文化の生成』1 本文編
- 田辺昭三・佐原 眞 1966 「弥生文化の発展と地域性—近畿」『日本の考古学』Ⅲ 河出書房
- 寺沢 薫 1981 「前期土坑群と編年問題」『昭和55年度唐古・鍵遺跡第10・11次調査概報』奈良県立橿原考古学研究所
- 直良信夫・小林行雄 1932 「播磨国吉田自然遺跡の研究」『考古学』3—5 東京考古学会
- 豆谷和之 1995 「前期弥生土器出現」『古代』99 早稲田大学考古学会
- 森岡秀人 1989 「業績とその論点」『弥生土器の様式と編年—近畿編I—』木耳社

(2)雲宮遺跡出土土器組成

- 秋山浩三 1986 「河内からもち運ばれた土器」『長岡京古文化論叢』
- 宇野隆夫 1992 「食器計量の意義と方法」『国立歴史民俗博物館研究報告』第40集 p. 215~231 国立歴史民俗博物館
- 都出比呂志 1974 「古墳出現前夜の集団関係」『考古学研究』20—4
- 中川和哉 1993 「算用土遺跡発掘調査概要(I K-16)」『京都府遺跡調査概報』第53冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 西口陽一・上西美佐子他 1984 『山賀(その3)』(財)大阪文化財センター
- 深澤芳樹 1985 「土器のかたち—畿内第I様式古・中段階について—」『紀要』I (財)東大阪市文化財

協会

(3)壺形土器

注1 木葉紋の分類は深澤の分類(深澤1989)による。

注2 大開遺跡SD411から1点出土している(前田1993)。

秋山浩三 1992 「弥生前期土器—遠賀川式土器の地域色と吉備—」『吉備の考古学的研究』 山陽新聞社
出版局

石神幸子・神内暢子他 1991 『河内平野遺跡群の動態Ⅱ 近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財調査報告書 北遺跡群 旧石器・縄文・弥生時代前期編』 (財)大阪文化財センター

井藤暁子 1982～1983 「近畿」『入門講座「弥生土器」』考古学ジャーナル195、202、205、207、219 ニュー・サイエンス社

伊東照雄他 1981 『綾羅木郷遺跡発掘調査報告』第1集 下関市教育委員会

岡崎正雄他 1985 「丁・柳ヶ瀬遺跡発掘調査報告書」『兵庫県文化財調査報告書』第30冊 兵庫県文化協会

奥井哲秀他 1981 『東奈良発掘調査概報Ⅱ』 東奈良遺跡調査会

国分政子 1991 「第3節 北遺跡群出土の弥生前期・赤彩紋土器について」『河内平野遺跡群の動態Ⅱ』

佐原 眞 1967 「山城における弥生式文化の成立—畿内第Ⅰ様式の細別と雲ノ宮遺跡出土土器の占める位置—」『史林』50-5 史学研究会

佐原 眞 1968 「畿内地方」『弥生式土器集成』本編2

佐原 眞 1979 「畿内弥生土器から見た西・東の弥生土器」『高地性集落の研究』資料編

白川成明 1990 「左京第212次調査略報」『長岡京市埋蔵文化財センター年報』昭和63年度 (財)長岡京市埋蔵文化財センター

末永雅雄・小林行雄・藤岡謙次郎 1943 「大和唐古弥生遺蹟の研究」『京都帝国大学文学部考古学研究報告』第16冊

田畑直彦 1997 「畿内第Ⅰ様式古・中段階の再検討」『仮称立命館大学考古学論集』Ⅰ 掲載予定

戸原和人 1985 「長岡京跡左京第18次(7ANMTD地区)調査概要—左京六条二坊七町・雲宮遺跡—」『長岡京市文化財調査報告書第14冊』 長岡京市教育委員会・長岡京跡発掘調査研究所

中村五郎 1988 『弥生文化の曙光』

西口陽一・上西美佐子・中西靖人他 1984 『山賀 近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(その3)』 (財)大阪文化財センター

乗安和二三 1995 「山口県東部地域弥生時代中期土器の編年」『第98回山口考古学談話会発表資料』

乗安和二三 1996 「山口県の前期弥生土器」『山口考古学談話会百回記念大会 西部瀬戸内の弥生文化～前期弥生土器の諸相～』

信里芳紀 1996 「東奈良遺跡貝殻施紋土器の占める位置」『YAY!』 弥生土器を語る会

広瀬和雄・石神幸子他 『亀井(その2)』 (財)大阪文化財センター

深澤芳樹 1989 「木葉紋と流水紋」『考古学研究』第36巻第3号

藤田三郎 1986 「昭和59年度唐古・鍵遺跡第20次発掘調査概要」『田原本町埋蔵文化財調査概要3』 田原本町教育委員会

前田佳久他 1993 『大開遺跡発掘調査報告書』 神戸市教育委員会・(財)神戸市スポーツ教育公社

三好孝一 1996 「東大阪市若江北遺跡の弥生時代集落」『大阪府下埋蔵文化財研究会』(第34回)資料

村尾政人・田代 弘 1986 「太田遺跡」『京都府遺跡調査報告書』第6冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研

究センター

森田克行 1990 「摂津地域」『弥生土器の様式と編年—近畿編Ⅱ—』 木耳社

山中 章・長谷川浩一・國下多美樹・亀割 均・中井 均・松崎俊郎・清水みき・伊辻忠司・橋本清一
1983 「長岡京跡左京第82次(7ANEIS地区)～左京二条三坊一町、鶏冠井遺跡第2次～発掘調査概要」『向日市埋蔵文化財調査報告書』第10集 向日市教育委員会

若林邦彦 1992 「弥生土器櫛描文様に関する覚書—その発生をどのように考えればよいのか—」『大阪文化財研究』20周年記念増刊号 (財)大阪文化財センター

渡辺昌宏・井藤暁子他 1985 『美園』 (財)大阪文化財センター

(5)鉢形土器

注1 鉢形土器の分類が甕以外全般を指して用いられることが多い。型式学的分類がなにを基準としているかが不明である。ある時は火にかけられているかどうかなどといった機能差を用い、またあるときは調整から検討していく手法が用いられる。同じ分類レベルでは同一の基準が必要とされ、それぞれに固有な特徴はより下位の分類で用いるのが妥当と考えられるが、今回は通念的に用いられている分類に従った。

(7)他地域の影響を示す土器

秋山浩三 1989 「第3章 地域間交流Ⅰ 河内系土器について」『京都府弥生土器集成』 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

伊野近富・石井清司他 1988 「平安京左京北辺三坊五町発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第27冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

岩崎 誠 1980 「(仮)古市保健所建設にともなう発掘調査概要 長岡京左京第17次調査(7ANMMT地区)」『長岡京市文化財調査報告書』第5冊 長岡京市教育委員会

小田桐 淳 1993 「第91324次調査」『長岡京市埋蔵文化財センター年報』平成3年度 (財)長岡京市埋蔵文化財センター

高橋美久二 1974 「内膳町遺跡発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概要(1974)』 京都府教育委員会

田畑直彦 1996 「畿内第Ⅰ様式古・中段階の再検討」『仮称立命館大学考古学論集』Ⅰ掲載予定

都出比呂志 1989 「弥生土器の地域色」『日本農耕社会の成立過程』 岩波書店

前田義明・磯部 勝 1990 「下鳥羽遺跡」『平成元年度京都市埋蔵文化財発掘調査概要』 (財)京都市埋蔵文化財研究所

片岡宏二 1990 「日本出土の朝鮮系無文土器」『古代朝鮮と日本』 名著出版

片岡宏二 1993 「朝鮮系無文土器の弥生土器化とその社会」『MESEUM』NO.503 東京国立博物館

片岡宏二 1993 「近畿地方朝鮮系無文土器研究の現状と課題」『韓式系土器研究Ⅳ』 韓式土器研究会

田代 弘 1985 「畿内周辺部における朝鮮系無文土器の新例」『同志社大学考古学シリーズⅡ 考古学と移動・移住』森浩一編

家根祥多 1982 「縄文土器」『長原遺跡発掘調査報告書』Ⅱ (財)大阪市文化財協会

中村健二 1990 「近江・山城の凸帯文後半期の土器について」『滋賀文化財だより』No.144 (財)滋賀県文化財保護協会

村尾政人・田代 弘 1986 「太田遺跡」『京都府遺跡調査報告書』第6冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

秋山浩三 1992 「弥生前期土器—遠賀川式土器の地域色と吉備—」『吉備の考古学的研究』 山陽新聞社出版局

上村和直・久世康博 1987 「平安京左京六条二坊」『昭和59年度京都市埋蔵文化財調査概要』 (財)京都市埋蔵文化財研究所

(財)京都市埋蔵文化財研究所編 1986 『平安京跡発掘資料選(二)』主要遺物概説 土器・陶磁器 弥生時代

戸原和人 1985 「長岡京跡左京第18次(7ANMTD地区)調査概要—左京六条二坊七町・雲宮遺跡—」『長岡京市文化財調査報告書』第14冊 長岡京市教育委員会・長岡京跡発掘調査研究所

山中 章・長谷川浩一・國下多美樹・亀割 均・中井 均・松崎俊郎・清水みき・伊辻忠司・橋本清一
1983 「長岡京跡左京第82次(7ANEIS地区)～左京二条三坊一町、鶏冠井遺跡第2次～発掘調査概要」『向日市埋蔵文化財調査報告書』第10集 向日市教育委員会

注1 福岡県小郡市教育委員会、片岡宏二にこの土器の実測図と写真をみていただいた。無紋土器といわれる土器には無紋土器そのものの他に、弥生土器に同化する過程で様々なタイプのものが出現するが、地域によって異っており、畿内においてもそれは明らかではない。今回出土の土器は断定はできないが、現段階では可能性を持つものとして抽出しておく方がよいとのご教示をいただいた。

(8)雲宮遺跡群における前期・中期初頭の動態

岩崎 誠 1980 「(仮)古市保育所建設にともなう発掘調査概要 長岡京跡左京第17次調査(7ANMTT地区)」『長岡京市文化財調査報告書』第5集 長岡京市教育委員会

岩崎 誠 1989 『長岡京市埋蔵文化財調査報告書』第4集 長岡京市埋蔵文化財センター

岩崎 誠 1994 「弥生時代 雲宮遺跡」『長岡京市史』資料編1

佐原 眞 1967 「山城における弥生文化の成立—畿内第I様式の細別と雲ノ宮遺跡出土土器の占める位置—」『史林』50—5

白川成明・原 秀樹・岩崎 誠 1983 「長岡京跡右京第39次(7ANQMK地区)調査概報」『長岡京文化財調査報告』第11冊 長岡京市教育委員会

白川成明 1990 「長岡京跡左京第212次(7ANMYB地区)調査略報」『長岡京市埋蔵文化財センター年報』昭和63年度 長岡京市埋蔵文化財センター

中川和哉 1994 「長岡京跡右京第368・395次下植野工区①A地区」『京都府遺跡調査概報』第57冊 京都府埋蔵文化財調査研究センター

4. 石器

阿部朝衛 1983 「バイポーラーテクニックの技術的有効性について」『考古学論叢』 東出版寧楽社

小林博昭 1973 「バイポーラーテクニックについて—実験的方法からの研究—」『考古学ジャーナル』78
ニュー・サイエンス社

田代 弘 1986 「第2節 石器」『京都府遺跡調査報告書』第6冊—太田遺跡— (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

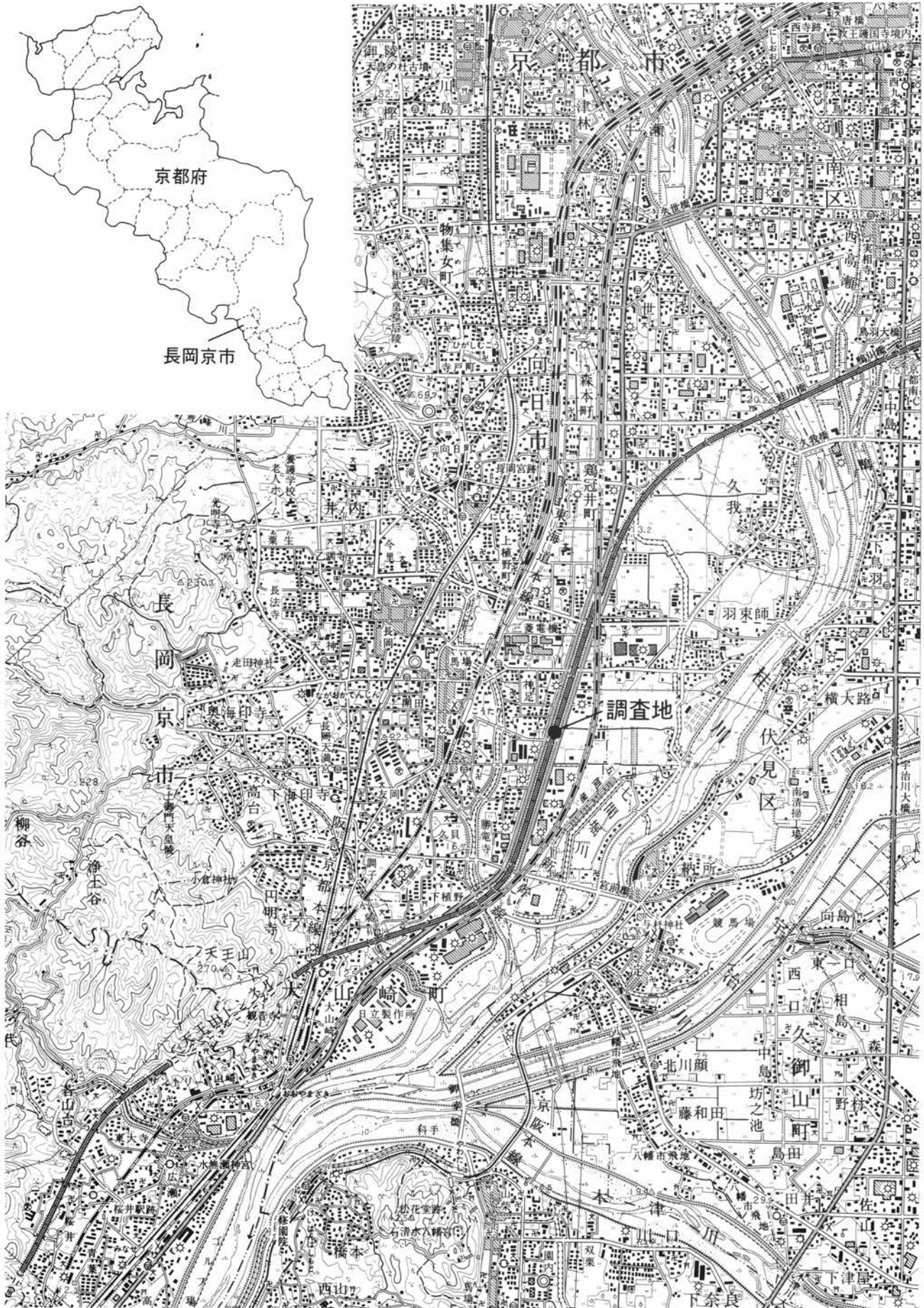
平井 勝 1991 『弥生時代の石器』 ニュー・サイエンス社

松沢亜生 1981 「瀬戸内技法について—サヌカイトの割れ—」『旧石器遺跡をめぐる諸問題』 帝塚山大学考古学研究室

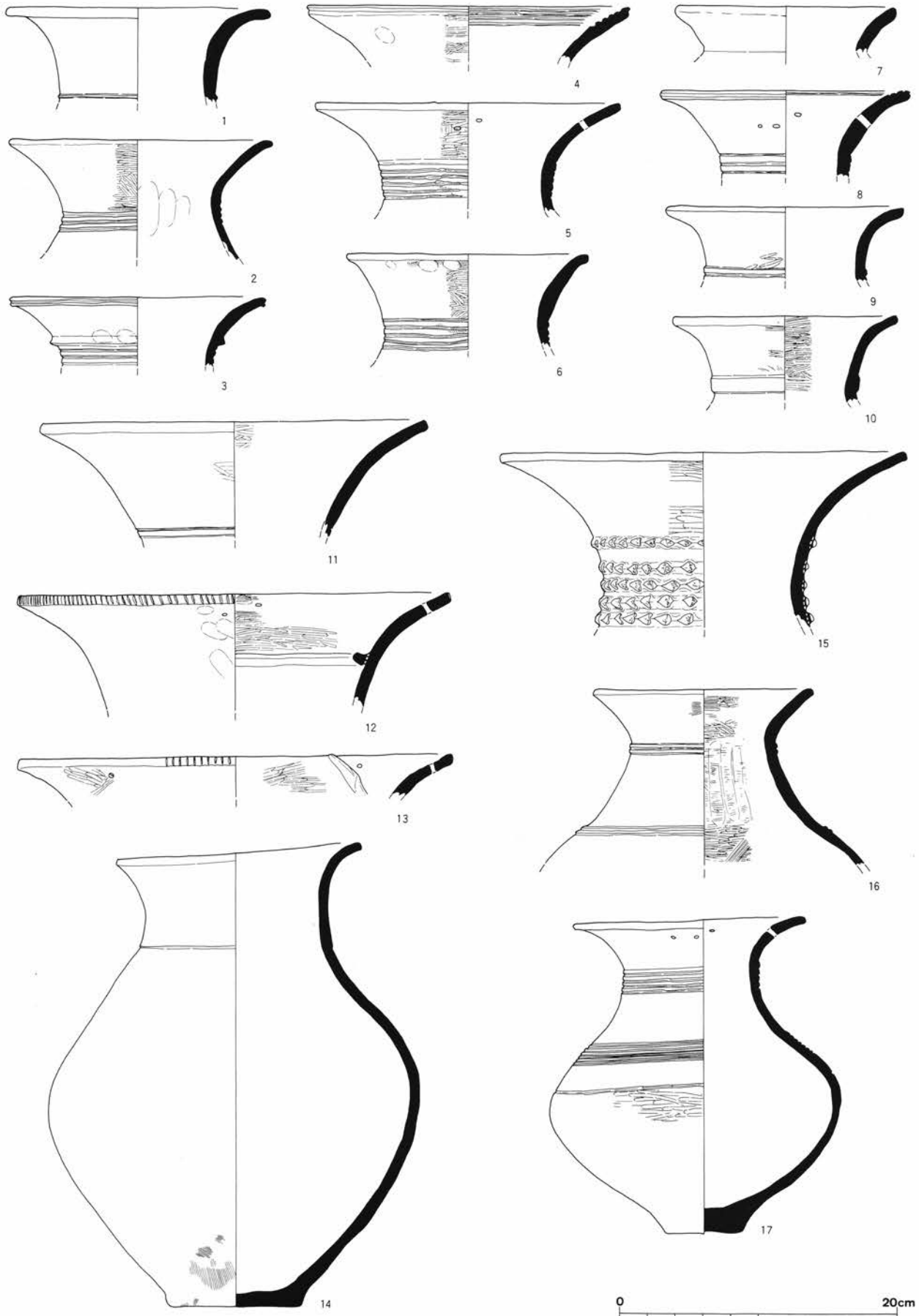
山中一郎 1994 『石器研究のダイナミズム—ボルドー型式学の革新のために—』 大阪文化研究会

圖

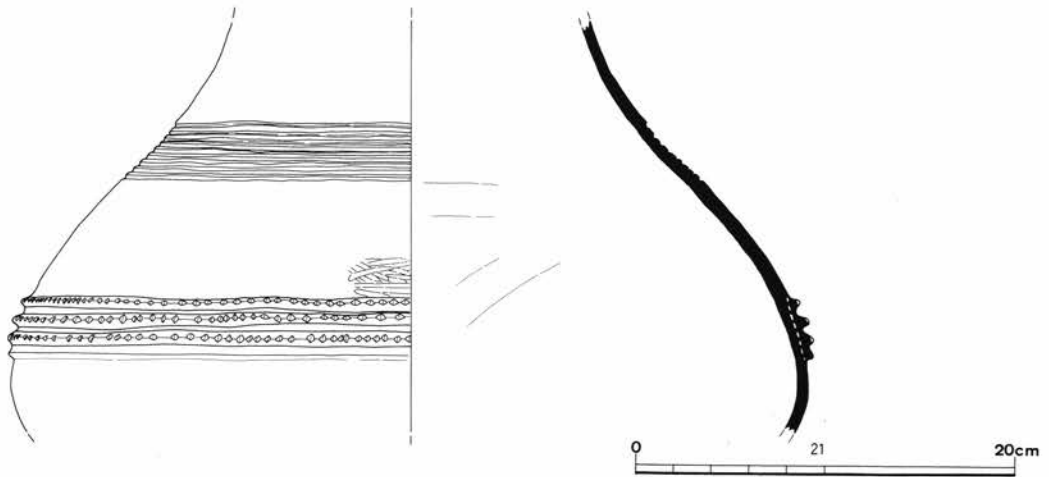
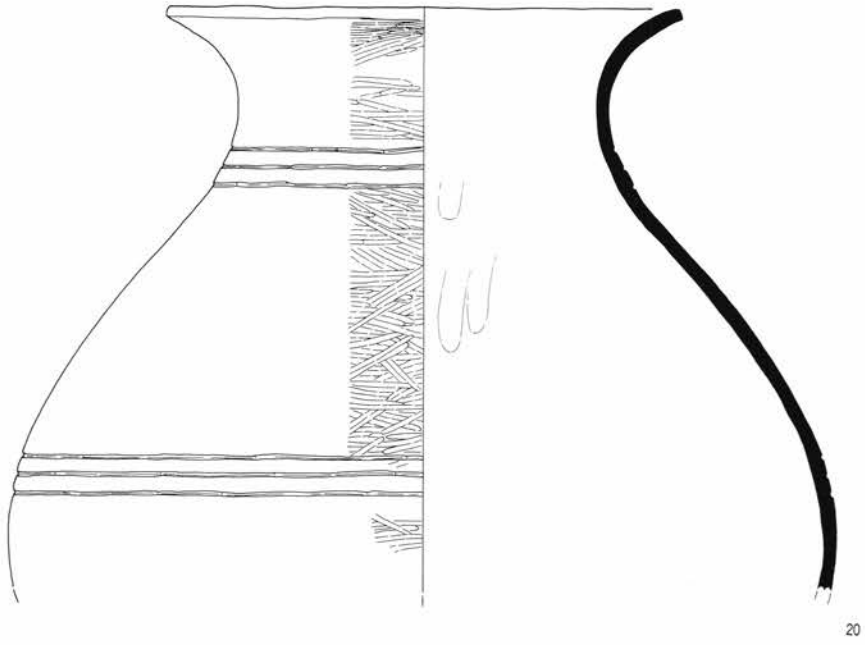
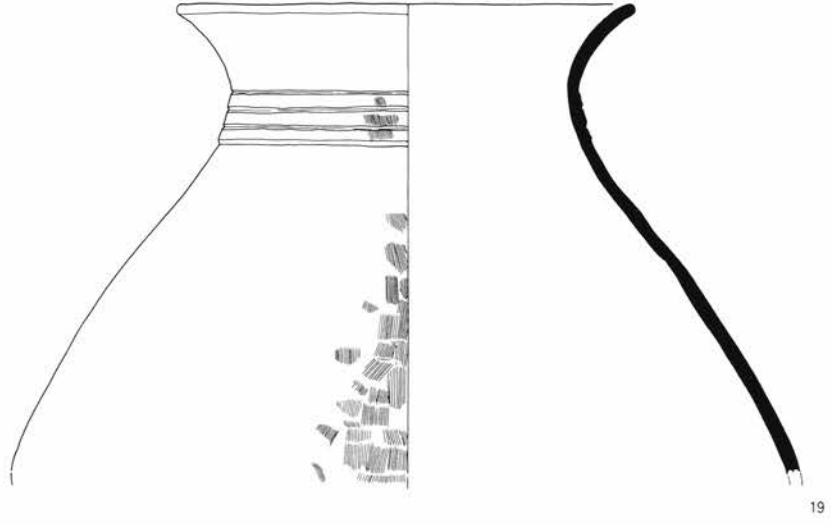
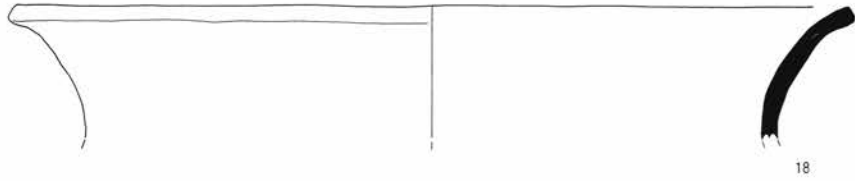
版



調査地位置図(1/50,000)

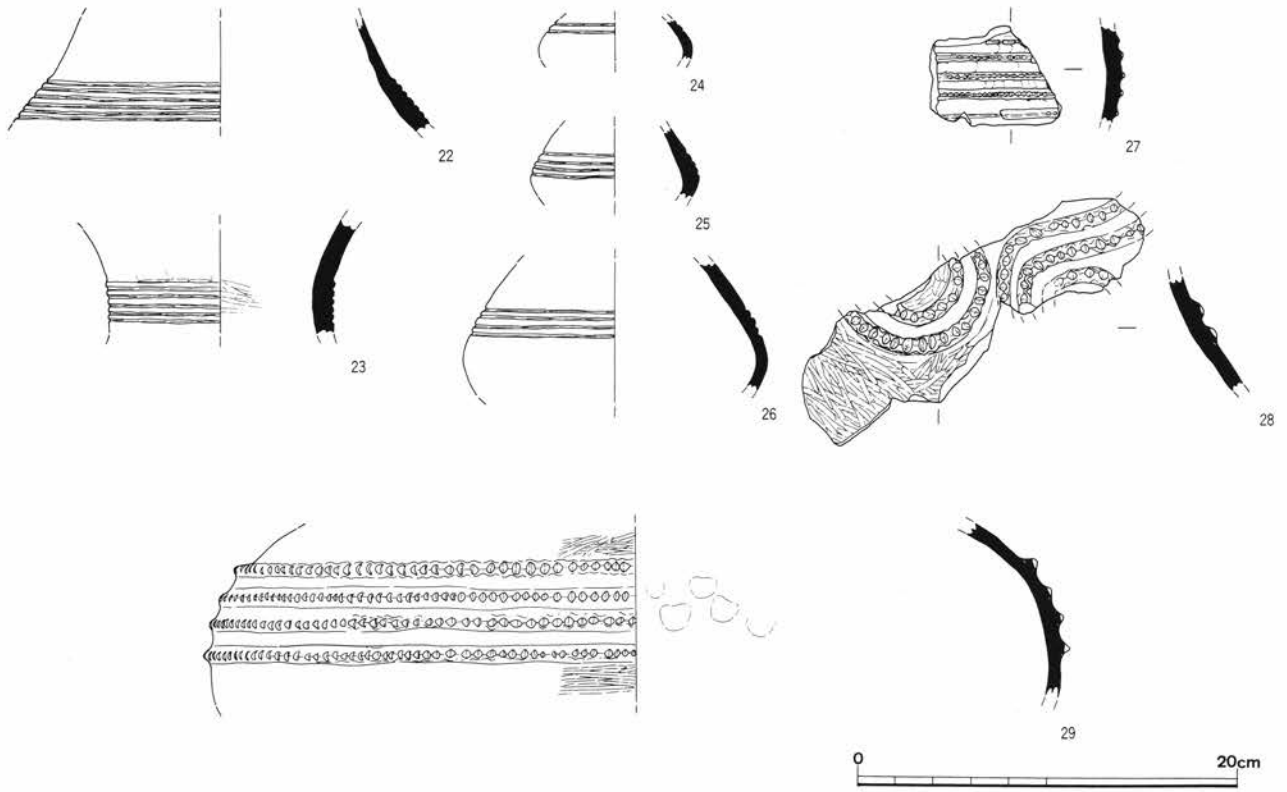


S X 76第 1 層出土壺形土器(1)

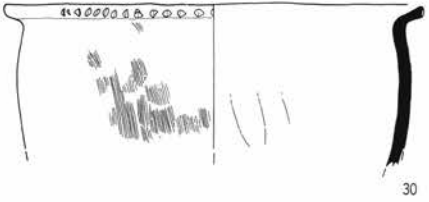


S X 76第 1 層出土壺形土器(2)

图版第四



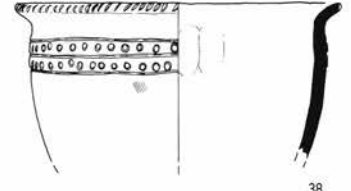
S X 76第 1 層出土壺形土器(3)



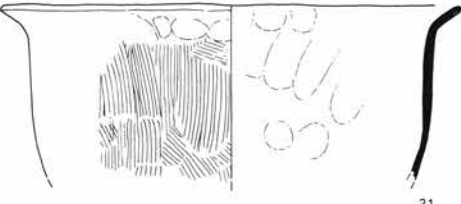
30



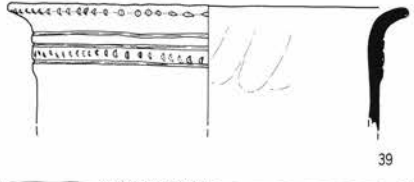
37



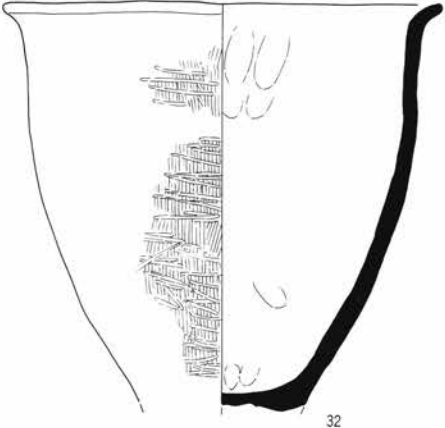
38



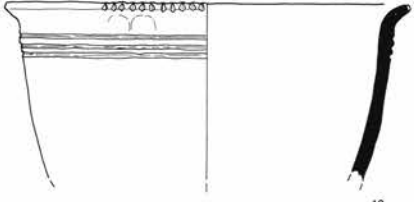
31



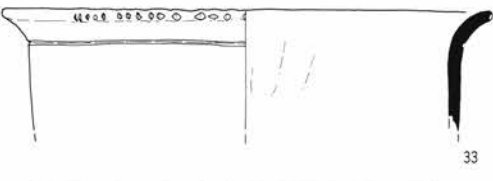
39



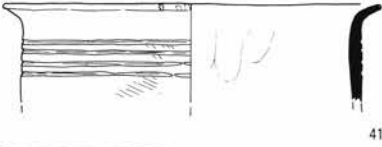
32



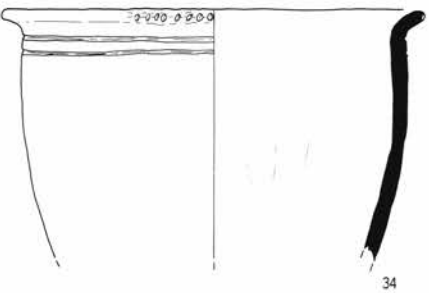
40



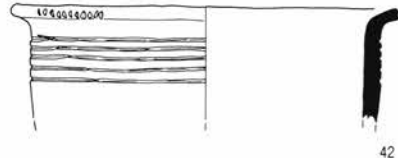
33



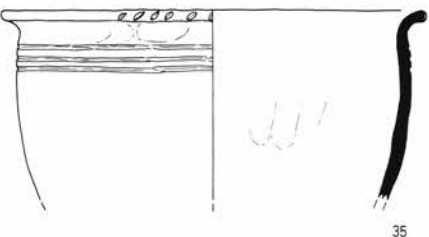
41



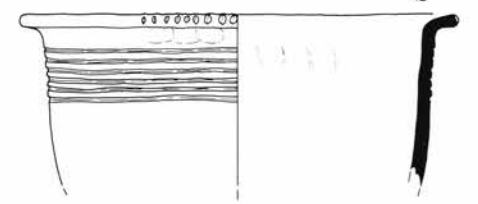
34



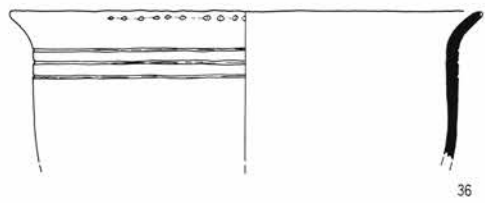
42



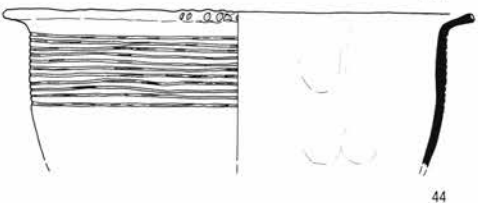
35



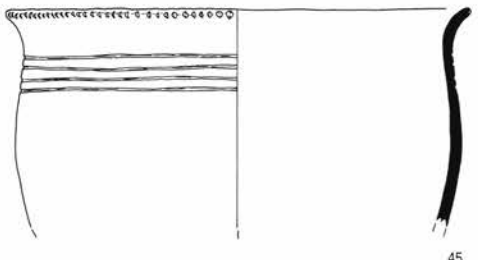
43



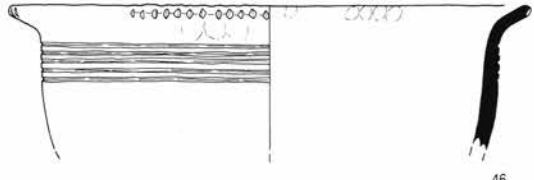
36



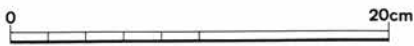
44



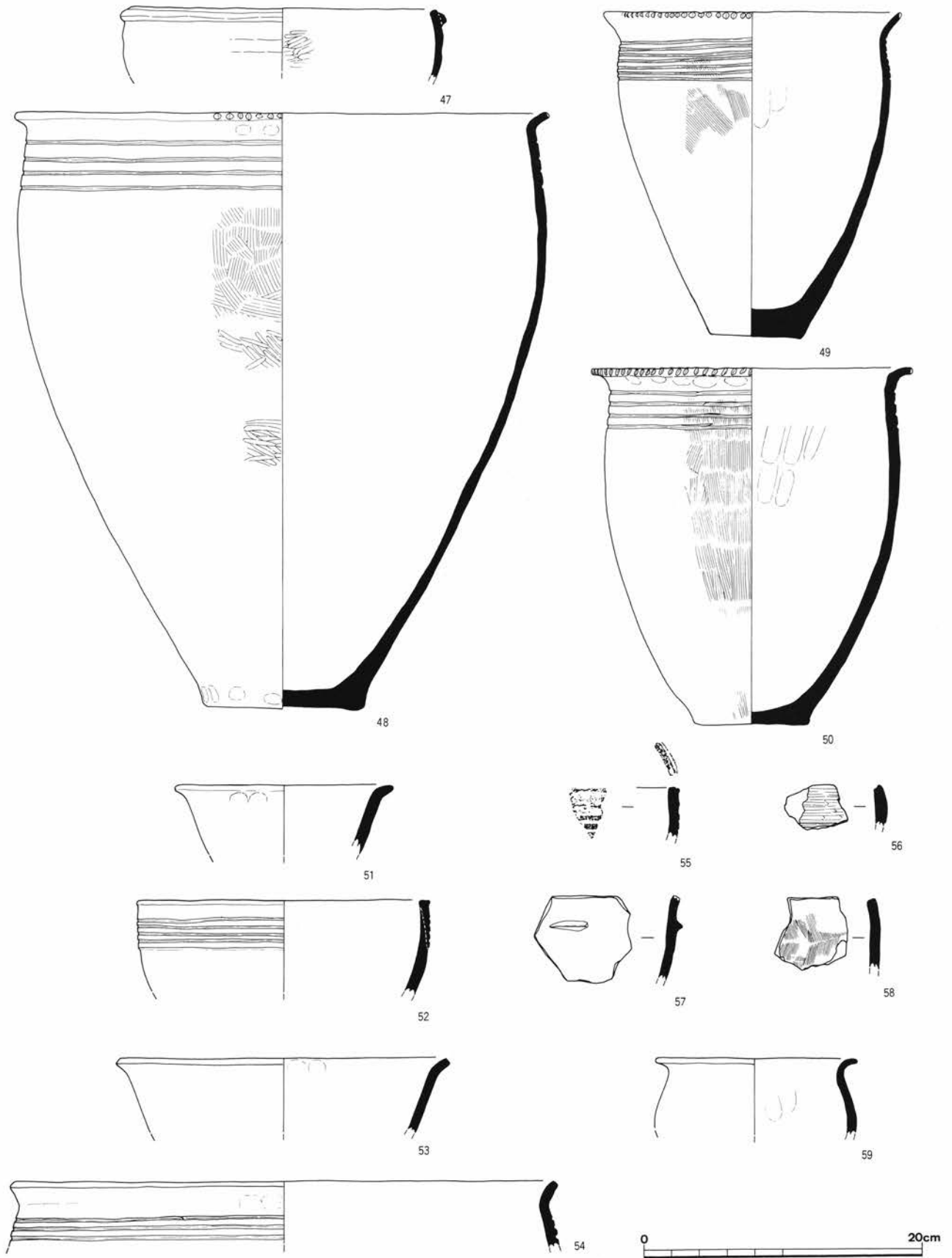
45



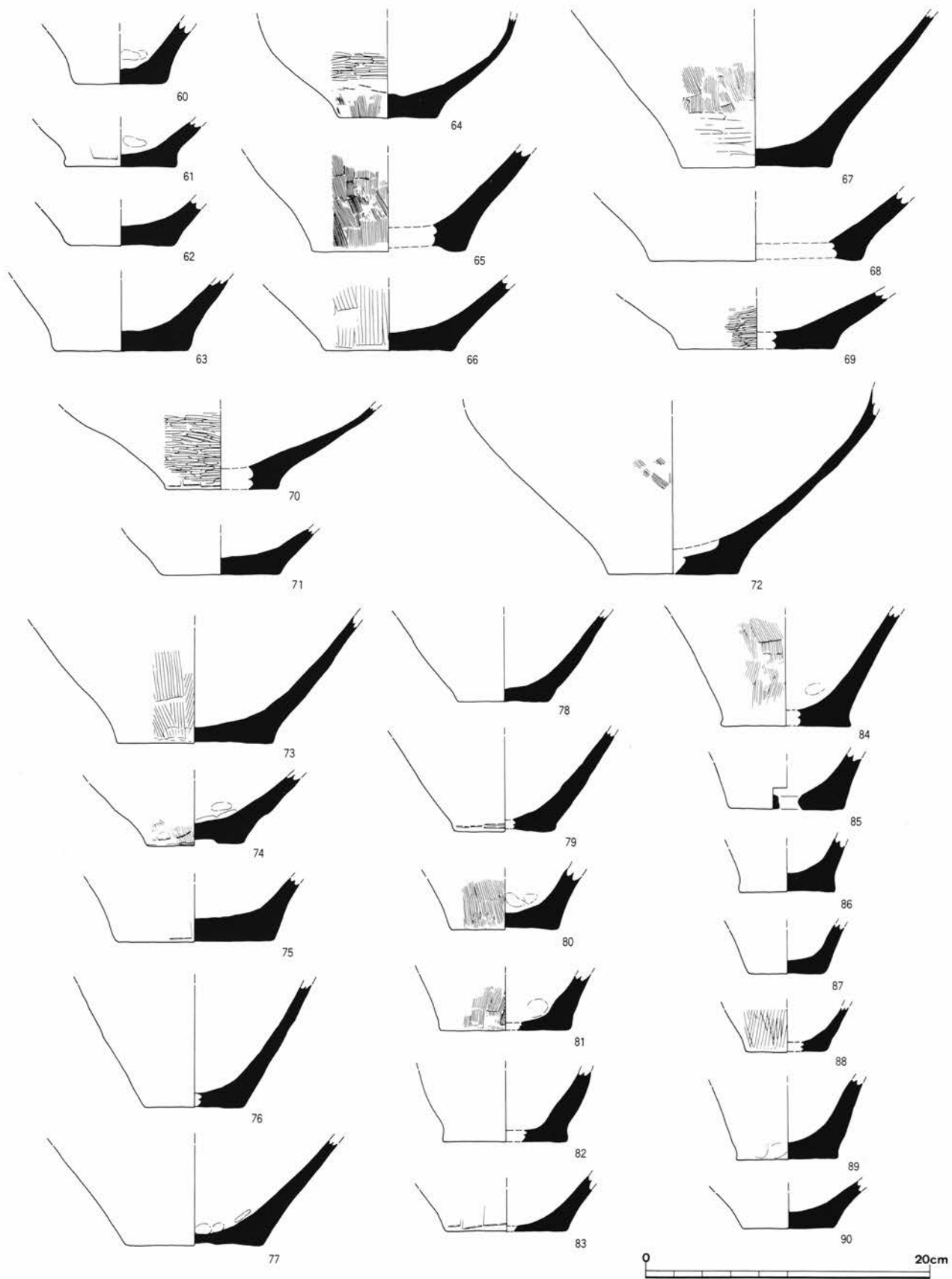
46



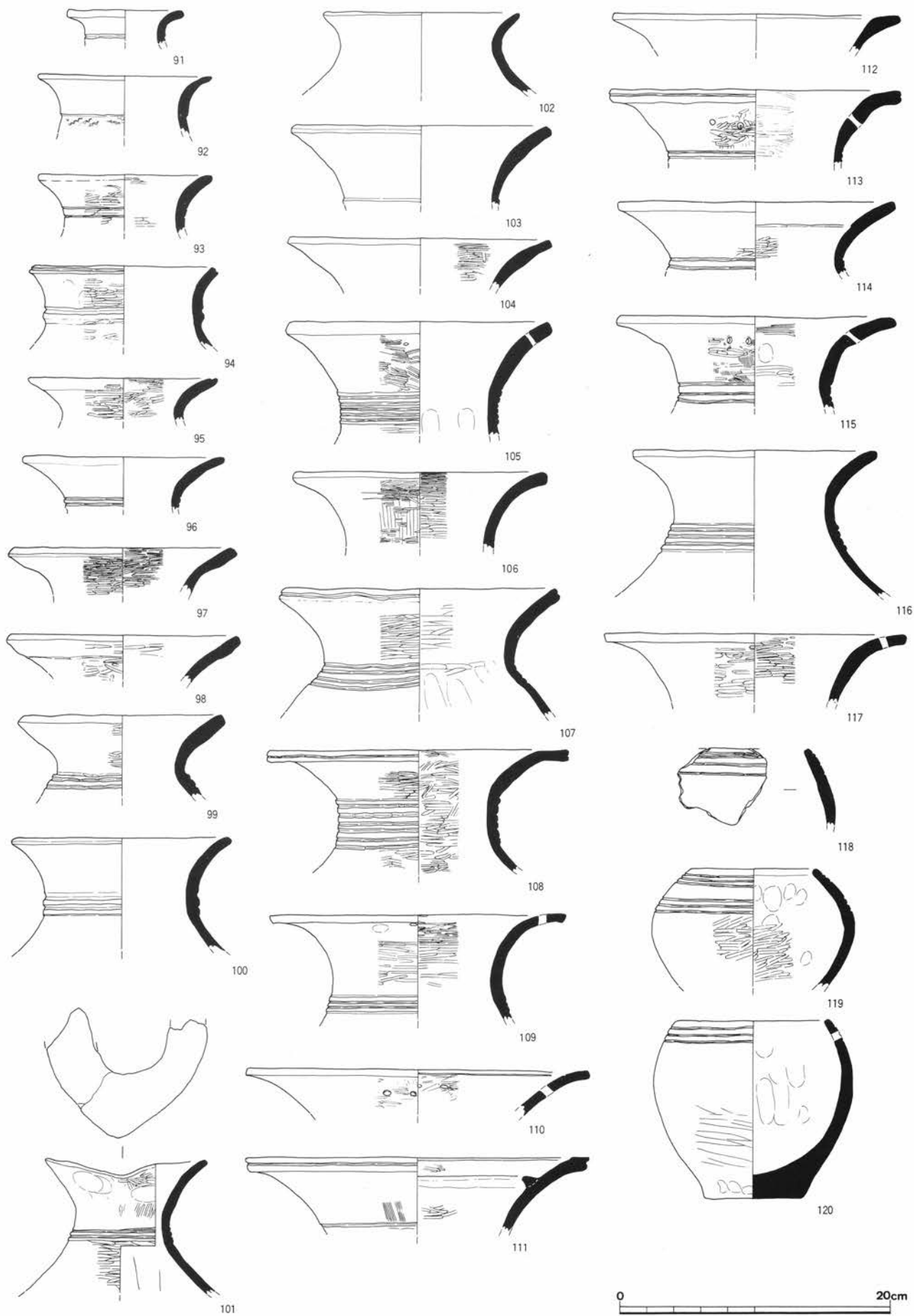
S X 76第 1 層出土甕形土器



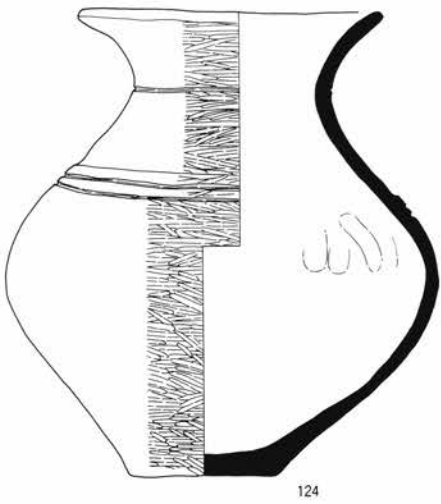
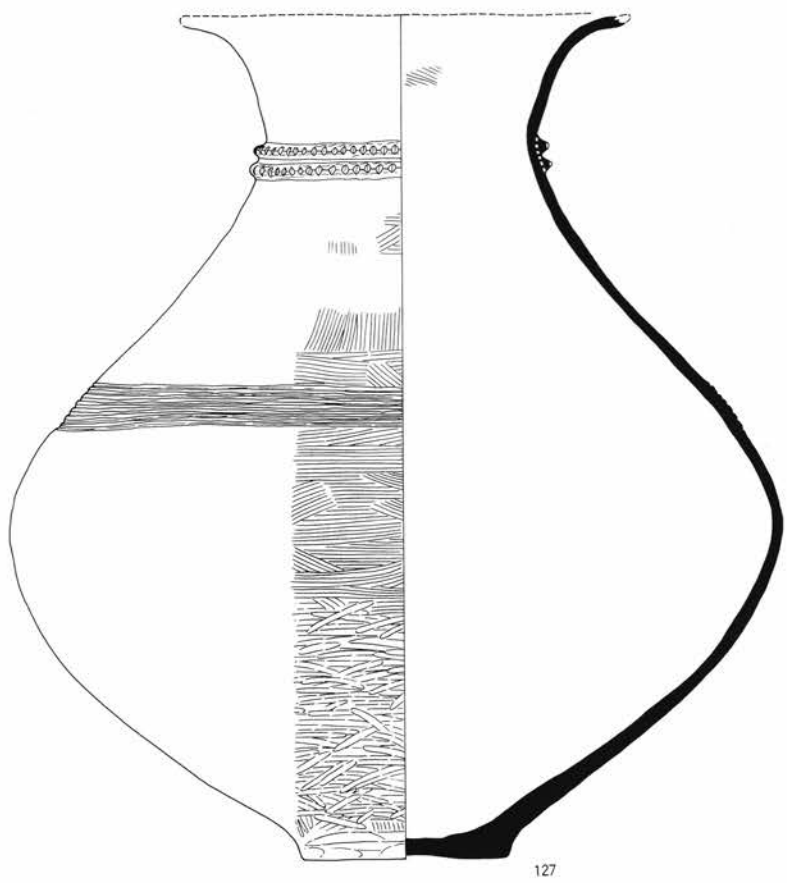
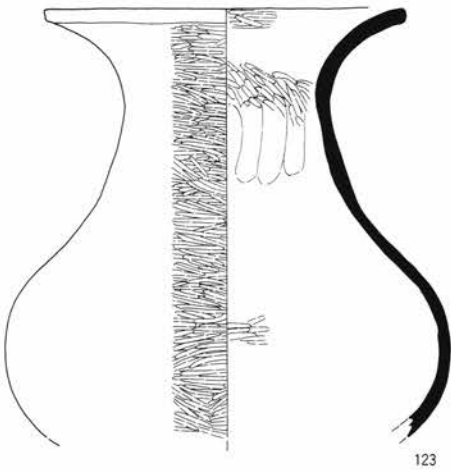
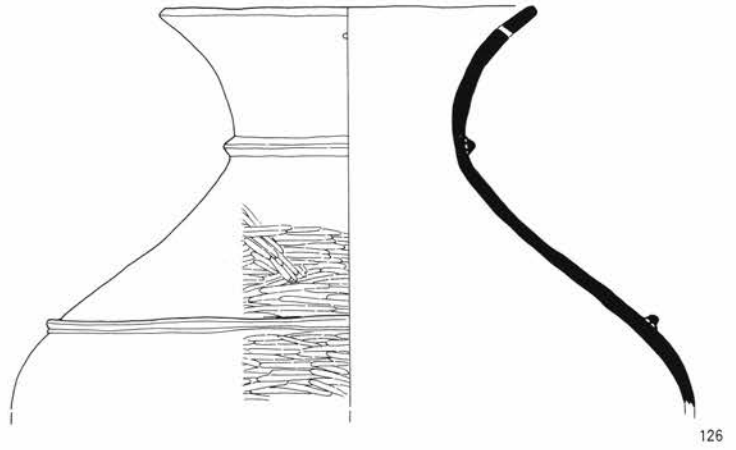
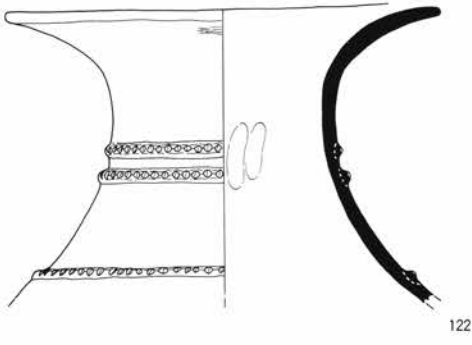
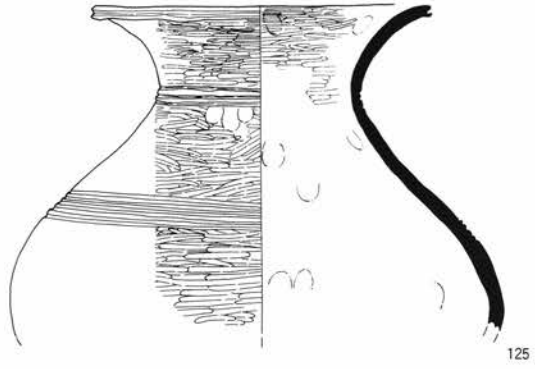
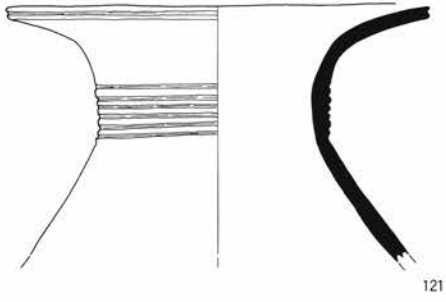
S X 76第1層出土甗形土器・鉢形土器



S X 76第 1 層出土土器底部

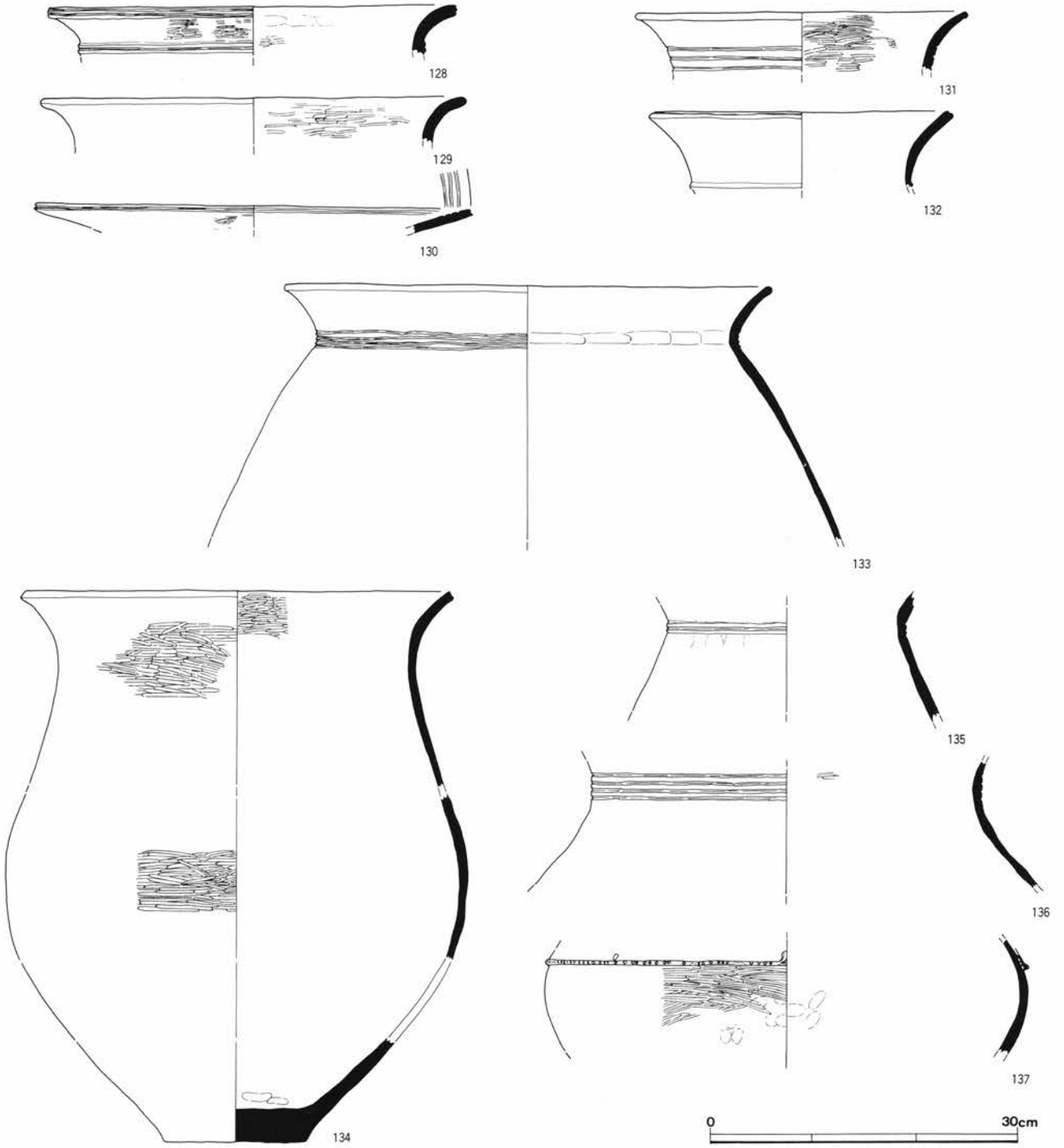


S X 76第 2 層出土壺形土器(1)

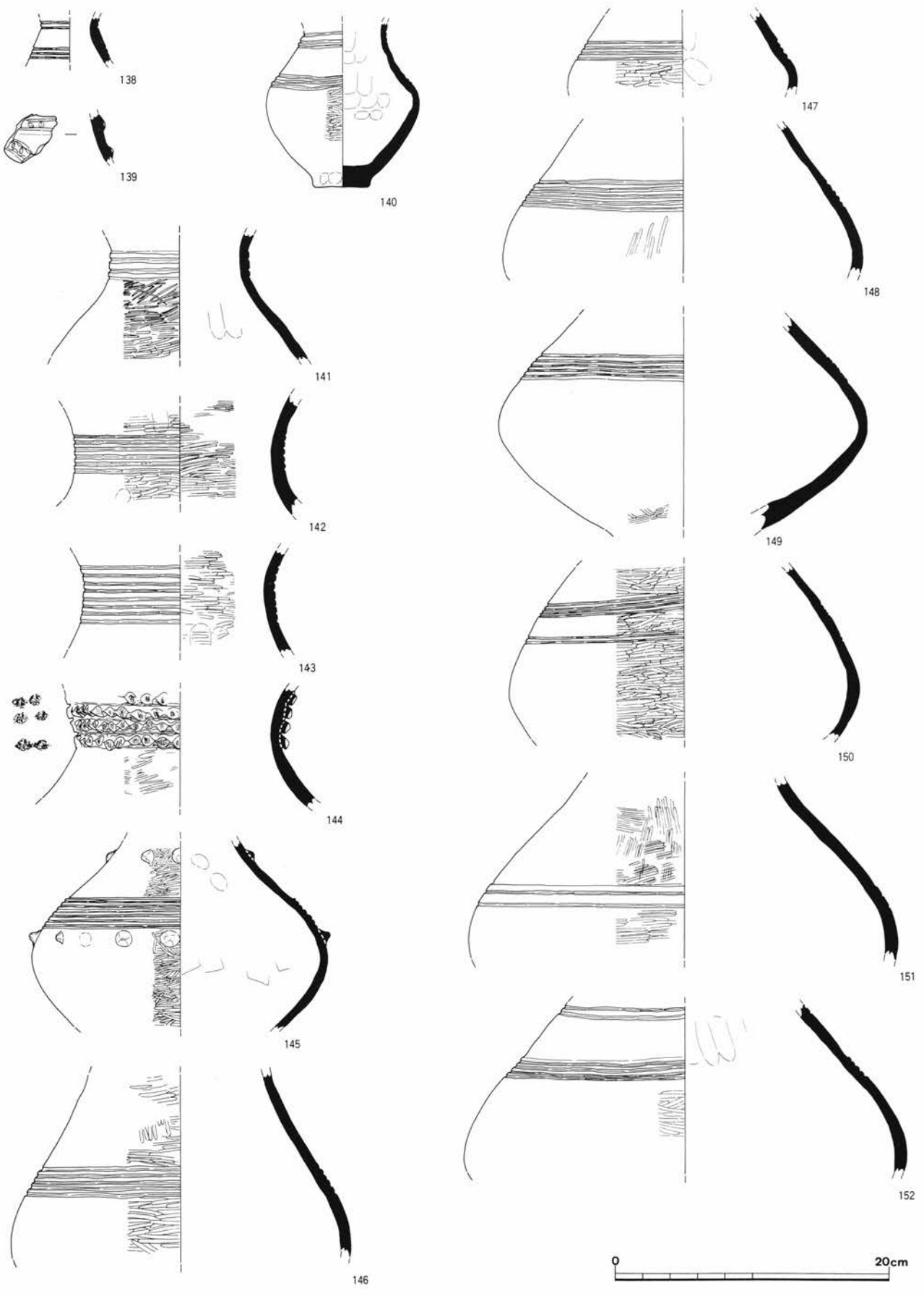


S X 76第 2 層出土壺形土器(2)

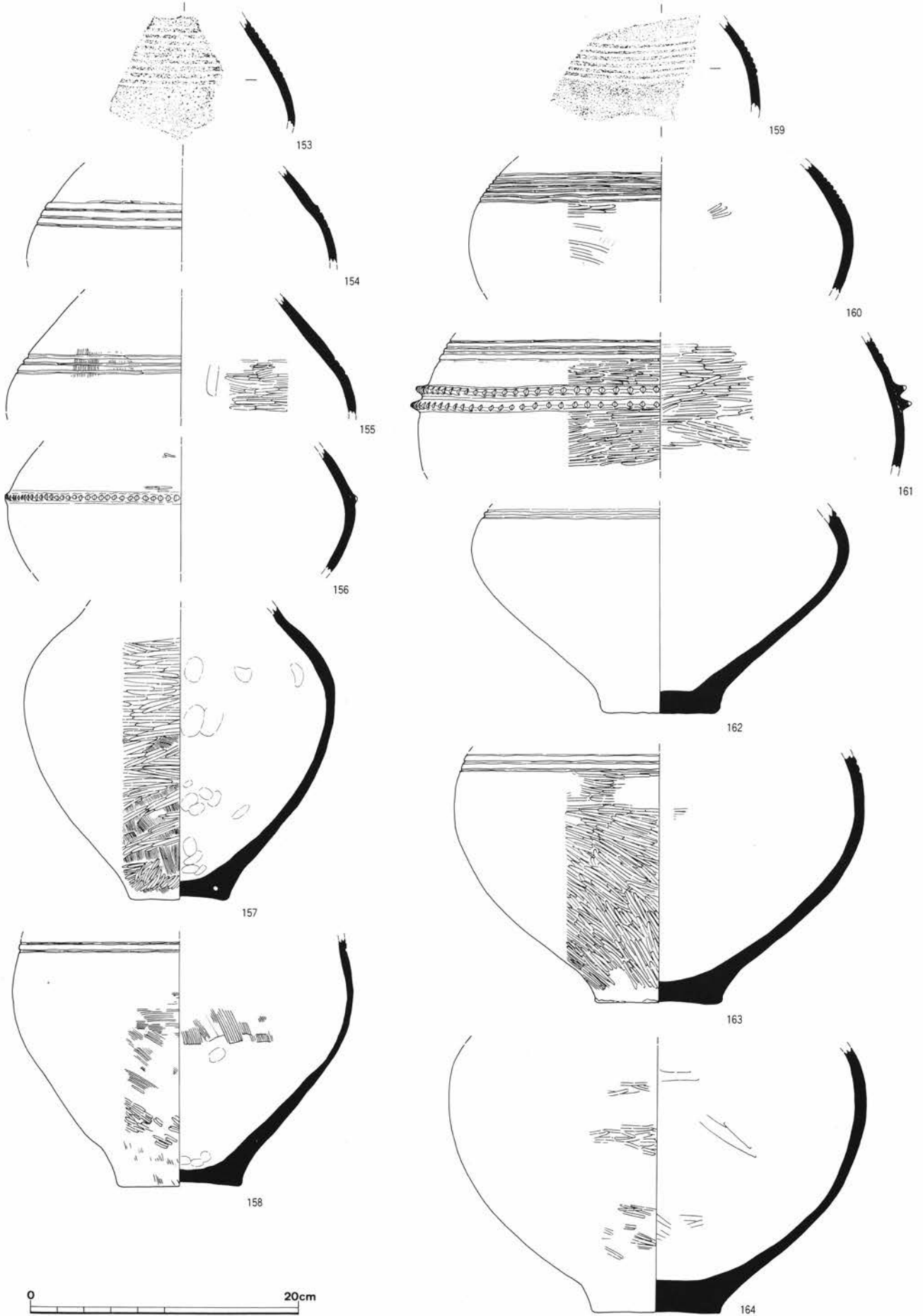
圖版第一〇



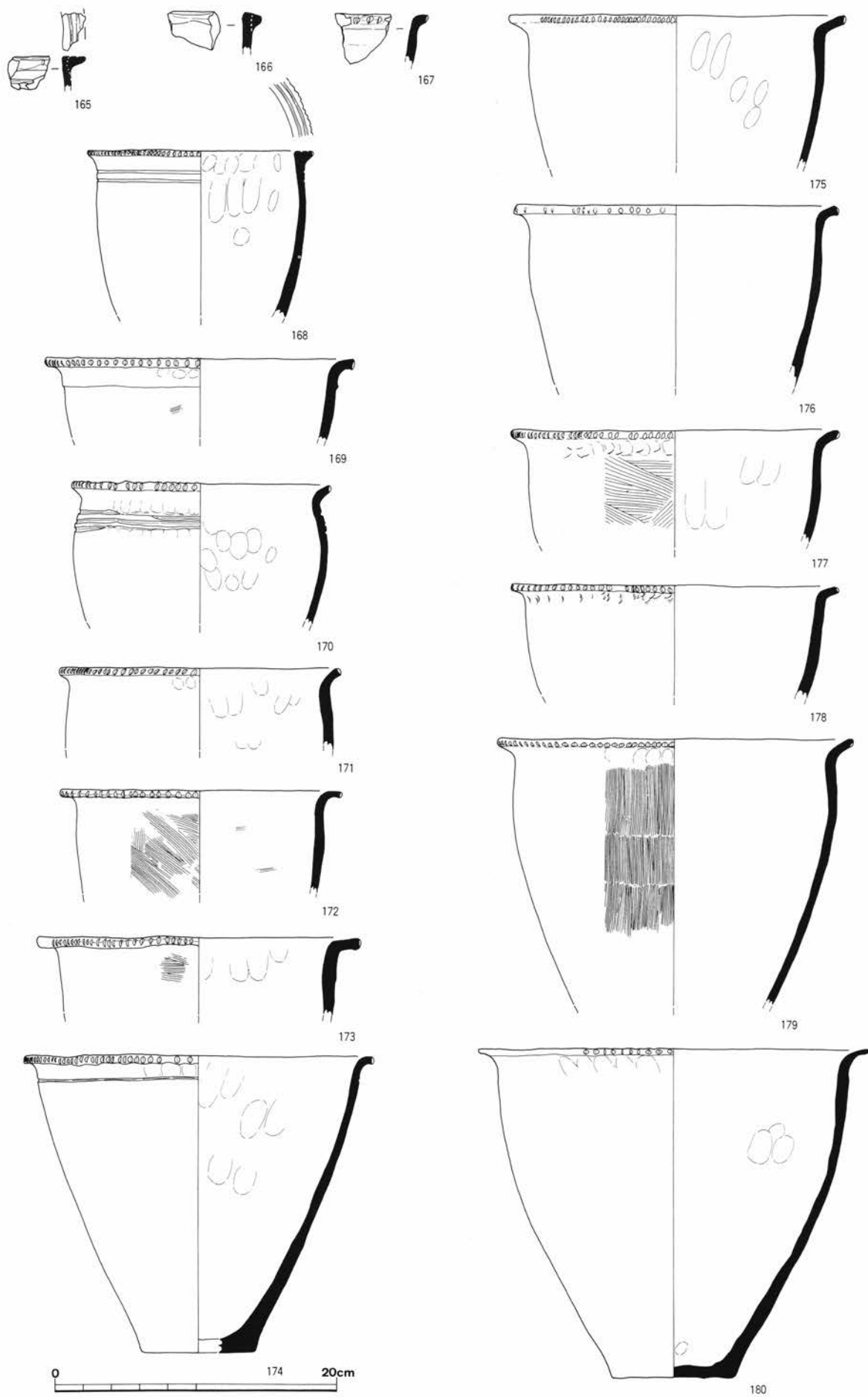
S X76第2層出土壺形土器(3)



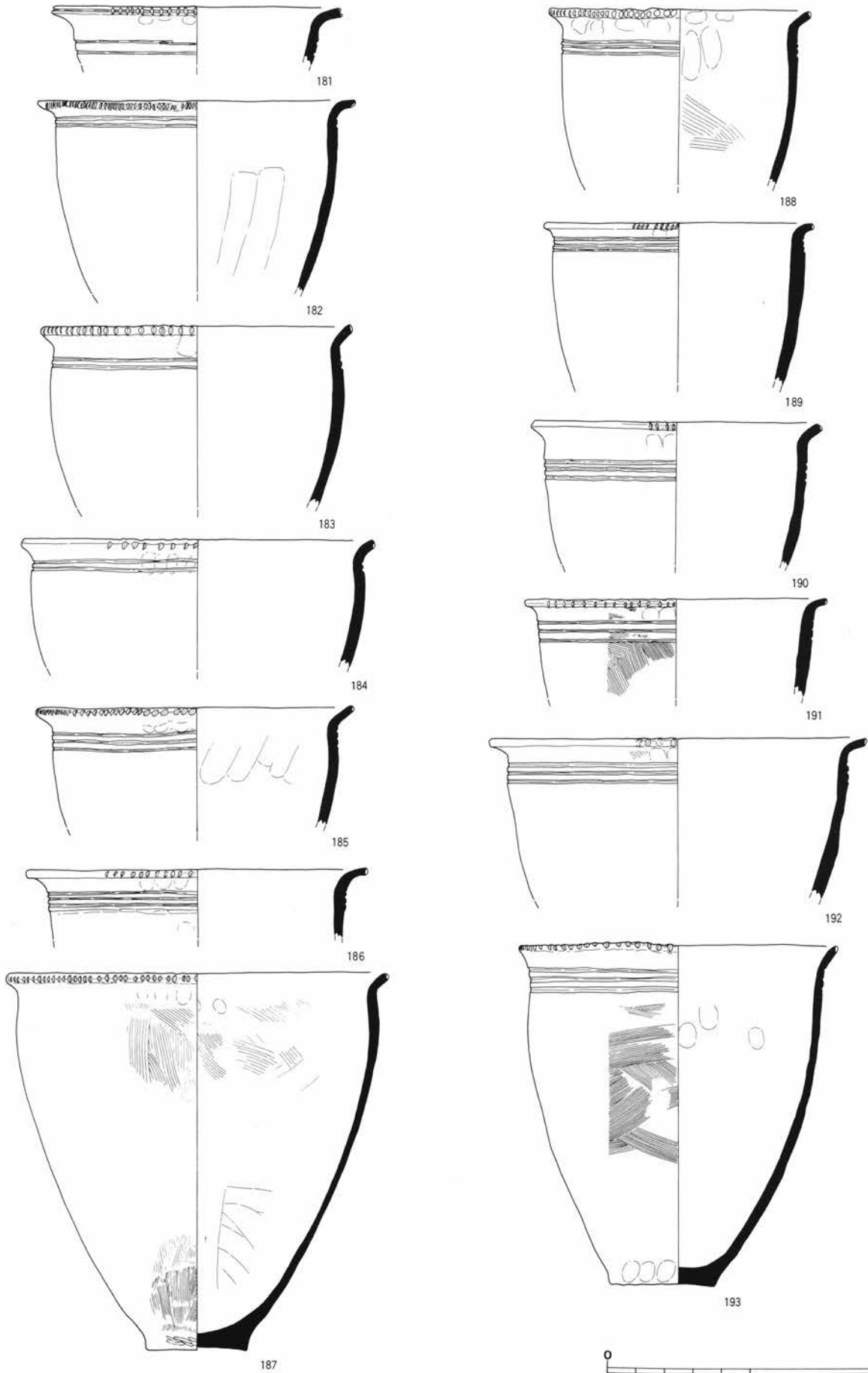
S X 76第 2 層出土壺形土器(4)



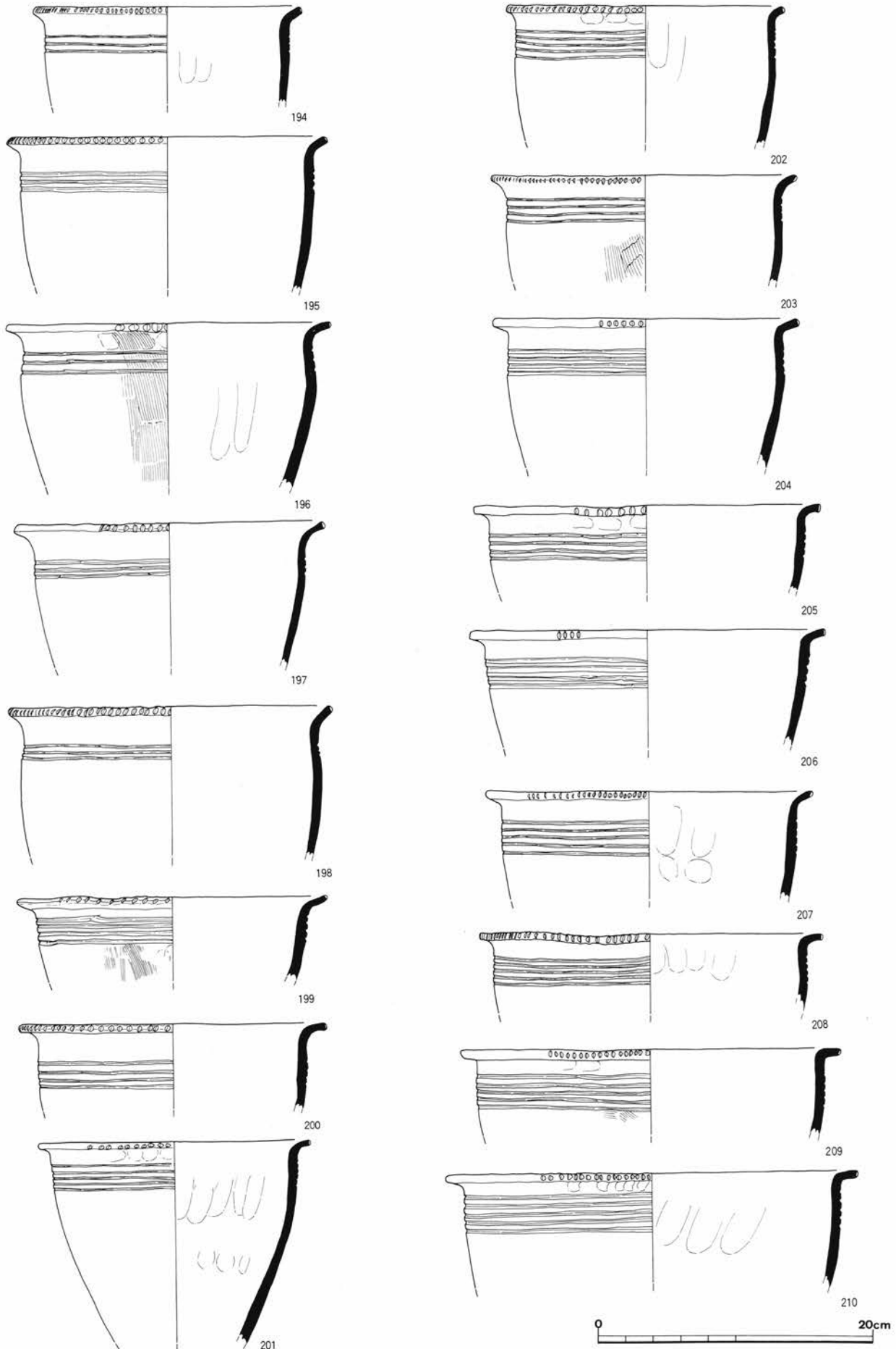
S X 76第 2 層出土壺形土器(5)



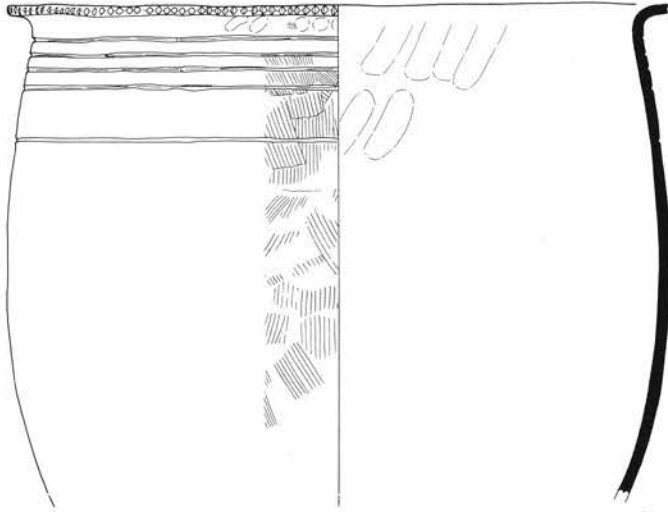
S X 76第 2 層出土甕形土器(1)



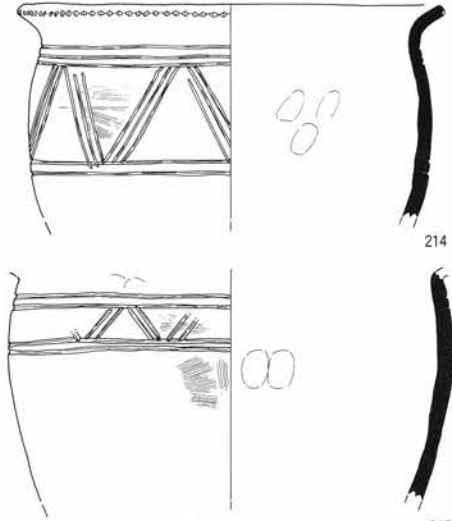
S X 76第 2 層出土甕形土器(2)



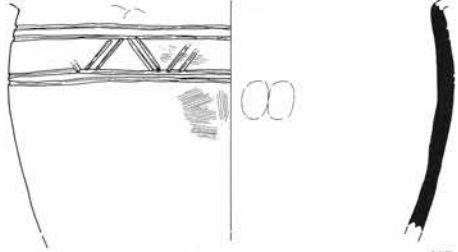
S X 76第 2 層出土甗形土器(3)



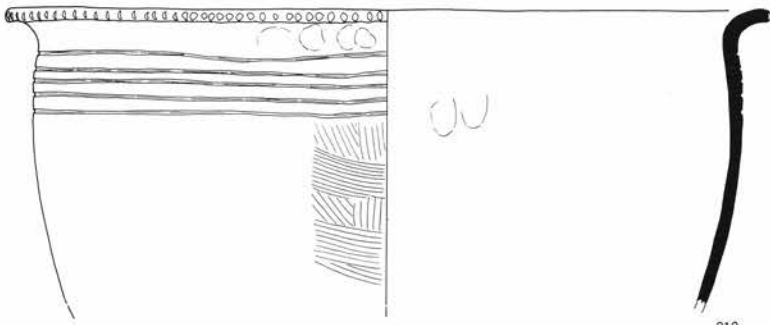
211



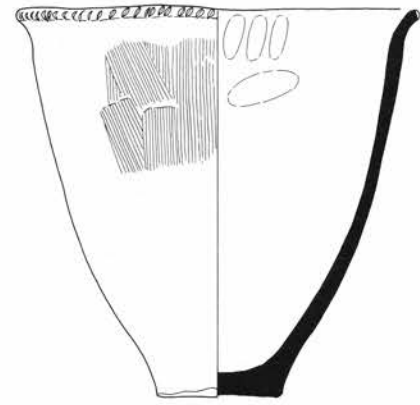
214



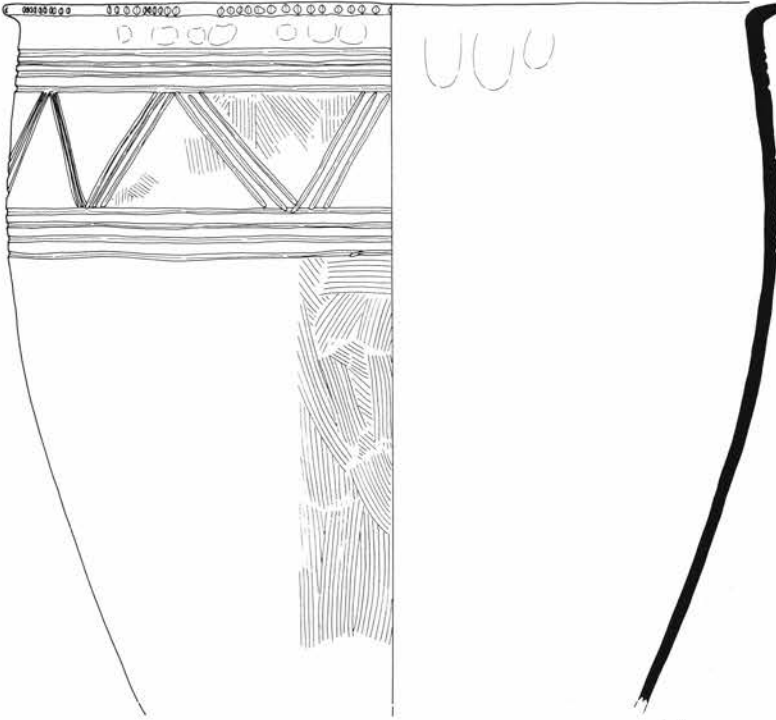
215



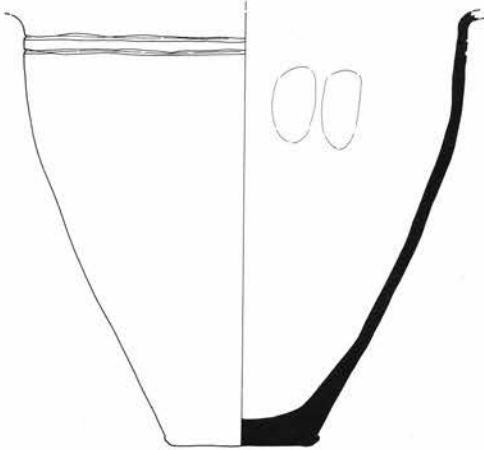
212



216



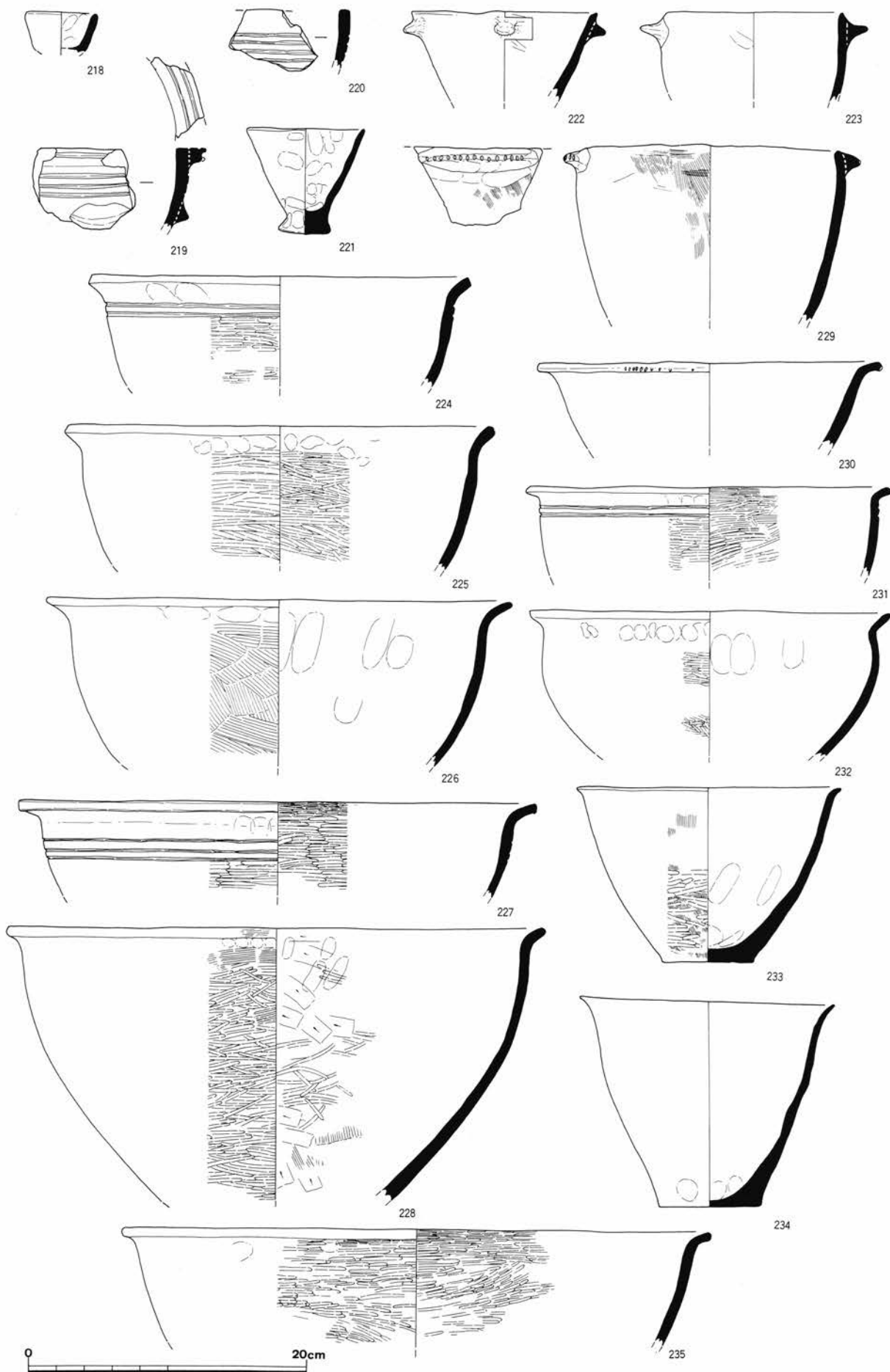
213



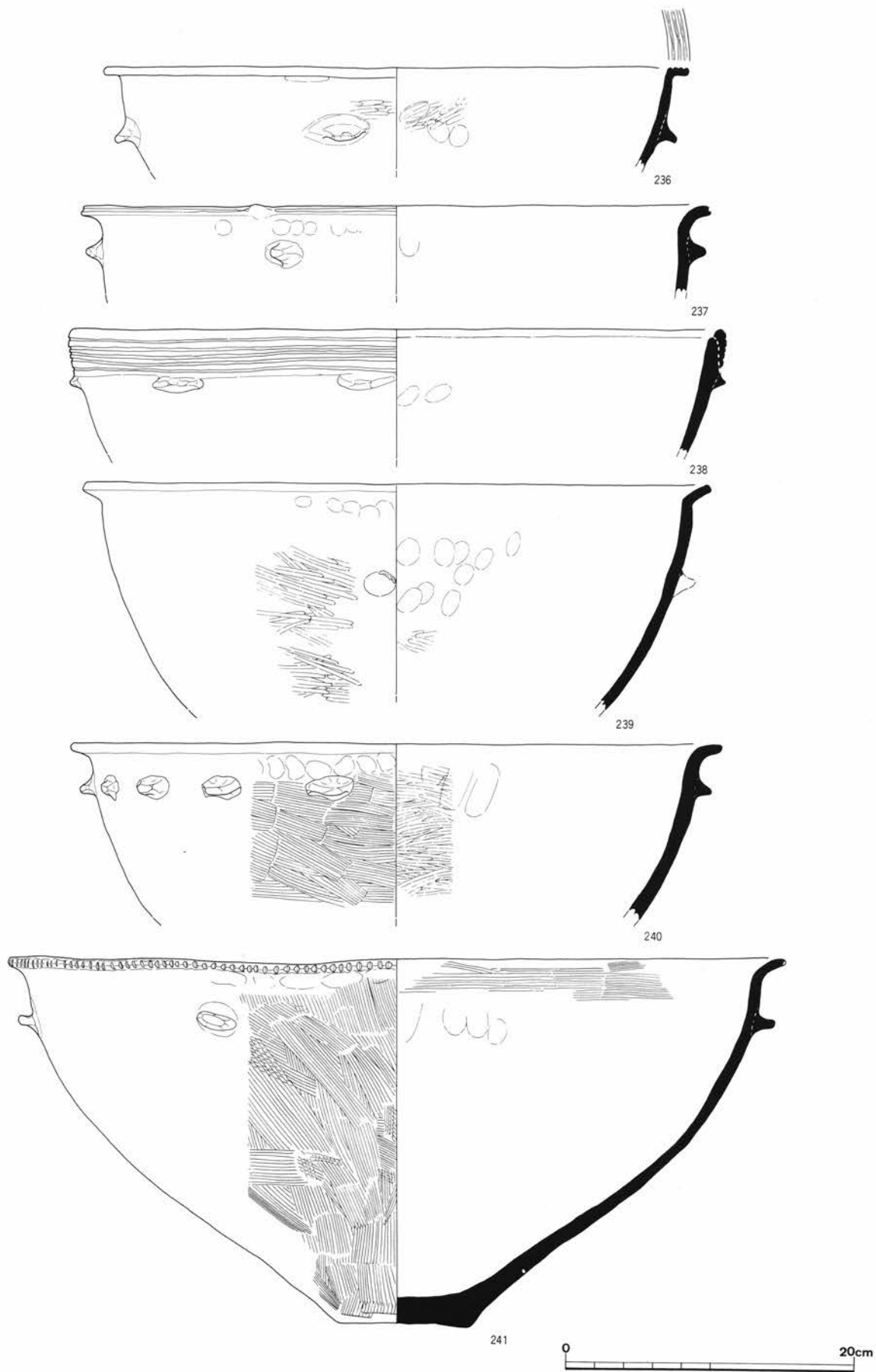
217



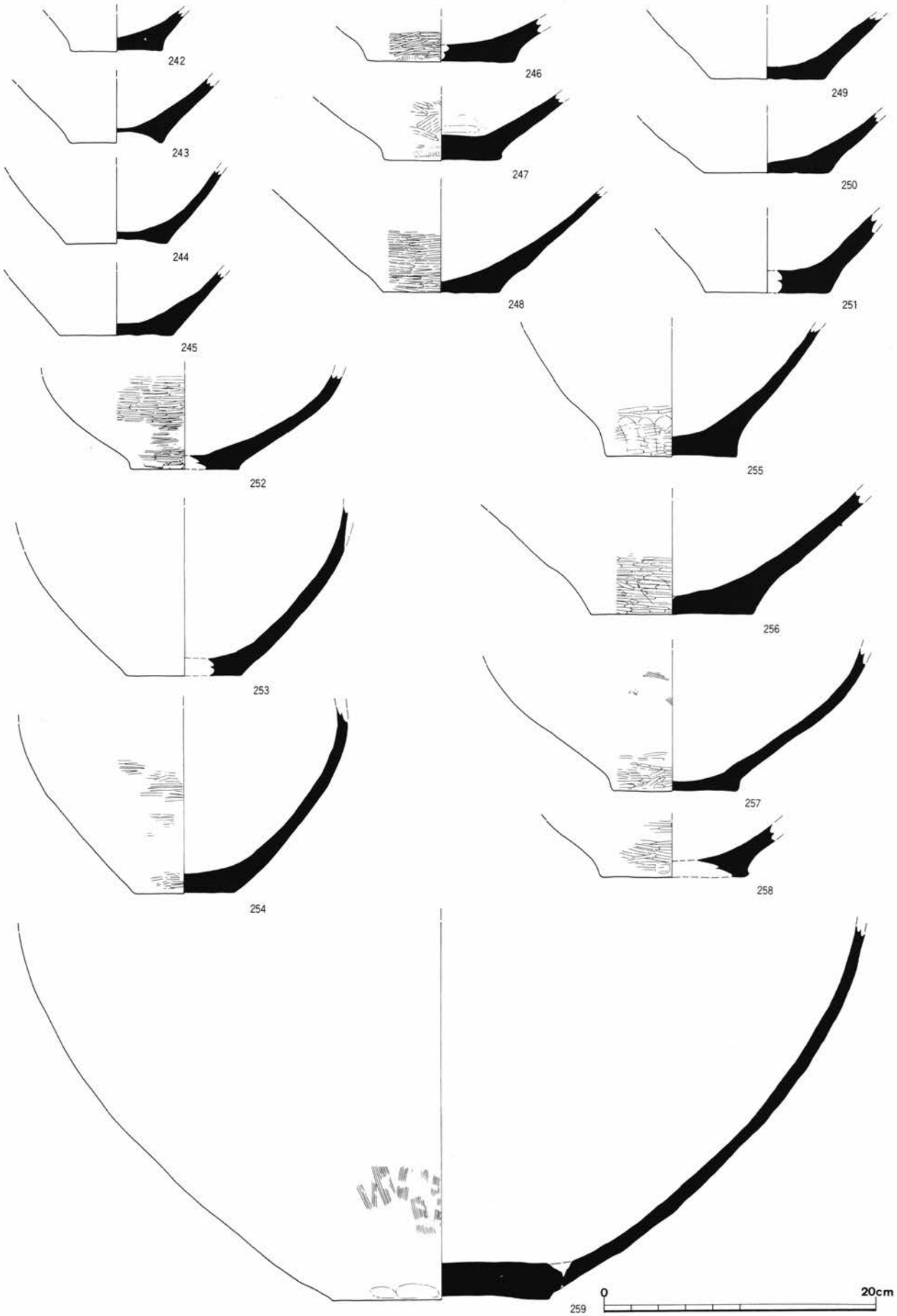
S X 76第 2 層出土甗形土器(4)



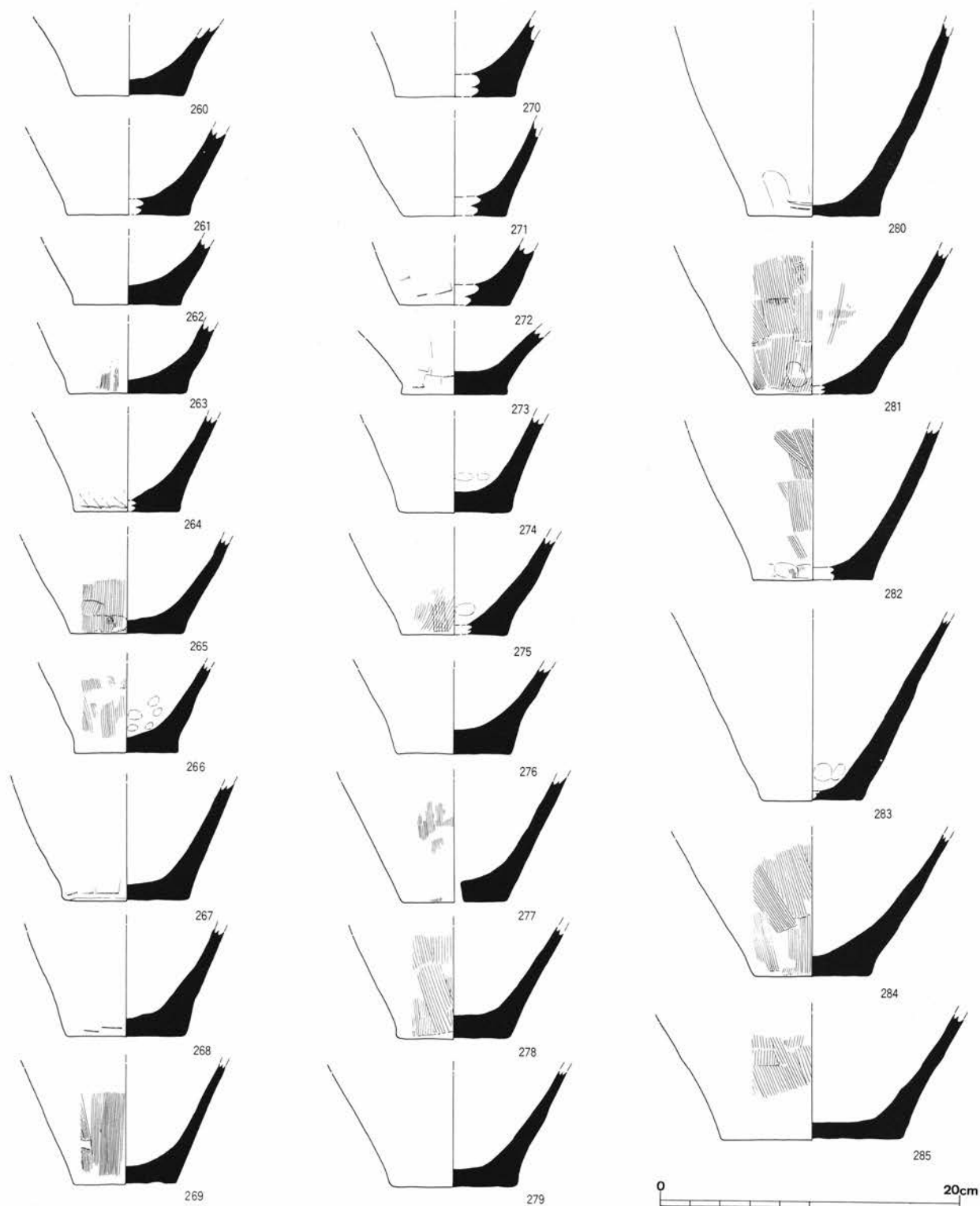
S X 76第 2 層出土鉢形土器(1)



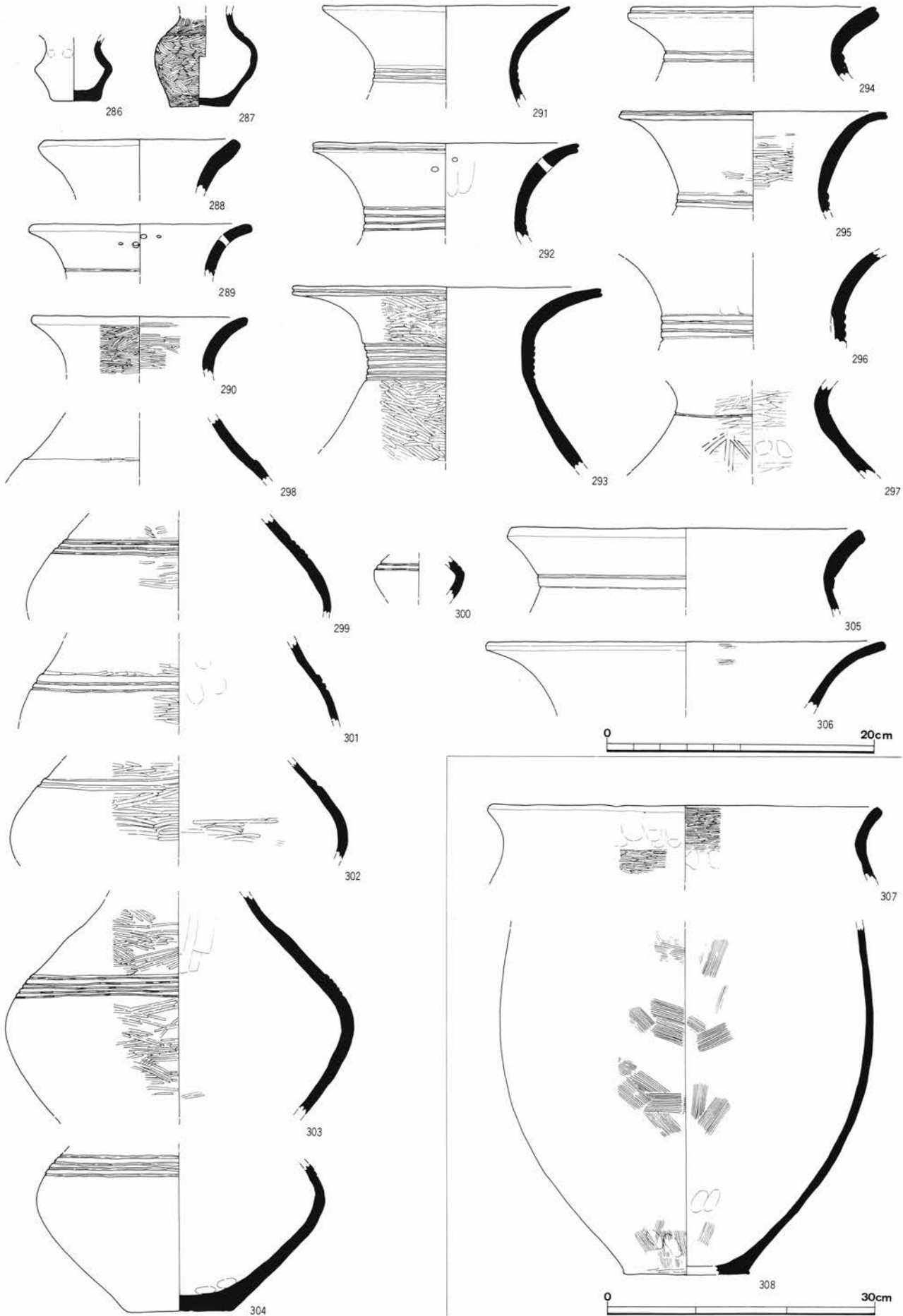
S X 76第 2 層出土鉢形土器(2)



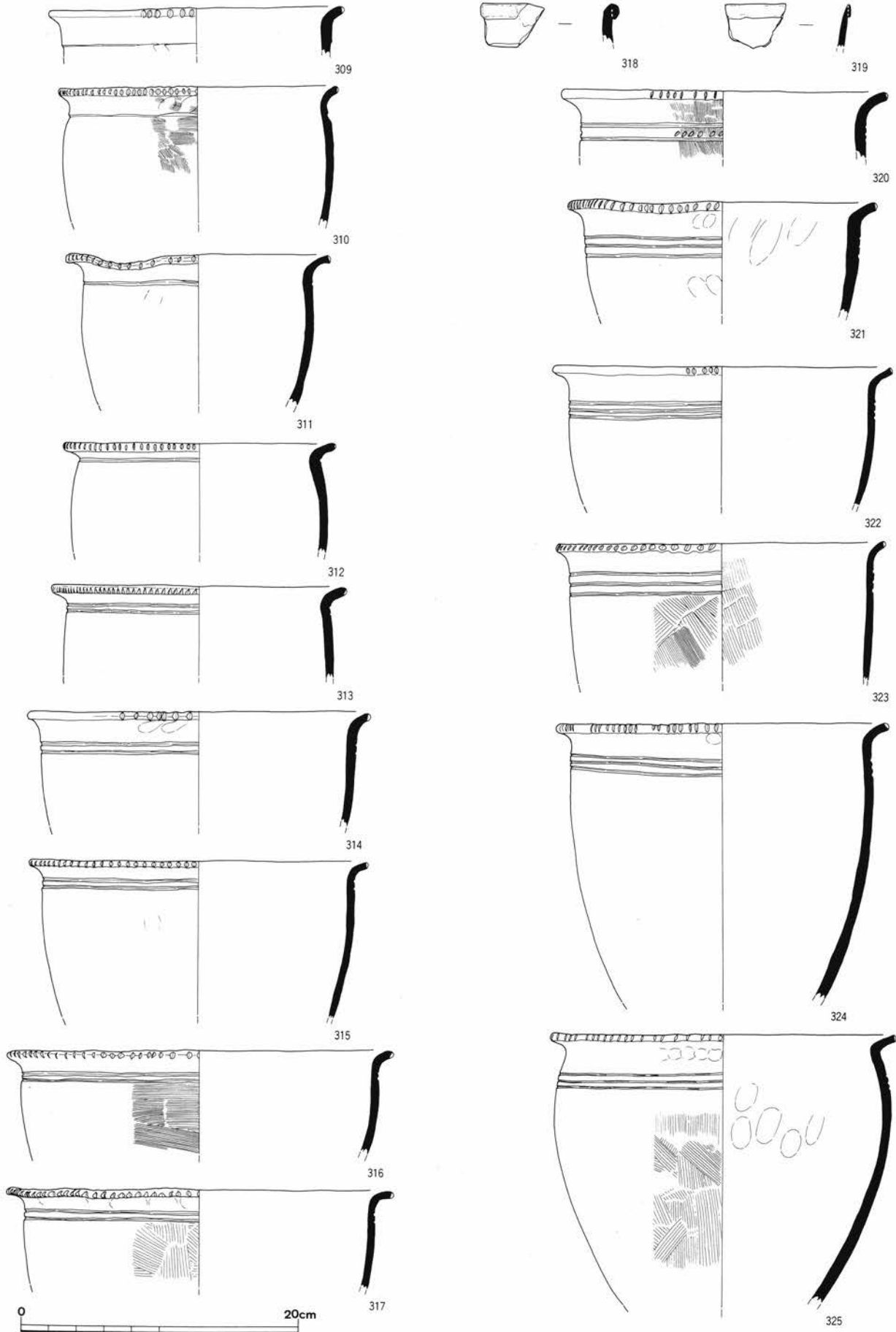
S X76第2層出土壺形土器・鉢形土器底部



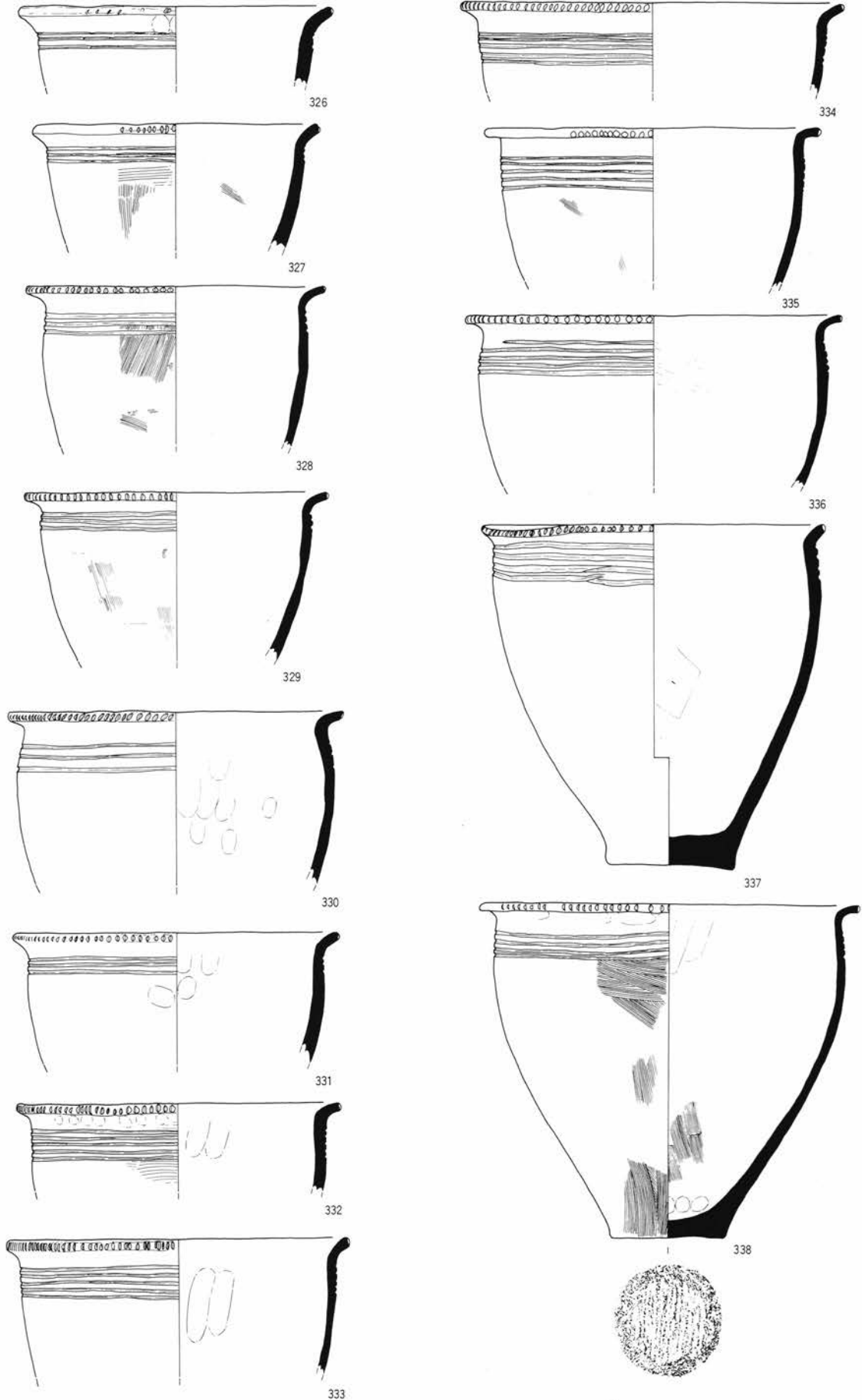
S X76第2層出土甗形土器底部



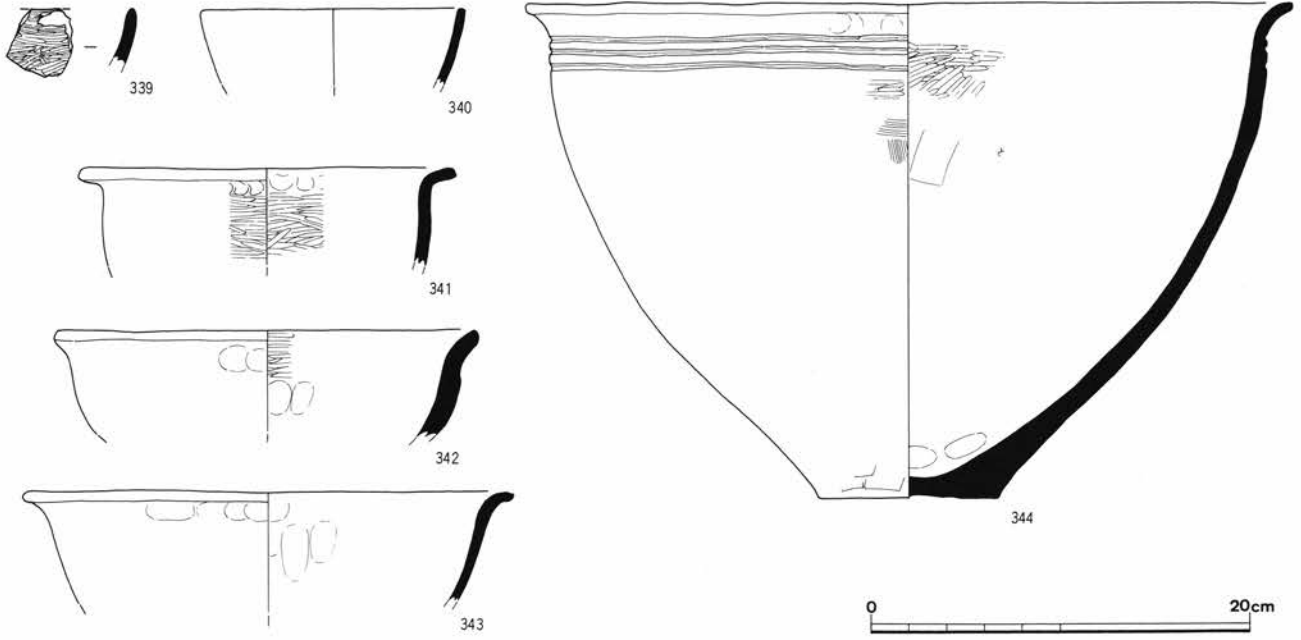
S X 76第3層出土壺形土器



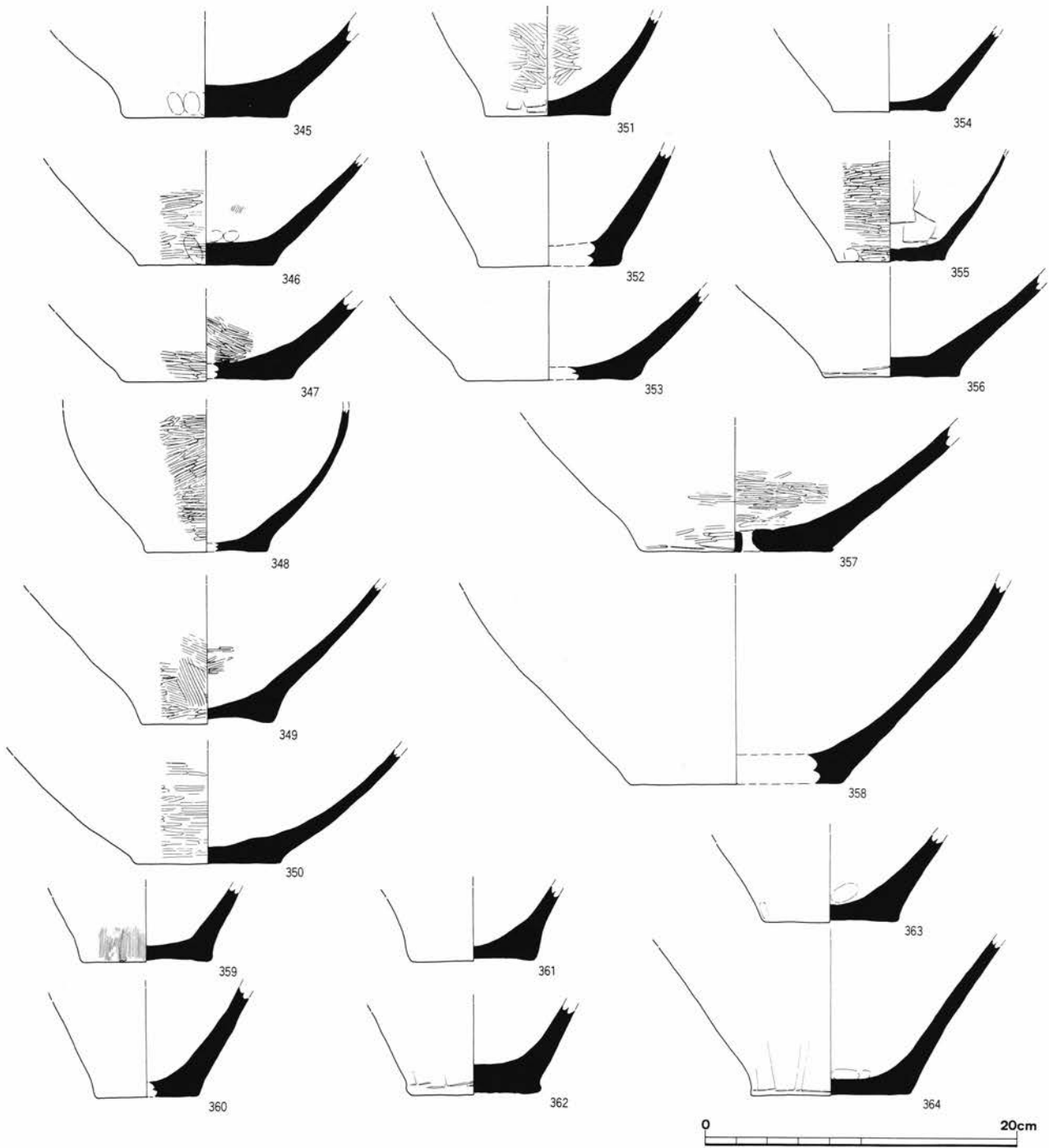
S X 76第 3 層出土甕形土器(1)



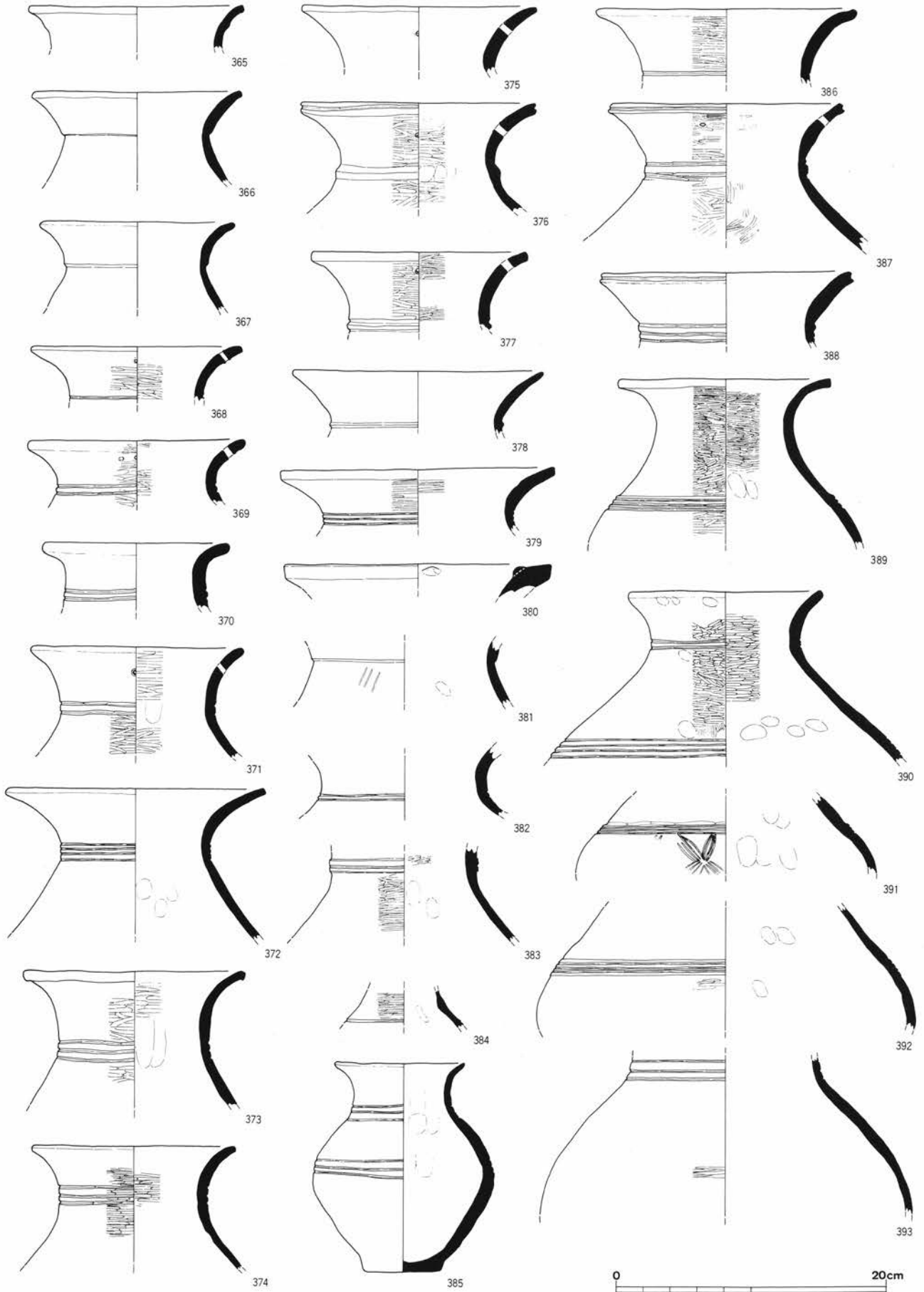
S X 76第 3 層出土甕形土器(2)



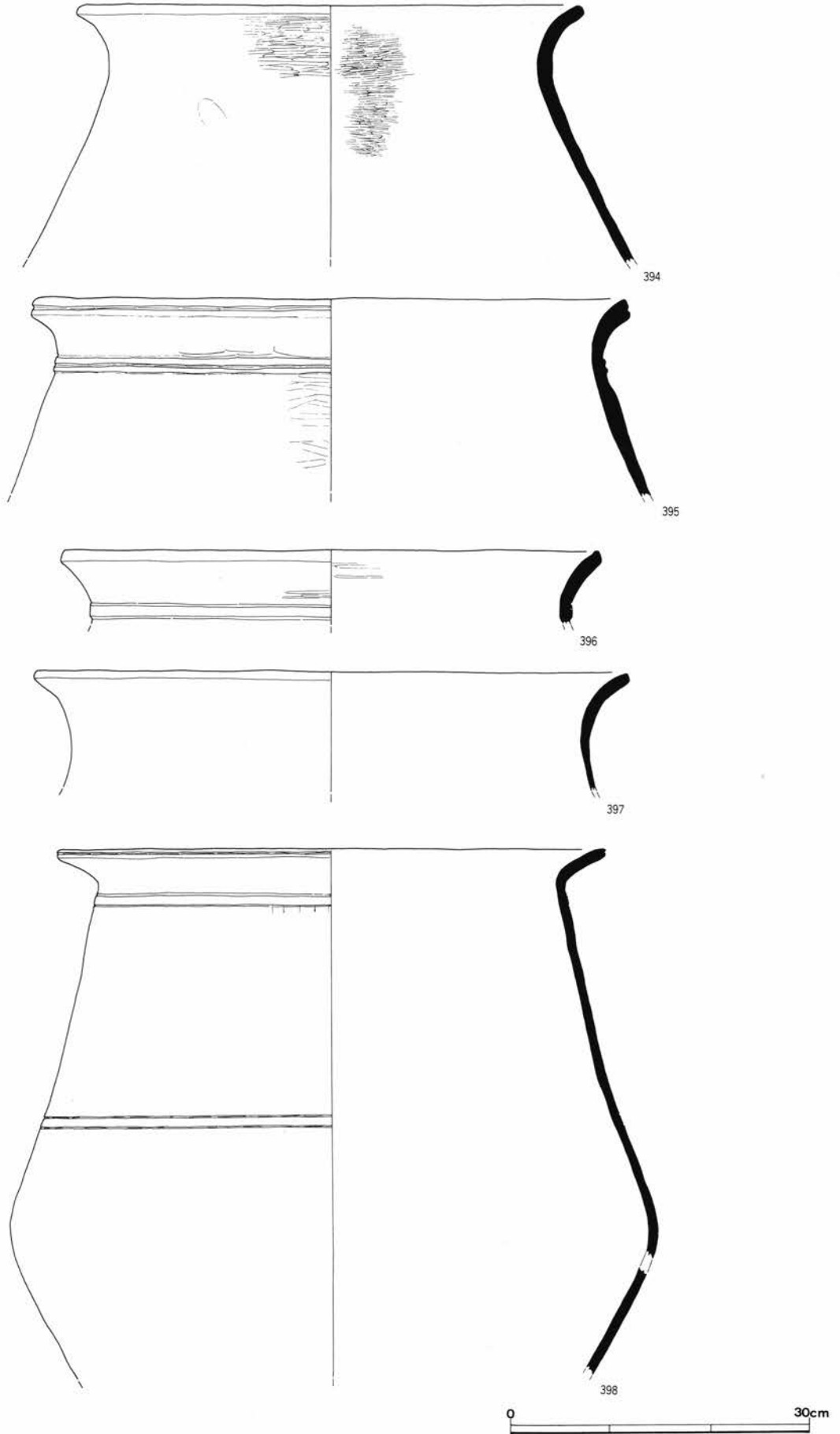
S X 76第 3 層出土鉢形土器



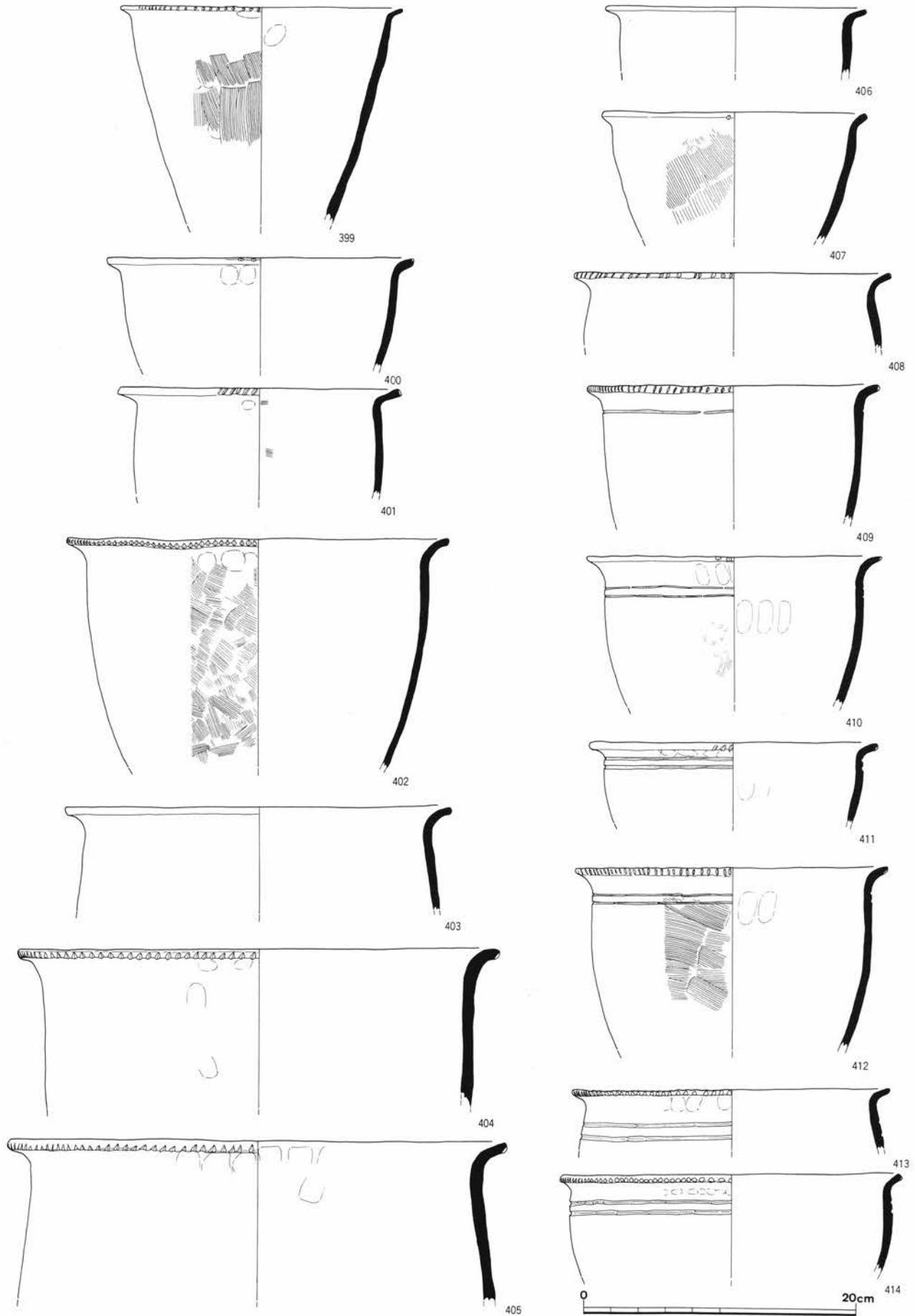
S X76第3層出土土器底部



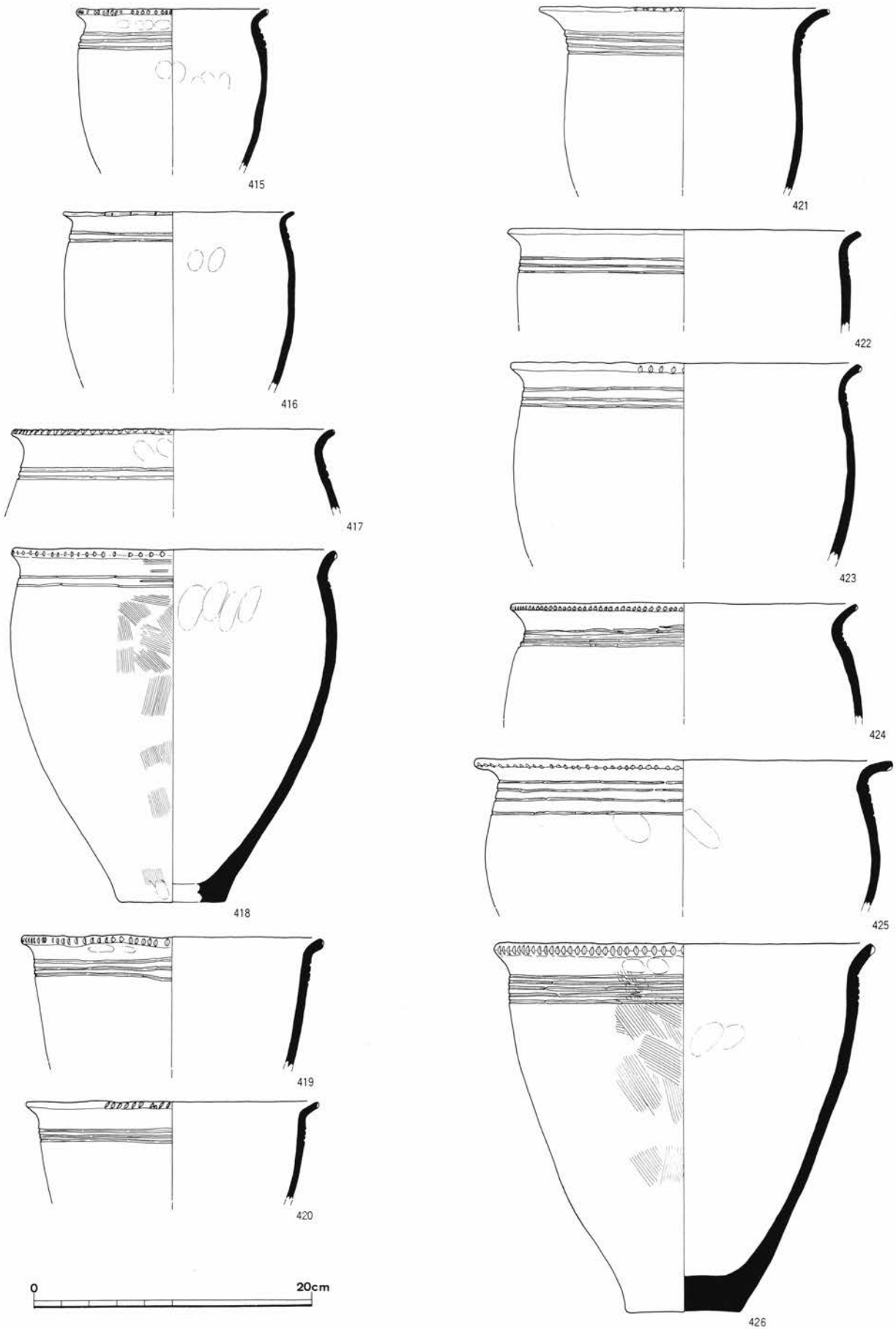
S X 60第 1 層出土壺形土器(1)



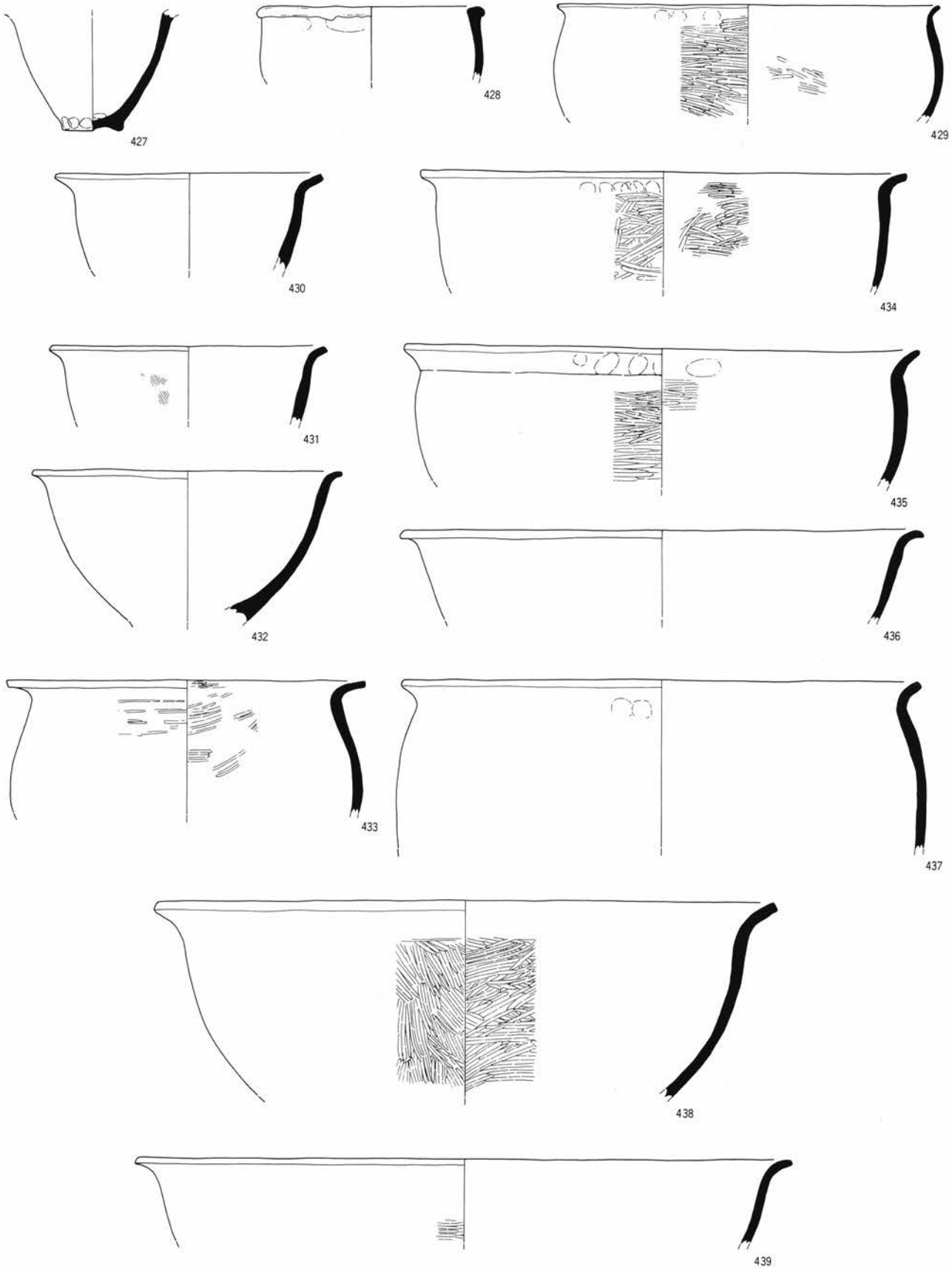
S X60第1層出土壺形土器(2)



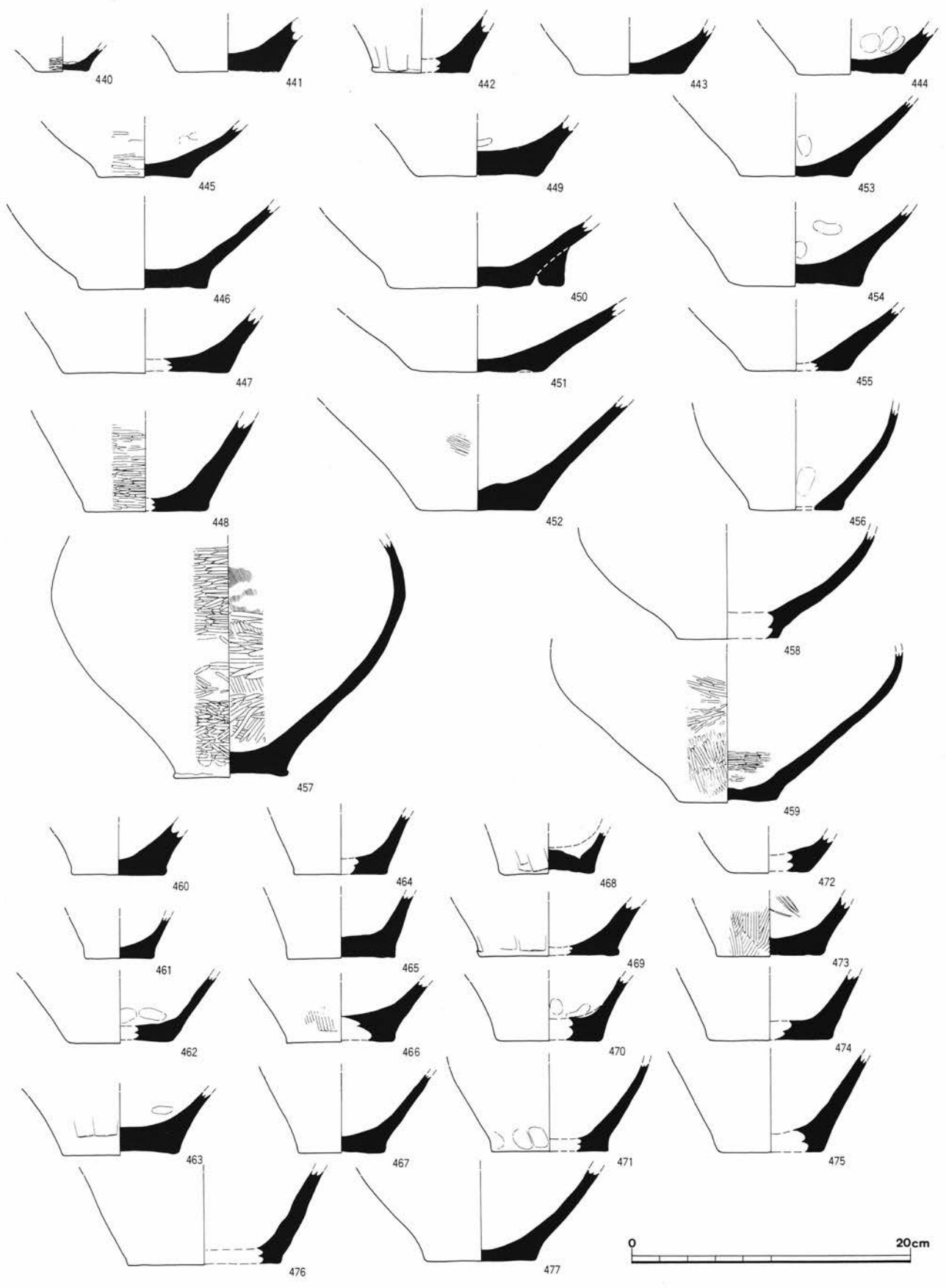
S X 60第 1 層出土甕形土器(1)



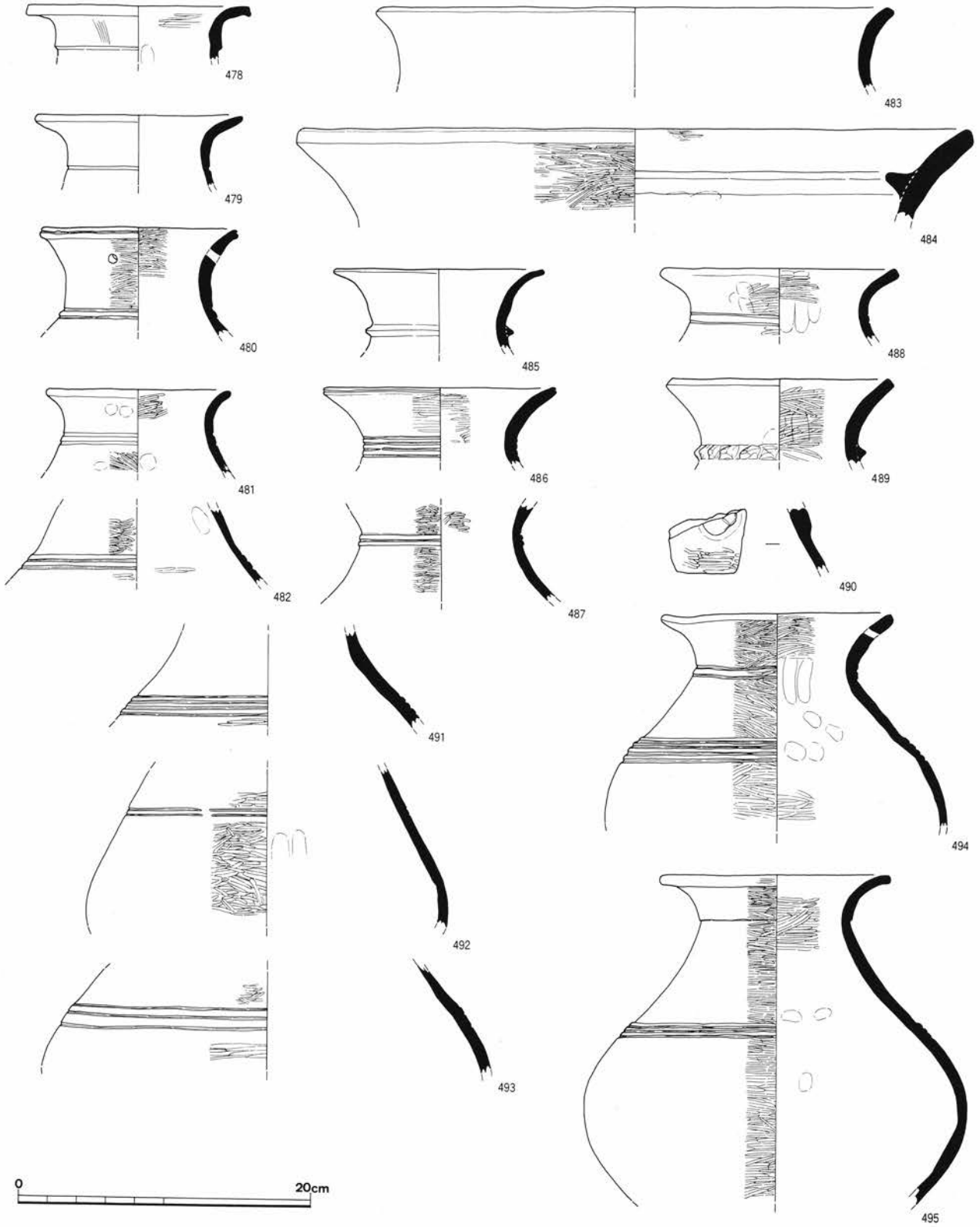
S X 60第 1 層出土甕形土器(2)



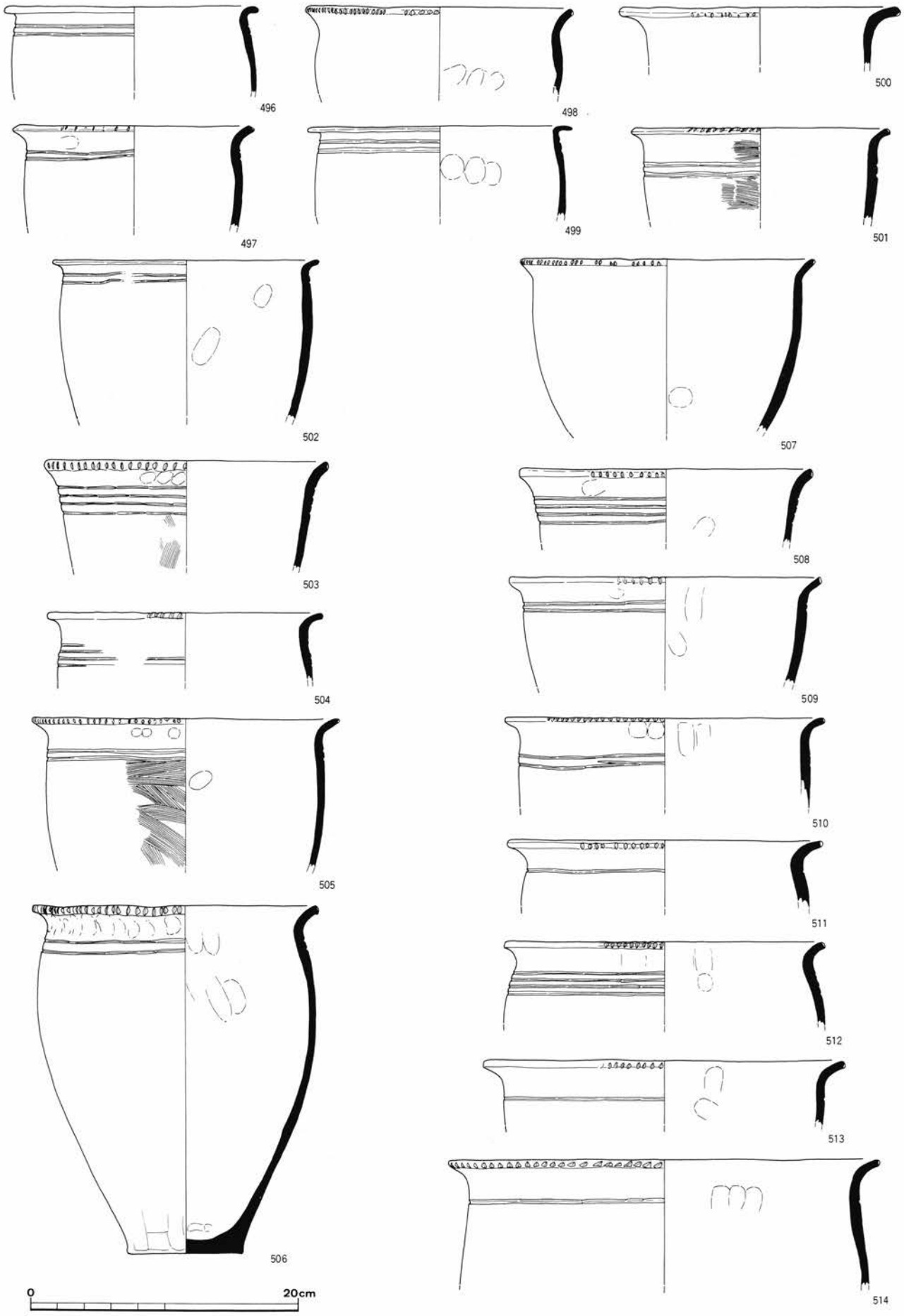
S X 60 第 1 層 出 土 鉢 形 土 器



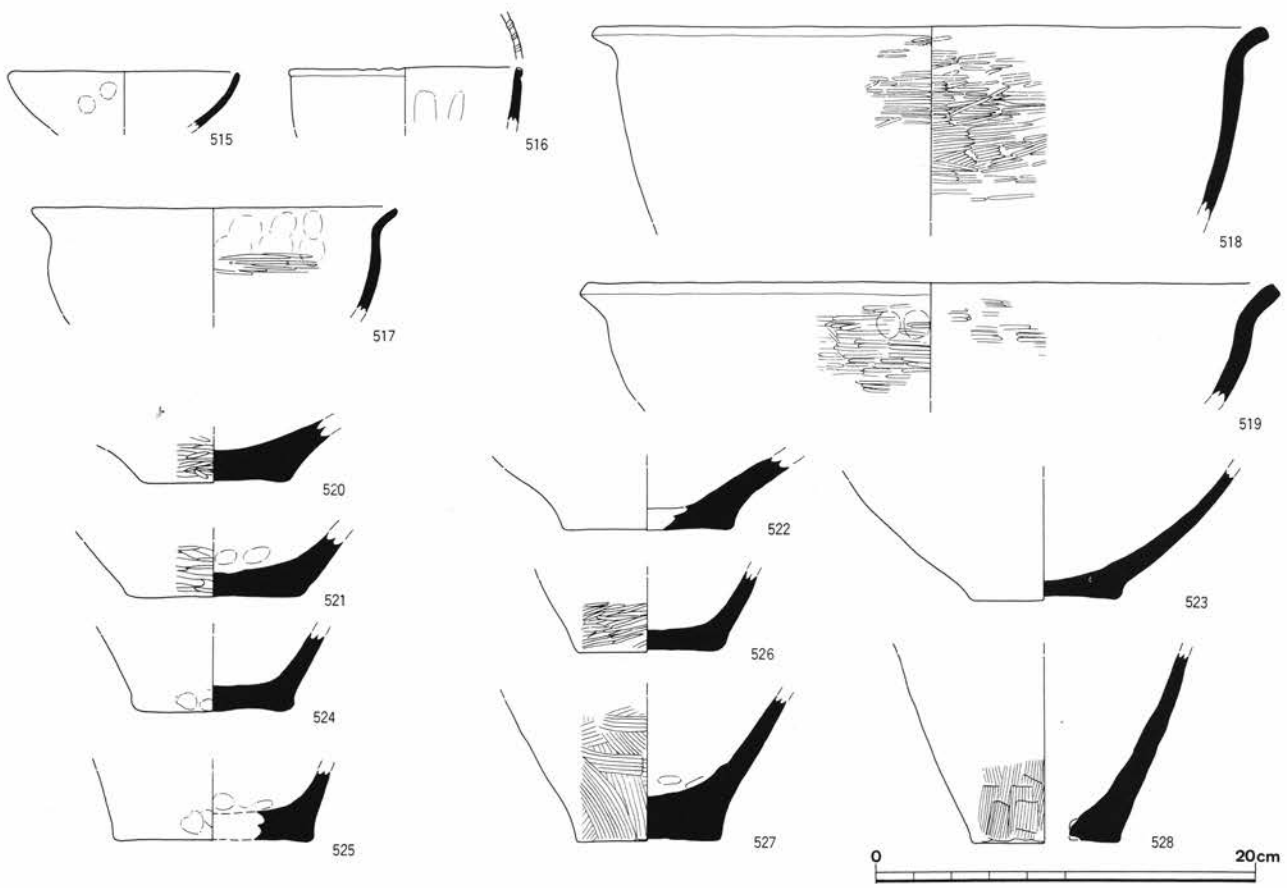
S X 60第 1 層出土土器底部



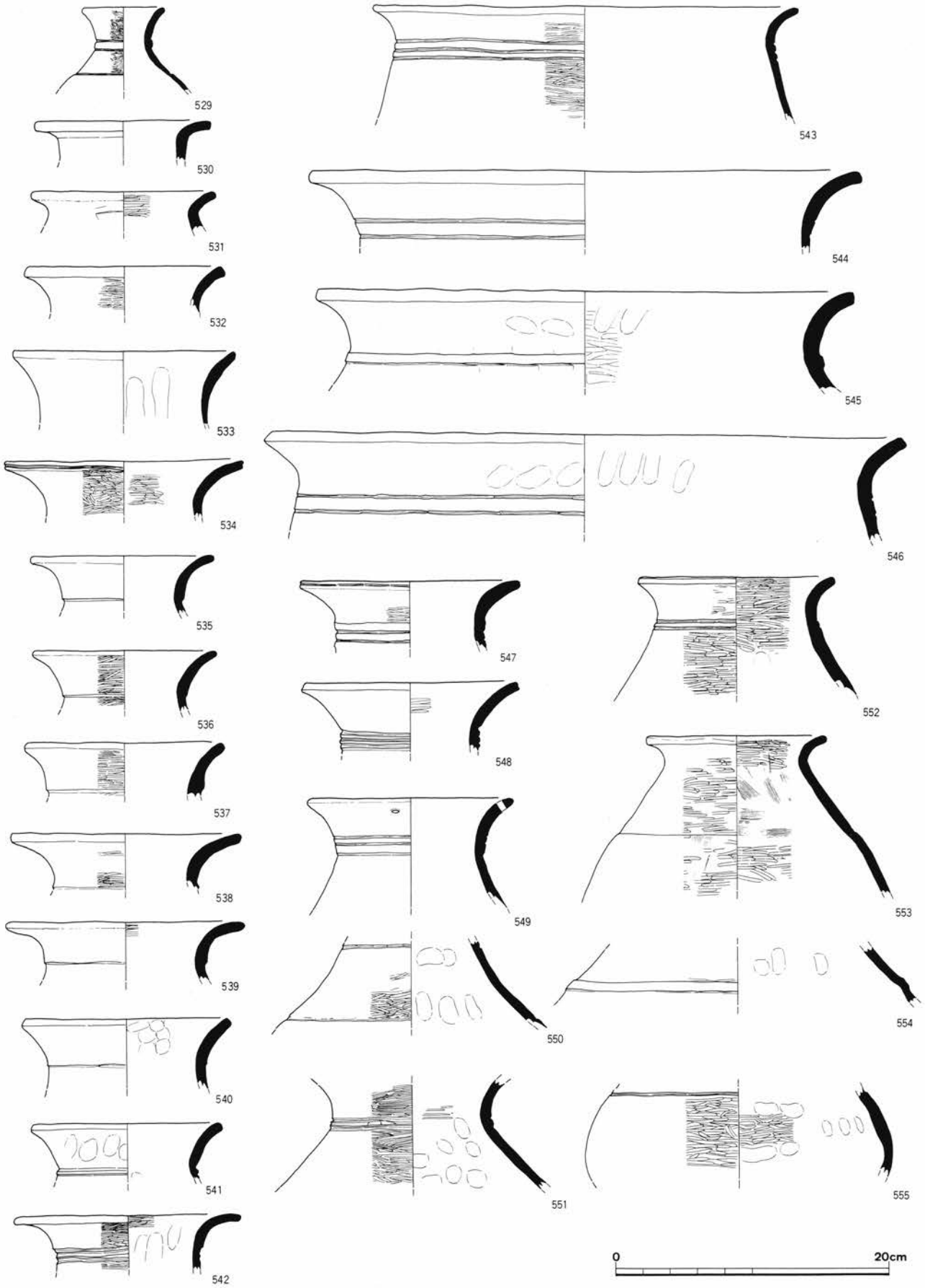
S X 60第 2 層出土壺形土器



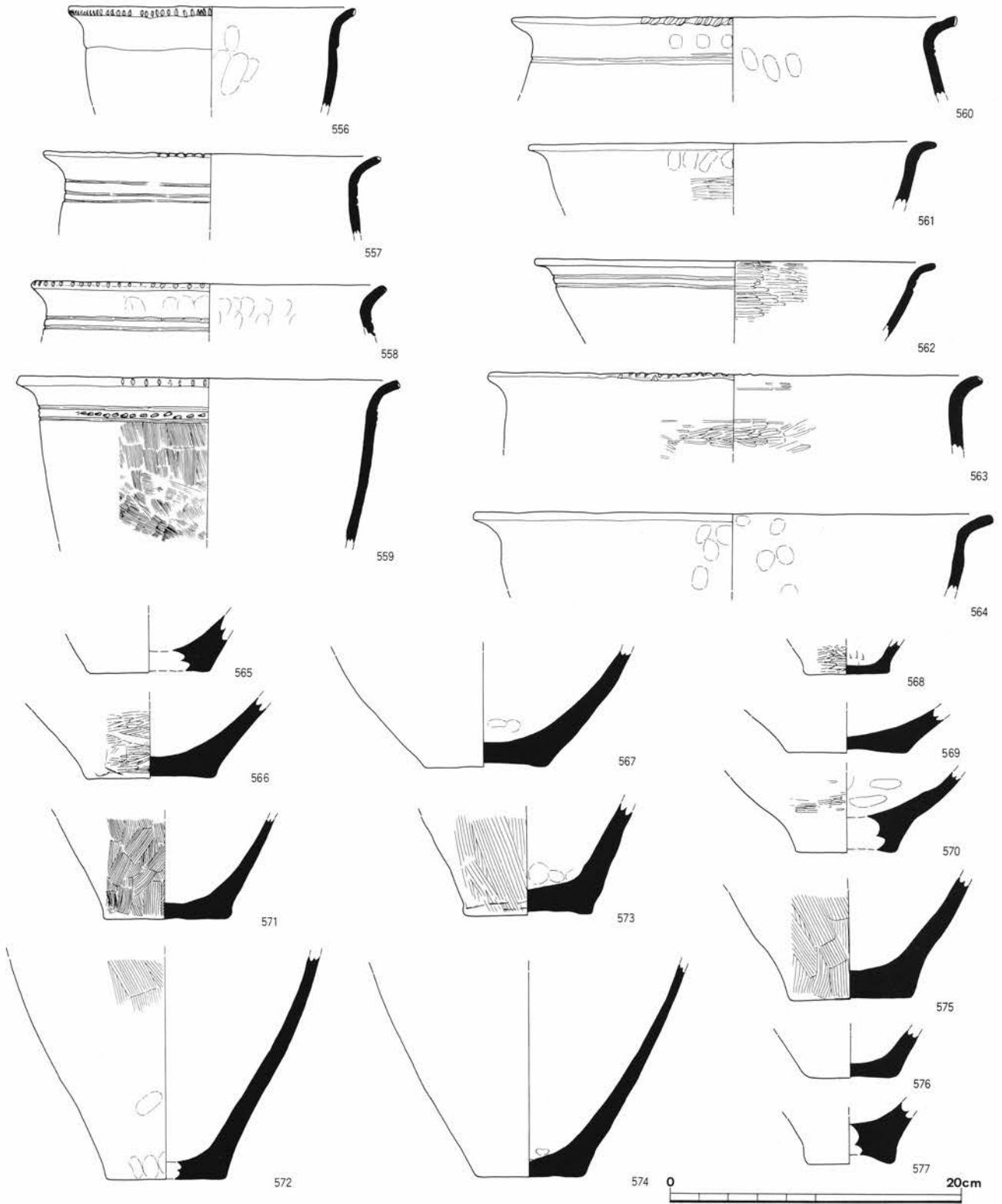
S X 60第 2 層出土甕形土器



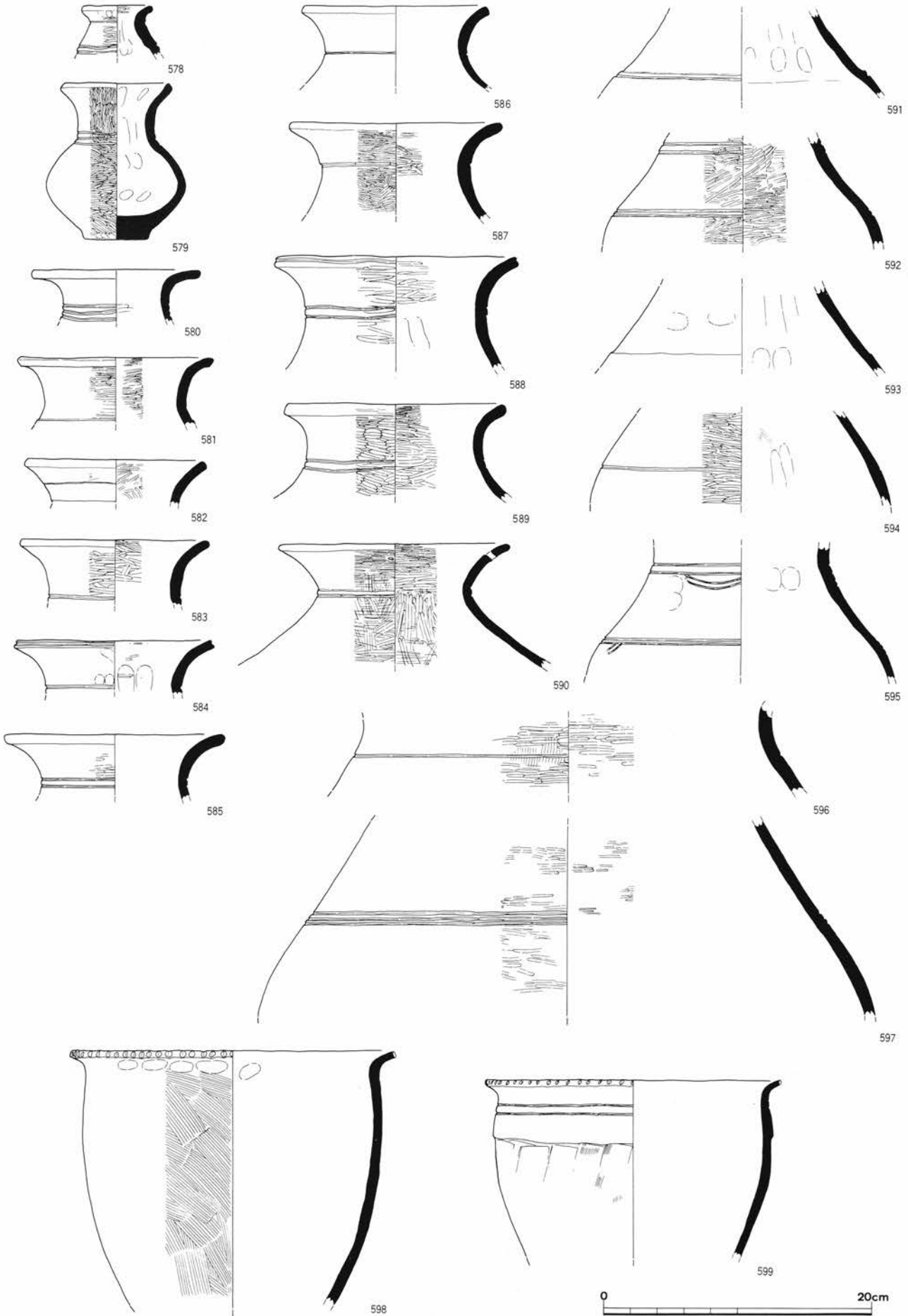
S X 60第 2 層出土鉢形土器・底部



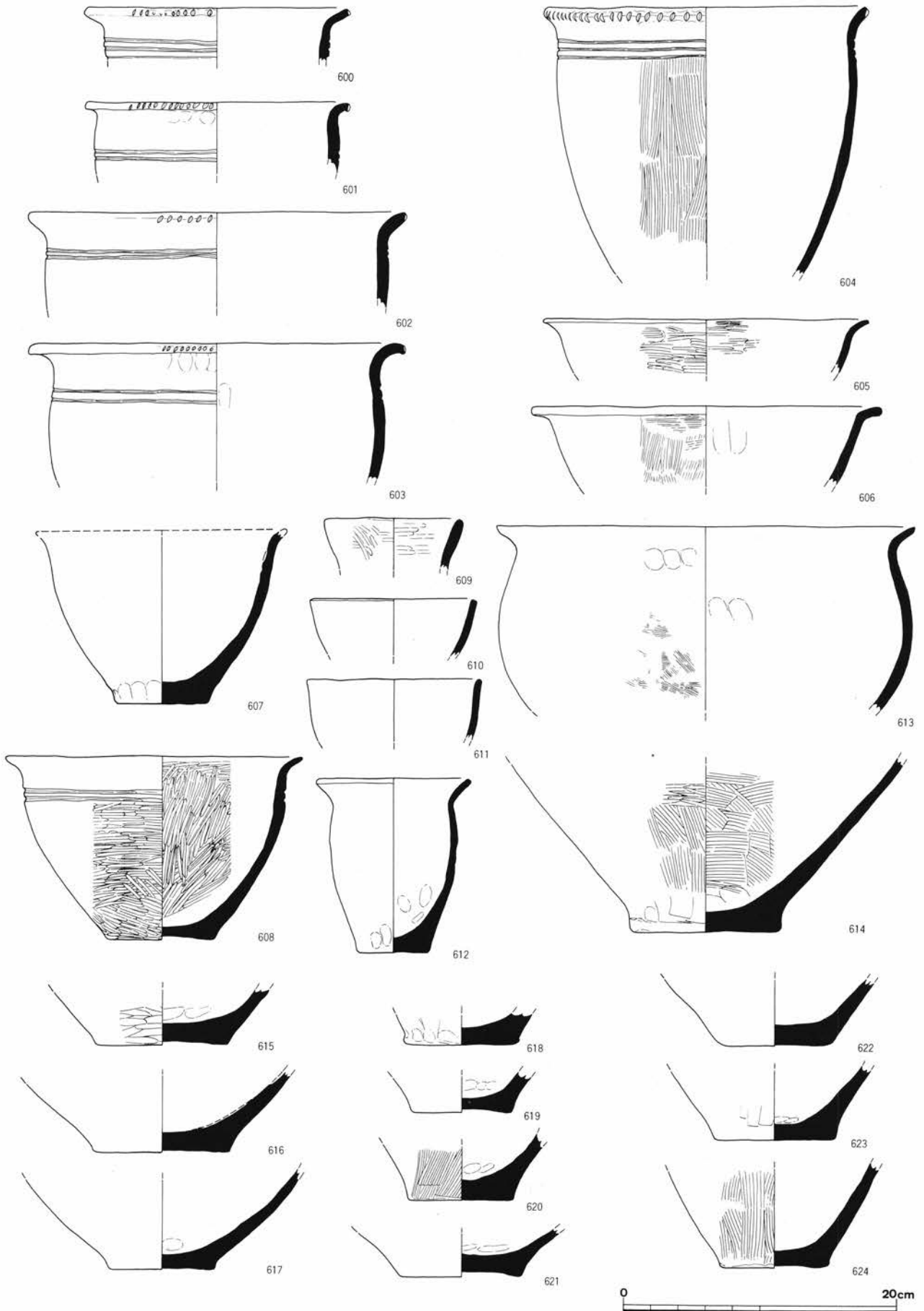
S X 60第 3 層出土壺形土器



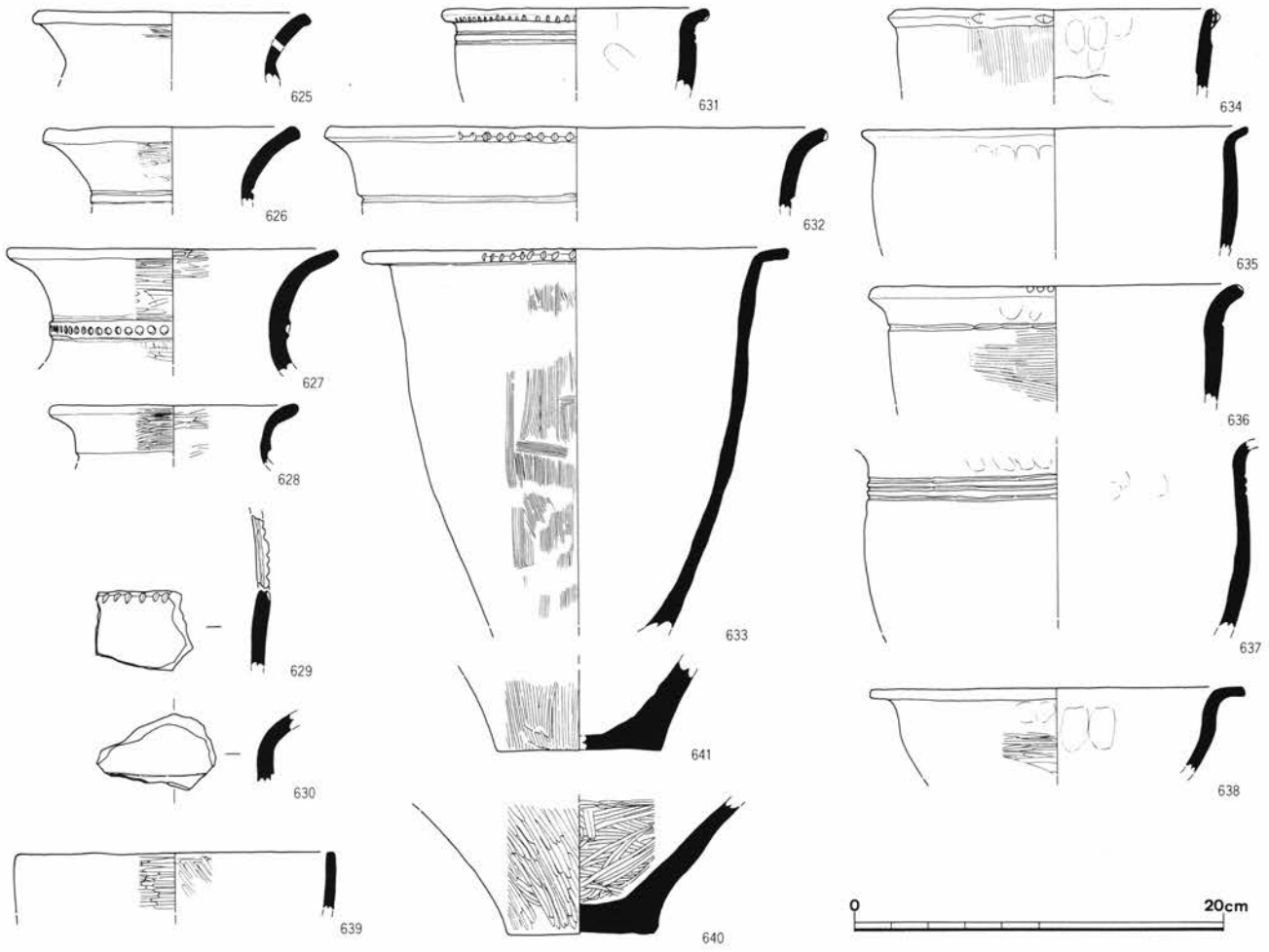
S X 60第3層出土甗形土器・鉢形土器・底部



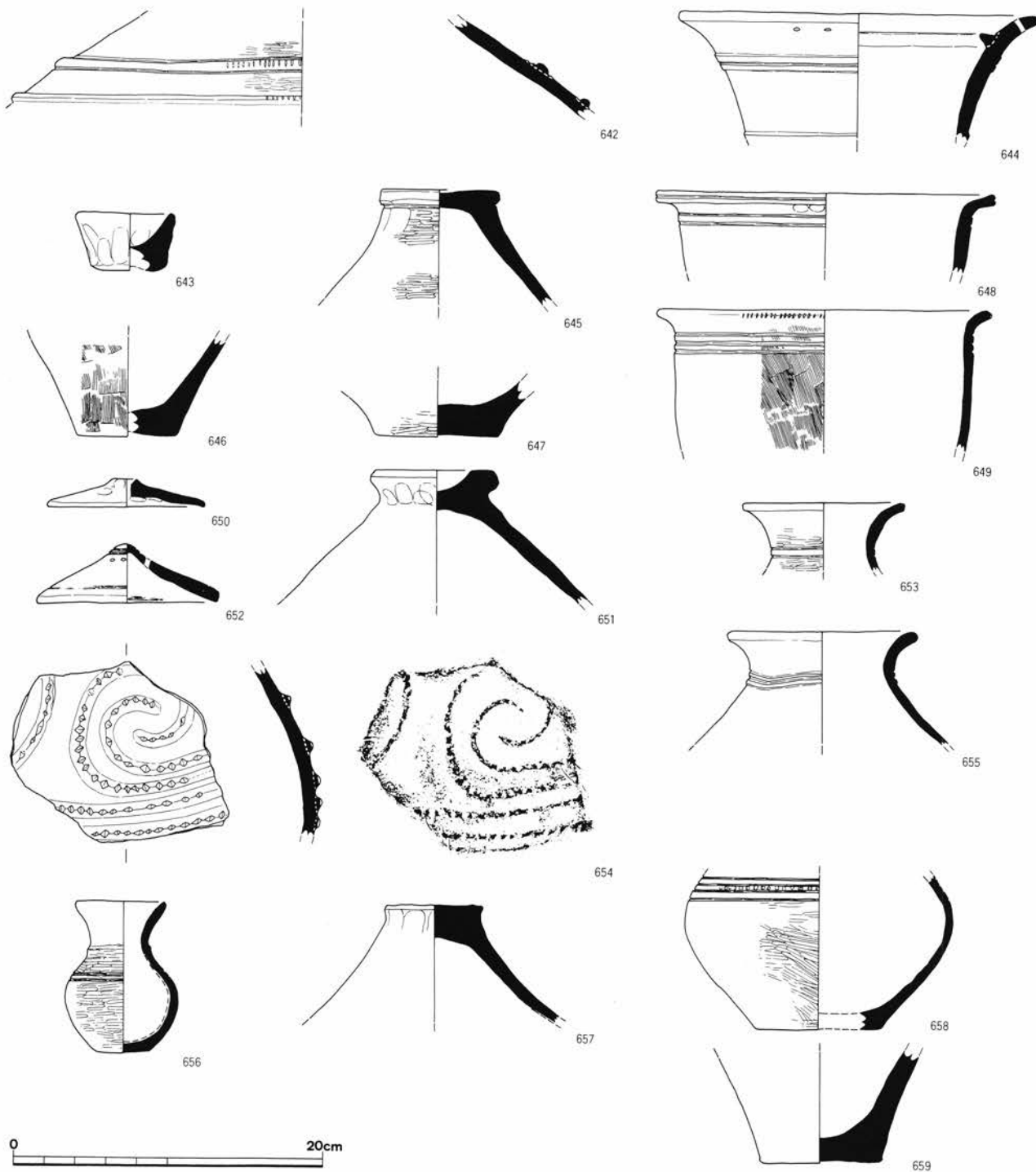
S X 60第4層出土壺形土器・甗形土器



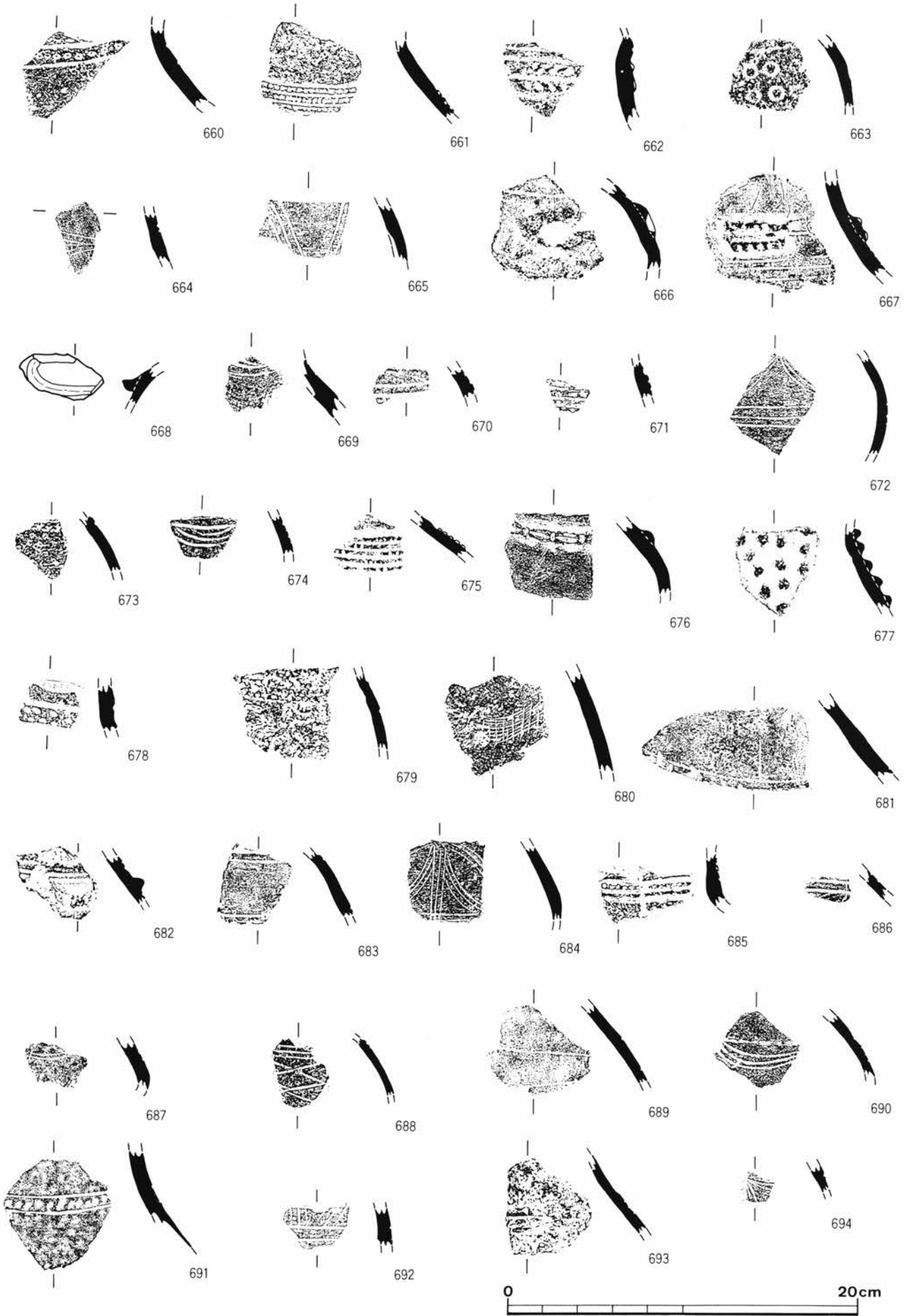
S X 60第 4 層出土甕形土器・鉢形土器・底部



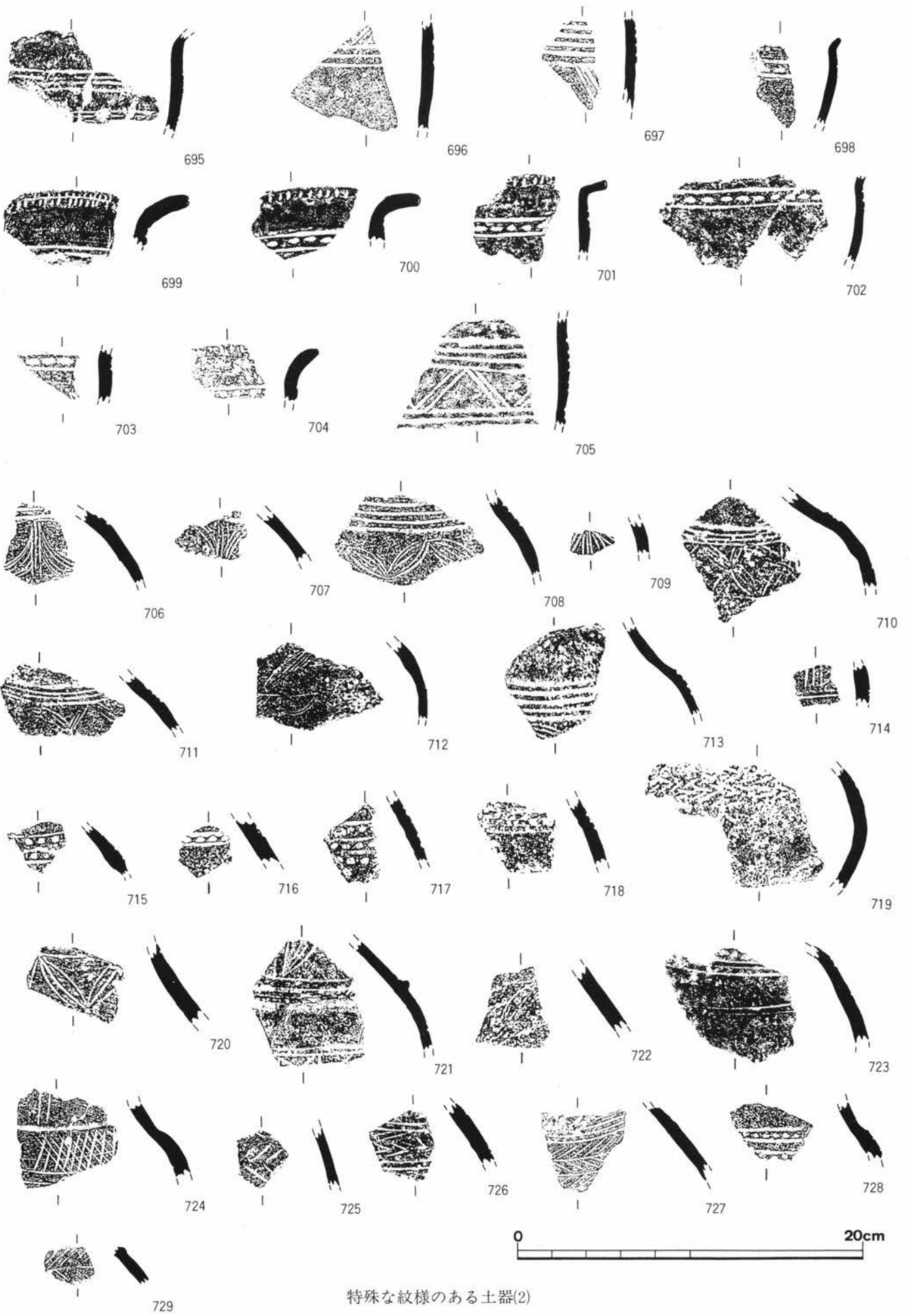
S X 60第 5 層出土土器



S X 76・60以外の遺構出土土器

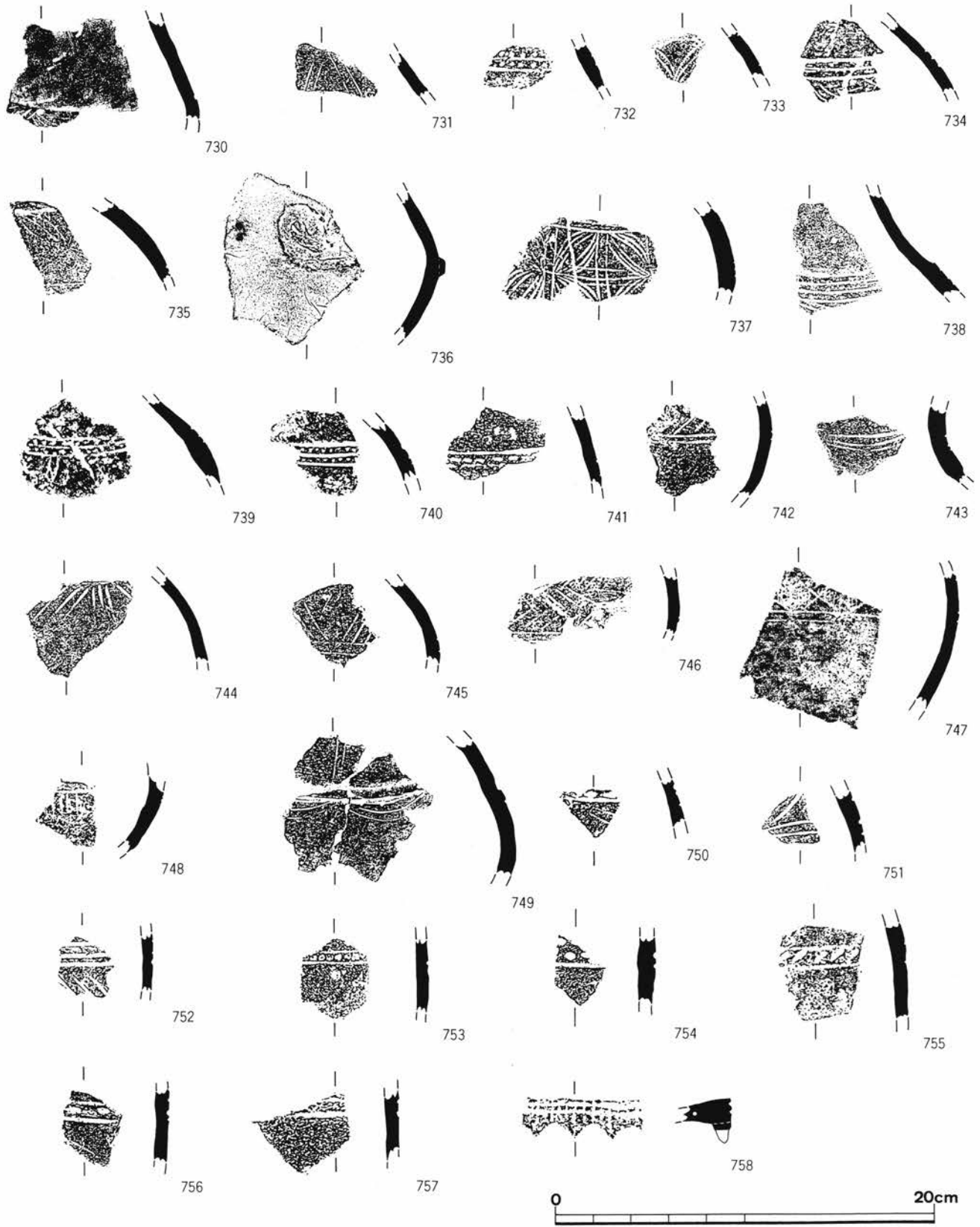


特殊な紋様のある土器(1)

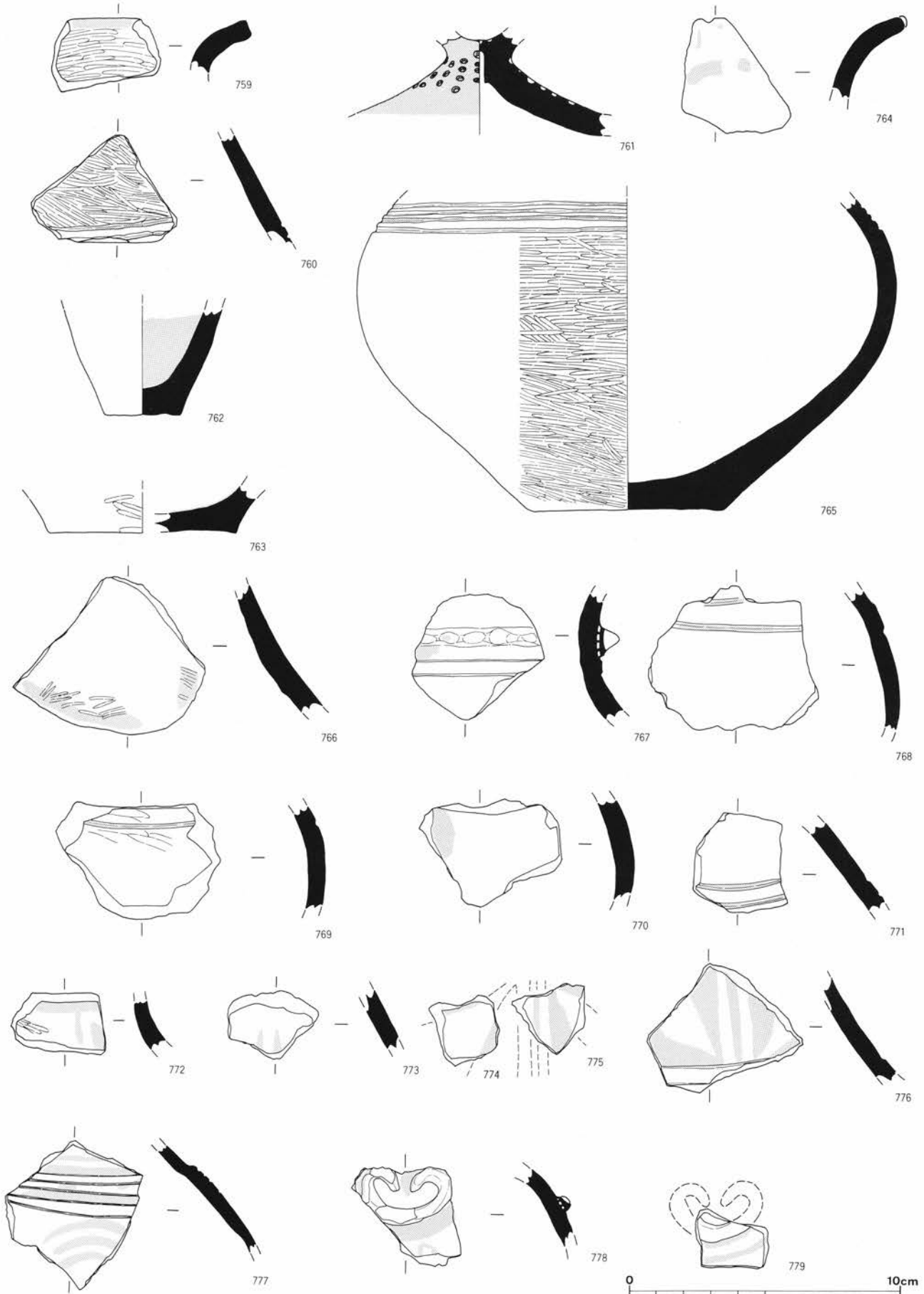


特殊な紋様のある土器(2)

729

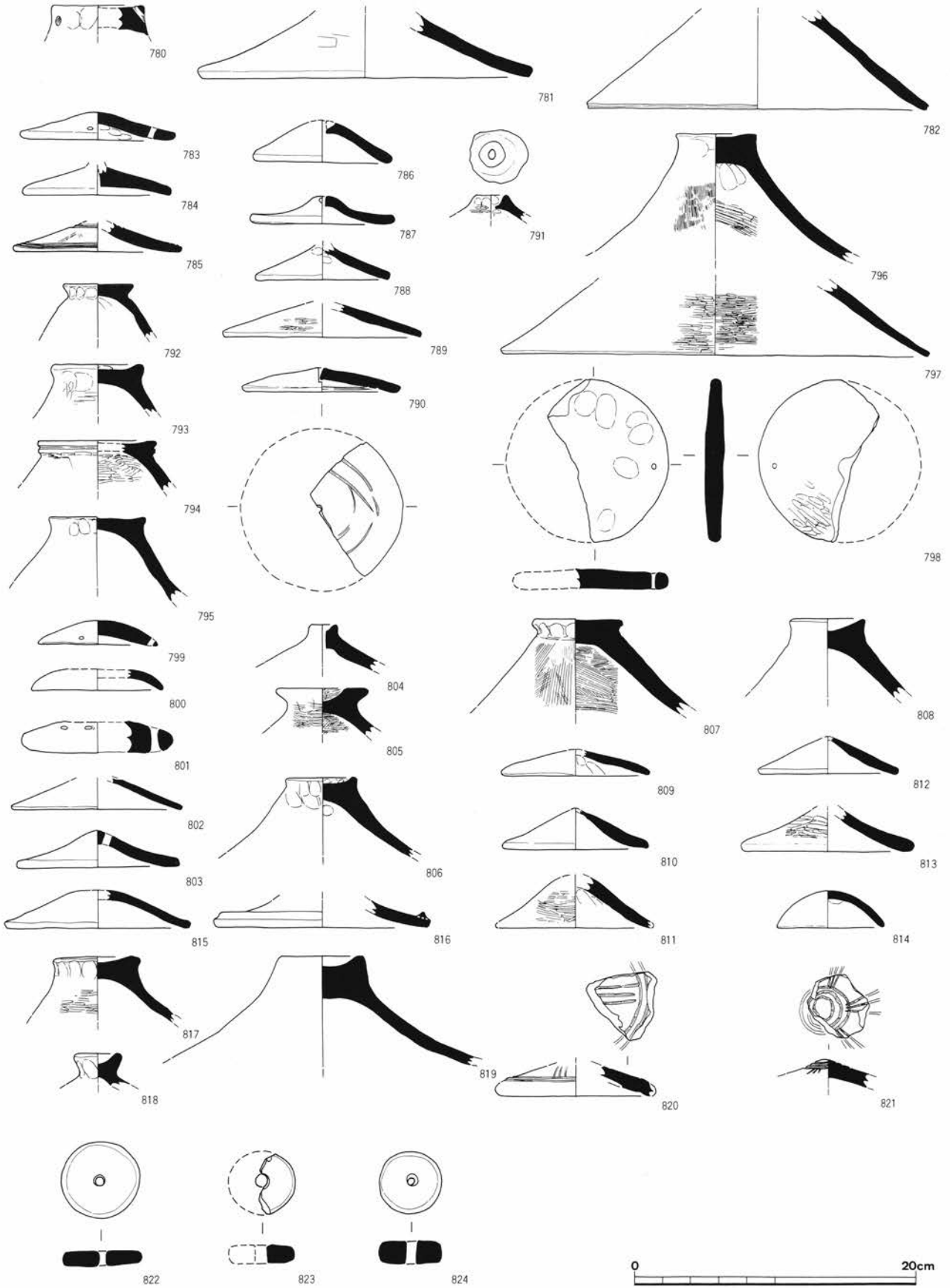


特殊な紋様のある土器(3)

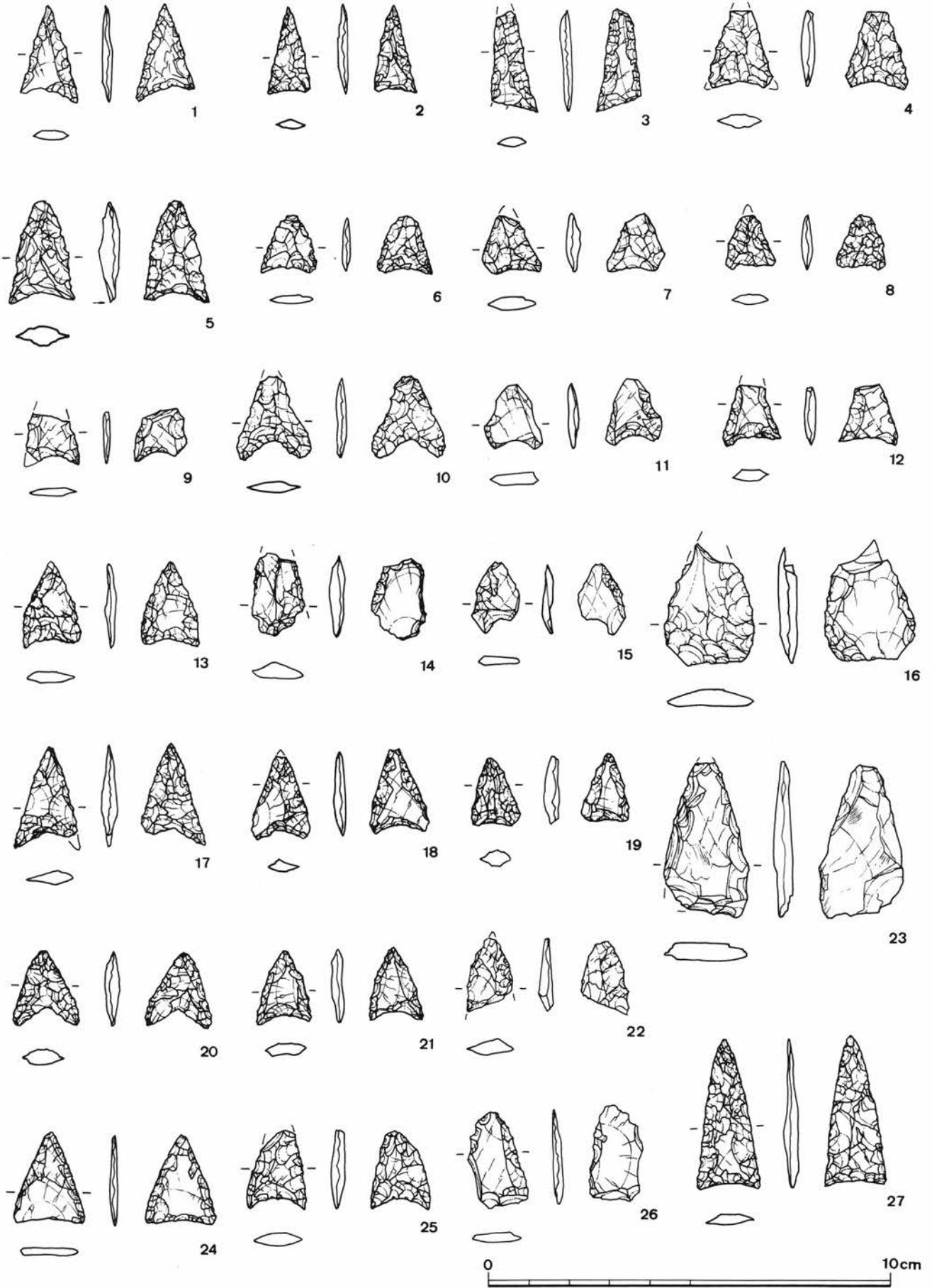


彩紋土器

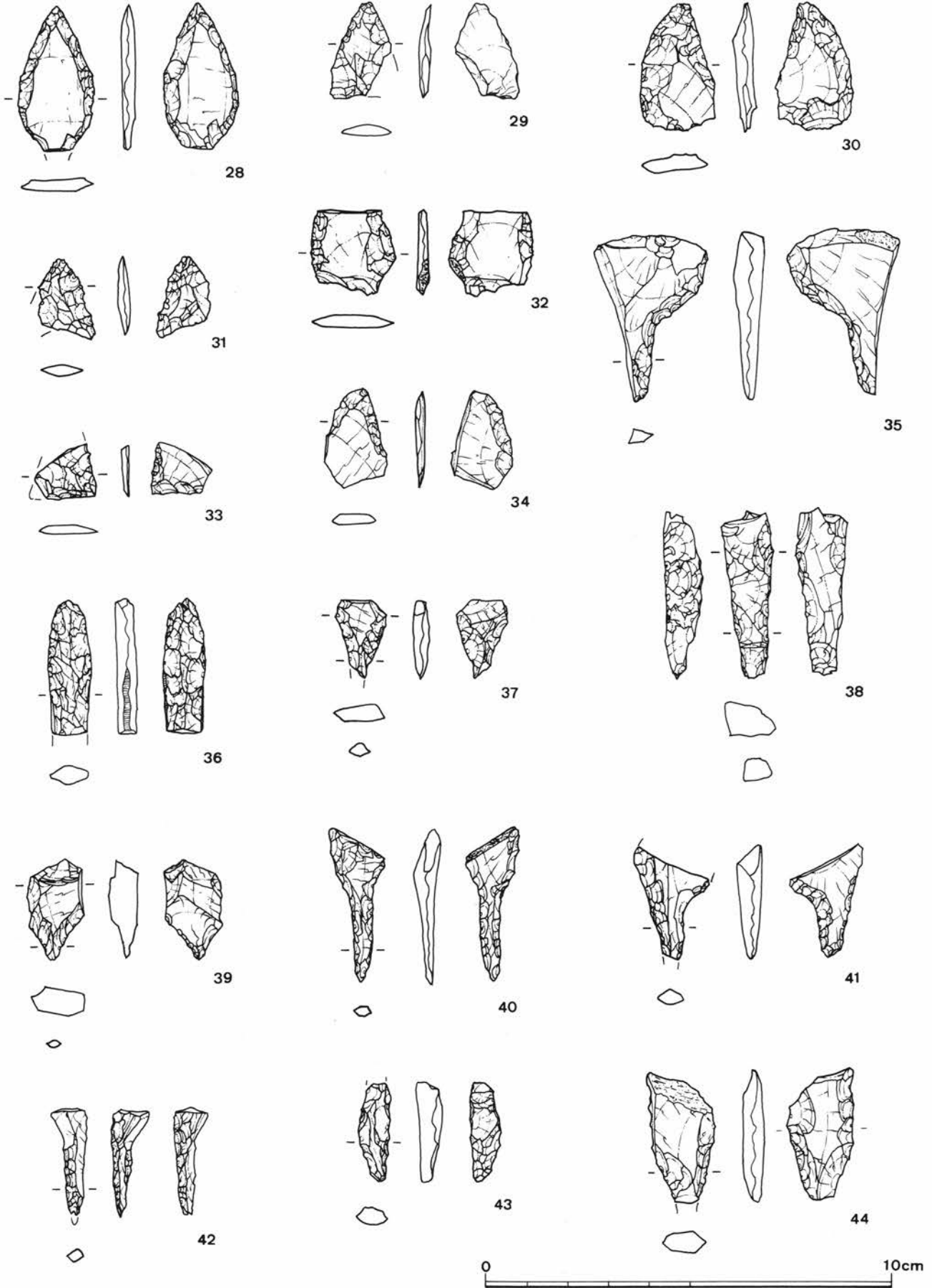
0 10cm



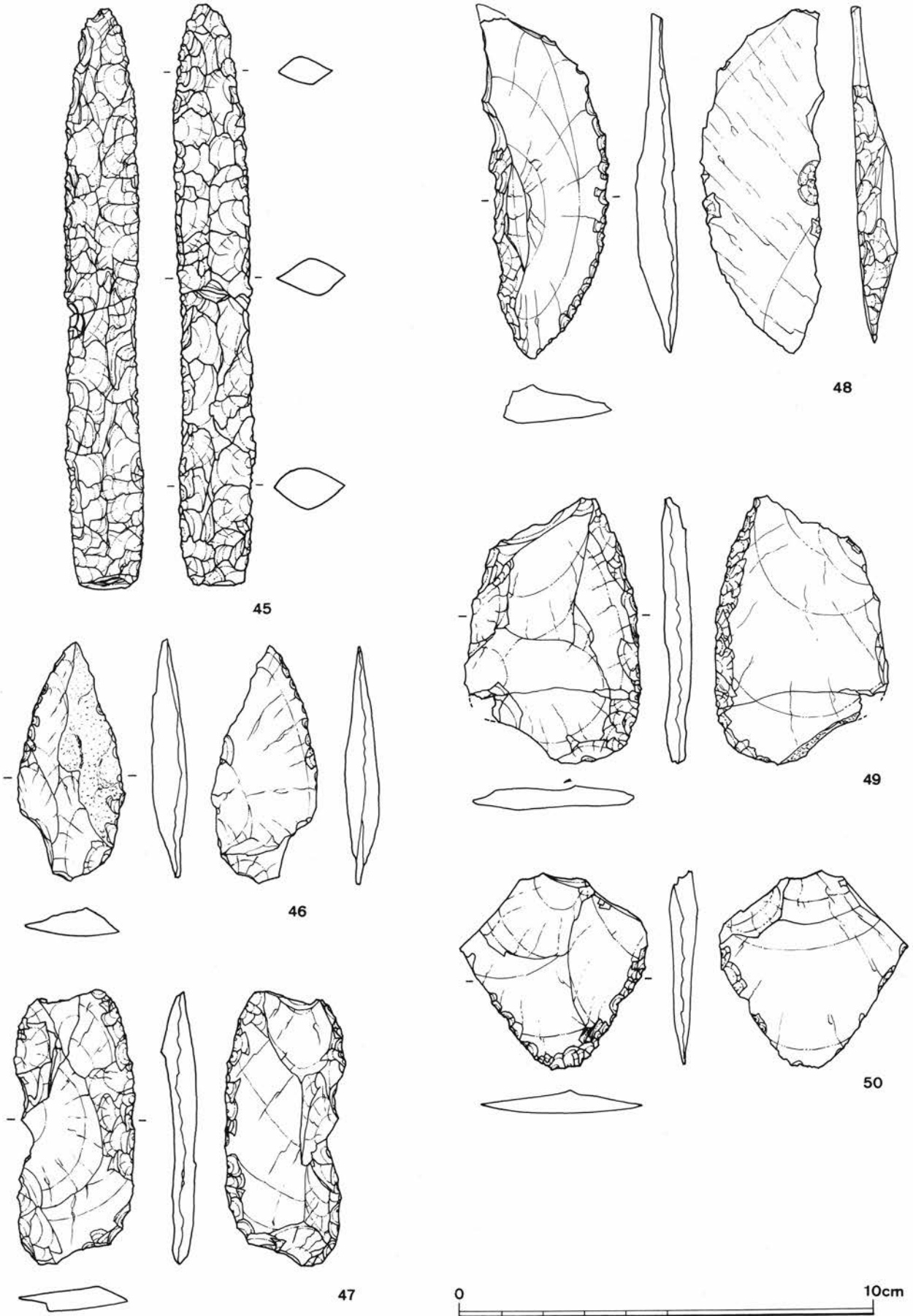
蓋形土器及び紡錘車



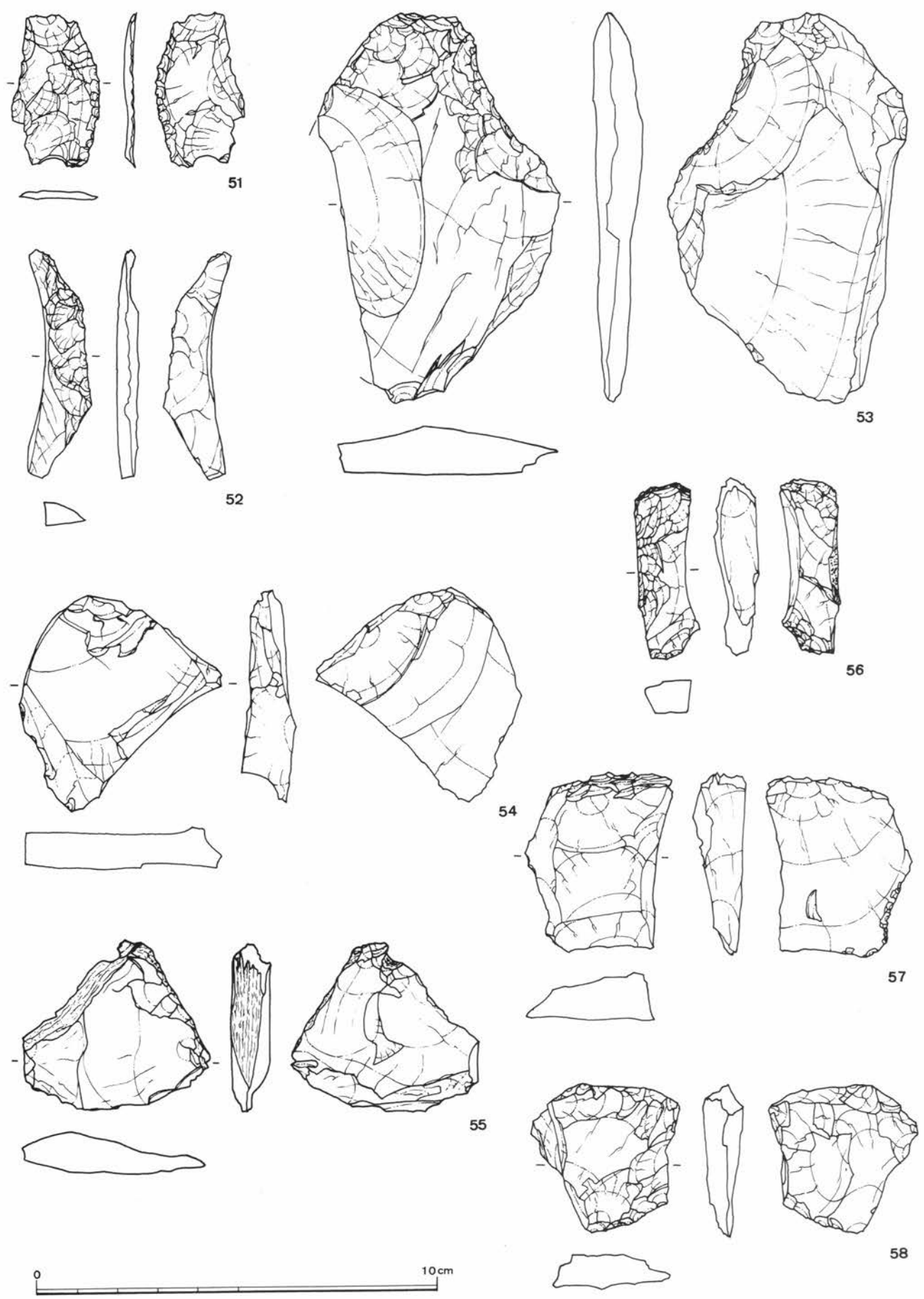
石器实测图(1)



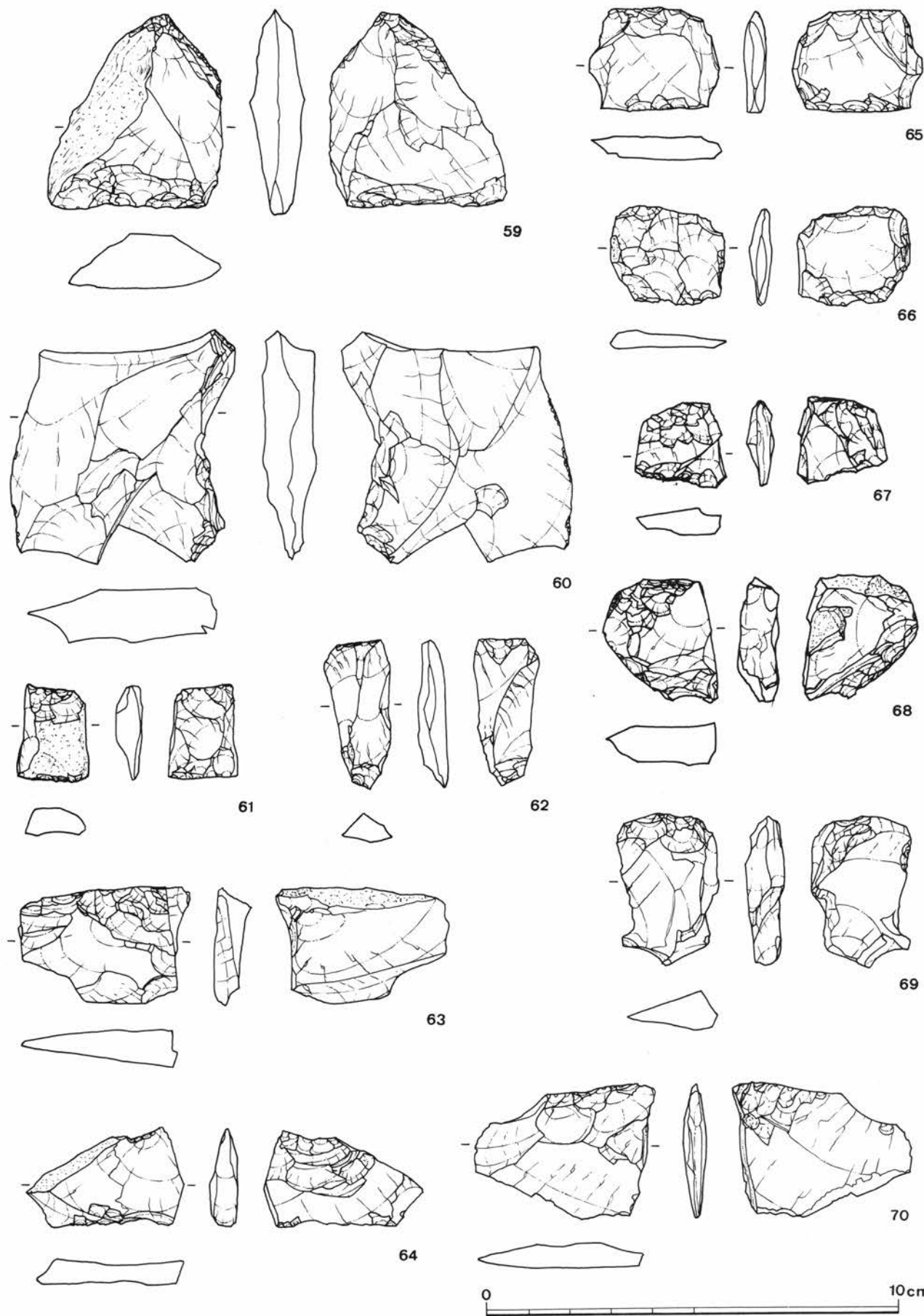
石器实测图(2)



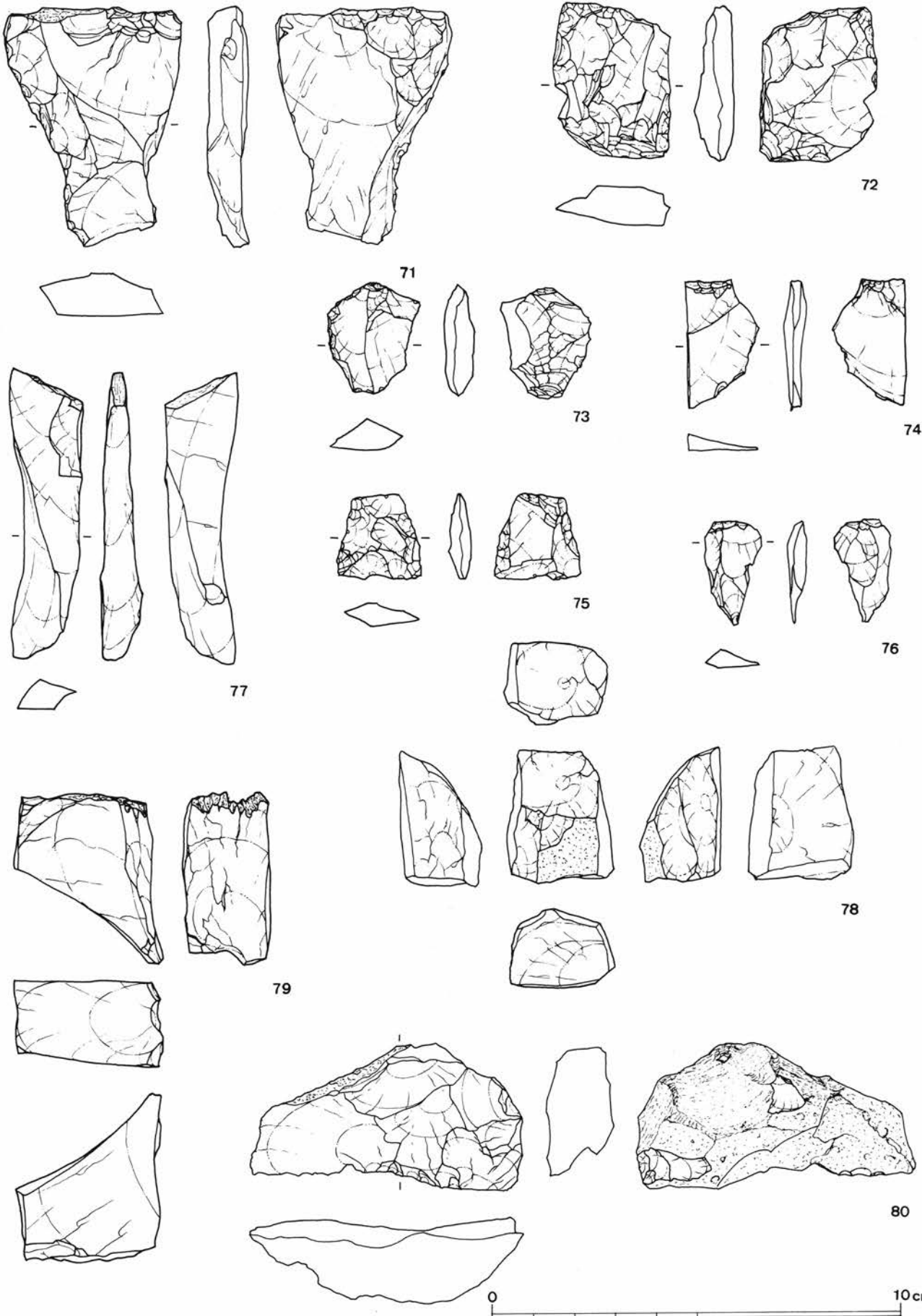
石器实测图(3)



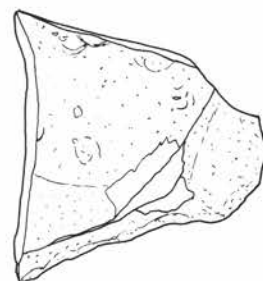
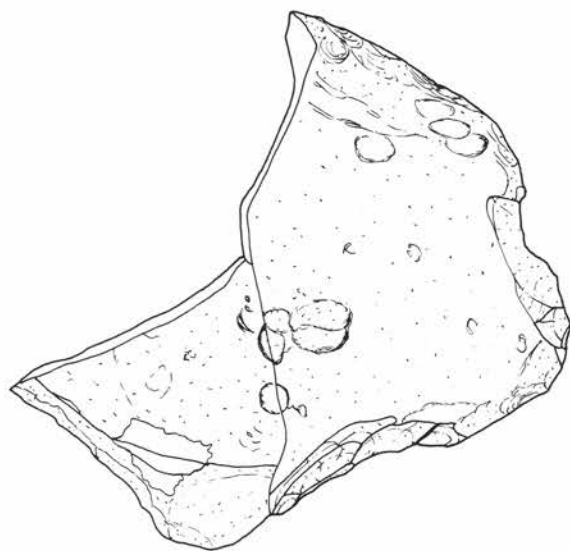
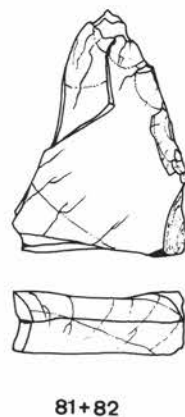
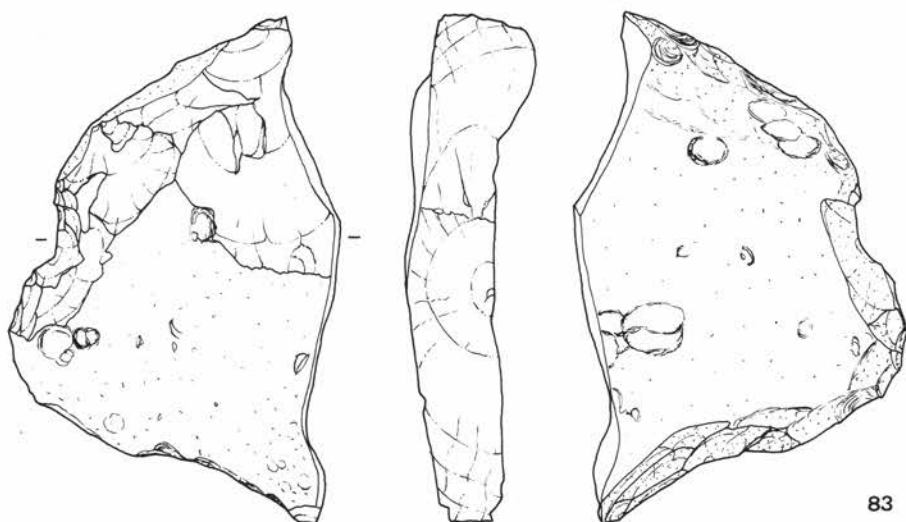
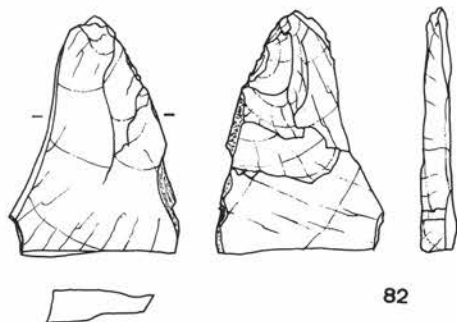
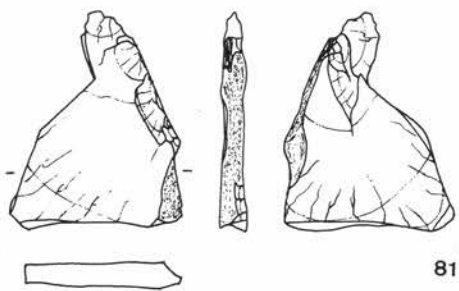
石器实测图(4)

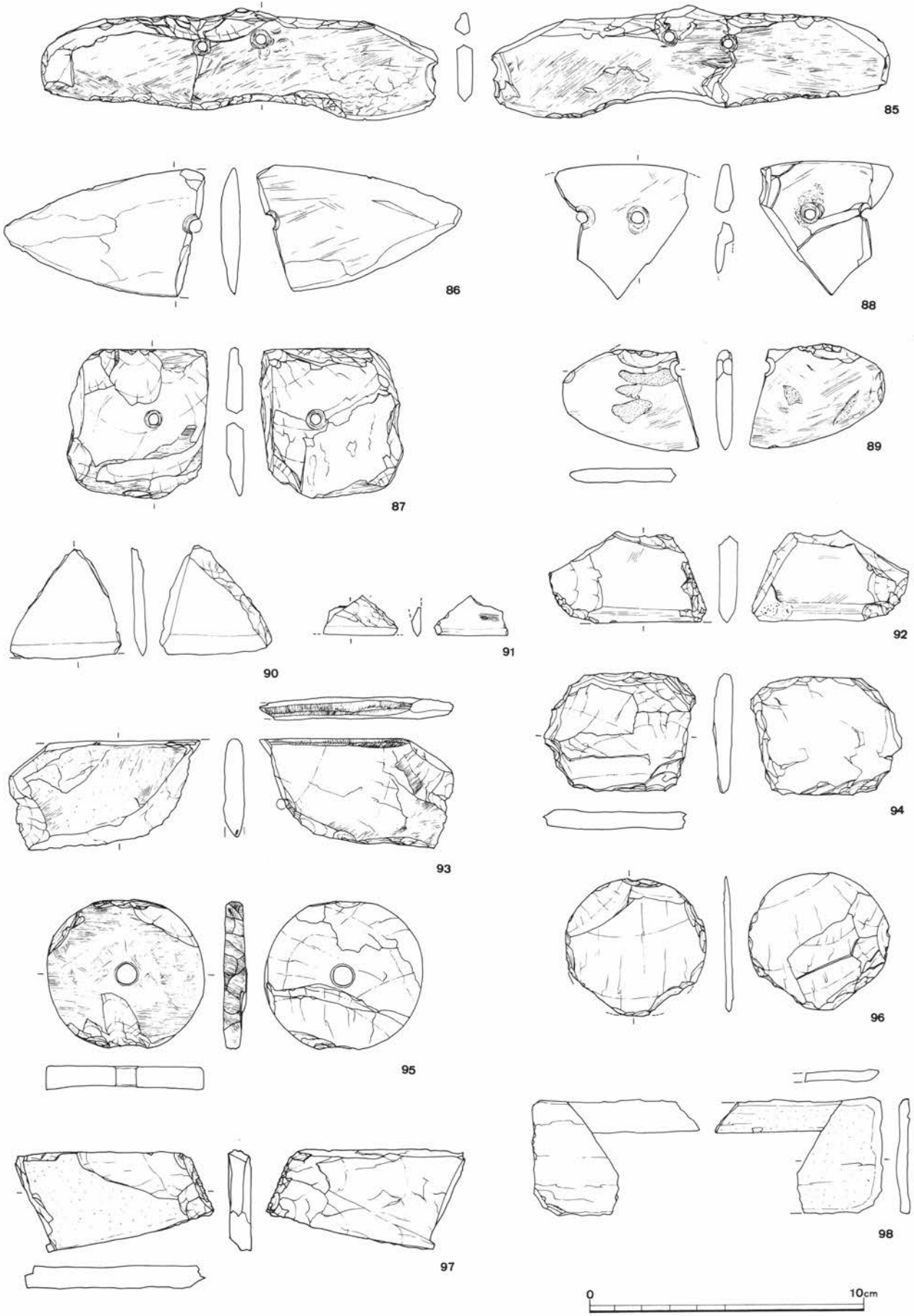


石器实测图(5)

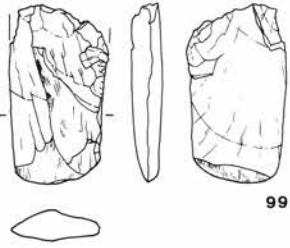


石器实测图(6)

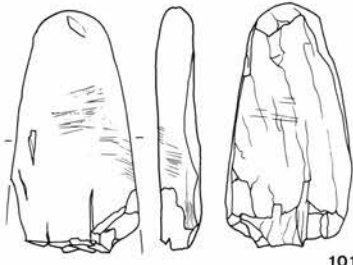




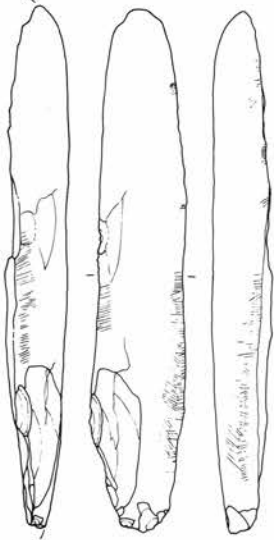
石器实测图(8)



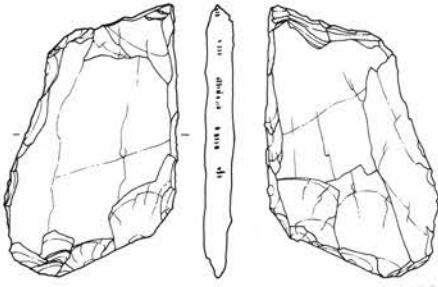
99



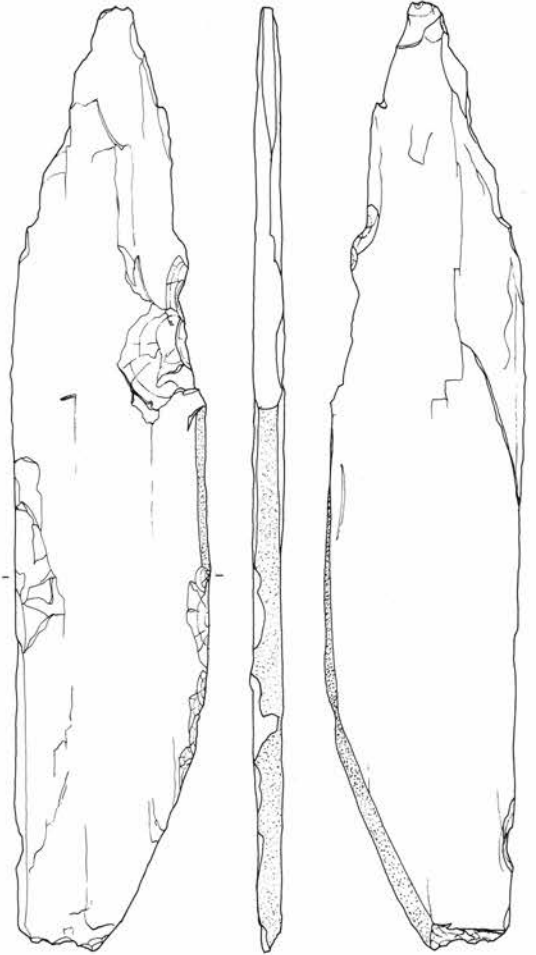
101



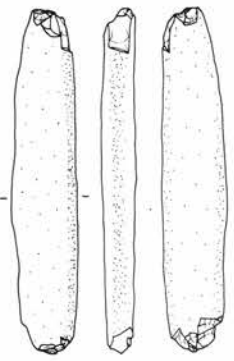
100



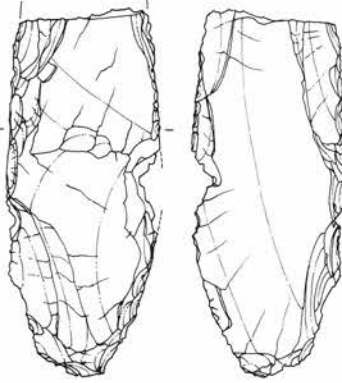
102



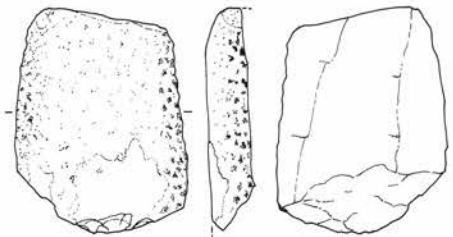
104



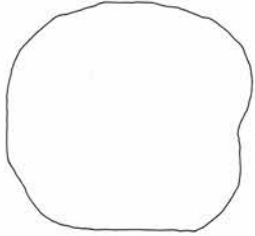
105



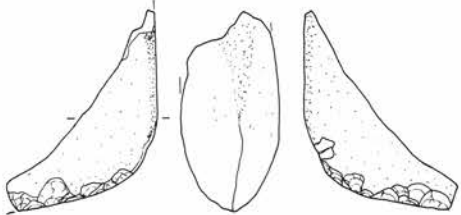
103



107

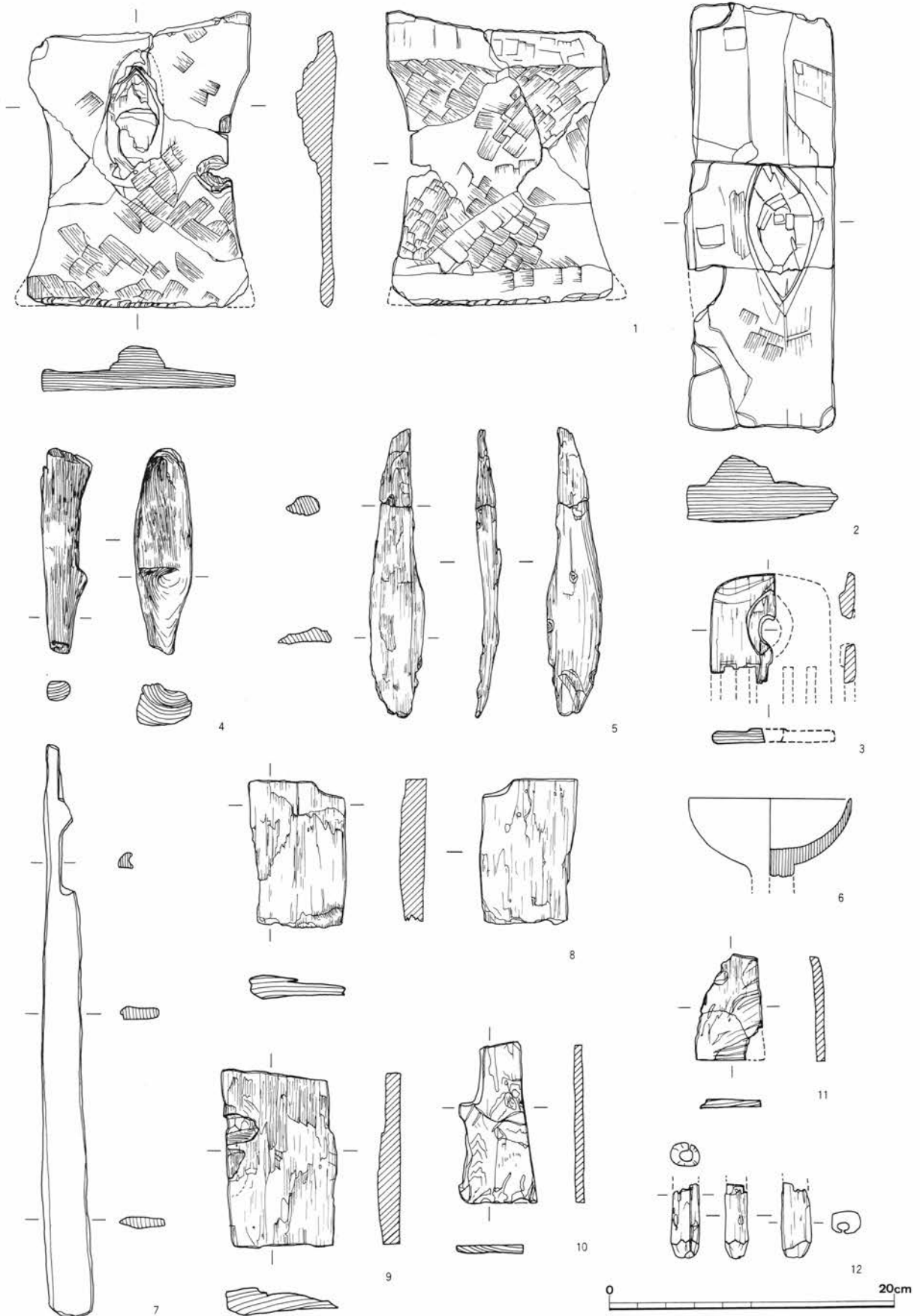


106

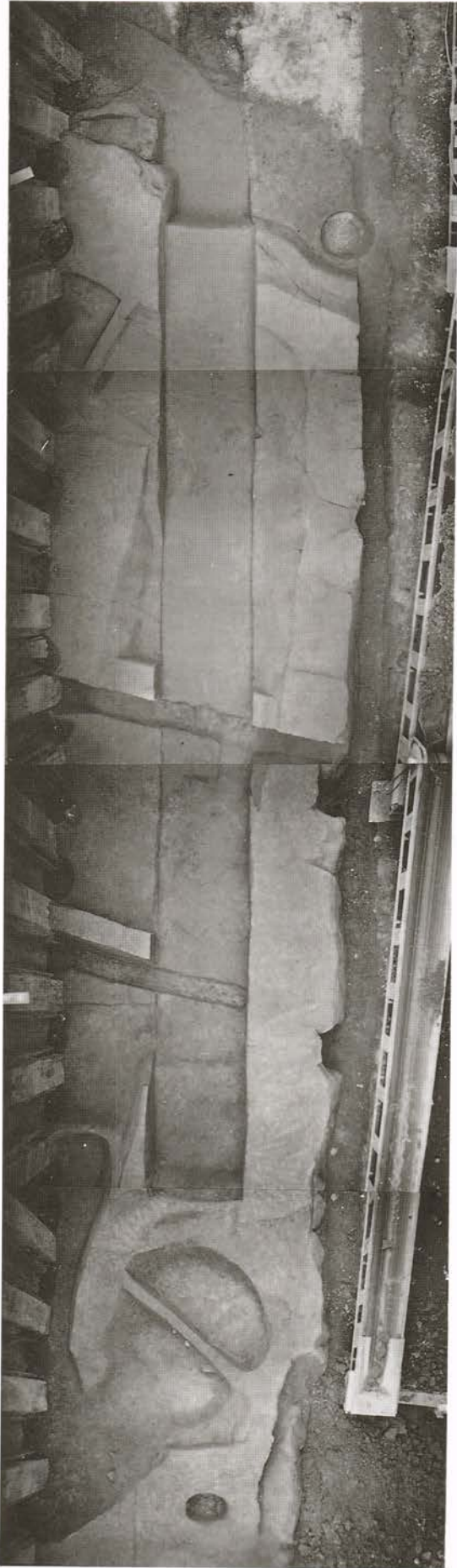


108





木製品実測図



(1)第9トレンチ



(2)第22トレンチ S X60第1層遺物出土状況



(1)SK47 (南から)



(2)SK47断面 (西から)



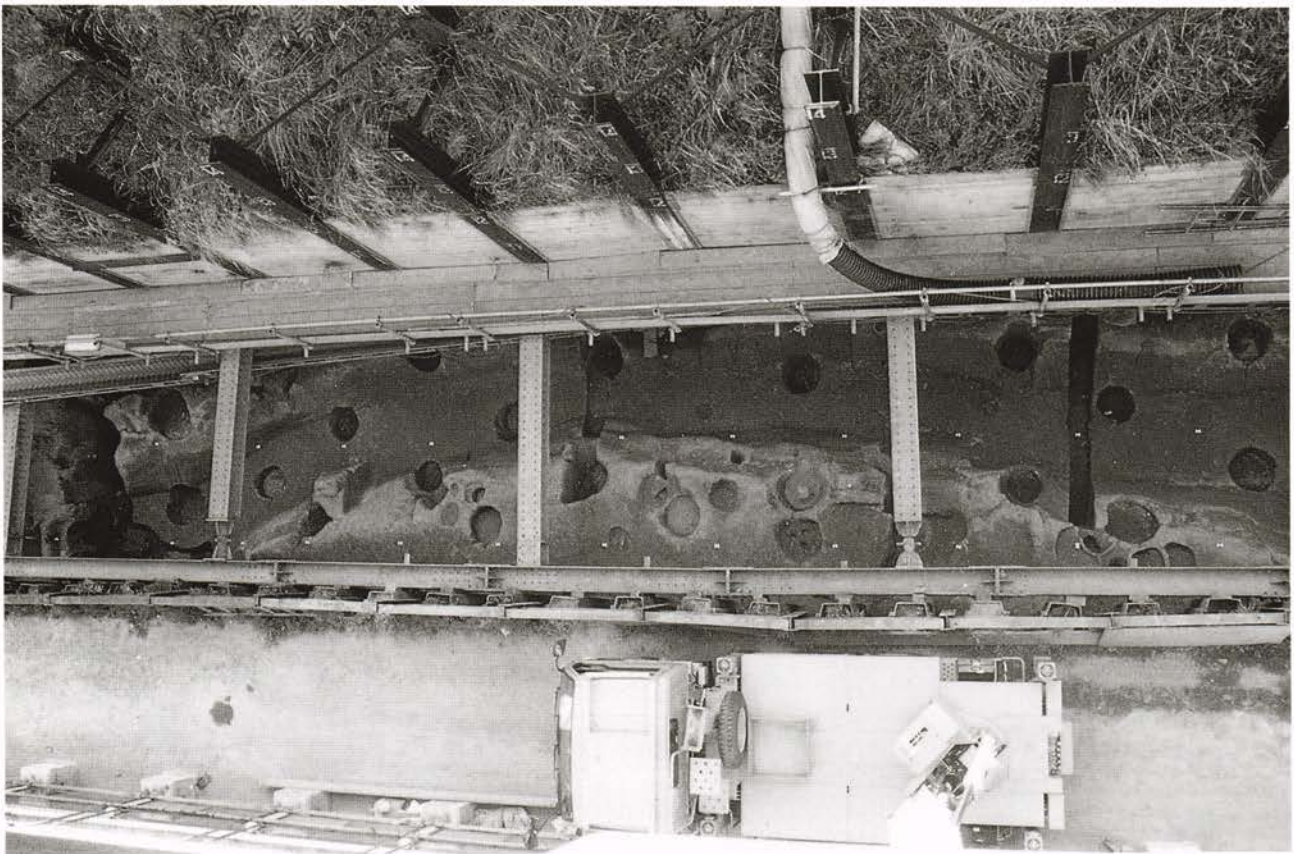
(1) S K47遺物出土状況



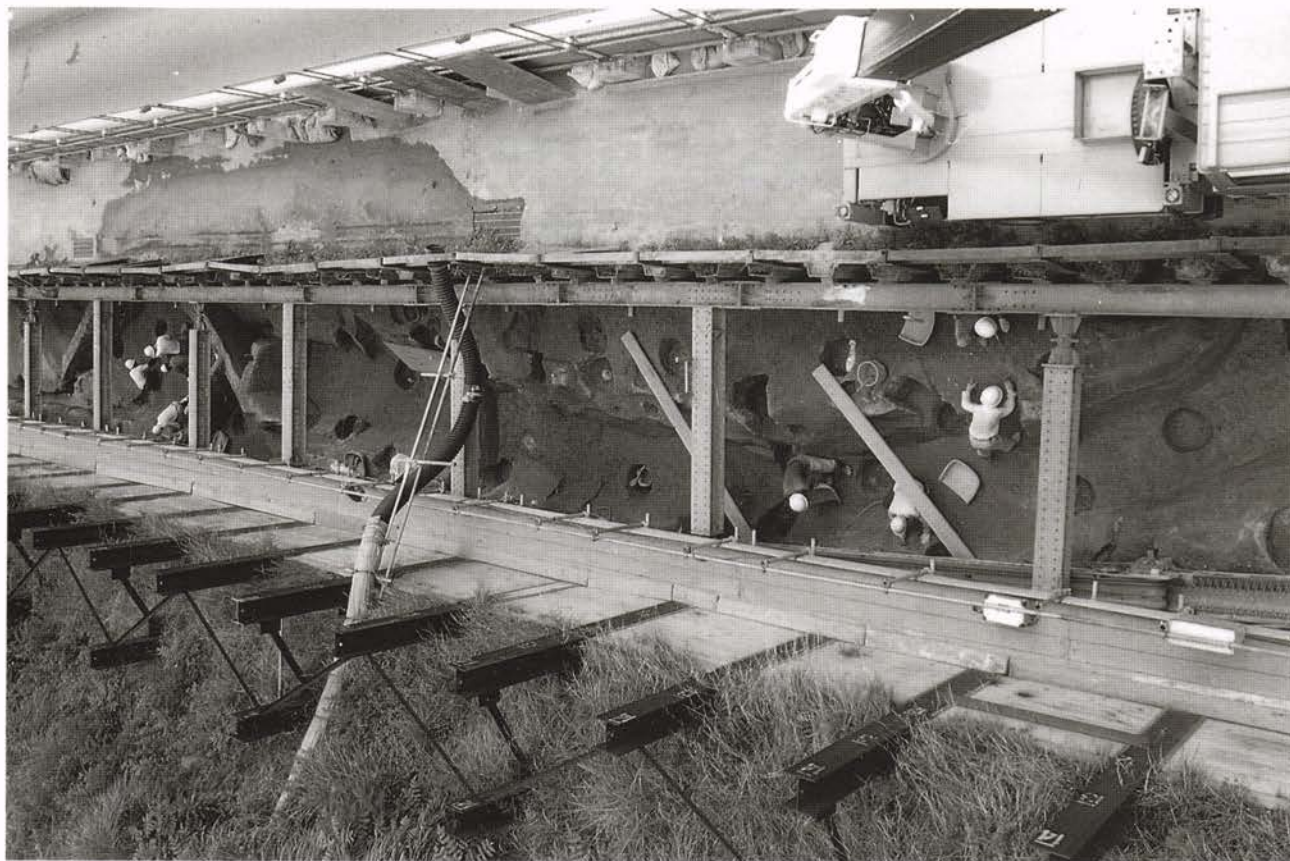
(2) S D48断面 (南西から)



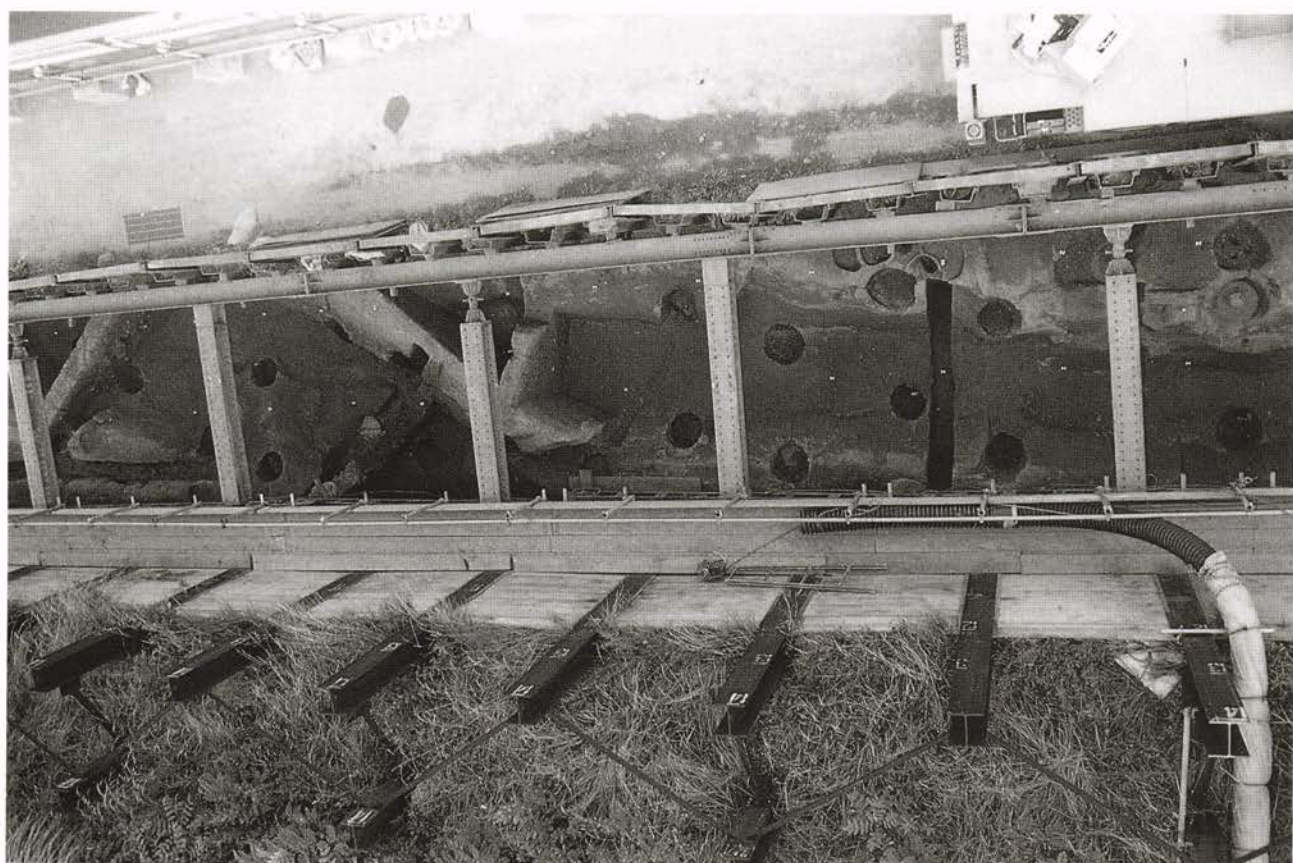
(1)第22トレンチ及び周辺風景（南から）



(2)S X60全景（東から）



(2) S X 60・76掘削前作業風景 (南から)



(1) S X 60・76完掘状況 (南から)



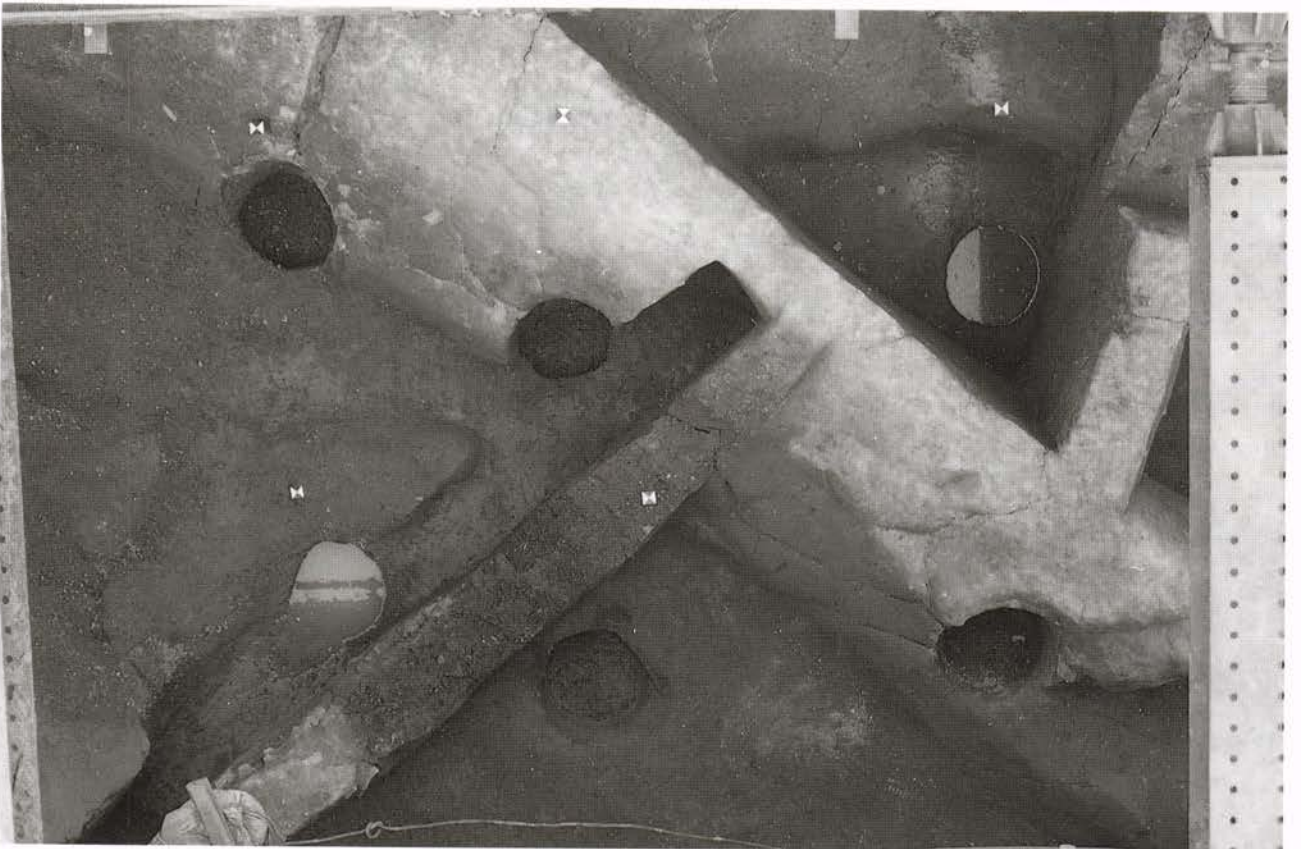
(1) S X 60完掘状況 (南から)



(2) S X 76完掘状況 (北から)



(1) S X60南端 (東から)



(2) S X60・76交差部 (北から)



(1) S X76断面 (東から)



(2) S X60断面 (北から)



(1) S X60断面 (北から)



(2) S X60断面 (北から)



(1) S K75及び周辺土坑 (西から)



(2) S K78 (南から)



(1)S K78遺物出土状況（北から）



(2)S K78（西から）



(1) S X60遺物出土状況 (東から)



(2) S X76遺物出土状況



(1) S K84遺物出土状況 (南から)



(2) 小形壺形土器出土状況



(1) S K75遺物出土状況（東から）



(2) S X76第2層遺物出土状況



(1)木製品出土状況



(2)木製品出土状況



(1)紡錘車出土状況



(2)S X 60動物骨出土状況



(1)発掘調査風景



(2)説明会風景（北東から）



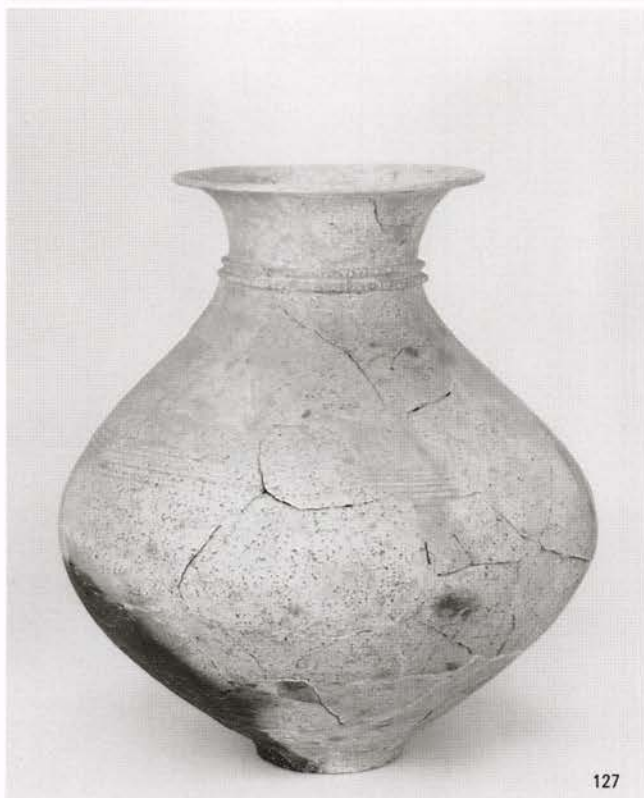
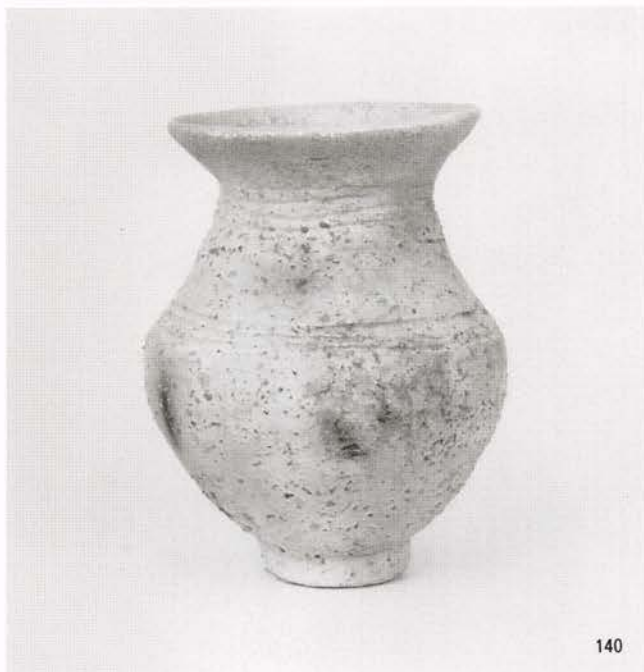
S X76第1層出土土器(1)

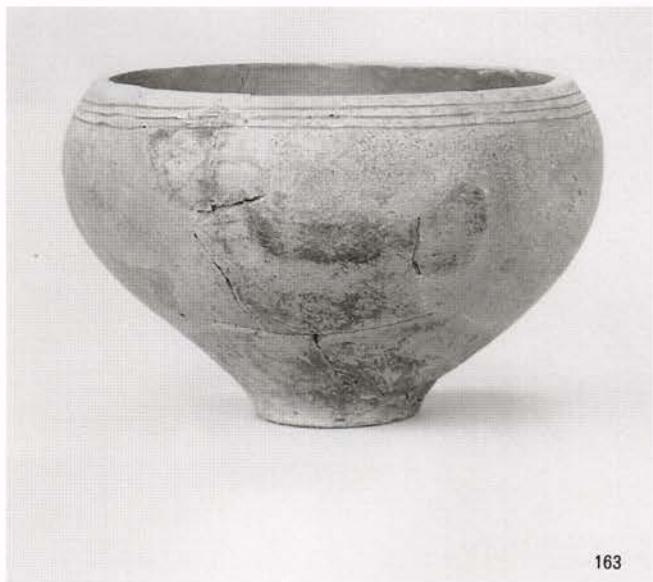


S X 76第1層出土土器(2)



S X76第2層出土土器(1) 293は3層





S X76第2層出土土器(3)



S X76第2層出土土器(4)



S X76第2層出土土器(5)





S X 76第3層・S X 60第1層出土土器





480



427



481



432



494



438



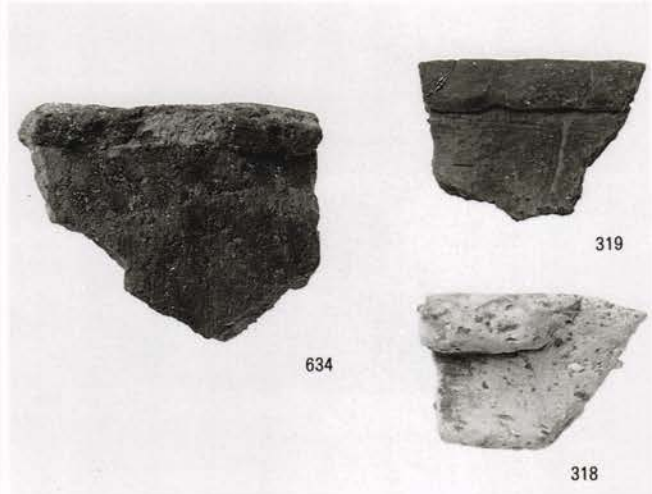
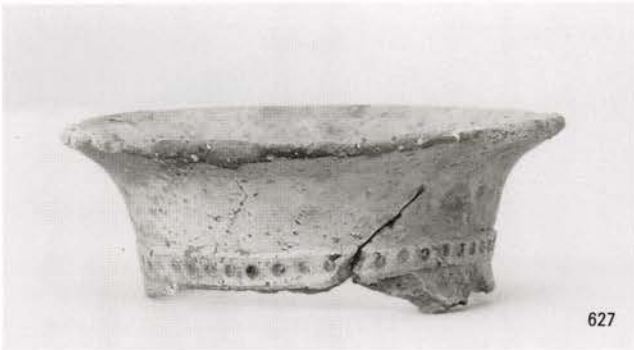
495



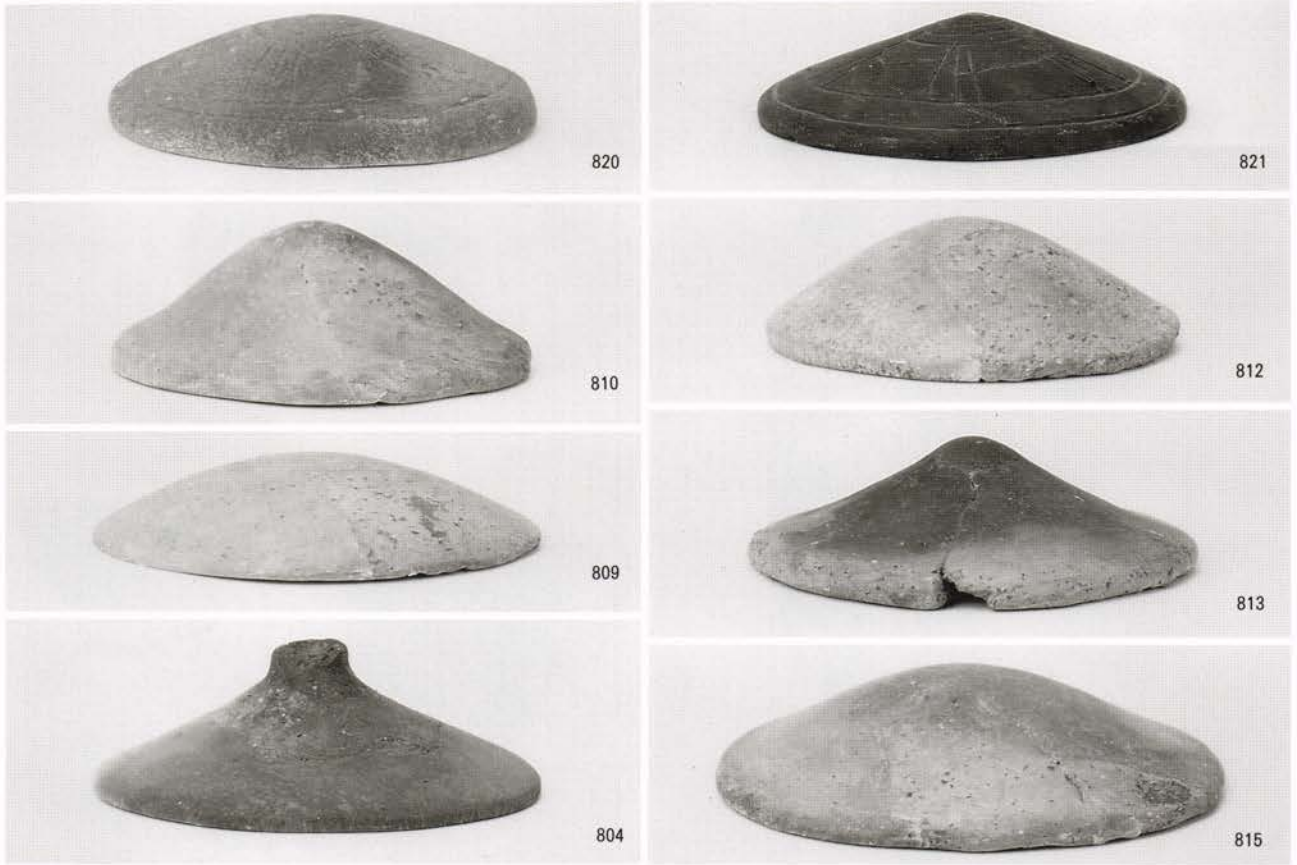
426



S X 60第2 ~ 4層出土土器



S X60第4・5層 S K47出土土器及び蓋形土器



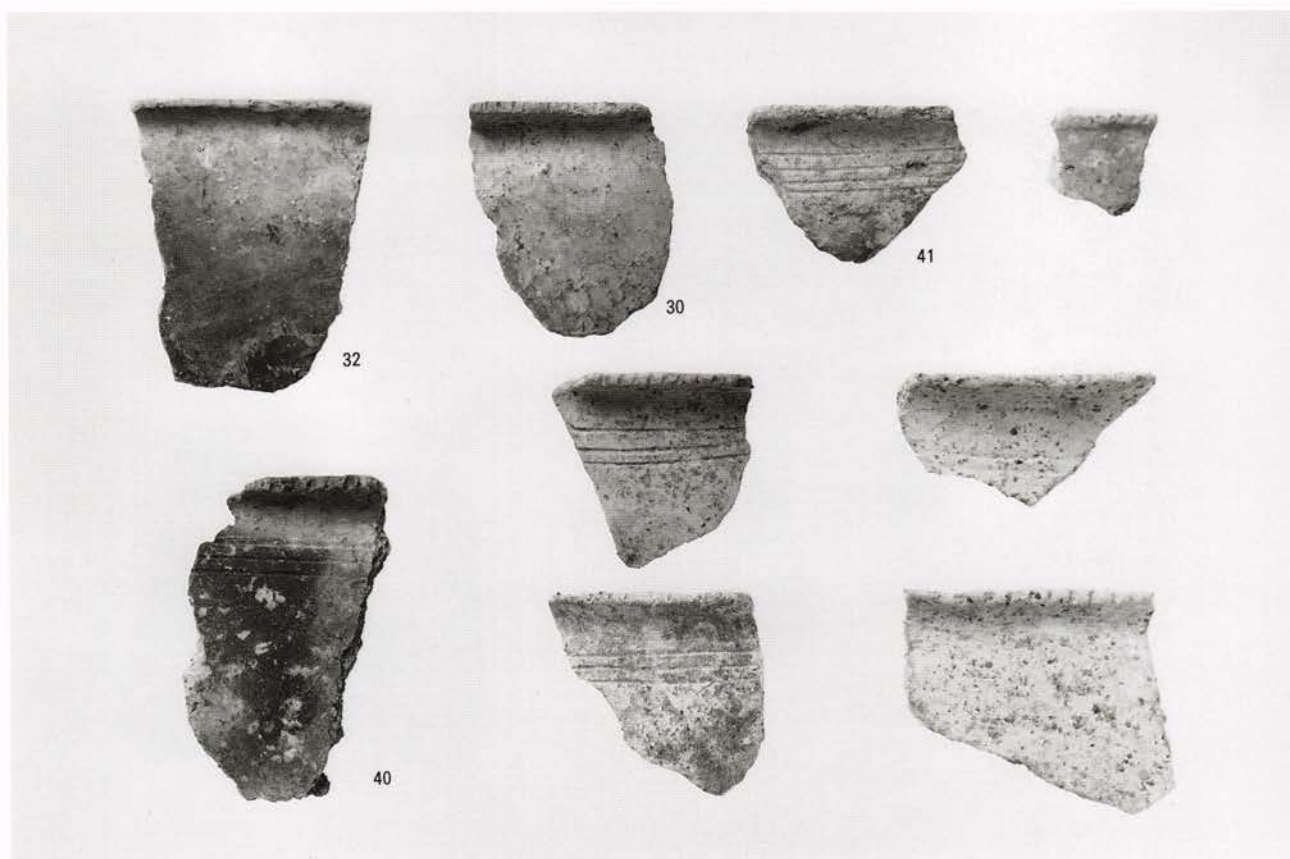
(1)蓋形土器



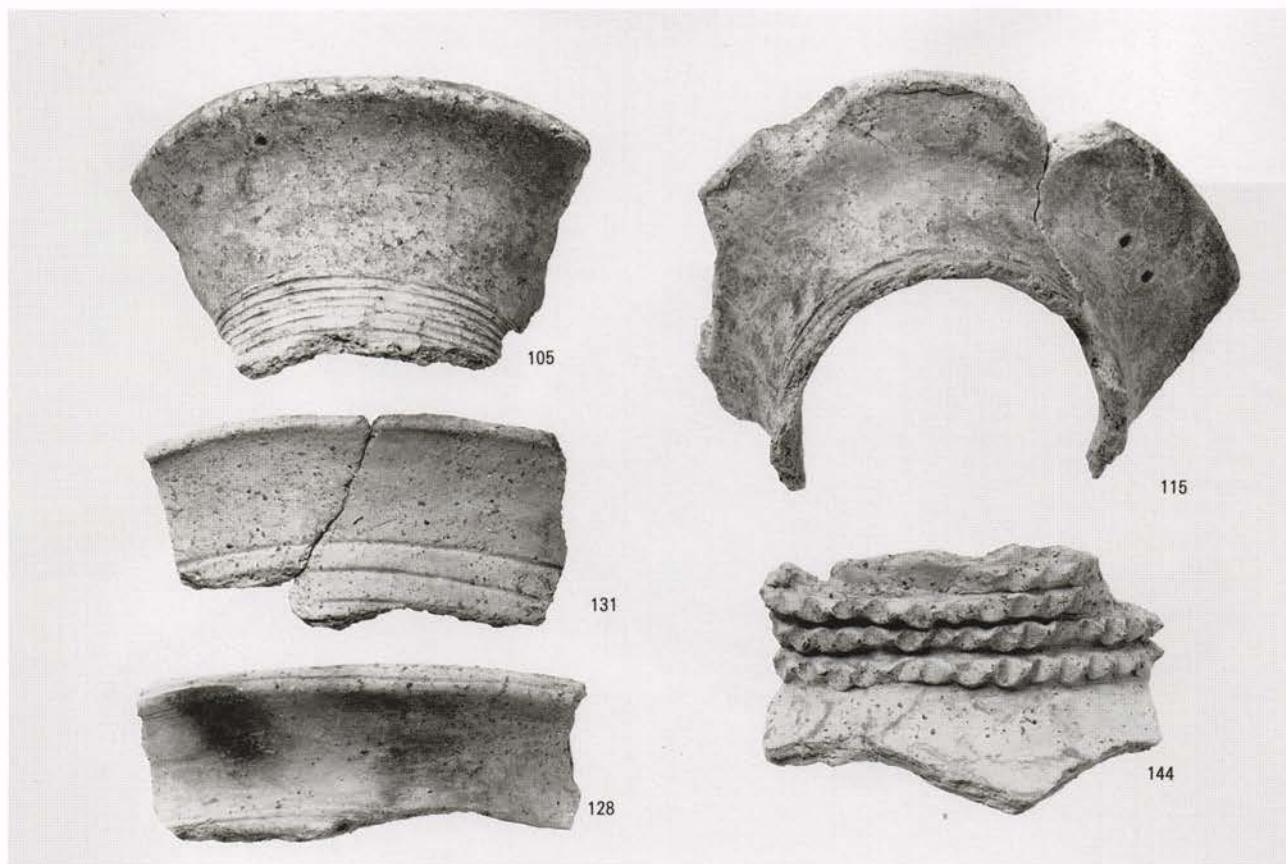
(2)S X76第1層出土壺形土器



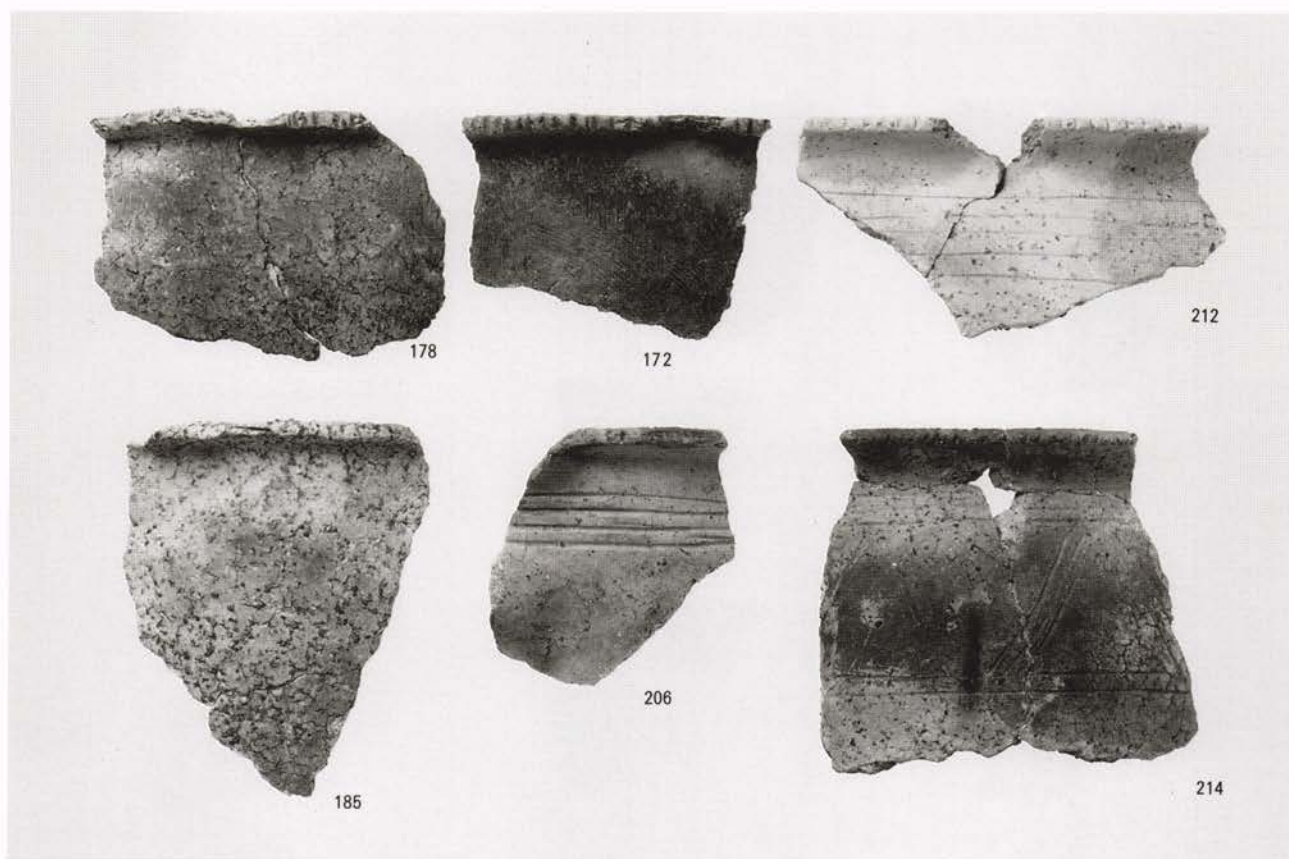
(1) S X 76 第 1 層出土壺形土器



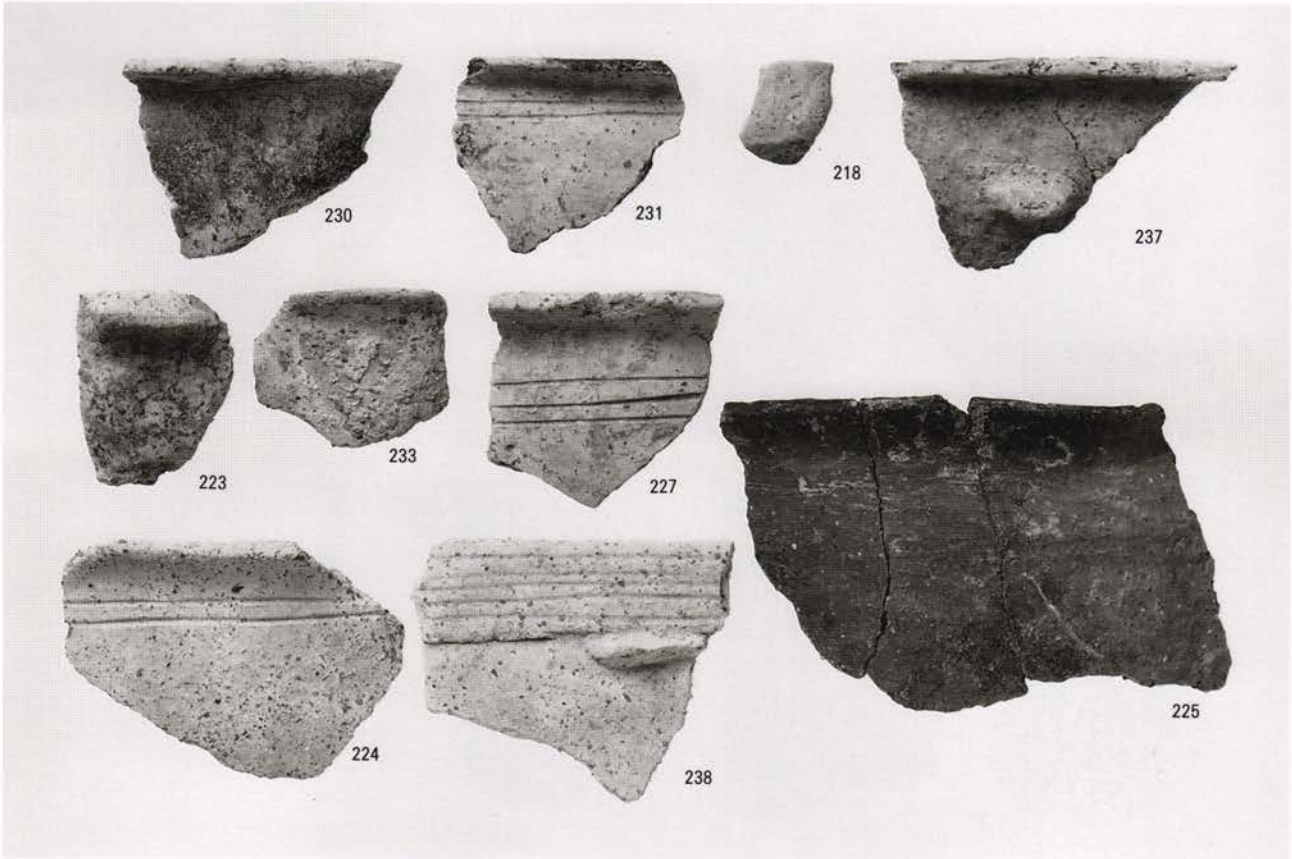
(2) S X 76 第 1 層出土甕形土器



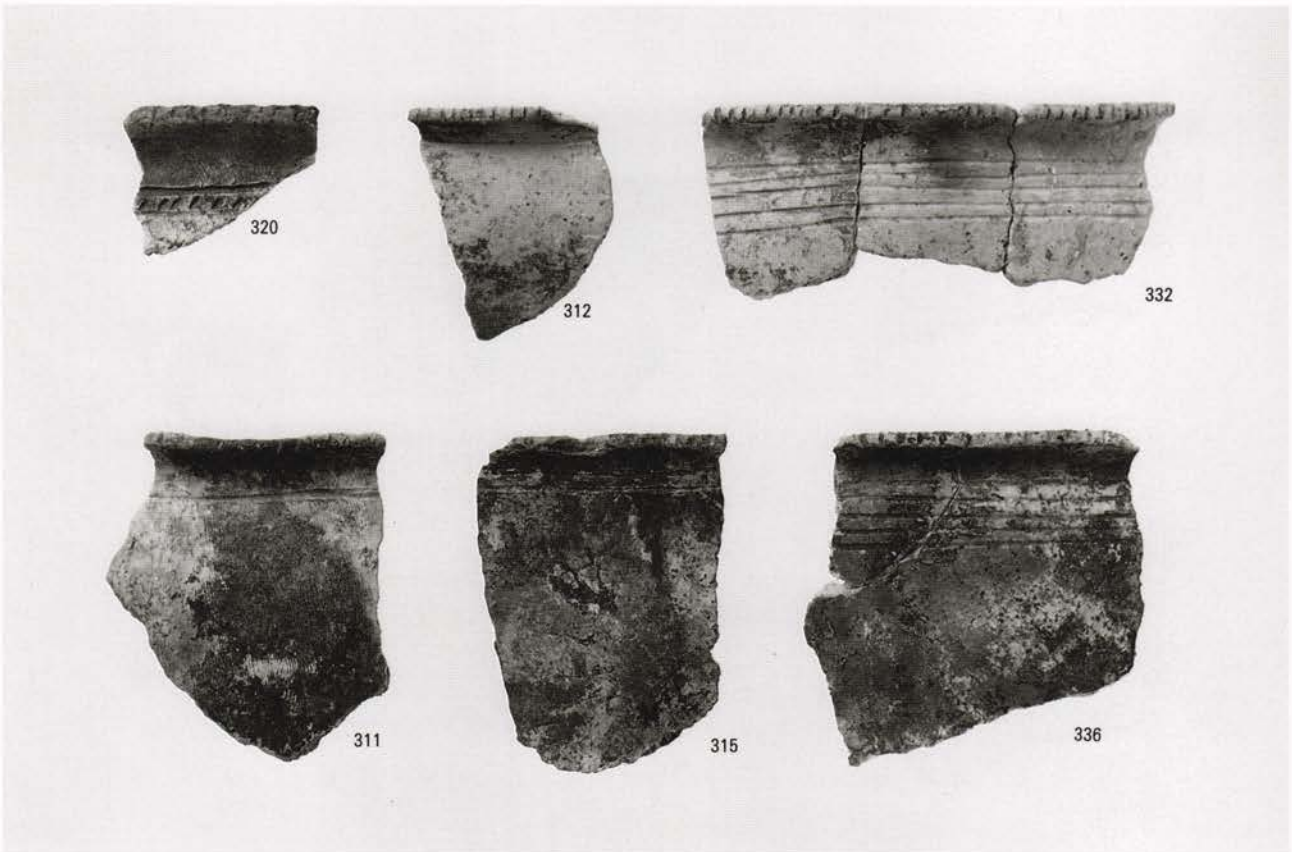
(1) S X 76第2層出土壺形土器



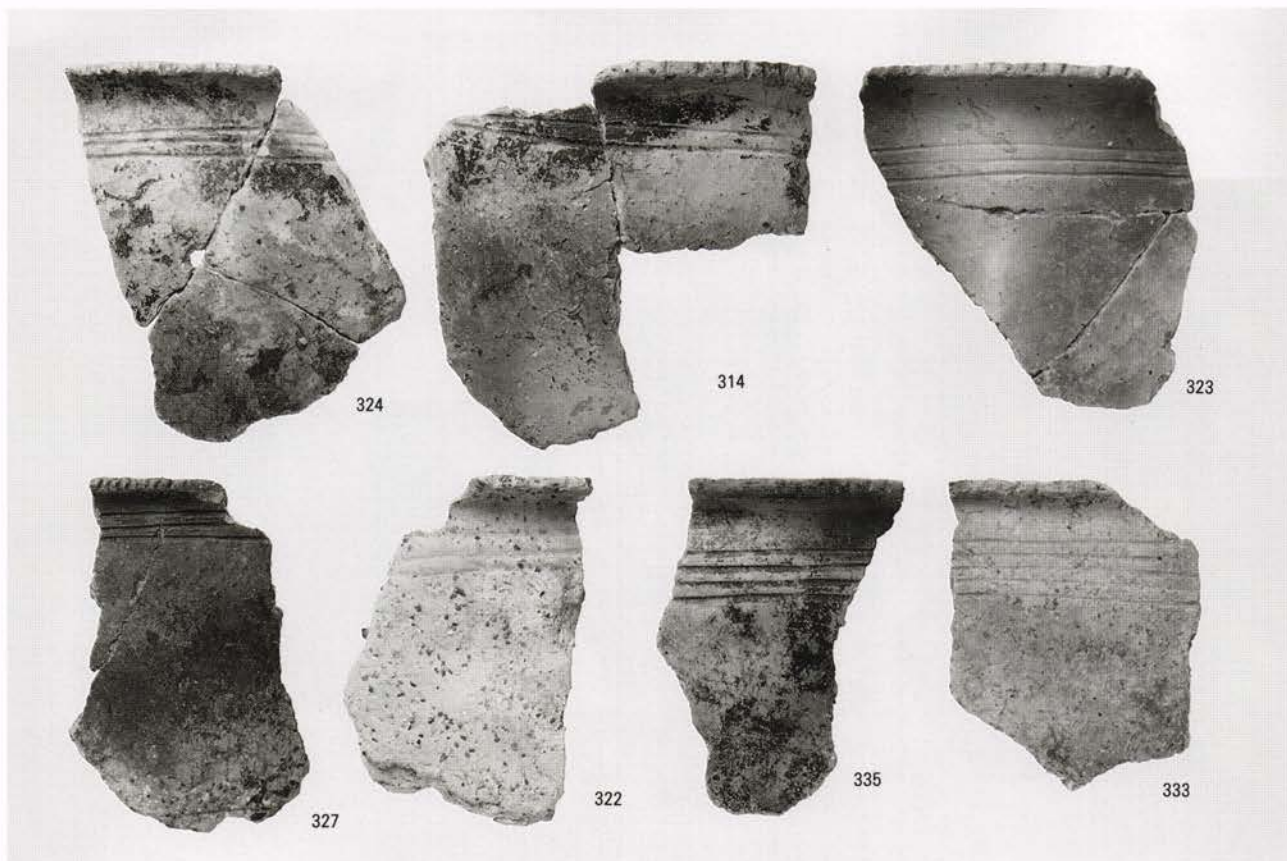
(2) S X 76第2層出土甕形土器



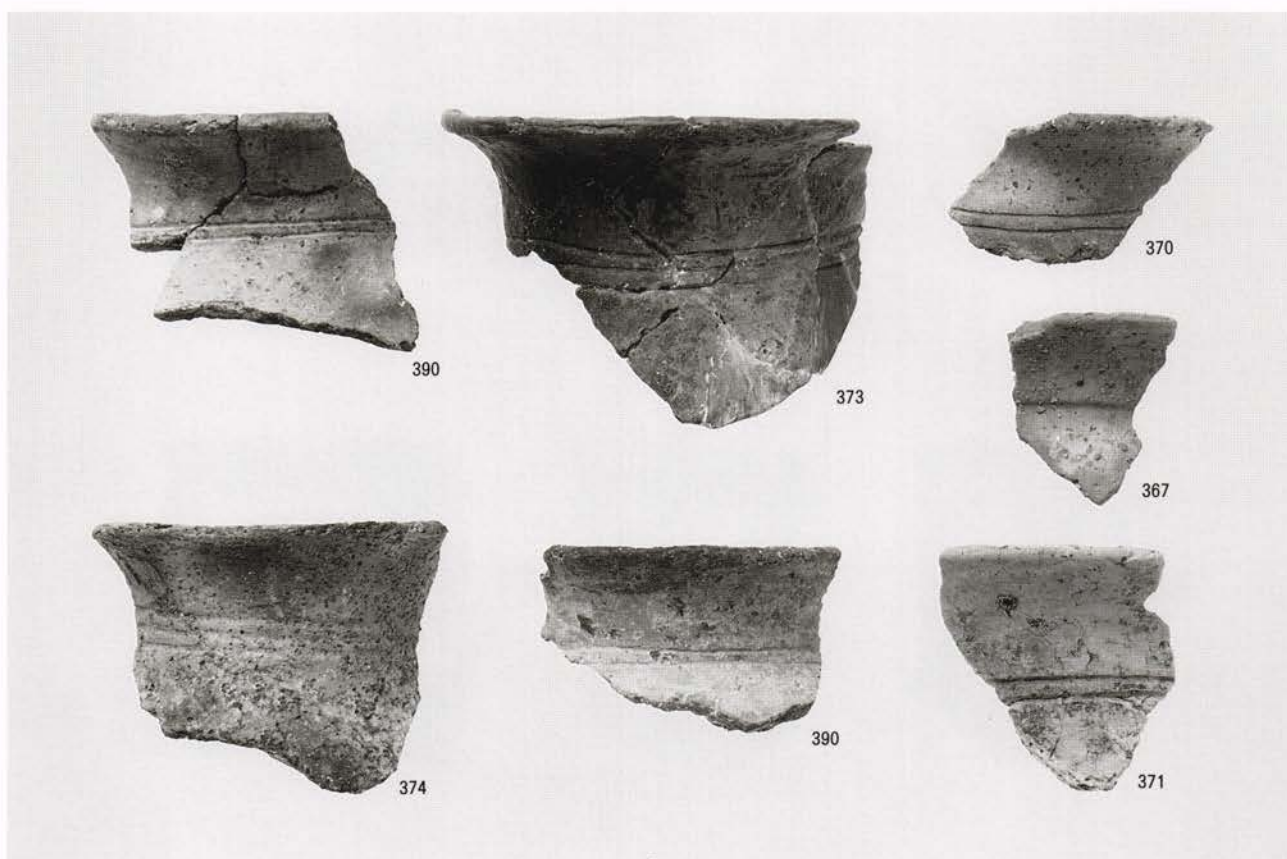
(1) S X76第2層出土鉢形土器



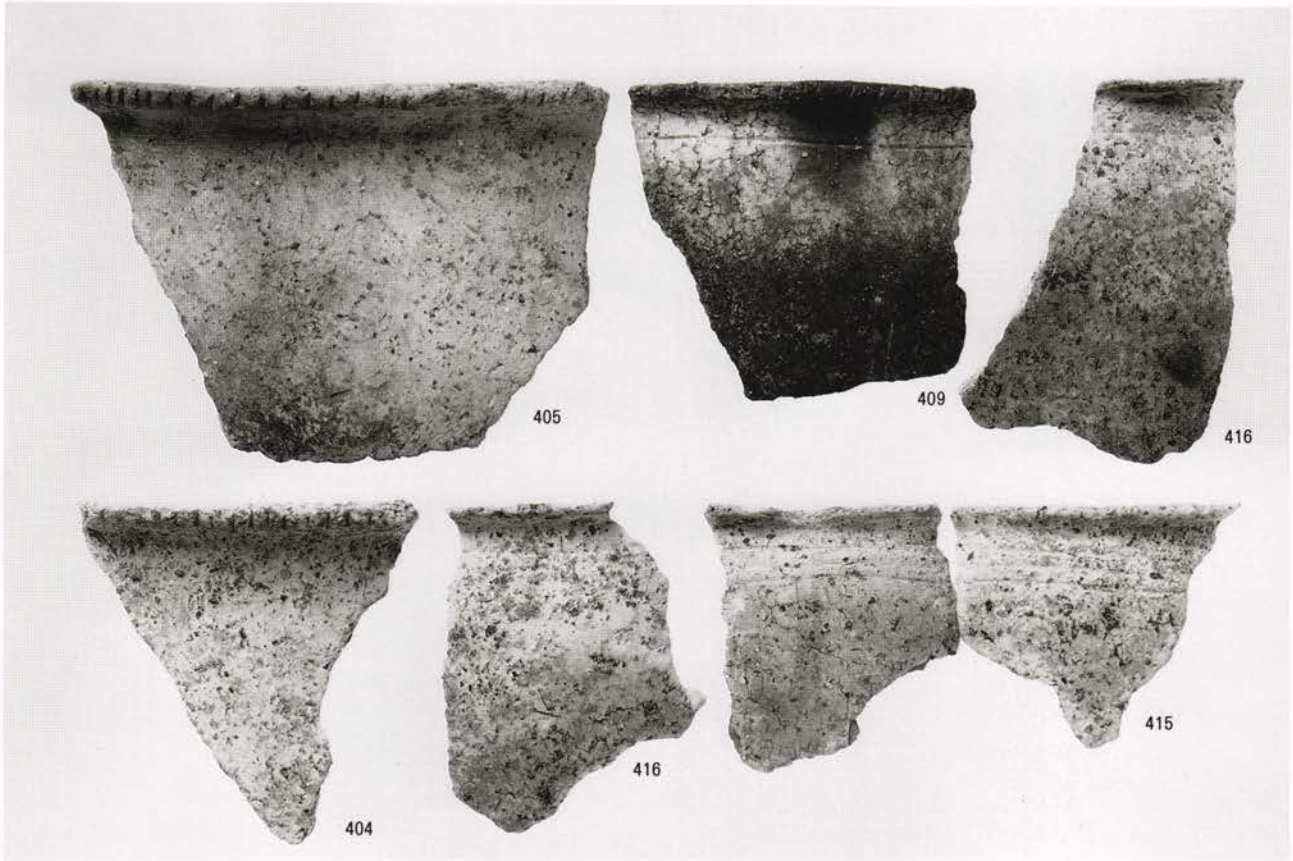
(2) S X76第3層出土甕形土器



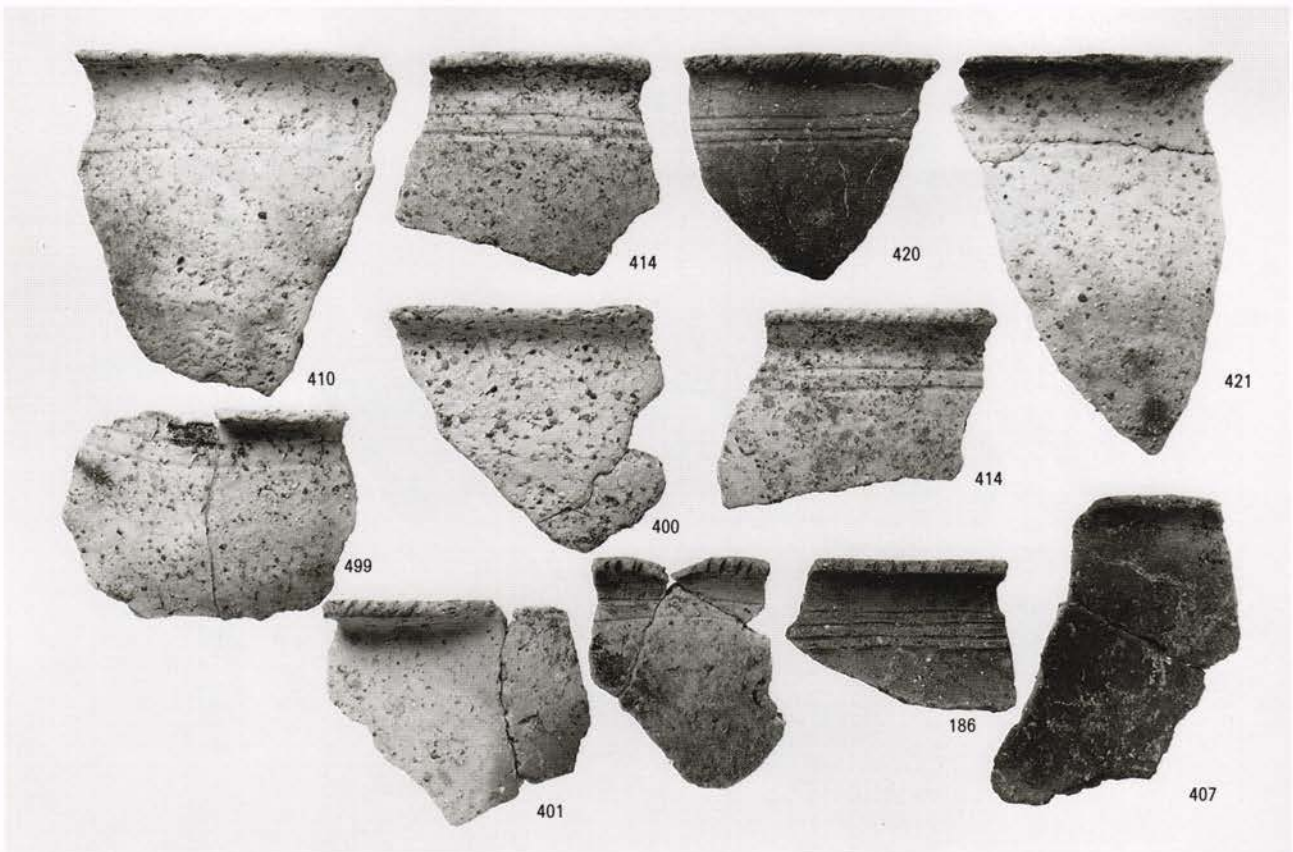
(1) S X76第3層出土甕形土器



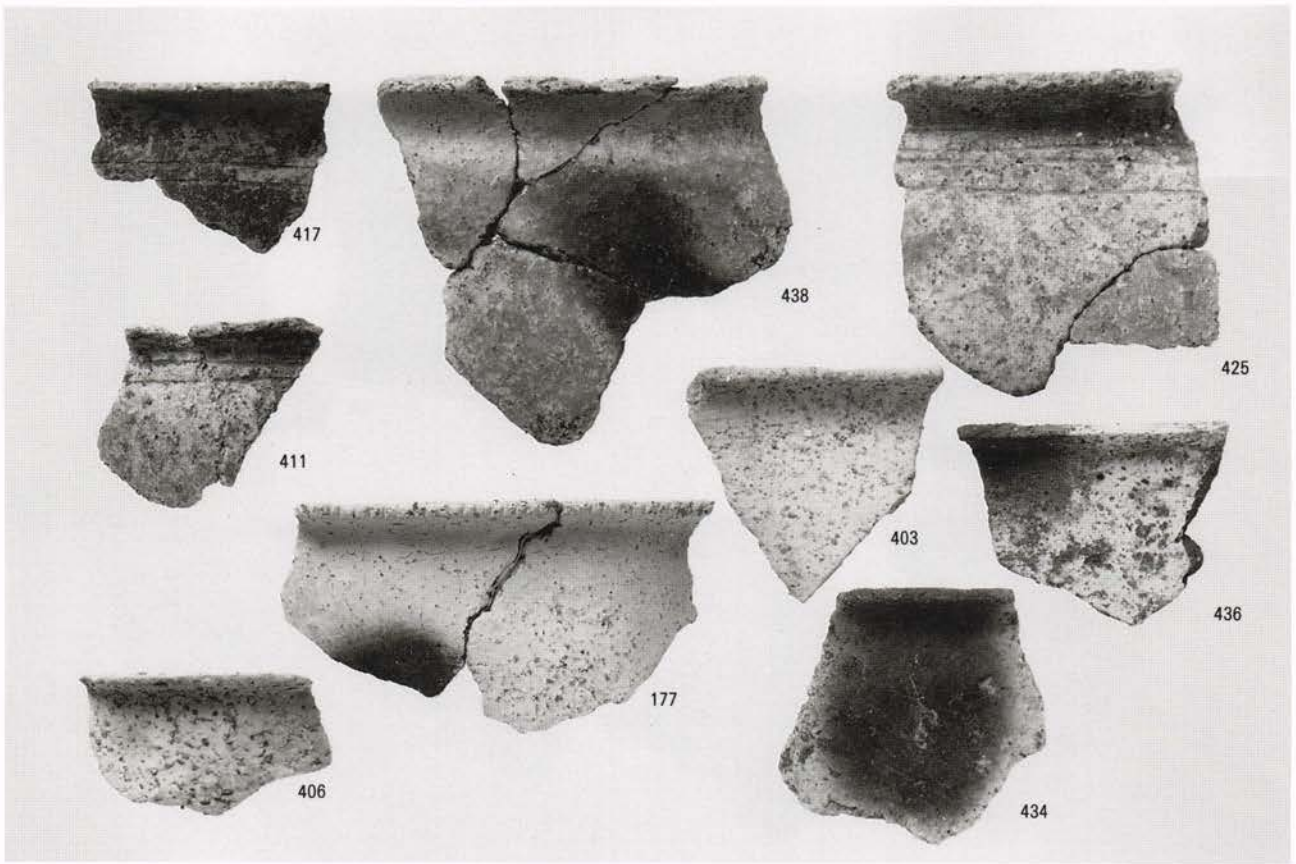
(2) S X60第1層出土壺形土器



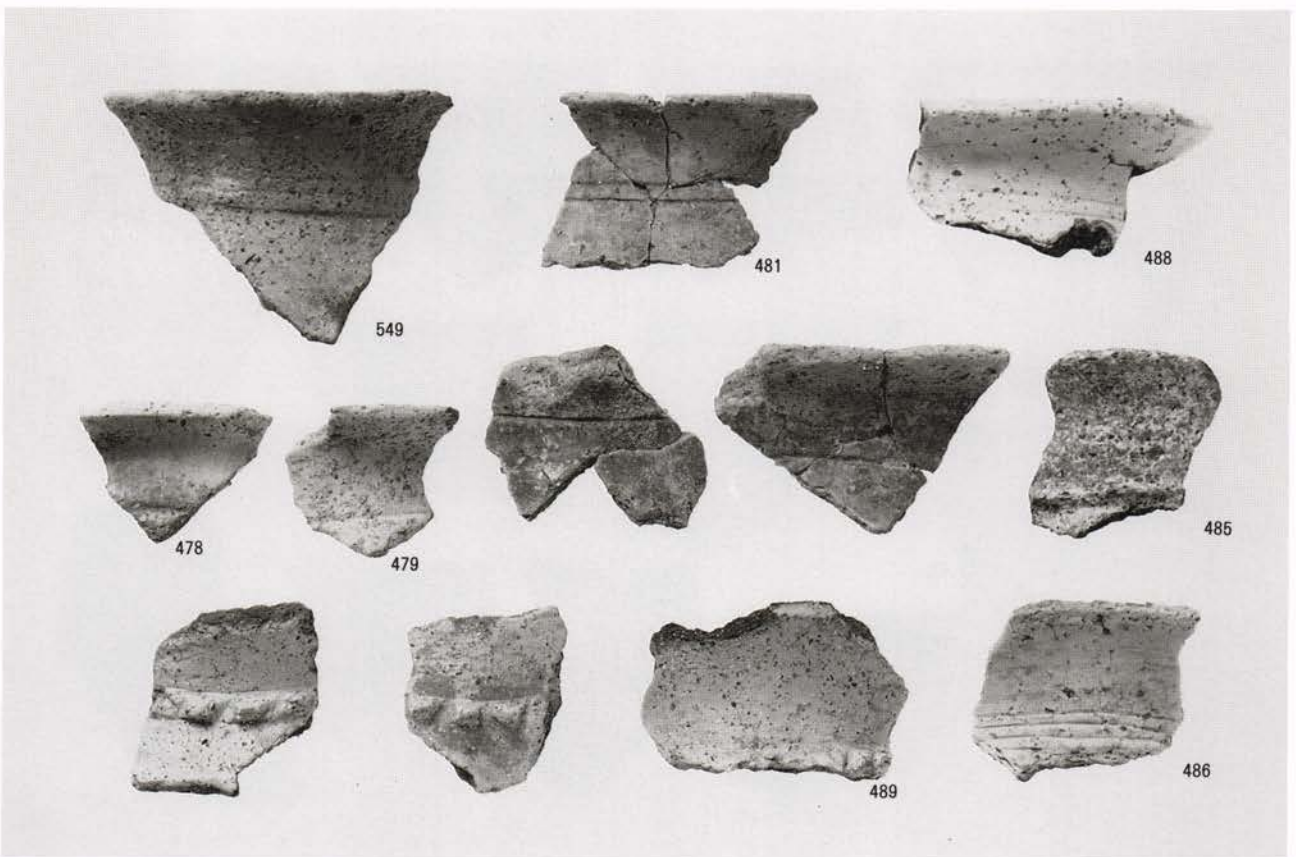
(1) S X 60第1層出土甕形土器(1)



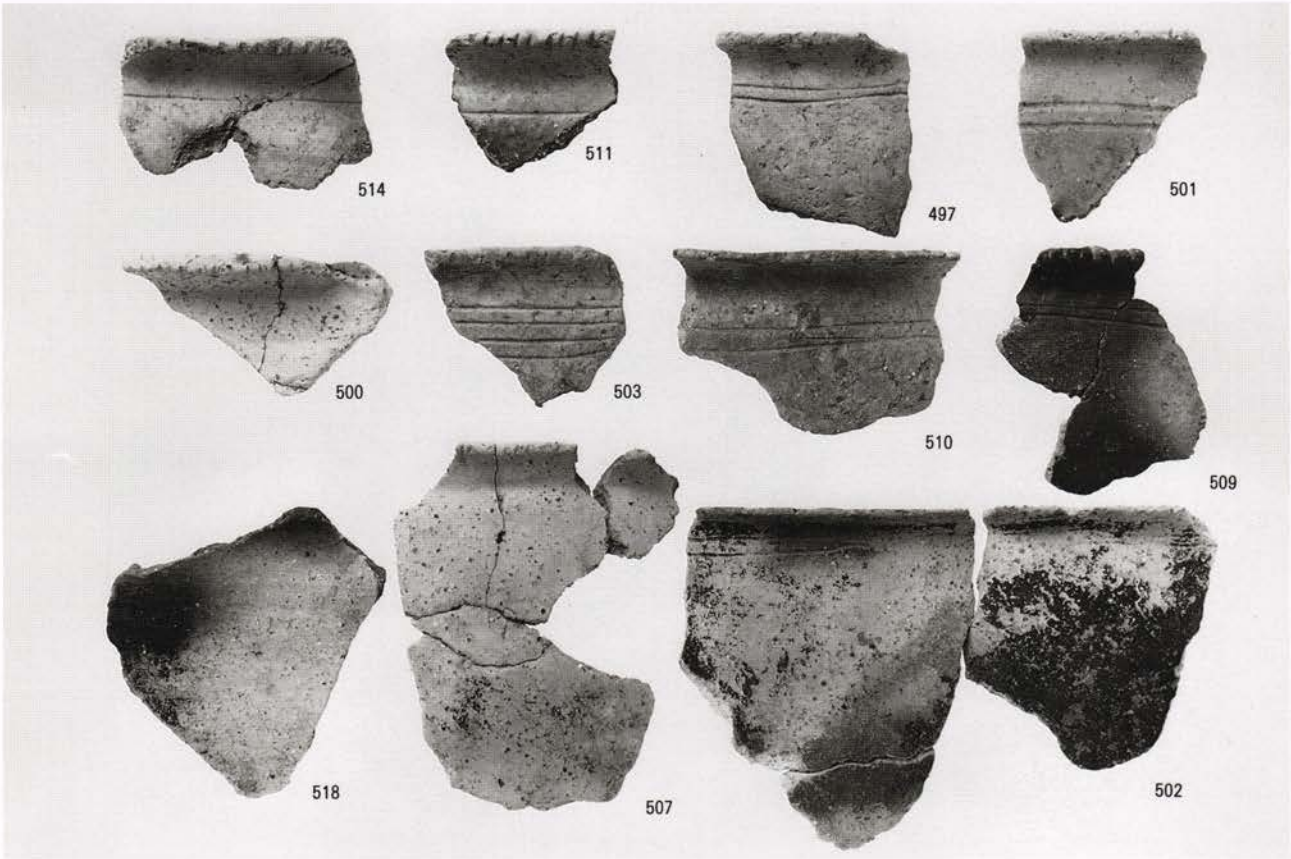
(2) S X 60第1層出土甕形土器(2) (186はS X 76第2層) (499はS X 60第2層)



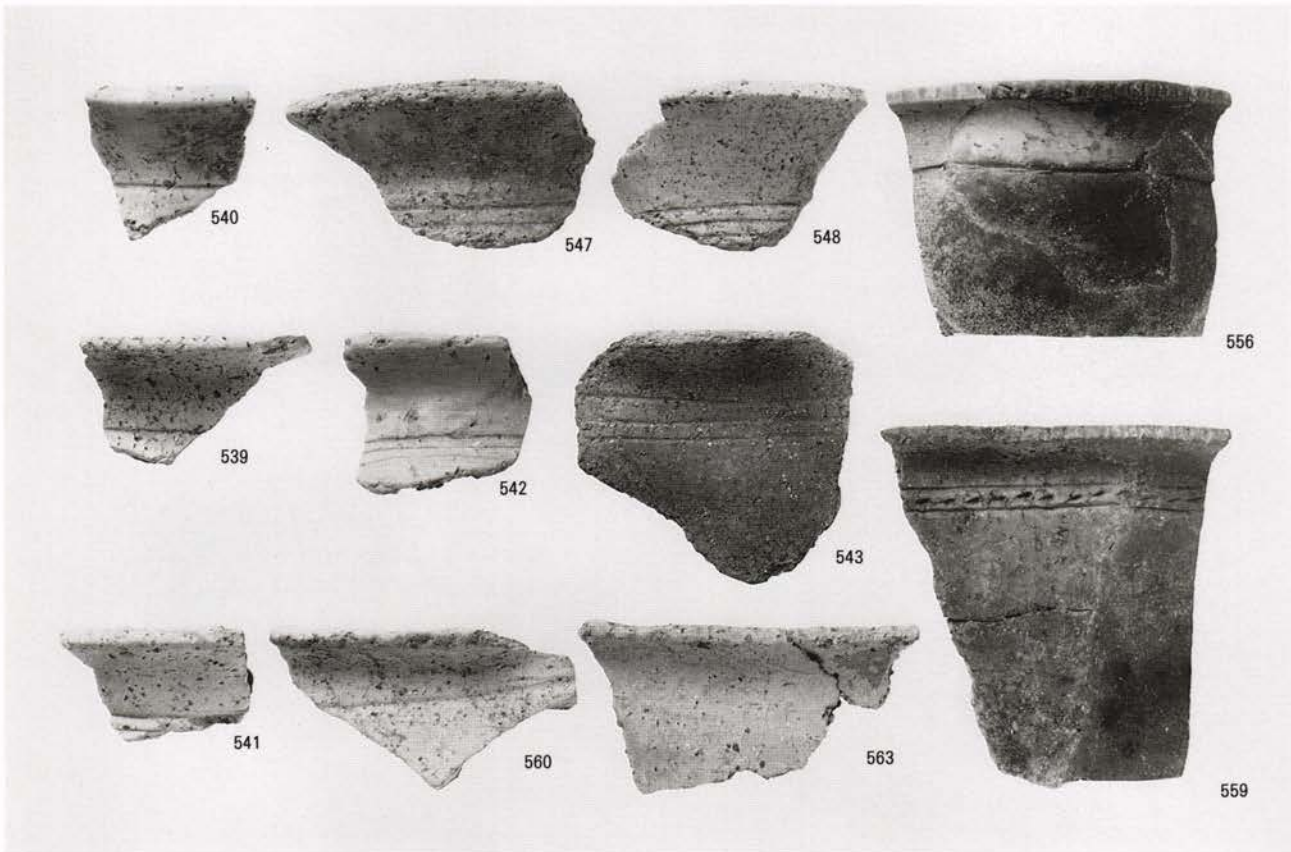
(1) S X60第1層出土甕形土器・鉢形土器 (177はS X76第2層)



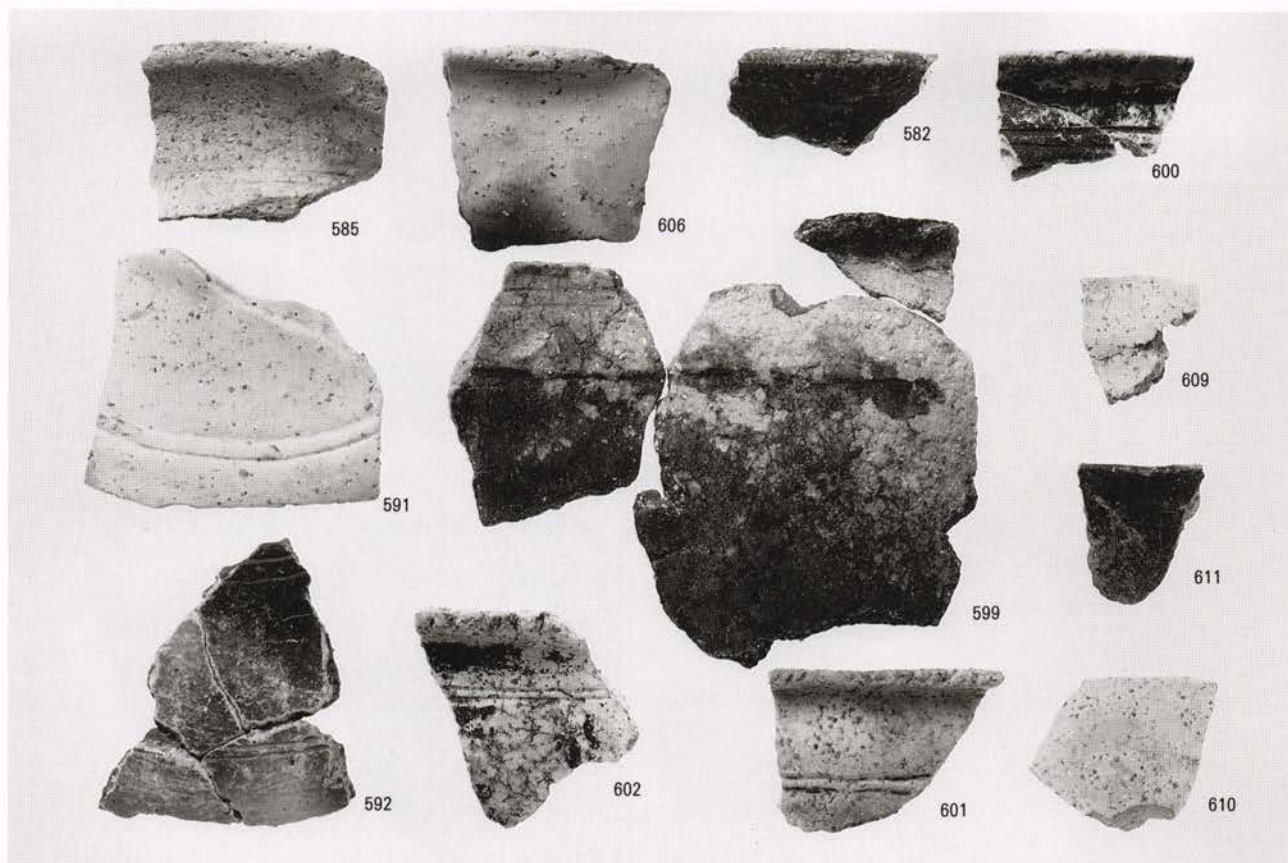
(2) S X60第2層出土壺形土器 (549は3層)



(1) S X 60第2層出土甕形土器・鉢形土器



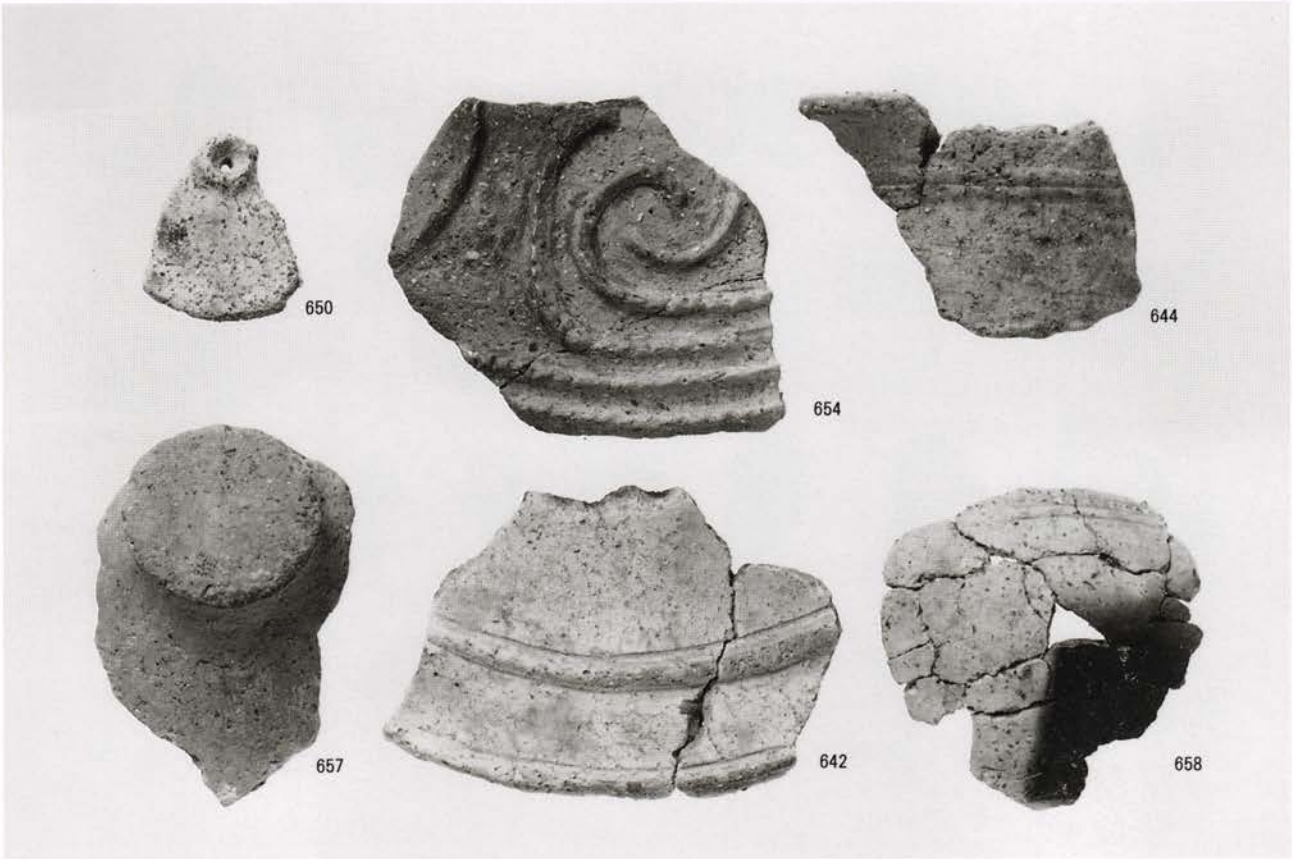
(2) S X 60第3層出土土器



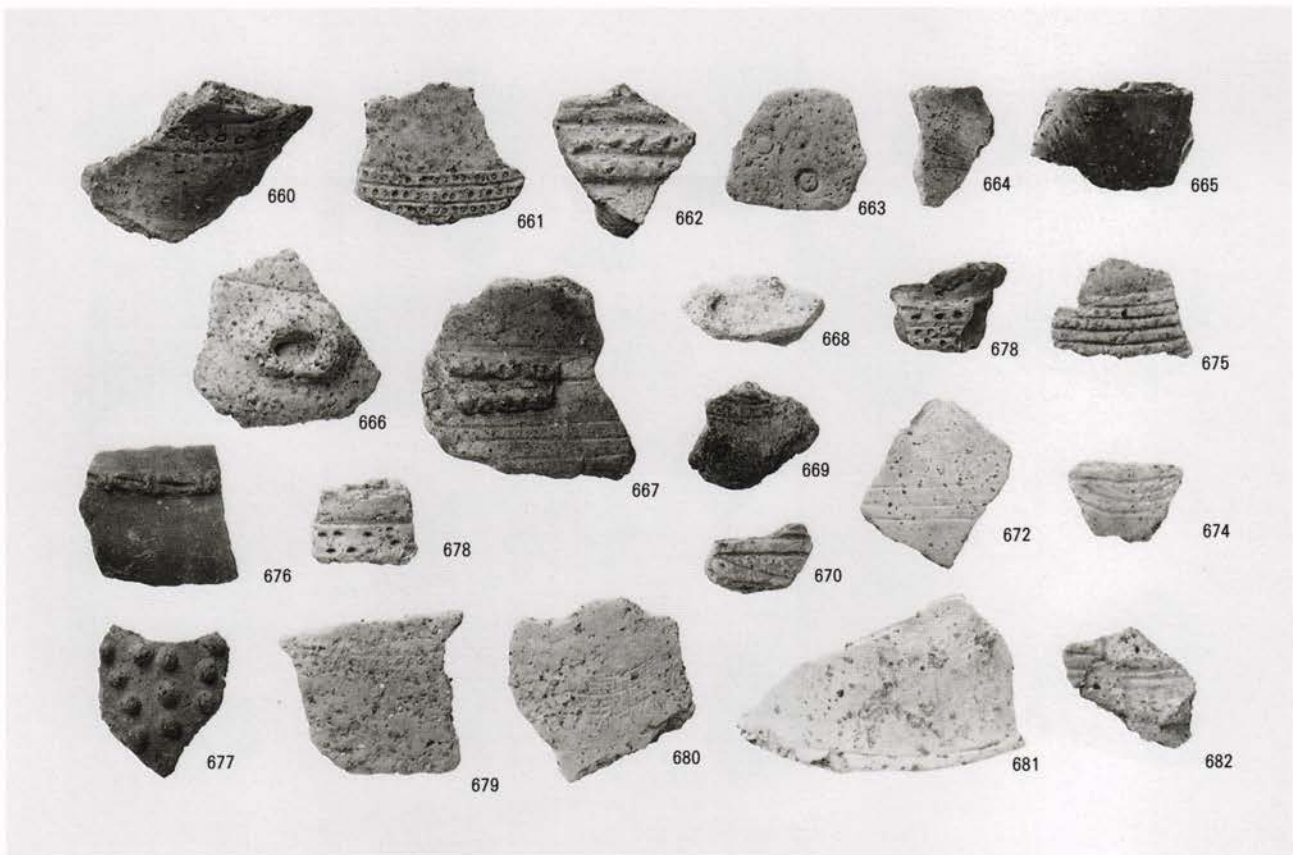
(1) S X 60第4層出土土器



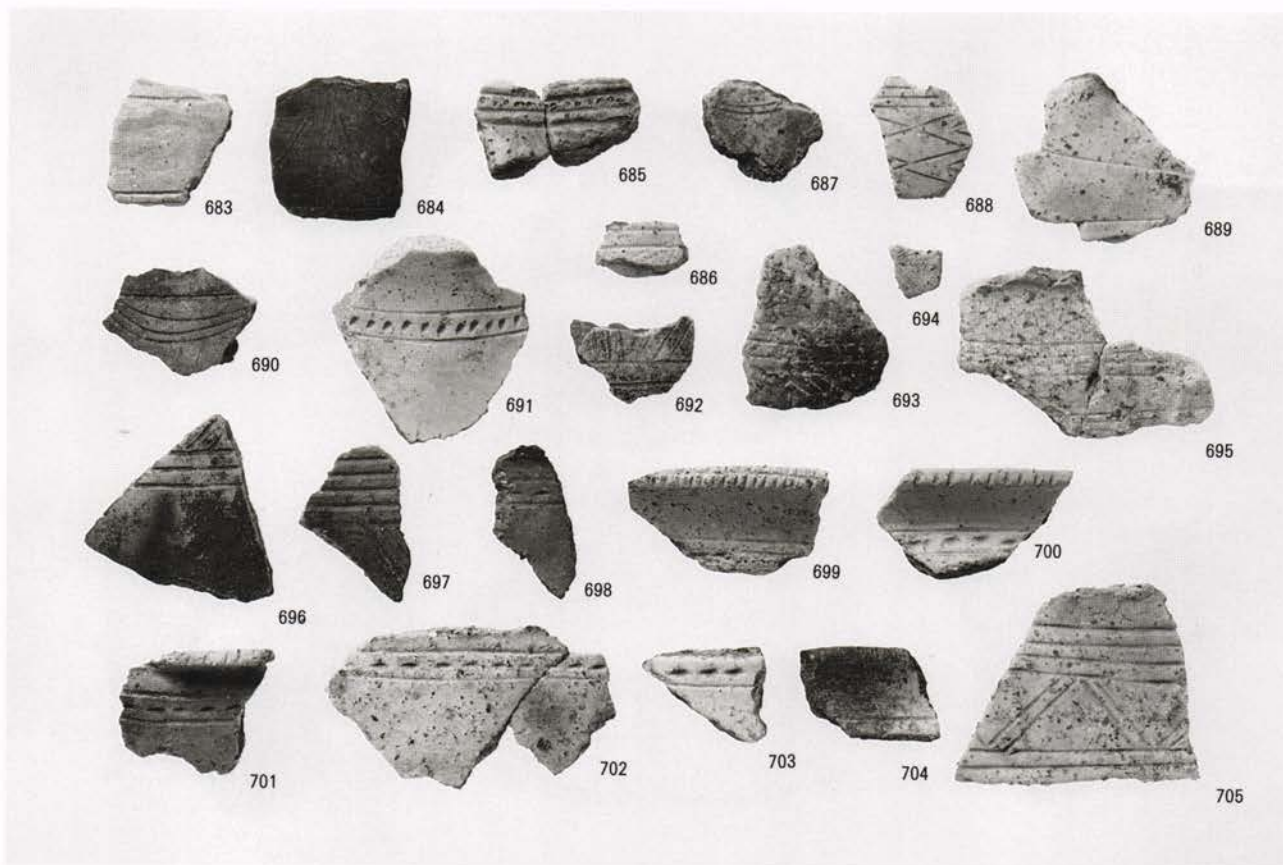
(2) S X 60第5層出土土器



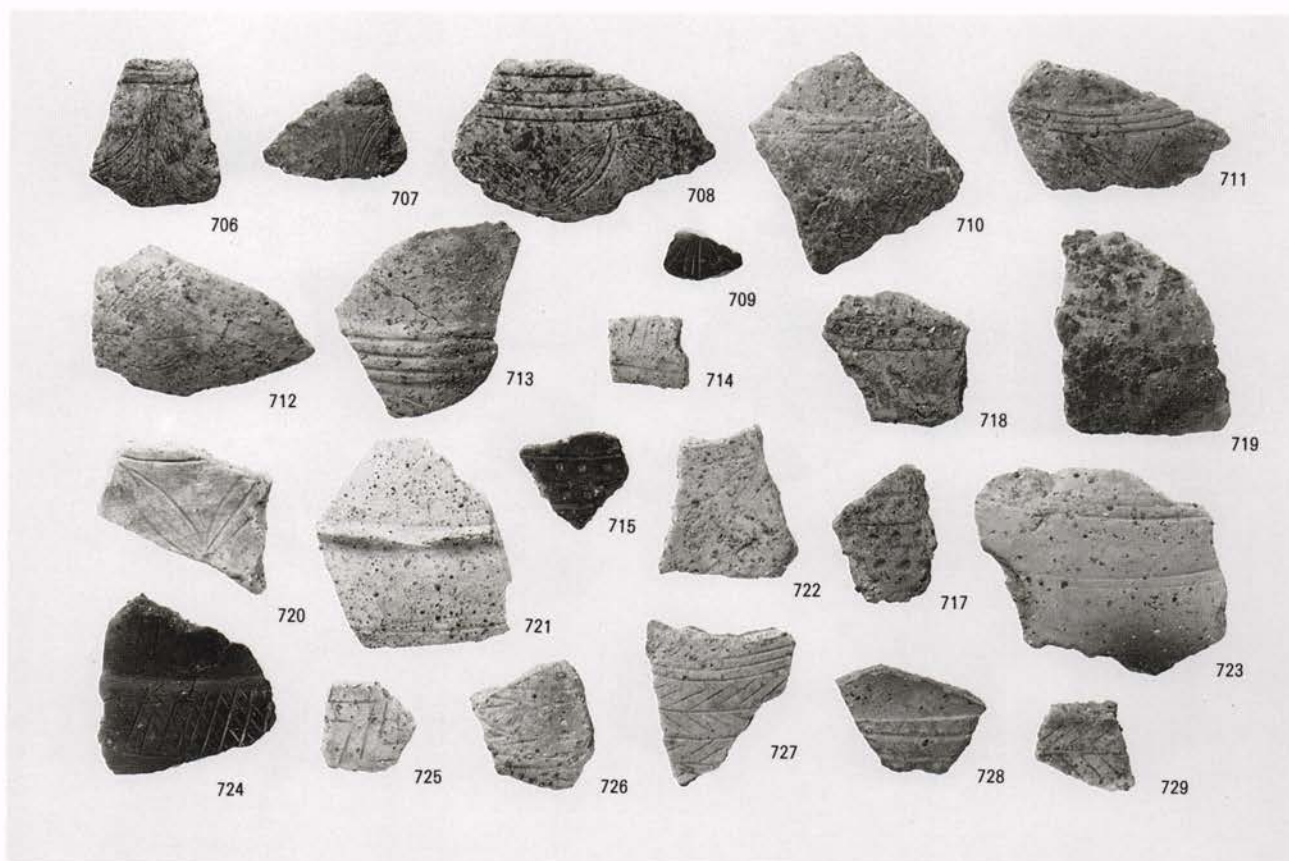
(1)遺構出土土器



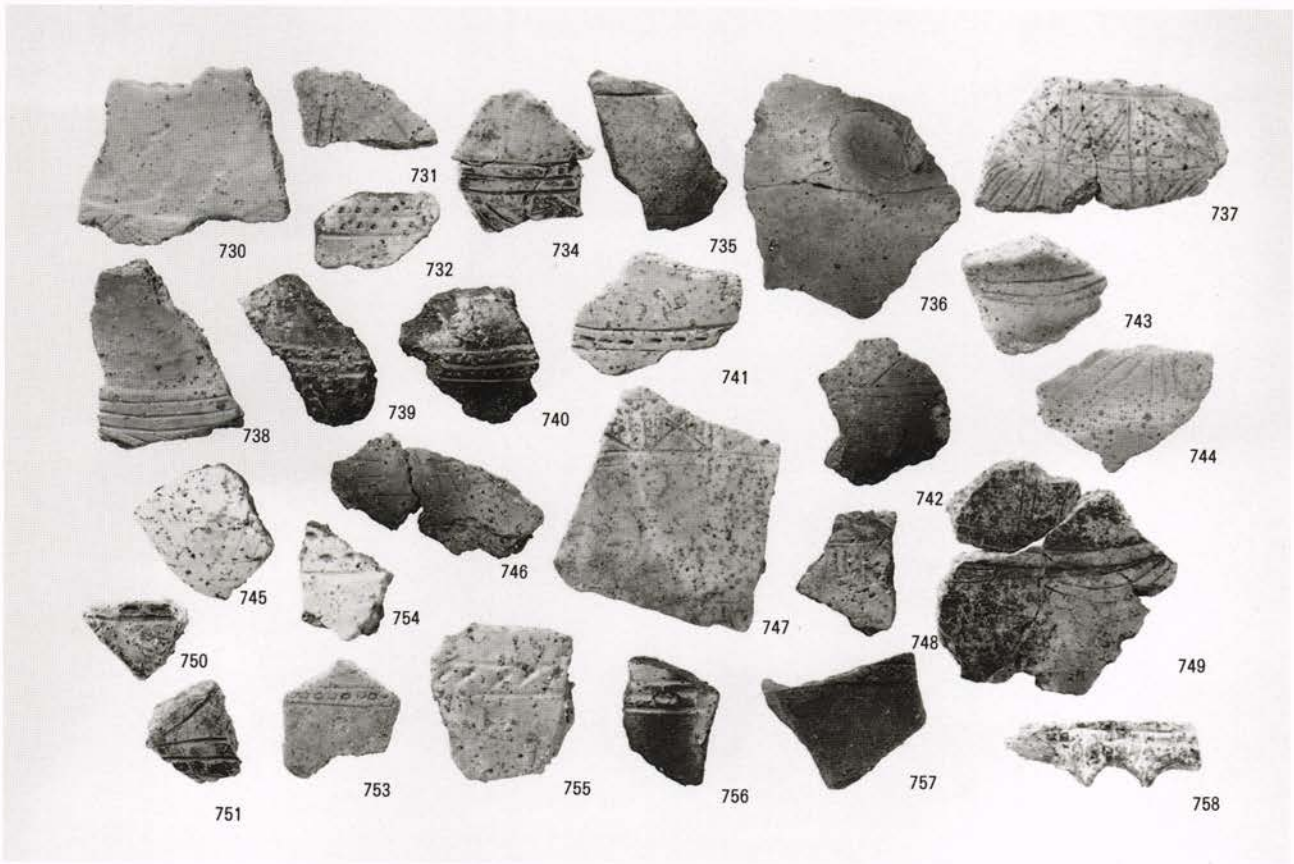
(2)拓本実測土器(1)



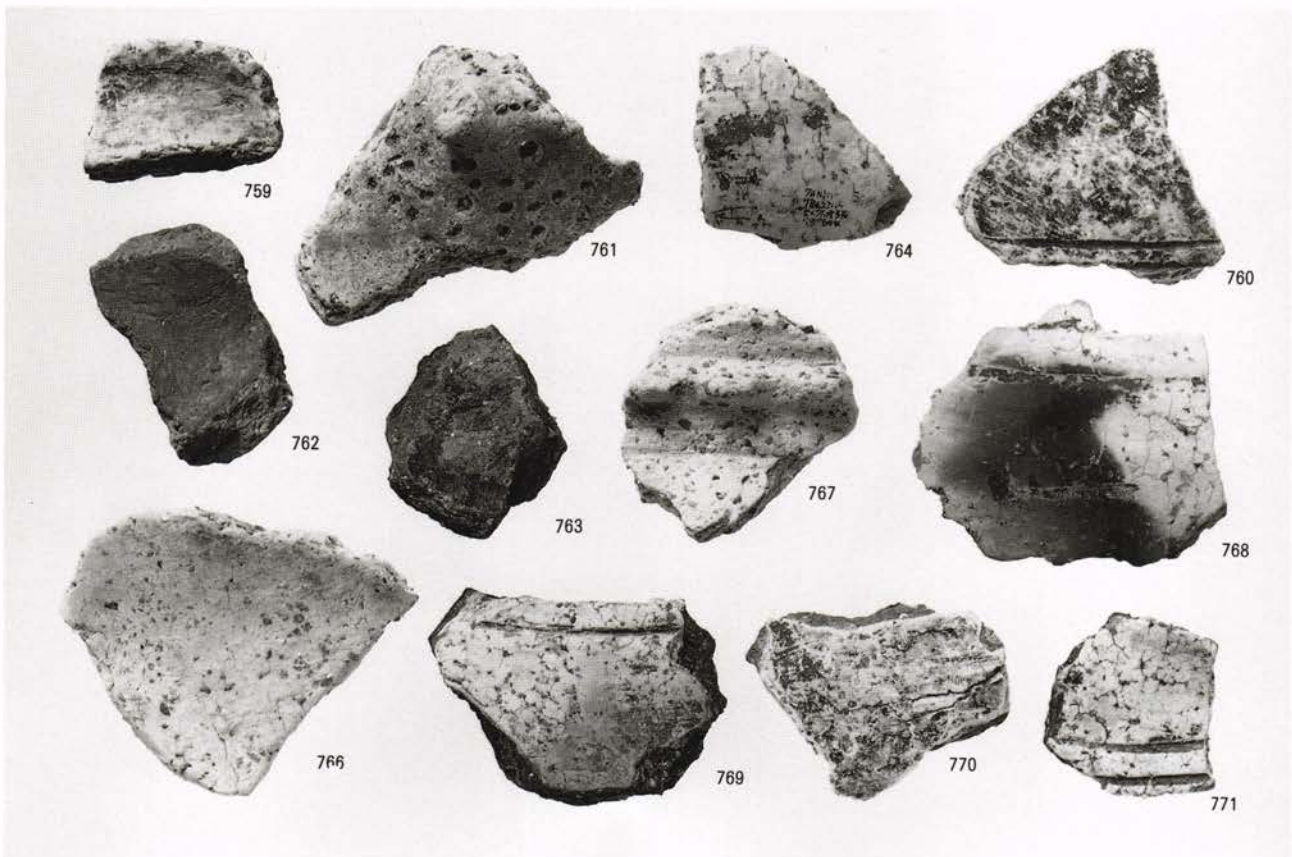
(1)拓本実測土器(2)



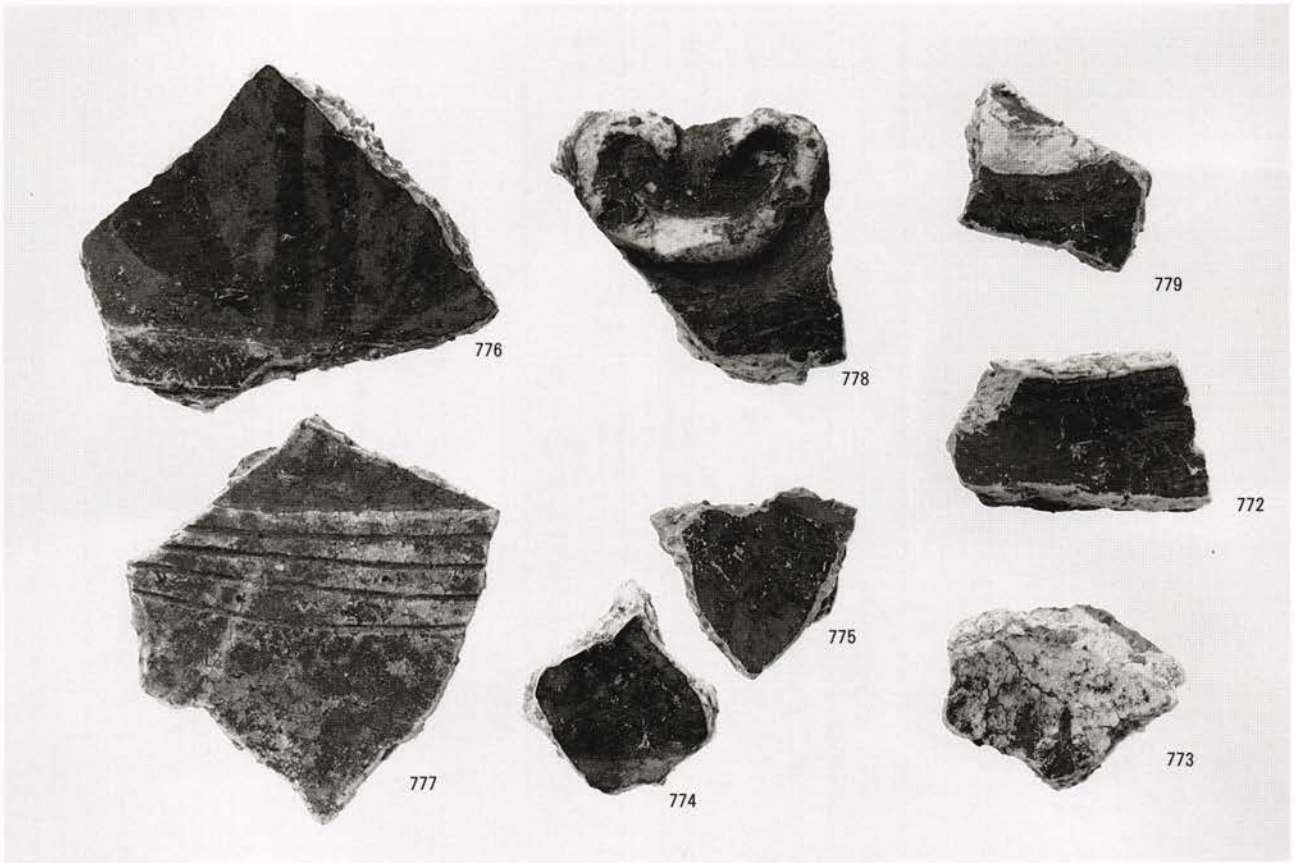
(2)拓本実測土器(3)



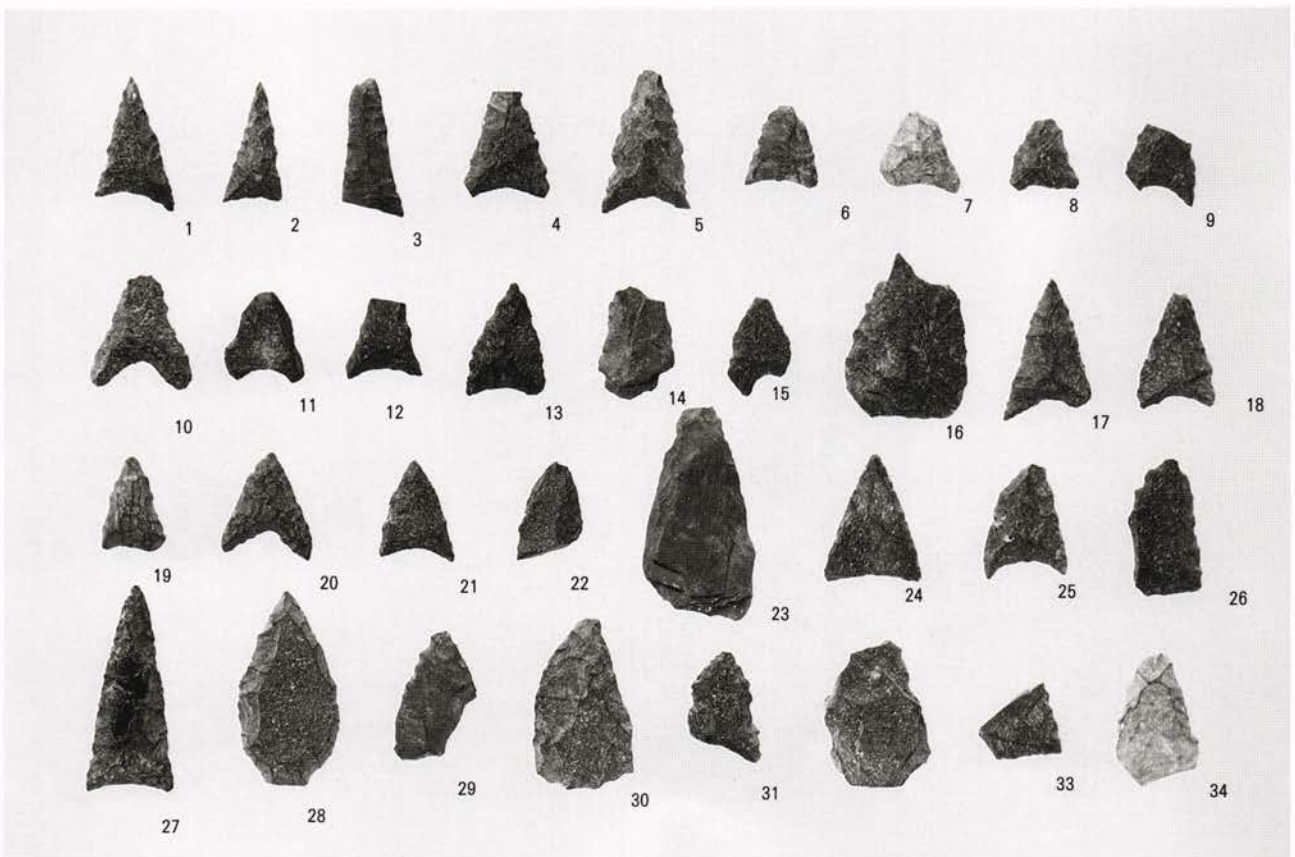
(1) 拓本実測土器(4)



(2) 赤彩紋土器(1)



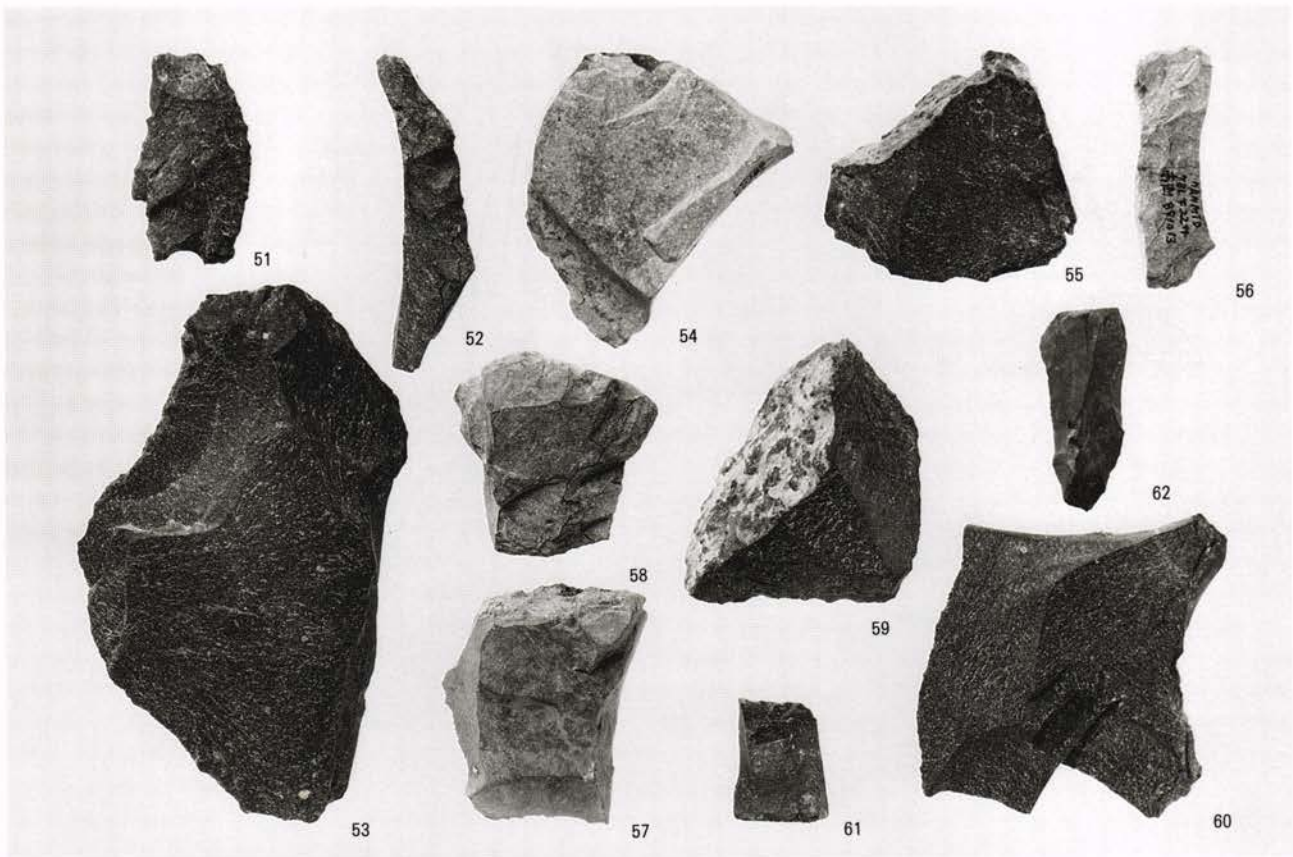
(1)赤彩紋土器(2)



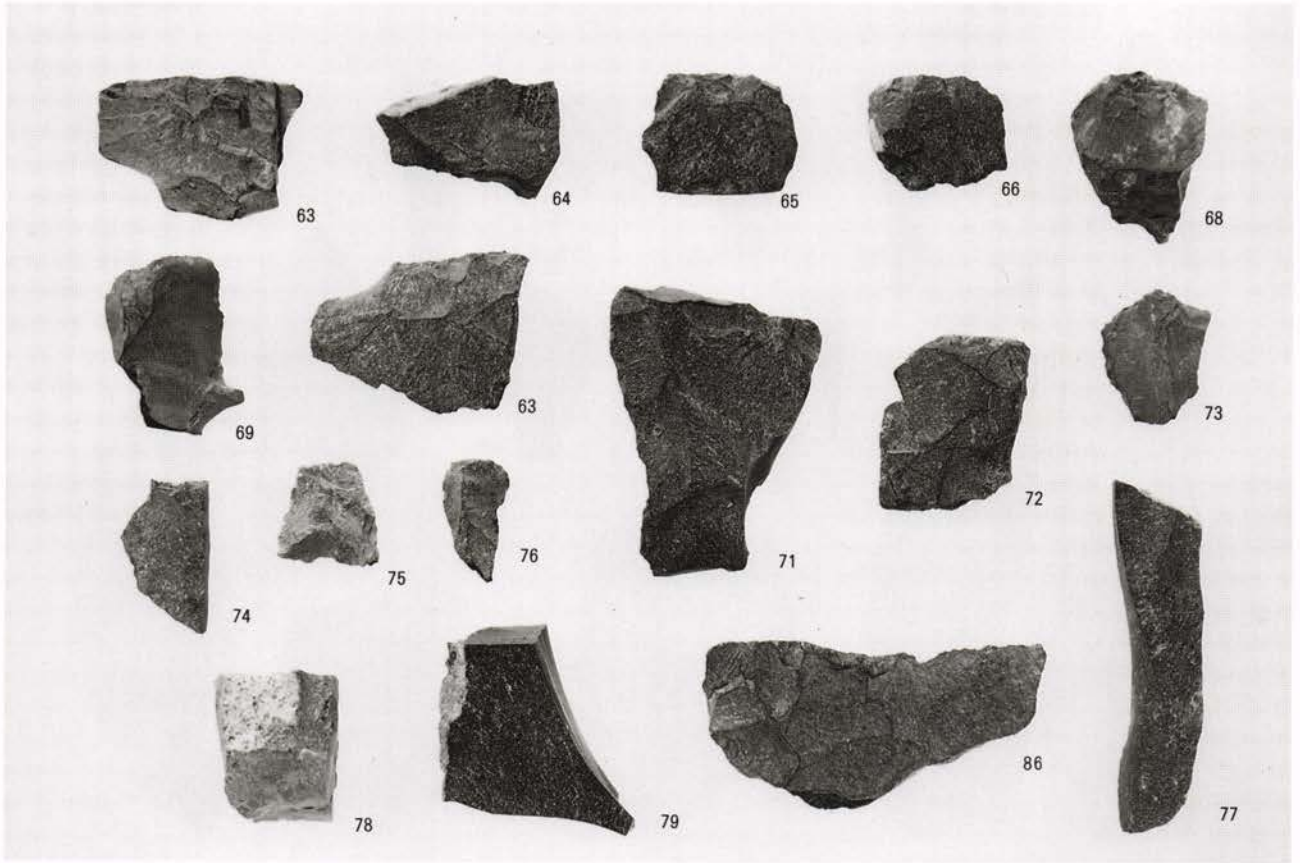
(2)出土石器(1)



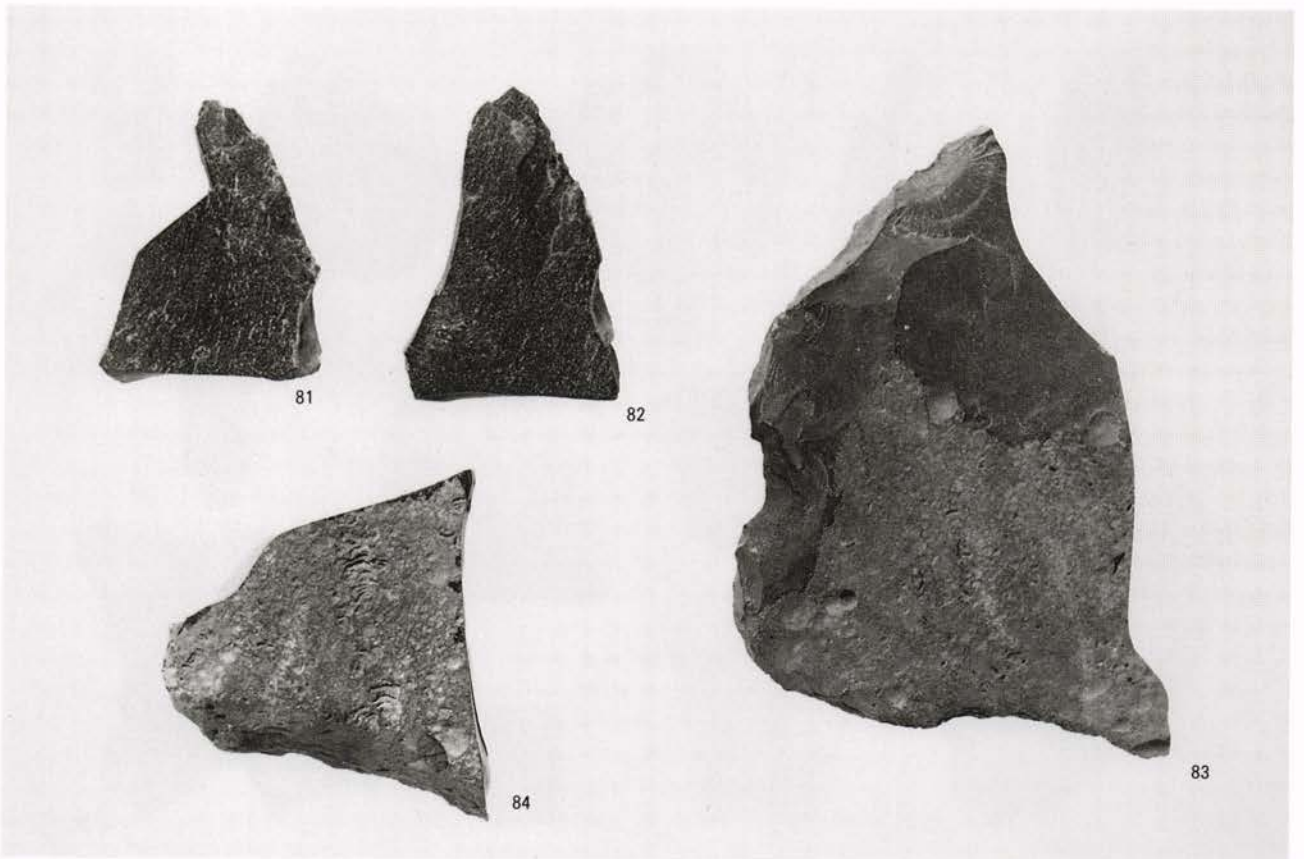
(1)出土石器(2)



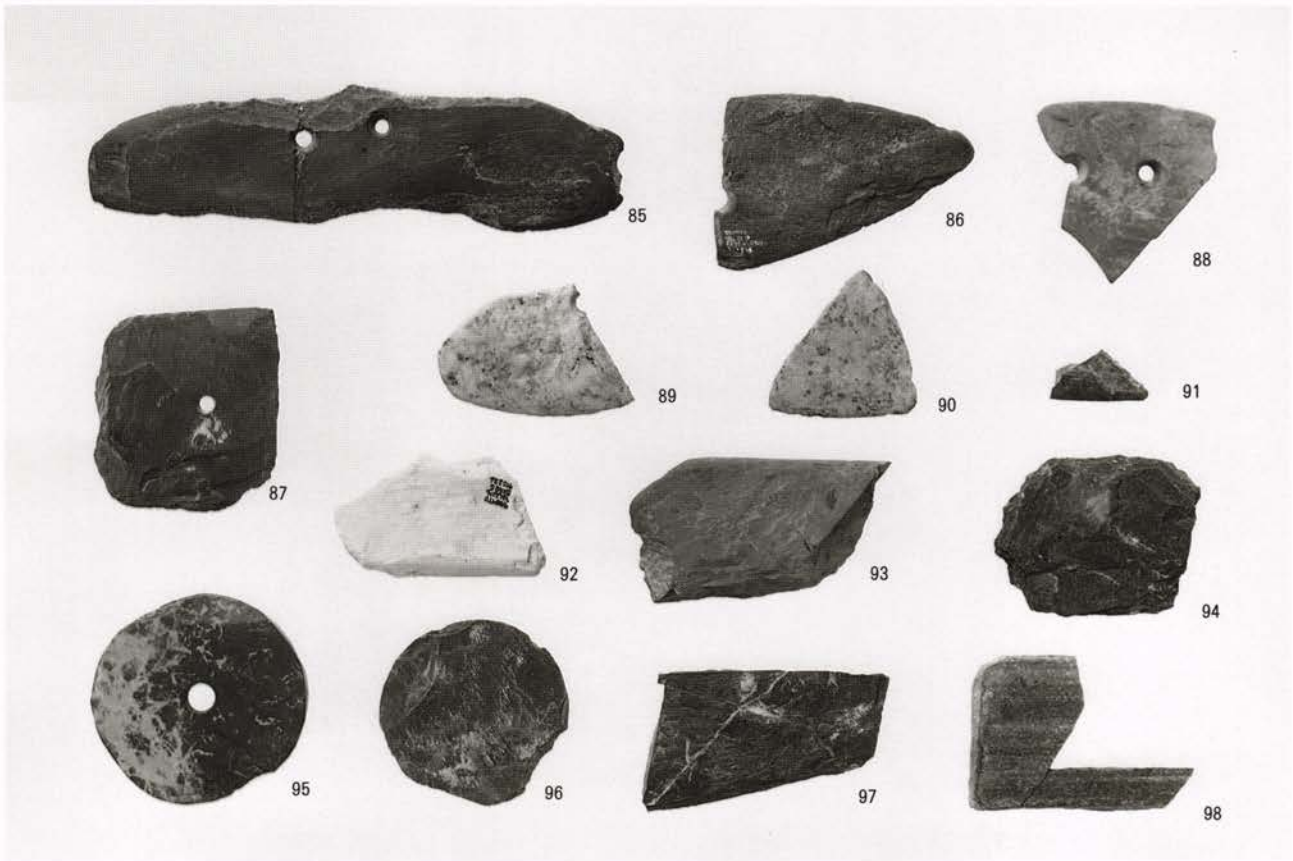
(2)出土石器(3)



(1)出土石器(4)



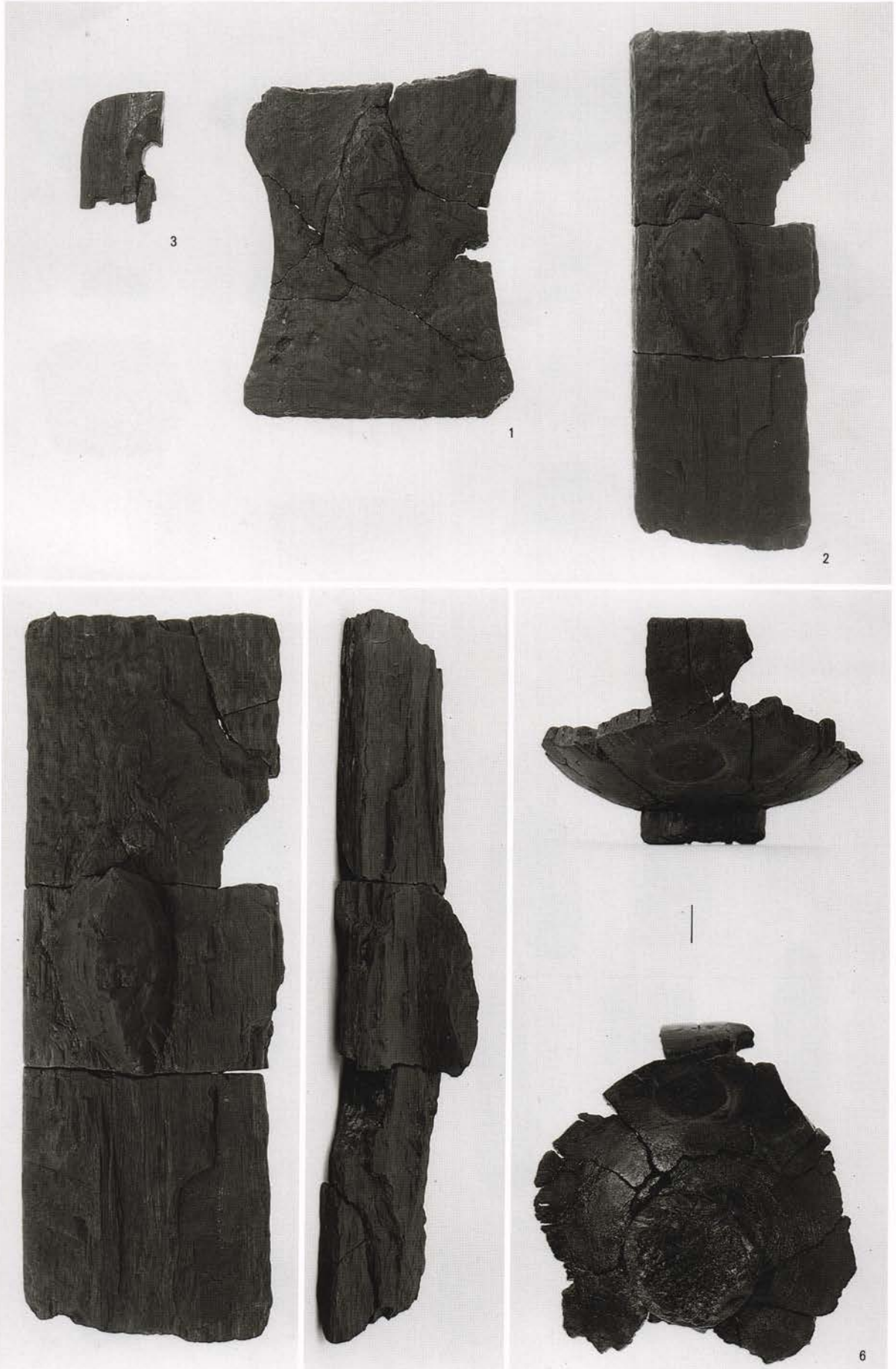
(2)出土石器(5)



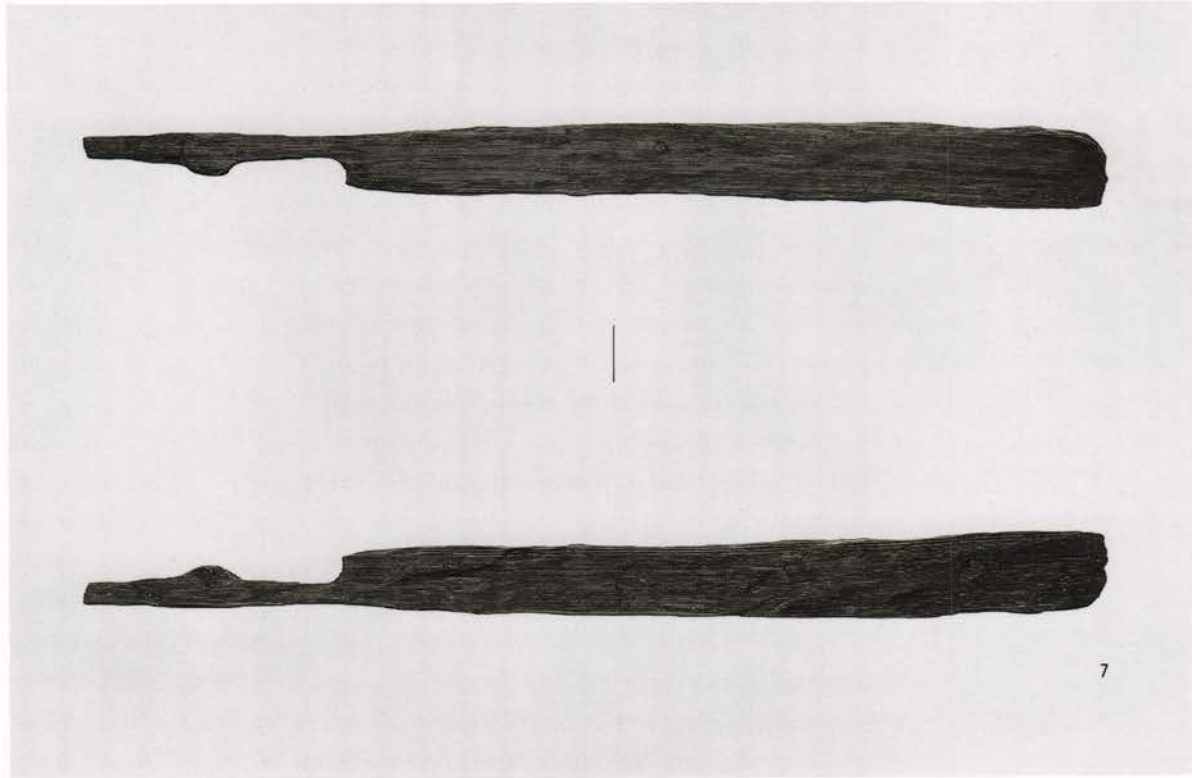
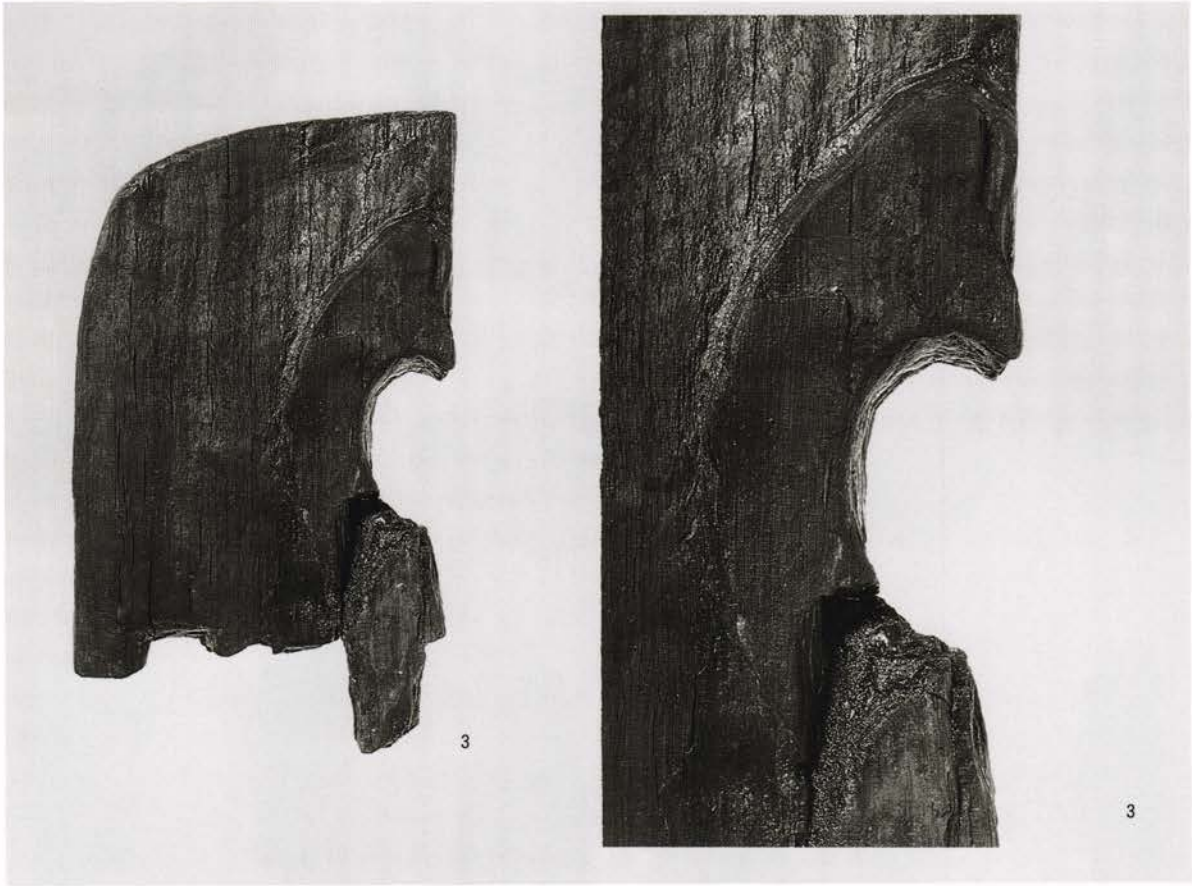
(1)出土石器(6)



(2)出土石器(7)



木製品(1)





雲宮遺跡出土動物骨

(番号は付表3に対応)

雲宮-1

(Ⅲ)

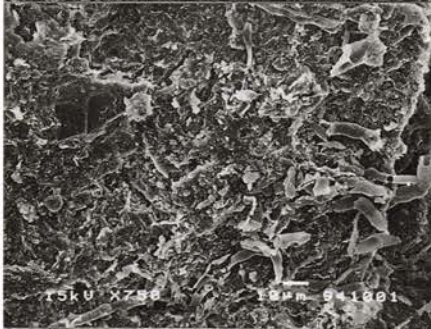
Mica	141
Ch (Fe)	204
Qt	4482
Pl	314
Crist	135



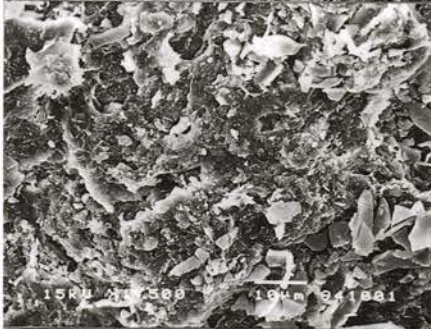
clastic clay



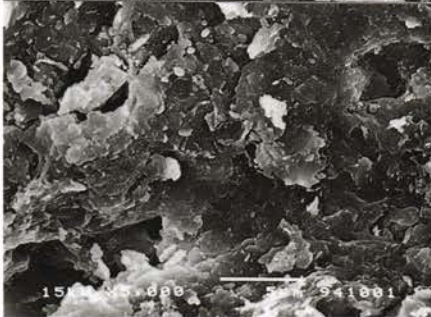
clastic clay



$n\text{Al}_2\text{O}_3 \cdot m\text{SiO}_2 \cdot l\text{H}_2\text{O}$
+
glass



$n\text{Al}_2\text{O}_3 \cdot m\text{SiO}_2 \cdot l\text{H}_2\text{O}$
+
glass



雲宮-2

(Ⅲ)

Hb	1310
Qt	855
Pl	281
K-fels	219



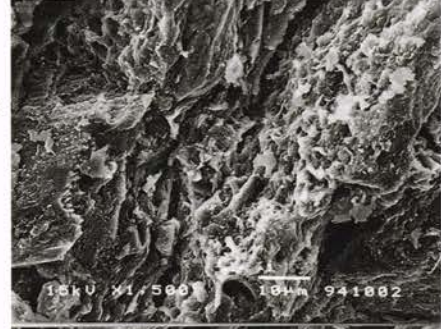
clastic clay



clastic clay



$n\text{Al}_2\text{O}_3 \cdot m\text{SiO}_2 \cdot l\text{H}_2\text{O}$
+
glass



$n\text{Al}_2\text{O}_3 \cdot m\text{SiO}_2 \cdot l\text{H}_2\text{O}$
+
glass



1. 粗粒砂を混入した碎屑性粘土 (clastic clay)
2. 原土の組織を残す
3. マトリックス (基質部) は $n\text{Al}_2\text{O}_3 \cdot m\text{SiO}_2 \cdot l\text{H}_2\text{O}$ (アルミナゲル) + glass (ガラス)
4. glass は中粒で、焼成ランクはⅢ

1. 粗粒砂を混入した碎屑性粘土 (clastic clay)
2. 原土の組織を残す
3. マトリックスは $n\text{Al}_2\text{O}_3 \cdot m\text{SiO}_2 \cdot l\text{H}_2\text{O}$ + glass
4. glass は中粒で、焼成ランクはⅢ

雲宮-3

雲宮-4

(Ⅲ)

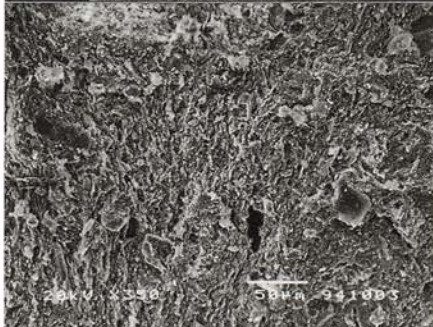
Mica	217
Qt	2860
Pl	176

(Ⅲ)

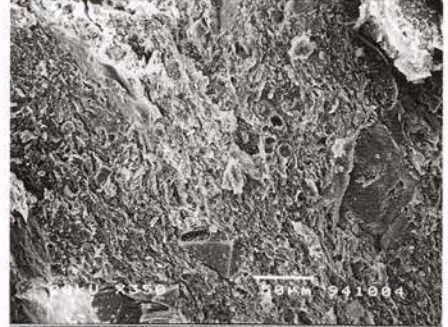
Mica	249
Hb	130
Qt	2326
Pl	335



clastic clay



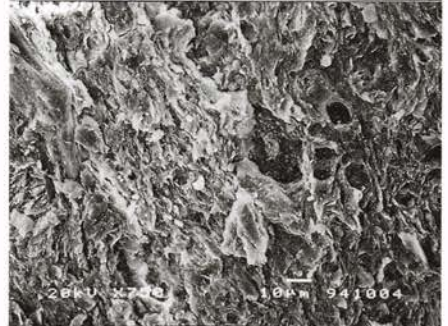
clastic clay



clastic clay



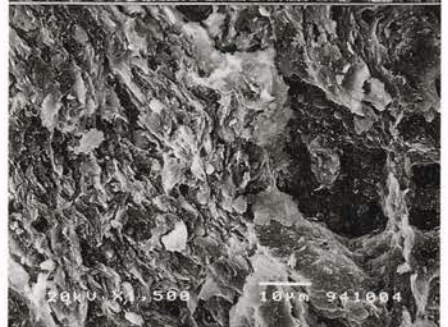
clastic clay



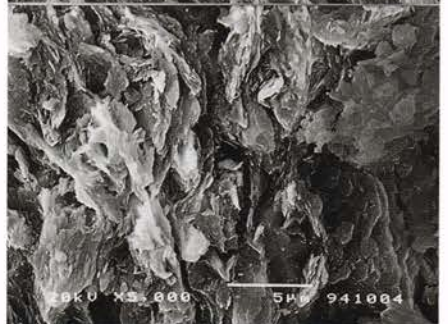
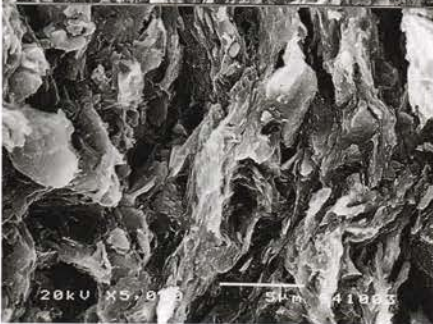
$n\text{Al}_2\text{O}_3 \cdot m\text{SiO}_2 \cdot l\text{H}_2\text{O}$
+
glass



$n\text{Al}_2\text{O}_3 \cdot m\text{SiO}_2 \cdot l\text{H}_2\text{O}$
+
glass



$n\text{Al}_2\text{O}_3 \cdot m\text{SiO}_2 \cdot l\text{H}_2\text{O}$
+
glass



1. 粗粒砂を混入した碎屑性粘土
2. 原土の組織を残す
3. マトリックスは $n\text{Al}_2\text{O}_3 \cdot m\text{SiO}_2 \cdot l\text{H}_2\text{O} + \text{glass}$
4. glass は中粒で、焼成ランクはⅢ

1. 粗粒砂を混入した碎屑性粘土
2. 原土の組織を残す
3. マトリックスは $n\text{Al}_2\text{O}_3 \cdot m\text{SiO}_2 \cdot l\text{H}_2\text{O} + \text{glass}$
4. glass は中粒で、焼成ランクはⅢ

雲宮-5

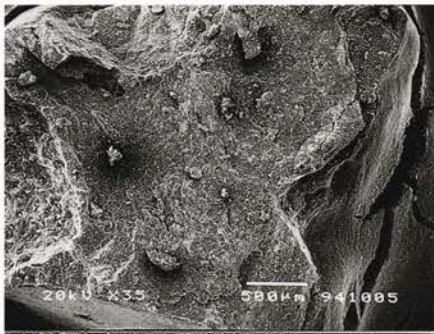
雲宮-6

(Ⅲ)

Mica	241
Qt	2264
Pl	279

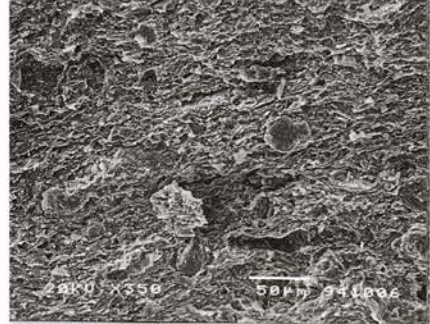
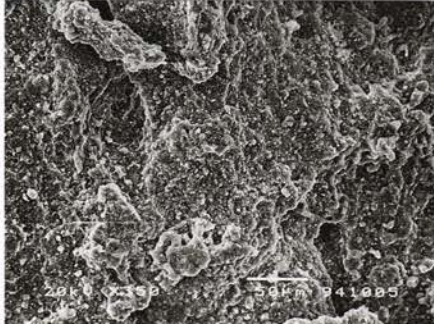
(Ⅲ)

Mica	174
Ch (Fe)	193
Qt	3581
Pl	333
K-fels	172



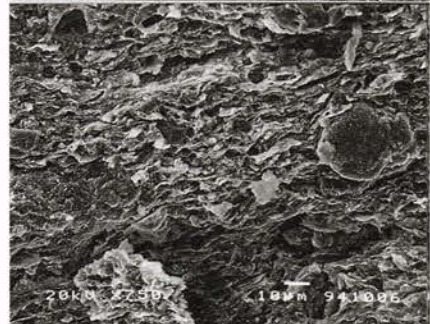
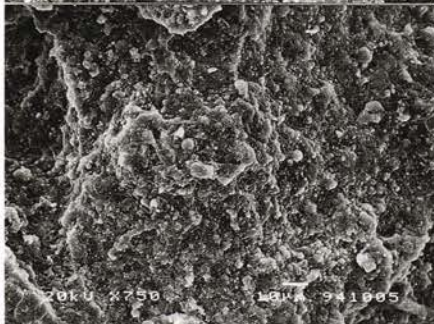
clastic clay

clastic clay



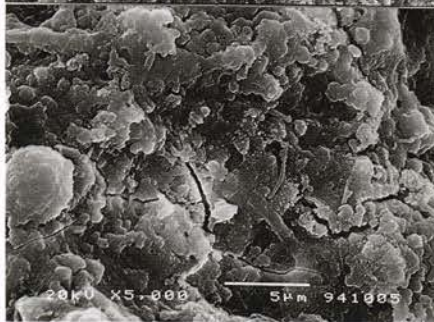
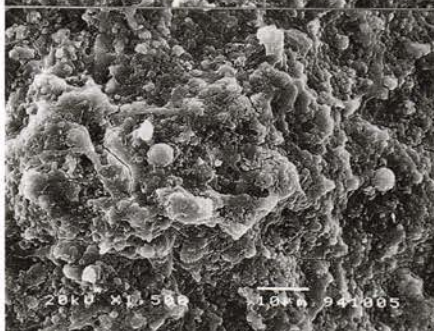
clastic clay

clastic clay



$n\text{Al}_2\text{O}_3 \cdot m\text{SiO}_2 \cdot l\text{H}_2\text{O}$
+
glass

$n\text{Al}_2\text{O}_3 \cdot m\text{SiO}_2 \cdot l\text{H}_2\text{O}$
+
glass



1. 粗粒砂を混入した碎屑性粘土
2. 原土の組織を残す
3. マトリックスは $n\text{Al}_2\text{O}_3 \cdot m\text{SiO}_2 \cdot l\text{H}_2\text{O} + \text{glass}$
4. glass は中粒で、焼成ランクはⅢ

1. 粗粒砂を混入した碎屑性粘土
2. 原土の組織を残す
3. マトリックスは $n\text{Al}_2\text{O}_3 \cdot m\text{SiO}_2 \cdot l\text{H}_2\text{O} + \text{glass}$
4. glass は中粒で、焼成ランクはⅢ

雲宮-7

(Ⅲ)

Mica	125
Qt	2821
Pl	136



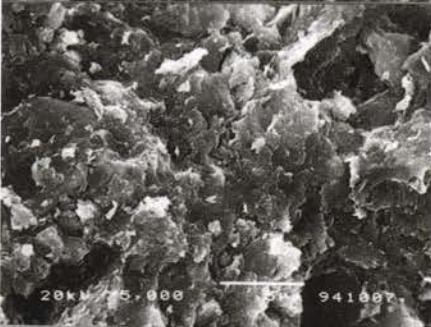
clastic clay



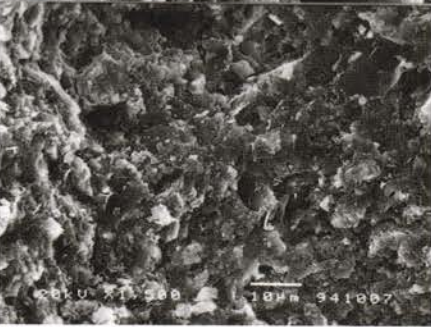
clastic clay



$n\text{Al}_2\text{O}_3 \cdot m\text{SiO}_2 \cdot l\text{H}_2\text{O}$
+
glass



$n\text{Al}_2\text{O}_3 \cdot m\text{SiO}_2 \cdot l\text{H}_2\text{O}$
+
glass

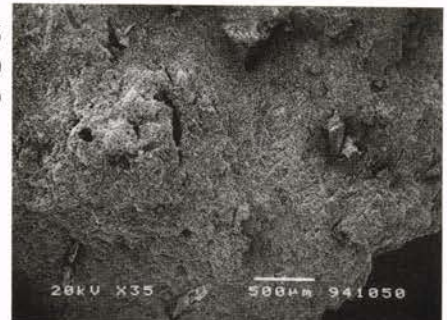


1. 粗粒砂を混入した碎屑性粘土
2. 原土の組織を残す
3. マトリックスは $n\text{Al}_2\text{O}_3 \cdot m\text{SiO}_2 \cdot l\text{H}_2\text{O} + \text{glass}$
4. glass は中粒で、焼成ランクはⅢ

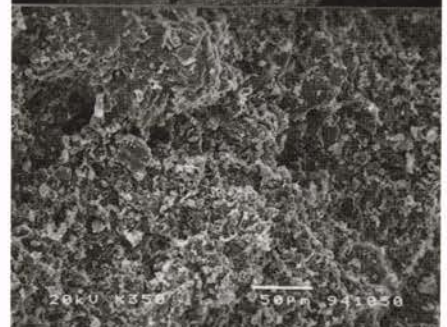
雲宮-50

(Ⅲ)

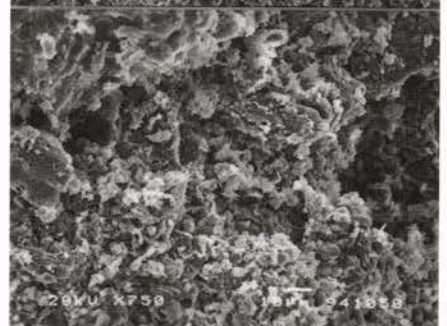
Qt	2925
Pl	220
K-fels	219



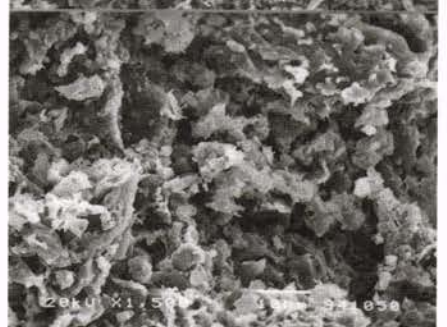
clastic clay



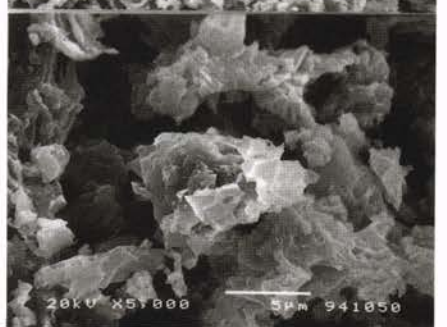
clastic clay



$n\text{Al}_2\text{O}_3 \cdot m\text{SiO}_2 \cdot l\text{H}_2\text{O}$
+
glass

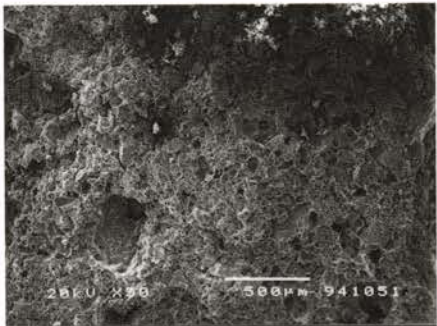


$n\text{Al}_2\text{O}_3 \cdot m\text{SiO}_2 \cdot l\text{H}_2\text{O}$
+
glass

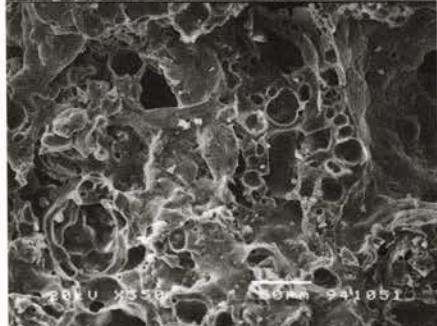


1. 細粒砂を混入した碎屑性粘土
2. 原土の組織を残す
3. マトリックスは $n\text{Al}_2\text{O}_3 \cdot m\text{SiO}_2 \cdot l\text{H}_2\text{O} + \text{glass}$
4. glass は中粒で、焼成ランクはⅢ

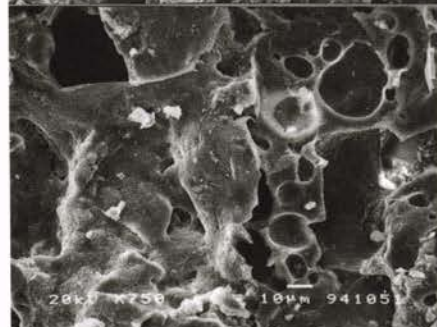
(II~III)
 Qt 2979
 Pl 97
 K-fels 112



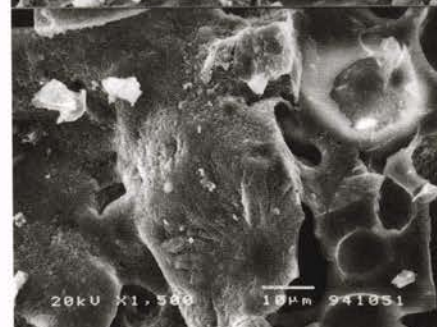
glass



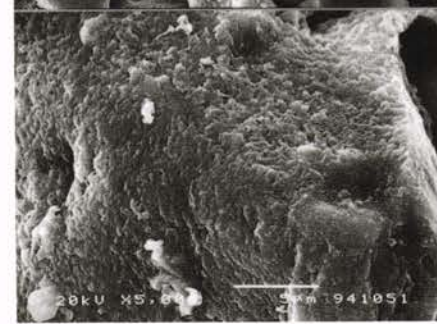
glass



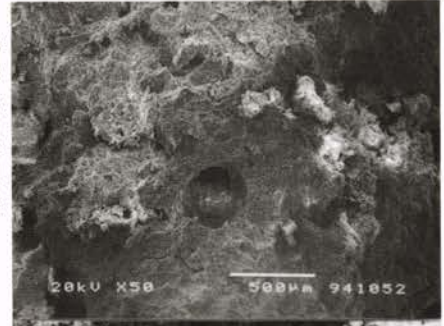
glass



glass



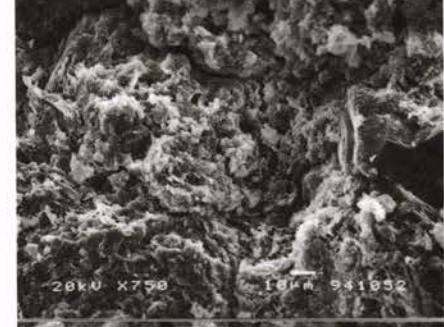
(III~IV)
 Mica 118
 Hb 69
 Ch (Fe) 149
 Ch (Mg) 64
 Qt 2524
 Pl 435



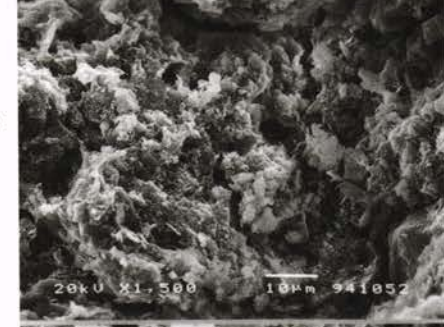
clastic clay



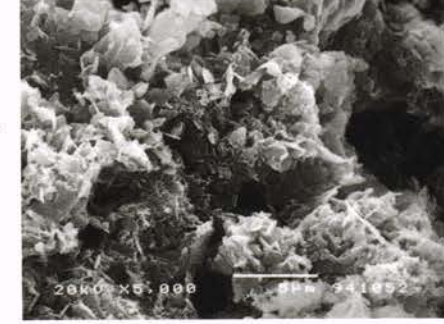
clastic clay



$n\text{Al}_2\text{O}_3 \cdot m\text{SiO}_2 \cdot \text{IH}_2\text{O}$
 +
 glass



$n\text{Al}_2\text{O}_3 \cdot m\text{SiO}_2 \cdot \text{IH}_2\text{O}$
 +
 glass



1. 細粒砂を含む碎屑性粘土
2. glass 生成により組織が変形
3. マトリックスは glass
4. glass は粗粒で、焼成ランクは II~III

1. 粗粒砂を含む碎屑性粘土
2. 原土の組織を残す
3. マトリックスは $n\text{Al}_2\text{O}_3 \cdot m\text{SiO}_2 \cdot \text{IH}_2\text{O}$ + glass
4. glass は細~中粒で、焼成ランクは III~IV

報告書抄録

ふりがな	くもみやいせき							
書名	雲宮遺跡							
副書名								
巻次								
シリーズ名	京都府遺跡調査報告書							
シリーズ番号	第22冊							
編著者名	中川和哉・戸原和人・田端直彦・小島孝修							
編集機関	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター							
所在地	〒617 京都府向日市寺戸町南垣内40-3			Phone	075(933)3877			
発行年月日	西暦 1997 年 3 月 26 日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
くものみや いせき	ながおかきょうし こうたりくものみや							
雲宮遺跡	長岡京市神足雲宮	209	36	34° 55' 9"	135° 42' 48"	19890401 ~ 19900622	540	道路建設
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
雲宮遺跡	集落	弥生		溝、方形周溝墓		弥生土器、木器、石器、獣骨		

京都府遺跡調査報告書 第22冊

平成9年3月26日

発行 (財)京都府埋蔵文化財調査研究
センター

〒617 向日市寺戸町南垣内40番の3
Phone (075)933-3877 (代)

印刷 三星商事印刷株式会社

〒604 京都市中京区新町通竹屋町下ル
Phone (075)256-0961 (代)